熊本県文化財調査報告第255集

上小田宮の前・養寺遺跡

県道瀬川玉東線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

2010.3

熊本県教育委員会

上小田宮の前・養寺遺跡の発掘調査でわかったこと

今回発掘調査をした場所は、県道瀬川玉東線という道路をつくるところです。道路を新しくつくることで、地面の下にある昔の人たちが生活したあとがなくなってしまうので、調査をしました。

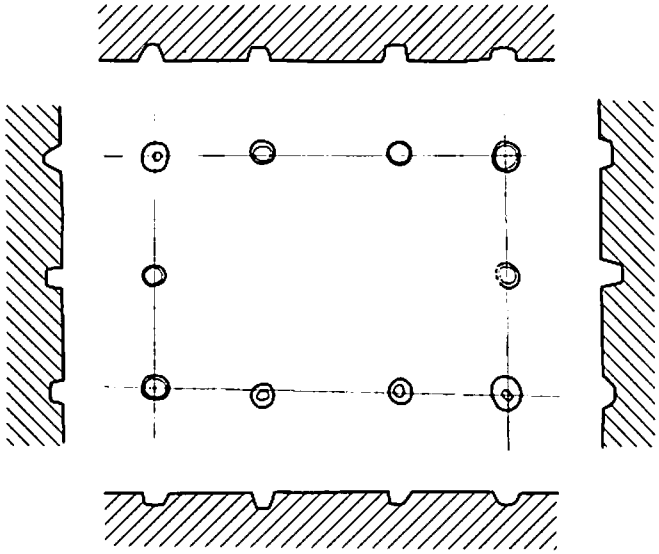
上小田宮の前遺跡は東西・南北に伸びていて、養寺遺跡とは約600mの距離があります。これらの遺跡からは発掘調査で縄文時代（約3000年前）から近世までの生活のあとが見つかりました。

そこには地面を浅く掘りくぼめ、周りの地上に屋根をふき下ろした竪穴住居や、地面に穴を掘ったところに柱を立てた建物である掘立柱建物のほか、井戸として使用したかと思われる大きな穴や、流路・溝のあとがありました。これらの遺構からは多数の土器や陶磁器とともに、石製品や木製品、祭りごとに使用した遺物も出土しました。

この上小田宮の前・養寺遺跡は、おそらく古代（約1300年前頃）では交通の要所であり、官衙（役所のようなもの）があったのではないかと考えられます。さらに、中世～近世には、菊池川周辺の集落の一部であったと思われ、遺物から当時のようすがうかがえます。

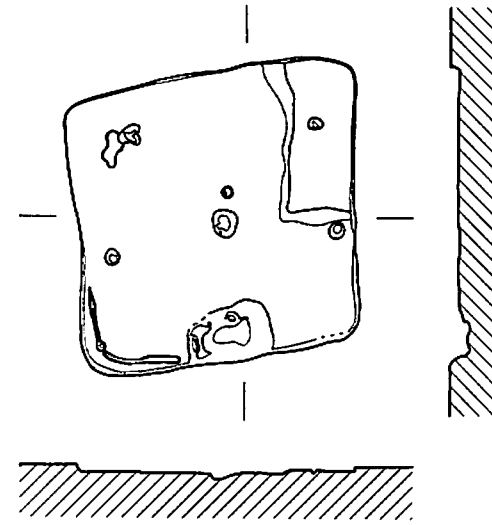
[掘立柱建物跡]

人々が暮らしていた建物・住居のあと



[竪穴住居跡]

人々が暮らしていた建物・住居のあと



真上から見た図と断面図

[溝]

水が流れていた道

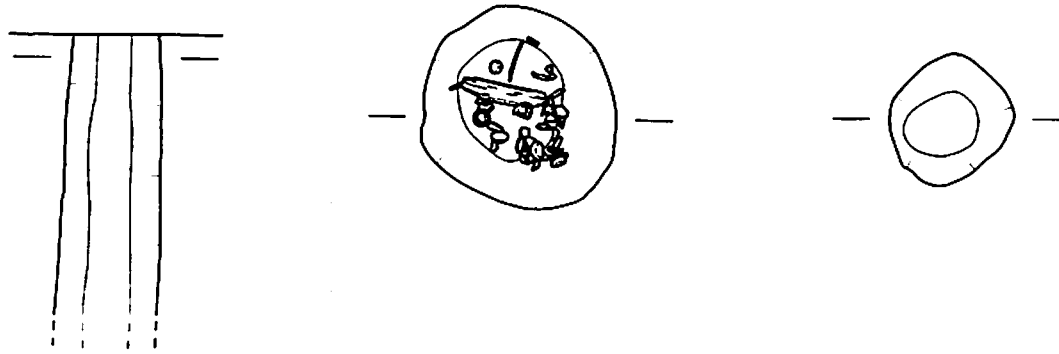
[井戸]

水を汲み上げたり、
祭りを行った井戸のあと

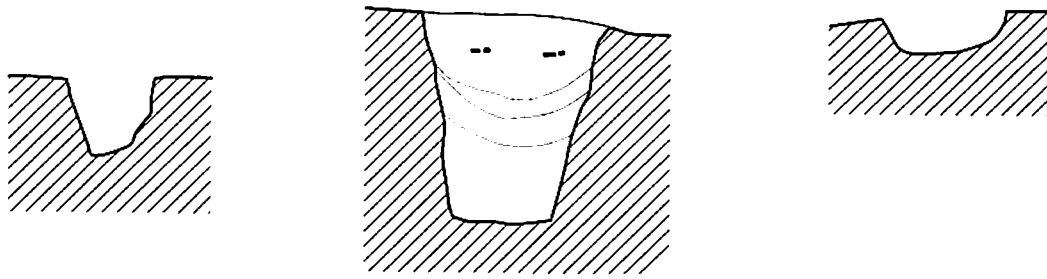
[土坑]

色々な用途で
使われた穴

真上から見た図



断面図



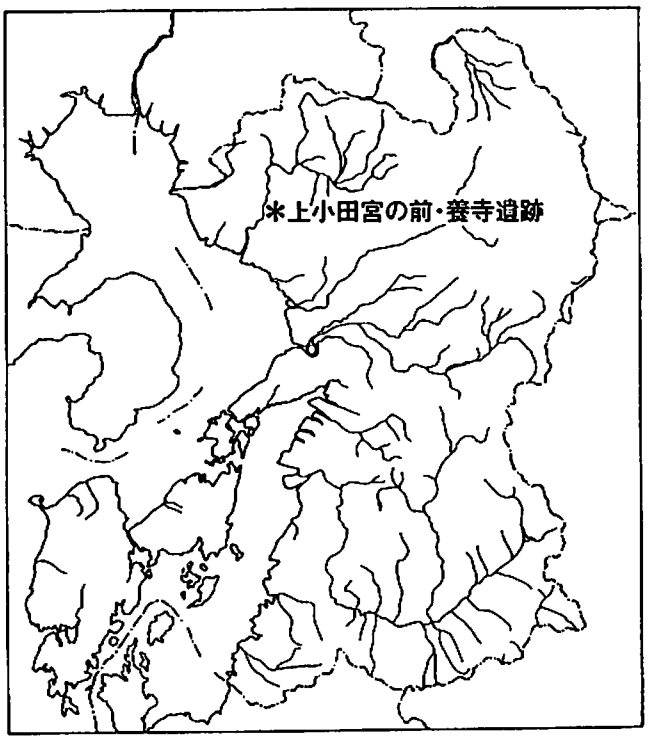
空撮１　上小田宮の前遺跡・養寺遺跡周辺航空写真

空撮２　上小田宮の前遺跡・養寺遺跡航空写真

熊本県文化財調査報告第255集

上小田宮の前・養寺遺跡

県道瀬川玉東線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査



2010.3

熊本県教育委員会

序　文

熊本県教育委員会では、県道瀬川玉東線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、玉名市上小田・下小田に所在する上小田宮の前遺跡・養寺遺跡の発掘調査を実施しました。

今回報告する上小田宮の前遺跡・養寺遺跡は、平成12～15年度までの調査箇所の報告書で、多くの出土品から縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良時代へと連綿とつづく玉名平野の拠点的な集落であることがわかりました。特に出土した古墳時代の祭祀関係の遺物は、菊池川に対する恐れと敬いの心を垣間見ることができるものです。

この報告書が、広く県民の皆様の埋蔵文化財保護に対する認識と理解を深め、さらには学術研究の進展にいささかでも寄与できれば、誠に喜びに堪えません。

なお、本調査を実施するにあたり、文化財保護の観点から多大な御協力をいただいた県土木部道路整備課、玉名地域振興局土木部、玉名市教育委員会及び地元関係者の皆様、また御指導・御助言をいただきました諸先生方に深く感謝申し上げたいと思います。

平成22年3月31日

熊本県教育長　　山 本 隆 生

例　言

1　本書は県道瀬川玉東線緊急地方道路整備事業に伴い、記録保存を目的として実施した、熊本県玉名市に所在する上小田宮の前遺跡・養寺遺跡の発掘調査報告書である。
2　現地の発掘調査は、熊本県土木部の依頼を受け、平成12年度（2000年）から平成15年度（2003年）にかけて熊本県教育庁文化課が行った。
3　整理・報告書作成は平成16年度（2004年）から平成21年度（2009年）にかけて熊本県文化財資料室で行った。
4　国土座標軸による測量基準杭の設定は株式会社有明測量開発社、有限会社坂井設計コンサルタントに委託した。
5　本書に掲載した航空写真は、九州航空株式会社に委託した。
6　本書の周辺遺跡地図に掲載した地図は国土地理院発行の玉名1；50,000地形図である。
7　遺構実測は一部を株式会社九州文化財研究所に委託した。
8　遺物実測及び製図の一部は株式会社九州文化財研究所、東海アナース株式会社に委託した。
9　遺構の写真撮影は調査担当者、遺物写真撮影は村田百合子が行い、福浦晶子、府内博子、松本裕子が補助した。
10　鉄器処理は今田里枝、大塚トシ子が行った。
11　木製品の樹種同定は株式会社吉田生物研究所に委託した。
12　本書の編集は廣田静学を中心に行い、加藤早織、江見恵留、府内、松本が補助した。
13　出土遺物・写真・図面等は、熊本県文化財資料室に保管している。

凡　例

1　本書で使用している方位は、座標軸を基準とした北を示している。
2　報告書に掲載した実測図の縮尺は、竪穴住居跡はS＝1/60、掘立柱建物跡はほぼS＝1/80、柵列跡はS＝1/80、井戸跡・溝跡・土坑・不明遺構は不統一である。
3　須恵器については、断面を黒で塗色し、その他のものは白抜きにした。
4　土層及び土器の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修「新版　標準土色帖」（日本色研事業株式会社；2004）に準拠した。
5　ガラス玉、管玉、臼玉の色調は、「標準色カード230」（日本色研事業株式会社；1988）に準拠した。
6　写真の縮尺は任意である。
7　発掘遺構には遺構の種別を示す以下の略号を使用した。
SI（竪穴住居跡）　SB（掘立柱建物跡）　SA（柵列跡）　SE（井戸跡）　SF（道路状遺構）
SD（溝跡）　SK（土坑）　SX（不明遺構）
8　遺構図中の断面にかかる土器については、黒で塗色している。
9　遺構図中の断面にかかる石については、左斜めの斜線で表記している。
10　遺構図中の掘立柱建物跡の柱痕跡については、トーンで表記している。
11　遺物実測図中の石器の摂理面については右斜めの斜線で表記している。

本 文 目 次

上小田宮の前・養寺遺跡の発掘調査でわかったこと
口絵
序文
例言・凡例
目次

第Ⅰ章　調査の経緯と経過 …… 1
第1節　調査に至る経過 …… 1
第2節　調査の組織 …… 1
第3節　調査の方法と経過 …… 2
第Ⅱ章　位置と環境 …… 4
第1節　地理的環境 …… 4
第2節　歴史的環境 …… 4
第Ⅲ章　調査の成果 …… 11
第1節　調査区の基本土層 …… 11
第2節　養寺遺跡の調査 …… 14
1. 養寺遺跡の概要 …… 14
2. 遺構分布 …… 14
3. 遺構 …… 14
第3節　小田2区の調査 …… 25
1. 上小田宮の前遺跡の概要 …… 25
2. 遺構分布 …… 25
3. 遺構・遺物 …… 25
第4節　上小田宮の前1区の調査 …… 45
1. 遺構分布 …… 45
2. 遺構・遺物 …… 45
第5節　上小田宮の前2区・4区の調査 …… 55
1. 遺構分布 …… 55
2. 遺構 …… 55
第6節　小田3区・上小田宮の前3区の調査 …… 59
1. 遺構分布 …… 59
2. 遺構・遺物 …… 59
第7節　上小田宮の前5区の調査 …… 79
1. 遺構分布 …… 79
2. 遺構・遺物 …… 79
第8節　上小田宮の前6区の調査 …… 99
1. 遺構分布 …… 99
2. 遺構・遺物 …… 99
第9節　上小田宮の前7区の調査 …… 112
1. 遺構分布 …… 112
2. 遺構・遺物 …… 112
第10節　上小田宮の前8区・9区の調査 …… 120
1. 遺構分布 …… 120
2. 遺構・遺物 …… 120
第11節　上小田宮の前10区の調査 …… 157
1. 遺構分布 …… 157
2. 遺構・遺物 …… 157
第Ⅳ章　自然科学分析 …… 181
上小田宮の前遺跡出土木製品の樹種調査結果【(株) 吉田生物研究所】
第Ⅴ章　総括 …… 186
第1節　上小田宮の前・養寺遺跡における発掘調査成果 …… 186
1. 発掘調査の成果 …… 186
2. 当遺跡の古地形 …… 186
3. 当遺跡の時代考証 …… 186
4.おわりに …… 189

引用・参考文献 …… 190
遺物観察表 …… 191
写真図版
あとがき
報告書抄録

挿 図 目 次

第 1 図　上小田宮の前・養寺遺跡周辺遺跡地図（S=1/50,000）…… 6
第 2 図　基本土層柱状図 …… 11
第 3 図　上小田宮の前・養寺遺跡調査区位置図（S=1/7,500） …… 12
第 4 図　上小田宮の前・養寺遺跡全体遺構配置図（S=1/2,000） …… 13
第 5 図　養寺遺跡遺構配置図（S=1/250）…… 15
第 6 図　掘立柱建物跡（SB01・02）実測図 …… 16
第 7 図　掘立柱建物跡（SB03・04）実測図 …… 17
第 8 図　掘立柱建物跡（SB05・06）実測図 …… 18
第 9 図　掘立柱建物跡（SB07・08）実測図 …… 19
第 10 図　掘立柱建物跡（SB10・13）実測図 …… 20
第 11 図　掘立柱建物跡（SB14・15）実測図 …… 21
第 12 図　柵列跡（SA11・12・17）実測図 …… 23
第 13 図　土坑（SK01・02・03）実測図 …… 23
第 14 図　小田2区遺構配置図（S=1/450）…… 26
第 15 図　竪穴住居跡（SI01・02・03・06）実測図 …… 27
第 16 図　竪穴住居跡（SI08・09・10）実測図…… 28
第 17 図　掘立柱建物跡（SB01・02・03・04）実測図 …… 30
第 18 図　掘立柱建物跡（SB05・08・09・11）実測図 …… 32
第 19 図　掘立柱建物跡（SB13・15・16・18）実測図 …… 33
第 20 図　掘立柱建物跡（SB20・21・22・23）実測図 …… 34
第 21 図　掘立柱建物跡（SB24・25・26）実測図 …… 36
第 22 図　掘立柱建物跡（SB27）実測図…… 37
第 23 図　柵列跡（SA01・02・03・04・05・06・07・08・09・10）実測図…… 38
第 24 図　柵列跡（SA11・12・13・14・15・16）実測図…… 39
第 25 図　溝跡（SD01）・土坑（SK01）実測図 …… 41
第 26 図　土坑（SK03・05）実測図及び2区出土遺物実測図 …… 43
第 27 図　上小田宮の前1区遺構配置図（S=1/200）…… 46
第 28 図　竪穴住居跡（SI101・102）実測図 …… 47
第 29 図　土坑（SK101・102・103・105・107・108）実測図及び出土遺物実測図 …… 49
第 30 図　1区出土遺物実測図（1） …… 50
第 31 図　1区出土遺物実測図（2） …… 51
第 32 図　1区出土遺物実測図（3） …… 52
第 33 図　1区出土遺物実測図（4） …… 53
第 34 図　1区出土遺物実測図（5） …… 54
第 35 図　上小田宮の前2区・4区遺構配置図（S=1/250） …… 56
第 36 図　掘立柱建物跡（SB201）実測図 …… 57
第 37 図　溝跡（SD201・401・402）実測図…… 57
第 38 図　不明遺構（SX201・202）実測図…… 58
第 39 図　小田3区・上小田宮の前3区遺構配置図（S=1/250） …… 60
第 40 図　小田3区 竪穴住居跡（SI01）実測図及び出土遺物実測図（1）…… 61
第 41 図　竪穴住居跡（SI01）出土遺物実測図（2） …… 62
第 42 図　竪穴住居跡（SI02）実測図及び出土遺物実測図 …… 63
第 43 図　掘立柱建物跡（SB04）実測図…… 63
第 44 図　掘立柱建物跡（SB01・03）実測図 …… 65
第 45 図　掘立柱建物跡（SB02）・柵列跡（SA01）実測図 …… 66
第 46 図　井戸跡（SE01・12）実測図及び出土遺物実測図…… 67
第 47 図　井戸跡（SE01）出土遺物実測図 …… 68
第 48 図　溝跡（SD01）実測図…… 68
第 49 図　土坑（SK01・03・04・05・06）実測図及び出土遺物実測図 …… 70
第 50 図　土坑（SK07・08・14・17）実測図及び小田3区出土遺物実測図 …… 71
第 51 図　上小田宮の前3区竪穴住居跡（SI301）実測図及び出土遺物実測図 …… 75
第 52 図　掘立柱建物跡（SB301）実測図 …… 75
第 53 図　柵列跡（SA301・302・303・304）実測図 …… 76
第 54 図　溝跡（SD304・305・306）実測図…… 77
第 55 図　土坑（SK305・306）実測図及び出土遺物実測図 …… 78

第 56 図　上小田宮の前5区遺構配置図（S=1/350）…… 80
第 57 図　掘立柱建物跡（SB501・503）実測図 …… 81
第 58 図　掘立柱建物跡（SB502）実測図 …… 82
第 59 図　掘立柱建物跡（SB504）実測図 …… 83
第 60 図　井戸跡（SE506）実測図及び出土遺物実測図（1） …… 85
第 61 図　井戸跡（SE506）出土遺物実測図（2） …… 86
第 62 図　井戸跡（SE517）実測図及び出土遺物実測図 …… 87
第 63 図　井戸跡（SE515・516）実測図及び出土遺物実測図…… 88
第 64 図　溝跡（SD514・515）実測図 …… 90
第 65 図　道路状遺構（SF501）・溝跡（SD512・513・517）実測図 …… 92
第 66 図　溝跡（SD510・511）実測図 …… 93
第 67 図　溝跡（SD516）実測図及び出土遺物実測図 …… 94
第 68 図　土坑（SK512・521・522）実測図及び出土遺物実測図 …… 95
第 69 図　溝跡（SD510）・5区出土遺物実測図 …… 96
第 70 図　上小田宮の前6区遺構配置図（S=1/250） …… 100
第 71 図　井戸跡（SE606）・溝跡（SD602）実測図 …… 101
第 72 図　溝跡（SD601・603・604）実測図及び出土遺物実測図 …… 102
第 73 図　土坑（SK603・607）実測図及び出土遺物実測図 …… 103
第 74 図　流路実測図 …… 104
第 75 図　流路出土遺物実測図（1） …… 105
第 76 図　流路出土遺物実測図（2） …… 106
第 77 図　流路出土遺物実測図（3） …… 107
第 78 図　流路出土遺物実測図（4） …… 108
第 79 図　6区出土遺物実測図 …… 109
第 80 図　上小田宮の前7区遺構配置図（S=1/250） …… 113
第 81 図　掘立柱建物跡（SB701）実測図 …… 114
第 82 図　井戸跡（SE701）実測図及び出土遺物実測図（1） …… 115
第 83 図　井戸跡（SE701）出土遺物実測図（2） …… 116
第 84 図　溝跡（SD701・702・703）実測図及び出土遺物実測図 …… 117
第 85 図　溝跡（SD705・706）実測図及び出土遺物実測図 …… 118
第 86 図　上小田宮の前8区・9区遺構配置図（S=1/500） …… 121
第 87 図　8・9区流路土層断面図…… 122
第 88 図　8区出土遺物分布図 …… 123
第 89 図　9区出土遺物分布図 …… 124
第 90 図　出土遺物実測図（1）〔ガラス小玉・管玉・白玉〕 …… 125
第 91 図　出土遺物実測図（2）〔土製丸玉〕 …… 126
第 92 図　出土遺物実測図（3）〔土製勾玉〕 …… 127
第 93 図　出土遺物実測図（4）〔土製模造鏡〕 …… 128
第 94 図　出土遺物実測図（5）〔小型壺〕 …… 128
第 95 図　出土遺物実測図（6）〔手捏土器〕 …… 129
第 96 図　出土遺物実測図（7）〔手捏土器〕 …… 131
第 97 図　出土遺物実測図（8）〔坩堝・羽口・支脚〕 …… 132
第 98 図　出土遺物実測図（9）〔有孔円板〕 …… 133
第 99 図　出土遺物実測図（10）〔有孔円板〕 …… 134
第 100 図　出土遺物実測図（11）〔有孔円板〕 …… 135
第 101 図　出土遺物実測図（12）〔剣形石製品〕 …… 137
第 102 図　出土遺物実測図（13）〔剣形石製品〕 …… 138
第 103 図　出土遺物実測図（14）〔剣形石製品〕 …… 139
第 104 図　出土遺物実測図（15）〔紡錘車・その他〕 …… 140
第 105 図　出土遺物実測図（16）〔8区土器〕 …… 141
第 106 図　出土遺物実測図（17）〔8区土器〕 …… 142
第 107 図　出土遺物実測図（18）〔8区土器〕 …… 143
第 108 図　出土遺物実測図（19）〔8区土器〕 …… 144
第 109 図　出土遺物実測図（20）〔9区土器〕 …… 145
第 110 図　出土遺物実測図（21）〔9区土器〕 …… 146

第 111 図　出土遺物実測図（22）〔9区土器〕 …… 147
第 112 図　出土遺物実測図（23）〔9区土器〕 …… 148
第 113 図　出土遺物実測図（24）〔石器〕 …… 149
第 114 図　出土遺物実測図（25）〔石器〕 …… 150
第 115 図　出土遺物実測図（26）〔石器〕 …… 150
第 116 図　出土遺物実測図（27）〔縄文土器・石包丁・その他〕 …… 151
第 117 図　出土遺物実測図（28）〔木器〕 …… 153
第 118 図　出土遺物実測図（29）〔木器〕 …… 154
第 119 図　出土遺物実測図（30）〔木器〕 …… 155
第 120 図　上小田宮の前10区遺構配置図（S=1/350） …… 158
第 121 図　掘立柱建物跡（SB1001・1002）実測図 …… 159
第 122 図　掘立柱建物跡（SB1003・1006）実測図 …… 160
第 123 図　掘立柱建物跡（SB1004・1005）実測図 …… 161
第 124 図　井戸跡（SE1002・1003・1015・1020）・土坑（SK1017）実測図 …… 163
第 125 図　井戸跡（SE1002・1003）出土遺物実測図 …… 164
第 126 図　井戸跡（SE1011）・土坑（SK1012）実測図及び出土遺物実測図 …… 165
第 127 図　井戸跡（SE1008・1024）実測図及び出土遺物実測図 …… 166
第 128 図　溝跡（SD1001・1002・1003・1004・1009・1012・1013・1015）実測図 …… 168
第 129 図　溝跡（SD1006・1007・1008・1010）・土坑（SK1023）実測図 …… 169
第 130 図　溝跡（SD1011）実測図 …… 170
第 131 図　溝跡（SD1006・1008・1010・1012・1013）出土遺物実測図 …… 172
第 132 図　溝跡（SD1010・1011）出土遺物実測図 …… 173
第 133 図　土坑（SK1004・1006・1010・1013・1014・1022）実測図及び出土遺物実測図 …… 175
第 134 図　土坑（SK1009）実測図及び出土遺物実測図 …… 176
第 135 図　10区出土遺物実測図（1） …… 177
第 136 図　10区出土遺物実測図（2） …… 178
第 137 図　小田3区・上小田宮の前2～5区の時代考証について …… 188

表　目　次

表 1　上小田宮の前・養寺遺跡調査工程表 … 3
表 2　周辺遺跡一覧表（1） …… 7
表 3　周辺遺跡一覧表（2） …… 8
表 4　周辺遺跡一覧表（3） …… 9
表 5　周辺遺跡一覧表（4） …… 10
表 6　養寺遺跡ＳＢ計測表 …… 23
表 7　養寺遺跡検出遺構一覧表 …… 24
表 8　養寺遺跡検出遺構土層注記表 …… 24
表 9　小田2区ＳＢ計測表 …… 37
表 10　小田2区検出遺構一覧表 …… 43
表 11　小田2区検出遺構土層注記表 …… 44
表 12　上小田宮の前1区検出遺構一覧表 …… 47
表 13　1区検出遺構土層注記表 …… 54
表 14　上小田宮の前2区ＳＢ計測表 …… 58
表 15　2区・4区検出遺構一覧表 …… 58
表 16　2区・4区検出遺構土層注記表 …… 58
表 17　小田3区ＳＢ計測表 …… 66
表 18　3区検出遺構一覧表 …… 68
表 19　小田3区検出遺構土層注記表（1） …… 72
表 20　小田3区検出遺構土層注記表（2） …… 73
表 21　上小田宮の前3区ＳＢ計測表 …… 76
表 22　3区検出遺構一覧表 …… 77
表 23　上小田宮の前3区検出遺構土層注記表 … 77
表 24　上小田宮の前5区ＳＢ計測表 …… 82
表 25　5区検出遺構一覧表 …… 97
表 26　5区検出遺構土層注記表 …… 98

表27　上小田宮の前6区検出遺構一覧表 …… 101
表28　6区検出遺構土層注記表（1） …… 110
表29　6区検出遺構土層注記表（2） …… 111
表30　上小田宮の前7区ＳＢ計測表 …… 114
表31　7区検出遺構一覧表 …… 115
表32　7区検出遺構土層注記表 …… 119
表33　上小田宮の前8区検出遺構土層注記表 …156
表34　上小田宮の前9区検出遺構土層注記表 …156
表35　上小田宮の前10区ＳＢ計測表 …… 162
表36　10区検出遺構一覧表 …… 171
表37　10区検出遺構土層注記表（1） …… 179
表38　10区検出遺構土層注記表（2） …… 180
表39　土器観察表（1） …… 191
表40　土器観察表（2） …… 192
表41　土器観察表（3） …… 193
表42　土器観察表（4） …… 194
表43　土器観察表（5） …… 195
表44　土器観察表（6） …… 196
表45　土器観察表（7） …… 197
表46　土器観察表（8） …… 198
表47　土器観察表（9） …… 199
表48　土器観察表（10） …… 200
表49　祭祀遺物観察表（1） …… 201
表50　祭祀遺物観察表（2） …… 202
表51　祭祀遺物観察表（3） …… 203
表52　祭祀遺物観察表（4） …… 204
表53　祭祀遺物観察表（5） …… 205
表54　祭祀遺物観察表（6） …… 206
表55　祭祀遺物観察表（7） …… 207
表56　祭祀遺物観察表（8） …… 208
表57　祭祀遺物観察表（9） …… 209
表58　祭祀遺物観察表（10） …… 210
表59　祭祀遺物観察表（11） …… 211
表60　祭祀遺物観察表（12） …… 211
表61　土製品観察表 …… 211
表62　石器観察表（1） …… 212
表63　石器観察表（2） …… 213
表64　木器観察表 …… 214
表65　五輪塔等観察表 …… 214
表66　その他遺物観察表 …… 214

写　真　図　版

空撮　1　上小田宮の前遺跡・養寺遺跡周辺航空写真
空撮　2　上小田宮の前遺跡・養寺遺跡航空写真
図版　1　養寺遺跡航空写真
図版　2　小田2区航空写真
図版　3　上小田宮の前5区・6区航空写真
図版　4　上小田宮の前5区（SF501）航空写真
図版　5　上小田宮の前7区航空写真
図版　6　上小田宮の前8区航空写真
図版　7　上小田宮の前9区航空写真
図版　8　上小田宮の前10区航空写真
図版　9　養寺遺跡全景
図版　10　SB01完掘状況（北から）
図版　11　SB02完掘状況（東から）
図版　12　SB03完掘状況（北から）
図版　13　SB04完掘状況（北から）
図版　14　SB05・06完掘状況（北から）
図版　15　SB07完掘状況（東から）
図版　16　SB08完掘状況（東から）
図版　17　SB10完掘状況（東から）
図版　18　SB13完掘状況（北から）
図版　19　SB14完掘状況（北から）
図版　20　SB15完掘状況（北から）
図版　21　SK01・02・03完掘状況（西から）
図版　22　小田2区SB01・SA08完掘状況（南から）
図版　23　SB02・04完掘状況（南から）
図版　24　SB23・24・SA11完掘状況（南から）
図版　25　SB25完掘状況（北東から）
図版　26　SB26・27完掘状況（南から）
図版　27　SI01完掘状況（南から）
図版　28　SI06完掘状況（南から）
図版　29　SI09・10完掘状況（南から）
図版　30　SA13・14完掘状況（西から）
図版　31　SA03・05完掘状況（南から）
図版　32　小田3区SI01完掘状況（南から）
図版　33　SI02完掘状況（東から）
図版　34　SB02完掘状況（西から）
図版　35　SB03完掘状況（北から）
図版　36　SA01完掘状況（西から）
図版　37　SE01完掘状況（東から）
図版　38　SE12完掘状況（西から）
図版　39　SK03完掘状況（南東から）
図版　40　上小田宮の前1区SI101完掘状況（北から）

図版 41　SI102完掘状況（南から）
図版 42　SK101・102・103完掘状況（東から）
図版 43　SK105完掘状況（北から）
図版 44　SK108完掘状況（西から）
図版 45　1区完掘状況（南から）
図版 46　上小田宮の前2区全景
図版 47　SB201完掘状況（東から）
図版 48　SD201完掘状況（西から）
図版 49　SX201完掘状況（南東から）
図版 50　SX202完掘状況（北から）
図版 51　上小田宮の前3区SI301完掘状況（東から）
図版 52　SB301・SD304・305完掘状況（南から）
図版 53　SD306完掘状況（東から）
図版 54　SK305完掘状況（北から）
図版 55　SK306完掘状況（東から）
図版 56　上小田宮の前4区SD401完掘状況（東から）
図版 57　SD402完掘状況（南から）
図版 58　上小田宮の前5区SB501完掘状況（東から）
図版 59　SB502完掘状況（北から）
図版 60　SB504完掘状況（東から）
図版 61　SE506遺物出土状況（北西から）
図版 62　SE515完掘状況（東から）
図版 63　SE517完掘状況（東から）
図版 64　SD510完掘状況（南から）
図版 65　SD511完掘状況（北から）
図版 66　SD512・513・517・SF501完掘状況（北から）
図版 67　SD514完掘状況（北から）
図版 68　SD515・516完掘状況（北から）
図版 69　SK521遺物出土状況（東から）
図版 70　上小田宮の前6区SE606完掘状況（南西から）
図版 71　SD601完掘状況（北から）
図版 72　SD602完掘状況（西から）
図版 73　SD603完掘状況（南から）
図版 74　SK603遺物出土状況（南東から）
図版 75　SK607遺物出土状況（南西から）
図版 76　SK607完掘状況（北東から）
図版 77　6区流路遺物出土状況（北西から）
図版 78　6区流路検出状況（北西から）
図版 79　上小田宮の前7区SB701検出状況（南から）
図版 80　SE701遺物出土状況（南西から）
図版 81　SE701完掘状況（北東から）
図版 82　SD701完掘状況（北東から）
図版 83　SD702完掘状況（北西から）
図版 84　SD703完掘状況（西から）
図版 85　SD705完掘状況（北西から）
図版 86　SD706完掘状況（南西から）
図版 87　上小田宮の前8区流路検出状況（南から）
図版 88　8区土器溜まり③（北から）
図版 89　8区羽口（東から）
図版 90　8区土製丸玉（東から）
図版 91　8区支脚（北から）
図版 92　8区土器溜まり⑤（西から）
図版 93　8区土器溜まり⑥（西から）
図版 94　8区土器溜まり⑦（西から）
図版 95　上小田宮の前9区5・6層遺物出土状況
図版 96　9区7層遺物出土状況（西から）
図版 97　9区8層遺物出土状況（西から）
図版 98　9区8層遺物出土状況（北から）
図版 99　9区8層遺物出土状況（東から）
図版 100　9区9層木製品出土状況
図版 101　9区遺物出土状況（東から）
図版 102　上小田宮の前10区SB1001検出状況（北から）
図版 103　SB1002検出状況（北から）
図版 104　SB1003検出状況（北から）
図版 105　SE1008遺物出土状況（南から）
図版 106　SD1010上層遺物出土状況（西から）
図版 107　SD1011上層遺物出土状況（東から）
図版 108　SD1013上層遺物出土状況（東から）
図版 109　SK1012遺物出土状況（南から）
図版 110　SK1014遺物出土状況（南から）
図版 111　小田2区出土遺物
図版 112　小田3区（SI01・02）出土遺物
図版 113　小田3区（SE01・12・SK03・07）出土遺物
図版 114　上小田宮の前1区出土遺物（1）
図版 115　1区出土遺物（2）
図版 116　1区出土遺物（3）
図版 117　3区出土遺物
図版 118　5区（SE506）出土遺物
図版 119　5区（SE515・516・517・SK512・521）出土遺物
図版 120　5区（SD510・512）出土遺物
図版 121　5区出土遺物
図版 122　6区（SD601・SK603）出土遺物
図版 123　6区流路出土遺物（1）
図版 124　6区流路出土遺物（2）
図版 125　6区流路出土遺物（3）
図版 126　7区（SE701）出土遺物
図版 127　7区（SD702・705）出土遺物
図版 128　8・9区出土遺物〔ガラス小玉・管玉・臼玉〕
図版 129　8・9区出土遺物〔土製勾玉〕
図版 130　8・9区出土遺物〔土製丸玉〕
図版 131　9区出土遺物〔土製模造鏡〕
図版 132　8・9区出土遺物〔手捏土器〕
図版 133　8・9区出土遺物〔支脚・羽口・坩堝・スラグ〕
図版 134　8・9区出土遺物〔有孔円板〕
図版 135　8・9区出土遺物〔剣形石製品〕
図版 136　8区出土遺物（1）
図版 137　8区出土遺物（2）
図版 138　9区出土遺物（1）
図版 139　9区出土遺物（2）
図版 140　8・9区出土遺物（3）
図版 141　9区出土遺物（4）
図版 142　10区出土遺物（1）
図版 143　10区出土遺物（2）
図版 144　8・9区出土祭祀遺物
図版 145　上小田宮の前遺跡出土遺物

第Ⅰ章　調査の経緯と経過

第1節　調査に至る経過

当遺跡の調査は、県道瀬川玉東線緊急地方道路整備事業に伴うものである。

事業予定地に埋蔵文化財が存在する可能性(周知の埋蔵文化財包蔵地)が高いことから、熊本県教育庁文化課は事業照会の回答として確認調査が必要であることを通知した。それにより、平成11年度に玉名地域振興局長より確認調査依頼文が提出され、熊本県教育庁文化課が確認調査を実施した。その結果、縄文時代後晩期～弥生時代の土器、古代から中世の土師器や石器、木器等が確認され、遺跡の残存が確認された。確認調査の結果を基に、玉名地域振興局土木部工務課と遺跡の保存のための路線変更、工法変更の協議を重ねた。協議の結果、工法変更によって最大限遺跡を残し、やむをえず破壊を受ける遺跡のみを平成12年度から埋蔵文化財本調査を行うことになった。その後、用地買収等の問題や矢板等の設置にかかる問題が持ち上がってきたが、その都度玉名地域振興局土木部工務課と協議の上、確認調査を進めて行った。

確認調査は平成11年度から平成12年度、本調査は平成12年度から平成15年度、整理・報告書作成は平成16年度から平成21年度に終了した。

第2節　調査の組織

●本調査

【平成12年度(2000)】

調査責任者　阪井大文(文化課長)

調査総括　　島津義昭(課長補佐) 江本直(主幹兼文化財調査第2係長)

調査事務局　川上康治(課長補佐) 中村幸宏(主幹兼総務係長) 広瀬泰之(参事) 杉村輝彦(主事)

調査担当　　水野哲郎(参事) 田中智宏・木上仁(以上非常勤職員)

【平成13年度(2001)】

調査責任者　阪井大文(文化課長)

調査総括　　島津義昭(課長補佐) 木崎康弘(文化財調査第2係長)

調査事務局　川上康治(課長補佐) 中村幸宏(主幹兼総務係長) 広瀬泰之(参事) 杉村輝彦(主事)

調査担当　　廣田静学(参事) 田中智宏・西口貴志・木上仁(以上非常勤職員)

【平成14年度(2002)】

調査責任者　成瀬烈大(文化課長)

調査総括　　島津義昭(教育審議員兼課長補佐) 木崎康弘(文化財調査第2係長)

調査事務局　小田信也(教育審議員兼課長補佐) 中村幸宏(主幹兼総務係長) 天野寿久(主任主事)
　　杉村輝彦(主事)

調査担当　　廣田静学(参事)　西口貴志・西畑美希・木上仁(以上非常勤職員)

【平成15年度(2003)】

調査責任者　成瀬烈大(文化課長)

調査総括　　島津義昭(教育審議員兼課長補佐) 西住欣一郎(文化財調査第2係長)

調査事務局　吉田惠(課長補佐) 櫨杭正義(主幹兼総務係長) 天野寿久(主任主事) 杉村輝彦(主事)

調査担当　　廣田静学(参事) 内田成香・北原美和子・西口貴志・松野直子(以上非常勤職員)

●整理・報告書作成

【平成16年度(2004)】

整理責任者　島津義昭(文化課長)

整理総括　倉岡博(課長補佐) 西住欣一郎(文化財調査第2係長)

整理事務局　吉田惠(課長補佐) 櫛杭正義(主幹兼総務係長) 天野寿久(主任主事) 小谷仁志(主任主事)

整理担当　廣田静学(参事) 梅田亜耶・六田育子(以上非常勤職員)

【平成17年度(2005)】

整理責任者　梶野英二(文化課長)

整理総括　倉岡博(課長補佐) 西住欣一郎(文化財調査第2係長)

整理事務局　吉田惠(課長補佐) 四元正明(主幹兼総務係長) 塚原健一(参事) 小谷仁志(主任主事)

整理担当　廣田静学(参事) 三宅由華・加藤早織(以上非常勤職員)

【平成18年度(2006)】

整理責任者　梶野英二(文化課長)

整理総括　江本直(課長補佐) 西住欣一郎(文化財調査第2係長)

整理事務局　吉田惠(課長補佐) 高宮優美(主幹兼総務係長) 塚原健一(参事) 小谷仁志(主任主事)

整理担当　廣田静学(参事) 野田愛・加藤早織・岩下萌(以上非常勤職員)

【平成19年度(2007)】

整理責任者　梶野英二(文化課長)

整理総括　江本直(課長補佐) 西住欣一郎(主幹兼文化財調査第2係長)

整理事務局　宗村士郎(教育審議員兼課長補佐) 高宮優美(主幹兼総務係長) 塚原健一(参事)
高松克行(主任主事)

整理担当　廣田静学(参事) 野田愛・加藤早織(以上非常勤職員)

【平成20年度(2008)】

整理責任者　米岡正治(文化課長)

整理総括　江本直(課長補佐) 西住欣一郎(主幹兼文化財調査第2係長)

整理事務局　宗村士郎(教育審議員兼課長補佐) 川上勝美(主幹兼総務係長) 山田京子(参事)
高松克行(主任主事)

整理担当　廣田静学(参事) 加藤早織(非常勤職員)

【平成21年度(2009)】

整理責任者　米岡正治(文化課長)

整理総括　木崎康弘(課長補佐) 西住欣一郎(主幹兼文化財調査第2係長)

整理事務局　宗村士郎(教育審議員兼課長補佐)

整理担当　廣田静学(参事) 加藤早織・江見恵留(以上非常勤職員)

第3節　調査の方法と経過

県道瀬川玉東線緊急地方道路整備事業に伴う養寺遺跡・上小田宮の前遺跡の発掘調査区は計13区に分けて実施し、その総面積は10,022㎡である。

調査は養寺(528㎡)、小田2区(836㎡)、小田3区(356㎡)、上小田宮の前1区(281㎡)、上小田宮の前2区(307㎡)、上小田宮の前3区(324㎡)、上小田宮の前4区(248㎡)、上小田宮の前5区(1601㎡)、上小田宮の前6区(1143㎡)、上小田宮の前7区(1193㎡)、上小田宮の前8区(1270㎡)、上小田宮の前9区(638㎡)、上小田

宮の前10区(1297㎡)の順に重機による表土掘削を行った。その後、全ての調査区の基準点及びメッシュ杭設置を㈱有明測量開発社及び㈲坂井建設コンサルタントに委託し、世界測地系の国土座標軸を使用する区画を設定した。区画は5m×5m及び10m×10mの2種類で設定した。

表土掘削後に水ぬきトレンチを入れ、それぞれの調査区で清掃し、遺構検出を行った。遺構は土層断面図作成及び遺構の検証のためベルトを残し、図面を取った後に完掘、平面図の作成を行った。遺構実測図については、その一部を㈱九州文化財研究所に業務委託を行ったが、各調査員が補足部分等は書き足し、修正を行い、精度の高い図面に仕上がるように努めた。また、それぞれの調査段階においてモノクロとリバーサルの2種類を用いて写真撮影(35㎜又は中判)を実施した。空中写真は、計7回(養寺、小田2区、上小田宮の前5、6、7、8、9、10区)実施し、いずれも九州航空株式会社に業務委託を行い、広大な調査区全体を明らかにすることができた。

発掘調査は平成12年11月より開始し、平成16年3月に終了した。当初から湧水に悩まされ作業効率が落ち、終了までに3年5ヶ月間を要することとなった。その間の発掘調査行程は、表1に示す通りである。

養寺・小田

	2000年		2001年		
	11月	12	1	2	3
養寺遺跡	←→				
小田2区		←→			
3区				←→	

上小田宮の前

	2001年						2002年									
	7月	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1区	←→															
2区				←→												
3区					←→				拡張調査							
4区						←→										
5区							←→									
6区													←→			

	2002年		2003年												2004年		
	11月	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
7区	←→																
8区				←→													
9区						←→											
10区									←→								

表1　上小田宮の前・養寺遺跡調査工程表

第II章　位置と環境

第１節　地理的環境

玉名平野は熊本県の北西部に位置し、菊池川下流域に広がった面積49㎢を有する沖積平野にある。この平野では玉名市街地を頂点とした三角州を形成し、海岸部には藩政時代より進められてきた干拓地が有明海に向かって広がる。西側には長崎県の島原半島があり、一方東側には金峰山系山麓が存在する。北側は花崗岩山塊からなる小岱山に続く洪積台地と接している。市街地は北側の花崗岩風化土壌で形成された丘陵地帯、沖積面よりは比高５ｍ程度の低位洪積段丘、弥生海退による海岸線の後退と河川の働きによって形成された自然陸化箇所、広大な沖積平野に分けられる。

玉名市は人口７万人弱の菊池川下流域を中心とした都市で、面積152.55㎢を有する。小岱山南麓の玉名平野を取り込み、一部は有明海まで達している。

玉名平野中央を貫流して有明海に注ぐ菊池川は流路延長61.2㎞、阿蘇外輪山を北西部に源を発し、菊池渓谷をはじめ山間地を経て、中流の菊鹿盆地、下流の玉名平野に至り、有明海に注ぐ。

下流域では和仁、内田、江田、木葉、繁根木などの支流が合わさり、特に玉名平野中部で大きく蛇行し、屈曲している。

また26,300haの広大な干潟を持つ有明海は、全国の海岸に分布する干潟の約42%にも及び、東京湾より大きく、伊勢湾に匹敵する大きさの内海である。特に潮の干満の差は日本一大きく、大潮時には最大６～７ｍに達する。潮は菊池川に隣接する本遺跡の横を上がり、約12kmを逆流する。

第２節　歴史的環境

ここでは上小田宮の前遺跡・養寺遺跡を中心として、周辺で確認された遺跡を当遺跡と関わる時代を中心に、その概要をとりまとめる。あわせて周辺遺跡の分布図を示す。(第１図参照)

【旧石器時代】

旧石器の遺跡については発掘調査による出土がないため明らかではないが、今泉遺跡や年の神遺跡、備中遺跡でナイフ形石器等が表採され、小岱山南麓の山田や築地、岱明町字西照寺からも旧石器が表採されている。

【縄文時代】

縄文時代は貝塚を中心として、当時の海岸線及び河川沿いに数多くの貝塚遺跡の分布が見られる。金峰山南麓に尾田貝塚、竹崎貝塚、久島貝塚等が、また小岱山から南に伸びる丘陵裾に古閑原貝塚、庄司貝塚、尾崎貝塚が、さらに菊池川旧河口付近には若園貝塚、繁根木貝塚、保田木貝塚、桃田貝塚等が確認されている。

縄文時代後期後半から晩期の遺跡については、近年の調査により伊倉や山田の低丘陵で確認されている。吉丸前遺跡では住居跡のほか土坑等が検出されている。

【弥生時代】

弥生時代前期については天水町の斉藤山貝塚があげられ、多くの突帯文土器が出土し、日本最古とされる鉄斧が出土している。

中期になると各所に甕棺墓地が営まれており、東南大門遺跡では方形周溝墓、数十基の甕棺墓が確認されている。大原遺跡では箱式石棺墓群があり、付近に大規模な集落の存在が窺える。

中後期以降になると、大小の河川を見下ろす丘陵上に高岡原遺跡、菊池川沿いに前田遺跡、柳町遺跡などの集落遺跡が存在している。また、玉名平野に位置する両迫間日渡遺跡では杭列を伴う水田跡が発見され、水田稲作を考える上で重要である。

【古墳時代】

菊池川流域は古墳の密集地帯である。特に当遺跡の北側丘陵にはある和水町清原台地には、銀象嵌銘大刀で著名な江田船山古墳を含む古墳群が分布する。

菊池川流域で最も古い前方後円墳は4世紀後半の山下古墳で、5世紀の天水大塚古墳、院塚古墳、稲荷山古墳、6世紀半ばの大坊古墳まで前方後円墳が築かれる。また、菊池川左岸の城ヶ辻古墳群は7基の円墳からなる古墳群であるが、7号墳では北部九州の影響を受けた県内初の竪穴系横穴式石室墓が確認された。6世紀になると菊池川下流域でも装飾古墳が登場し、玉名市にある大坊古墳、永安寺東古墳、永安寺西古墳、馬出古墳はその代表である。横穴墓群も数多く営まれ、特に阿蘇溶結凝灰岩の崖面が露出する繁根木川右岸に集中する。石貫観音横穴、石貫ナギノ横穴群は代表的な存在である。

【古代】

律令制下の玉名地区は玉名郡（日本書記では玉杵名郡）に属し、「和名抄」に見える日置、下宅、宗部、大町、江田の各郷が属していたと考えられる。

昭和29年と31年の玉名市立願寺地区の発掘調査により礎石群が確認され、布目瓦が出土したことから玉名郡衙跡と推定された。その付近からは多量の焼米と7個の礎石や炭化材が出土し、「三代実録」貞観17年6月20日条に見える玉名郡倉に比定された。また、奈良中期から平安中期にいたる軒平瓦、鬼面瓦などが出土し、法起寺様式の伽藍配置をもつ寺院であることが確認され、玉名郡寺跡と考えられている。このように郡の中心ともいうべき3つの建物の遺構がまとまった形で発見されたのは全国的に珍しく、梅林から元玉名にかけての条里制跡とともに、玉名郡の中心地にふさわしい条件を備えている。

寛政6年に和水町江田の鶯原から出土した火葬骨蔵壺の墓誌銅板から、玉名郡司日置氏の存在が明らかになった。同氏は古墳時代から古代を通して玉名郡内に勢力を有しており、現在疋野原付近に伝承される疋野長者伝説や装飾古墳に代表される古墳群の築造者の同氏にかかわるものと推定される。

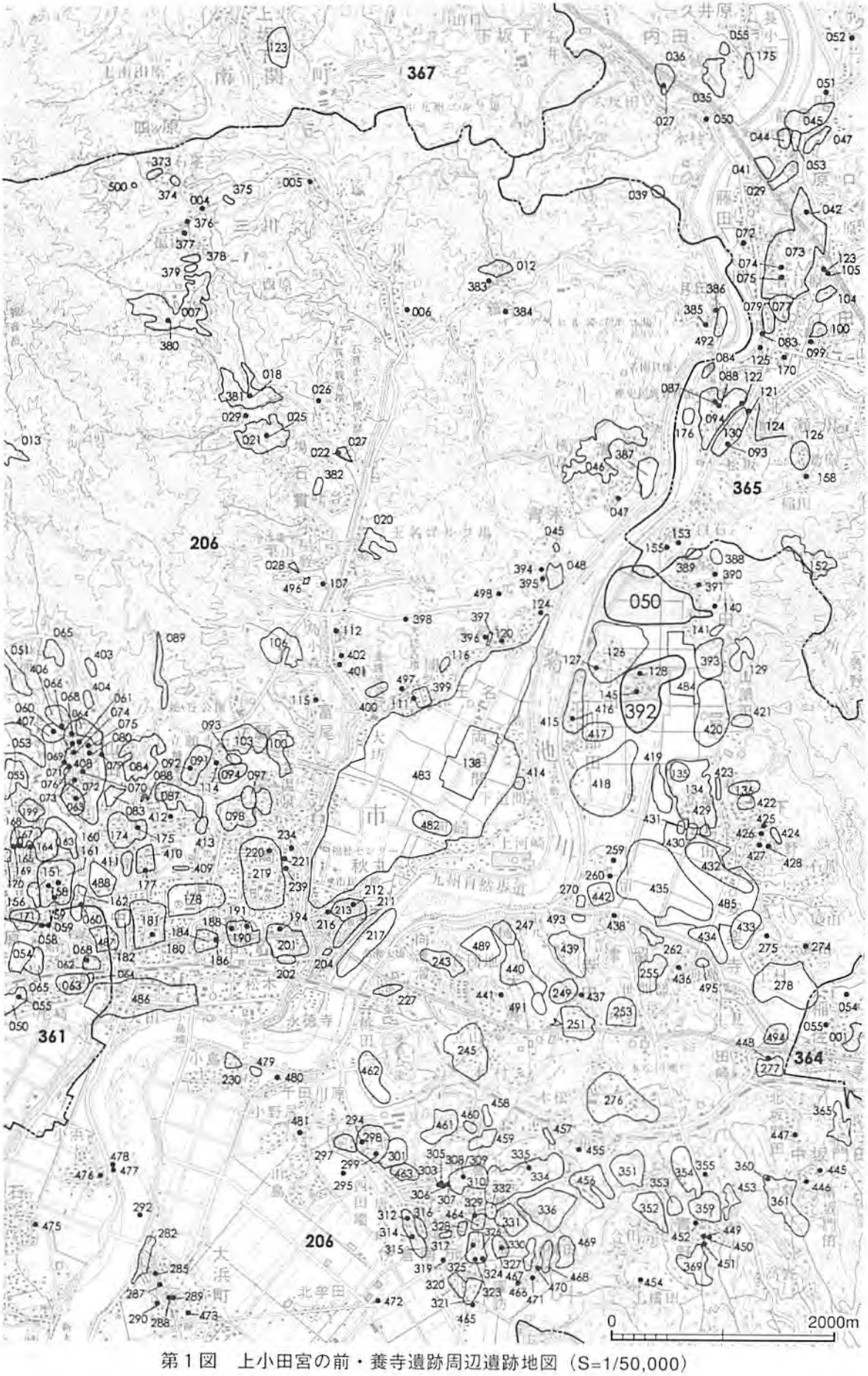
【中世～近世】

11世紀初めには多くの荘園が成立する。菊池川左岸に太宰府天満宮安楽寺領の玉名荘が成立し、伊倉には12世紀前半に宇佐宮領伊倉別符が成立した。また、鎌倉期には市東部に仁和寺仏母領の玉名荘があった。南北朝期には菊池を拠点とする菊池氏が南朝方として活動し、天正年間には菊池武光の弟武尚が大野荘まで進出している。大野荘には、肥後の対明貿易港の1つとして高瀬があり、菊池一族が同港を通じて明や朝鮮と貿易活動をしていた。このような港を制圧し、自己の管理下に置くことは、菊池氏にとって非常に重大な課題であり、高瀬進出のねらいもそこにあったと考えられる。

戦国時代に入り菊池氏が没落すると、大友、島津、龍造寺氏の進入を受け、高瀬の町も荒廃した。一時は菊池川を境として北を龍造寺氏、南を島津氏が支配することとなり、大友氏の支配下にあってはイエズス会宣教師が訪れ、伊倉にはキリシタン墓も残っている。

加藤氏の入国後には、高瀬に港とあわせ米俵の集積庫として高瀬御蔵の設置を行い、菊池川の掘り換えを行うなど、多くの事業を行っている。細川氏は清正時代の大倉4棟の他に付属建物を増設して事業を広げ、常時藩内最高の石高を取り扱うこととなる。

明治維新後も川港を要する商人の町として順調に発展を続けたが、明治10年西南戦争の戦火により高瀬の半分は焼失し、主要な施設が失われ高瀬の大半の機能は失われた。



第1図　上小田宮の前・養寺遺跡周辺遺跡地図（S=1/50,000）

熊本県（43）和水町（旧菊水町）（365）

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
027	内田五輪塔群	内田　宮ノ脇	中世	石造物	町	8基
029	前原宮田	前原　宮田・役田	弥生～古墳	埋葬		弥生中期、甕棺群
035	内田の今城跡	内田　今城	中世	城		
036	内田宮山の城跡	内田（通称宮山）	中世	城		
039	和仁石山の城跡	内田	中世	城		内田城山城跡
041	前原西原	前原　西原	弥生～古墳	包蔵地		弥生中期、甕棺
042	原口長渕甕棺群	原口　長渕	弥生	埋葬		
044	前原東安寺	前原　本居屋敷	弥生～古墳	包蔵地		弥生中期、甕棺
045	天御子	竜門　天御子	弥生	包蔵地		
047	牟田	竜門　牟田	弥生・古墳	包蔵地		
050	内田眼鏡橋	内田　久保など	中世	建造物		
051	蛇田橋	竜門　蛇田　外	中世	建造物		
052	久米野眼鏡橋	久米野　中島ほか	中世	建造物		
053	前原跡	前原　本居屋敷	弥生・古墳	包蔵地		弥生中期、甕棺
055	内田深田池	内田	弥生・古墳	包蔵地		
072	観音堂五輪塔	原口　大江田	中世	石造物		
073	鍋坊原	江田　鍋坊原	弥生～平安	集落		弥生土器・須恵器・土師器
074	札木甕棺群	江田　笹行原	弥生	埋葬		弥生中期
075	江田駅跡推定地	江田　東	古代	包蔵地		
077	中小路原	江田　中小路原	古代	包蔵地		
079	馬場堂ノ上	江田　堂ノ上	弥生・古墳	埋葬		弥生後期　甕棺群
083	堂ノ上宝篋印塔	江田　堂ノ上	中世	石造物		
084	若園貝塚	江田　若園	縄文	貝塚		
087	消原五輪塔	江田　消原	中世	石造物		
088	江田船山古墳	江田　大久保原ほか	中世	古墳	国	銅鏡・銀象嵌銘文大刀・剣・鎧・冠・沓など
093	姫塚古墳	瀬川　松坂	古墳	古墳		土器
094	消原	江田　大久保原ほか	縄文・弥生	包蔵地		縄文後期、弥生後期
099	江光寺跡・江光寺五輪塔群	江田　江光寺	中世	寺社		50基
100	江田城跡（城山城跡）	江田　江光寺	中世	城		
104	立石島崎	原口　立石	弥生	埋葬		弥生中後期
105	立石寺跡	原口　野付		寺社		
121	北原寺跡	瀬川　北原	縄文	包蔵地		縄文土器・石器・矢じり
122	大久保舟形石棺	江田　大久保	弥生・古墳	埋葬		
123	立石城跡	原口　野付	中世	城		
124	トンカラリン	瀬川　長力	縄文～近代	建造物		
125	熊野宮宝塔	江田　神屋敷	中世	石造物	県	
126	鶴原城・館跡	瀬川　鶴原	中世	城		
130	松坂原	瀬川　松坂原	弥生～古代	包蔵地		
152	禿石	日平　本谷・笹原		祭祀		山上に立つ自然石祭祠説あり
153	椿山五輪塔	瀬川　白石	中世	石造物		
155	会所跡五輪塔	瀬川　古寺原	中世	包蔵地		
158	鶴原五輪塔	瀬川　鶴原	中世	石造物		
170	楫枕宝塔	江田　楫枕	中世	石造物	町	延歴三年の銘
175	宮の前	内田　宮の前	弥生	埋葬		甕棺群
176	江田寺屋敷	江田寺屋敷	弥生・中世	集落		

熊本県（43）玉名市（206）

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
004	福山経塚	三ツ川（通称福山）	中世	経塚		大乗妙典埋納、一字一石塔あり
005	三ツ川経塚	三ツ川　京塚	中世	経塚		大乗妙典埋納、円封土、地蔵石祠
006	川床磨崖五輪塔	三ツ川（通称川床）	中世	石造物		磨崖線刻五輪塔片多数
007	三ツ川六反製鉄跡	三ツ川（通称六反）	古代・中世	生産	県	＊昭和52年6月20日指定、ほぼ完形
012	前平	箱谷　前平	縄文～中世	包蔵地		表面採取品、細長両刃尖頭器
013	築地小岱製鉄跡	築地　小岱	古代・中世	生産		観音岳南裾の谷、樋上流鉱滓堆積
018	筈口鍛冶跡	石貫　刀研	中世	生産		ふいご羽口、鉄滓散乱、石貫同田貫か
020	石貫葉柊	石貫　葉柊	弥生・古墳	包蔵地		弥生土器片多量、土師器
021	広福寺門前	石貫　門前	古墳	包蔵地		青磁片・土師器・須恵器包含
022	腰原為安の墓	石貫　柳野原	古代	墓		菊池氏の一族
025	広福寺歴代墓地・大智塔	石貫　馬場	中世	墓地		広福寺歴代墓地、五輪塔
026	堪空上人墓	石貫　太平寺	古代	墓		
027	ナギノ	石貫　柳野原	古墳	包蔵地		土師器・須恵器
028	上栗山	石貫　上栗山	古墳	包蔵地		土師器・須恵器多数及び石器
029	広福寺裏製鉄跡	石貫　仁田尾	古代・中世	生産		
045	寄木磨出梵字群	寄木　田代上前田	中世	石造物	県	熊野社境内20数個の梵字あり
046	満の上城跡	満上　城の原	中世	城		山城、本丸跡に社、近くに湧泉あり
047	満の上六地蔵	満上　下前田	中世	石造物		玉名市内最古、延徳3年10月4日
048	玉名の平城跡	玉名　平城	中世	城		菊池川右岸に位立、眺望地
050	上小田宮の前	上小田　宮の前など	弥生	包蔵地		弥生土器・石斧・土師器・須恵器
051	保多地窯跡群（1～5号）	山田　保多地	古代・中世	生産		4,5号消滅。1,2号床面露出。3号完全保存
053	西田	山田　西田	縄文～中世	包蔵地		ぶどう畑開墾で発見

表2　周辺遺跡一覧表（1）

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
054	西田支石墓	築地　兎町	弥生	埋葬		弥生・石斧出土
055	四十九	築地　四十九	縄文～中世	包蔵地		須恵器骨器1個出土
059	沓掛	築地　沓掛	古墳	包蔵地		土師器散布
060	建長の塔	山田　保多地	中世	石造物	市	建長2年建立の宝塔、土人虎御前塔という
061	建長四年の塔	山田　上馬場	中世	石造物	市	宝塔身
063	五郎丸	山田　下馬場	弥生	包蔵地		微高台地、他の弥生土器も伴出
064	山田山口	山田　山口	古墳～平安	包蔵地		土師器多量出土
065	山田山浦	山田　山浦	古墳～平安	包蔵地		独立小山土師器片散布
066	堀の瀬戸古塔碑群	山田　後田	中世	石造物		台地山林広範囲に散乱、各種あり
068	円蔵坊跡	山田　山口	中世	寺社		五輪塔3基
069	徳仁坊跡	山田　上馬場	中世	寺社		五輪火輪
070	宝泉坊跡	山田　上馬場	中世	寺社		宝塔々身
071	宮司坊跡	山田　上馬場	中世	寺社		五輪塔
072	堀の坊跡	山田　下馬場	中世	寺社		五輪塔
073	俊教坊跡	山田　上馬場	中世	寺社		宝篋印塔・三仏塔・宝塔
074	徳蔵坊跡	山田　上馬場	中世	寺社		五輪塔
075	万楽坊跡	山田　上馬場	中世	寺社		凝灰岩仏龕宝塔々身
076	覚満坊跡	山田　上馬場	中世	寺社		笠塔婆完形、文殊小像
079	地蔵の前古塔碑群	山田　地蔵前	中世	石造物		各種塔部分数10個地蔵堂脇に集結
083	山田中島	山田　中島	弥生	包蔵地		合口壺棺1基出土
084	山田松尾平	山田　平	弥生	包蔵地		高台地南斜面、弥生期土師片・石器
087	鍛冶	山田　鍛冶	中世	包蔵地		独立小山南斜面開墾で出土、糸切り皿多量
088	高頭	山田　高頭	古墳・古代	包蔵地		台地北出面、完形品須恵器多数出土
089	蛇が谷製鉄跡	立願寺　蛇が谷	古代・中世	生産		3区、火窪、羽口・土器片出土
091	玉名郡家跡	立願寺　石丸	古代	包蔵地		上立願寺部落北辺、布目瓦多量散布
092	石丸丸塚	立願寺　石丸	古代	墳墓		畝間畑中に小封土あり
093	松尾原	立願寺　松尾原ほか	弥生	埋葬		合口の大小壺棺15個出土。上立願寺遺跡
094	立願寺跡	立願寺　塔の尾	古代	寺社	市	高台上、法起寺式
097	玉名郡倉跡	立願寺　西の段	古代	包蔵地	市	礎石7個配列
098	下立願寺	立願寺　西の段	縄文～中世	集落		単式甕棺、弥生土器片散布
100	大塚・塩萩	立願寺　大塚など	弥生・古墳	包蔵地		弥生、土師器・須恵器片散布する
103	松尾	立願寺　松尾など	古墳	包蔵地		土師器・須恵器片散布
106	岩原	富尾　岩原	古墳	包蔵地		富尾の北、完形須恵器・土師器多数出土
107	石貫の十字ある板石	石貫　六枝		石造物		上部に十字陰刻あり
111	大坊五輪塔群	玉名　大坊	中世	石造物		部落中5～6基記る
112	小畑六地蔵塔	石貫　小畑	中世	石造物		玉名～南関県道脇
114	上立願寺石天神	立願寺　塔の尾		寺社		神体は立願寺跡の礎石か
115	富尾磨崖阿弥陀	富尾　原	中世	石造物		磨崖仏
116	岡箱式石棺群	玉名　上原	弥生	埋葬		妙徳寺の墓地内3基・2基保存
120	伝玉依姫塚	玉名　釈迦		石造物		社伝で上記古塔群をいう
124	大永・弘治の板碑群	玉名　浦小路	中世	石造物		元玉名の地蔵堂前に2基あり
126	上小田古屋敷	上小田　古屋敷	縄文～中世	包蔵地		土師器・須恵器片散布
127	下小田西丸塚	下小田　御の浦	古墳	古墳		五輪塔部分あり、中世墳墓か
128	下小田養寺丸塚	下小田　養寺	中世	墳墓		養音寺跡という、板碑あり
129	小森田松	山部田　猿喰	古代	包蔵地		墓標に「金登秀満尼」とあり
134	高城	下　高城	古墳	包蔵地		土師器・須恵器・青磁片少量散布
135	下村城跡	下　高城	中世	城		本丸跡に薬師堂・五輪塔群あり
136	秋丸	下　秋丸	弥生	包蔵地		弥生土器多量出土
138	両迫間日渡	両迫間　日渡	弥生・古墳	包蔵地		弥生土器・土師器・須恵器包含、水田中
140	上小田下丸塚	上小田　堂の後	古代	墳墓		円墳状を呈する
141	上小田城跡	上小田下　徳丸など	中世	城		中世丘城古墳、改造の形跡
145	養音寺跡	下小田　養寺	中世	寺社		
151	平町	築地　平町	古代・中世	包蔵地		土師器・須恵器片分布
156	浄光寺蓮華院跡関白塔	築地　南大門	中世	石造物		大五輪塔2基並ぶ
158	関白屋敷跡	築地　南大門	中世	包蔵地		
159	南大門窯跡	築地　南大門	古代・中世	生産		南大門付近70　地下炉床あり
160	南大門	築地　南大門	古代	埋葬		付近一帯弥生後晩期土器包含
161	浄光寺蓮華院境内	築地　南大門	中世	包蔵地		本堂地下約1.5m住居跡、弥生後期土器、蓮華遺跡
162	東南大門	築地　南大門	弥生～中世	包蔵地		弥生後期、土師器多量出土。
163	古閑	築地　古閑	弥生～中世	包蔵地		合口壺9基出土、弥生土器散布、鉄器・弥生甕棺
164	築地東	築地　東	弥生	包蔵地		石囲土坑
165	伝勅使墓	築地　陣内	古代	墓		部落古墳地、自然石、ハネギ八幡祠宮
167	八段	築地　八段	古墳	包蔵地		土師器・須恵器少量
168	築地館跡（田添館跡）	築地　陣内	中世	包蔵地		郎代直ふれの子孫跡に住む
169	伝平家落人の墓	築地　陣内	中世	墓		五輪塔1基あり、土人の説、中世墓
170	狐ん路	築地　前畑	縄文～中世	包蔵地		平畑遺跡と一連
171	築地市場	築地　市場	弥生	包蔵地		弥生土器多数出土
174	高岡原	山田　高岡原	弥生・古墳	包蔵地		土師器・須恵器・弥生土器片散布
175	高岡いっちょう畑箱式石棺	山田　高岡原	弥生	埋葬		箱式石棺のみ露出
177	中尾馬場古塔碑群	中尾　馬場	中世	石造物		台地南端、切板碑・五輪塔群
178	玉名高校々庭	中　橋林	弥生・古墳	包蔵地		弥生土器・土師器包含、石斧も出土
180	春出丸塚	中　寺畑	中世	包蔵地		春日神社北、繁根木八幡旧社地脇
181	田島	中　田島	古墳	包蔵地		瓦器3脚・碗・土師器片・開元通宝・布目瓦出土
182	春出	中　陣内	古墳	包蔵地		須恵器・土師器・弥生土器
184	南出	中　内田	弥生	包蔵地		弥生カメ棺、合口カメ棺。青磁碗、玉名高校蔵

表3　周辺遺跡一覧表（2）

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
186	南出経塚群	中　内田	弥生	埋葬		国道208号沿い、近くは弥生以降遺跡
188	記後岡田貝刀鍛冶跡	亀甲　上畑・内田	中世	生産		広範囲に鉱滓・羽口埋蔵、子孫分住、刀鍛冶跡
190	玉名亀甲	亀甲	縄文～中世	包蔵地		
191	上畑丸塚	亀甲　上畑	縄文～中世	包蔵地		国道208号北入、墓地の一隅楕円状封土
194	蓉湖宝篋印塔	繁根木　堂の後	中世	石造物	市	法務局裏墓地内、文化5年建立、市内３つの１つ
199	築地那木野	築地　那木野	古墳	包蔵地		須恵器・土師器類を包含する
201	繁根木遺跡群	繁根木	弥生	包蔵地		稲荷山古墳の盛下層、弥生土器群あり
202	繁根木貝塚	繁根木　馬場	縄文	貝塚		八幡宮境内全域、町筋南側、ＪＲ線路
204	宝成就寺跡（古塔碑群,石仏群）	高瀬　下町	中世	包蔵地	市	多くの古塔碑・石仏を残す、跡地小学校建つ
211	高瀬本町通	高瀬　保田木町など	縄文～近世	包蔵地		地道路3.5mの下層、鎌倉期の遺物大量出土
212	保田木貝塚	高瀬　保田木町	縄文	貝塚		城跡神社境内全域、阿高式中心
213	保田木城跡・高瀬町亭行所跡	高瀬　保田木町	中世～近世	城		保田木神社内、外濠一部残存、高瀬城ともいう
216	大覚寺蓉湖宝篋印塔	高瀬　樋町	中世	石造物		大覚寺本堂前、市内3基の1つ
217	高瀬菊池川河床	菊池川河床	古代・中世	包蔵地		
219	岩崎原	岩崎（通称岩崎原）	弥生～中世	包蔵地		玉名女子高構内全、弥生土器多量、住居跡
220	岩崎Ａ	岩崎　池田	弥生～中世	包蔵地		大型甕棺・土師器・須恵器・弥生土器多量包含
221	岩崎城跡	岩崎　池田	中世	城		菅原神社々地、土塁・周濠あり
227	桃田貝塚	大倉　桃田原	縄文	貝塚		ＪＲ線北2箇所、阿高式～土師器・須恵器
230	小島城跡	小島　居屋敷	中世	城		菊池川左岸の下、小島天神前畝あり
234	池田支石墓参考地	岩崎　池田	弥生	埋葬		城内に安山岩巨石1個
239	岩崎Ｂ	岩崎　池田	縄文～中世	包蔵地		
243	亀頭迫	大倉　亀頭迫など	弥生～中世	包蔵地		土師器、弥生後期
245	立山	大倉（通称立山）	弥生～中世	包蔵地		弥生後期、土師器等散布
247	城が辻城跡	寺田　城が辻	中世	城		
249	吉丸	寺田　吉丸	古代・中世	包蔵地		菊花文入瓦器多量出土
251	吉丸西	寺田　吉丸	縄文～中世	包蔵地		
253	寺田久保	寺田　久保	縄文～中世	包蔵地		
255	部田	津留　部田	弥生～中世	包蔵地		高台畑地、磨製大型石鏃出土
259	安楽寺居館跡	津留　太郎丸	中世	包蔵地		跡地に氏神菅原神社を祀る
260	菅原神社の六地蔵	津留　白柏子	中世	石造物		
262	上津留	津留　部田	縄文～中世	包蔵地		付近畑地耕作で発見と伝えられる
270	津留中林	津留　中林	縄文～中世	包蔵地		
274	長福寺跡	安楽寺　蓑田	中世	寺社		祠穴近くの畝中跡地に観音堂・五輪塔
275	安楽寺京塚	安楽寺　京塚	中世	経塚		十王社を祀る
276	一本松	田崎　一本松ほか	弥生～中世	包蔵地		甕棺群あり
277	田崎	田崎　天神原・辻	古墳～中世	包蔵地		台地畑、土師器・須恵器片少量散布
278	中神久	安楽寺　中神久	古代・中世	包蔵地		古代・中世遺物散布
282	新町	大浜　新町	古代・中世	包蔵地		
285	六地蔵	大浜　上屋敷	中世	石造物		大橋通り脇、塔は現在、光善寺に移す
287	大福寺跡板碑群	大浜　上屋敷	中世	石造物		
288	光善寺六地蔵（跡）	大浜　下屋敷	中世	石造物		光善寺門前、現在寺門内に移す
289	外岡宮島狛犬	大浜　下屋敷		石造物	市	
290	六地蔵石幢塔	大浜　下屋敷	中世	石造物		光善寺門前、現在寺門内に移す
292	大浜河床	大浜　上屋敷	弥生～中世	包蔵地		石剣出土地
294	城が岡城跡	伊倉北方　五社	中世	城		町北舌状丘陵地、城の遺構は残らない
295	五社支石墓参考地	伊倉北方　五社	弥生	埋葬		十五社石祠、旧城跡にあり、台石は墓石か
297	城が岡貝塚	伊倉北方　五社下	弥生	貝塚		町北舌状台地上、南裾一帯弥生貝層出土多量
298	城が岡	伊倉北方　五社	弥生～中世	包蔵地		町北舌状台地上、広範に弥生中期遺物を含む
299	中北Ａ	伊倉北方	弥生～中世	埋葬		小児合口式4基出土、1期鉄斧、外副葬品
301	中北	伊倉北方　五社	縄文～中世	包蔵地		
303	大宮司宇佐一族の墓・石碑	伊倉北方　堂山	中世	石造物	市	7基あり、市指定3基
305	補陀落渡海碑	伊倉北方　堂山	中世	石造物		本堂山墓地内にあり、日照渡海、天正4年建立
306	本堂山古塔碑群	伊倉北方　堂山	中世	石造物		本堂山報恩寺跡あり、板碑12基、外塔
307	本村屋敷古塔碑群	伊倉北方　本村屋敷	中世	石造物		板碑1基、五輪塔部分多数散乱
308	福田寺跡	伊倉北方　本村屋敷	中世	寺社		跡地に森社な地蔵堂・宝篋印塔・五輪塔あり
309	福田寺跡宝篋印塔	伊倉北方　本村屋敷	中世	石造物		地蔵堂前にあり、「文政十有一年戊子春」
310	本村	伊倉北方　本村	縄文～中世	包蔵地		
312	桜井川製鉄跡	伊倉北方　西屋敷	古代・中世	生産		鉱滓散布する
314	伊倉丹伯津跡	伊倉北方　八龍など	中世	包蔵地		天正以前まで貿易港をして栄えた
315	唐人町	伊倉　唐人町	中世	包蔵地		
316	唐人町貝塚	北方	弥生～中世	貝塚		
317	鍛冶屋町	伊倉南方　西屋敷		貝塚		貝塚散布地、鉱滓多く散布
319	西屋敷六地蔵塔	伊倉南方　西屋敷	中世	石造物		民家の一角、石垣中にたたみこむ
320	片諏訪貝塚	片諏訪　屋敷	縄文～鎌倉	貝塚		
321	片諏訪	片諏訪　屋敷	弥生	包蔵地		貝塚のある台地一帯
323	伊倉城跡古碑	片諏訪　中城	中世	石造物		伊倉台地南端、五輪塔片がある
324	中ん城跡	片諏訪　中城	中世	城		伊倉台地南端、眺望地、形跡を止めぬ
325	印鑰神社古墳	宮原　土井内	古墳	古墳		円筒埴輪・須恵器・土師器出土
326	宮原土井の内	宮原　土井内	弥生	包蔵地		弥生石器・土器出土
327	禮社	宮原　禮社	弥生	包蔵地		弥生土器散布
328	伊倉宮原町	宮原　屋敷	弥生	包蔵地		弥生土器散布
329	屋敷古塔碑群	宮原　屋敷	中世	石造物		五輪塔・重塔部分あり
330	伊倉南八幡宮社寺古塔碑群	宮原　屋敷	中世	石造物		板碑・五輪塔・宝篋印塔部分

表4　周辺遺跡一覧表（3）

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
331	伊倉宮川	宮原　宮川	弥生	包蔵地		弥生土器・石器
332	伊倉八幡宮境内	宮原　北方ほか	縄文	包蔵地		縄文土器、阿高式・御領式を多く含む
334	伊倉宮の後	伊倉北方　宮の後	縄文	包蔵地		縄文、阿高式・御領式土器・石斧・石鏃
335	伊倉宮の後要棺群	伊倉北方　宮の後	弥生	埋葬		合口要棺多数
336	伊倉古宮原	宮原　古宮原	弥生	包蔵地		弥生土器・土師器・須恵器散布
351	青野原	青野　原・北原	弥生・古墳	包蔵地		
352	合田	青野　合田	弥生・古墳	包蔵地		
353	青野屋敷跡	青野　合田・田の尻	中世	包蔵地		古井戸、現在雑木林
354	青野本村曲畑	青野　本村・田の尻	弥生・古墳	包蔵地		弥生～古墳土器多量包含
355	七浦経塚	青野　本村・七浦	中世	経塚		内容不明
359	青野天神原	青野　天神原	弥生・古墳	包蔵地		弥生～古墳期土器包含
360	青野火葬墓跡	青野　天神原・辻	古代	包蔵地		八弁花文瓦器蓋付深鉢（火葬骨入）、蓋付碗
361	中坂門田	中坂門田　西	弥生・古墳	包蔵地		
365	古関	中坂門田　古関	古墳～中世	包蔵地		須恵器・土師器片
369	青野本村堂の久保	青野　本村堂の久保	弥生・古墳	包蔵地		
373～391	名称不明					玉名市遺跡地図にあり
392	慶寺	下小田				玉名市遺跡地図にあり
393～481	名称不明					玉名市遺跡地図にあり
482	柳町	玉名市河崎柳町	縄文～平安	集落		県調査、文字資料
483	玉名平野条里跡	玉名、迫間ほか	古代・中世	生産		
484	玉名平野条里跡		古代・中世	生産		
485	玉名平野条里跡		古代・中世	生産		
486	玉名平野条里跡		古代・中世	生産		
487	玉名平野条里跡		古代・中世	生産		
488	玉名平野条里跡		古代・中世	生産		
489	玉名平野条里跡		古代・中世	生産		
491	吉丸前	寺田　吉丸前	縄文～中世	包蔵地		
492	前田	月田　前田				
493	群前	寺田　群前				
494	北の崎	安楽寺　北の崎ほか	縄文～中世			弥生土器、土師器、須恵器、土坑
495	鍛抜	安楽寺　船島ほか	弥生～古代			弥生土器、土師器、須恵器
496	小園	石貫　小園	中世			
497	西屋敷	玉名　西屋敷				
498	上ノ辻	玉名　上ノ辻				
500	ジュルクン谷製鉄跡	三ツ川　宮田				

熊本県（43）南関町（367）

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
123	鬼王洞ん谷	上坂下　鬼王	縄文	包蔵地		石鏃、単独発見

熊本県（43）玉名市（旧岱明町）（361）

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
050	塚原	野口　塚原	弥生	埋葬		中期、須玖系3基
054	下前原	下前原　正林	弥生	包蔵地		昭和32年発掘調査、鉄器をもつ
055	塚原箱式石棺群	野口　塚原	弥生	埋葬		弥生土器・須恵器少量
058	大原人骨出土地	野口　大原	縄文	包蔵地		人骨1屈伸屈土葬
059	大原青磁出土地	野口　大原	中世	包蔵地		完形5等分切込縁2個
060	北尾崎	野口　北尾崎	弥生	包蔵地		弥生晩期土器・貨銭出土、A・B区
062	貨船東	野口　貨船	弥生	包蔵地		弥生土器片の1群出土
063	尾崎	野口　尾崎	弥生後晩期	包蔵地		須恵器類、完形出土
064	尾崎貝塚	野口　尾崎	縄文	貝塚		亨大玉名高々庭、阿高式
065	貨船西	野口　貨船	弥生	包蔵地		弥生後晩期土器少量
068	帆柱木埋没の地	野口　貨船		祭祀		神体御用船用埋没碑あり
069	大原五輪塔	野口　大原	中世	石造物		風・空輪を失う、水輪に傷あり
073	狩塚	野口　北尾崎	中世	経塚		

熊本県（43）玉東町（364）

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
001	稲佐廃寺跡	稲佐　切畑	古代	寺社	県	古代寺院、塔礎石・金堂基壇の一部、布目瓦多量
054	寺山板碑	稲佐　寺口	中世	石造物		
055	ガランさん板碑	稲佐　馬場屋敷	中世	石造物		

表5　周辺遺跡一覧表（4）

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　調査区の基本土層

当遺跡で確認された層序は基本土層柱状図(第２図)にまとめる。調査区によって各層位が削平・再堆積・水性堆積が認められる場合、その都度層位比較を行い細分している。但し、調査区内で同一層がうまく続かなかったり、若干性質が異なったりすることが見られる。これは沖積地の特性と考えられる。

Ⅰ　層　暗褐色土（Hue 7.5YR3/3）現代の耕作土。地点によって厚さ20㎝～30㎝を測る。

Ⅰａ層　にぶい褐色砂質土（Hue 10YR5/4）旧耕作土で現代の遺物を含む。地点によって厚さ35㎝～50㎝を測る。

Ⅱ　層　褐灰色砂質土（Hue 10YR6/1）マンガンの沈殿が確認でき非常に硬い層。最大厚さは約20㎝である。

Ⅲ　層　黒色粘質土（Hue 2.5GY2/1）マンガンを含み粘性がある。中世から近代の遺物を含む。地点によって厚さ20㎝～40㎝を測る。

Ⅳ　層　オリーブ黒色砂質土（Hue 7.5Y2/2）多量の褐色の粒子が細かい砂に混じる。無遺物層である。地点によって厚さ10㎝～30㎝を測る。

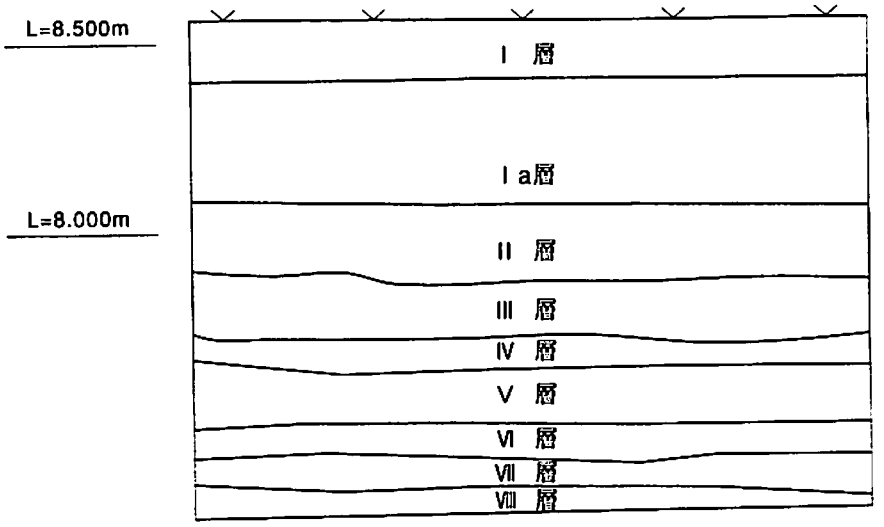
Ⅴ　層　黒色粘質土（Hue 5Y2/1）土質はⅢ層に近い粘性である。中世の遺物が含まれるが、そのほとんどがローリングを受けた小破片である。地点によって厚さ20㎝～50㎝を測る。

Ⅵ　層　黒色砂質土（Hue 5Y2/1）土色はⅤ層に近いが、土質は粒子が細かく砂が混じる砂質土である。中世の遺物が含まれる。最大厚さは約10㎝であるが、地点によっては消滅している。

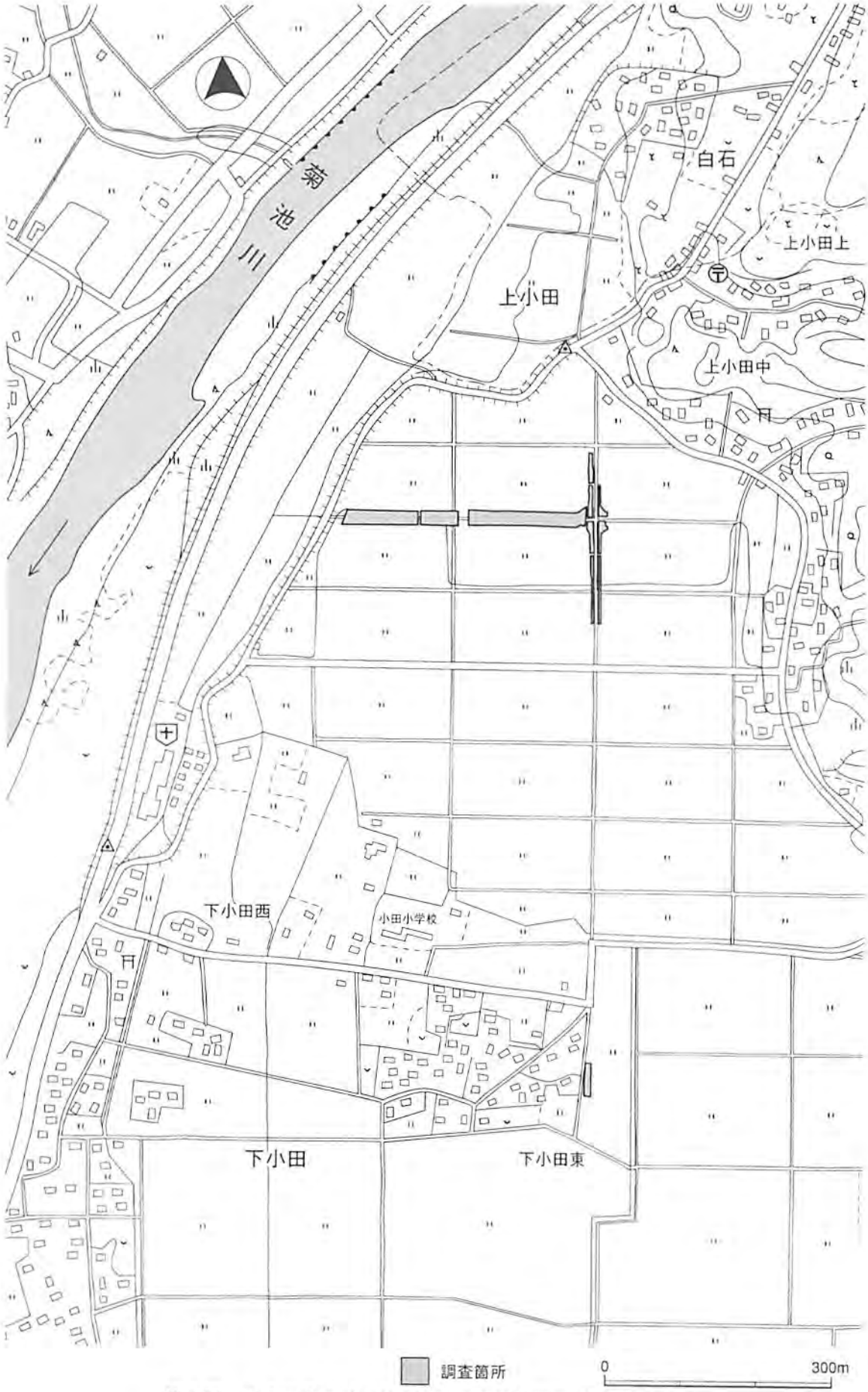
Ⅶ　層　明褐色砂質土（Hue 7.5YR5/6）砂の粒子が大きく、やわらかい層である。主に古代の遺物を含む。地点によって厚さ15㎝～40㎝を測る。

Ⅷ　層　明黄褐色粘質土（Hue 2.5Y6/8）全体的に粘性がある。無遺物層である。

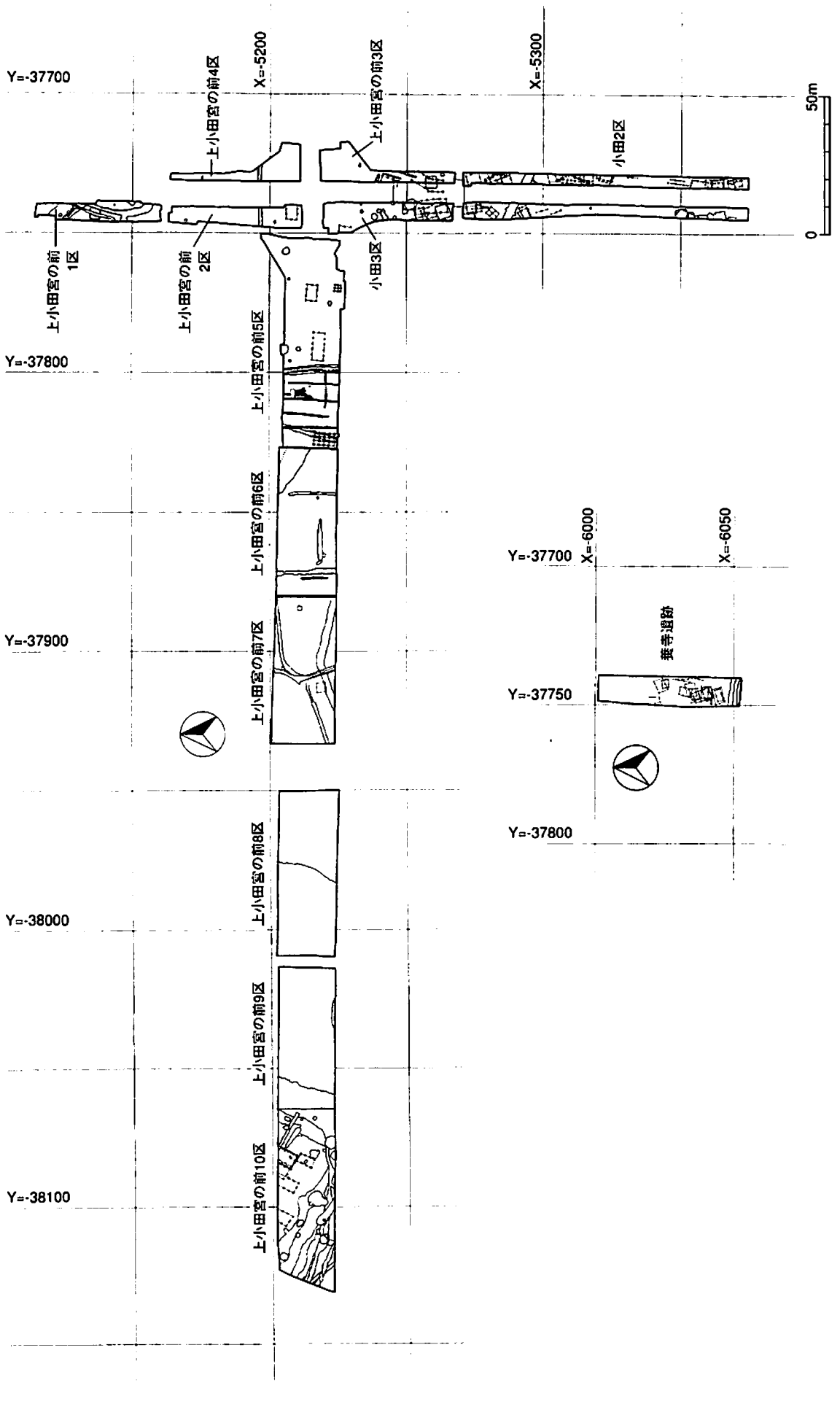
当遺跡の調査方法は、基本土層のⅠ層からⅣ層までを重機で除去した後、Ⅶ層以下の土層観察用のベルトを残しながら人力で掘り下げていく方法をとった。遺構確認面をⅦ層に設定し、調査を進めた。



第２図　基本土層柱状図



第３図　上小田宮の前・養寺遺跡調査区位置図（S=1/7,500）



第４図　上小田宮の前・養寺遺跡全体遺構配置図（S=1/2,000）

第２節　養寺遺跡の調査

1．養寺遺跡の概要

養寺遺跡は菊池川左岸、玉名平野の東側に位置し、その範囲は玉名市下小田字養寺の東西約500m、南北約750mの約30万㎡が推定されている。これまでに本格的な埋蔵文化財の調査は行われていなかったが、隣接地に下小田養寺丸塚、養音寺跡等の中世に属する遺跡が知られている。また、当遺跡と重複する形で玉名平野条里跡が位置づけてあり、古代の条里跡が想定できる。

このような遺跡分布状況の中、県道瀬川玉東線整備事業の路線計画があがり、玉名地域振興局土木部工務課と協議の結果、平成12年度に埋蔵文化財確認調査を実施することになった。調査の結果、中世に属する遺構が検出され、本格的な調査を実施することになった。

2．遺構分布(第5図)

養寺遺跡の調査区は既存の道路に貼りつくように広がる。南北約50m×東西約10mの細長い調査地で、広さは528㎡である。この調査区で検出した遺構は、掘立柱建物跡12棟、柵列跡3基、溝跡(近世)1条、土坑3基である。

遺構の分布状況を見ると、調査区の北側に掘立柱建物跡(SB13・14・15)が分布し、調査区の南側に(SB01・02・03・04・05・06・07・08・10)や土坑(SK01・02・03)が分布している。調査区の掘立柱建物跡や土坑の広がりの東側には柵列跡(SA11・12・17)の分布が確認された。調査区の南端には近世に属する溝跡によって撹乱を受けており、遺構の広がりは不明である。

3．遺構

各遺構の詳細は第6図～13図・表6～8のとおりである。以下は各遺構を概観する。

(1) 掘立柱建物跡

SB01(第6図)

SB01は遺跡の南側に位置し、SB02・07・10と重複しているが、切り合い関係は不明である。3間×2間の側柱建物で、桁行方向はN76°Eとほぼ東西方向である。柱穴は直径16～24cm、深さ14～42cmで、下端のレベルは一定ではない。柱穴は若干ずれるが、ほぼ一直線に並ぶ。

SB02(第6図)

SB02は遺跡の南側に位置し、SB01・07・10と重複しているが、切り合い関係は不明である。2間×2間の側柱建物で、桁行方向はN73°Eとほぼ東西方向である。柱穴は直径12～24cm、深さ16～38cmで、下端のレベルは一定ではないが、ほぼ一直線に並ぶ。

SB03(第7図)

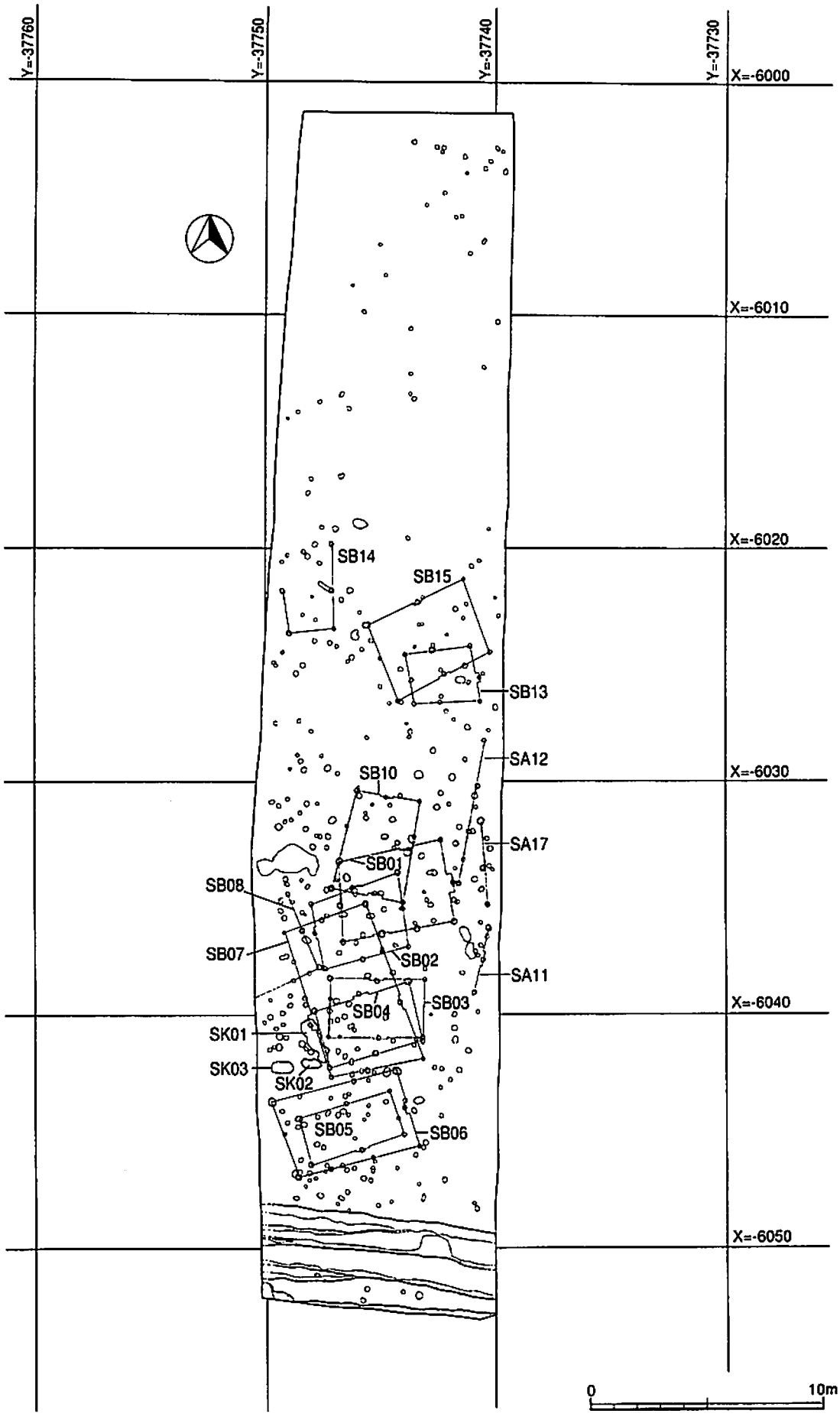
SB03は遺跡の南側に位置し、SB04・07と重複しているが、切り合い関係は不明である。2間×1間の側柱建物で、桁行方向はN90°とほぼ東西方向である。柱穴は直径10～20cm、深さ20～44cmで、下端のレベルは一定ではないが、ほぼ一直線に並ぶ。

SB04(第7図)

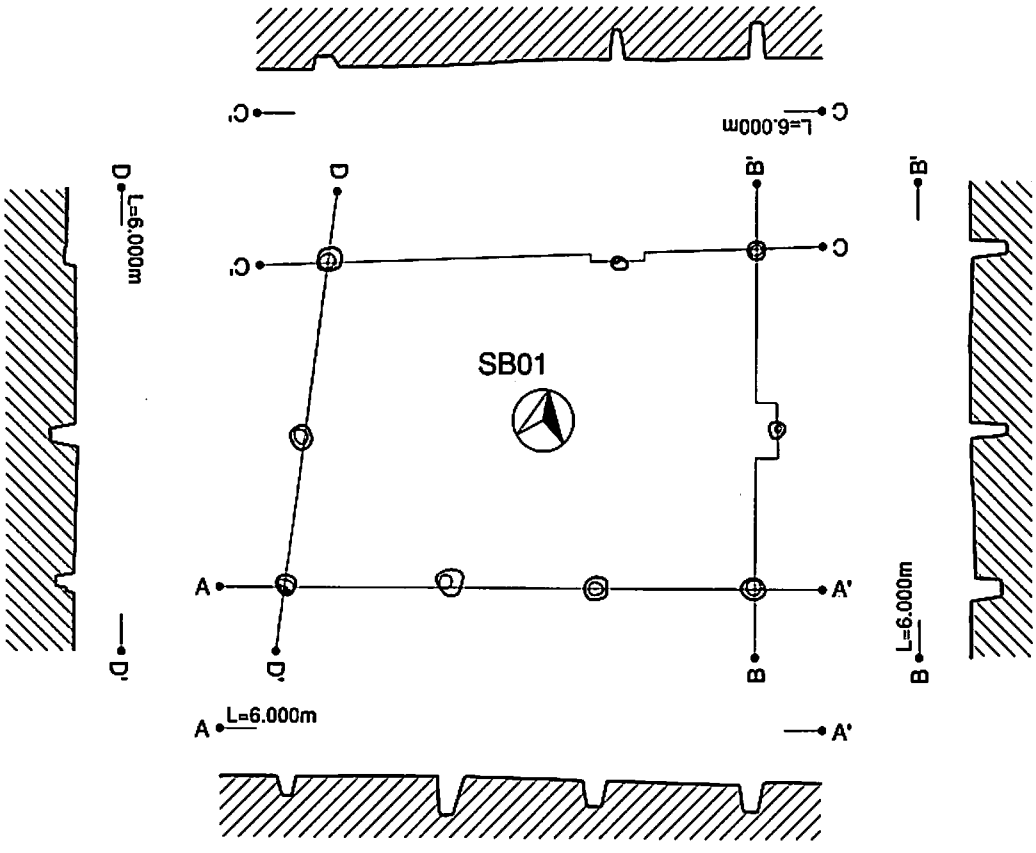
SB04は遺跡の南側に位置し、SB03・07と重複しているが、切り合い関係は不明である。2間×1間の側柱建物で、桁行方向はN72°Eとほぼ東西方向である。柱穴は直径16～28cm、深さは10～44cmである。柱穴の下端のレベルは一定ではないが、ほぼ一直線に並ぶ。

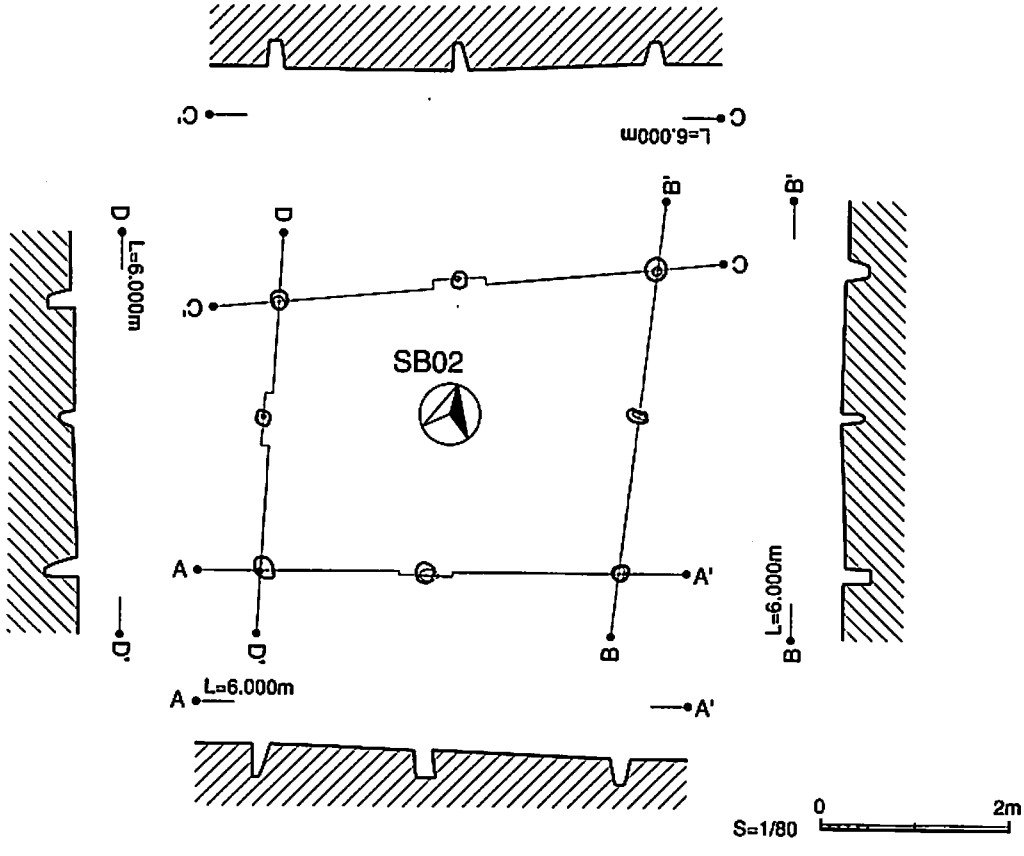
SB05(第8図)

SB05は遺跡の南端にある溝跡の北側で、SB06の内側に位置しているが、切り合い関係は不明である。2間×1間の側柱建物で、桁行方向はN69°Eとほぼ東西方向である。柱穴は直径14～32cm、深さ8～34cmで、下端のレベルは一定ではない。建物の規模はSB03・04に近い規格を示している。

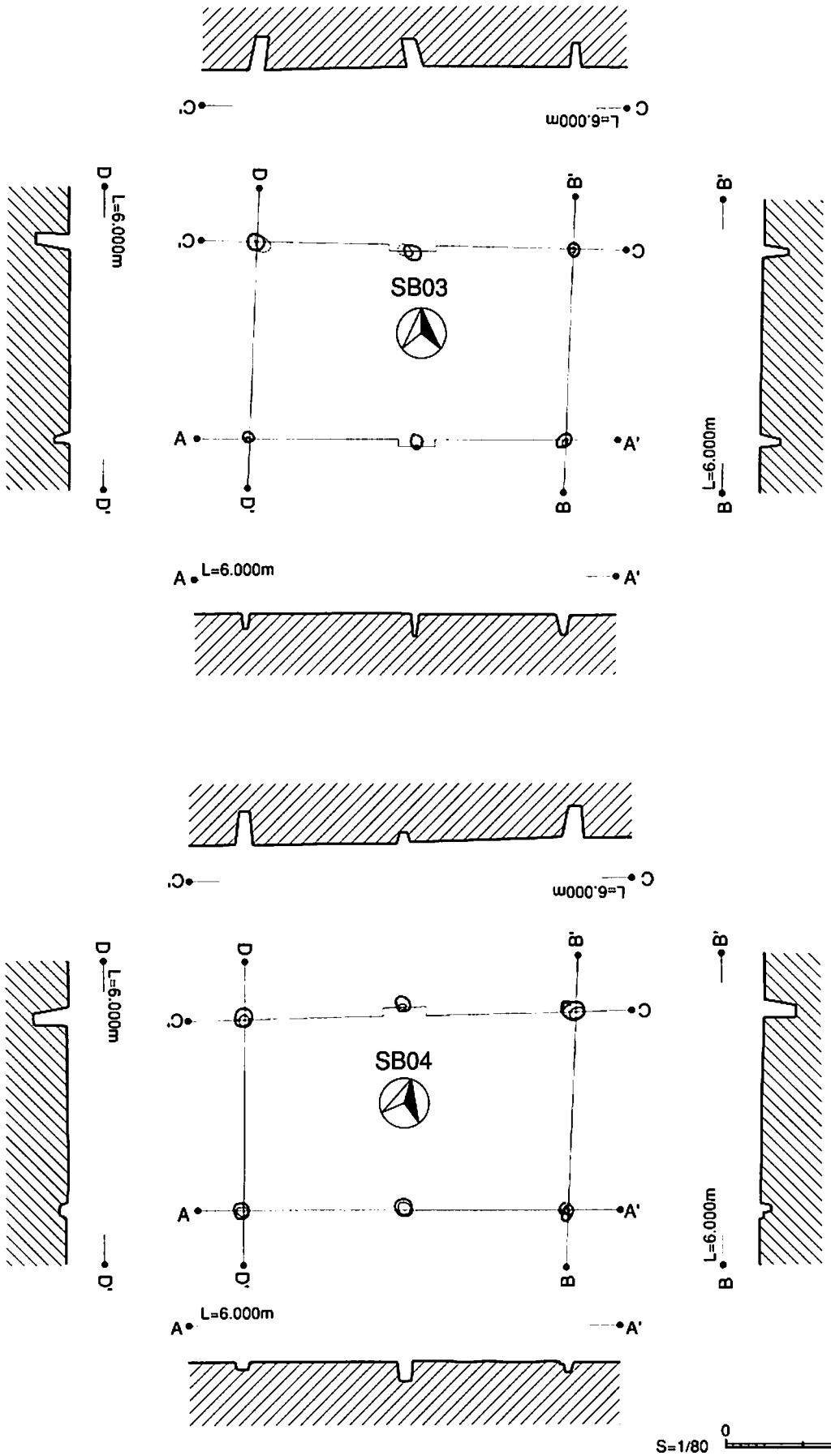


第５図　猿寺遺跡遺構配置図（S=1/250）

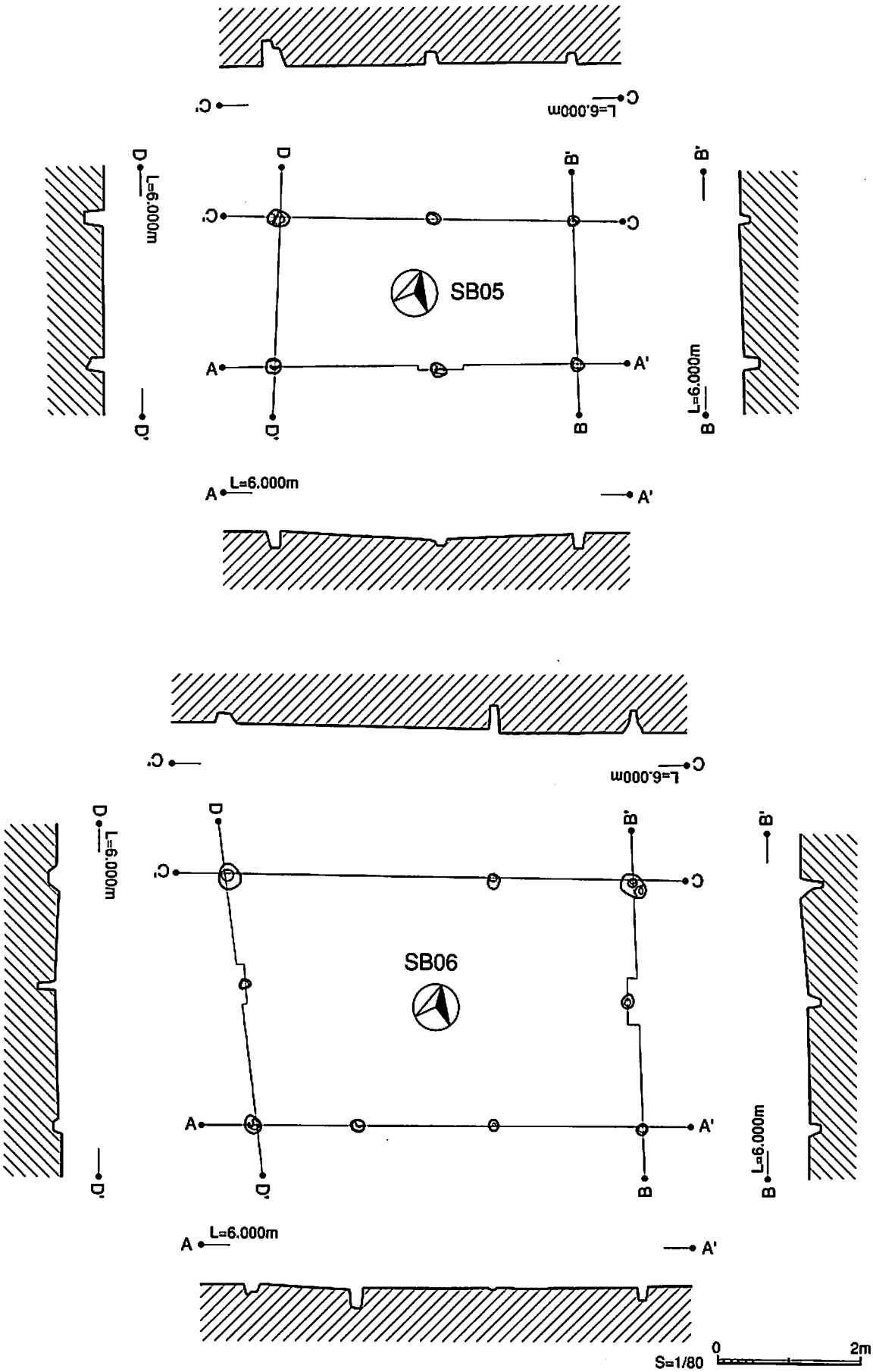




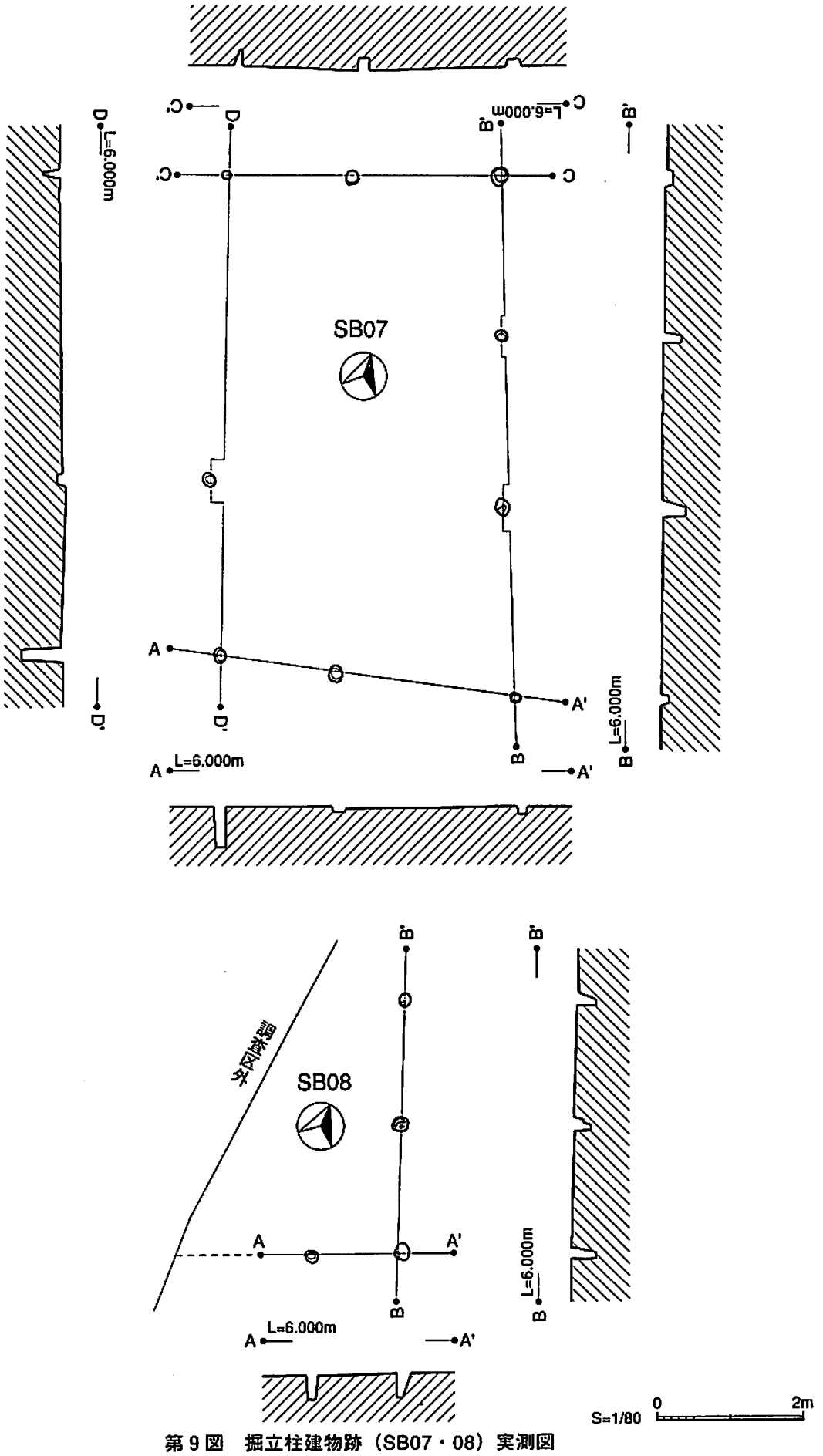
第6図　掘立柱建物跡（SB01・02）実測図



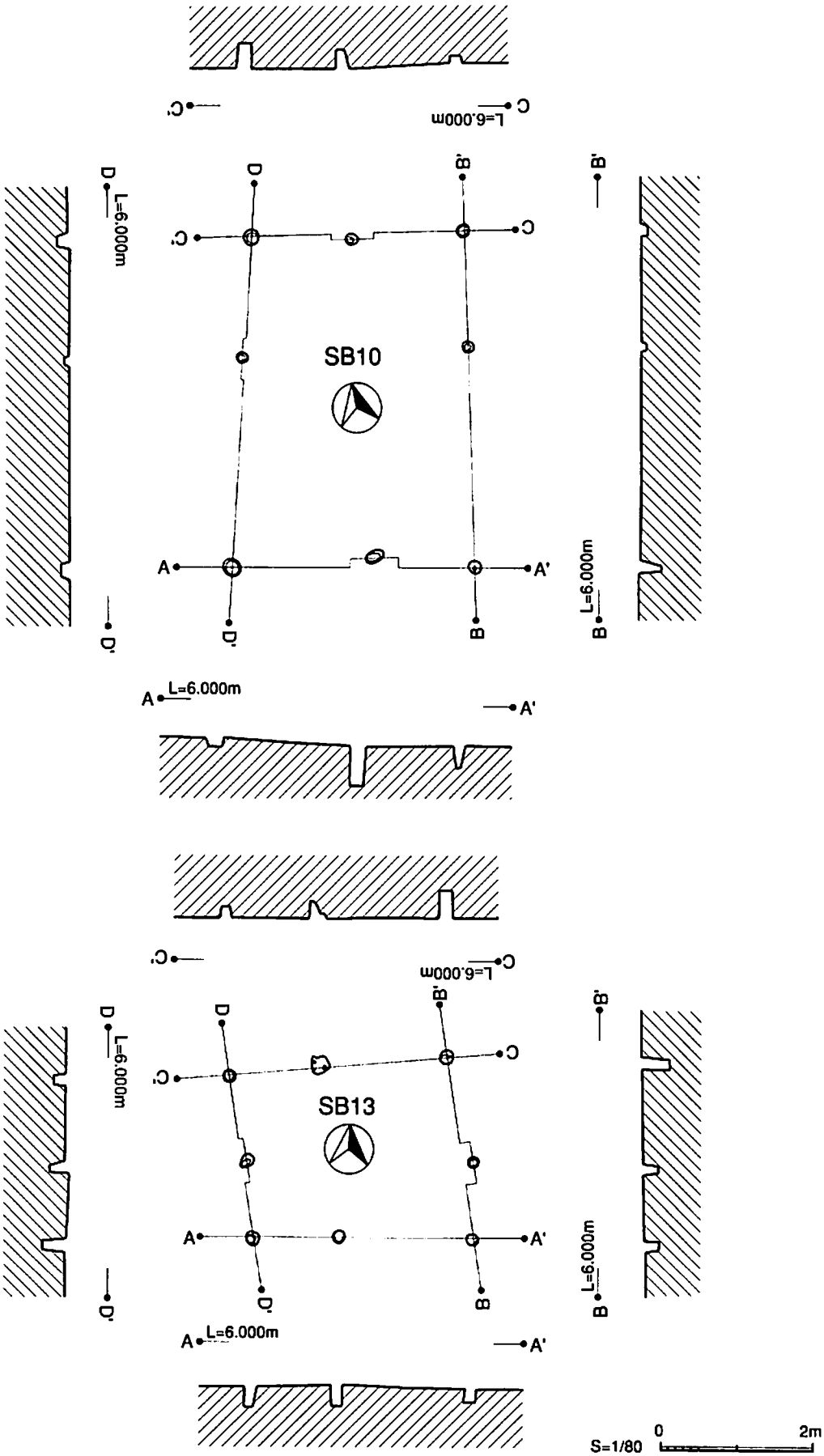
第７図　掘立柱建物跡（SB03・04）実測図



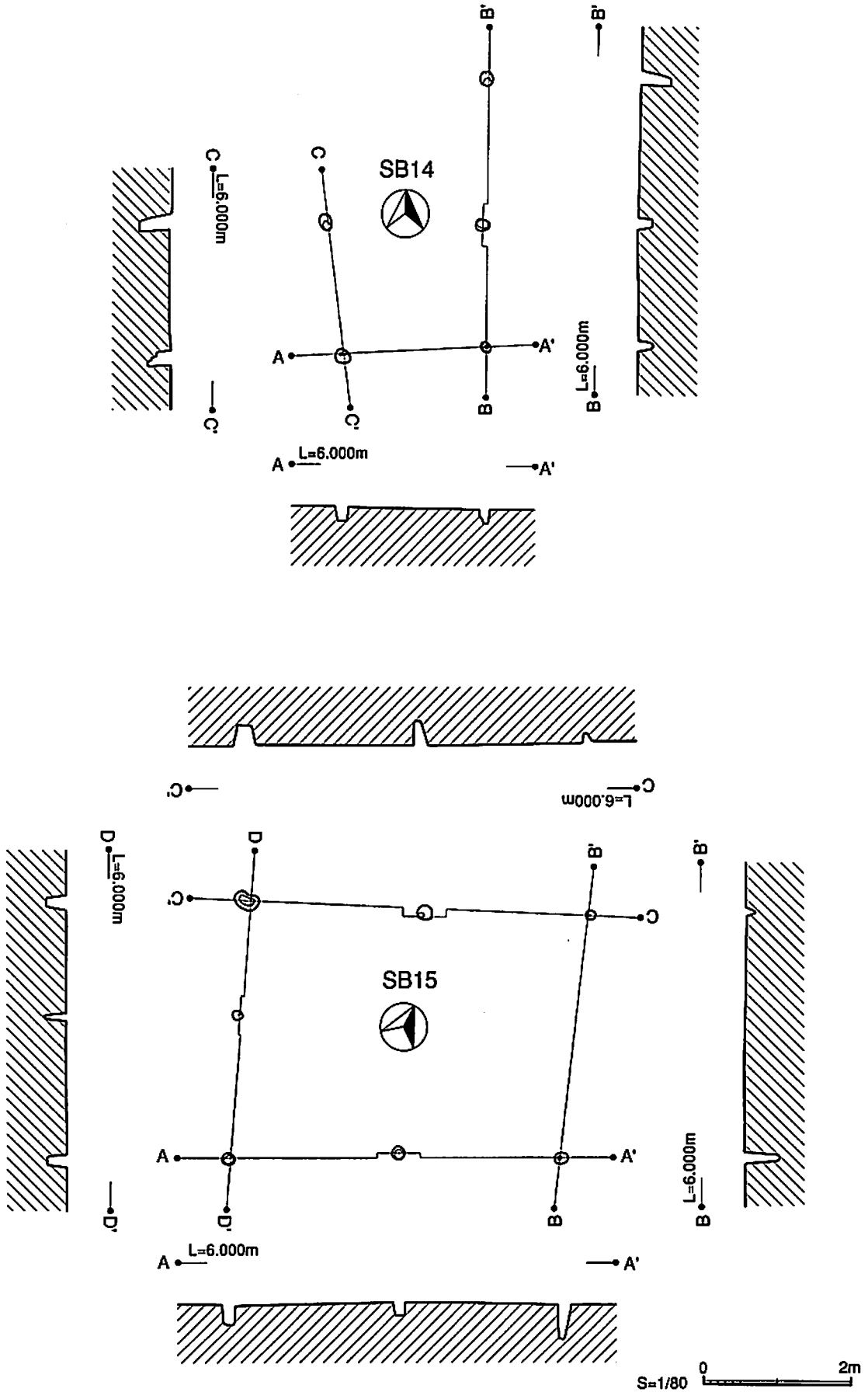
第8図　掘立柱建物跡（SB05・06）実測図



第９図　掘立柱建物跡（SB07・08）実測図



第10図　掘立柱建物跡（SB10・13）実測図



第11図　掘立柱建物跡（SB14・15）実測図

SB06(第8図)

SB06は遺跡の南端にある溝跡の北側に位置し、SB07に隣接している。3間×2間の側柱建物で、桁行方向はN75°Eとほぼ東西方向である。柱穴は直径12～36cm、深さ4～36cmで、下端のレベルは一定ではなく、部分的に欠損を受けている。

SB07(第9図)

SB07は遺跡の南側に位置し、SB01・02・03・04・08と重複しているが、切り合い関係は不明である。3間×2間の側柱建物で、桁行方向はN80°Eとほぼ南北方向である。柱穴は直径12～24cm、深さ8～56cmで、下端のレベルは一定ではない。部分的に欠損を受けているが、ほぼ一直線に並ぶ。

SB08(第9図)

SB08は遺跡の南側に位置し、SB07と重複しているが、切り合い関係は不明である。桁行方向がN67°Eでほぼ南北方向の側柱建物と思われる。2間×1間分を確認したが、調査区外に柱穴が存在すると考えられるので建物全体の規模は不明である。確認された柱穴は直径14～20cm、深さ24～34cmである。

SB10(第10図)

SB10は遺跡の中央部南側に位置し、SB01・02と重複しているが、切り合い関係は不明である。2間×2間の側柱建物で、桁行方向はN78°Wとほぼ南北方向である。柱穴は直径12～24cm、深さ6～52cmで、下端のレベルは一定ではない。ほぼ一直線に並ぶが、若干北側が開く。

SB13(第10図)

SB13は遺跡の中央部に位置し、SB15と重複しているが、切り合い関係は不明である。2間×2間の側柱建物で、桁行方向はN83°Eとほぼ東西方向である。柱穴は直径14～24cm、深さ16～38cmで、下端のレベルは一定ではない。建物としてはやや歪な平面形をしているが、柱穴の覆土が同一であることから掘立柱建物とした。

SB14(第11図)

SB14は遺跡の中央部北側に位置し、SB15に隣接している。2間×1間の側柱建物で、桁行方向はN83°Eでほぼ南北方向である。確認された柱穴は直径12cm～18cm、深さ10cm～44cmで、下端のレベルは一定ではない。建物の主軸はSB13とほぼ同一である。

SB15(第11図)

SB15は遺跡の中央部に位置し、SB13と重複しているが、切り合い関係は不明である。2間×2間の側柱建物で、桁行方向はN62°Eとほぼ東西方向である。柱穴は直径5cm～32cm、深さ14cm～46cmである。

(2) 柵列跡

SA11(第12図)

SA11は遺跡の南側に位置し、柱列の軸はN13°Eで、確認できたのはほぼ南北に並ぶ3つの柱穴である。柱列の長さは2.9m(約9.6尺)で、柱穴は直径16～18cm、深さ24～46cmで、下端のレベルは一定ではない。柵の配置状況からSB03・10との関連性が考えられる。

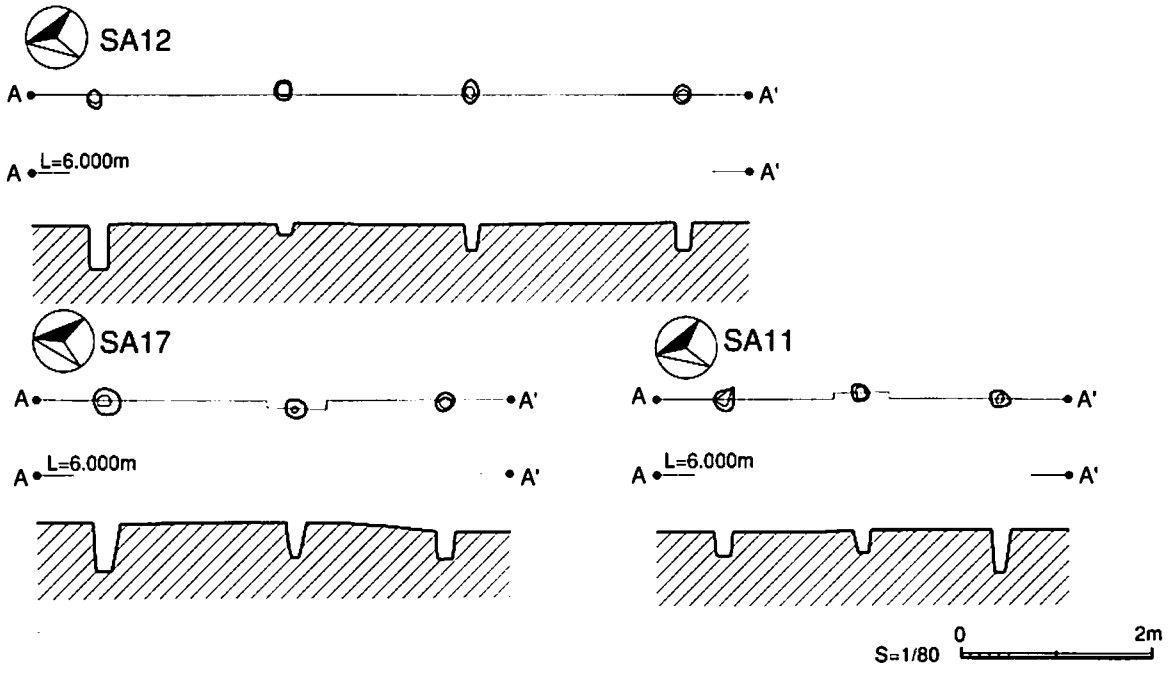
SA12(第12図)

SA12は遺跡の中央部に位置し、SB01とSA17に隣接している。柱列の軸はN11°Eで、確認できたのはほぼ南北に並ぶ4つの柱穴である。柱列の長さは6.2m(約20.5尺)で、柱穴は直径16～20cm、深さ12～46cmで、下端レベルは一定ではない。SA11と同様、柵の配置状況からSB03・10との関連性が考えられる。

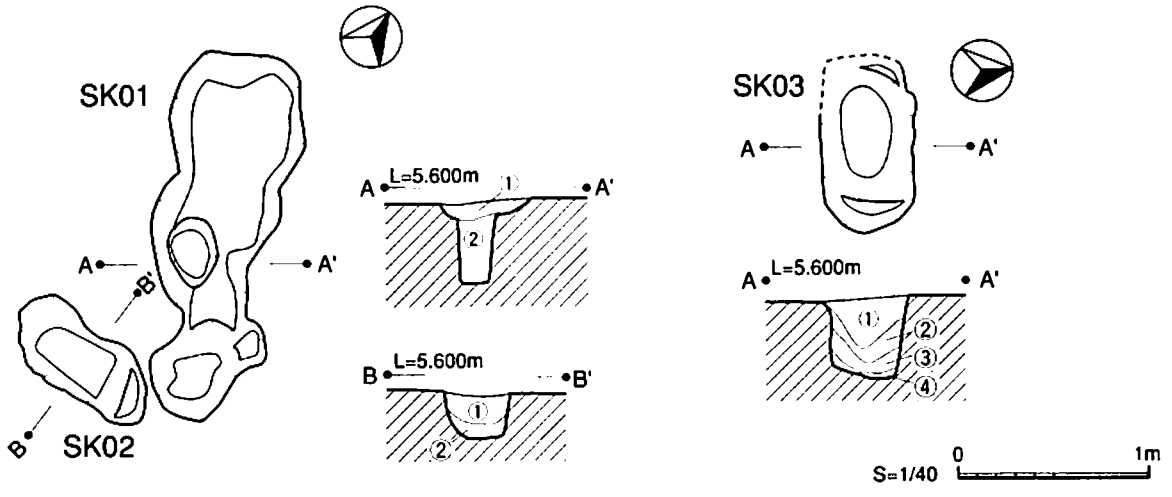
（寸法は検出面で計測したもの）

遺構番号	間数	桁長		梁長		建物の向き	型式	方位	桁行平均		梁行平均		柱穴直径	柱穴深さ
		m	尺	m	尺				m	尺	m	尺	cm	cm
SB01	3×2	4.8	15.7	3.5	11.6	東西	側柱	N 76°E	1.6	5.3	1.8	5.8	16～24	14～42
SB02	2×2	3.9	13.0	3.0	10.0	東西	側柱	N 73°E	2.0	6.5	1.5	5.0	12～24	16～38
SB03	2×1	4.1	13.6	2.5	8.3	東西	側柱	N 90°	2.1	6.8	2.5	8.3	10～20	20～44
SB04	2×1	4.3	14.1	2.5	8.4	東西	側柱	N 72°E	2.1	7.0	2.5	8.4	16～28	10～44
SB05	2×1	4.2	13.8	2.0	6.7	東西	側柱	N 69°E	2.1	6.9	2.0	6.7	14～32	8～34
SB06	3×2	5.5	18.2	3.5	11.5	東西	側柱	N 75°E	1.8	6.1	1.7	5.7	12～36	4～36
SB07	3×2	6.9	22.6	4.4	14.6	南北	側柱	N 80°E	2.2	7.5	2.2	7.3	12～24	8～56
SB08	2×(1)	3.4	11.4	1.2	4.0	南北	側柱	N 67°E	1.7	5.7	-	-	14～20	24～34
SB10	2×2	4.4	14.4	3.0	9.8	南北	側柱	N 78°W	2.2	7.2	1.5	4.9	12～24	6～52
SB13	2×2	2.9	9.5	2.3	7.6	東西	側柱	N 83°E	1.4	4.8	1.1	3.8	14～24	16～38
SB14	2×1	3.6	11.8	2.0	6.5	南北	側柱	N 83°E	1.8	5.9	-	-	12～18	10～44
SB15	2×2	4.6	15.1	3.4	11.3	東西	側柱	N 62°E	2.3	7.6	1.7	5.5	5～32	14～46

表6　発寺遺跡ＳＢ計測表



第12図　柵列跡（SA11・12・17）実測図



第13図　土坑（SK01・02・03）実測図

SA17(第12図)

SA17は遺跡の中央部南側に位置し、SA12に隣接している。柱列の軸はN5°Wで、確認できたのはほぼ南北に並ぶ3つの柱穴である。柱列の長さは3.6m(約12.0尺)で、柱穴は直径20～28cm、深さ20～50cmで、下端レベルは一定ではない。柵の配置状況からSB01との関連性が考えられる。

(3) 土坑

SK01(第13図)

SK01は遺跡の南側に位置し、SK02と隣接している。長軸1.96m、短軸0.48m、深さ0.44mを測り、平面形は不整の長方形、断面形は浅い皿状を呈している。床面には平面形で楕円形の掘り込みがあり、二段掘りになっており、その断面形は筒状である。覆土は①・②層に分層できる。

SK02(第13図)

SK02は遺跡の南側に位置し、SK01と隣接している。長軸0.87m、短軸0.36m、深さ0.22mを測り、平面形は不整の楕円形、断面形は略台形を呈している。覆土は①・②層に分層できる。

SK03(第13図)

SK03は遺跡の南側に位置し、長軸0.94m以上、短軸0.48m、深さ0.44mを測り、平面形は略楕円形、断面形は略台形を呈している。覆土は①～④層に分層できる。

(寸法は検出面で計測したもの)　　(単位：m)

遺構名	遺構番号	長軸	短軸	深さ	備考
土坑	SK01	1.96	0.48	0.44	
	SK02	0.87	0.36	0.22	
	SK03	0.94～	0.48	0.44	

表7　養寺遺跡検出遺構一覧表

遺構番号	層位	特　徴
SK01	①層	暗褐色粘質土。
	②層	灰褐色粘質土。
SK02	①層	灰褐色粘質土。鉄分を含む。
	②層	灰色粘質土。
SK03	①層	灰褐色粘質土。鉄分を含む。
	②層	灰色粘質土。
	③層	灰色弱粘質土。
	④層	青灰色強粘質土。

表8　養寺遺跡検出遺構土層注記表

第３節　小田２区の調査

１．上小田宮の前遺跡の概要

上小田宮の前遺跡は菊池川左岸、玉名平野が一番狭くなった場所に位置し、養寺遺跡からは約600m北側に離れた場所にある。その範囲は玉名市上小田字宮の前の東西約1,000m、南北約300mの約30万㎡が推定されている。養寺遺跡と同様に、これまで本格的な埋蔵文化財の調査は行われていなかったが、昭和40年代に実施された圃場整備事業時に多量の遺物が表採されたという地元の古老の聞き取り調査の結果から、当遺跡の存在が知られることになった。遺跡の東側にある小高い丘陵には上小田下丸塚、徳丸古墳群等の古墳群、西側の菊池川右岸に広がる玉名平野には両迫間日渡遺跡、玉名平野条里跡、柳町遺跡等の遺跡が知られている。両迫間日渡遺跡では県内最古となる弥生時代後期の水田跡が発見されたほか、玉名平野条里跡では古墳時代中期の木樋(導水管)が発見されている。また、柳町遺跡では日本最古の文字を記した木製短甲や農具等、多量の木製品をはじめとして多量の弥生時代から古代の遺物、遺構が検出され注目された。北側には、銀錯銘大刀の出土で知られている江田船山古墳がある清原台地が広がり、台地の菊池川沿いには、若園貝塚等の遺跡が知られている。若園貝塚は古くから知られ、菊池川流域最上流に位置する海水産貝塚として注目をされている。

以上のように、当遺跡及び周辺遺跡における既往の調査では重要な発見が相次いでおり、上小田宮の前遺跡の時代的背景が想定される。

なお、調査区については、養寺遺跡と上小田宮の前遺跡の混同を防ぐために当初は小田２区、３区と設定して調査を進めたが、平成13年度に調査員が変わり、残りの調査区を上小田宮の前１区から10区に設定して調査を進めた。本書では、当時の調査区の名称をそのまま使い報告と代える。

２．遺構分布(第14図)

上小田宮の前遺跡の小田２区は、南北約110m×東西約5mの細長い調査区を既存道路の両側（西側調査区・東側調査区)に設定した。広さは836㎡である。この調査区で検出した遺構は、竪穴住居跡７棟、掘立柱建物跡20棟、柵列跡16基、溝跡１条、土坑３基である。

遺構の分布状況を見ると、調査区の南西側に竪穴住居跡(SI01・02・03・06・08・09・10)が分布している。掘立柱建物跡は調査区の南東側(SB01・02・03・04・05)と北側(SB08・09・11・13・15・16・18・20・21・22・23・24・25・26・27)の二群に分かれて分布している。柵列跡も掘立柱建物跡の分布と同じく南東側(SA01・02・07・08)と北側(SA03・04・05・06・09・10・11・12・13・14・15・16)の二群の分布が見られる。溝跡は調査区の北側に１条検出している。また、土坑は調査区の北側にSK05が、南東部にSK01・03の分布が確認される。

３．遺構・遺物

各遺構・遺物の詳細は第15図～26図・表９～11のとおりである。以下は各遺構を概観する。

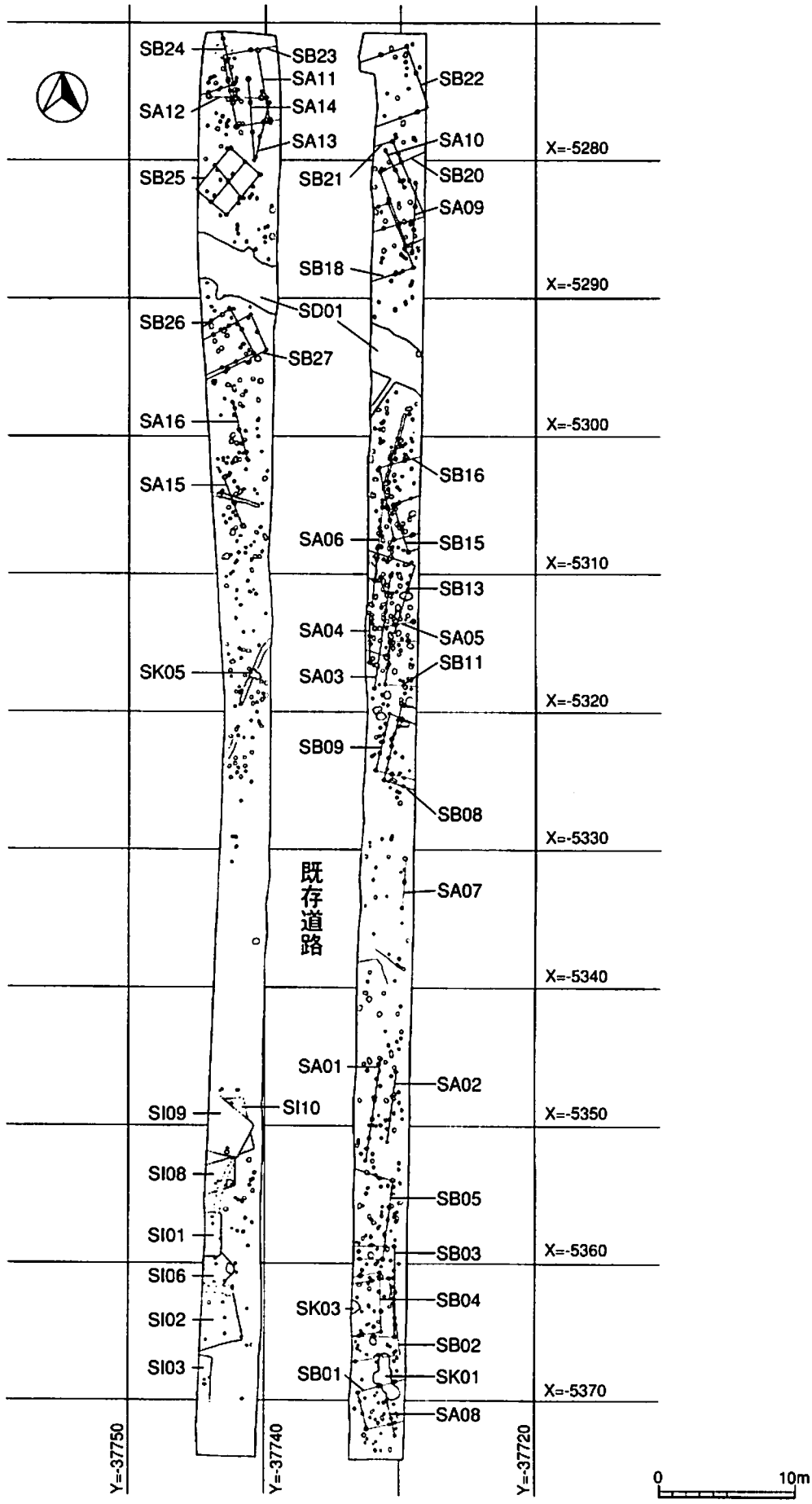
(1) 竪穴住居跡

SI01(第15図)

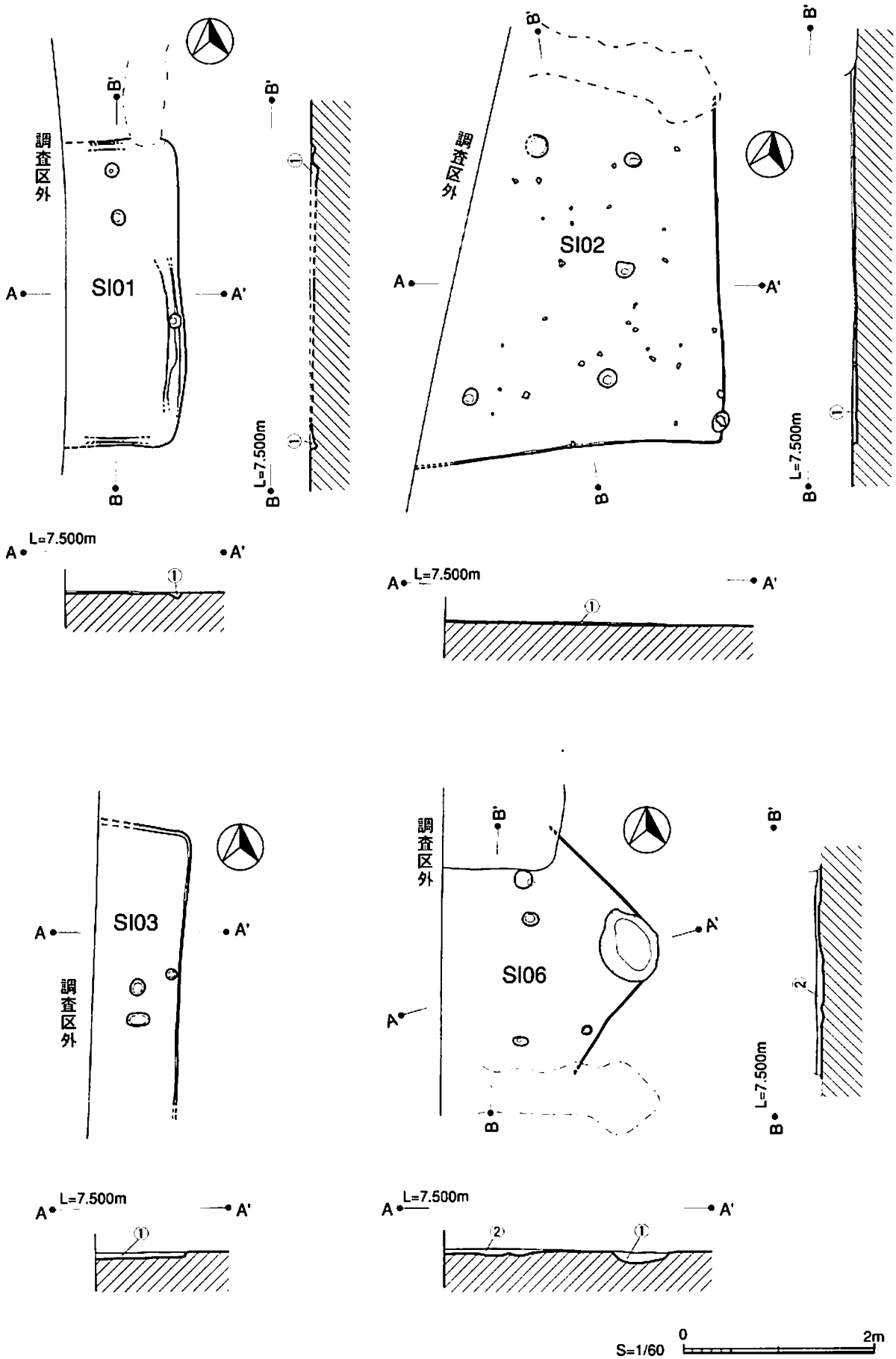
SI01は東側調査区の南側に位置し、SI06を切っている。長軸3.21m、短軸1.26m以上、深さ0.05mを測る。住居西部が調査区外に存在するため、全体の規模は不明であるが、平面形は四角形を呈していたものと思われる。この遺構内には、壁際に浅い溝状の落ちを確認することができたが、残りが悪く遺構全体に廻るのかは不明である。また、床面に明瞭な硬化面は確認できなかったが、柱痕跡らしき落ち込みが３箇所あった。

SI02(第15図)

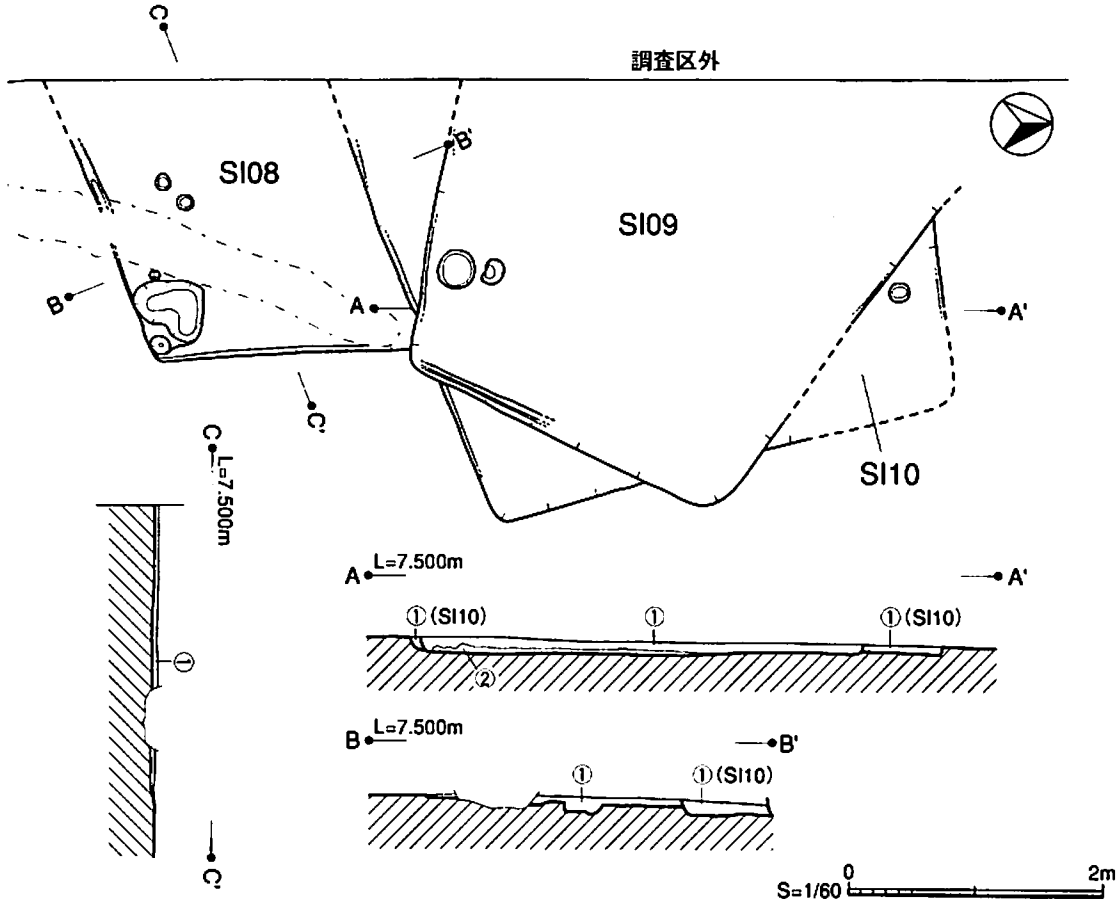
SI02は西側調査区の南側に位置し、SI03・06に隣接している。長軸3.95m以上、短軸3.30m以上、深



第14図　小田2区遺構配置図（S=1/450）



第15図　竪穴住居跡（SI01・02・03・06）実測図



第16図　竪穴住居跡（SI08・09・10）実測図

さ0.05mを測る。住居の北部は撹乱に壊され、西部は調査区外に存在すると思われるため、全体の規模は不明であるが、平面形は四角形を呈していたものと思われる。

遺構確認面からの深さは5cm程とかなり浅く、埋土も1層のみであったが、床面にわずかなカーボンの広がりを確認することができた。また、柱痕跡らしき落ち込みが5箇所あった。

SI03(第15図)

SI03は西側調査区の南側に位置し、SI02に隣接している。長軸2.95m以上、短軸0.92m以上、深さ0.05mを測る。住居西部が調査区外に存在すると思われるため、全体の規模は不明であるが、平面形は四角形を呈していたものと思われる。遺構内の床面は平らな面を捉えたが、硬化面や炉跡などは検出できなかった。また、柱痕跡らしき落ち込みが3箇所あった。

SI06(第15図)

SI06は西側調査区の南側に位置し、SI01に切られており、住居東部に貯蔵穴を持っている。長軸2.55m以上、短軸2.35m以上、深さ0.08mを測るが、住居西部が調査区外に存在すると思われるため、全体の規模は不明である。平面形は四角形を呈していたものと思われるが、硬化面や炉跡は検出できなかった。

SI08(第16図)

SI08は西側調査区の南側に位置し、SI10に切られている。長軸2.30m以上、短軸2.15m以上、深さ0.06mを測るが、住居西部が調査区外に存在すると思われるため、全体の規模は不明である。平面形は四角形を呈していたものと思われるが、硬化面や炉跡は検出できなかった。遺構内には、壁際に浅い溝状の落ちを確認することができたが、残りが悪く遺構全体に廻るのかは不明である。

SI09(第16図)

SI09は西側調査区の南側に位置し、SI08・10を切っている。長軸3.50m、短軸2.95m以上、深さ0.09mを測るが、住居西部が調査区外に存在すると思われるため、全体の規模は不明である。平面形は不整の四角形を呈していたものと思われるが、硬化面や炉跡は検出できなかった。遺構内には、壁際に浅い溝状の落ちを一部確認することができ、SI01・08・09の3棟の共通の構造をもつ。

SI10(第16図)

SI10は西側調査区の南側に位置し、SI08を切り、SI09に切られている。長軸4.15m、短軸3.27m以上、深さ0.10mを測るが、住居西部が調査区外に存在すると思われるため、全体の規模は不明である。平面形は四角形を呈していたものと思われるが、硬化面や炉跡は検出できなかった。遺構の切り合い関係は、古いものからSI08→10→09の順番で確認できた。

(2) 掘立柱建物跡

SB01(第17図)

SB01は東側調査区の南端に位置し、SA08と重複しているが、切り合い関係は不明である。桁行方向がN76°Eでほぼ東西方向の側柱建物と思われる。2間×2間分を確認したが、建物東部の柱穴が調査区外に存在すると考えられるので、建物全体の規模は不明である。柱穴は直径16～30cm、深さ8～30cmで、下端のレベルは一定ではないが、ほぼ一直線に並ぶ。

SB02(第17図)

SB02は東側調査区の南側に位置し、SB03・04と重複しているが、切り合い関係は不明である。桁行方向がN80°Eでほぼ南北方向の側柱建物と思われる。2間×2間分を確認したが、建物西部の柱穴が調査区外に存在すると考えられるので、建物全体の規模は不明である。柱穴は直径18～24cm、深さ16～24cmで、下端のレベルは一定ではない。部分的に欠損を受けているが、ほぼ一直線に並ぶ。

SB03(第17図)

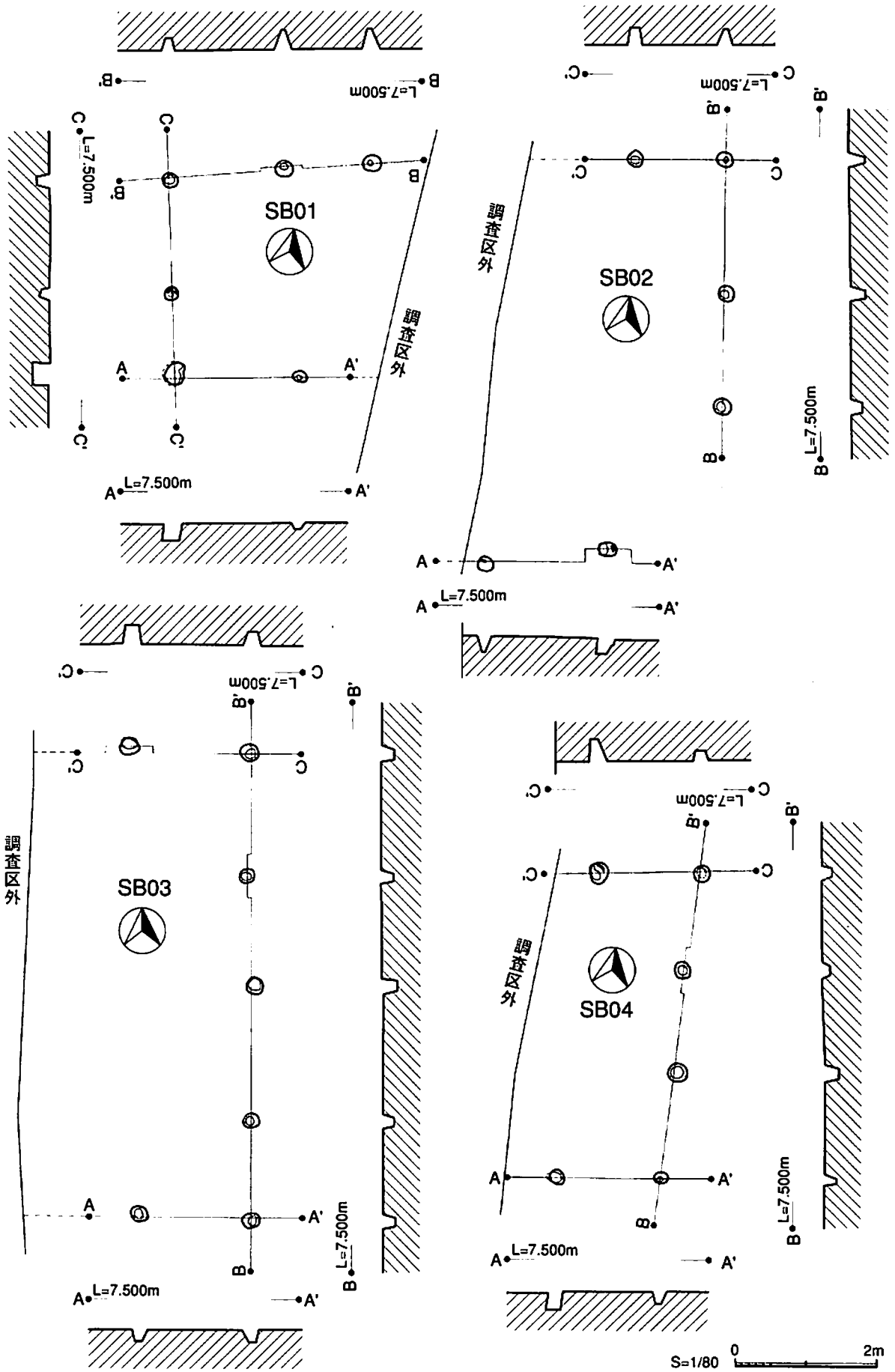
SB03は東側調査区の南側に位置し、SB02・04・05と重複しているが、切り合い関係は不明である。桁行方向がN90°で南北方向の側柱建物と思われる。4間×1間分を確認したが、建物西部の柱穴が調査区外に存在すると考えられるので、建物全体の規模は不明である。柱穴は直径16～26cm、深さ16～28cmで、ほぼ同規模の大きさをもつ柱穴が一直線に並ぶ。

SB04(第17図)

SB04は東側調査区の南側に位置し、SB02・03と重複しているが、切り合い関係は不明である。桁行方向がN80°Eでほぼ南北方向の側柱建物と思われる。3間×1間分を確認したが、建物西部の柱穴が調査区外に存在すると考えられるので、建物全体の規模は不明である。建物としてはやや歪な平面形を呈しているが、柱穴の覆土が同一であることにより掘立柱建物跡とした。柱穴は直径15～24cm、深さ12～32cmで、下端のレベルは一定ではない。

SB05(第18図)

SB05は東側調査区の南側に位置し、SB03と重複しているが、切り合い関係は不明である。桁行方向がN89°Wでほぼ南北方向の側柱建物と思われる。3間×2間分を確認したが、建物西部の柱穴が調査区外に存在すると考えられるので、建物全体の規模は不明であるが、やや東側に開く。柱穴は直径20～30cm、深さ6～32cmで、下端のレベルは一定ではない。



第17図　掘立柱建物跡（SB 01・02・03・04）実測図

SB08(第18図)

SB08は東側調査区の中央部に位置し、SB09と重複しているが、切り合い関係は不明である。桁行方向がN74°Wでほぼ南北方向の側柱建物と思われる。4間×1間分を確認したが、建物東部の柱穴が調査区外に存在すると考えられるので建物全体の規模は不明である。建物の主軸はSD01と平行しており、やや南東側に振れる。柱穴は直径20～28cm、深さ4～18cmで、下端のレベルは一定ではないが、ほぼ一直線に並ぶ。

SB09(第18図)

SB09は東側調査区の中央部に位置し、SB08と重複しているが、切り合い関係は不明である。桁行方向がN79°Wでほぼ南北方向の側柱建物と思われる。3間×1間分を確認したが、建物東部の柱穴が調査区外に存在すると考えられるので建物全体の規模は不明である。SB08と同様に建物の主軸はSD01と平行しており、やや南東側に振れるが、SB08との関係は不明である。柱穴は直径14～24cm、深さ6～32cmで、下端のレベルは一定ではない。

SB11(第18図)

SB11は東側調査区の中央部に位置し、SB13と重複しているが、切り合い関係は不明である。桁行方向がN85°Wでほぼ南北方向の側柱建物と思われる。2間×1間分を確認したが、建物東部の柱穴が調査区外に存在すると考えられるので建物全体の規模は不明である。建物の主軸はやや北西側に振れる。柱穴は直径14～28cm、深さ10～18cmで、下端のレベルは一定ではない。

SB13(第19図)

SB13は東側調査区の北側に位置し、SB11・SA04～06と重複しているが、切り合い関係は不明である。桁行方向がN15°Wでほぼ南北方向の側柱建物と思われるが、北東部の柱穴は撹乱されているため確認できず、3間×1間分を確認した。建物西部の柱穴が調査区外に存在すると考えられるので建物全体の規模は不明である。柱穴は直径28～40cm、深さ26～41cmで、下端のレベルは一定ではないが、ほぼ一直線に並ぶ。建物の主軸はSD01と平行している。

SB15(第19図)

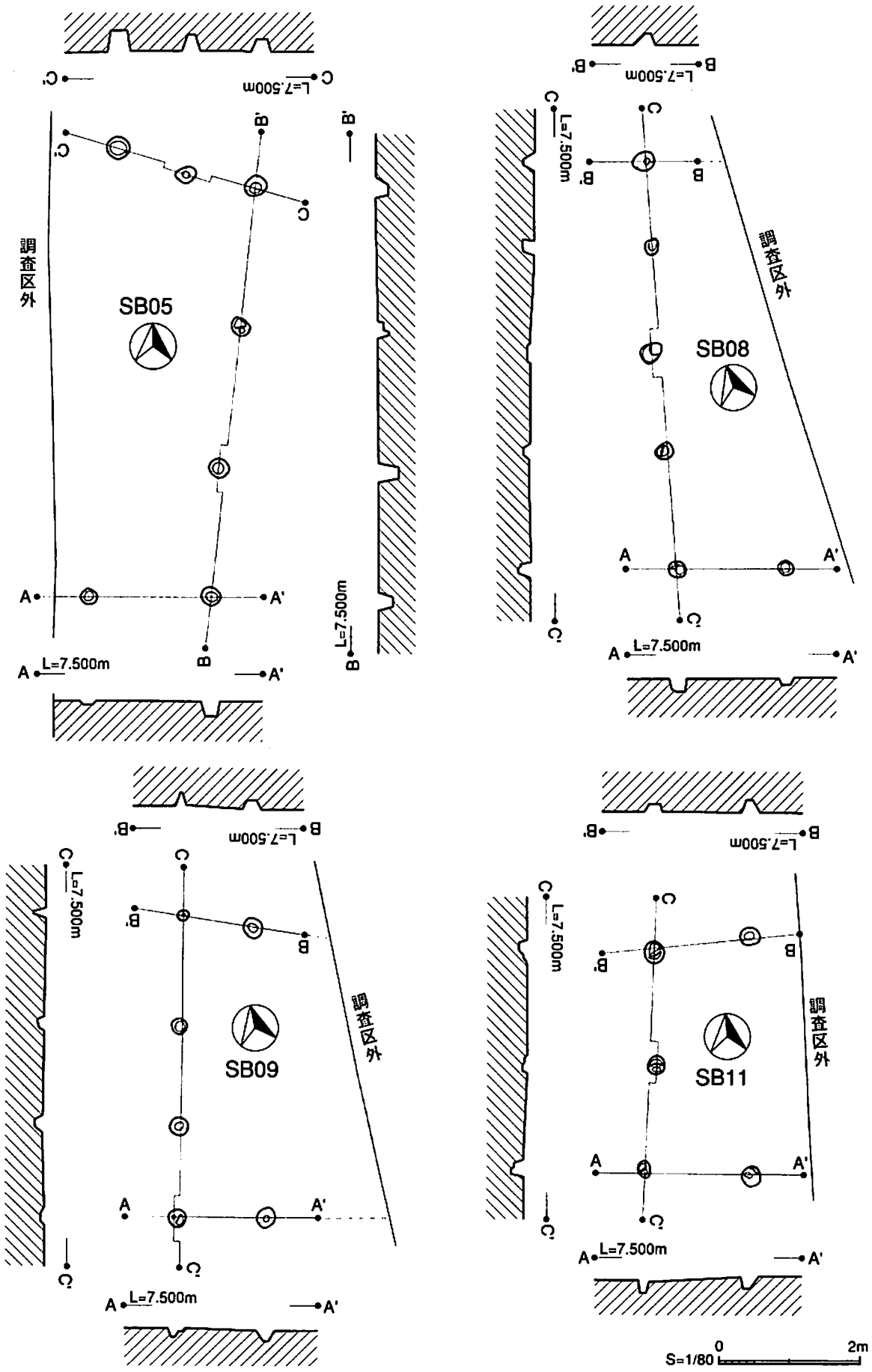
SB15は東側調査区の北側に位置し、SB16と重複しているが、切り合い関係は不明である。桁行方向がN70°Eでほぼ南北方向の側柱建物と思われる。2間×1間分を確認したが、建物東部の柱穴が調査区外に存在すると考えられるので建物全体の規模は不明である。建物の主軸はSB21とほぼ同一である。柱穴は直径14～24cm、深さ12～34cmで、下端のレベルは一定ではない。

SB16(第19図)

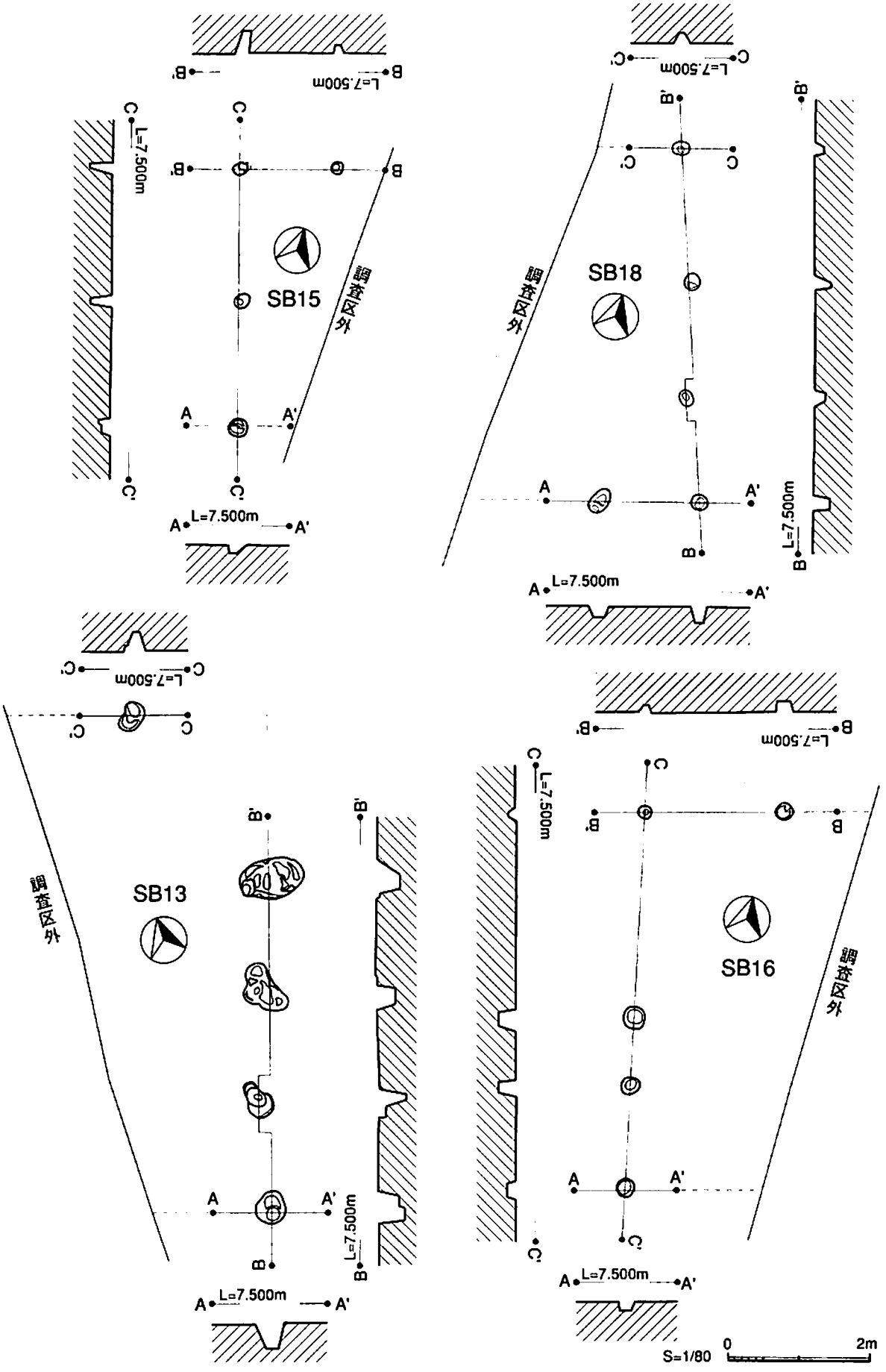
SB16は東側調査区の北側に位置し、SB15と重複しているが、切り合い関係は不明である。桁行方向がN76°Eでほぼ南北方向の側柱建物と思われる。北東部の柱穴は撹乱されていたため確認できないが、3間×1間分を確認した。建物西部の柱穴が調査区外に存在すると考えられるので、建物全体の規模は不明である。柱穴は直径16～32cm、深さ12～24cmで、下端のレベルは一定ではない。

SB18(第19図)

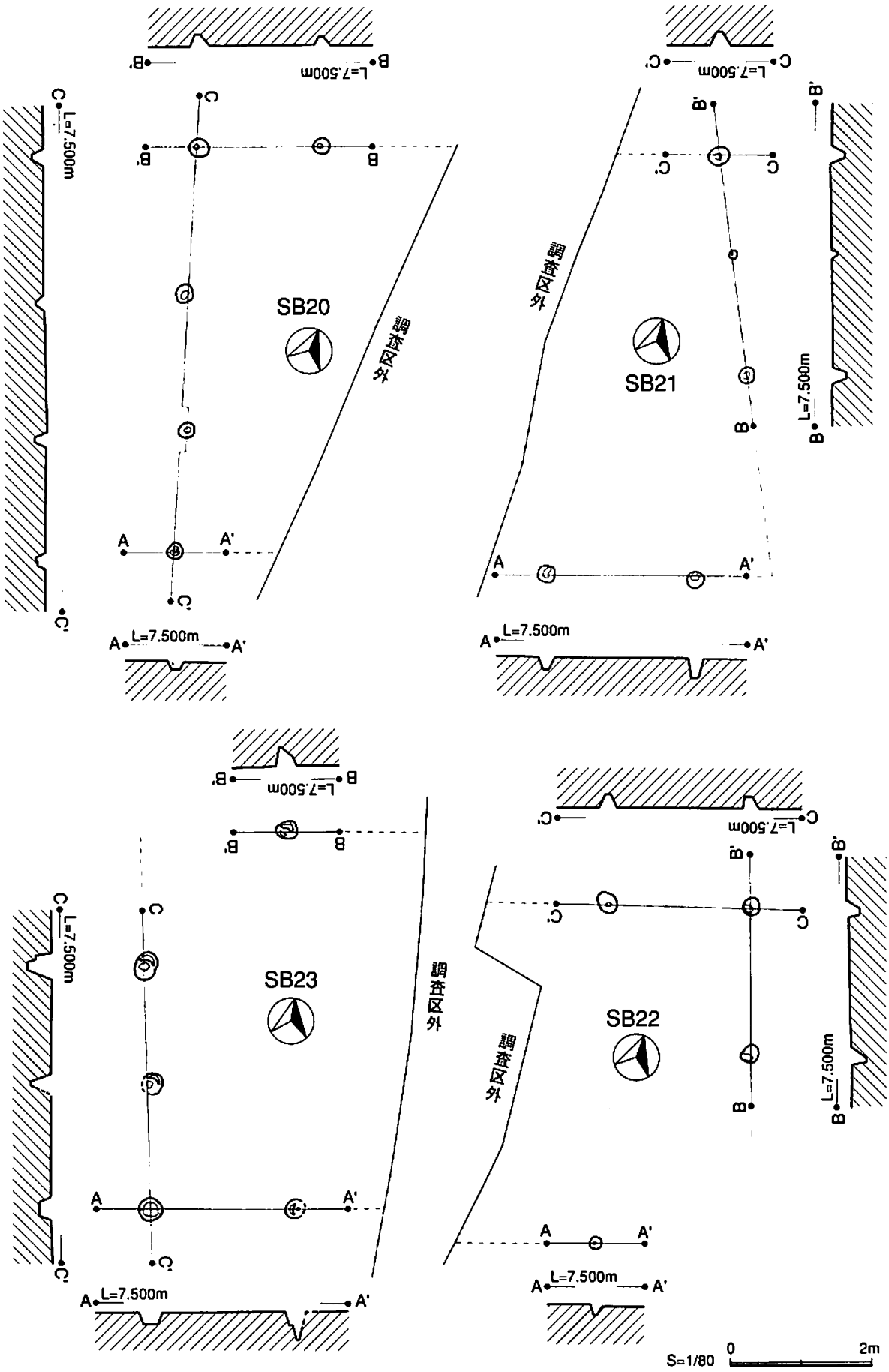
SB18は東側調査区の北側に位置し、SB21と重複しているが、切り合い関係は不明である。桁行方向がN68°Eでほぼ南北方向の側柱建物と思われる。南西部の柱穴は確認できないが、3間×1間分を確認した。建物西部の柱穴が調査区外に存在すると考えられるので、建物全体の規模は不明である。建物の主軸はSB22とほぼ同一である。柱穴は直径16～36cm、深さ14～24cmで、下端のレベルは一定ではない。



第18図　掘立柱建物跡（SB05・08・09・11）実測図



第19図　掘立柱建物跡（SB13・15・16・18）実測図



第20図　掘立柱建物跡（SB20・21・22・23）実測図

SB20(第20図)

SB20は東側調査区の北側に位置し、SB21・SA09・10と重複しているが、切り合い関係は不明である。桁行方向がN65°Eでほぼ南北方向の側柱建物と思われる。3間×1間分を検出したが、建物東部の柱穴が調査区外に存在すると考えられるので、建物全体の規模は不明である。柱穴は直径19～28cm、深さ12～18cmで、下端のレベルは一定ではない。

SB21(第20図)

SB21は東側調査区の北側に位置し、SB18・20・SA09・10と重複しているが、切り合い関係は不明である。桁行方向がN72°Eでほぼ南北方向の側柱建物と思われる。南東部の柱穴は撹乱によって確認できなかったが、2間×1間分を確認した。建物西部の柱穴が調査区外に存在すると考えられるので、建物全体の規模は不明である。柱穴は直径10～28cm、深さ8～28cmで、下端のレベルは一定ではない。

SB22(第20図)

SB22は東側調査区の北端で、SB21の北側に位置している。桁行方向がN70°Eでほぼ南北方向の側柱建物と思われる。1間×1間分を確認したが、建物の西部の柱穴が調査区外に存在すると考えられるので、建物全体の規模は不明である。建物の主軸は隣接するSB21とほぼ同一である。柱穴は直径22～24cm、深さ18～22cmである。

SB23(第20図)

SB23は西側調査区の北端に位置し、SB24・SA11～14と重複しているが、切り合い関係は不明である。桁行方向がN78°Eでほぼ南北方向の側柱建物と思われる。北西部の柱穴が撹乱によって確認できなかったが、2間×1間分を確認した。建物東部の柱穴は調査区外に存在すると考えられるので、建物全体の規模は不明である。柱穴は直径28～44cm、深さ18～42cmで、下端のレベルは一定ではないが、ほぼ一直線に並ぶ。

SB24(第21図)

SB24は西側調査区の北端に位置し、SB23と重複しているが、切り合い関係は不明である。桁行方向がN73°Eでほぼ南北方向の側柱建物と思われる。2間×1間分を確認したが、建物北西部の柱穴が調査区外に存在すると考えられるので建物全体の規模は不明である。建物の主軸はSB21とほぼ同一である。柱穴は直径16～26cm、深さ16～28cmで、下端のレベルは一定ではない。

SB25(第21図)

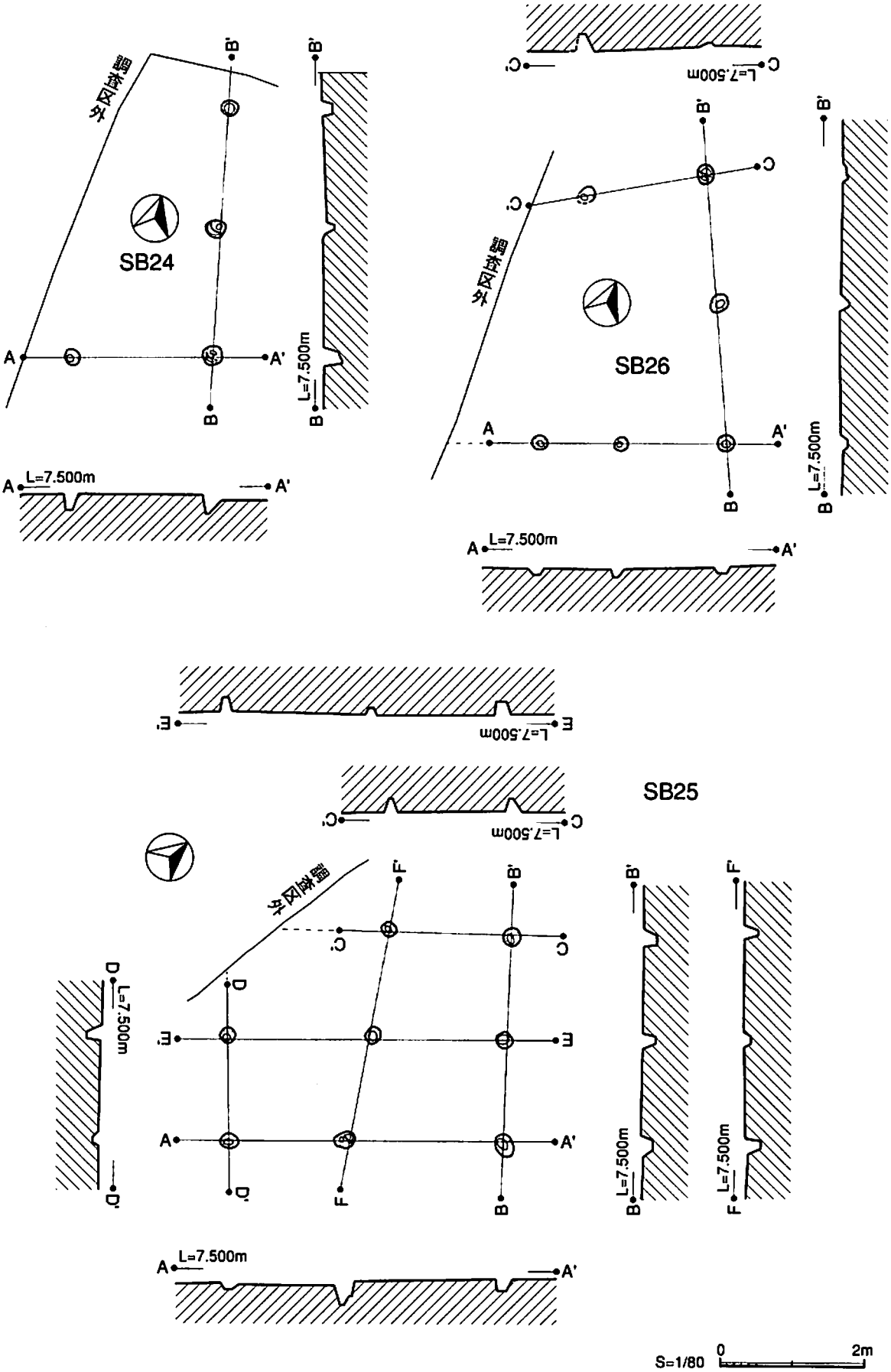
SB25は西側調査区の北側で、SB23の南側に位置している。2間×2間の総柱建物であるが南西側の柱穴が調査区外に存在すると考えられる。桁行方向はN51°Wでほぼ南北方向である。柱穴は直径16～28cm、深さ12～34cmで、下端のレベルは一定ではないが、ほぼ一直線に並ぶ。

SB26(第21図)

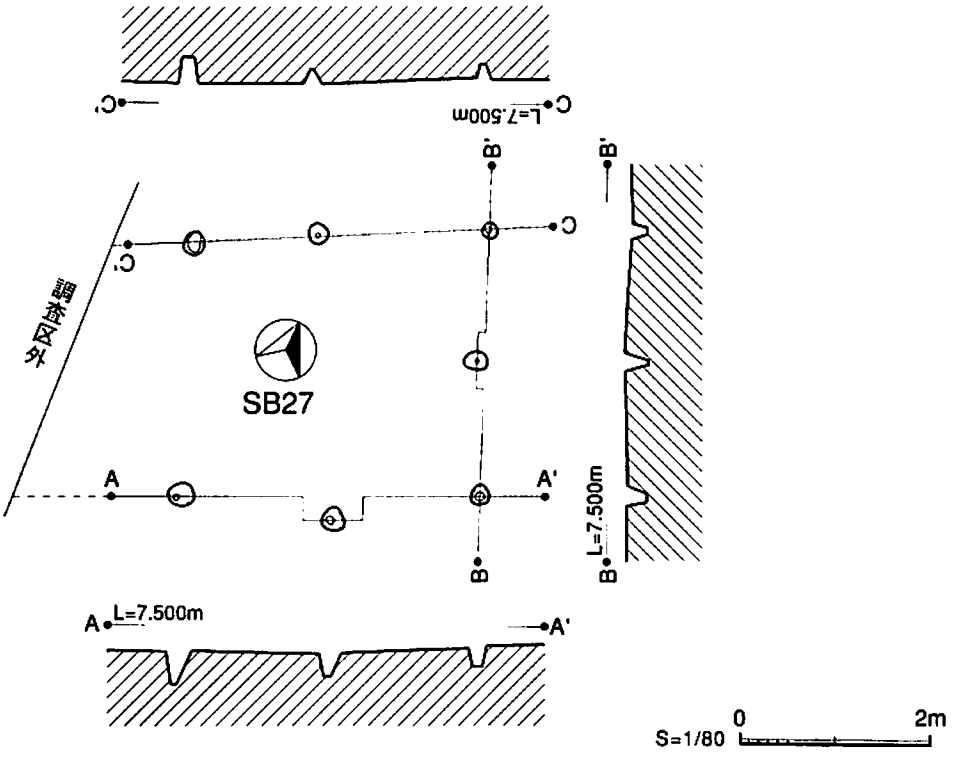
SB26は西側調査区の北側に位置し、SB27と重複しているが、切り合い関係は不明である。桁行方向がN64°Eでほぼ南北方向の側柱建物と思われる。2間×2間分を確認したが、建物西部の柱穴が調査区外に存在すると考えられるので建物全体の規模は不明である。建物の主軸はSB20とほぼ同一である。柱穴は直径16～32cm、深さ8～24cmで、下端のレベルは一定ではない。

SB27(第22図)

SB27は西側調査区の北側に位置し、SB26と重複しているが、切り合い関係は不明である。桁行方向がN65°Eでほぼ東西方向の側柱建物と思われる。2間×2間分を確認したが、建物東部の柱穴が調査区外に存在すると考えられるので、建物全体の規模は不明である。柱穴は直径14～28cm、深さ16～36cmで、下端のレベルは一定ではない。



第21図　掘立柱建物跡（SB24・25・26）実測図

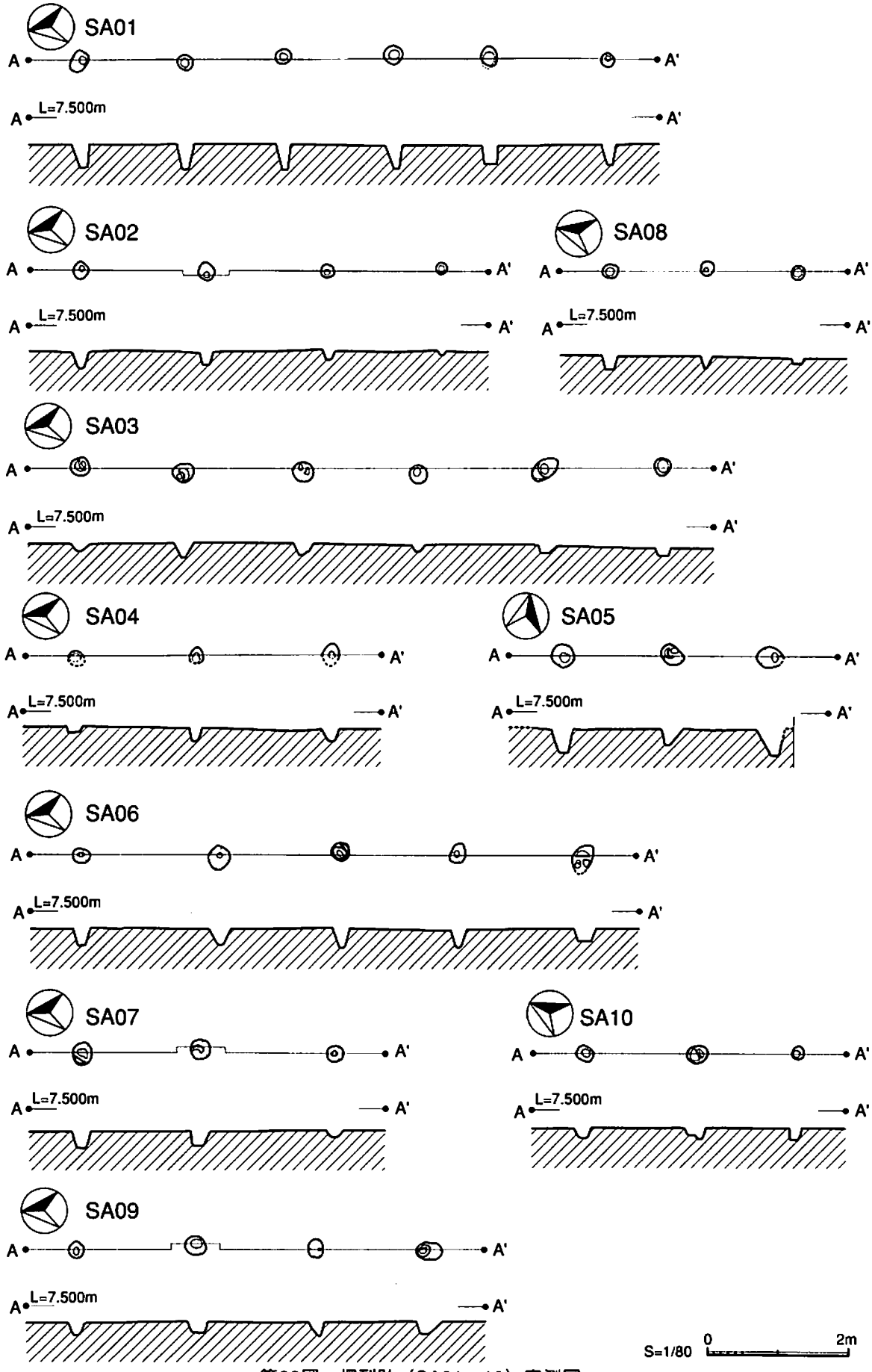


第22図　掘立柱建物跡（SB27）実測図

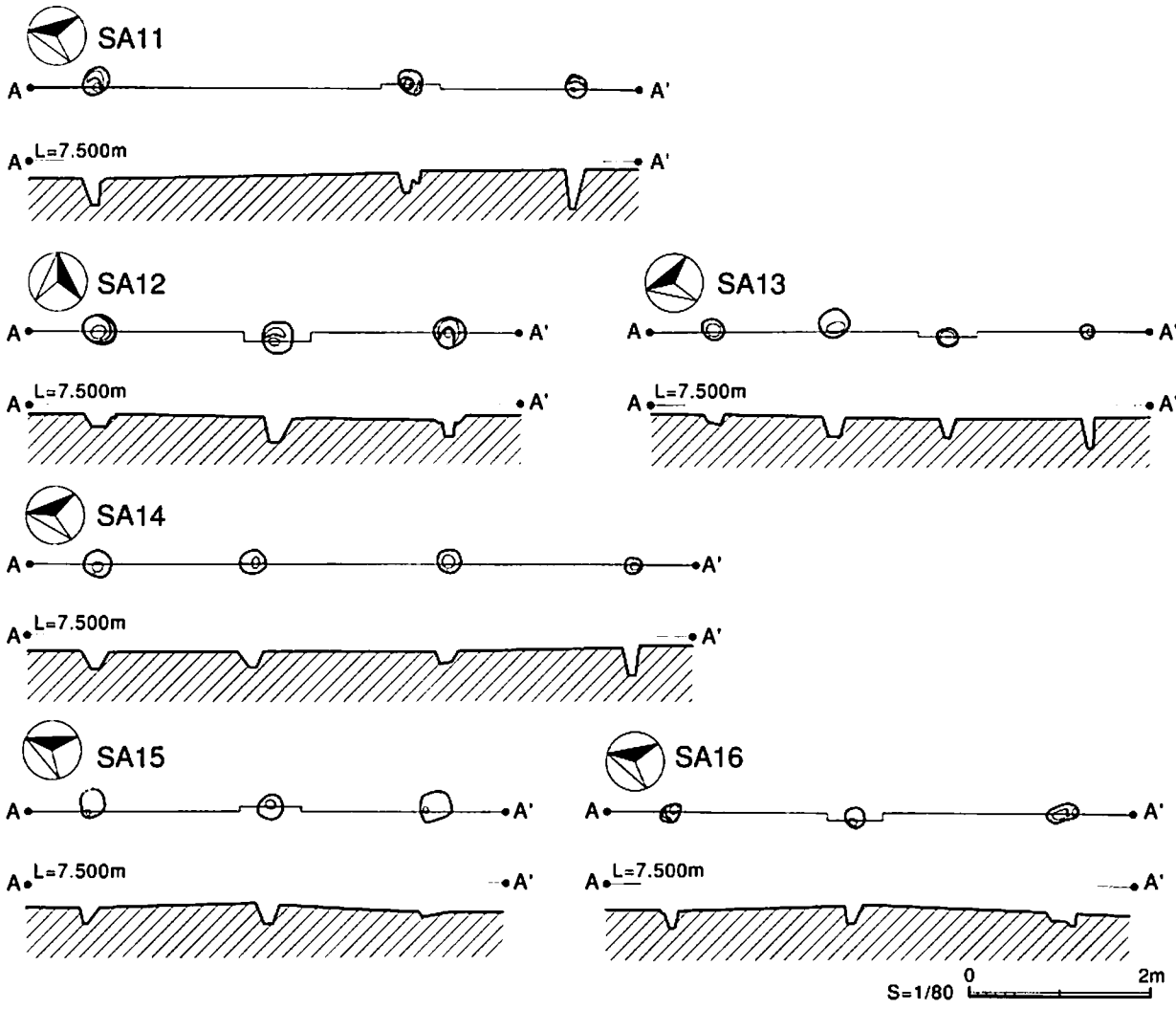
（寸法は検出面で計測したもの）

遺構番号	間数	桁長		梁長		建物の向き	型式	方位	桁行平均		梁行平均		柱穴直径	柱穴深さ
		m	尺	m	尺				m	尺	m	尺	cm	cm
SB01	(2)×2	(2.8)	(9.4)	2.7	9.0	東西	側柱	N 76° E	1.5	5.1	1.4	4.5	16～30	8～30
SB02	(2)×(2)	(3.5)	(11.5)	(1.5)	(5.0)	南北	側柱	N 80° E	1.7	5.7	1.5	5.0	18～24	16～24
SB03	4×(1)	6.6	21.8	(1.7)	(5.5)	南北	側柱	N 90°	1.7	5.5	1.7	5.5	16～26	16～28
SB04	3×(1)	4.4	14.5	(1.5)	(4.9)	南北	側柱	N 80° E	1.5	4.8	1.5	4.9	15～24	12～32
SB05	3×(2)	5.8	19.3	(2.1)	(6.9)	南北	側柱	N 89° W	1.9	6.4	1.3	4.3	20～30	6～32
SB08	4×(1)	5.9	19.3	(1.5)	(4.9)	南北	側柱	N 74° W	1.5	4.8	-	-	20～28	4～18
SB09	3×(1)	4.3	14.3	(1.1)	(3.6)	南北	側柱	N 79° W	1.4	4.8	1.1	3.6	14～24	6～32
SB11	2×(1)	3.2	10.6	(1.4)	(4.8)	南北	側柱	N 85° W	1.6	5.3	1.4	4.8	14～28	10～18
SB13	(3)×(1)	(4.7)	(15.6)	-	-	南北	側柱	N 15° E	1.5	5.2	-	-	28～40	26～41
SB15	2×(1)	3.7	12.1	(1.4)	(4.6)	南北	側柱	N 70° E	1.8	6.1	-	-	14～24	12～34
SB16	3×(1)	5.3	17.5	(1.9)	(6.3)	南北	側柱	N 76° E	-	-	-	-	16～32	12～24
SB18	3×(1)	5.0	16.6	(1.4)	(4.6)	南北	側柱	N 68° E	1.7	5.5	-	-	16～36	14～24
SB20	3×(1)	5.8	19.0	(1.7)	(5.7)	南北	側柱	N 65° E	1.9	6.3	-	-	19～28	12～18
SB21	(2)×(1)	(3.1)	(10.3)	(2.1)	(6.9)	南北	側柱	N 72° E	1.6	5.1	-	-	10～28	8～28
SB22	(1)×(1)	(2.1)	(6.9)	(2.0)	(6.5)	南北	側柱	N 70° E	-	-	-	-	22～24	18～22
SB23	(2)×(1)	(3.4)	(11.4)	(2.1)	(6.8)	南北	側柱	N 78° E	1.7	5.7	-	-	28～44	18～42
SB24	(2)×(1)	(3.5)	(11.6)	(2.0)	(6.5)	南北	側柱	N 73° E	1.8	5.8	-	-	16～26	16～28
SB25	2×2	3.8	12.5	2.8	9.3	南北	総柱	N 51° W	1.8	6.1	1.4	4.7	16～28	12～34
SB26	2×(2)	3.8	12.5	2.6	2.6	南北	側柱	N 64° E	1.9	6.3	1.4	4.7	16～32	8～24
SB27	(2)×2	(3.2)	(10.5)	2.8	9.3	東西	側柱	N 65° E	1.6	5.2	1.4	4.7	14～28	16～36

表9　小田2区SB計測表



第23図　柵列跡（SA01～10）実測図



第24図　柵列跡（SA11～16）実測図

(3) 柵列跡

SA01(第23図)

SA01は東側調査区の南側に位置し、SA02とほぼ並行している。柱列の軸はN6° Eで、確認できたのはほぼ南北に並ぶ6つの柱穴である。柱列の長さは7.5m(約24.6尺)で、柱穴は直径20～24㎝、深さ26～36㎝で、下端レベルは一定ではない。この柵列跡は南東部の掘立柱建物群に位置している。

SA02(第23図)

SA02は東側調査区の南側に位置し、SA01に隣接している。柱列の軸はN5° Eで、確認できたのはほぼ南北に並ぶ4つの柱穴である。柱列の長さは5.1m(約16.8尺)で、柱穴は直径10～22㎝、深さ8～20㎝で、下端レベルは一定ではない。この柵列跡は南東部の掘立柱建物群に位置している。

SA03(第23図)

SA03は東側調査区の中央部に位置し、SB13・SA05と重複している。柱列の軸はN5° Eで、確認できたのはほぼ南北に並ぶ6つの柱穴である。柱列の長さは8.3m(約27.4尺)で、柱穴は直径10～22㎝、深さ8～20㎝で、下端レベルは一定ではない。この柵列跡は北部の掘立柱建物群に位置し、SB11の掘立柱建物跡に伴う可能性が高い。

SA04(第23図)

SA04は東側調査区の中央部に位置し、SB13と重複している。柱列の軸はN1°Wで、確認できたのはほぼ南北に並ぶ3つの柱穴である。柱列の長さは3.6m(約12.0尺)で、柱穴は直径16～24cm、深さ8～20cmで、下端レベルは一定ではない。この柵列跡は北部の掘立柱建物群に位置し、SA03とほぼ並行して確認できたことから、SB11に伴う可能性が高い。

SA05(第23図)

SA05は東側調査区の中央部に位置し、SB13・SA03と重複している。柱列の軸はN81°Eで、確認できたのはほぼ東西に並ぶ3つの柱穴である。柱列の長さは3.0m(約9.8尺)で、柱穴は直径28～36cm、深さ24～36cmで、下端レベルは一定ではない。この柵列跡は北部の掘立柱建物群に位置し、SA04とほぼ垂直に位置する形で確認された。この柵列跡と並行しているSB15・16との関連が考えられる。

SA06(第23図)

SA06は東側調査区の北側に位置し、SB13と重複しているが、切り合い関係は不明である。柱列の軸はN5°Eで、確認できたのはほぼ南北に並ぶ5つの柱穴である。柱列の長さは7.2m(約23.6尺)で、柱穴は直径24～30cm、深さ18～30cmで、下端レベルは一定ではない。この柵列跡は北部の掘立柱建物群に位置し、SA04の北側に伸びる延長上で確認された。

SA07(第23図)

SA07は東側調査区の南側に位置し、柱列の軸はN5°Eで、確認できたのはほぼ南北に並ぶ3つの柱穴である。柱列の長さは3.6m(約11.7尺)で、柱穴は直径20～24cm、深さ8～24cmで、下端レベルは一定ではない。この柵列跡は北部、南東部の掘立柱建物群のどちらにも属さない遺構だが、柱列の軸の方向からSA01・02との関連性が考えられる。

SA08(第23図)

SA08は東側調査区の南端に位置し、SB01と重複している。柱列の軸はN17°Eで、確認できたのはほぼ南北に並ぶ3つの柱穴である。柱列の長さは2.6m(約8.7尺)で、柱穴は直径14～20cm、深さ8～20cmで、下端レベルは一定ではない。この柵列跡は南東部の掘立柱建物群に位置している。

SA09(第23図)

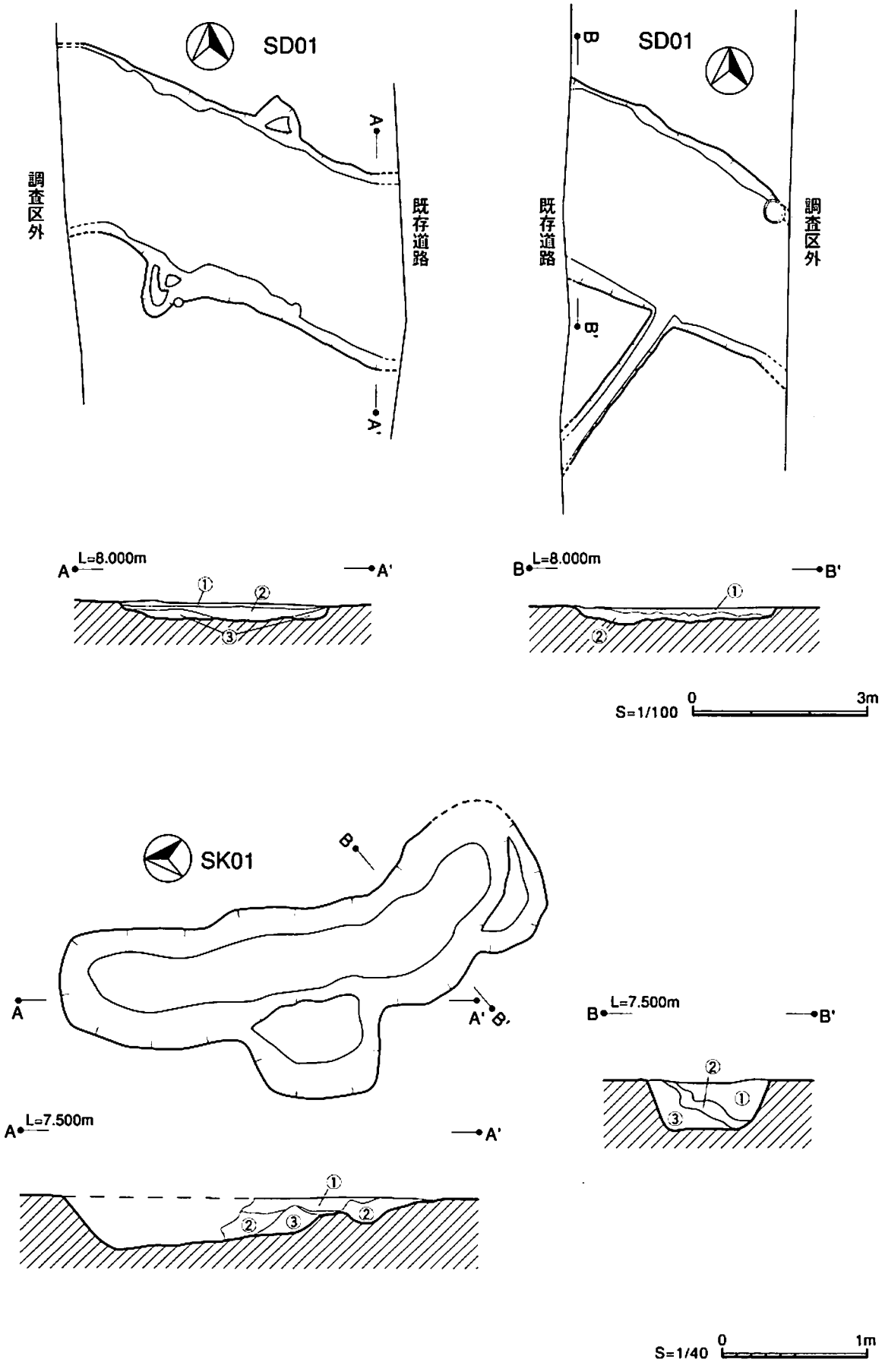
SA09は東側調査区の北側に位置し、SB20・21と重複している。柱列の軸はN4°Eで、確認できたのはほぼ南北に並ぶ4つの柱穴である。柱列の長さは5.0m(約16.4尺)で、柱穴は直径19～40cm、深さ16～20cmで、下端レベルは一定ではない。この柵列跡は北部の掘立柱建物群に位置している。

SA10(第23図)

SA10は東側調査区の北側に位置し、SB20と重複している。柱列の軸はN28°Wで、確認できたのはほぼ南北に並ぶ3つの柱穴である。柱列の長さは3.0m(約9.8尺)で、柱穴は直径16～28cm、深さ16～18cmで、下端レベルは一定ではない。この柵列跡は北部の掘立柱建物群に位置し、SB18・22の掘立柱建物跡に伴うものと考えられる。

SA11(第24図)

SA11は西側調査区の北端に位置し、SB23・SA13と重複している。柱列の軸はN13°Wで、確認できたのはほぼ南北に並ぶ3つの柱穴である。柱列の長さは5.3m(約17.4尺)で、柱穴は直径20～24cm、深さ26～44cmで、下端レベルは一定ではない。この柵列跡は北部の掘立柱建物群に位置しており、その配置から未検出のSB22の掘立柱建物跡に伴うものと考えられる。



第25図　溝跡（SD01）・土坑（SK01）実測図

SA12(第24図)

SA12は西側調査区の北側の掘立柱建物群に位置し、SB23と重複している。柱列の軸はN90°で、確認できたのはほぼ東西に並ぶ3つの柱穴である。柱列の長さは3.9m(約12.8尺)で、柱穴は直径22～32cm、深さ16～22cmで、下端レベルは一定ではない。この柵列跡はSA11に対してほぼ垂直な方向で確認できたが、関連性は不明である。

SA13(第24図)

SA13は西側調査区の北側の掘立柱建物群に位置し、SB23・SA11と重複している。柱列の軸はN11°Wで、確認できたのはほぼ南北に並ぶ4つの柱穴である。柱列の長さは4.1m(約13.6尺)で、柱穴は直径13～24cm、深さ12～34cmで、下端レベルは一定ではない。

SA14(第24図)

SA14は西側調査区の北側の掘立柱建物群に位置し、SB23・SA12・13と重複している。柱列の軸はN4°Wで、確認できたのはほぼ南北に並ぶ4つの柱穴である。柱列の長さは6.0m(約19.7尺)で、柱穴は直径16～28cm、深さ14～34cmで、下端レベルは一定ではない。

SA15(第24図)

SA15は西側調査区の北側に位置し、柱列の軸はN21°Wで、確認できたのはほぼ南北に並ぶ3つの柱穴である。柱列の長さは3.7m(約12.3尺)で、柱穴は直径20～24cm、深さ6～22cmで、下端レベルは一定ではない。

SA16(第24図)

SA16は西側調査区の北側に位置し、柱列の軸はN16°Wで、確認できたのはほぼ南北に並ぶ3つの柱穴である。柱列の長さは4.4m(約14.5尺)で、柱穴は直径18～32cm、深さ14～20cmで、下端レベルは一定ではない。SA15とほぼ並行した位置に確認されたことから、この2つの柵列跡は関連性が考えられる。

(4) 溝跡

SD01(第25図)

SD01は西側調査区と東側調査区の北側に跨って位置する溝で、東側では一部が南に細く伸びている。西側部分は長軸6.30m以上、短軸3.00m、東側部分は長軸4.00m以上、短軸2.90m以上を測り、深さはともに0.30mを測る。この溝跡は北部の掘立柱建物群のほぼ中央に位置しているが、建物群との関連性は不明である。

(5) 土坑

SK01(第25図)

SK01は東側調査区の南側に位置し、長軸3.46m、短軸1.32m、深さ0.32mを測り、平面形は不整の長楕円形、断面形は略台形を呈している。覆土は①～③層に分層できる。

SK03(第26図)

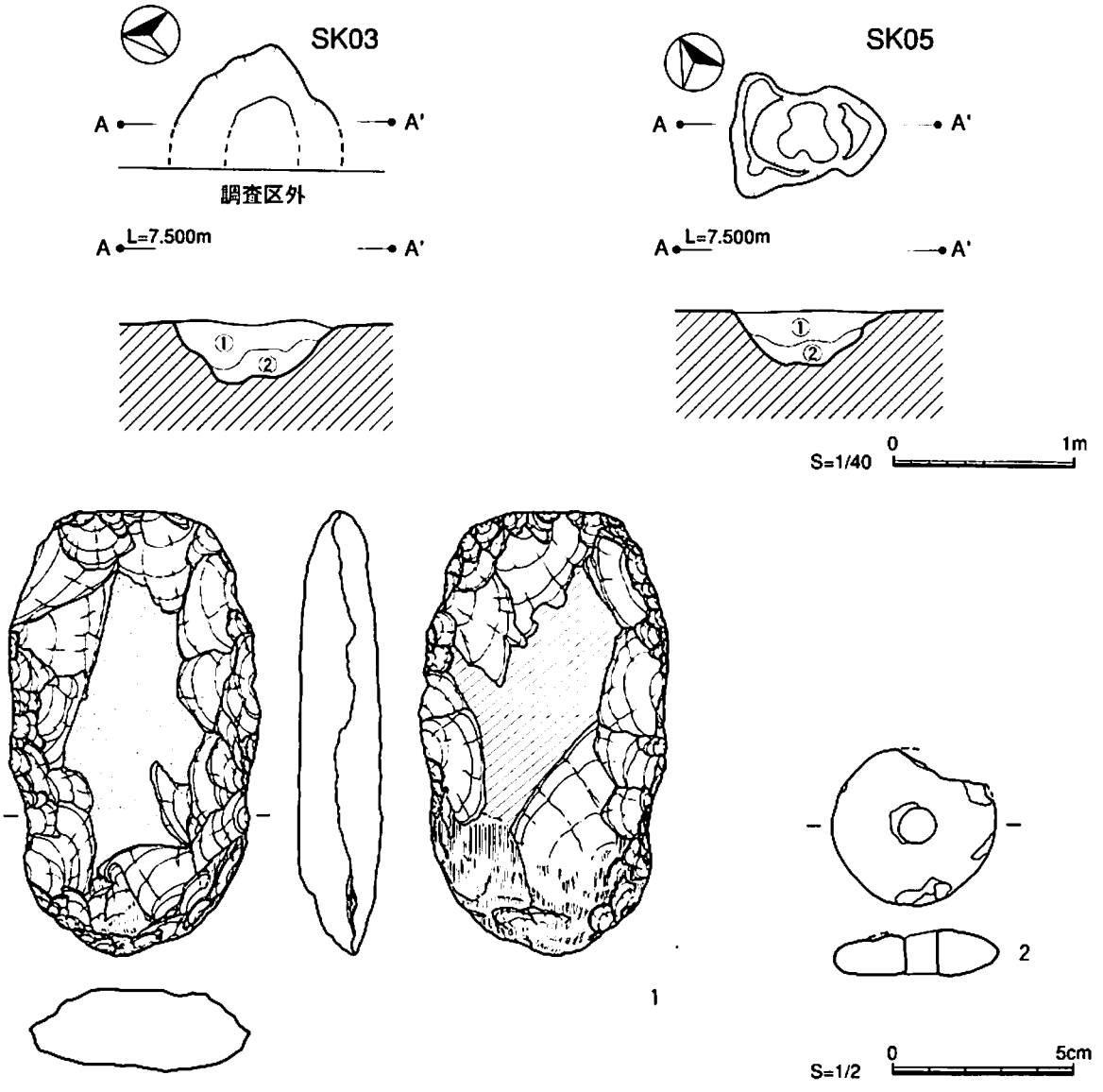
SK03は東側調査区の南側に位置し、西部は調査区外に存在していると思われる。長軸0.93m、短軸0.47m以上、深さ0.34mを測り、平面形は略円形、断面形は浅い皿状を呈している。覆土は①・②層に分層できる。

SK05(第26図)

SK05は西側調査区の中央部に位置し、長軸0.84m、短軸0.48m、深さ0.31mを測り、平面形は不整形、断面形は浅い皿状を呈している。覆土は①・②層に分層できる。

(6) その他

この調査区では遺物の出土量が少なく、2点図示した(第26図参照)。



第26図　土坑（SK03・05）実測図及び2区出土遺物実測図

（寸法は検出面で計測したもの）　　（単位：m）

遺構名	遺構番号	長軸	短軸	深さ	備　考
竪穴住居跡	SI01	3.21～	1.26～	0.05	SI06を切る
	SI02	3.95～	3.30～	0.05	
	SI03	2.95～	0.92～	0.05	
	SI06	2.55～	2.35～	0.08	SI01に切られる、貯蔵穴
	SI08	2.30～	2.15～	0.06	SI09・SI10に切られる
	SI09	3.50	2.95～	0.09	SI08・SI10を切る
	SI10	4.15	3.27～	0.10	SI09に切られる
溝跡	SD01(西)	6.30～	3.00	0.30	
	SD01(東)	4.00～	2.90～	0.30	
土坑	SK01	3.46	1.32	0.32	
	SK03	0.93	0.47～	0.34	
	SK05	0.84	0.48	0.31	

表10　小田2区検出遺構一覧表

遺構番号	層位	特　徴
SI01	①層	暗灰褐色土。
SI02	①層	灰褐色土と暗黄褐色土の混土(7:3)。
SI03	①層	暗灰褐色粘質土。
SI06	①層	暗褐色土。
	②層	暗灰褐色土。
SI08	①層	暗褐色土。
SI09	①層	暗褐色土。
	②層	暗黄褐色粘質土。鉄分を少量含む。
SI10	①層	灰褐色土。弱いしまりあり。
SD01	①層	暗灰褐色土。しまりあり。土師器小片を含む。
	②層	暗灰褐色土。弱い粘性あり。マンガン、鉄分を少量含む。
	③層	灰褐色粘質土。マンガン、鉄分、ブロック状淡黄褐色土を少量含む。
SK01	①層	基本土層Ⅲ層とⅣ層の混土で、ブロック状灰色土が灰褐色土と混在。橙色の焼土のような粒と黒褐色の鉄分、マンガンが密集している。
	②層	①層より灰褐色土の割合が多い。
	③層	地山の灰褐色土より橙色味を帯びる。粘性あり。灰色土が小さなブロックで混じる。
SK03	①層	灰色の強い粘性のある土に基本土層Ⅳ層（地山）が混じる土。黒褐色の鉄分、マンガンを少量含む。
	②層	①層とほぼ同じ土質で、2cm前後のブロック状の基本土層Ⅳ層を少量含むが、①層よりⅣ層の割合は少ない。
SK05	①層	明灰褐色土。基本土層Ⅲ層がベース。強いしまりあり、強い粘性あり。マンガン、鉄分を含む。
	②層	暗灰褐色土。①層とほぼ同じ土質だが、①層より粘性があり黒色土を多く含む。マンガン、鉄分を含む。

表11　小田2区検出遺構土層注記表

第４節　上小田宮の前１区の調査

1．遺構分布(第27図)

上小田宮の前1区は全調査区の北端に位置し、南北約50ｍ×東西約６ｍの細長い調査区で既存道路の西側に設定した。広さは281㎡である。この調査区で検出した遺構は、竪穴住居跡2棟、溝跡4条、土坑6基、流路1条である。

遺構の分布状況を見ると、調査区の中央部から南東側にかけて竪穴住居跡(SI101・102)が分布している。溝跡は南北方向に2条と東西方向に2条を検出しているが、出土遺物の状況から近現代に属するものと認定した。調査区の北側から南東側に土坑(SK101・102・103・104・107・108)の分布が見られる。調査区の北側に流路を1条確認することができた。

2．遺構・遺物

各遺構・遺物の詳細は第28図～34図・表12・13のとおりである。以下は各遺構を概観する。

(1) 竪穴住居跡

SI101(第28図)

SI101は調査区の中央部に位置し、近現代の溝に切られており、平面プランははっきりしない。ただ炉の配置から推測すると東西方向にやや長い、ほぼ方形を呈した住居跡と考えられる。長辺は軸上で3.50m以上、短辺は軸上で3.40mを測る。検出面から床面までの深さは最大0.10mである。柱穴は検出できなかった。炉跡は住居跡のほぼ中央部に1基検出され、貯蔵穴は住居跡の南側の壁際に1基検出された。

住居跡の覆土は上面を削平され保存状態は良好でないため、1層しか確認できなかった。

SI102(第28図)

SI102は調査区の南東側に位置し、住居東部は調査区外に存在すると思われ、平面プランははっきりしない。長辺は軸上で3.00m以上、短辺は軸上で2.20m以上を測る。検出面から床面までの深さは最大0.12mである。住居跡の構造は不明である。

(2) 土坑

SK101(第29図)

SK101は調査区の北側に位置し、長軸1.03m、短軸1.01m、深さ0.30mを測り、平面形は略円形、断面形は台形を呈している。覆土は①～③層に分層できる。

SK102(第29図)

SK102は調査区の北側に位置し、長軸1.07m、短軸0.74m、深さ0.35mを測り、平面形は楕円形、断面形は台形を呈している。覆土は①～③層に分層できる。

SK103(第29図)

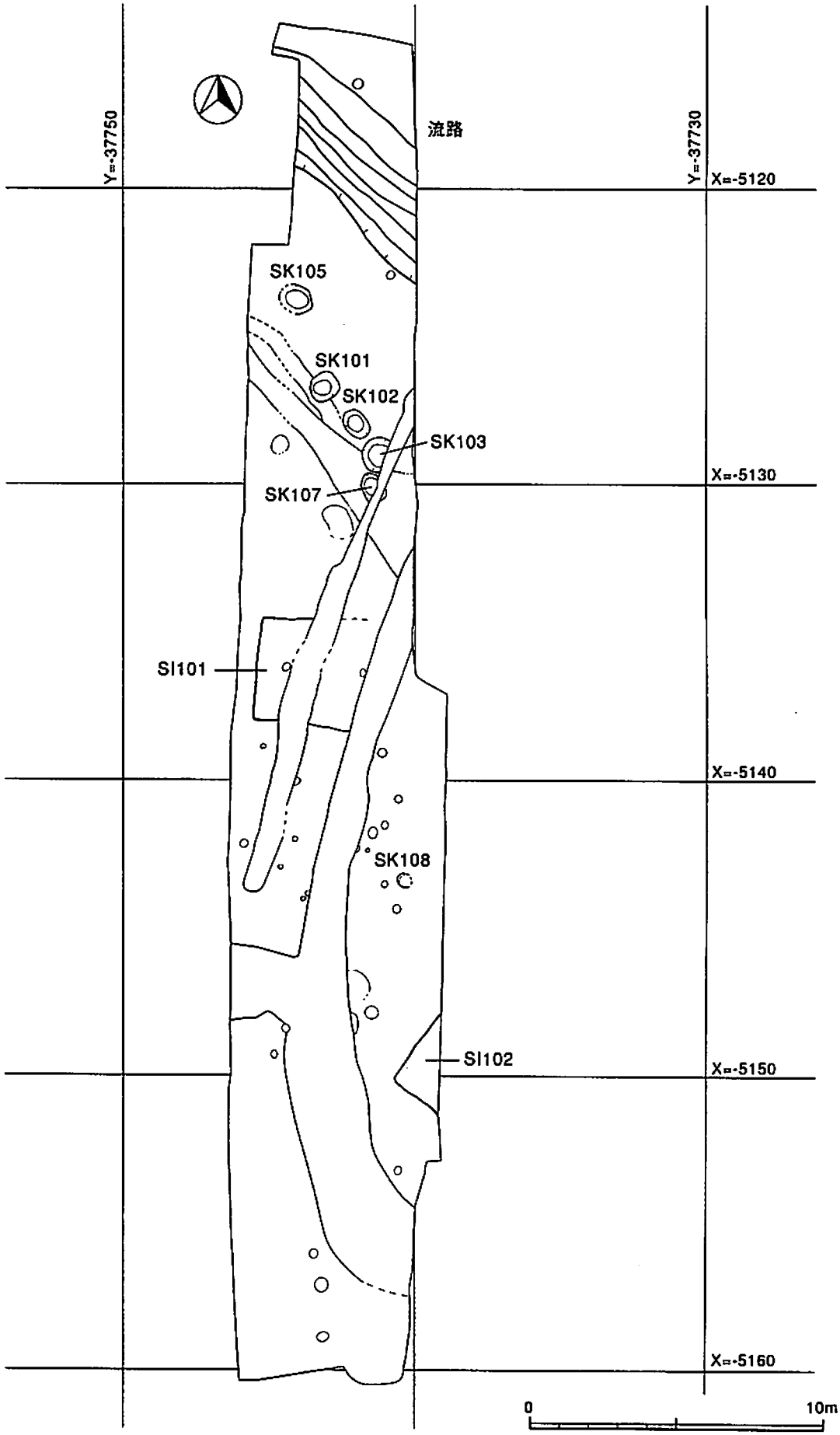
SK103は調査区の北側に位置し、近現代に属する溝跡に切られている。長軸1.20m、短軸1.18m、深さ0.36mを測り、平面形は円形、断面形は台形を呈している。覆土は①～③層に分層できる。

SK105(第29図)

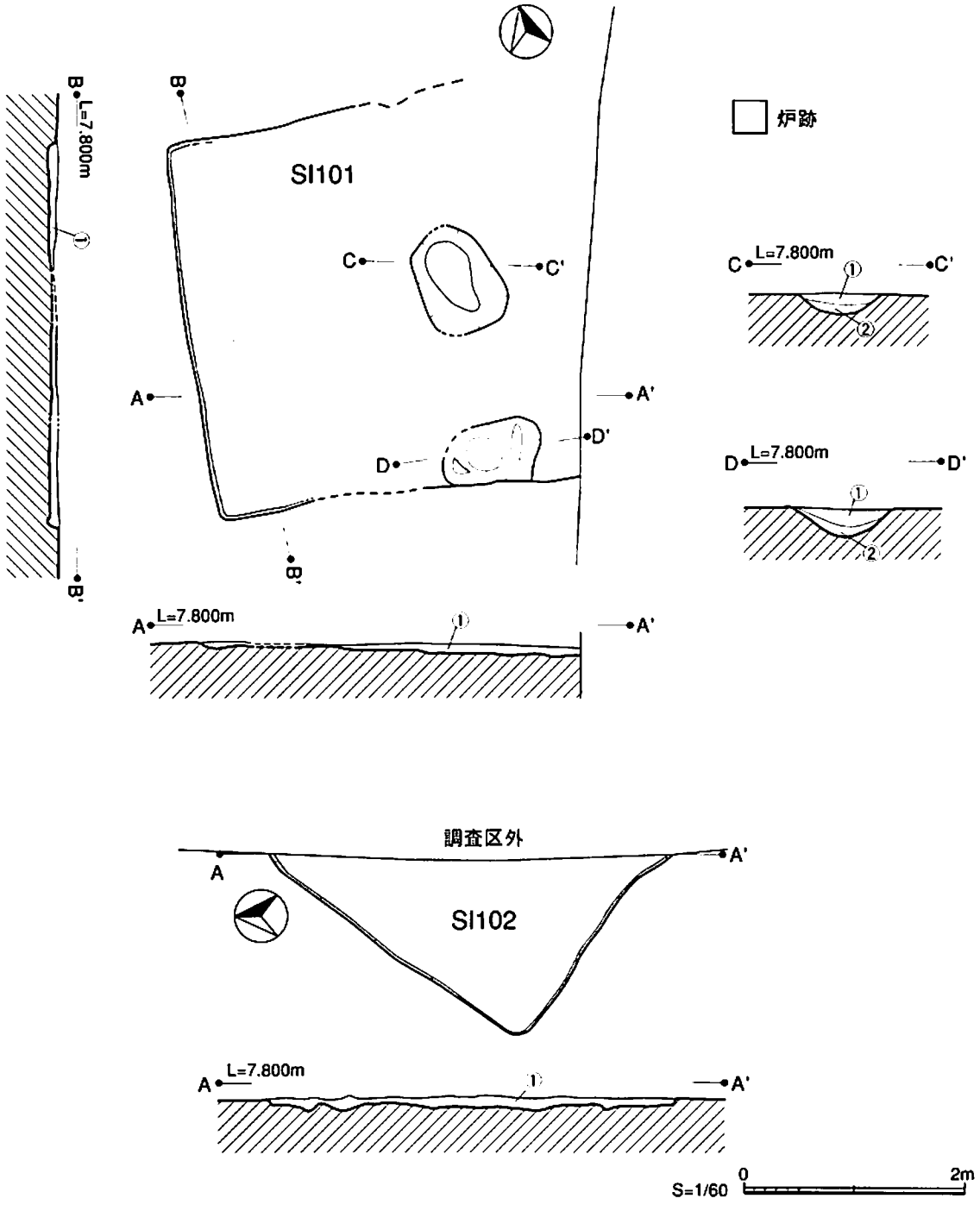
SK105は調査区の北側に位置し、長軸0.60m以上、短軸0.96m、深さ0.28mを測り、平面形は略円形、断面形は台形を呈している。覆土は①・②層に分層できる。

SK107(第29図)

SK107は調査区の北側に位置し、近現代に属する溝跡に切られている。長軸1.04m、短軸0.71m、深さ0.15mを測り、平面形は楕円形、断面形は浅い皿状を呈している。覆土は①・②層に分層できる。



第27図　上小田宮の前1区遺構配置図（S=1/200）



第28図　竪穴住居跡（SI101・102）実測図

（寸法は検出面で計測したもの）　　（単位：m）

遺構名	遺構番号	長軸	短軸	深さ	備　考
竪穴住居跡	SI101	3.50～	3.40～	0.10	近現代の溝に切られる、炉・貯蔵穴
	SI102	3.00～	2.20～	0.12	
土坑	SK101	1.03	1.01	0.30	
	SK102	1.07	0.74	0.35	
	SK103	1.20	1.18	0.36	
	SK105	0.60～	0.96	0.28	
	SK107	1.04	0.71	0.15	
	SK108	0.34～	0.48	0.16	遺物出土

表12　上小田宮の前1区検出遺構一覧表

SK108(第29図)

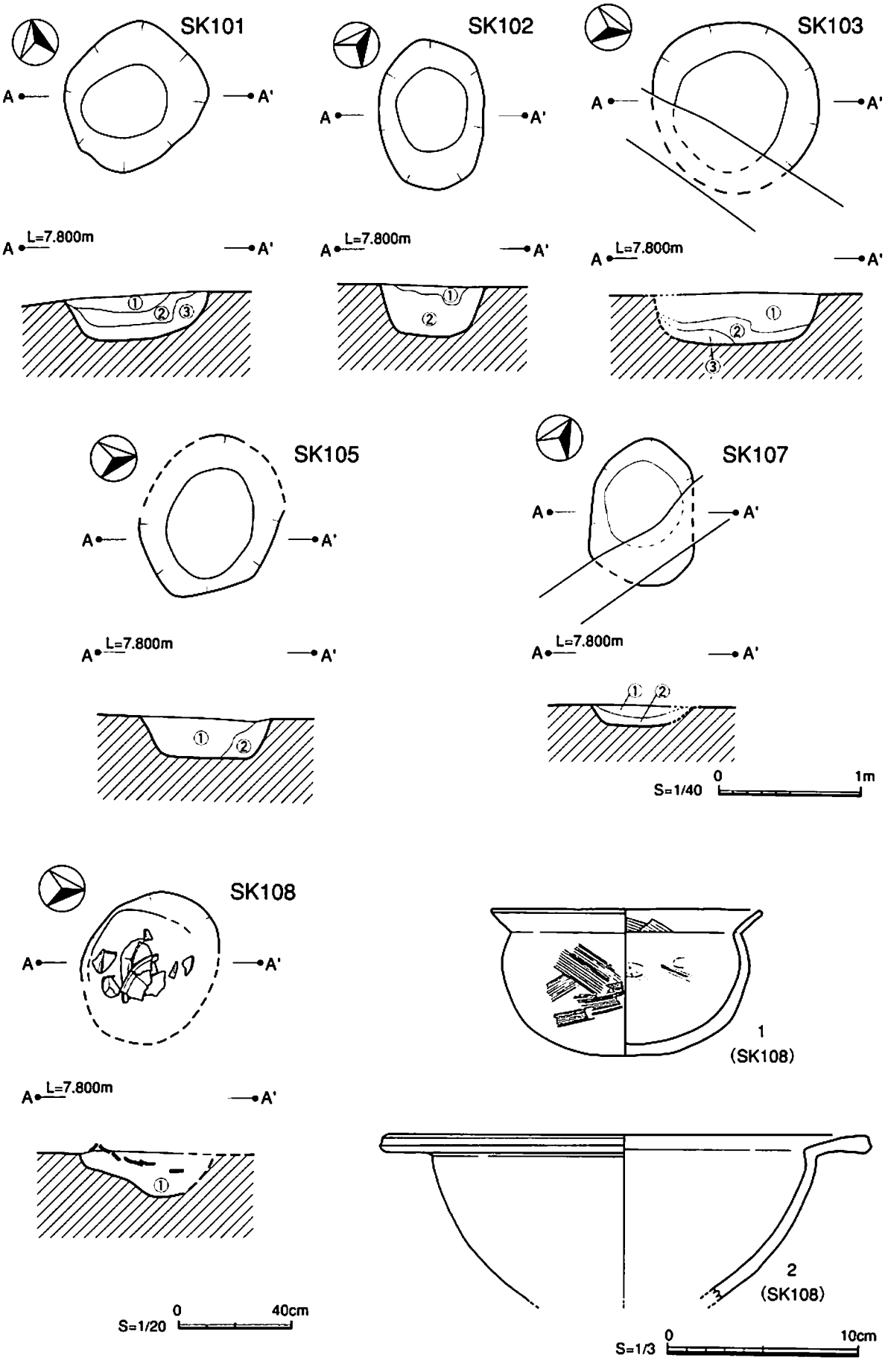
SK108は調査区の中央部南側に位置し、長軸0.34m以上、短軸0.48m、深さ0.16mを測る。平面形は円形、断面形は皿状であり、南西側部分は段掘りになっている。覆土は①層のみである。この土坑からは底部から浮いた状態で遺物が出土している。

1・2はこの土坑から出土した遺物である。1は鉢で、頸部の屈曲を強調するもので、外器面をハケ目とナデで丁寧に調整を施している。2は丹塗りの高杯形土器の杯部である。外器面はハケ目調整後丹塗り、内器面は横ナデ調整後丹塗りが施されている。口縁部の形態から、須玖Ⅱ式土器の特徴がうかがえる。

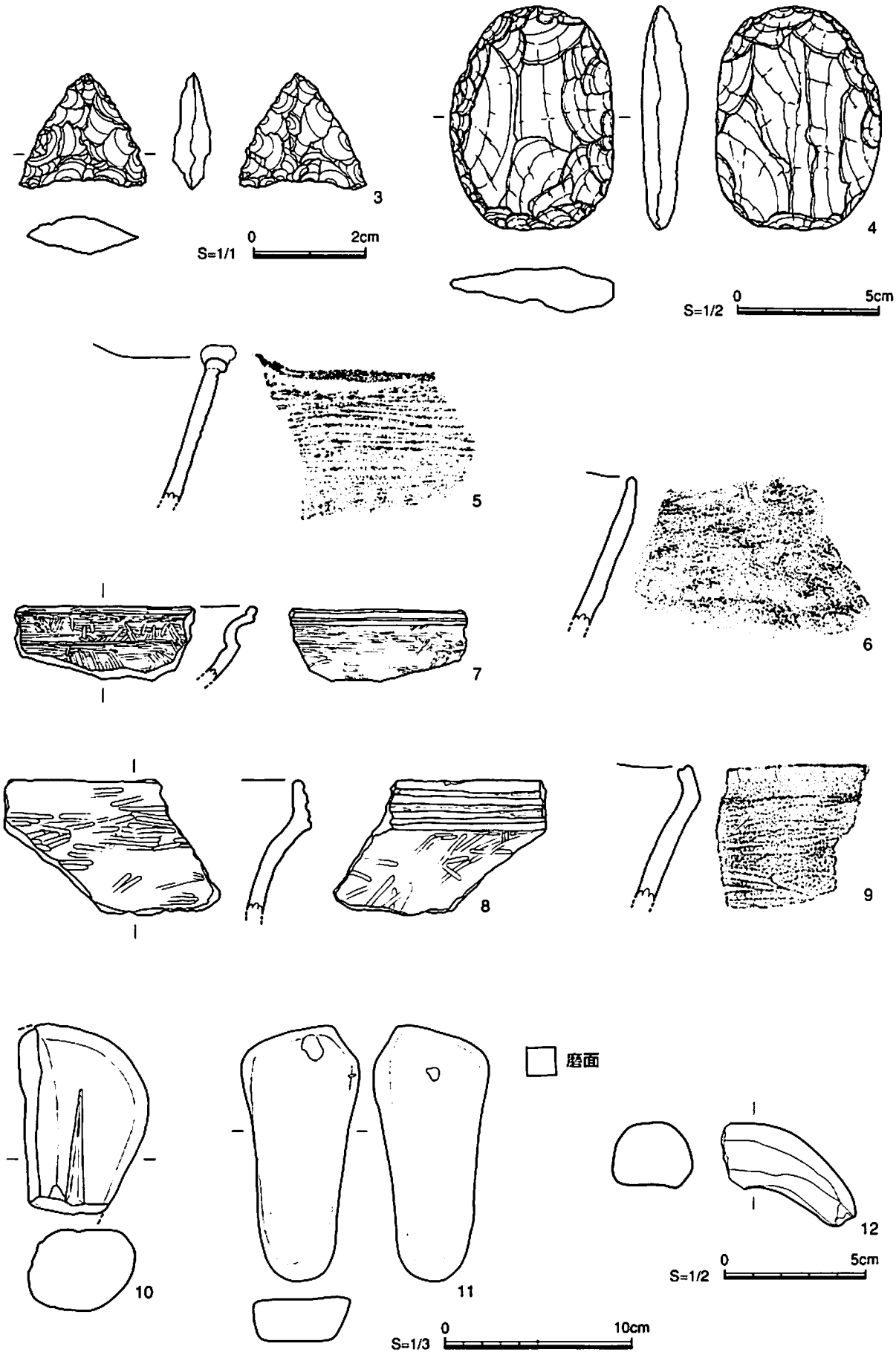
(3) 流路(第27図参照)

流路は調査区北側に位置している。長軸5.7m以上、短軸5.6m以上、深さ1.4m以上を測るが、流路北部が調査区外に存在するため、全体の規模は不明である。流路の堆積土は砂質土と粘質土の交互堆積を見せたが湧水が激しく、断面図作成を断念した。この流路からは上層部で弥生土器・青銅製の鏡が出土し、下層になるほど自然流木や種子等が多量に出土し、その中から完形に近い縄文土器が出土した。

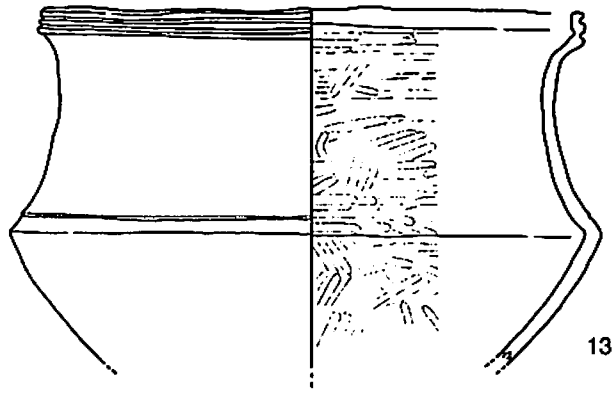
第30図～34図はこの流路から出土した遺物である。5～9、13～17、27・28は縄文土器である。5は鉢で、口縁部が波状で、黒川式土器の特徴をうかがえる。6・8・9・13～17・28は深鉢である。14は外器面に分厚いススの付着が見られる。15は外器面に吹きこぼれの痕が残り、内器面には有機物の炭化物の付着が見られる。16は波状口縁で、磨消縄文を施している。17は内器面に有機物の炭化物の付着が見られる。7・27は浅鉢の口縁部で、口縁帯に1条の沈線が見られ、内外器面とも磨きを施している。12は土偶の腕部で、丁寧に磨きを施している。また赤色顔料が施されている。3・4・10・11、21～26は縄文時代の石器である。3・21は石鏃である。4・22は打製石斧である。23は敲石である。10・11・24は砥石で、比較的小型で敲石を転用した物も見られる。また10・24には、磨面に溝が見られる。25は輝石安山岩の石皿である。26は打製石斧で、短冊形を呈する。比較的小型で石包丁形石器の可能性が高い。19は木を削って作った丸木弓で、その材質はイヌガヤである。弓の端部に弦をつけるためなのか、削って刻みをつける簡単な加工が見られる。弓弭を装着したかは不明である。18・20は流路から出土した弥生時代の遺物である。20は壺形土器で、内外器面にハケ目の調整が残る。18は青銅製の内行花文鏡片である。割れ面を観察すると研磨が施されているため、意図的に割られた破鏡と考えられる。

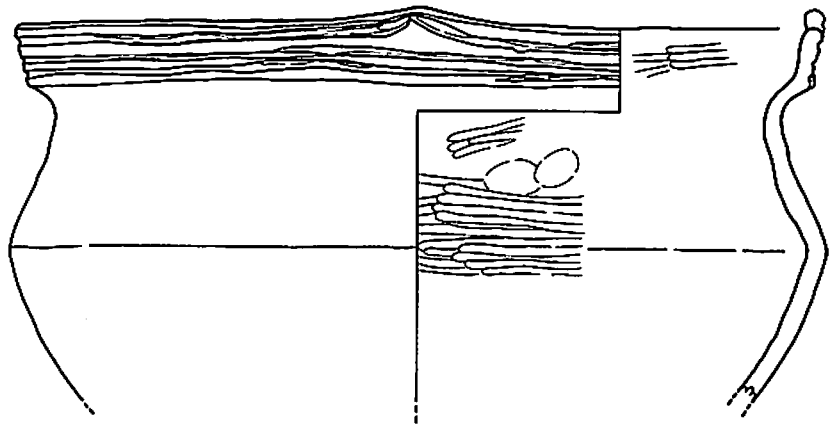


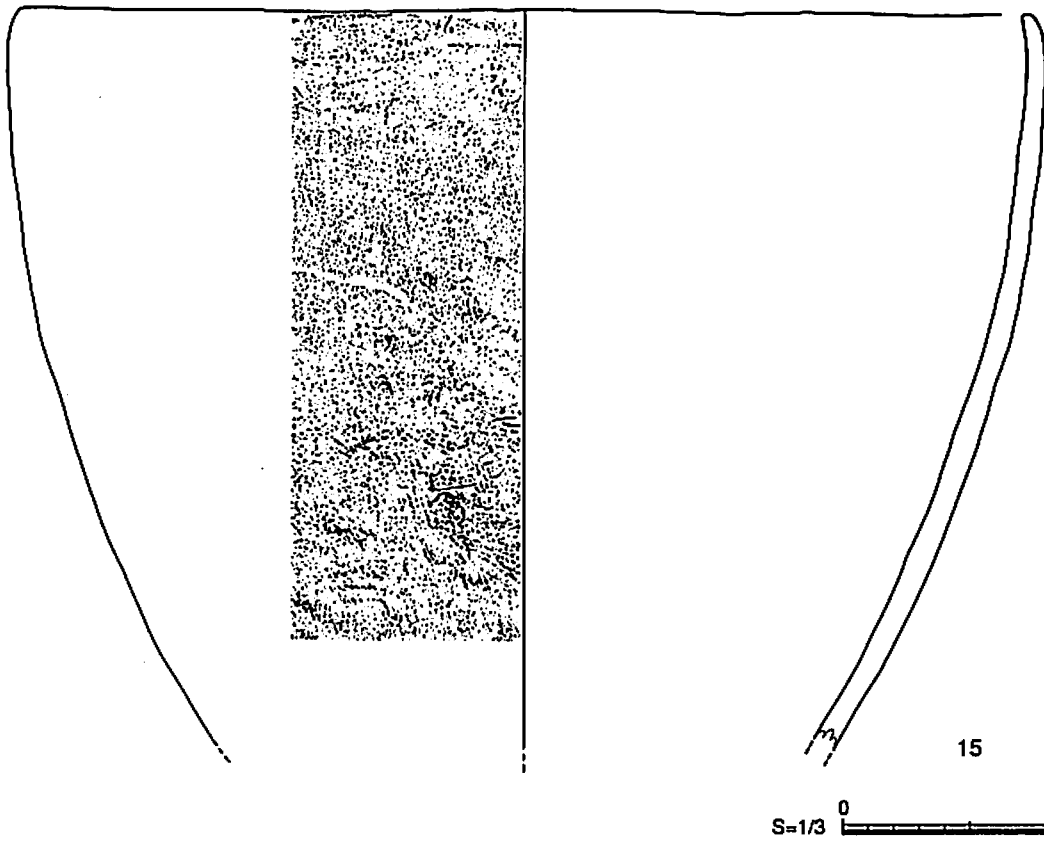
第29図　土坑（SK101・102・103・105・107・108）実測図及び出土遺物実測図



第30図　1区出土遺物実測図（1）

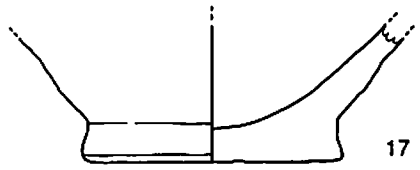






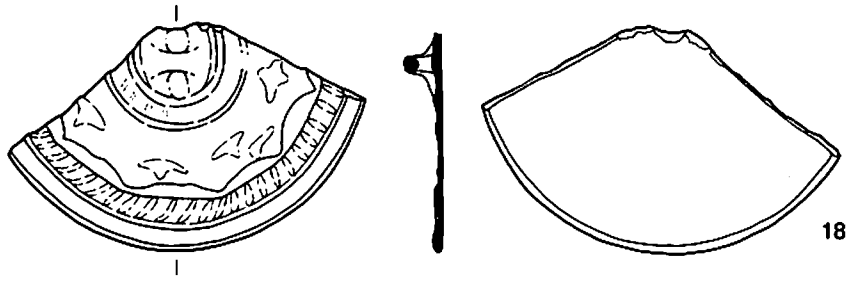
第31図　1区出土遺物実測図（2）

16



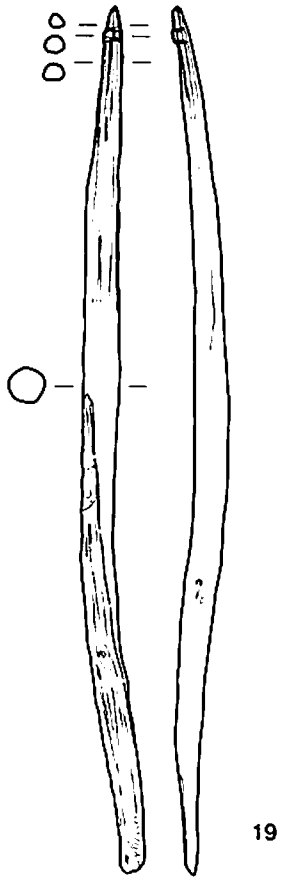
17

0　10cm
S=1/3

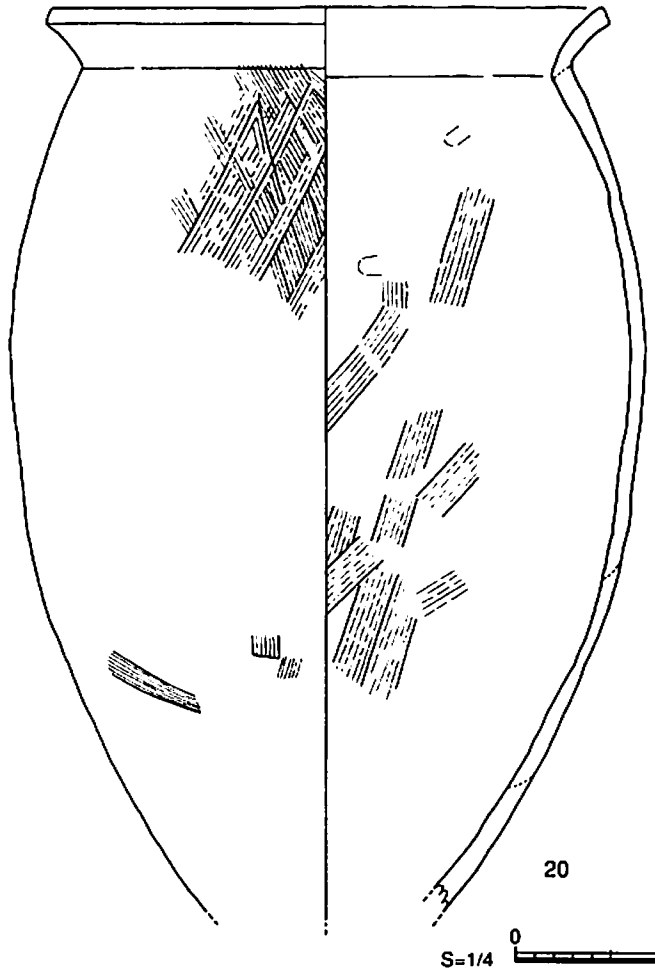


18

0　3cm
S=1/1



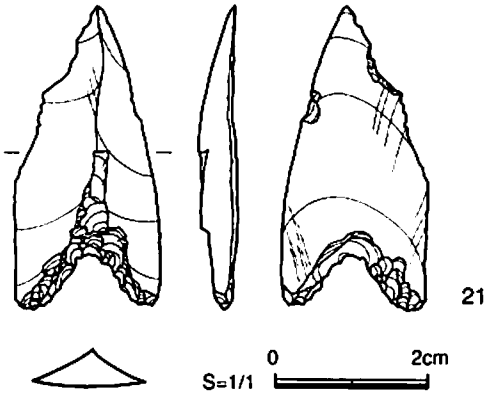
19

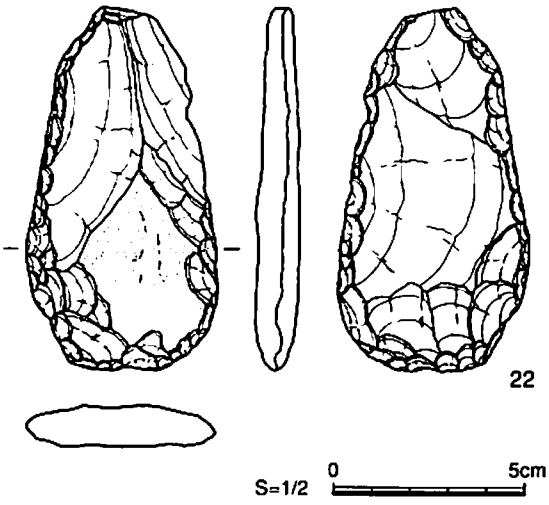


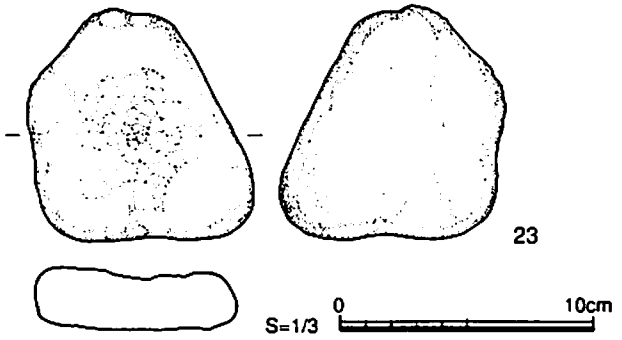
20

0　10cm
S=1/4

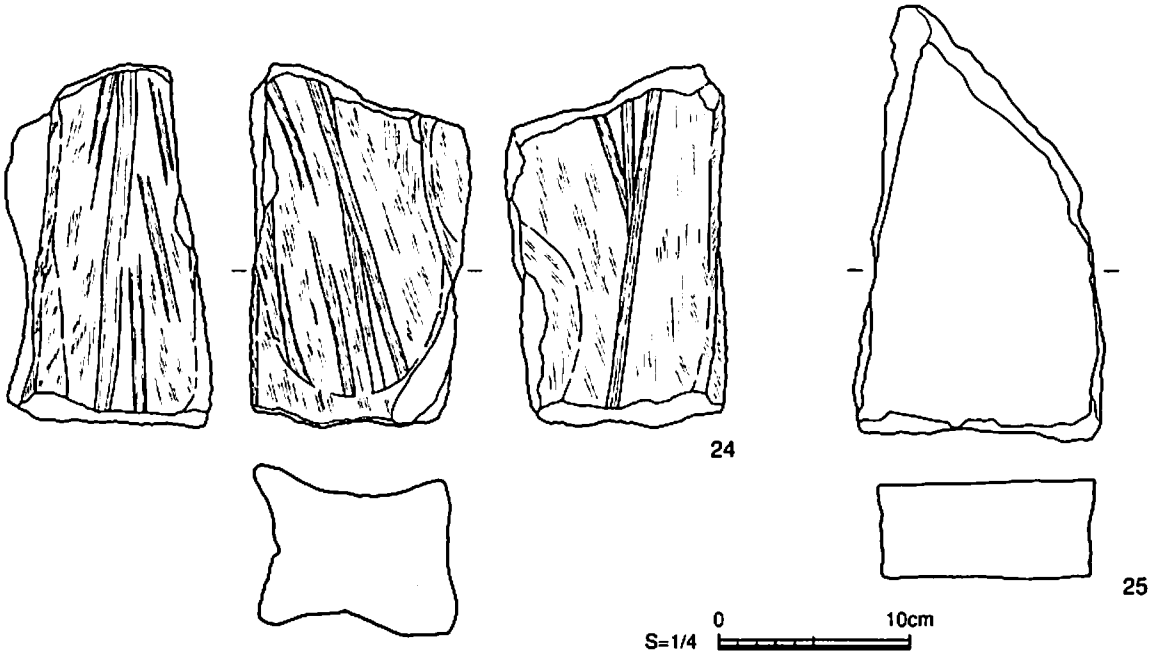
第32図　1区出土遺物実測図（3）

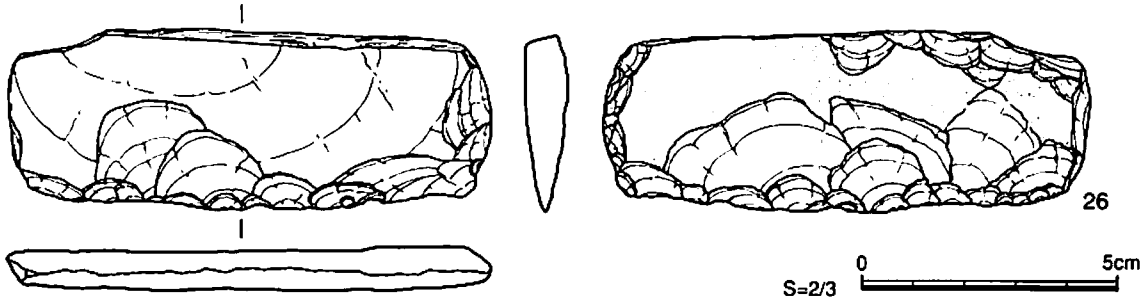




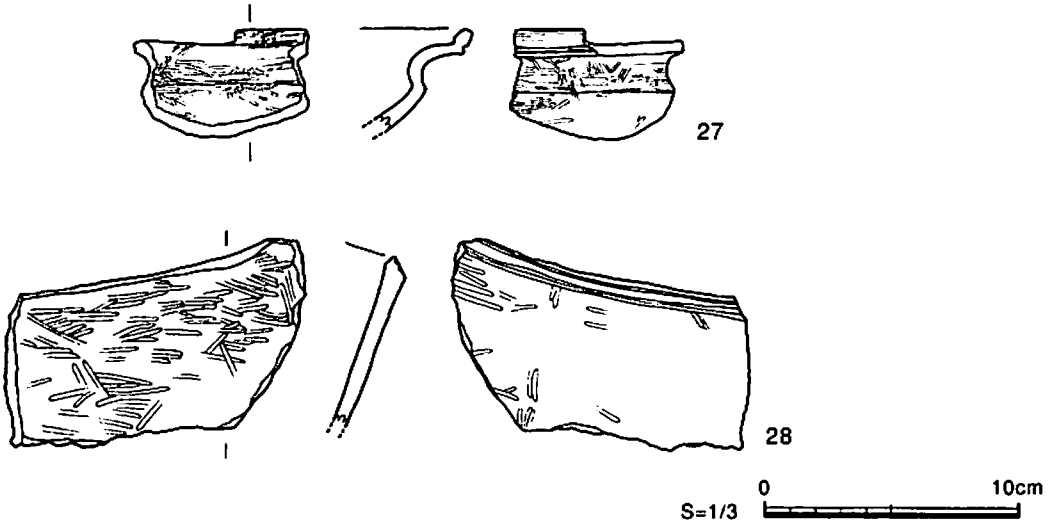


磨面





第33図　1区出土遺物実測図（4）



第34図　1区出土遺物実測図（5）

遺構番号	層位	特　徴
SI101	①層	暗褐色土と暗茶褐色土の混土。
SI101〔炉跡〕(C-C')	①層	暗灰褐色弱粘質土と暗褐色土が混在(6:4)。炭化物、マンガン粒が微量に混入。
	②層	灰褐色弱粘質土に1～2cmのマンガン粒が中量混入。
SI101〔貯蔵穴〕(D-D')	①層	暗褐色土に鉄分、炭化物が微量に混入。
	②層	暗褐色土に明褐色土が混在(6:4)。
SI102	①層	暗茶褐色土にⅥ層土ブロック、鉄分が中量混入。
SK101	①層	灰色粘質土と橙褐色砂質土が混在（7:3)。1～3mm程度のマンガンが中量沈殿。
	②層	①層に暗褐色砂質土が混在（4:3:3)。1～5mm程度のマンガンが中量沈殿。
	③層	灰色強粘質土に1cm程度の黄褐色土粒が少量混入。
SK102	①層	灰色粘質土と橙褐色砂質土が混在（7:3)。1～3mm程度のマンガンが少量沈殿。
	②層	灰色強粘質土と橙褐色砂質土が混在（8:2)。
SK103	①層	灰色粘質土と橙褐色砂質土が混在（6:4)。やや砂性。
	②層	暗褐色粘質土と黄褐色土が混在（5:5)。砂を帯びる。
	③層	灰色粘土に橙褐色を微量に含む。
SK105	①層	灰色粘質土と橙褐色砂質土が混在（6:4)。
	②層	橙褐色砂質土、灰色粘質土、明黄色土が混在（6:2:2)。
SK107	①層	暗灰褐色土に5mm～1cm大のカーボンが少量混入する。弱い粘性あり。
	②層	茶褐色土と暗灰褐色粒が混在する。やや砂質土。
SK108	①層	明灰黄色土。

表13　上小田宮の前1区検出遺構土層注記表

第５節　上小田宮の前２区・４区の調査

１．遺構分布(第35図)

上小田宮の前2区は、南北約50ｍ×東西約8ｍの細長い調査区で、既存道路の西側に設定した。広さは307㎡である。上小田宮の前4区は、南北約50ｍ×東西約2ｍ～14ｍのＬ字形の調査区で既存道路の東側に設定した。面積は248㎡である。第5節では、二つの調査区に渡って広がる遺構があるため、合わせて表記する。調査区で検出した遺構は掘立柱建物跡1棟、溝跡2条、不明遺構2基である。

遺構の分布状況を見ると、調査区の南側に掘立柱建物跡(SB201)が位置している。溝跡(SD201・401)はSB201の北側に位置し、調査区の2区から4区にかけて広がりを見せる。溝跡(SD402)は4区の北側に位置する。

２．遺構

各遺構の詳細は第36図～38図・表14～16のとおりである。以下は各遺構を概観する。

(1) 掘立柱建物跡

SB201(第36図)

SB201は2区の南端に位置し、桁行方向がN87°Wでほぼ東西方向の側柱建物と思われる。2間×2間分を確認したが、建物東部の柱穴が調査区外に存在すると考えられるので、建物全体の規模は不明である。柱穴は直径10～68㎝、深さ8～30㎝である。柱穴の下端のレベルは一定ではなく、段掘りになっている柱穴もある。

(2) 溝跡

SD201・401(第37図)

SD201は2区の南側に位置し、ほぼ東西に伸びる溝で、長軸6.30m以上、短軸1.10m、深さ0.90mを測る。SD401は4区の南側に位置し、長軸5.80m以上、短軸1.20m、深さ0.90mを測る。両端は調査区外に伸び、全体の規模は不明である。

これらの溝跡は調査区が異なるためそれぞれに遺構番号をつけていたが、その後の調査により同一の遺構であろうと考えられる。但し、整理の混乱を避けるため、調査時の遺構番号のままにしてある。

SD402(第37図)

SD402は4区の北側に位置し、ほぼ東西に伸びる溝である。長軸1.38m以上、短軸0.37m、深さ0.15mを測るが、西部は調査区外に伸び、東部の範囲は不明である。

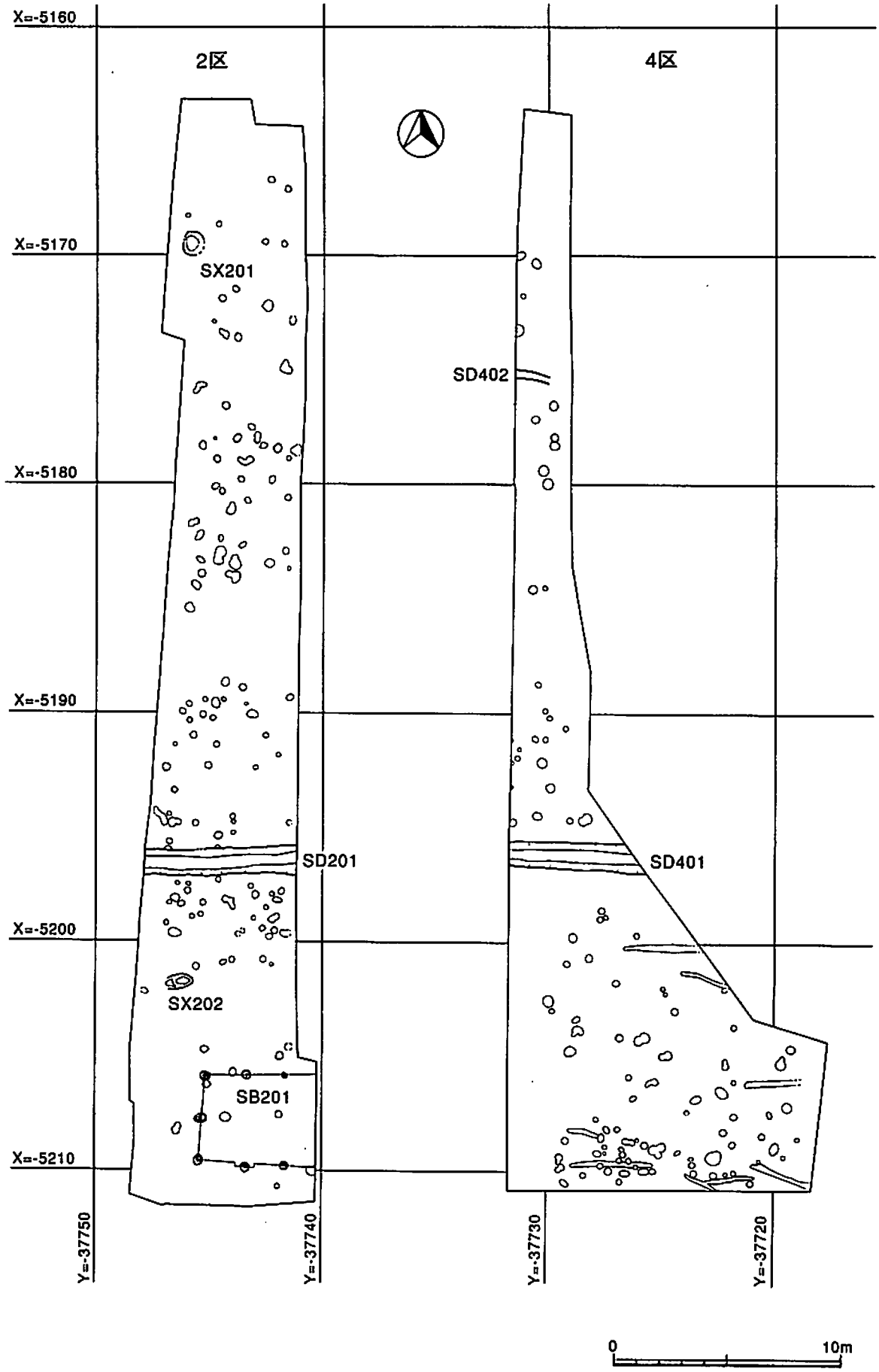
(3) 不明遺構

SX201(第38図)

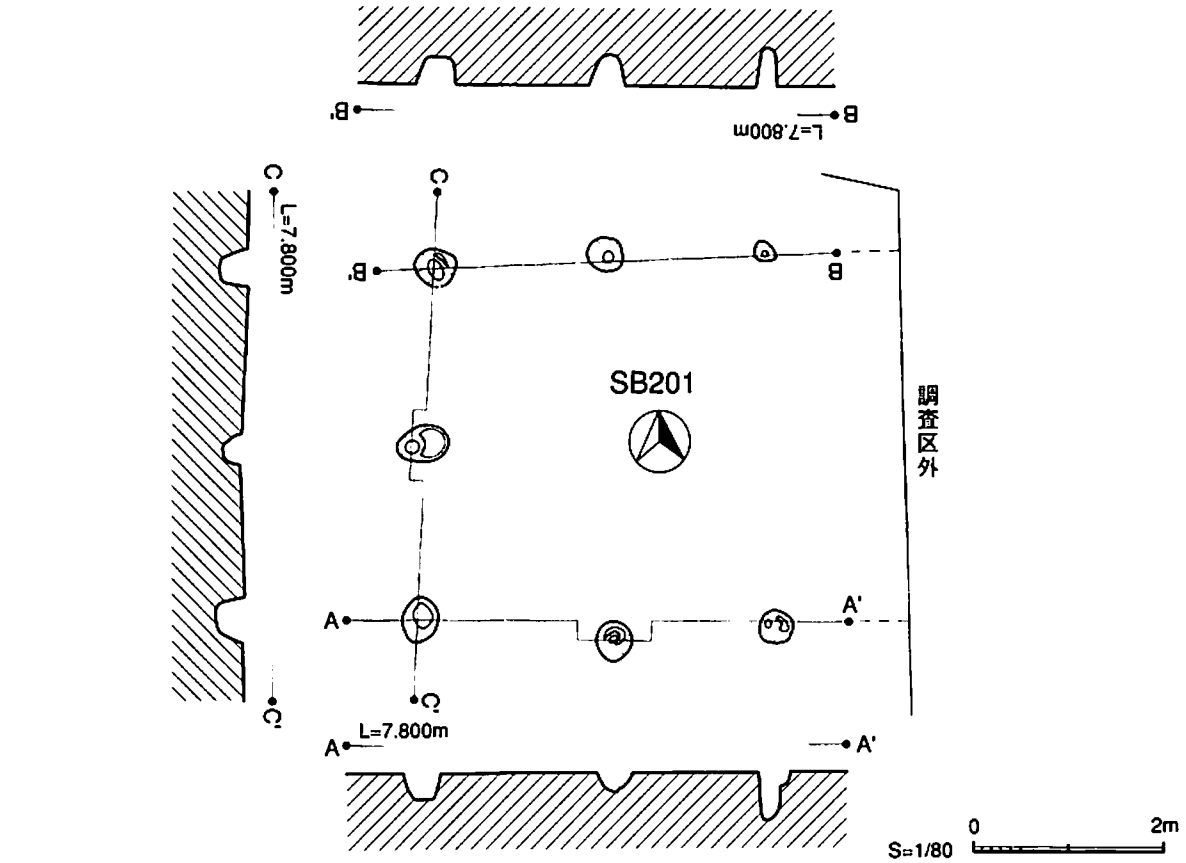
SX201は2区の北側に位置し、長軸1.00m、短軸0.90m、深さ0.15mを測る。内部から多量の焼土と焼成粘土塊が出土した。

SX202(第38図)

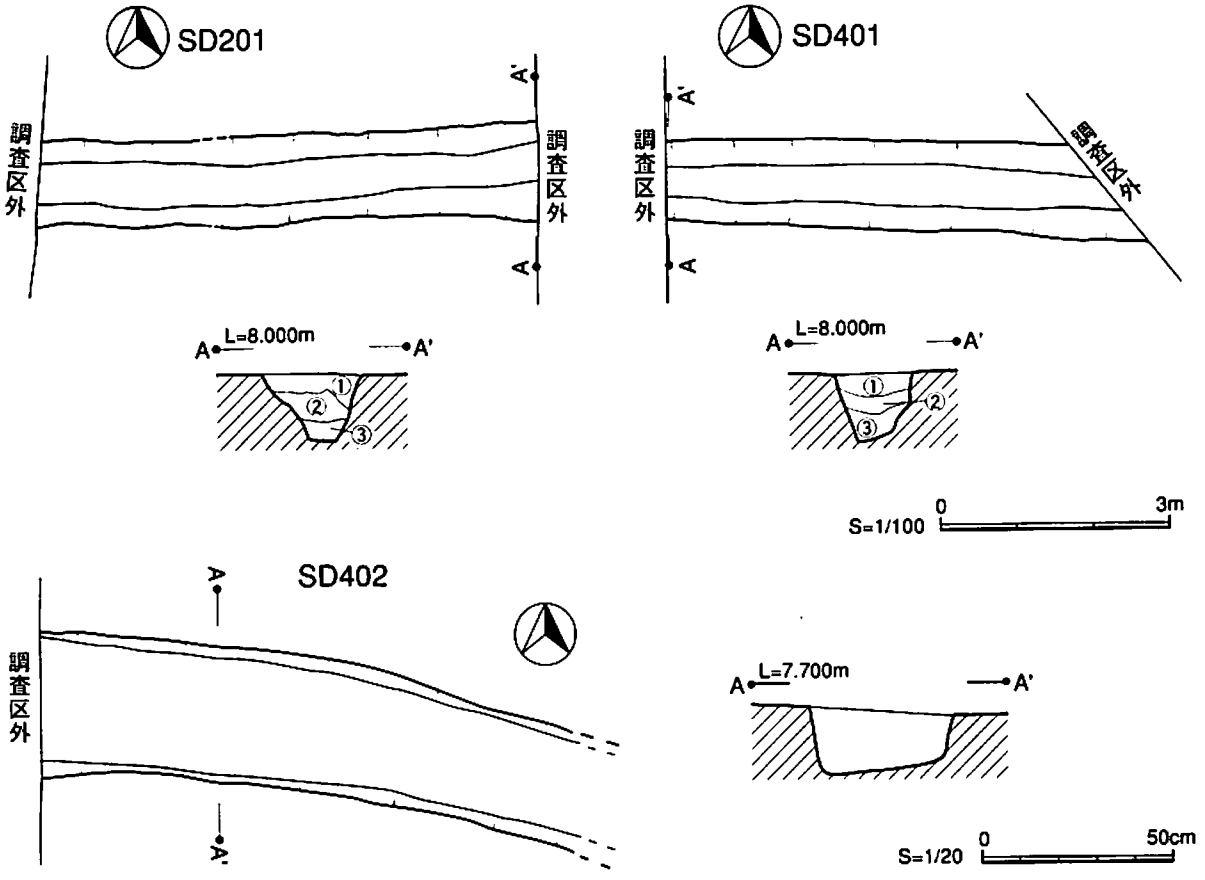
SX202は2区の南側に位置し、長軸0.95m以上、短軸0.61m、深さ0.17mを測る。内部から焼土と炭化物が出土した。



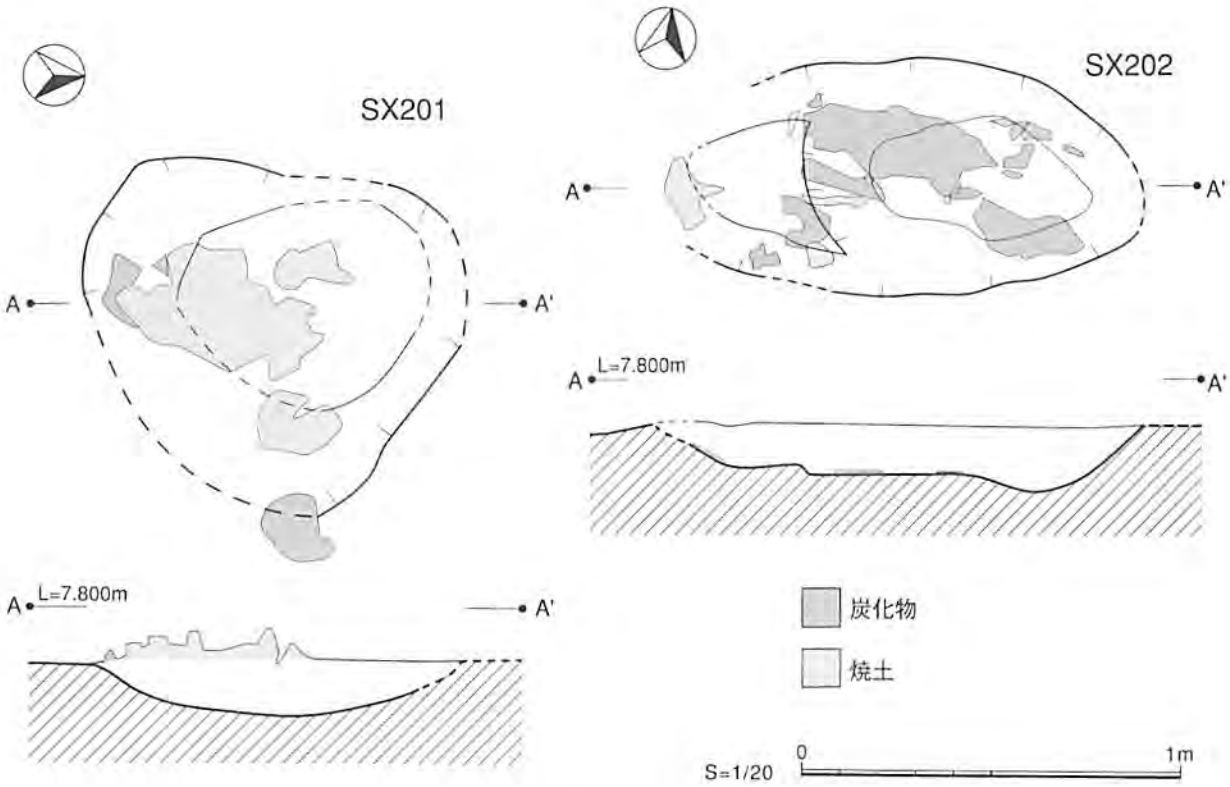
第35図　上小田宮の前2区・4区遺構配置図（S=1/250）



第36図　掘立柱建物跡（SB201）実測図



第37図　溝跡（SD201・401・402）実測図



第38図　不明遺構（SX201・202）実測図

（寸法は検出面で計測したもの）

遺構番号	間数	桁長		梁長		建物の向き	型式	方位	桁行平均		梁行平均		柱穴直径	柱穴深さ
		m	尺	m	尺				m	尺	m	尺	cm	cm
SB201	(2)×2	(3.7)	(12.1)	3.7	12.1	東西	側柱	N 87° W	1.8	6.1	1.8	6.1	10～68	17～72

表14　上小田宮の前2区ＳＢ計測表

（寸法は検出面で計測したもの）　（単位：m）

遺構名	遺構番号	長軸	短軸	深さ	備　考
溝跡	SD201	6.30～	1.10	0.90	
	SD401	5.80～	1.20	0.90	
	SD402	1.38～	0.37	0.15	
不明遺構	SX201	1.00	0.90	0.15	焼土
	SX202	0.95～	0.61	0.17	焼土

表15　上小田宮の前2区・4区検出遺構一覧表

遺構番号	層位	特　徴
SD201 SD401	①層	暗褐色土、暗黄褐色土、黄褐色土が混在(4:3:3)。
	②層	黄褐色土と灰褐色粘質土が混在(6:4)。
	③層	灰色粘質土。

表16　上小田宮の前2区・4区検出遺構土層注記表

第6節　小田3区・上小田宮の前3区の調査

1．調査区の状況

この調査区はそれぞれに調査年度が違う調査地であるが、遺構の分布状況から考えて、並べて表記することにした。なお、調査区の間に走る既存道路は当初調査区外として取り扱っていたが、道路の造成工事中に遺構が確認されたため、急遽玉名地域振興局土木部工務課と協議を行い、これ以上の掘削をしない工法で造成を進めることになり、遺跡を保存することになった。但し、工事中に確認された遺構については、遺構の分布状況と広がりを確認するため遺構検出のみを行い、土端を図化し写真で記録を取った。最低限の記録を取った後、検出面の保護のため山砂を敷詰め、遺跡の保存につとめた。この調査地は、拡張調査区として表記する。

2．遺構分布(第39図)

小田3区は南北約50m×東西約8～12mの南北に細長い調査区で、既存道路の西側に設定した。広さは356㎡である。上小田宮の前3区は南北約50m×東西約2m～13mの南北に細長い調査区で、既存道路の東側に設定した。広さは324㎡である。拡張調査区は南北約25m×東西10mの調査区で、既存道路部に設定した。広さは約202㎡である。これらの調査区で検出した遺構は竪穴住居跡3棟、掘立柱建物跡5棟、柵列跡5基、溝跡4条、井戸跡1基、土坑11基である。

遺構の分布状況を見ると、調査区の南側に竪穴住居跡(SI01・02・301)が分布している。掘立柱建物跡(SB01・02・03・301)は調査区の中央部から南側にかけて分布が見られるが、北側で1棟検出された(SB04)。柵列跡(SA01・301・302・303・304)は掘立柱建物跡の分布と同じく南側に分布している。溝跡(SD01・304・305・306)は中央部に分布が見られる。井戸跡(SE01・12)は溝跡と同じく中央部に分布が見られる。土坑(SK01・03・04・05・06・07・14・17・305・306)は調査区全体に散発的に分布する。

3．遺構・遺物

各遺構・遺物の詳細は第40図～55図・表17～23のとおりである。以下は各遺構を概観する。

小田3区

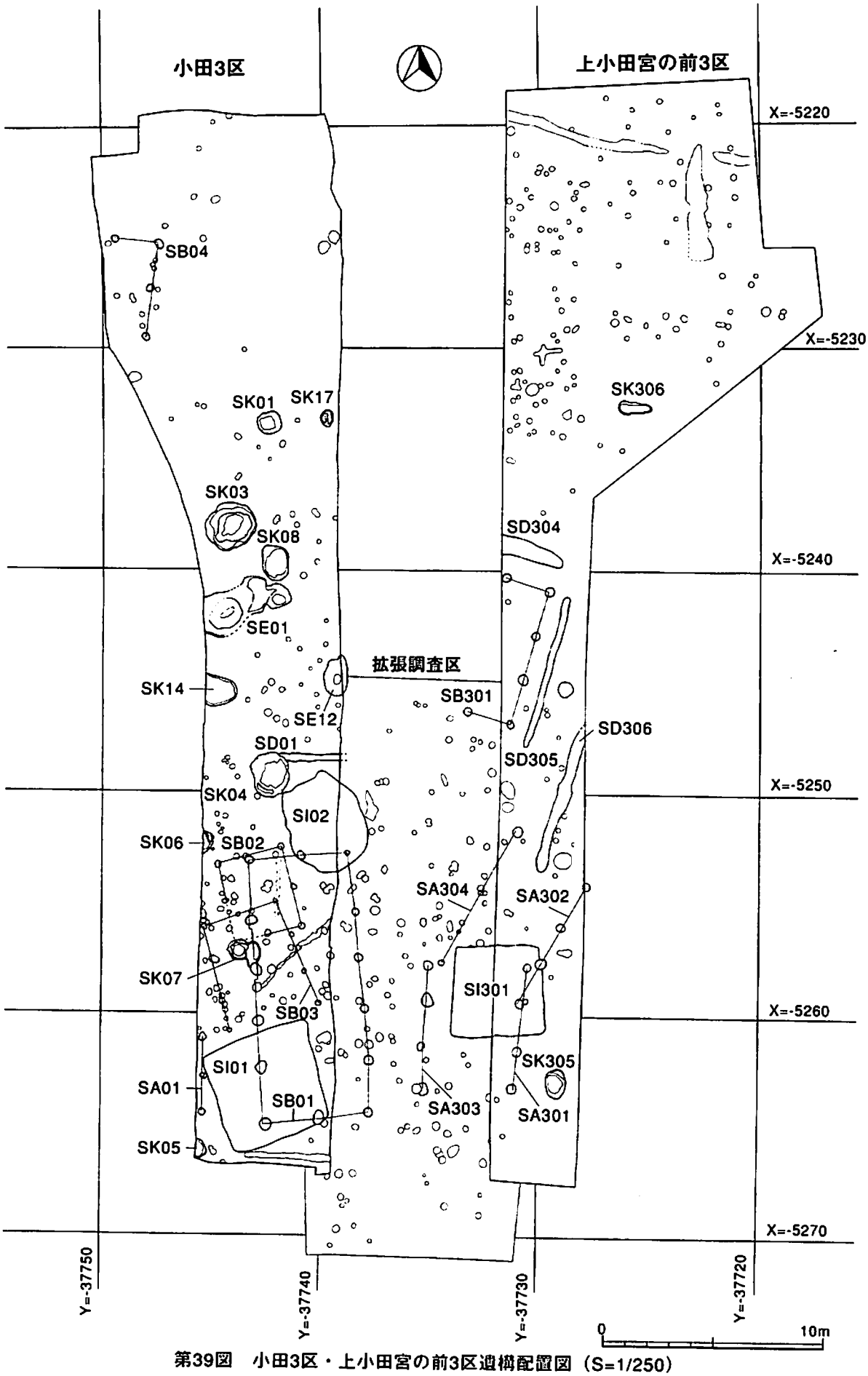
(1) 竪穴住居跡

SI01(第40図・41図)

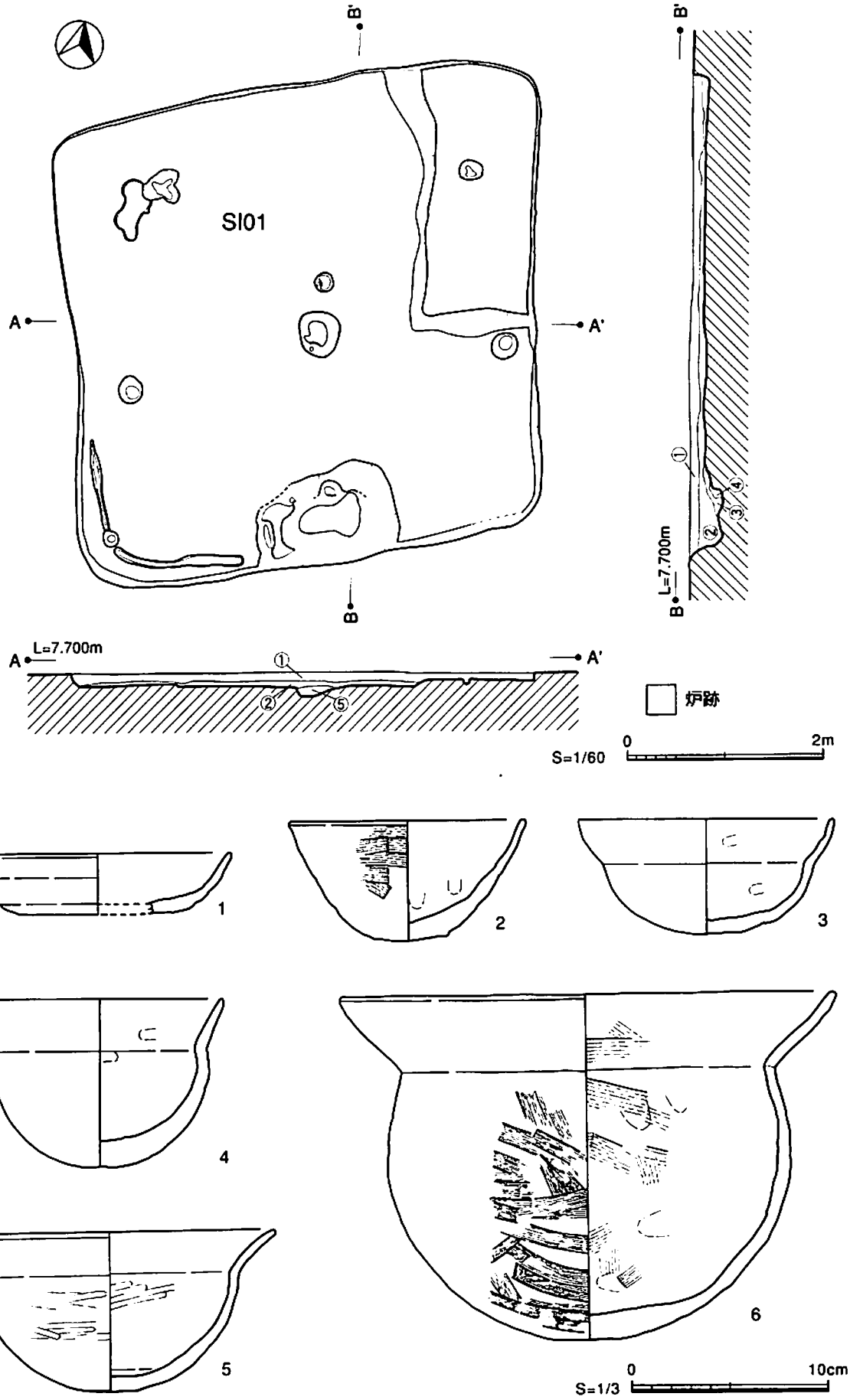
SI01は調査区南端に位置し、平面プランは不整の方形を呈している。長辺は軸(B－B')上で5.00m、短辺は軸(A－A')上で4.85mを測る。検出面から床面までの深さは最大0.35mである。住居跡内には部分的に溝状の遺構を確認することができたが、壁材を支える杭痕は1箇所しか確認することができなかった。北東側の壁際からはベッド状遺構が確認できた。柱穴は計5つ確認できた。貯蔵穴は南側の壁際から確認できた。カ跡は、住居跡中央から1基確認できた。

住居跡の覆土は保存状態が良好とはいえないが、大きく2層に分けられる。粘質を持たない炭化物を含んだ暗灰褐色土(①層)と、粘質を持った炭化物を含んだ暗褐色弱粘質土(②層)である。③・④層は貯蔵穴しか堆積が見られず、実質的には①・②層が住居跡の覆土といえる。

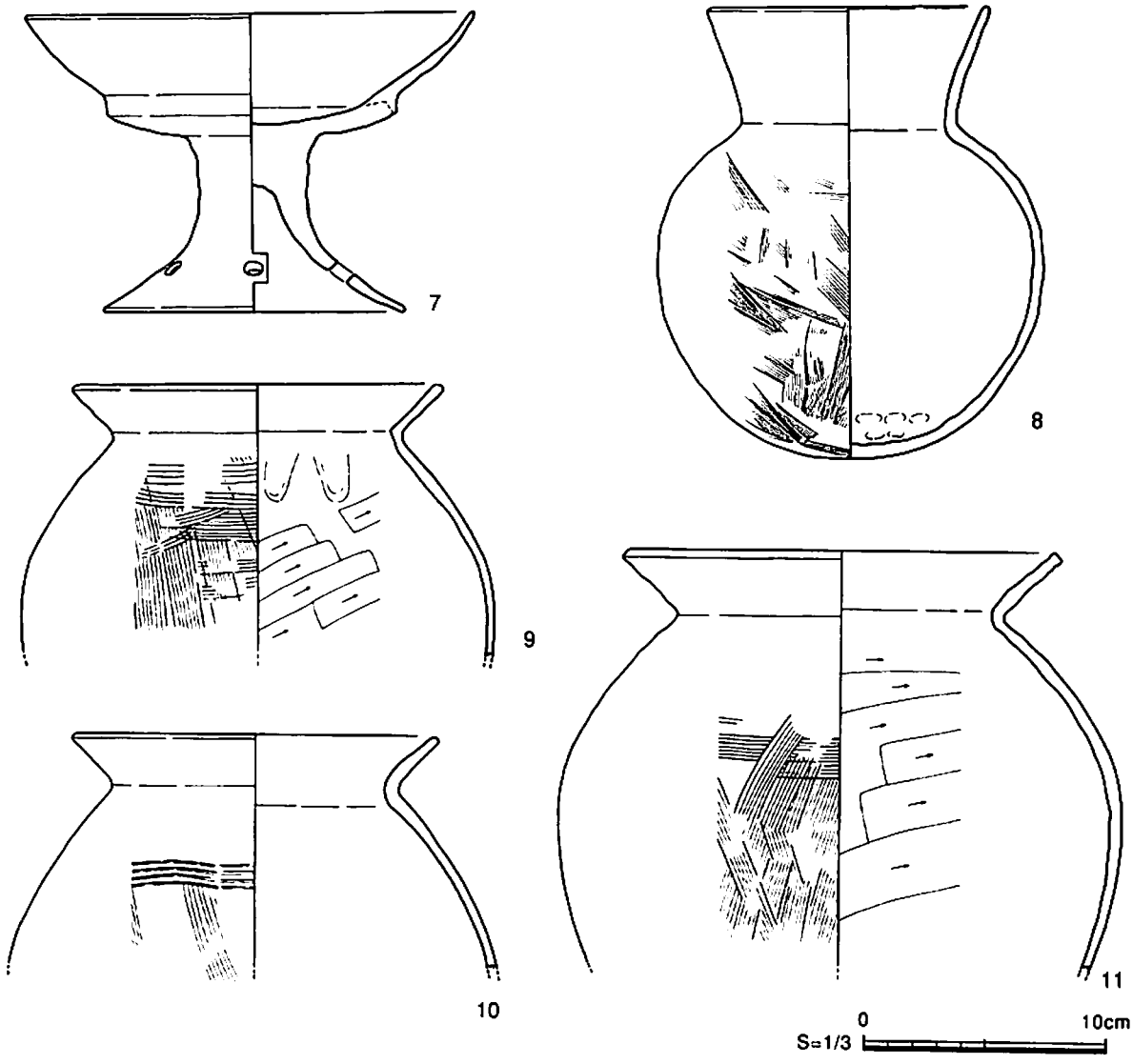
第40図1～6・第41図7～11はこの住居跡から出土した遺物である。1は土師器の杯で、内器面に赤色顔料の付着がみられる。2・3・5・6は土師器の鉢である。2は頸部に屈曲を持たない器形で、内器面に粗いナデを施している。5は体部最大径と口径の差が大きく、一見高杯の杯部に見える器形で、器壁が薄い。4・8は土師器の壺である。4は小型丸底壺で、ほぼ完形である。7は土師器の高杯で、脚部にほぼ均等な大きさの3つの穿孔が観察され、完形であればおそらく6つになるであろう。9～11は土師器の甕である。11は器面の風化が激しく、内外器面の調整ははっきりしないが、胴部内器面はヘラケズリの後横ナデを施し、胴部外器面はハケ調整の後横ナデを施しているようである。



第39図　小田3区・上小田宮の前3区遺構配置図（S=1/250）



第40図　小田3区竪穴住居跡（SI01）実測図及び出土遺物実測図（1）



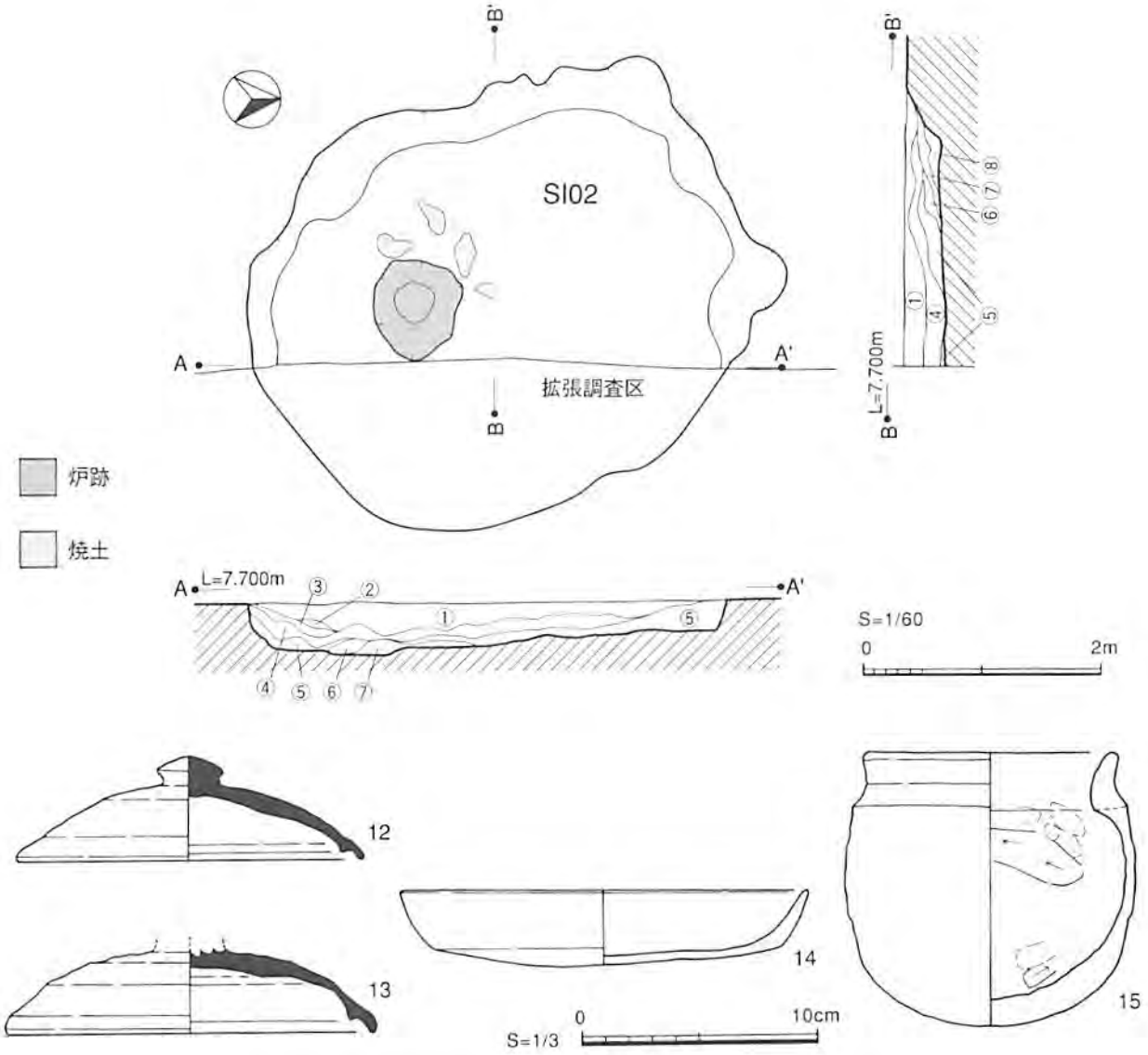
第41図　竪穴住居跡（SI01）出土遺物実測図（2）

SI02(第42図)

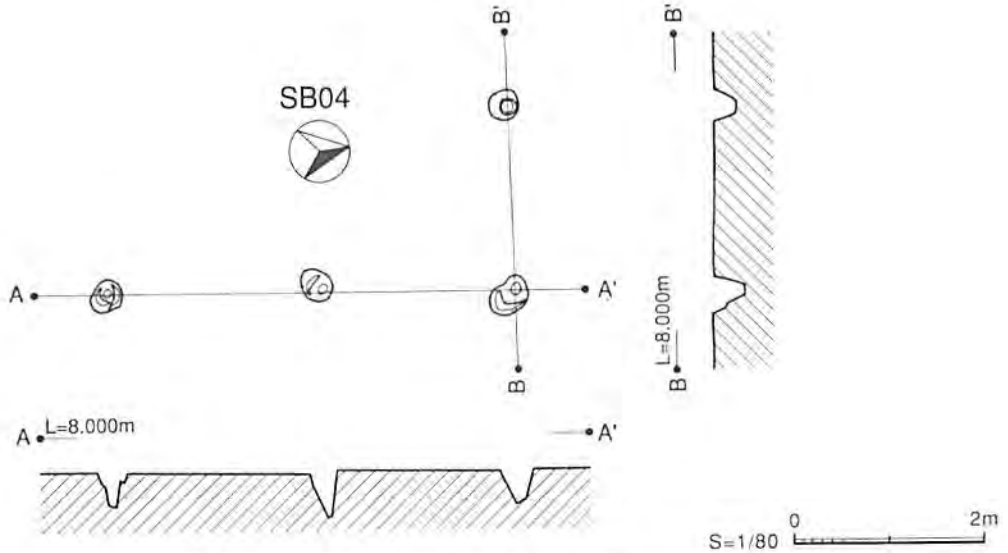
SI02は調査区の南側に位置し、平面プランは不整の楕円形を呈している。長辺は軸上で4.20m、短辺は軸上で3.60mを測る。検出面から床面までの深さは最大0.45mである。住居跡内には焼土の集中が見られ、おそらく炉跡と推定でき、それは中央部よりやや北側に位置している。柱穴、貯蔵穴は確認することが出来なかった。

住居跡の覆土は、遺物・炭化物を多量に含む層(①～④層)と、遺物・炭化物を含まない層(⑤・⑥層)と、遺物・炭化物を含む層(⑦・⑧層)に分けられる。このことから、住居廃棄後⑤～⑧層が堆積し、その後遺物を大量に廃棄したものと推測できる。

12～15はこの住居跡から出土した遺物である。12・13は須恵器の杯蓋で、二点ともほぼ完形である。14は土師器の杯で、口縁が開き、器高が低い。15は器高10cm前後の小型甕と見られる。



第42図　竪穴住居跡（SI02）実測図及び出土遺物実測図



第43図　掘立柱建物跡（SB04）実測図

(2) 掘立柱建物跡

SB01(第44図)

SB01は調査区の南側に位置する遺構で、SB02・03と重複しているが、切り合い関係は不明である。桁行方向がN83°Eでほぼ南北方向の側柱建物と思われる。調査区内では5間×1間分を確認したが、建物東部の柱穴が拡張調査区に存在し、合わせて5間×2間の一つの建物を形成する。この建物は桁行12.0m(約39.6尺)、梁行5.2m(約17.2尺)を測り、側柱建物の中では最も大型の建物である。柱間寸法は桁行の平均が約2.4m(約8.0尺)、梁行の平均が約2.5m(約8.3尺)である。確認された柱穴は直径30～50cm、深さ36～62cmで、下端のレベルは一定ではないが、どの柱もほぼ一直線に並ぶ。柱穴の掘り方覆土は、確認面がⅣ層で、その層と対照的な黒褐色を呈する粘質土である。この建物の詳細は不明であるが、軸方向からSB04の掘立柱建物との関連性が推測される。

SB02(第45図)

SB02は調査区の南側に位置する遺構で、SB01・03と重複している。南西隅の柱穴はSK07の土坑によって撹乱をうけて確認できていないが、桁行3.7m(約12.3尺)、梁行3.0m(約9.9尺)の2間×2間の側柱建物と思われる。桁行方向がN75°Eとほぼ南北方向である。柱穴は直径16～28cm、深さは14～36cmで、下端のレベルは一定ではないが、どの柱もほぼ一直線に並ぶ。

SB03(第44図)

SB03は調査区の南側に位置し、SB01・02と重複している。桁行方向がN70°Eで南北方向の側柱建物と思われる。3間×2間分を確認したが、建物南部は確認できていない。南側の梁行間が広くなり不均等を示しているが、柱穴の覆土が同一であることから掘立柱建物とした。柱穴は直径16～26cm、深さは8～28cmで、下端のレベルは一定ではないが、どの柱もほぼ一直線に並ぶ。

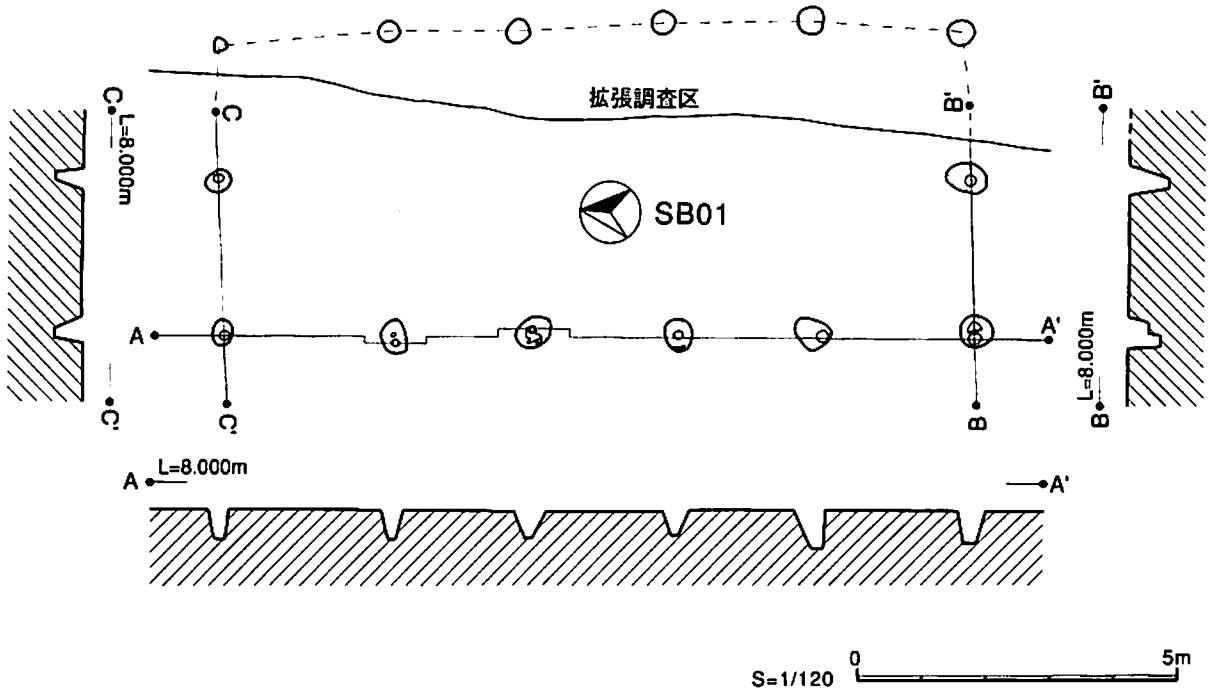
SB04(第42図)

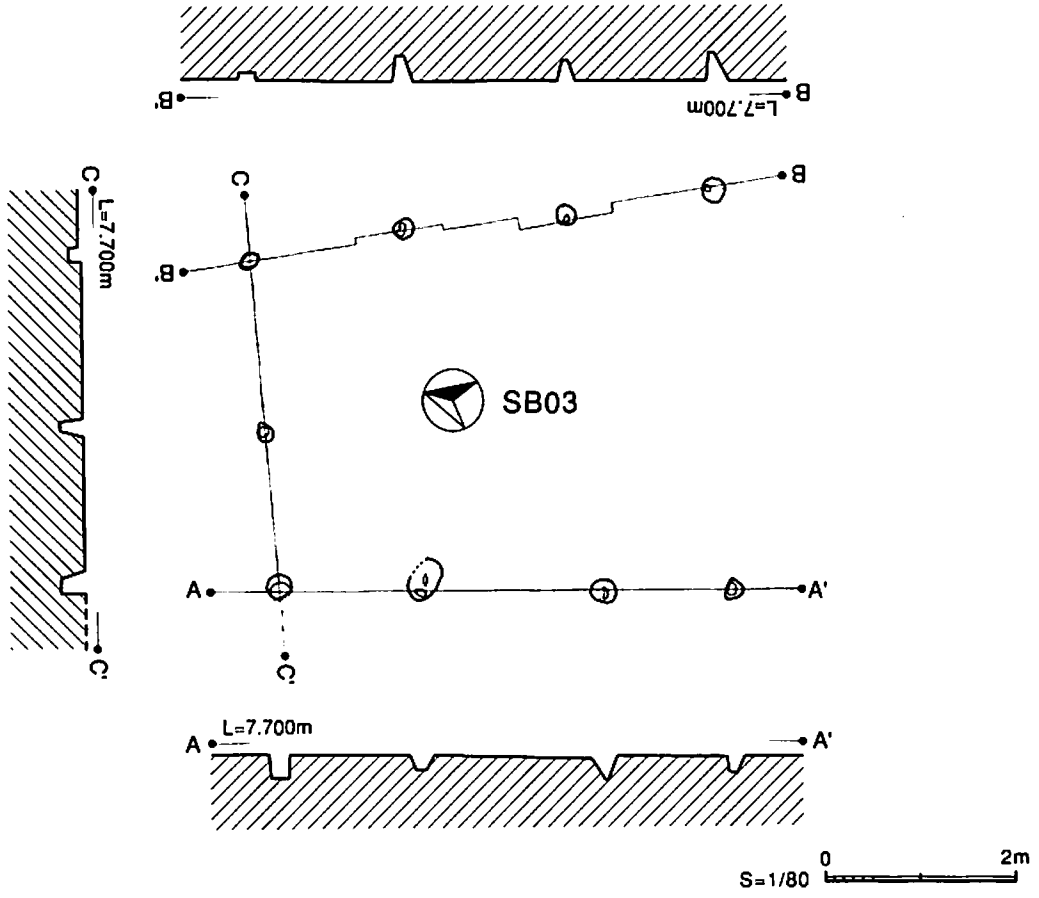
SB04は調査区の北側に位置する遺構である。桁行方向がN84°Wでほぼ南北方向の側柱建物と思われる。検出範囲より桁行4.6m(約15.6尺)、梁行1.9m以上(約6.3尺以上)の2間×1間分を確認したが、建物西部・南部の柱穴が調査区外に存在すると考えられるので建物全体の規模は不明である。柱間寸法は桁行の平均が約2.3m(約7.6尺)で、梁行の平均が約1.9m(約6.3尺)である。確認された柱穴は直径28～36cm、深さ24～48cmで、下端のレベルは一定ではないが、どの柱もほぼ一直線に並ぶ。柱穴の掘り方覆土は確認面がⅣ層で、その層と対照的な黒褐色を呈する粘質土である。この建物の詳細は不明であるが、軸方向からSB01との関連性が推測される。

(3) 柵列跡

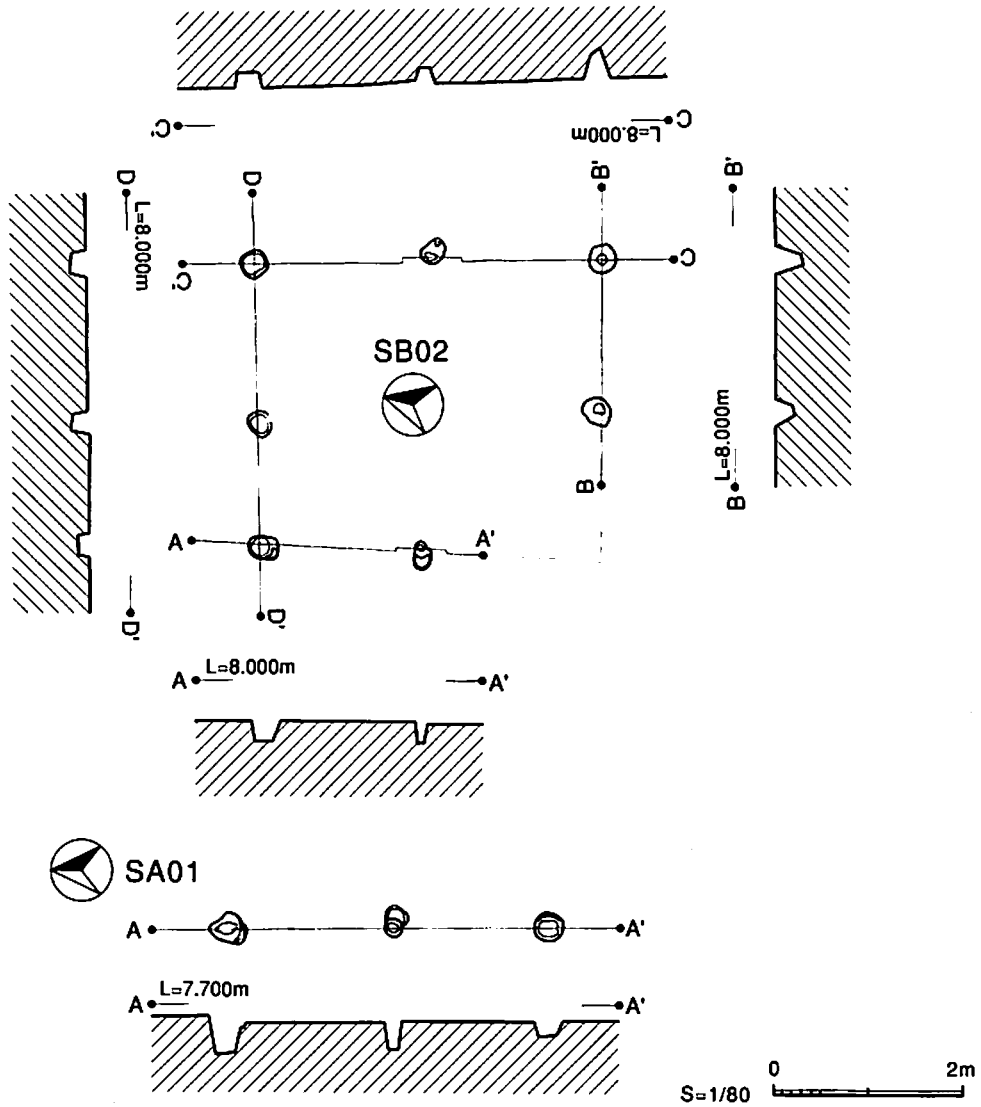
SA01(第45図)

SA01は調査区の南側に位置し、SI01に隣接している。柱列の軸はN2°Eで、確認できたのはほぼ南北に並ぶ3つの柱穴である。柱列の長さは3.5m(約11.5尺)で、柱穴は直径16～40cm、深さ16～36cmで、下端レベルは一定ではない。軸の方向から考えて、SB01との関連性が考えられる。また、他の建物と配置から考えると、柵列ではなく掘立柱建物の可能性も否定できない。





第44図　掘立柱建物跡（SB01・03）実測図

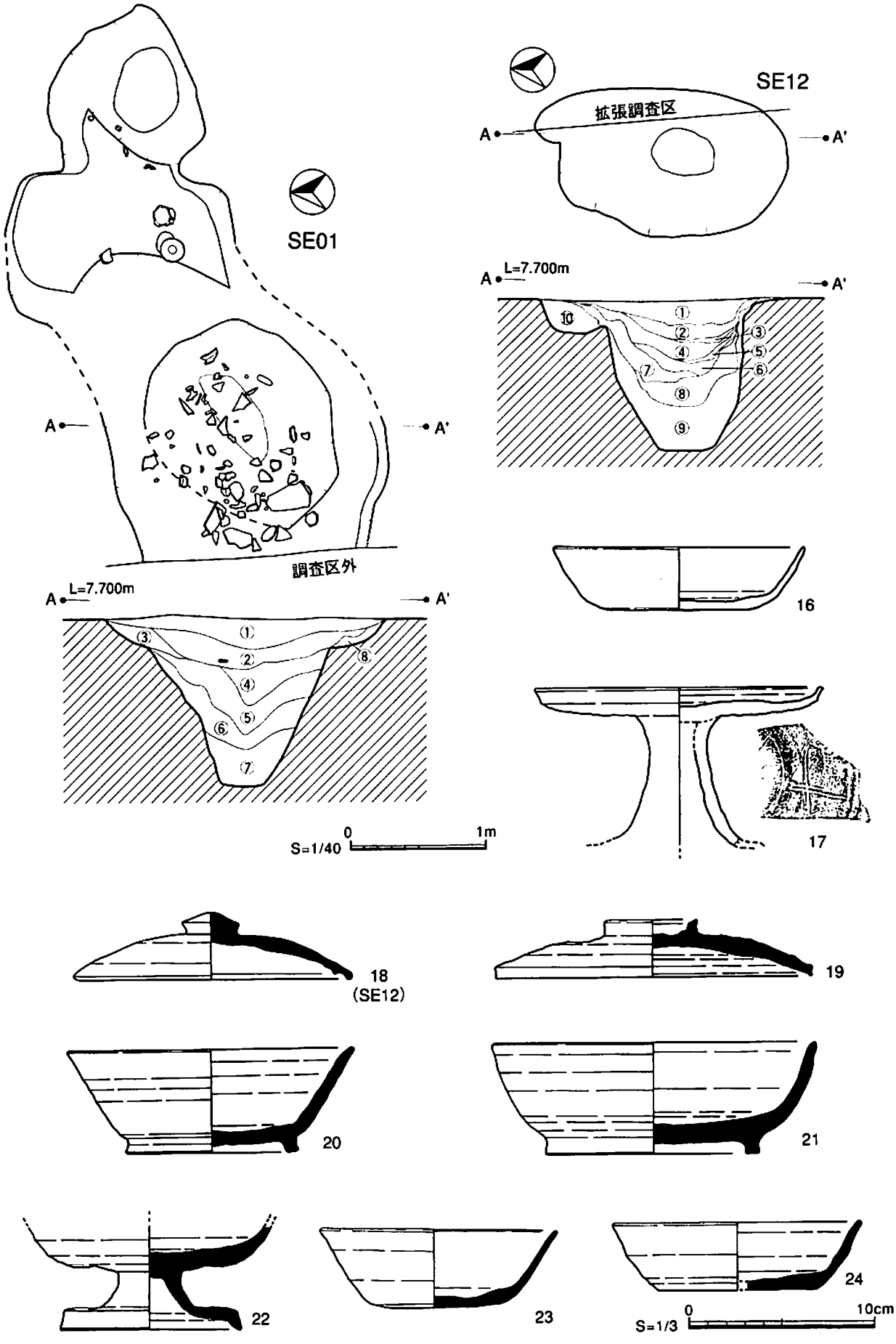


第45図　掘立柱建物跡（SB02）・柵列跡（SA01）実測図

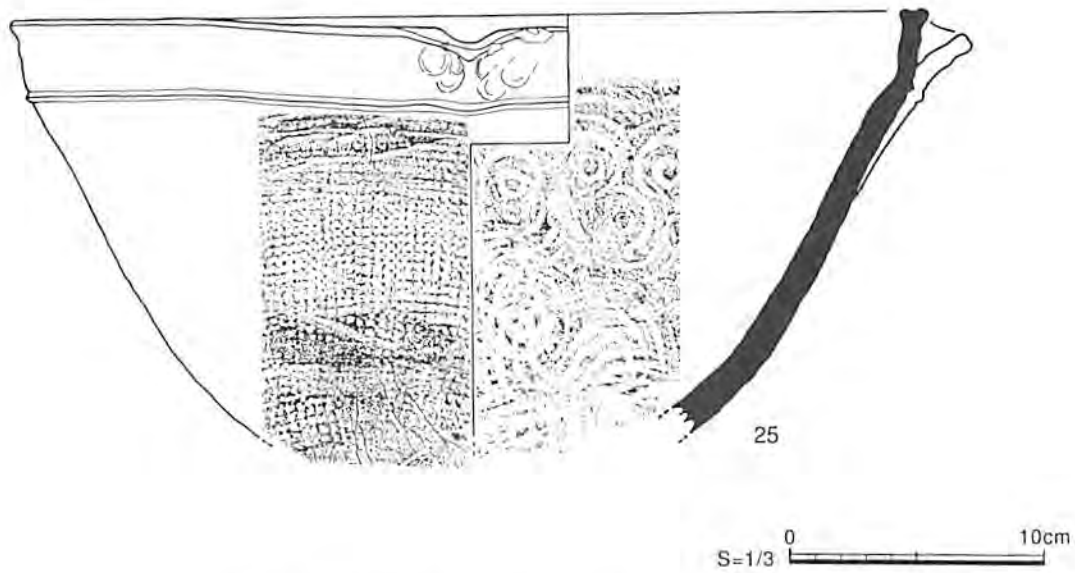
（寸法は検出面で計測したもの）

遺構番号	間数	桁長		梁長		建物の向き	型式	方位	桁行平均		梁行平均		柱穴直径	柱穴深さ
		m	尺	m	尺				m	尺	m	尺	cm	cm
SB01	5×2	12.0	39.6	5.2	7.2	南北	側柱	N 83° E	2.4	7.9	2.6	8.6	30～50	36～62
SB02	2×2	3.7	12.3	3.0	9.8	南北	側柱	N 75° E	1.8	6.0	1.5	4.9	16～28	14～36
SB03	(3)×2	(4.9)	(16.1)	3.8	12.4	南北	側柱	N 70° E	1.6	5.4	1.9	6.2	16～26	8～28
SB04	(2)×(1)	(4.7)	(15.4)	(1.9)	(6.4)	南北	側柱	N 84° W	2.3	7.7	-	-	28～36	24～48

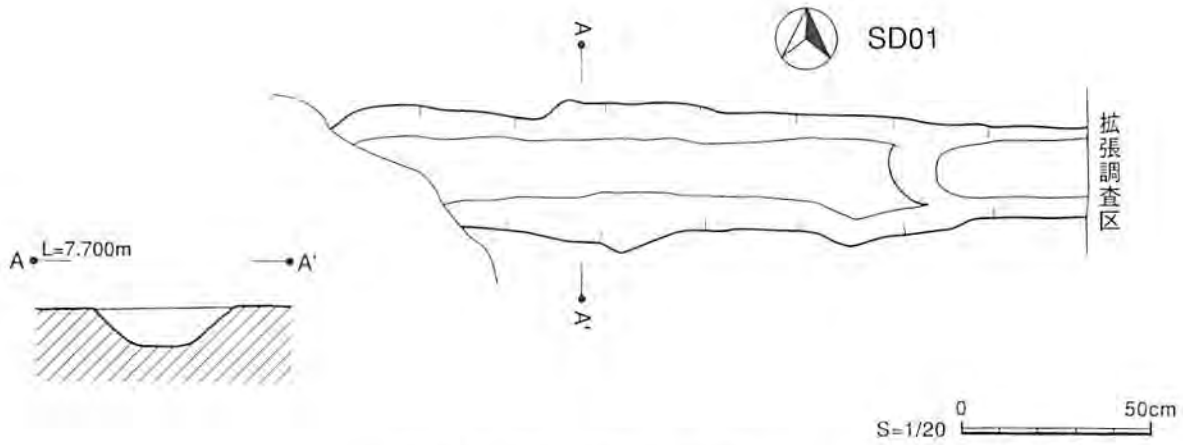
表17　小田3区ＳＢ計測表



第46図　井戸跡（SE01・12）実測図及び出土遺物実測図



第47図　井戸跡（SE01）出土遺物実測図



第48図　溝跡（SD01）実測図

（寸法は検出面で計測したもの）　（単位：m）

遺構名	遺構番号	長軸	短軸	深さ	備　考
竪穴住居跡	SI01	4.85	4.80	0.35	貯蔵穴・炉、遺物出土
	SI02	4.20	3.60	0.45	遺物出土
井戸跡	SE01	3.96～	2.04	1.20	遺物出土
	SE12	1.76	0.86～	1.10	遺物出土
溝跡	SD01	2.00～	0.35	0.11	SK04に切られる
土坑	SK01	1.08	0.98	0.52	
	SK03	2.30	2.06	0.70	遺物出土
	SK04	2.04	1.64	0.60	SD01を切る
	SK05	0.90	0.54～	0.14	遺物出土
	SK06	1.06	0.46～	0.22	
	SK07	1.40	1.10	0.50	遺物出土
	SK08	1.54	1.16	0.52	
	SK14	1.42～	1.38	0.16	
	SK17	0.76	0.60	0.09	

表18　小田3区検出遺構一覧表

(4) 井戸跡

SE01(第46図・47図)

SE01は調査区の中央部に位置し、長軸3.96m以上、短軸2.04m、深さ1.20mを測る。平面プランは不整な長楕円形を呈しているが後世の撹乱によって変形したもので、本来のプランは円形を呈していたものと考えられる。断面形は略筒状であるが、上層部に段掘りの形状を示す広がりが確認できる。また、井戸の内部より井戸枠が設置された形跡が確認されなかったことから、井戸枠を持たない素掘の井戸と考えられる。

井戸跡の覆土は大きく2層に分けることができる。井戸の覆土④～⑦層が堆積後に④層上面を整地し、その後①～③層の堆積が見られ、遺物が大量に出土している。この堆積は、井戸廃棄時の祭祀的な意味が考えられる。

16・17・19～25はこの井戸跡から出土した遺物である。16は土師器の杯で、口縁部から胴部内外器面の一部に赤色顔料の付着が見られる。17は土師器の高杯で、杯部外器面にヘラ記号が見られる。19は須恵器の杯蓋である。20・21は須恵器の高台付椀である。21は接地面に意図的に付けられたようなヘラ切りが残る。22は須恵器の高杯である。23・24は須恵器の杯である。25は須恵器の鉢で、片口土器に分類できる。内器面には同心円文のタタキを、外器面には格子目文のタタキの調整を施している。

SE12(第46図)

SE12は調査区の中央部に位置し、南東部は拡張調査区に架かる。長軸1.76m、短軸0.86m、深さ1.10mを測り、平面プランは不整な楕円形を呈している。断面形は略筒状であるが、上層部に段掘りの形状を示す広がりが確認できる。また、井戸の内部より井戸枠が設置された形跡が確認されなかったことから、井戸枠を持たない素掘の井戸と考えられる。

井戸跡の覆土は大きく2層に分けることができる。井戸の覆土⑨層が堆積後に新たに掘り直し、①～⑧層が再堆積をしている。この堆積は井戸の維持管理の具体例として考えられる。

18はこの井戸跡から出土した須恵器の杯蓋で、内外器面とも丁寧な横ナデ調整を施している。

(5) 溝跡

SD01(第48図)

SD01は調査区中央部の南側に位置し、ほぼ東西に伸びる溝で、長軸2.0m以上、短軸0.35m、深さ0.11mを測る。西部はSK04に切られ、東部は拡張調査区に伸びると思われるので、全体の規模は不明である。この溝跡の主軸の方向から考えて、SB01との関連性が考えられる。

(6) 土坑

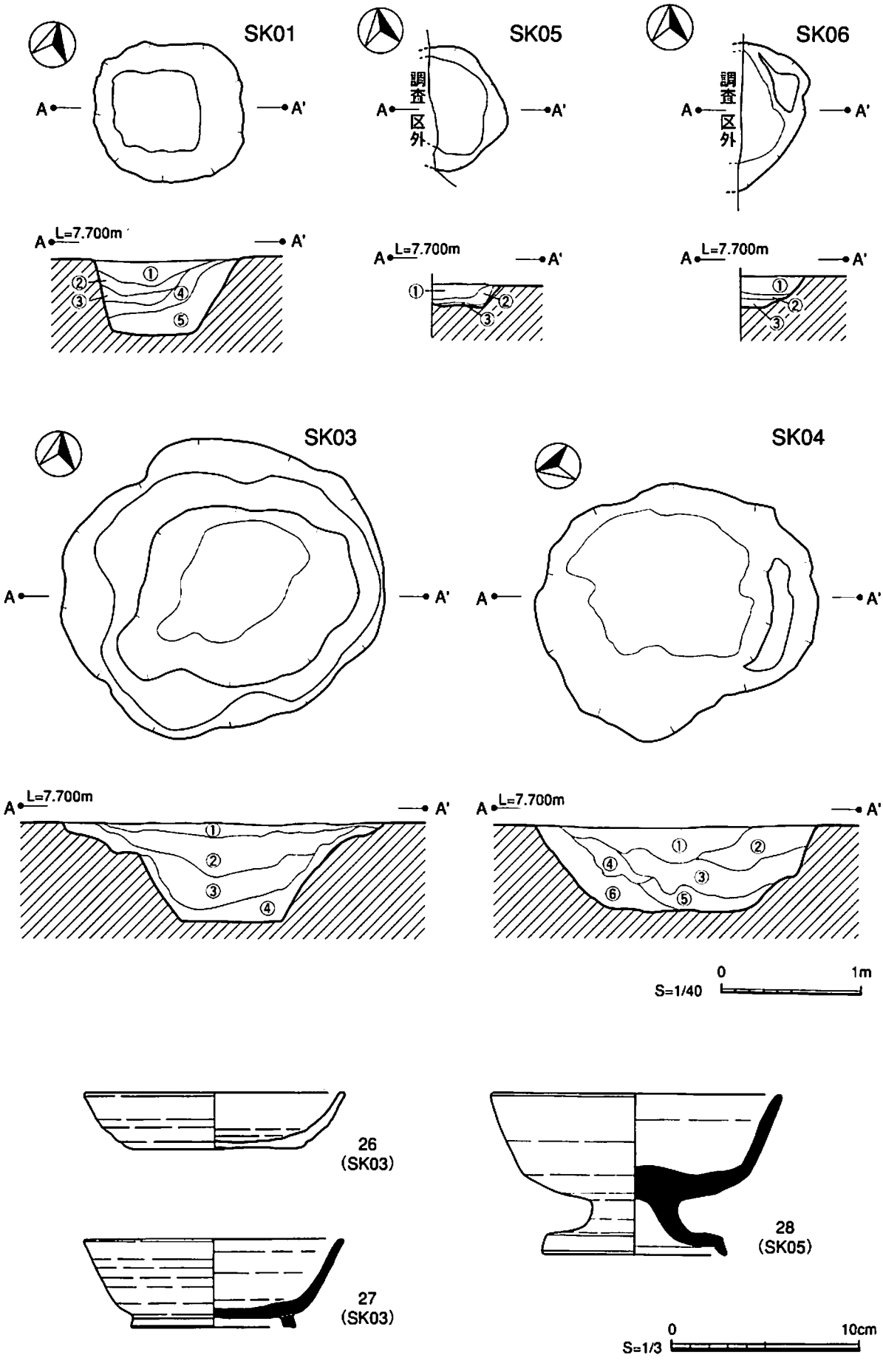
SK01(第49図)

SK01は調査区の北側に位置し、長軸1.08m、短軸0.98m、深さ0.52mを測る。平面形は方形で、断面形は台形を呈している。覆土は①～⑤層に分層できる。

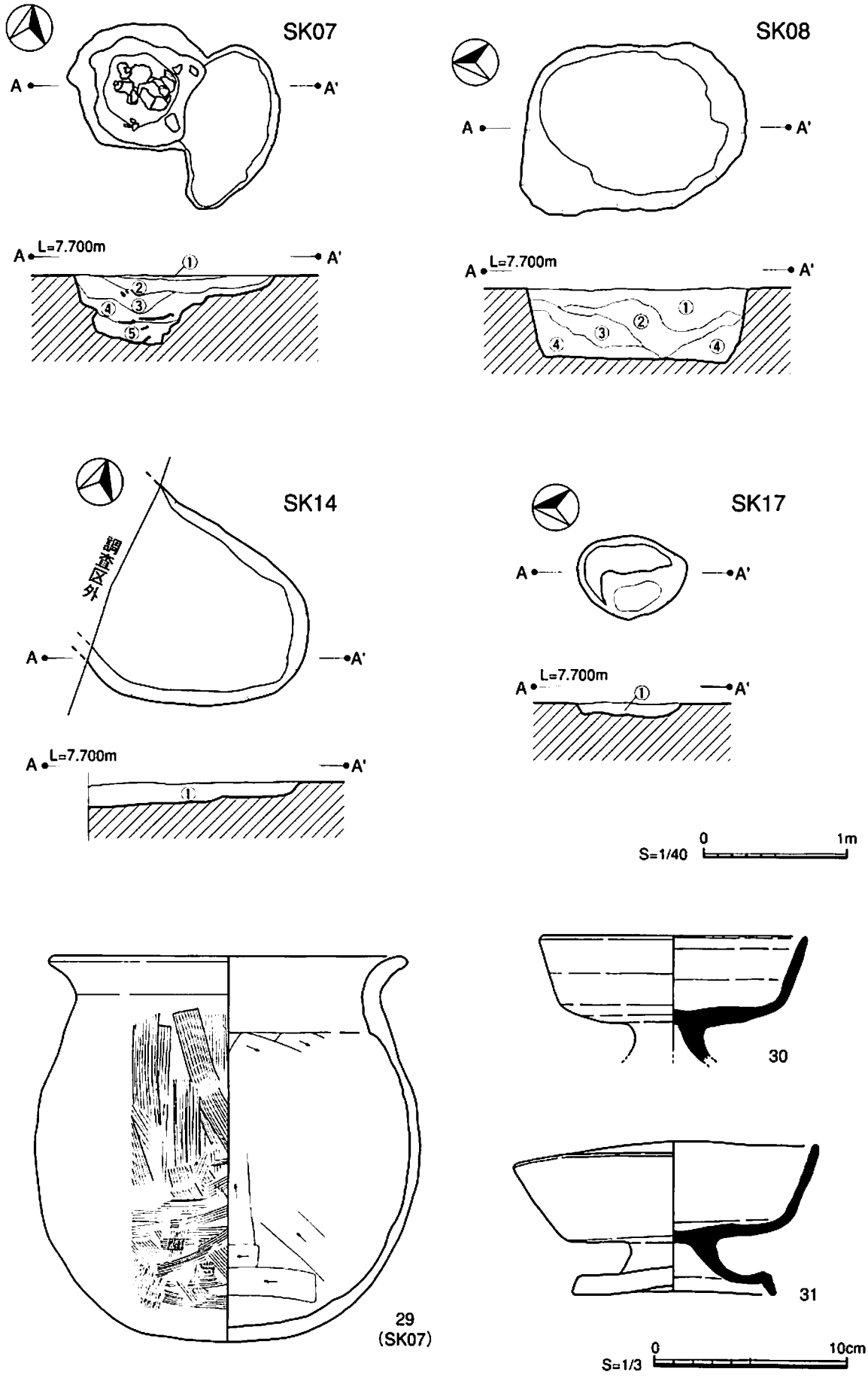
SK03(第49図)

SK03は調査区中央部の北側に位置し、長軸2.30m、短軸2.06m、深さ0.70mを測る。平面形は不整な略円形で、断面形は略筒状であるが、上層部に段掘りの形状を示す広がりが確認できる。平面・断面の形状から、この土坑が井戸跡である可能性も否定できない。

26・27はこの土坑から出土した遺物である。26は土師器の杯である。27は須恵器の高台付椀で、内面に赤色顔料の痕跡が残る。



第49図　土坑（SK01・03・04・05・06）実測図及び出土遺物実測図



第50図　土坑（SK07・08・14・17）実測図及び小田3区出土遺物実測図

SK04(第49図)

SK04は調査区中央部の南側に位置し、SD01を切っている。長軸2.04m、短軸1.64m、深さ0.60mを測り、平面形は不整な略円形で、二段掘りになっている。断面形は台形を呈しており、覆土は①～⑥層に分層できる。

SK05(第49図)

SK05は調査区南西隅に位置し、西部は調査区外に存在すると思われる。長軸0.90m、短軸0.54m以上、深さ0.14mを測り、平面形は不整な略円形で、断面形は浅い皿状を呈している。

28はこの土坑から出土した須恵器の高杯で、内面底部に火ぶくれのあとが残る。

SK06(第49図)

SK06は調査区の南側に位置し、西部は調査区外に存在すると思われる。長軸1.06m、短軸0.46m以上、深さ0.22mを測り、平面形は不整な略円形で二段掘りになっている。断面形は浅い皿状を呈しており、覆土は①・②層に分層できる。

SK07(第50図)

SK07は調査区の南側に位置し、長軸1.40m、短軸1.10m、深さ0.50mを測り、平面形は不定形な楕円形で段掘りになっている。断面形は不整な略台形を呈しており、覆土は①～⑤層に分層できる。

29はこの土坑から出土した土師器の甕である。

SK08(第50図)

SK08は調査区の中央部に位置し、長軸1.54m、短軸1.16m、深さ0.52mを測り、平面形は楕円形である。断面形は略台形を呈しており、覆土は①～④層に分層できる。

SK14(第50図)

SK14は調査区の中央部に位置し、西部は調査区外に存在すると思われる。長軸1.42m以上、短軸1.38m、深さ0.16mを測る。平面形は長楕円形で、断面形は浅い皿状を呈している。

SK17(第50図)

SK17は調査区の北側に位置し、長軸0.76m、短軸0.60m、深さ0.09mを測り、平面形は円形で浅い2段掘りである。断面形は浅い皿状を呈している。

30・31は須恵器の高杯である。

遺構番号	層位	特　徴
SI01	①層	暗灰褐色土。土器片、カーボンを含む。
	②層	暗褐色弱粘質土。土器片、カーボンを含む。
	③層	暗灰色土粘質土。明黄褐色粘質土粒を微量に含む。
	④層	暗灰色土と淡黄褐色土が混在(7:3)。弱い粘性あり。
	⑤層	暗褐色土と暗灰色土が混在(5:5)。カーボンを含み、炉跡の可能性大。
SI02	①層	暗灰褐色土。弱い粘性あり。土器片、炭化物、鉄分、マンガンを含み、土師・須恵器等の遺物を多量出土。
	②層	黒灰褐色土。鉄分、マンガンを含む。
	③層	明灰褐色土。粘性あり。3～5cmほどの山砂をブロック状に含み、①層より土器片、炭化物を多量に含む。
	④層	灰褐色土。①層より強い粘性あり、土器片を多量に含み、遺物が多量出土。
	⑤層	暗黄灰褐色土。①層より土器片を含む割合は少なく、1～2cmの炭化物を多量に含む。
	⑥層	暗黒灰褐色土。②層とほぼ同じ。しまりあり、粘性あり。
	⑦層	明黄灰褐色土。⑤層とほぼ同じだが、土器片、炭化物を含む割合は多い。
	⑧層	明黄灰褐色土。粘性あり。

表19　小田3区検出遺構土層注記表（1）

遺構番号	層位	特　徴
SE01	①層	灰黒色土層。弱いしまりあり。少量の砂粒、わずかな炭化物、土器を含む。
	②層	灰黒色土層。きめ細かい土で、①層より砂粒の量は少ない。土器とわずかな炭化物、鉄分を含む。
	③層	灰黒色土層と灰黄褐色土層。鉄分、炭化物は認められない。②層に比べて粗く、しまりの弱い土。
	④層	灰黒色土層。固くしまった土。稀に炭化物が認められる。②層と同質の土。
	⑤層	灰黒色土層と灰黄褐色土層。鉄分を多量に含み、炭化物の粒が②層に比べて大きくなる。④層に比べてやや粗い土。
	⑥層	灰黒色土層と灰黄褐色土層。灰黄褐色土層の割合が高くなる。鉄分を多量に含むが、炭化物はほとんど認められない。⑤層と同質の土であるが、⑥層の方が粗い。
	⑦層	灰黒色土層。粘性の強い土。最も黒みの強い土でもある。わずかに鉄分が認められるほかは不純物はない。
	⑧層	灰黄褐色土層。鉄分、炭化物は認められない。地山によく類似した土。
SE12	①層	灰黒色土。強いしまりあり。鉄分、マンガンと2mmほどの橙色の土器片が混じる。
	②層	灰黒色土。①層と似るが、やわらかい。
	③層	灰黒色土と灰黄褐色土。基本土層Ⅳ層がブロック状で混じる。
	④層	黒色土。鉄分、マンガンの混じりは少なく、やわらかい。
	⑤層	③層と同質。
	⑥層	黒色土。粘性あり。シルト状で、やわらかい。
	⑦層	黒色土と基本土層Ⅳ層。⑥層土にⅣ層の19mm大のブロックが混じる。
	⑧層	注記なし。
	⑨層	⑩層に似る。
	⑩層	基本土層Ⅲ層とⅣ層。Ⅳ層の割合が多く、やわらかい。
SK01	①層	灰褐色土層と灰黄褐色土。強いしまりあり。鉄分、マンガンが混じる。
	②層	暗褐色土と灰黄褐色土。ややわらかい。
	③層	灰褐色土層と灰黄褐色土。やわらかい。
	④層	灰褐色土層と灰黄褐色土。
	⑤層	灰褐色土層と灰黄褐色土。ほぼ均等に混じりあう。やわらかい。
SK03	①層	明褐色粘質土。基本土層Ⅲ層がベース。鉄分、マンガンを含む。
	②層	暗灰褐色粘質土。基本土層Ⅲ層がベース。①層より強いしまりあり、粘性あり。1cm前後の炭化物を含む。
	③層	暗黄灰褐色粘質土。基本土層Ⅲ層がベースにⅣ層が3cm前後の小ブロック状で含まれる。
	④層	灰褐色粘質土。基本土層Ⅲ層がベース。強い粘性あり。
SK04	①層	灰褐色土と暗褐色土と淡黄褐色土の混土(7:2:1)。
	②層	灰褐色土と暗褐色土と淡黄褐色土の混土(1:1:8)。
	③層	灰褐色土と暗褐色土と淡黄褐色土の混土(2:1:7)。
	④層	灰褐色土と暗褐色土と淡黄褐色土の混土(6:3:1)。
	⑤層	灰色粘質土と淡黄褐色土の混土(6:4)。
	⑥層	灰色粘質土と淡黄褐色土の混土(8:2)。
SK05	①層	灰黒色土。強いしまりあり。鉄分、マンガンが粒状に混じる。
	②層	灰黒色土。基本土層Ⅲ層土で、粘性あり、やわらかい。
	③層	灰黒色土と灰黄褐色土。シルト状で、粘性あり。基本土層Ⅳ層土が混じり、やわらかい。
SK06	①層	灰黒色粘質土。しまりあり。鉄分、マンガンの粒が混じる。
	②層	灰黒色粘質土。やや灰色を帯び、やわらかい。
	③層	灰黄褐色土。砂質でやわらかい。
SK07	①層	黒色土。部分的に黒～暗黄褐色の土を含む。
	②層	黒色土。①層と似た土色。部分的に地山の土を含む。
	③層	暗灰褐色土。強い粘性あり。わずかに基本土層Ⅳ層土を含む。
	④層	黒色土。部分的に暗黄褐色土を含む。
	⑤層	暗灰褐色土。④層よりも暗灰褐色の度合が弱い。2mm以上の炭化物を多量に含む。
SK08	①層	暗灰色土と褐色土。橙色のマンガンがブロック状でまばらに入る。
	②層	褐色土。①・③層と異なり、ほとんどが褐色。
	③層	暗灰色土。部分的に褐色土が入る。
	④層	暗灰色土。褐色土はあまり入らない。
SK14	①層	灰黒色土。強いしまりあり。鉄分、マンガン、焼土が混じる。
SK17	①層	暗褐色とⅣ層土を含む。弱い粘性あり、やわらかい。

表20　小田3区検出遺構土層注記表（2）

上小田宮の前３区

(1) 竪穴住居跡

SI301(第51図)

SI301は調査区南側に位置し、住居西部が拡張調査区に架かっている。平面プランは方形を呈している。長辺は軸(南北)上で4.12m、短辺は軸(東西)上で4.09mを測る。検出面から床面までの深さは最大0.18mである。住居跡内には部分的に周溝状の遺構を確認できたが、詳細は不明である。柱穴は計2つ確認できた。

32はこの住居跡から出土した土師器の甕である。頸部が折れ曲がるような器形で、口縁がわずかに外湾している。

(2) 掘立柱建物跡

SB301(第52図)

SB301は調査区の中央部に位置し、建物西部は調査区外に存在すると思われ、南西部の柱穴の1つは拡張調査区から検出された。桁行方向がN75°Wでほぼ南北方向の側柱建物で、3間×1間分を確認できたが、全体の規模は不明である。柱穴は直径32～44㎝、深さは18～32㎝で、下端のレベルは一定ではないが、どの柱もほぼ一直線に並ぶ。この掘立柱建物跡とほぼ並行に位置するSD304・305はほぼ同時期に存在し、建物との関連性が想定できる。

(3) 柵列跡

SA301(第53図)

SA301は調査区の南側に位置し、SI301・SA302と重複しているが、切り合い関係は不明である。柱列の軸はN7°Eで、確認できたのはほぼ南北に並ぶ4つの柱穴である。柱列の長さは5.5m(約18.2尺)で、柱穴は直径21～40cm、深さ14～40cmで、下端レベルは一定ではない。この柵列跡とSA303・SB01はほぼ並行に位置し、同時期のものと判断される。

SA302(第53図)

SA302は調査区の南側に位置し、SI301・SA301と重複し、北部の柱穴が調査区外に出ている。柱列の軸はN30°Eで、確認できたのはほぼ南北に並ぶ4つの柱穴である。柱列の長さは6.1m(約20.1尺)で、柱穴は直径32～48cm、深さ24～32cmで、下端レベルは一定ではない。この柵列の軸とほぼ並行に位置するSA304は、同時期のものと判断される。

SA303(第53図)

SA303は拡張調査区の中央部南側に位置している。柱列の軸はN2°Eで、確認できたのはほぼ南北に並ぶ4つの柱穴である。柵列の軸の方向から考えて、SA301・SB01との関連性が考えられる。

SA304(第53図)

SA304は拡張調査区の中央部に位置している。柱列の軸はN31°Eで、確認できたのはほぼ南北に並ぶ4つの柱穴である。柵列の軸の方向から考えて、SA302との関連性が考えられる。

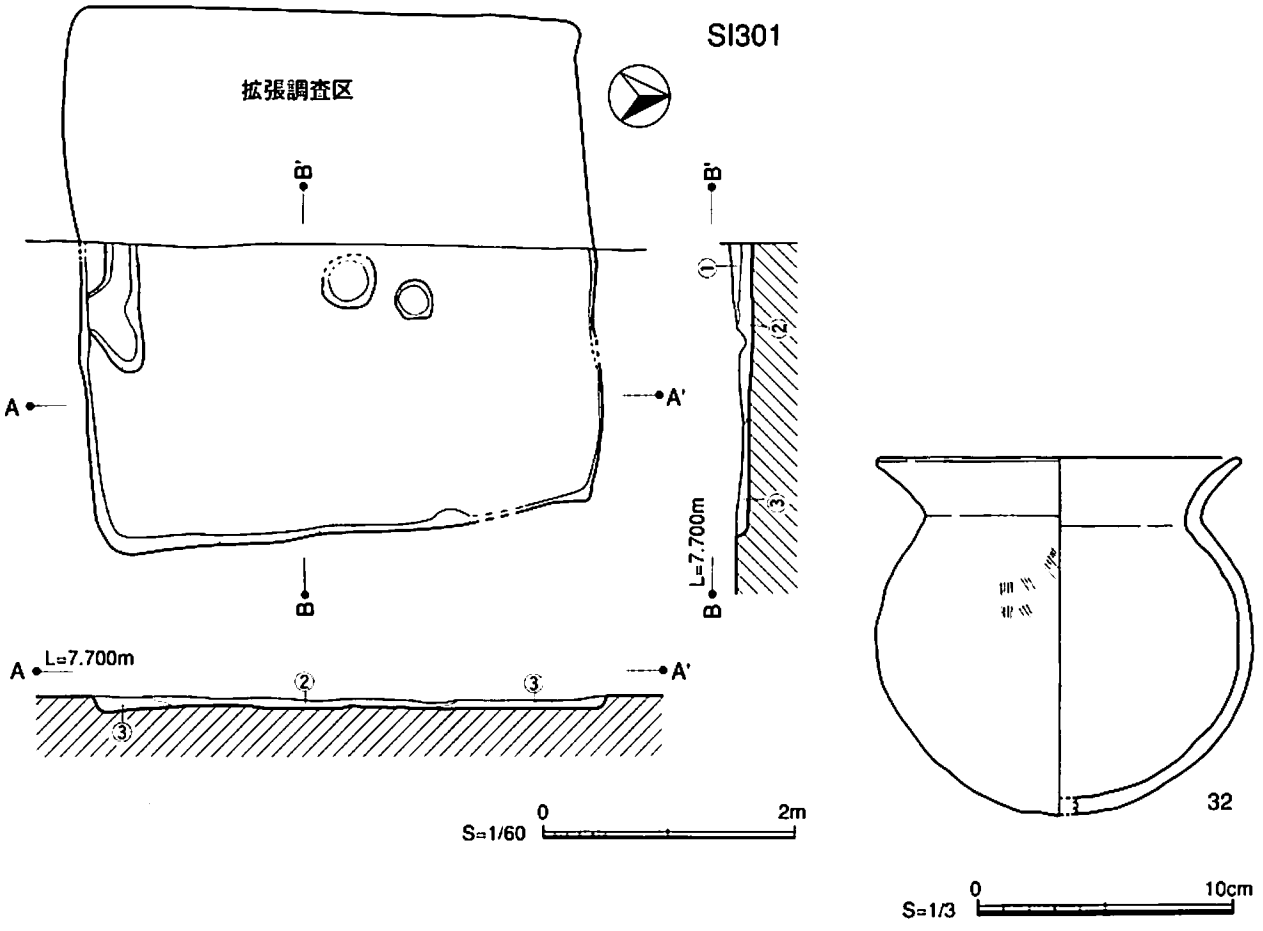
(4) 溝跡

SD304(第54図)

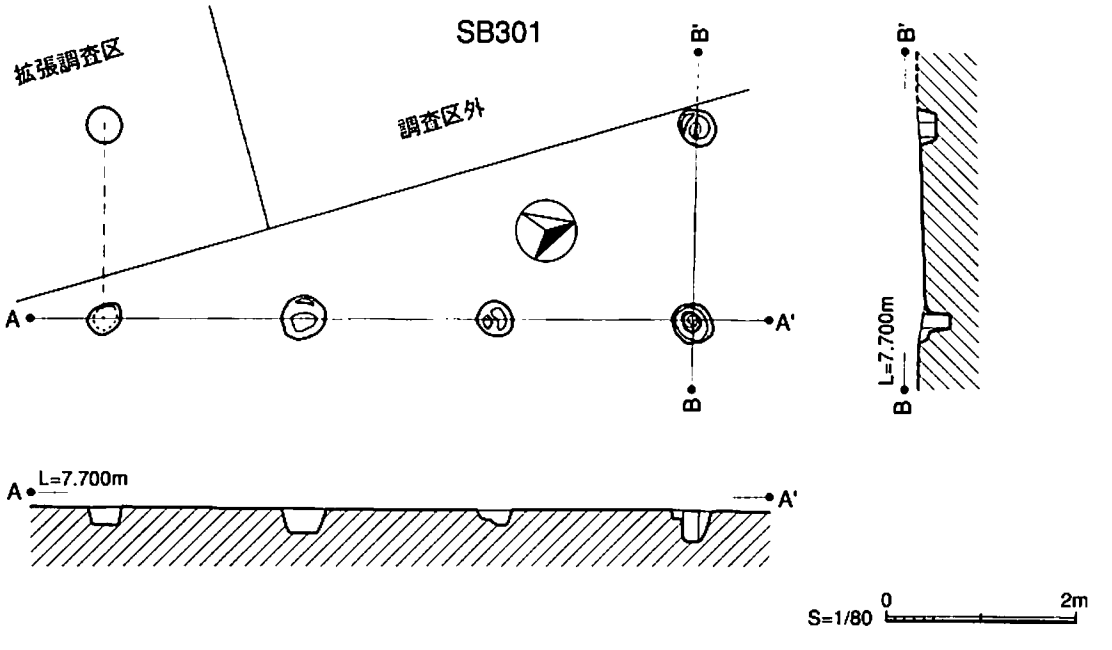
SD304は調査区の中央部でSB301に隣接し、ほぼ東西に伸びる溝で、長軸3.00m以上、短軸0.80m、深さ0.16mを測る。西部は調査区外に伸びると思われるので、全体の規模は不明である。

SD305(第54図)

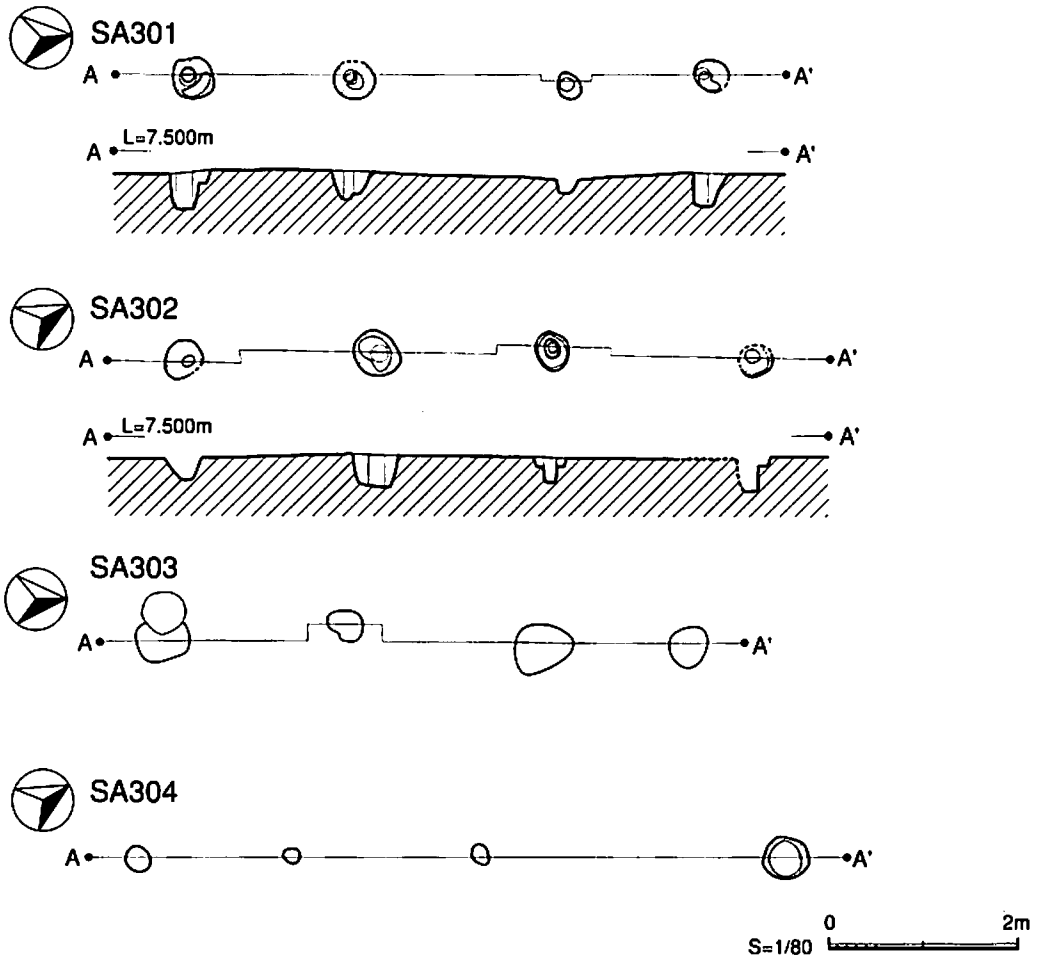
SD305は調査区の中央部でSB301に隣接し、ほぼ南北に伸びる溝で、長軸7.06m、短軸0.32m、深さは0.04mを測る。



第51図　上小田宮の前3区竪穴住居跡（SI301）実測図及び出土遺物実測図



第52図　掘立柱建物跡（SB301）実測図



第53図　柵列跡（SA301・302・303・304）実測図

（寸法は検出面で計測したもの）

遺構番号	間数	桁長		梁長		建物の向き	型式	方位	桁行平均		梁行平均		柱穴直径	柱穴深さ
		m	尺	m	尺				m	尺	m	尺	cm	cm
SB301	3×(1)	6.3	20.8	(2.0)	(6.6)	南北	側柱	N 75° W	2.1	6.9	-	-	32～44	18～28

表21　上小田宮の前3区ＳＢ計測表

SD306(第54図)

SD306は調査区の南側に位置し、北部は調査区外に出ている。ほぼ南北に伸びる溝で、長軸6.48m以上、短軸0.68m、深さ0.06mを測る。

(5) 土坑

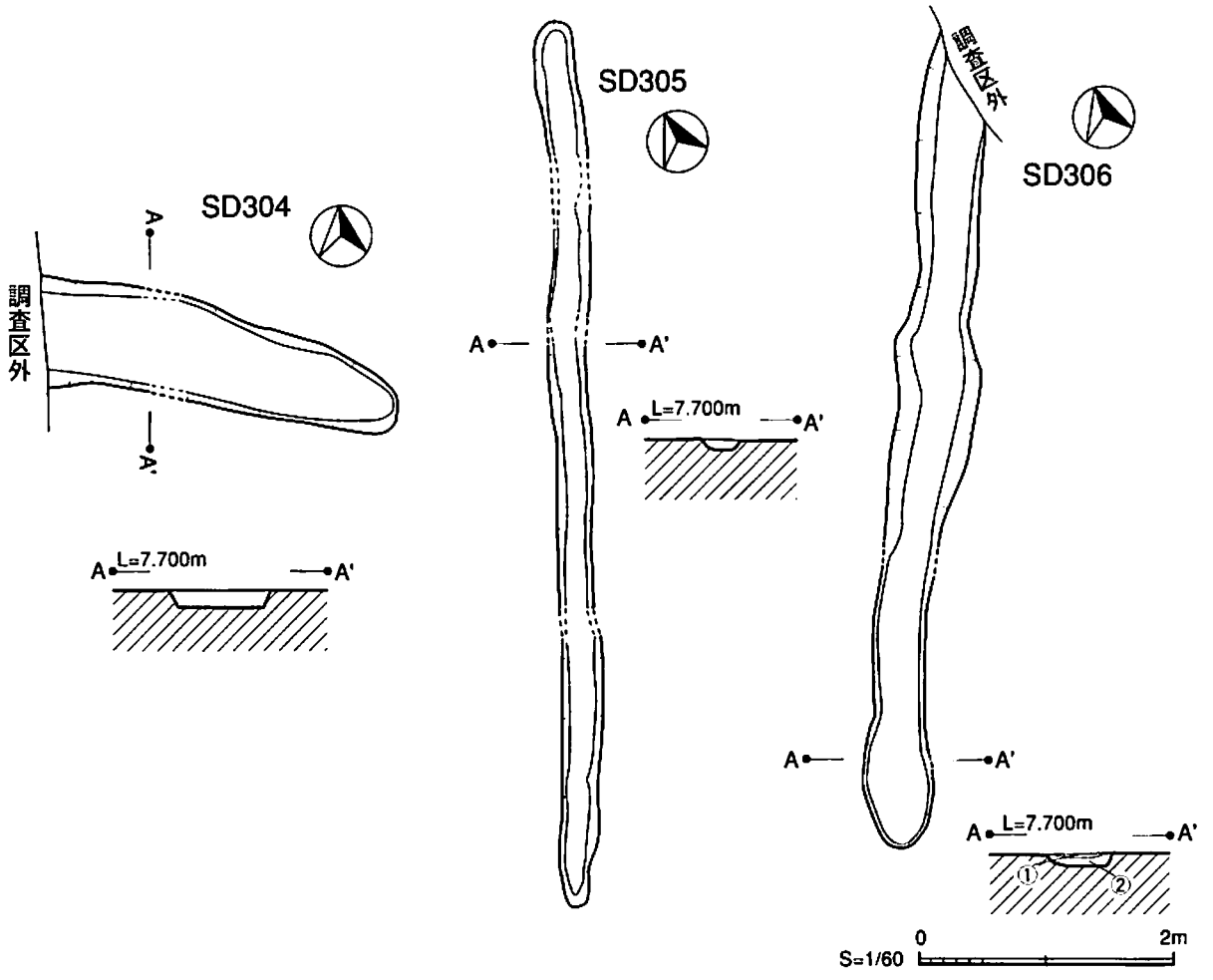
SK305(第55図)

SK305は調査区の南側に位置し、長軸1.26m、短軸0.97m、深さ0.15mを測る。平面形は不整な楕円形で、断面形は浅い皿状で二段掘りである。覆土は①・②層に分層できる。

SK306(第55図)

SK306は調査区の北側に位置し、長軸1.50m、短軸0.60m、深さ0.14mを測る。平面形は不整で長い楕円形、断面形は浅い皿状を呈している。覆土は1層のみで、上層に浮いた状態で遺物が出土している。

33はこの土坑から出土した土師器の甕である。



第54図　溝跡（SD304・305・306）実測図

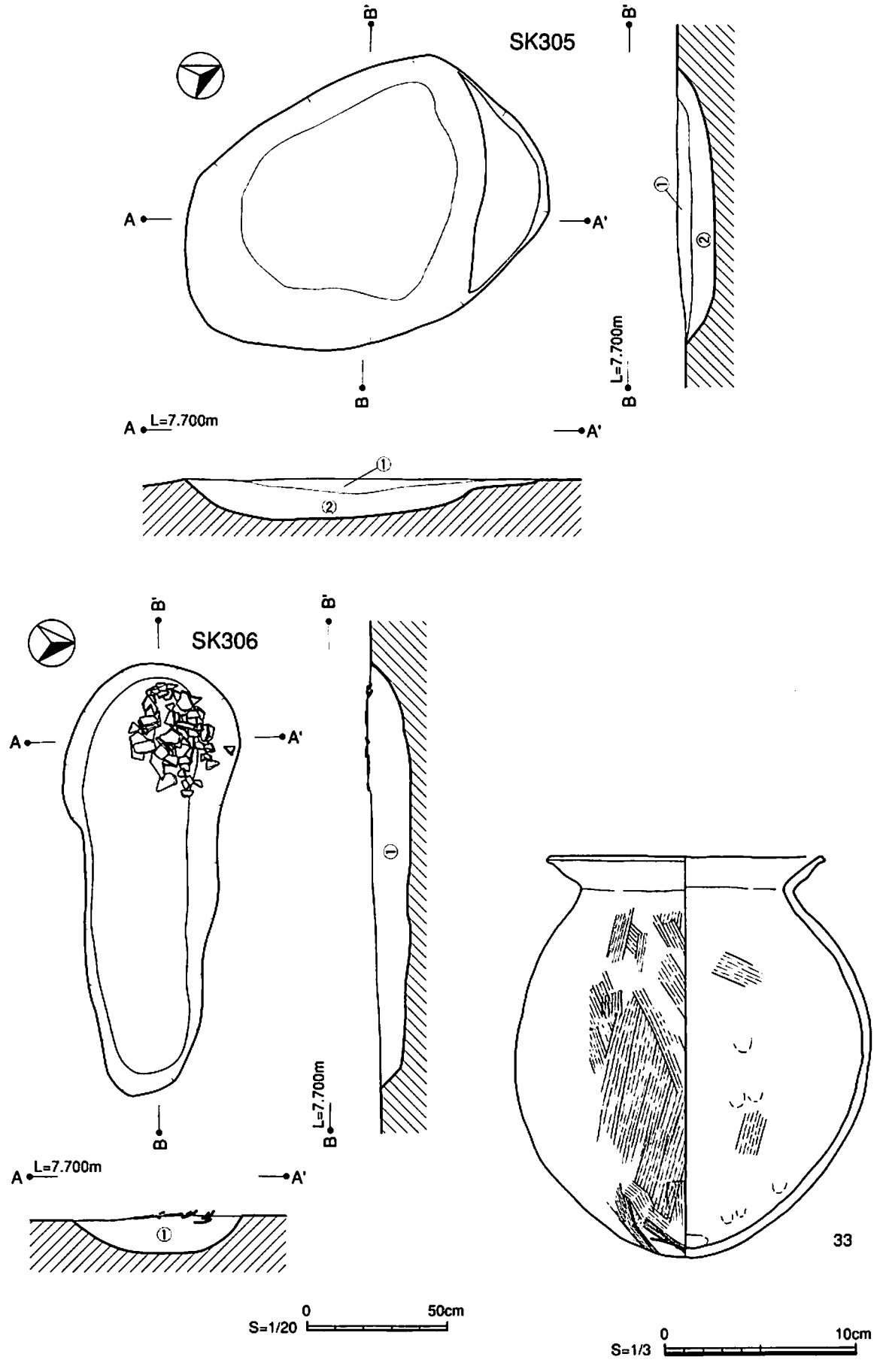
（寸法は検出面で計測したもの）　（単位：m）

遺構名	遺構番号	長軸	短軸	深さ	備　考
竪穴住居跡	SI301	4.12	4.09	0.18	遺物出土
溝跡	SD304	3.00～	0.80	0.16	
	SD305	7.06	0.32	0.04	
	SD306	6.48～	0.68	0.06	
土坑	SK305	1.26	0.97	0.15	
	SK306	1.50	0.60	0.14	遺物出土

表22　上小田宮の前3区検出遺構一覧表

遺構番号	層位	特　徴
SI301	①層	暗黒褐色土。炭化物が微量に混入。
	②層	暗褐色土。
	③層	暗黄褐色土。
SD306	①層	暗灰褐色土。多量の3mm～1cm大の焼土粒、微量の5mm～1cm大の炭化物が混入。
	②層	暗灰褐色土。
SK305	①層	暗黒褐色土。上面に土器片を含む。
	②層	暗灰褐色土。①層よりしまりあり。
SK306	①層	暗褐色土。

表23　上小田宮の前3区検出遺構土層注記表



第55図　土坑（SK305・306）実測図及び出土遺物実測図

第７節　上小田宮の前５区の調査

1．遺構分布(第56図)

上小田宮の前5区は東西約80m×南北約20mの東西に長い調査区を設定した。広さは1,601㎡である。この調査区で検出した遺構は掘立柱建物跡4棟、井戸跡4基、道路状遺構1条、溝跡8条、土坑4基である。

遺構の分布状況を見ると、調査区の中央部から東側に掘立柱建物跡3棟(SB501・502・503)と西側に掘立柱建物1棟(SB504)が分布している。建物の並びには規則性があり、方向性を意識している。これは道路状遺構・井戸跡にも言えることで、ほぼ方位に沿っている。井戸跡のうち1基(SE506)は調査区北東側に、3基(SE515・516・517)は調査区中央部の北側に分布しているが、出土遺物から考えて2時期(SE506・517)(SE515・516)に分けることができる。調査区の中央部よりやや西に道路状遺構(SF501)を検出した。この道路状遺構を挟んで東側に溝跡3条(SD510・511・512)を、西側に溝跡3条(SD513・514・515)を検出したが、方向性と位置関係から考えて道路状遺構に付随すると考えられる。道路状遺構と方向的に違う溝跡2条(SD516・517)は、切り合い関係から道路状遺構の時期とは異なる遺構と考えられる。土坑(SK512・522)は調査区の東側に分布するが、方向性に規則性は見られず時期が違うものと考えられる。

玉名平野条里跡の上小田地区ではN8°Eの土地割りを持つ条里地割が想定され、古代の生産遺跡である玉名平野条里跡との方向性の関連性が指摘されている。

2．遺構・遺物

各遺構・遺物の詳細は第57図～69図・表24～26のとおりである。以下は各遺構を概観する。

(1) 掘立柱建物跡

SB501(第57図)

SB501は調査区の東側に位置する遺構である。桁行5.7m(18.8尺)、梁行3.8m(12.5尺)の3間×2間の側柱建物で、桁行方向がN87°Wとほぼ東西方向である。柱間寸法は桁行の平均が約1.9m(6.3尺)、梁行の平均が約1.9m(6.3尺)である。柱穴は確認面では直径36～55㎝、深さ18～37㎝を測り、下端のレベルは一定でないが、ほぼ一直線に並ぶ。柱痕跡は桁行方向の2つを除く全ての柱穴から確認できた。

柱穴の掘り方覆土は確認面が1層で、その層と対象的な黒褐色を呈する粘質土である。柱痕跡に入った土はやや灰色のかかった暗褐色を呈する粘質土である。柱材が腐食とともに徐々に進入してきたのであろう。

SB502(第58図)

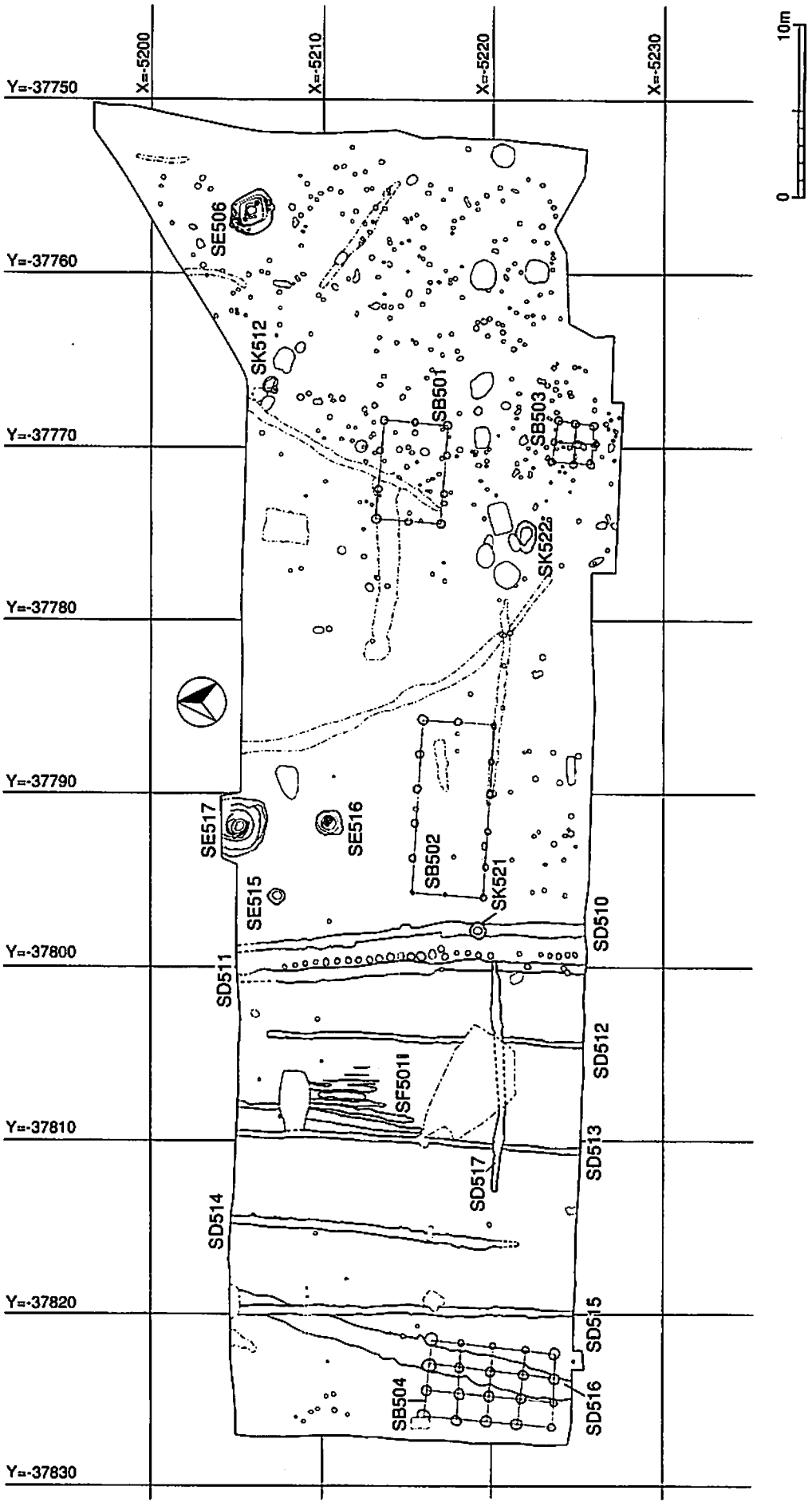
SB502は調査区の中央部に位置する遺構である。桁行10.1m(33.4尺)、梁行4.2m(13.9尺)の5間×2間の側柱建物で、桁行方向がN85°Wとほぼ東西方向である。柱間寸法は桁行の平均が約2.0m(6.6尺)、梁行の平均が約2.1m(7.0尺)である。柱穴は確認面では直径20～58㎝、深さ24～46㎝を測り、下端のレベルは一定でないが、ほぼ一直線に並ぶ。柱痕跡は南側の桁行方向に3つの柱穴から確認できた。

柱穴の掘り方覆土は確認面が1層で、その層と対象的な黒褐色を呈する粘質土である。柱痕跡には柱の木質が腐食した後に入り込んだ土層で埋まっており、やや灰色がかった粘質土である。

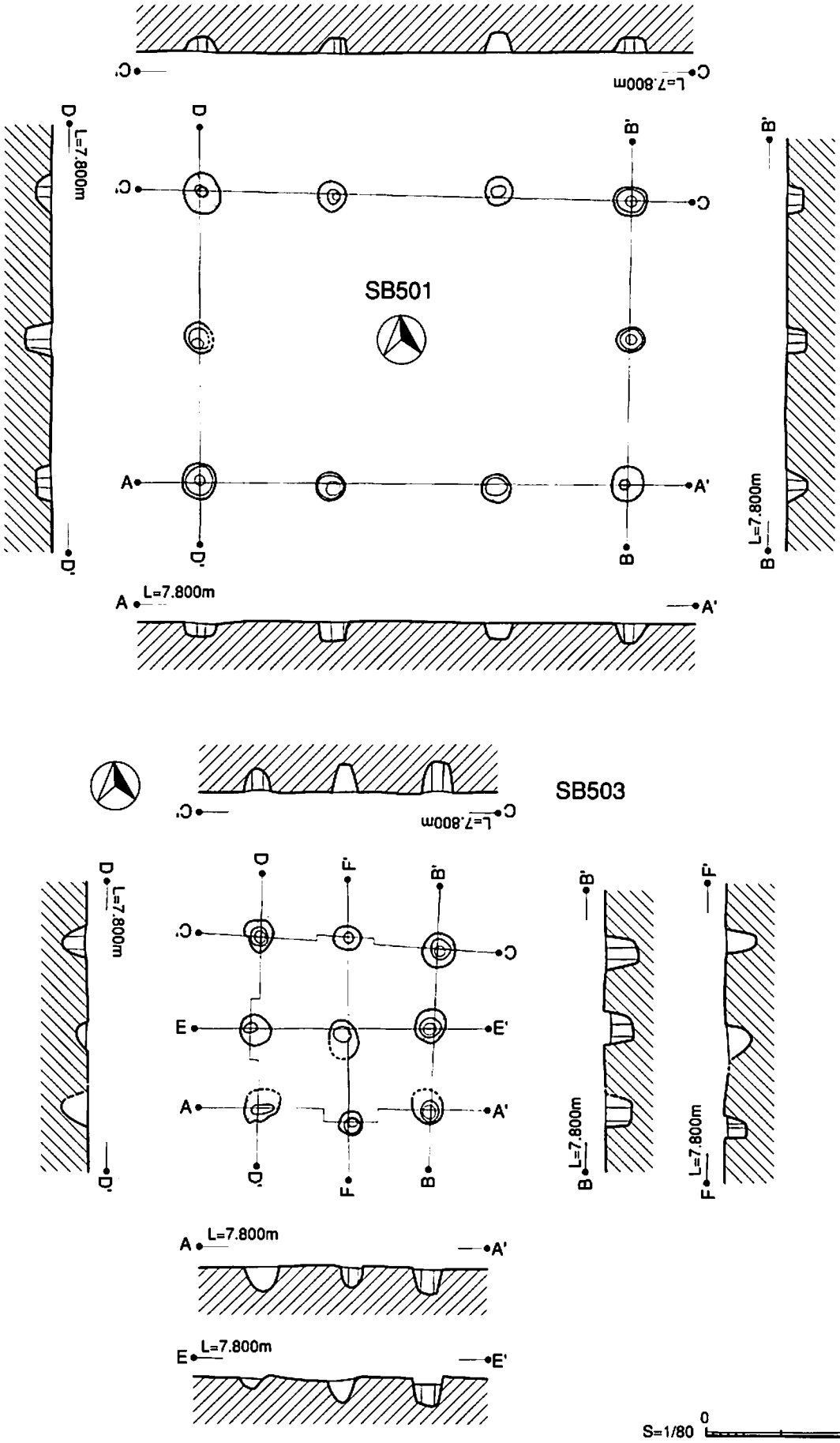
SB503(第57図)

SB503は調査区の南東側に位置する遺構である。桁行2.4m(8.0尺)、梁行2.2m(7.3尺)の2間×2間の総柱建物で、桁行方向がN86°Wとほぼ東西方向である。柱間寸法は桁行の平均が約1.2m(約4.0尺)、梁行の平均が約1.1m(3.7尺)である。柱穴は確認面では直径28～46㎝、深さ14～42㎝を測り、下端のレベルは一定ではないが、ほぼ一直線に並ぶ。柱痕跡は約半分の5つの柱穴で確認できた。

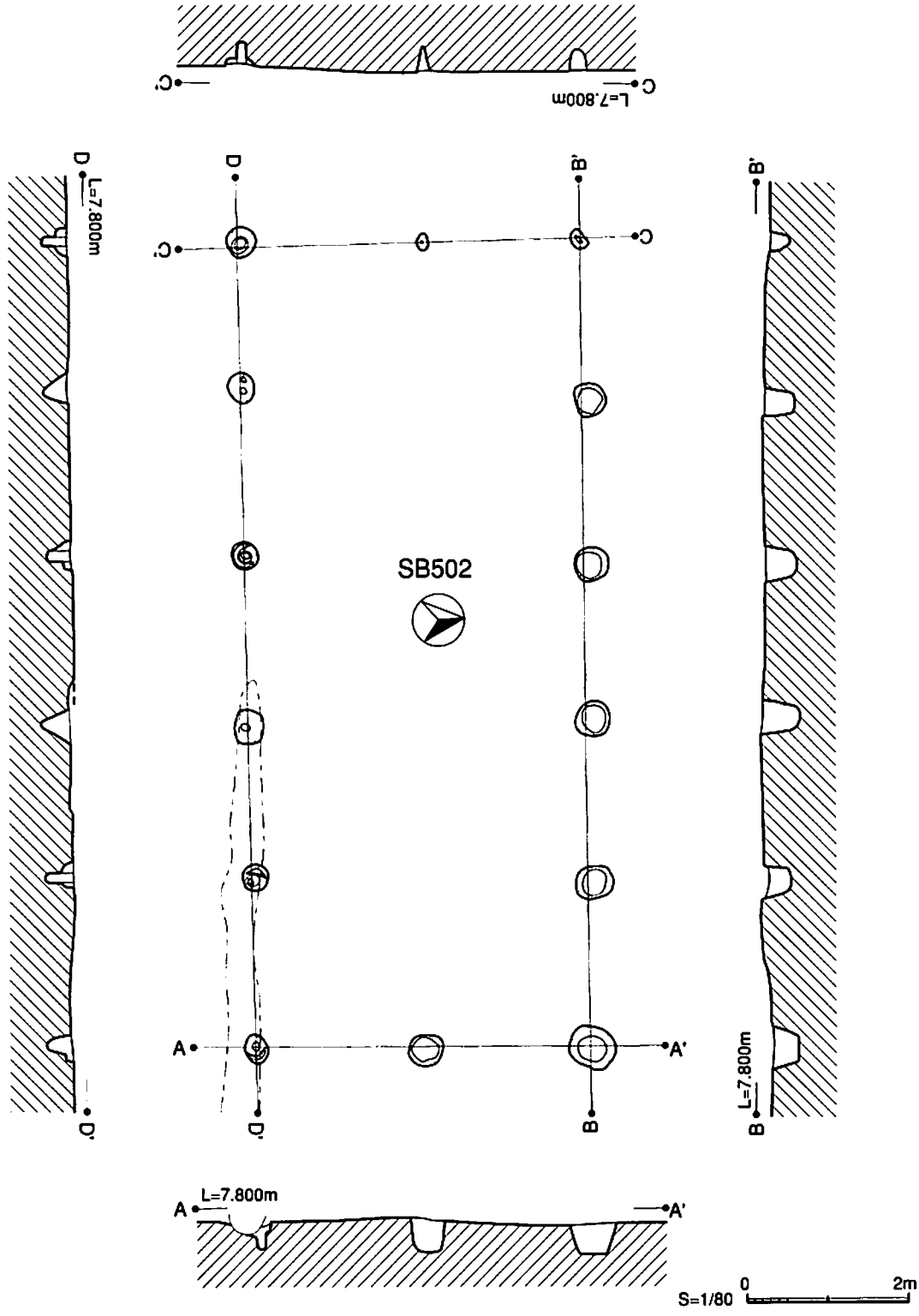
柱穴の掘り方覆土は黒褐色を呈する粘質土で、きめが細かくよくしまっている。柱痕跡に入る土も同じく黒褐色を呈し、わずかに焼土や炭化物を含む。



第56図　上小田宮の前5区遺構配置図（S=1/350）



第57図　掘立柱建物跡（SB501・503）実測図

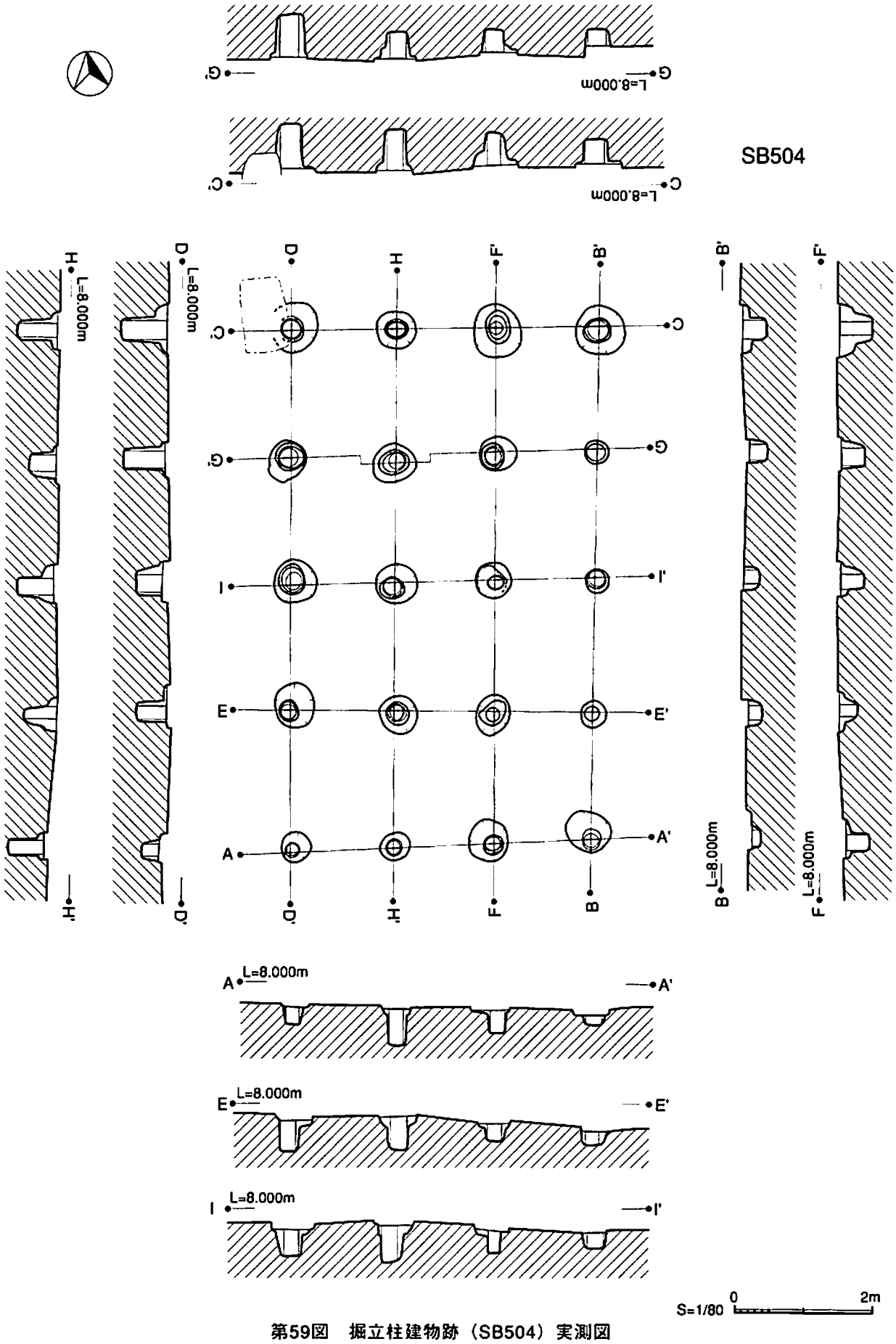


第58図　掘立柱建物跡（SB502）実測図

（寸法は検出面で計測したもの）

遺構番号	間数	桁長		梁長		建物の向き	型式	方位	桁行平均		梁行平均		柱穴直径	柱穴深さ
		m	尺	m	尺				m	尺	m	尺	cm	cm
SB501	3×2	5.7	18.8	3.8	12.5	東西	側柱	N 87° W	1.9	6.2	1.9	6.3	37～55	18～37
SB502	5×2	10.1	33.4	4.2	13.9	東西	側柱	N 85° W	2.0	6.7	2.1	7.0	20～58	24～46
SB503	2×2	2.4	7.8	2.2	7.4	東西	総柱	N 86° W	1.2	3.9	1.1	3.6	28～46	14～42
SB504	4×3	7.5	24.7	4.4	14.6	南北	総柱	N 6° E	1.9	6.2	1.5	4.9	34～78	20～68

表24　上小田宮の前5区ＳＢ計測表



第59図　掘立柱建物跡（SB504）実測図

SB504(第59図)

SB504は調査区の南西隅に位置する遺構である。桁行7.5m(24.8尺)、梁行4.4m(14.6尺)の4間×3間の総柱建物で、桁行方向がN6°Eとほぼ南北方向である。柱間寸法は桁行の平均が約1.9m(約6.3尺)、梁行の平均が約1.5m(約5.0尺)である。柱穴は確認面では直径34～78cm、深さ20～68cmを測り、下端のレベルは一定ではないが、ほぼ一直線に並ぶ。柱痕跡は全ての柱穴から確認でき、そのほとんどが二段掘りを施している。

柱穴の掘り方覆土は確認面がⅢ層で、その層と対象的な黒褐色を呈する粘質土である。柱痕跡には柱の木質が腐食した後に入り込んだ土層で埋まっており、やや灰色がかった粘質土である。

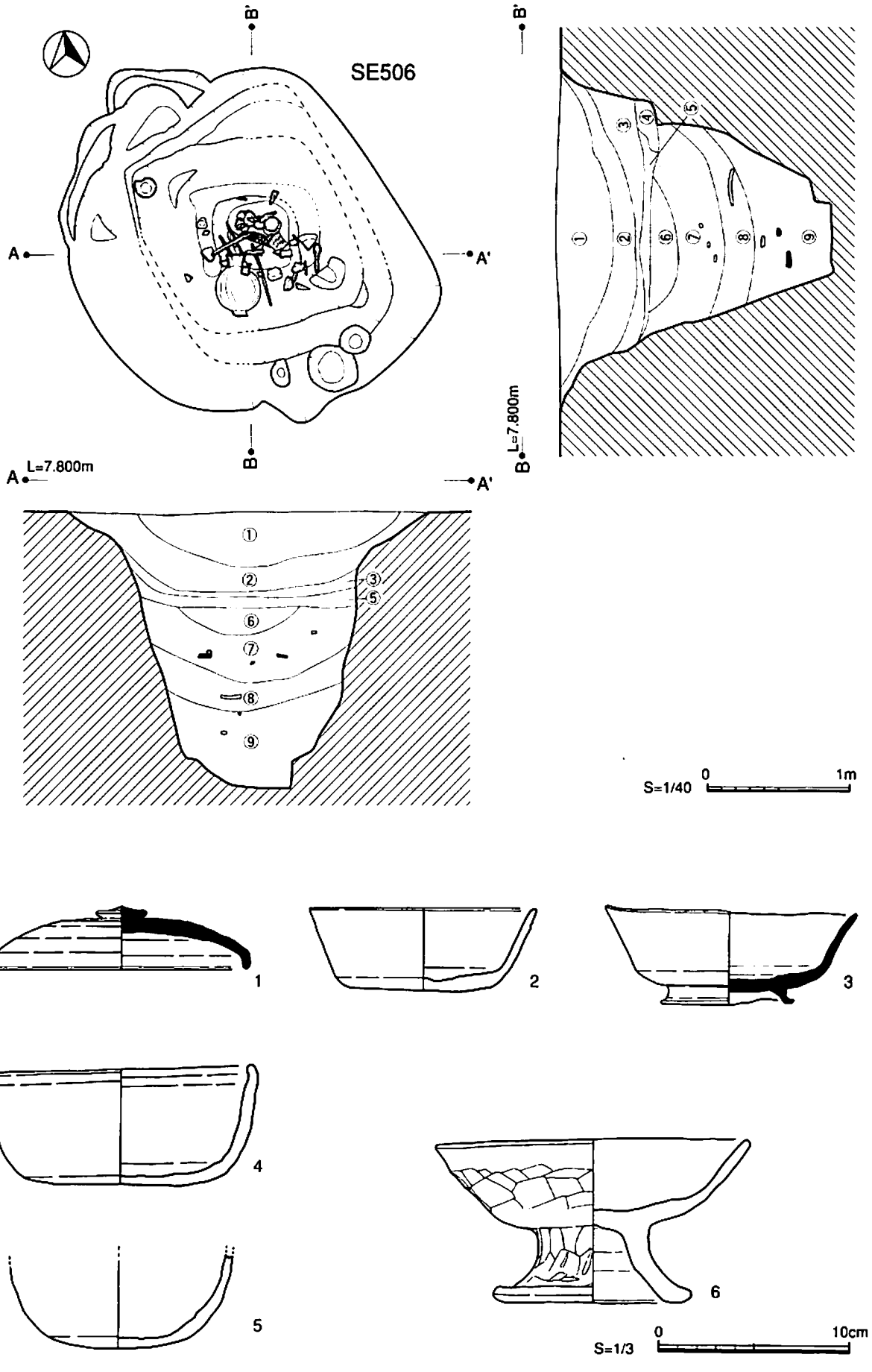
(2) 井戸跡

SE506(第60図・61図)

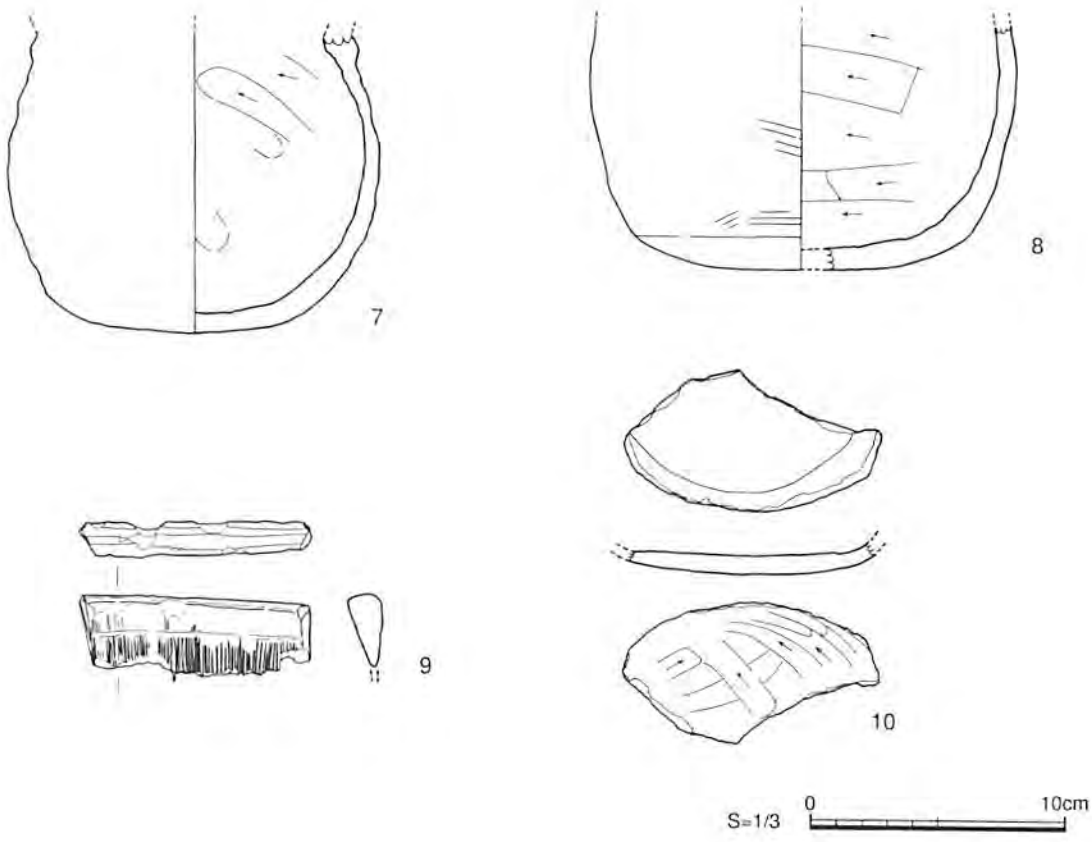
SE506は調査区の北東側に位置する遺構である。平面形はほぼ円形で、確認面での径は長軸(A－A')2.54m、短軸(B－B')2.40mを測る。確認面から0.67mほどの深さのところに1段あり、その中心付近に一回り小さな方形の掘り方を持つ。径は1.52mほどで、そのままその面からほぼ垂直に落ちている。深さは確認面から1.94mを測る。この段差は井戸側などを設置した時のものか、井戸枠を抜き取る際に広げた跡のどちらかと推定できる。

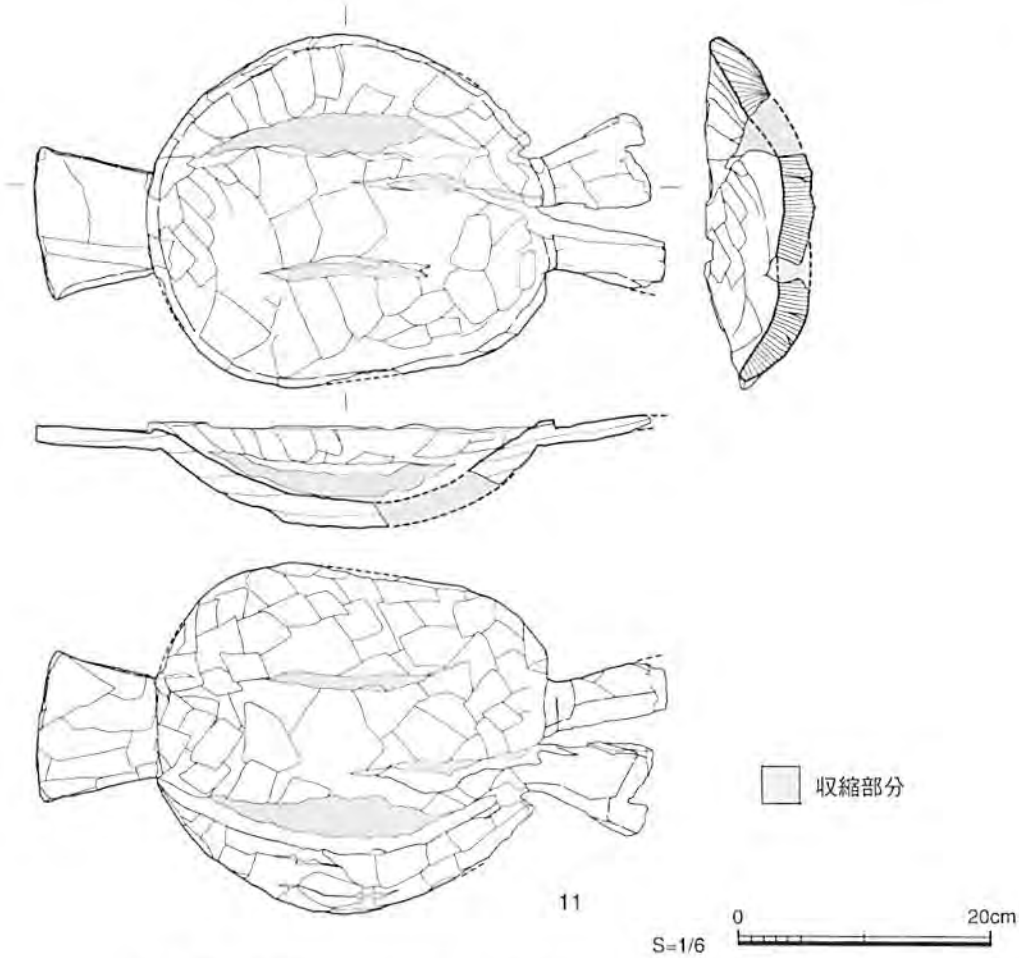
覆土は確認面から大きく9層に分けた。①層は暗褐色を呈し、粒子が細かく強いしまりがあり、弱い粘性がある。②層は黒褐色を呈し、①層に近いが黒色土の粘質土が混じり、全体的に黒っぽい土色である。③層は黒褐色土に黄色土がブロック状に混じる(9：1)。②層と同じく粘質土である。④層は明褐色土に灰色土の粘質土が混じる(8：2)。粘質、しまりともやや弱い。⑤層は茶褐色土に灰色土の粘質土が混じる(7：3)。④層に比べ粘質、しまり共に強い。⑥層は黒灰色を呈し、粘質土できめが細かく、微量に炭化物を含む。⑦層は黒灰色土に青灰色土がまばらに混じる(9：1)。多量の遺物が含まれる。⑧層は青灰色土に層状に黒色土が堆積し、⑦層同様に多量な遺物が含まれる。⑨層は黒色土を呈し、⑥～⑧層と同様に粘性がある。自然遺物の堆積による泥炭層で湧水がある。

第60図1～6・第61図7～11はこの井戸跡から出土した遺物である。1は須恵器の杯蓋で、擬宝珠のツマミを持つものである。ツマミ近くには回転ヘラケズリが施されている。2・10は土師器の杯である。2は口径11.9cm、器高4.4cmを測り、口縁部が開いており、器高が口径に比べ低い。10は全体に丁寧に漆が施されている。割れた状態で出土したが、接合できる遺物が確認できなかったことから、井戸廃棄時に意図的に割られ投げ込まれたものだと推測され、祭祀用に使われたと考えられる。3は須恵器の高台付杯で、口径13.05cm、器高4.9cm、高台径6.7cmを測る。高台の端部は開き、意図的に割られている。4は土師器の鉢で、内外器面に赤色顔料を施している。5・7・8は土師器の甕で、口縁部が欠落し、摩滅がはげしく全体が不明確である。6は土師器の高杯で、内外器面に赤色顔料を施している。この遺物は井戸の北西側の隅に供えられるように据えられており、井戸廃棄時の祭りと考えられる。9・11はこの井戸から出土した木器である。9は横櫛で、井戸内の⑧層から出土した。材としてはハイノキ科ハイノキ属が使用されている。11は把手付き盤で、井戸内の⑦層から出土した。材としてはバラ科サクラ属が使用されている。釣瓶として利用したものであろう。

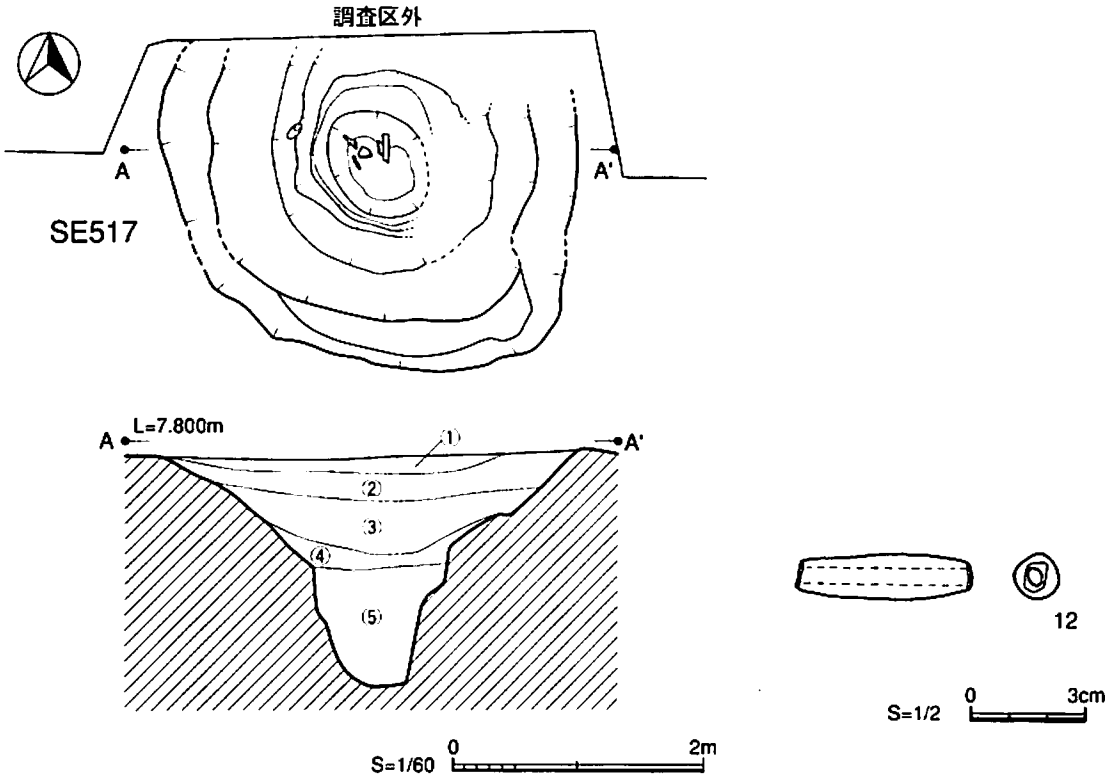


第60図　井戸跡（SE506）実測図及び出土遺物実測図（1）





第61図　井戸跡（SE506）出土遺物実測図（2）



第62図　井戸跡（SE517）実測図及び出土遺物実測図

SE517(第62図)

SE517は調査区の中央北部に位置し、遺構の北側が調査区外に入るため全体の規模は不明である。検出範囲より平面形はほぼ円形で、長軸(A－A')3.30m、短軸2.40m以上を測る井戸跡である。上面から階段状に3段に段掘りされ、井戸の途中まで降りている。深さは確認面から1.82mを測る。この段差はSE506と同様に、井戸側などを設置した時のものか、井戸枠を抜き取った際に掘り広げた跡のもののどちらかと推定される。

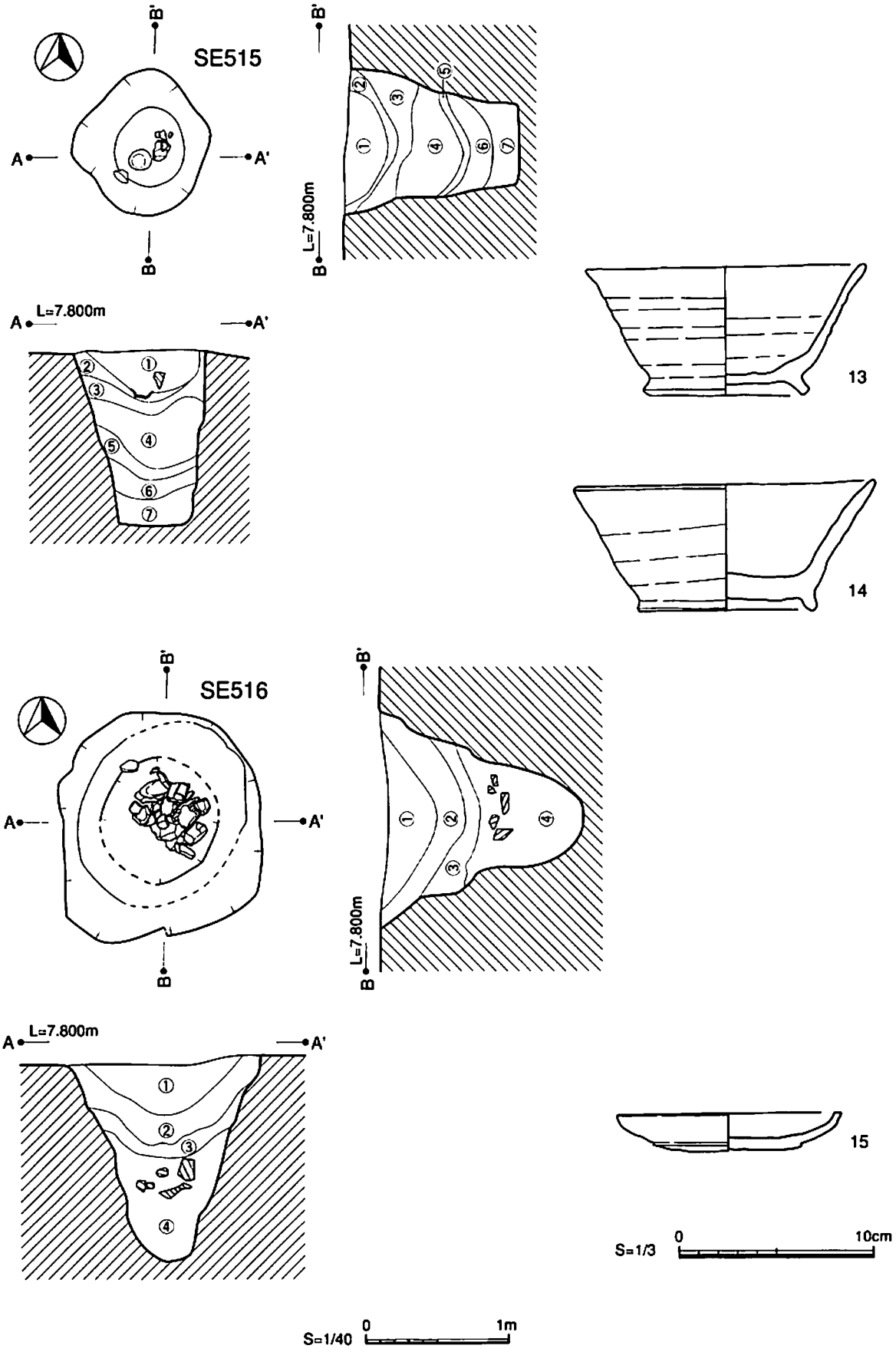
覆土は確認面から大きく5層に分けた。①～④層は暗褐色土に灰褐色土が混じる(5:5)。粒子が細かく強いしまりがあり、炭化物が含まれる。⑤層は暗灰褐色を呈する粘質土で、湧水がある。

12はこの井戸跡から出土した土錘である。出土遺物はこの土錘と、器形が分からない摩滅のはげしい数点の土器片にとどまった。

SE515(第63図)

SE515は調査区の中央北部に位置する遺構である。平面形はほぼ円形で、確認面での径は長軸(B－B')1.0m、短軸(A－A')0.88m、深さ1.2mを測る。断面形は上面から傾斜して急激に落ち、筒状を呈している。井戸としては素掘りのものである。この井戸の②層と⑦層から高台付椀が出土している。特に②層出土の14は井戸の廃棄時における祭祀的な様相をみせている。

覆土は確認面から大きく7層に分けた。①層は暗褐色を呈し、炭化物が微量に混入する。②層は黄茶褐色土に灰褐色土が混じる(8：2)。極小のブロックを含み、よくしまる。③層は暗褐色土に灰褐色土と黄茶褐色土が混じる(6：2：2)。粒子が細かく強いしまりがある。④層は暗褐色土に灰褐色土と黄茶褐色土が混じる(7：2：1)。③層と同様に粒子が細かく強いしまりがある。⑤層は黄茶褐色土に灰色土が混じる(9：1)。粘質土に砂質土が少量含まれる。⑥層は灰色土に黄茶褐色土が混じる(8：2)。粘質、しまり共にやや強い。⑦層は灰色土に黄茶褐色土が混じる(8：2)。⑥層に比べ粘質、しまり共に強い。



第63図　井戸跡（SE515・516）実測図及び出土遺物実測図

13・14はこの井戸跡から出土した遺物で、土師器の高台付椀である。14は内外器面に赤色顔料を施している。この遺物は井戸を埋め戻した後に新たに②層を掘り直して、遺物を据えていたような状況で出土した。これは井戸廃棄時の祭祀に関わる儀礼的な役割を想定できる。13は14と同様に内外器面に赤色顔料を施しているが、出土層は⑦層で、井戸が廃棄される前か、直前の遺物と考えられる。

SE516(第63図)

SE516は調査区の中央部に位置し、平面形は不整の円形で、確認面での径が長軸(B－B')1.48m、短軸(A－A')1.34mを測る。上面から3段に段掘りされ、井戸途中まで降りている。深さは確認面から1.36mを測る。④層上面には拳大の角礫が敷き詰められているのを確認した。これは井戸の水を汲み上げる時に泥を舞い上げないための工夫だと考えられる。この井戸では、唯一敷き詰められた角礫の中から土師器のほぼ完形の杯が1点出土した。

覆土は確認面から大きく4層に分けた。①層は灰褐色を呈し、鉄分が微量に混入する。②層は暗灰褐色を呈し、粘性が弱い。③層は灰色を呈し、黄茶褐色土をブロック状に大量に含み、②層より粘性が強い。④層は青灰色を呈し、黄茶褐色土が微量に混入する粘質土で、湧水がある。

15はこの井戸から出土した土師器の杯で、口径11.4cmを測る。外器面は口縁下に丁寧な横ナデ調整を施してある。

(3) 道路状遺構

SF501(第65図)

SF501は調査区の中央部に位置する遺構である。遺構の北側と南側が調査区外に入るため全体の規模は不明であるが、検出範囲より長軸(南北)約19.3m以上、短軸(東西)約5.5mの南北に伸びる道路状遺構である。この遺構は両側にSD512・513の細長い溝跡(側溝)を備えつけた構造である。路面には硬化面の形成は見られないが、東側を中心に9条以上の轍跡を残す。

(4) 溝跡

SD510(第66図)

SD510は調査区の中央部に位置する遺構である。北側と南側が調査区外に入るため全体の規模は不明であるが、検出範囲より長軸19.1m以上、短軸0.90m、深さ0.24mのほぼ南北に伸びる溝跡で、掘り方の形状は全体的に逆蒲鉾形を呈している。SK521に切られている。

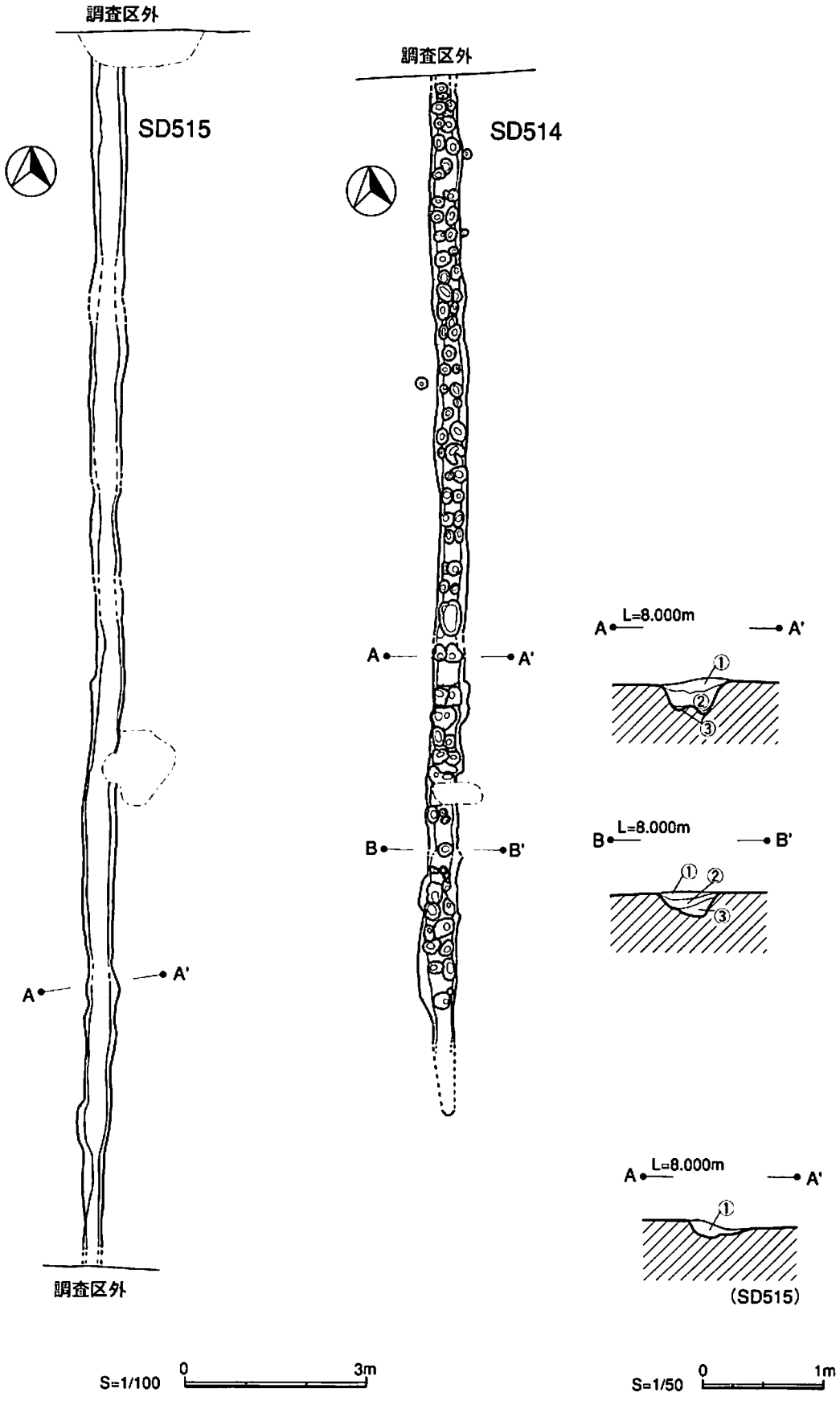
SD511(第66図)

SD511は調査区の中央部に位置する遺構である。北側と南側が調査区外に入るため全体の規模は不明であるが、検出範囲より長軸19.15m以上、短軸0.85m、深さ0.05mのほぼ南北に伸びる溝跡で、掘り方が浅く、形状ははっきりしない。覆土は暗青灰色を呈する砂質土で、サラサラとしてしまりがない。酸化鉄、マンガン粒子を少量含む。

遺構の東側からは連続するピット状の浅い窪みを検出した。他の調査事例から道路状遺構と考えた。ただ、このような遺構は傾斜面に造られる場合が多いが、ここではほぼ平坦地で、足がかりとしての窪みにあまり意味がないと考えられる。

SD512(第65図)

SD512は道路状遺構(SF501)の東側に位置する遺構である。南側が調査区外に入るため全体の規模は不明であるが、検出範囲より長軸18.2m以上、短軸0.35m、深さ0.14mのほぼ南北に伸びる溝跡で、掘り方の形状は全体的に逆蒲鉾形を呈している。この遺構はSF501に伴う側溝として判断した。覆土は暗黄灰色を呈する砂質土で、サラサラとしてしまりがない。酸化鉄、マンガン粒子を少量含む。



第64図　溝跡（SD514・515）実測図

SD513(第65図)

SD513は道路状遺構(SF501)の西側に位置する遺構である。北側と南側が調査区外に入るため全体の規模は不明であるが、検出範囲より長軸19.6m以上、短軸0.43m、深さ0.17mのほぼ南北に伸びる溝跡で、掘り方の形状は全体的に逆蒲鉾形を呈している。この遺構はSF501に伴う側溝として判断した。覆土は褐灰色を呈する強い粘質土である。酸化鉄、マンガン粒子を少量含む。

SD514(第64図)

SD514は調査区の西側に位置する遺構である。北側が調査区外に入るため全体の規模は不明であるが、検出範囲より長軸15.5m以上、短軸0.63m、深さ0.30mのほぼ南北に伸びる溝跡で、掘り方の形状は全体的に不定形である。この遺構の底部から二列の杭状の跡を検出したが、用途については不明である。

覆土は確認面から大きく3層に分けた。①層は黄灰色を呈し、弱いしまりがあり粘性がある。少量のマンガンと酸化鉄を含み、多量の2～3cmのブロック状の明褐色砂質土が混じる。②層は暗褐色を呈し、①層よりはしまりがないが、強い粘性を帯びる。少量のマンガンと酸化鉄を含み、多量の2～3cmのブロック状の黄色砂質土が混じる。③層は黄褐色を呈し、①層よりはしまりがないが強い粘性を帯びる。少量のマンガンと酸化鉄を含み、少量の黄色砂質土が混じる。

SD515(第64図)

SD515は調査区の西側に位置する遺構である。南側が調査区外に入り、北部は撹乱されているため全体の規模は不明であるが、検出範囲より長軸19.4m以上、短軸0.60m、深さ0.66mのほぼ南北に伸びる溝跡で、掘り方の形状は全体的に逆蒲鉾形を呈している。覆土は暗黄灰色を呈する。しまりがなく、弱い粘質土である。多量にマンガンと酸化鉄を含み、ブロック状の黄色砂質土が混じる。

SD516(第67図)

SD516は調査区の西側に位置する遺構である。南部は調査区外に入り、北部は撹乱されているため全体の規模は不明である。また、SD515に切られている。検出範囲より長軸18.7m以上、短軸1.80m、深さ0.74mのほぼ南北に伸びる溝跡である。遺構の断面観察の結果、一度掘られた後に再度掘り直しが行われたと思われる。

覆土は確認面から大きく7層に分けた。①層は暗灰色を呈し、しまりがない砂質土である。マンガン、酸化鉄の沈殿が見られる。②層は暗黄灰色を呈し、しまりはないが強い粘性がある。マンガン、酸化鉄の沈殿が見られる。③層は暗青灰色を呈し、しまりはないが強い粘性がある。④層は暗黄灰色を呈し、ややしまりがある粘質土である。暗黄灰色粘質土が混じる。⑤層は暗黄灰色を呈し、しまりはないが強い粘性がある。⑥層は明青灰色を呈し、非常に強い粘性がある。⑦層は暗灰色を呈し、非常に強い粘性がある。

16～18はこの溝跡から出土した遺物である。16は土師器の小型丸底壺で、口縁部から頸部は直線的に伸び、体部は球形となるが、底部は欠損している。17は土師器の甕で、外器面はハケ目調整の後丁寧にナデ調整を施している。18は磨製石鏃で、二等辺三角形を呈している。

SD517(第65図)

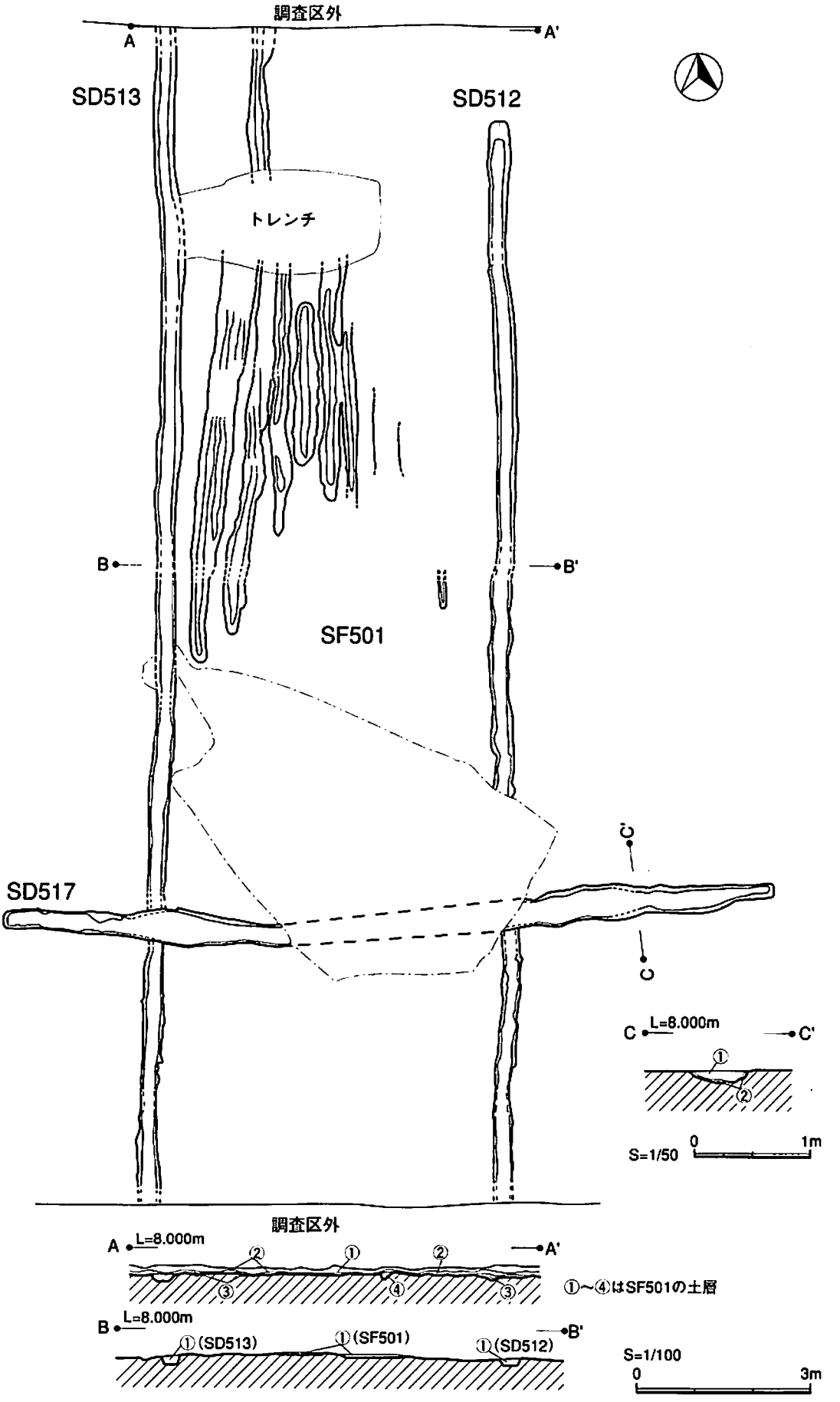
SD517は調査区の西側に位置する遺構である。検出範囲より長軸13.25m、短軸0.60m、深さ0.10mを測り、ほぼ東西に伸びる溝跡である。SD511・512・513を切っている。

(5) 土坑

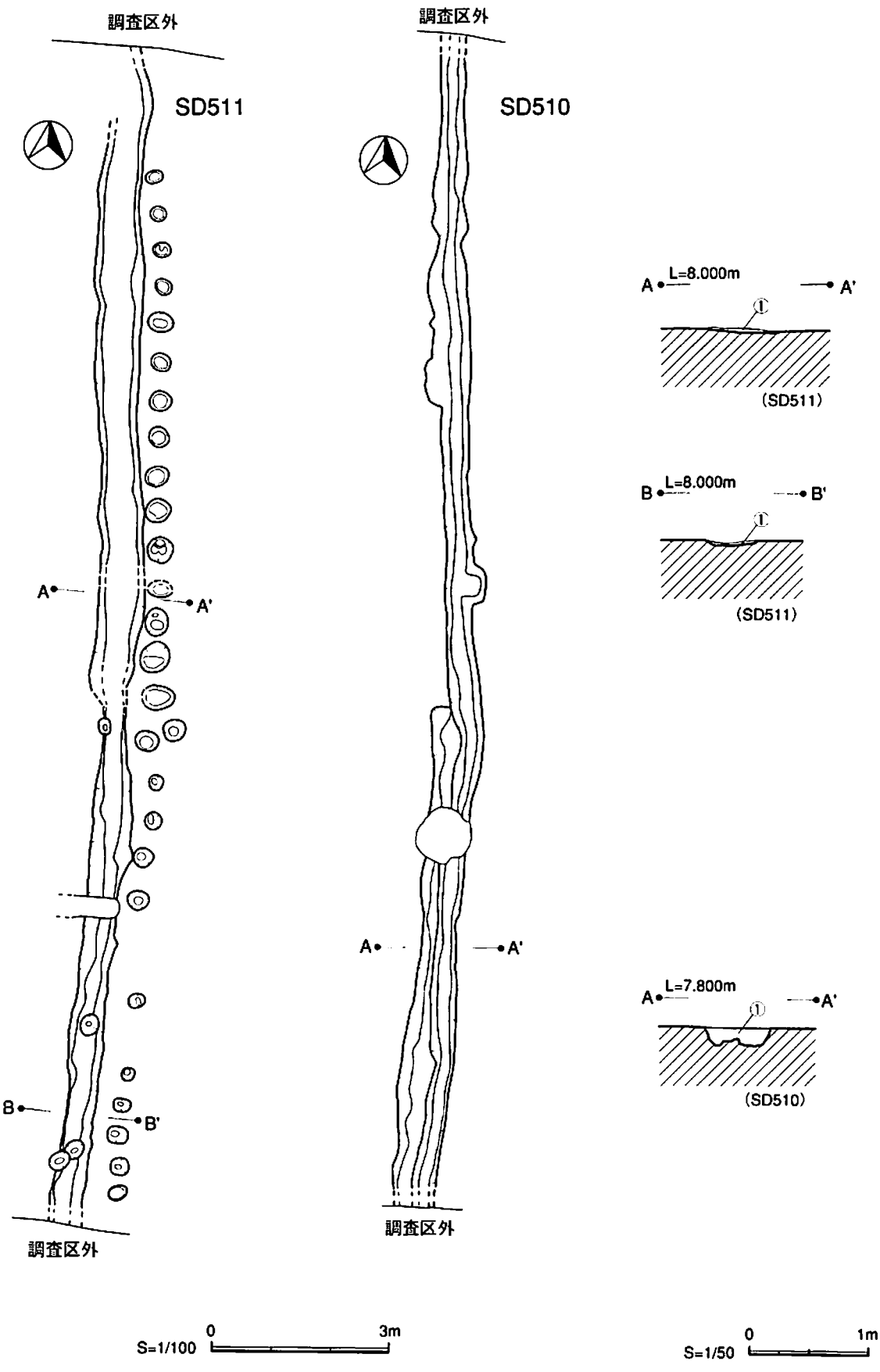
SK512(第68図)

SK512は調査区の北東部に位置する遺構である。検出範囲より長軸0.83m、短軸0.80m、深さ0.12mを測る。平面形は不整の円形、断面形は浅い皿状を呈している。覆土は暗褐色土で、弱い粘質土である。

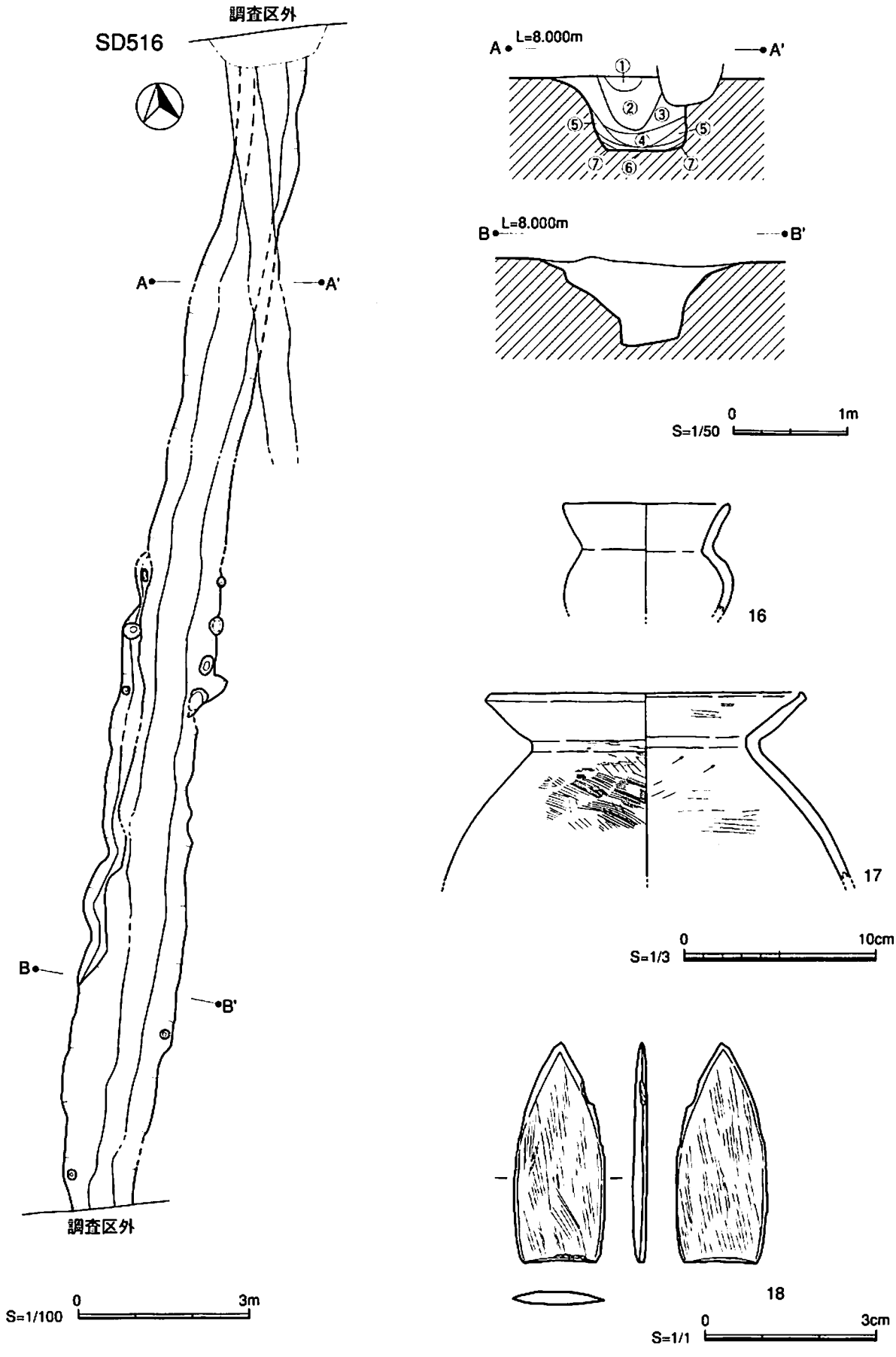
19は須恵器の蓋で宝珠のツマミが付く。



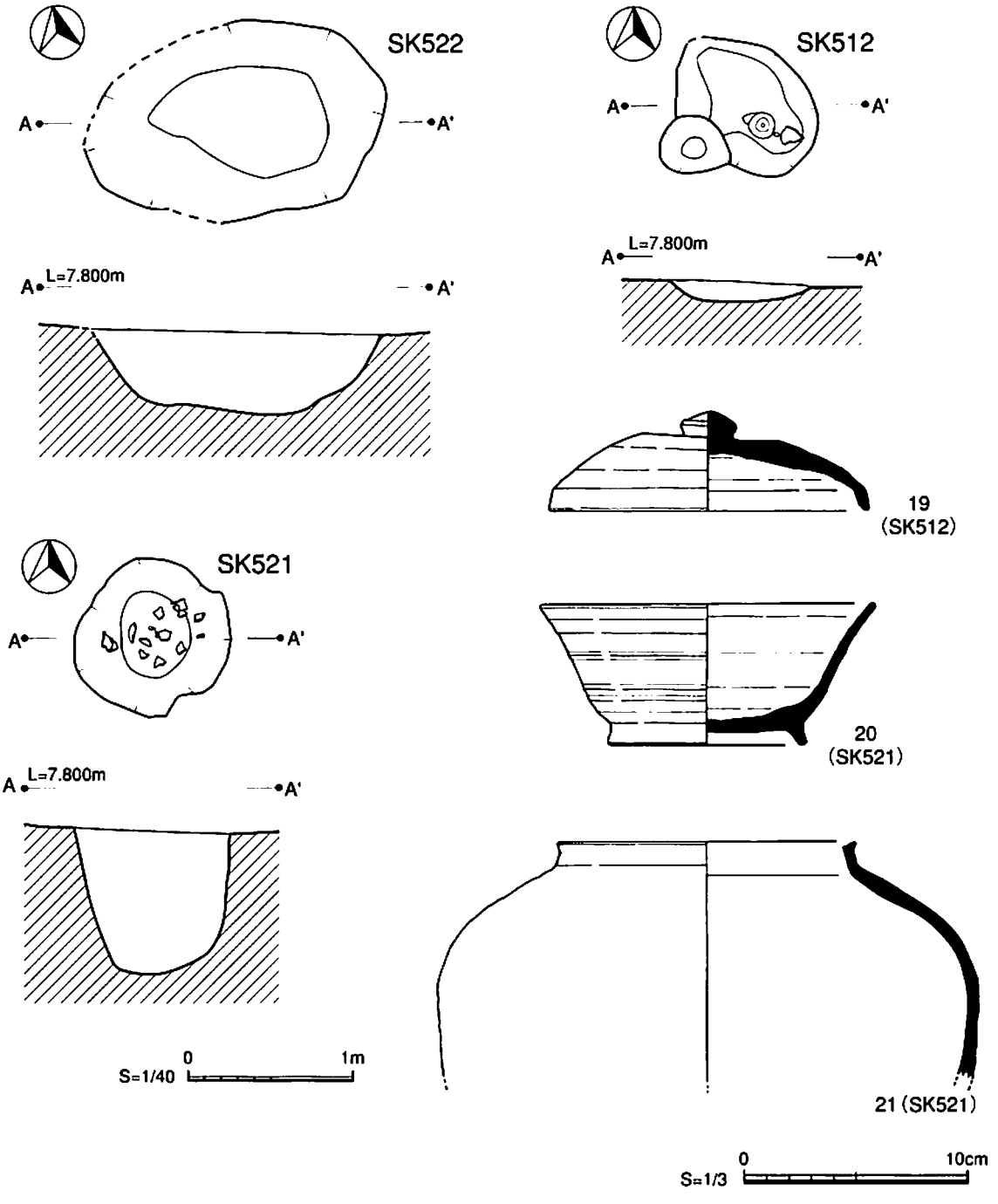
第65図　道路状遺構（SF501）・溝跡（SD512・513・517）実測図



第66図　溝跡（SD510・511）実測図



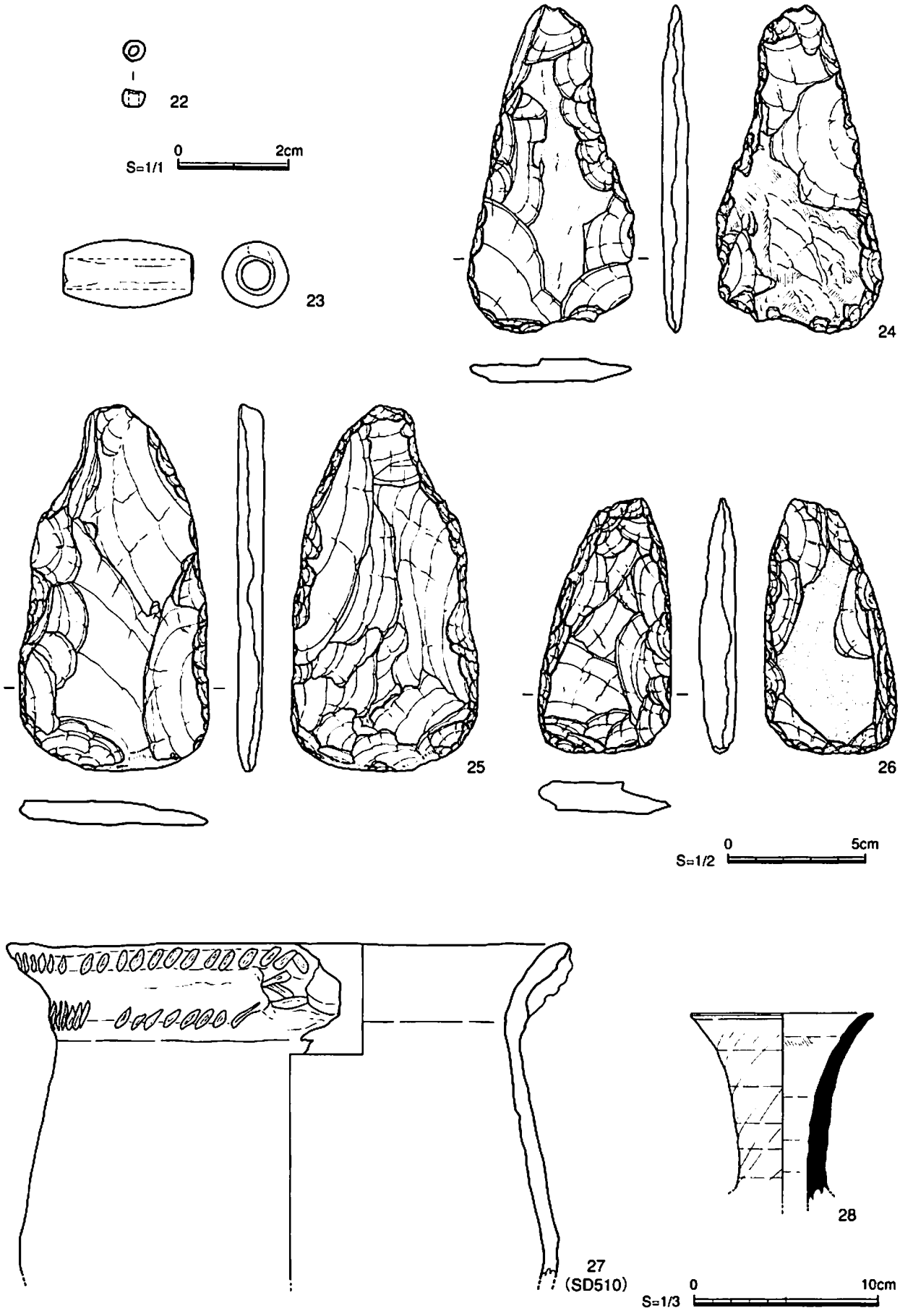
第67図　溝跡（SD516）実測図及び出土遺物実測図



第68図　土坑（SK512・521・522）実測図及び出土遺物実測図

SK521（第68図）

SK521は調査区の中央部に位置する遺構である。検出範囲より長軸0.94m、短軸0.94m、深さ0.86mを測る。平面形は不整の円形、断面形は筒状を呈している。覆土は暗褐色土で、弱い粘質土である。20・21はこの土坑出土の遺物である。20は須恵器の高台付杯である。21は須恵器の短頸壺である。復元口径13.2㎝を測る。



第69図　溝跡（SD510）・5区出土遺物実測図

SK522(第68図)

SK522は調査区の東側に位置する遺構である。検出範囲より長軸1.84m、短軸1.20m、深さ0.50mを測る。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈している。覆土は黒褐色土で、弱い粘質土である。

(6) その他

ここでは2. 遺構・遺物で遺構と共に述べられなかった遺物を概観する。

上小田宮の前5区出土遺物(第69図)

22～28は遺構・遺物で遺構と共に述べられなかった遺物で、出土地点、法量、調整、色調、胎土等の詳細については、観察表のとおりである。

22はガラス小玉である。23は土錘である。24～26は扁平打製石斧で、25は刃部に擦痕がある。27は北久根山式土器の深鉢で、頸部から口縁部にかけて二条の刻み目を巡らす。28は須恵器の長頸壺である。

(寸法は検出面で計測したもの)　　(単位：m)

遺構名	遺構番号	長軸	短軸	深さ	備　考
井戸跡	SE506	2.54	2.40	1.94	把手付き盤・櫛ほか遺物出土
	SE515	1.00	0.88	1.20	遺物出土
	SE516	1.48	1.34	1.36	遺物出土
	SE517	3.30	2.40～	1.82	木器、土錘出土
道路状遺構	SF501	19.3～	5.5～	0.25～	9条以上の轍跡
溝跡	SD510	19.10～	0.90	0.24	SK521に切られる、遺物出土
	SD511	19.15～	0.85	0.05	SD517に切られる
	SD512	18.20～	0.35	0.14	SD517に切られる
	SD513	19.60～	0.43	0.17	SD517に切られる
	SD514	15.50～	0.63	0.30	
	SD515	19.40～	0.60	0.66	SD516を切る
	SD516	18.70～	1.80	0.74	SD515に切られる、遺物出土
	SD517	13.25	0.60	0.10	SD511・SD512・SD513を切る
土坑	SK512	0.83	0.80	0.12	
	SK521	0.94	0.94	0.86	SD510を切る、遺物出土
	SK522	1.84	1.20	0.50	

表25　上小田宮の前5区検出遺構一覧表

遺構番号	層位	特　徴
SE506	①層	暗茶褐色土。強いしまりあり、弱い粘性あり。
	②層	黒褐色土。①層に近いが黒色の粘質土が混じり、全体的に黒っぽい土色。
	③層	黒褐色と黄色土のブロックが混在（9:1）。②層と同じく粘質土。
	④層	明黄色土と灰色土の粘質土が混在（8:2）。地山の崩壊土の可能性あり。
	⑤層	茶褐色土と灰色土の粘質土が混在（7:3）。粘質土ではあるが非常に詰まった硬い土。
	⑥層	黒灰色土。粘質土で非常にきめが細かく、微量に炭化物も確認できる。
	⑦層	黒灰色土と青灰色土がまばらに混在（9:1）。多量の遺物が確認できる。
	⑧層	青灰色土に層状に黒色土の堆積。⑦層同様、多量の遺物が確認できる。
	⑨層	黒色土。⑥～⑧層と同様に粘質土であるが、自然遺物（葉など）の堆積による土炭層。
SE515	①層	暗褐色土。炭化物が微量に混入。
	②層	黄茶褐色土と灰褐色土が混在（8:2）。
	③層	暗褐色土、灰褐色土、黄茶褐色土が混在（6:2:2）。
	④層	暗褐色土、灰褐色土、黄茶褐色土が混在（7:2:1）。
	⑤層	黄茶褐色土と灰色粘質土が混在（9:1）。
	⑥層	灰色粘土と黄茶褐色土が混在（8:2）。
	⑦層	灰色粘土と黄茶褐色土が混在（8:2）。全体的に⑥層より粘性が強い。
SE516	①層	灰褐色土。鉄分が微量に混入。
	②層	暗灰褐色弱粘質土。
	③層	灰色粘質土。黄茶褐色土が多量に混在。
	④層	青灰色粘土。バリエーションがある黄茶褐色土が微量に混入。
SE517	①層	暗褐色土（白褐色土）中量と、炭化物中量が混在。
	②～④層	注記なし。
	⑤層	暗灰色粘土。
SF501	①層	青灰色粘質土。弱いしまりあり、粘性なし。マンガン、酸化鉄分を多量に含む。
	②層	黄褐色砂質土。しまりなし。マンガン、酸化鉄分を微量に含む。
	③層	褐灰色粘質土。しまりなし、弱い粘性あり。マンガン、酸化鉄分を微量に含む。
	④層	黒褐色粘質土。弱いしまりあり、粘性あり。マンガン、酸化鉄分を多量に含む。
SD511	①層	暗青灰色砂質土。しまりなし、弱い粘性あり。少量のマンガンと酸化鉄、多量の約5㎜のブロック状明褐色砂質土を含む。
SD512（B-B'）	①層	暗黄灰色砂質土。弱いしまりあり、粘性なし。微量のマンガン、酸化鉄分と、まばらに約5㎜のブロック状黄色砂質土を含む。
SD513（A-A'）	①層	褐灰色粘質土。しまりなし、強い粘性あり。マンガン、酸化鉄分を少量含み、黄褐色粘質土が混じる。
SD513（B-B'）	①層	黒褐色粘質土。弱いしまりあり、粘性あり。マンガン、酸化鉄を多量に含む。
SD514	①層	黄灰色砂質土。弱いしまりあり、弱い粘性あり。少量のマンガン、酸化鉄分と、多量の約2～3㎝のブロック状明褐色砂質土を含む。
	②層	暗褐色粘質土。①層よりしまりなし、強い粘性あり。少量のマンガン、①層より少ない酸化鉄分と、多量の約2.5㎝のブロック状黄色砂質土を含む。
	③層	黄褐色砂質土。②層よりしまりなし、①層より強い粘性あり。②層より少ないマンガン、酸化鉄分と、①,②層より細かいブロック状黄色砂質土を含む。
SD515（A-A'）	①層	暗黄灰色砂質土。弱いしまりあり、弱い粘性あり。マンガン、酸化鉄分が多量に沈着し、黄色砂質土がブロック状で混入。
SD516（A-A'）	①層	暗黄灰色砂質土。しまりなし、粘性なし。マンガン、酸化鉄分が多く沈着し黄色砂質土がブロック状で入る。
	②層	暗黄灰色粘質土。しまりなし、強い粘性あり。マンガン、酸化鉄分が多量に沈着し黄色砂質土がブロック状で微量に混入。
	③層	暗青灰色砂質土。しまりなし、強い粘性あり。マンガン、酸化鉄分が多く沈着し、黄質砂質土がブロック状で多く入る。
	④層	暗黄灰色粘質土。弱いしまりあり、弱い粘性あり。マンガン、酸化鉄分が②層より多く沈着し、暗黄灰色砂質土が混在。
	⑤層	暗黄灰色粘質土。しまりなし、強い粘性あり。マンガン、酸化鉄分の沈着は少ないが黄灰色砂質土がブロック状で多量に混入。
	⑥層	明青灰色砂質土。しまりなし、非常に強い粘性あり。マンガン、酸化鉄分の沈着は少ないが暗黄灰色粘質土が少量混在。
	⑦層	暗灰色粘質土。しまりなし、非常に強い粘性あり。マンガン酸化鉄分の沈着はなく、黄色砂質土がブロック状で微量に混入。

表26　上小田宮の前5区検出遺構土層注記表

第８節　上小田宮の前６区の調査

１．遺構分布(第70図)

上小田宮の前6区は東西約60ｍ×南北約20ｍの東西に長い調査区を設定した。広さは1,143㎡である。この調査区で検出した遺構は井戸跡1基、溝跡4条、土坑2基、自然流路1条である。

遺構の分布状況を見ると、調査区の南西部に井戸跡(SE606)を検出したが、井戸に伴う建物群は検出できなかった。溝跡は調査区の東側に1条(SD601)、西側から2条(SD603・604)の南北に伸びるものと、調査区の南西側に東西方向に伸びる1条(SD602)を検出した。土坑は調査区の西側に2基(SK603・607)を検出した。自然流路は上小田宮の前5区から6区にかけて北西～南東に向かって検出することができたが、湧水による崩落によって掘削が困難になり、掘削可能な6区の矢板北東隅を中心に調査を進めた。

２．遺構・遺物

各遺構・遺物の詳細は第71図～79図・表27～29のとおりである。以下は各遺構を概観する。

(1) 井戸跡

SE606(第71図)

SE606は調査区の西側に位置する遺構で、SD602に切られている。平面形は不整の方形で、確認面での径は長軸(B－B')1.86m、短軸(A－A')1.32mを測る。確認面から0.64mほどの深さのところに1段があり、その中心付近に一回り小さな円形の掘り方をもつ。径は84㎝ほどで、そのままその面からほぼ垂直に落ちている。深さは確認面から1.98mを測る。井戸としては素掘りのものと推定できる。

覆土は確認面から大きく4層に分けた。①層は暗褐色を呈し、非常に湿った土で、小片の遺物を含む。②層は暗褐色土に黄色が混じる。①層に近い土質だが若干粘性で、小片の遺物を含む。③層は灰黒色土で黄色土が混じる。強い粘性で、自然遺物を含む。④層は黒褐色で、②層と同様に強い粘性がある。多量の自然遺物を含む。

(2) 溝跡

SD601(第72図)

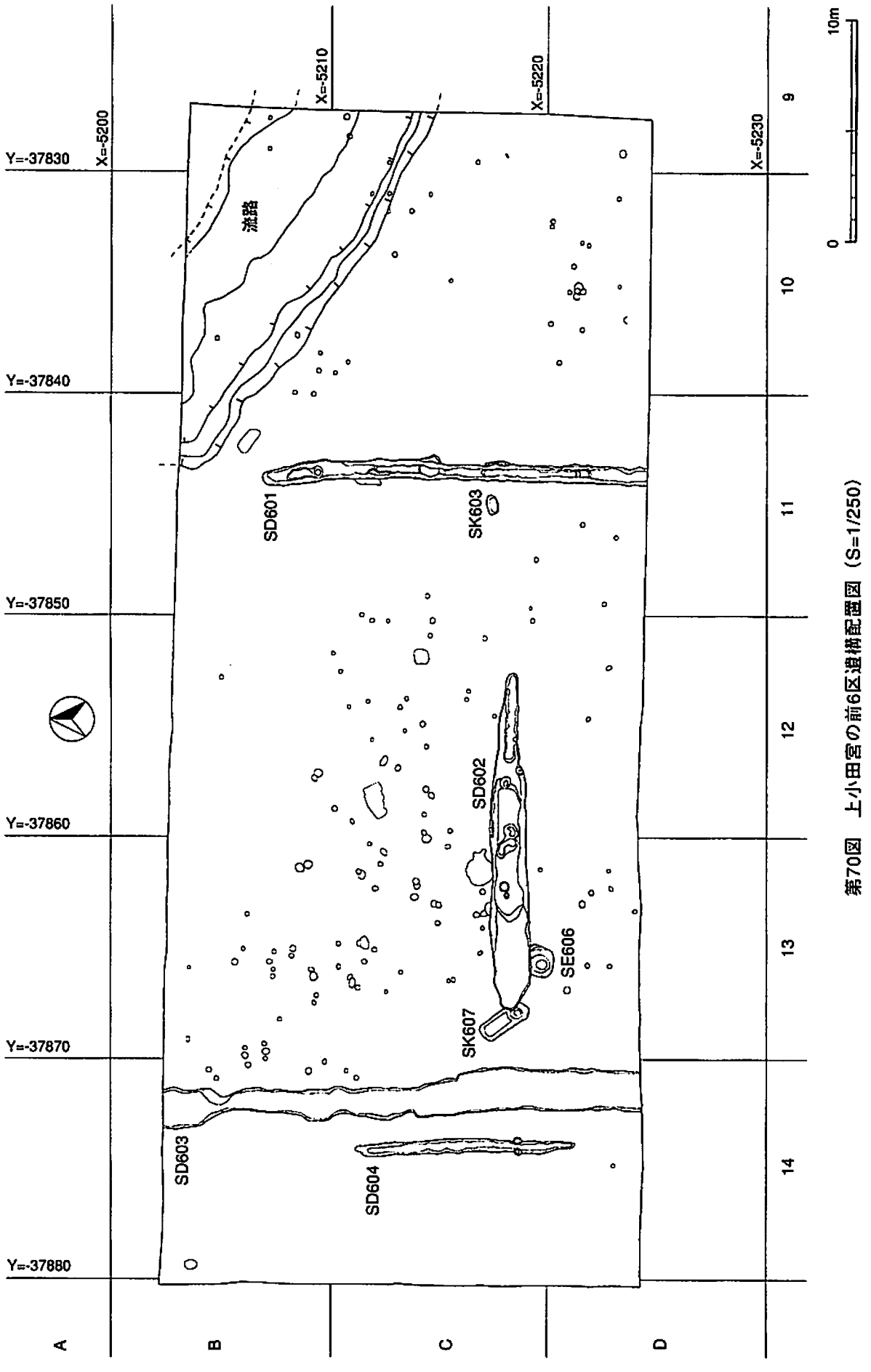
SD601は調査区の東側に位置する遺構で、ほぼ南北に伸びる溝跡である。南端は調査区外に存在するため、確認できておらず、遺構全体の形状は不明であるが、検出範囲により長軸(南北)17.70m以上、短軸(東西)0.75m、深さ0.40mを測る。掘り方の形状は全体的に逆蒲鉾形を呈しているが、溝跡の下端は一定ではなく凸凹である。この遺構の方向性から、上小田宮の前5区検出の溝跡と関連性が推測できるが明確ではない。この溝跡からは、1の石皿が1点出土している。

SD602(第71図)

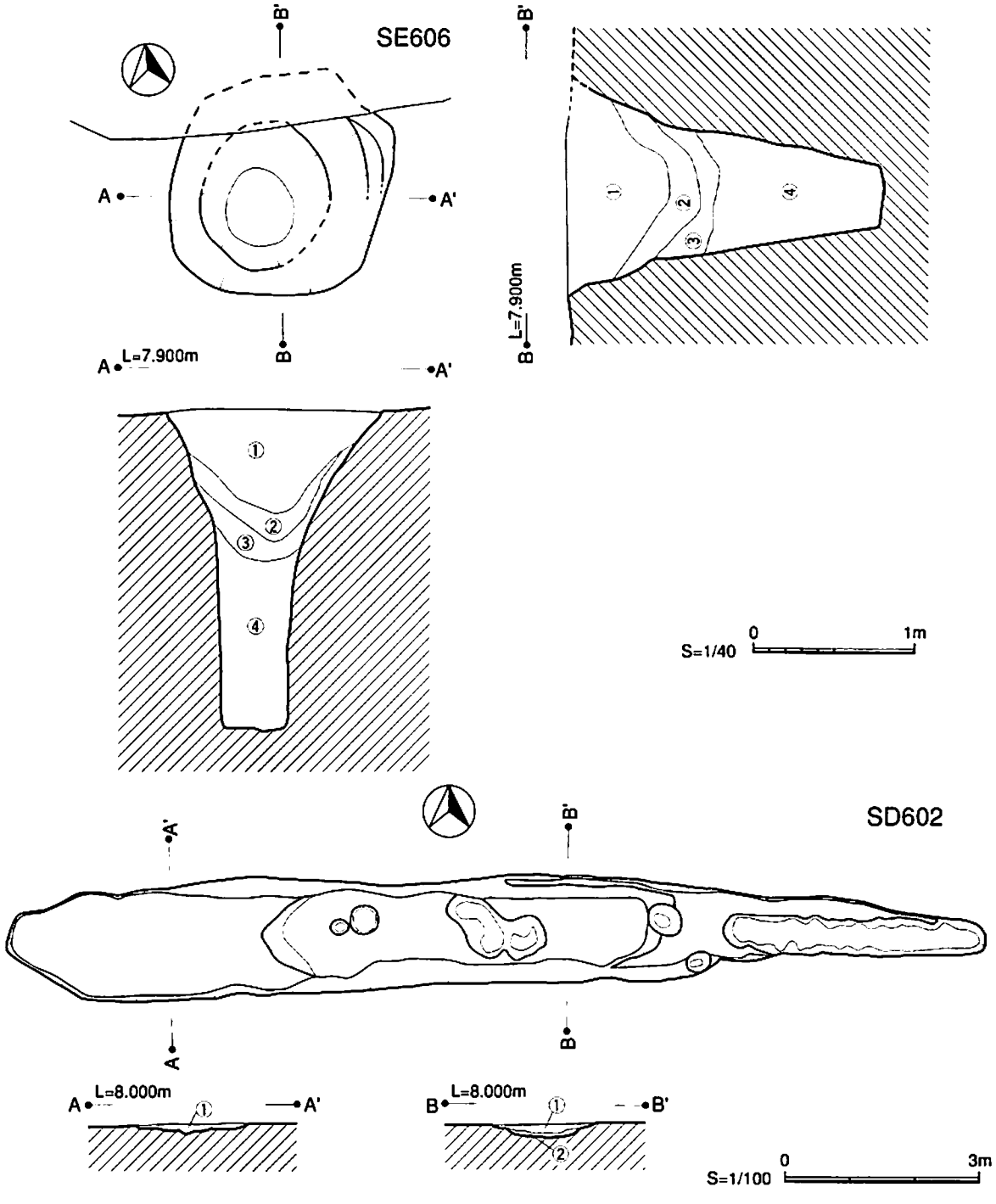
SD602は調査区の中央部の南東側に位置する遺構で、ほぼ東西に伸びる溝跡である。SE606・SK607を切る。検出範囲より長軸(東西)15.20m、短軸(南北)1.65m、深さ0.20mを測る。掘り方の形状は全体的に浅い皿状を呈している。溝跡の下端は一定ではなく凸凹であるが、後世の削平によって遺構全体の形状は不明である。南北方向に伸びる溝跡に垂直に交わる様相を示すこの溝跡は、他の溝跡(SD601・603・604)との関連性が考えられる。

SD603(第72図)

SD603は調査区の西側に位置する遺構で、ほぼ南北に伸びる溝跡である。SD604と平行に伸びている。両端は調査区外のため確認できておらず、遺構全体の形状は不明であるが、検出範囲より長軸(南北)22.0m以上、短軸(東西)1.90m、深さ0.15mを測る。掘り方の形状は全体的に浅い皿状を呈している。この遺構の方向性から、上小田宮の前5区検出の溝跡との関連性が推測できるが、明確ではない。



第70図　上小田宮の前6区遺構配置図（S=1/250）

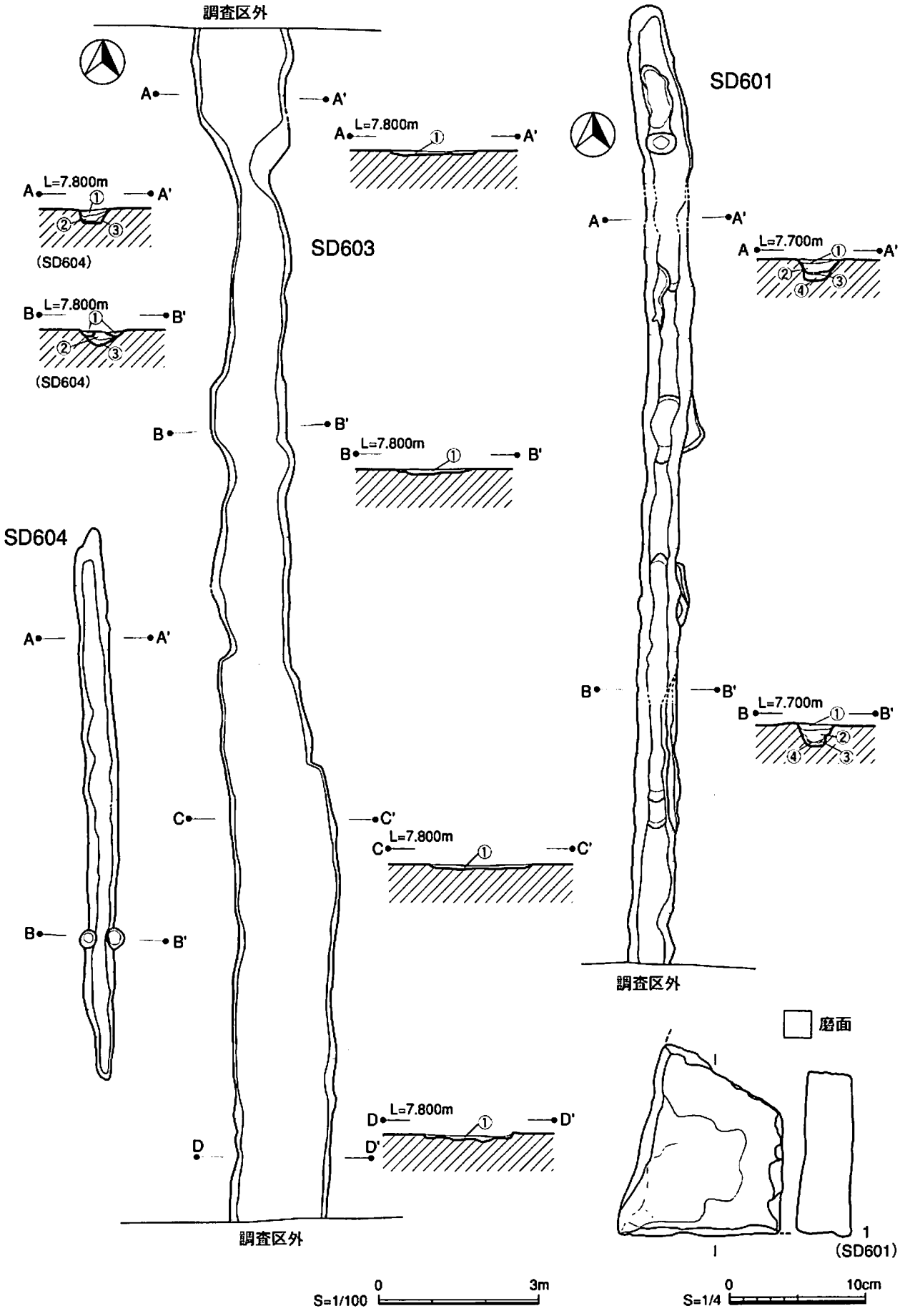


第71図　井戸跡（SE606）・溝跡（SD602）実測図

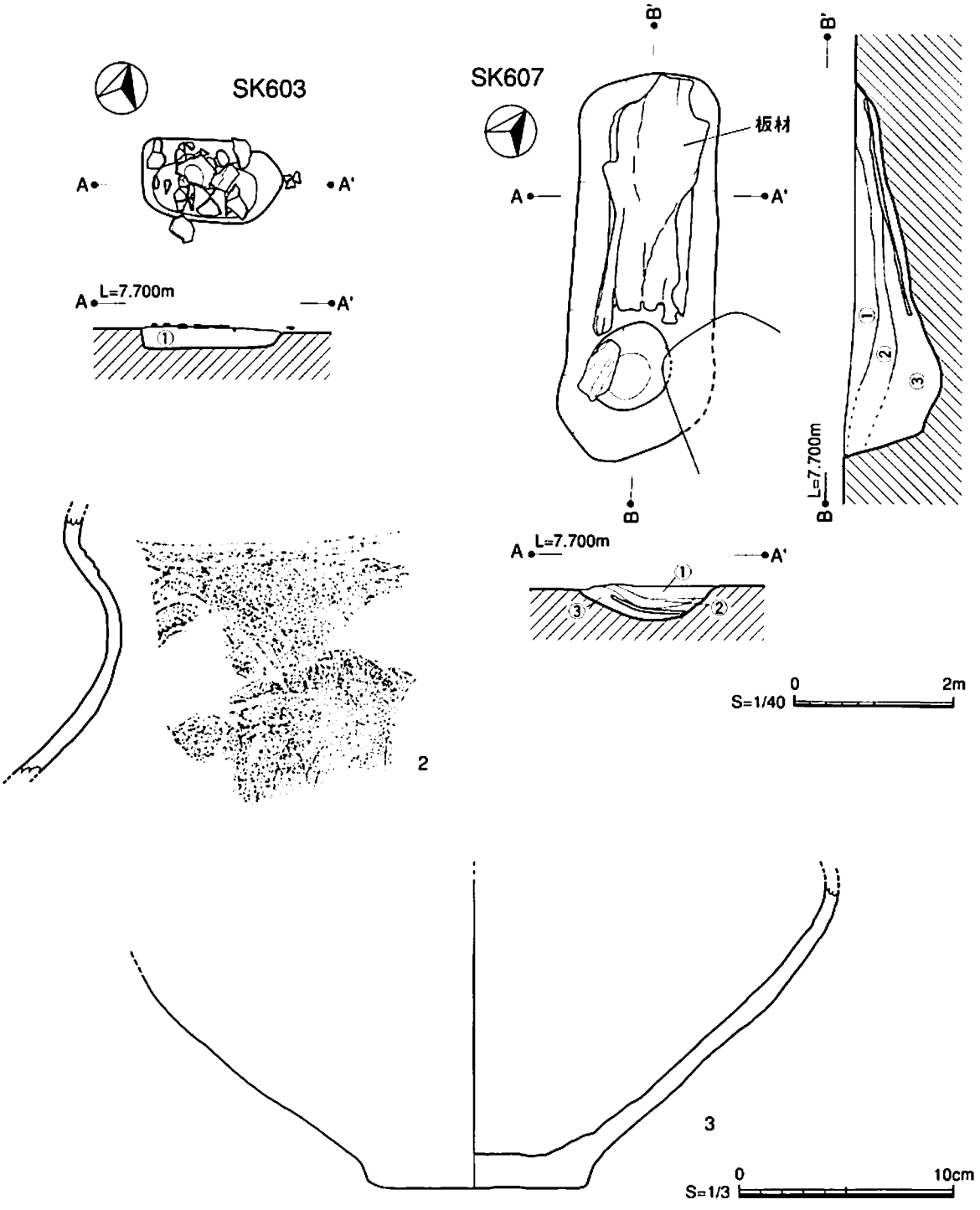
（寸法は検出面で計測したもの）　　（単位：m）

遺構名	遺構番号	長軸	短軸	深さ	備　考
井戸跡	SE606	1.86	1.32	1.98	SD602に切られる
溝跡	SD601	17.70～	0.75	0.40	石皿出土
	SD602	15.20	1.65	0.20	SE606・SK607を切る
	SD603	22.00	1.90	0.15	
	SD604	10.40	0.60	0.30	
土坑	SK603	0.88	0.52	0.12	遺物出土
	SK607	0.50	0.88	0.60	SD602に切られる、木器出土

表27　上小田宮の前6区検出遺構一覧表



第72図　溝跡（SD601・603・604）実測図及び出土遺物実測図



第73図　土坑（SK603・607）実測図及び出土遺物実測図

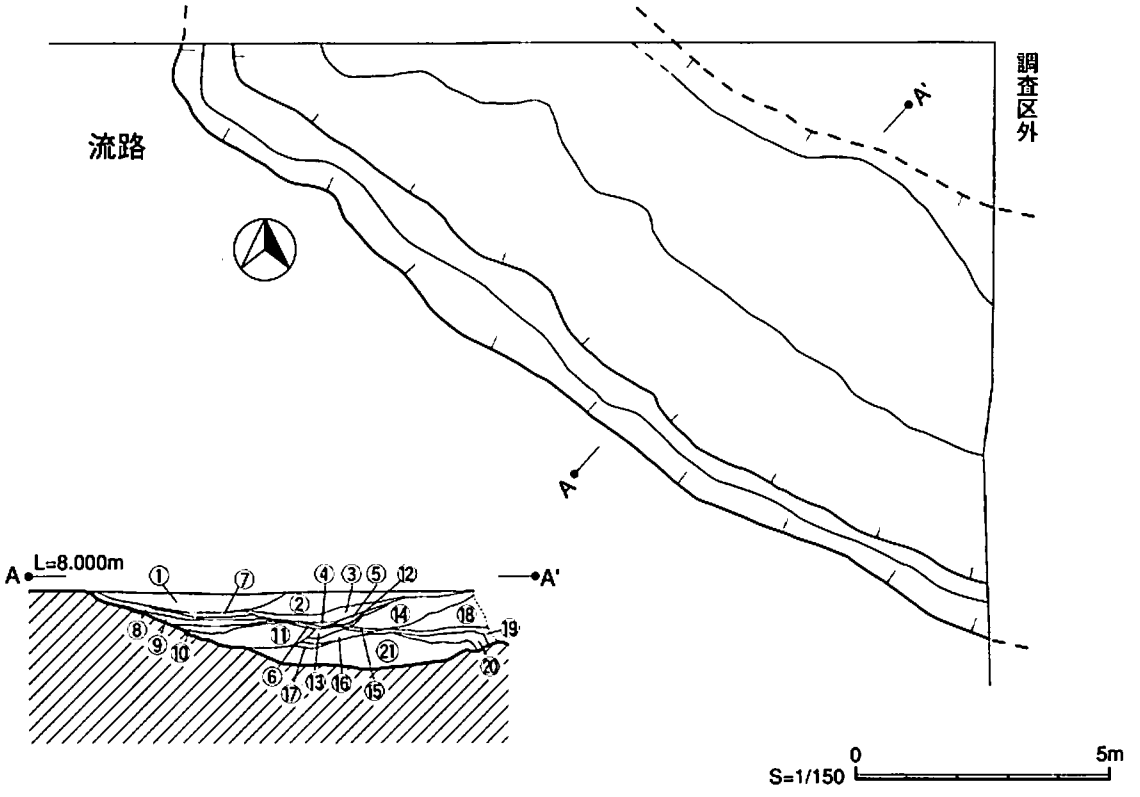
SD604(第72図)

SD604は調査区の西側に位置する遺構で、SD603と平行でほぼ南北に伸びる溝である。検出範囲より長軸(南北)10.40m、短軸(東西)0.60m、深さ0.30mを測るが、後世の削平によって遺構全体の形状は不明である。

(3) 土坑

SK603(第73図)

SK603は調査区の東側に位置する遺構である。検出範囲より長軸0.88m、短軸0.52m、深さ0.12mを



第74図　流路実測図

平面形は不整の方形を、断面形は台形を呈している。覆土は黄灰色土で、弱い粘性を帯びる。遺物は上層に浮いた状態で出土した。遺物から考えて、縄文時代の遺構の可能性がある。

2・3はこの土坑から出土した遺物である。2は縄文土器の深鉢で、磨消縄文による文様が残る。3も縄文土器の深鉢で、最大胴径35㎝を測る。

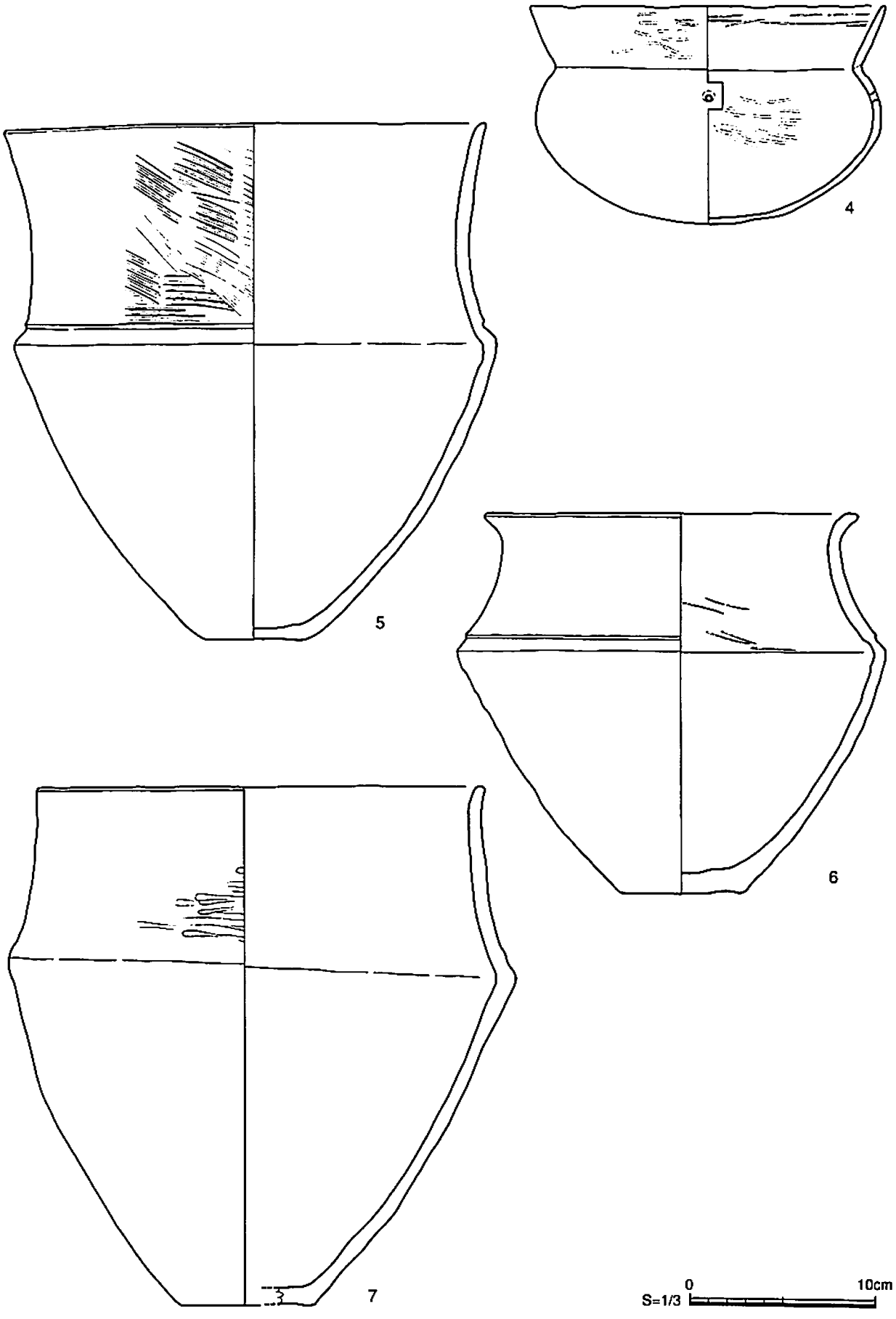
SK607(第73図)

SK607は調査区の西側に位置する遺構で、SD602に切られている。検出範囲より長軸0.88m、短軸0.50m、深さ0.60mを測る。遺構の底部には炭化した板材が据えられたように検出された。南西部からは板材が途切れた位置に石が据えられたように出土し、石の下からピット状の落ちを検出できた。その他に遺物の出土はなく、平面形は不整の長方形、断面形は皿状を呈している。この土坑は土壙墓ではないかと思われるが、副葬品等が見られないため、その様相等は不明である。

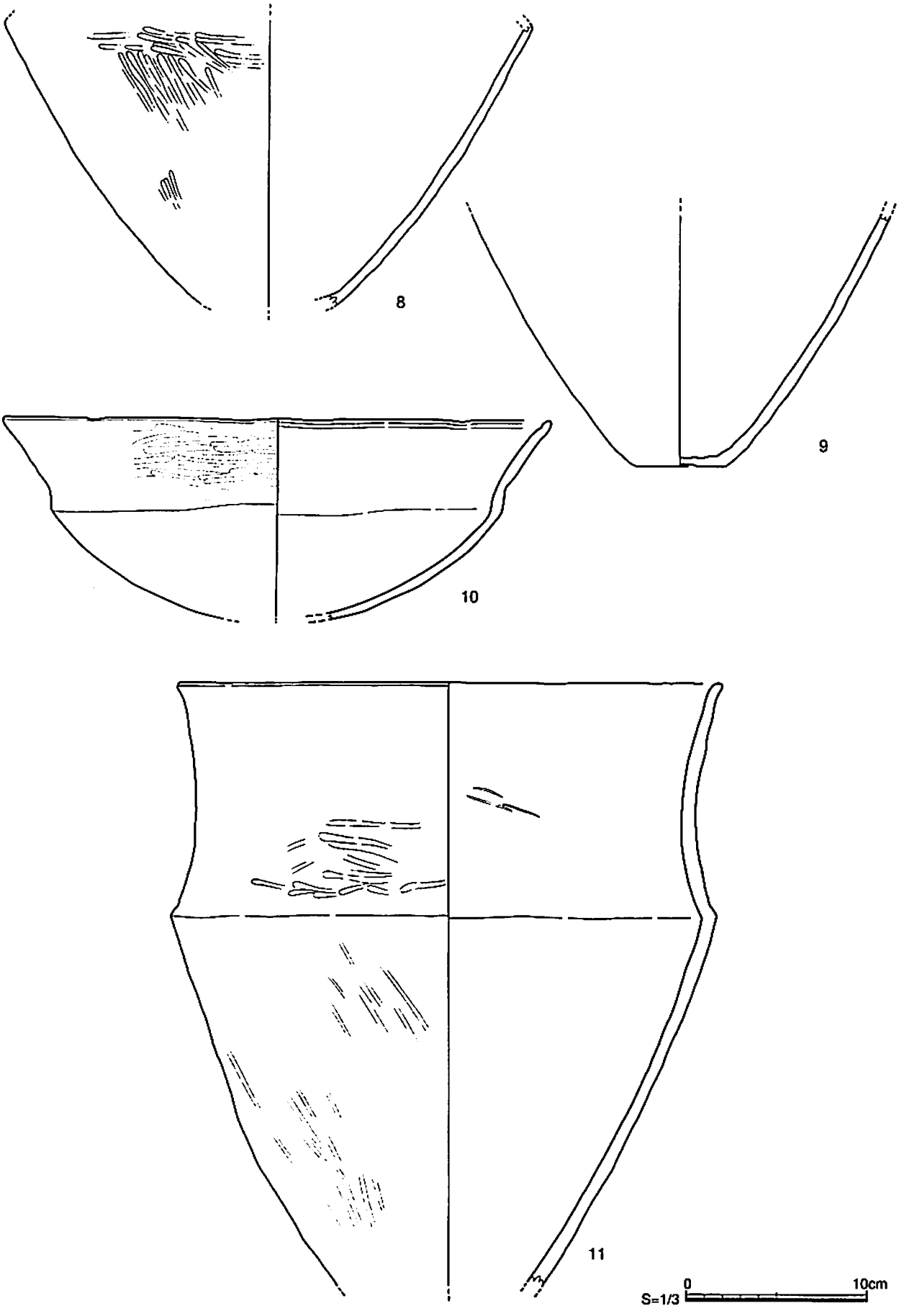
(4)　自然流路(第74図～78図)

自然流路は上小田宮の前5区から6区にかけて北西～南東に向かって位置する遺構であるが、湧水による崩落によって調査が困難と判断されたため、上小田宮の前6区のみの本格的な調査を実施した。そのため、遺構全体の様相は不明である。検出範囲より長軸(北西－南東)19.40m以上、短軸(北東－南西)7.55m以上、深さ1.60m以上を測る。上小田宮の前1区の自然流路と同様に、遺構からは縄文土器を中心に出土した。このことから1区の自然流路との関連性が考えられるが、流路のほとんどが調査区外に伸びているため、今後の調査の成果に期待する。

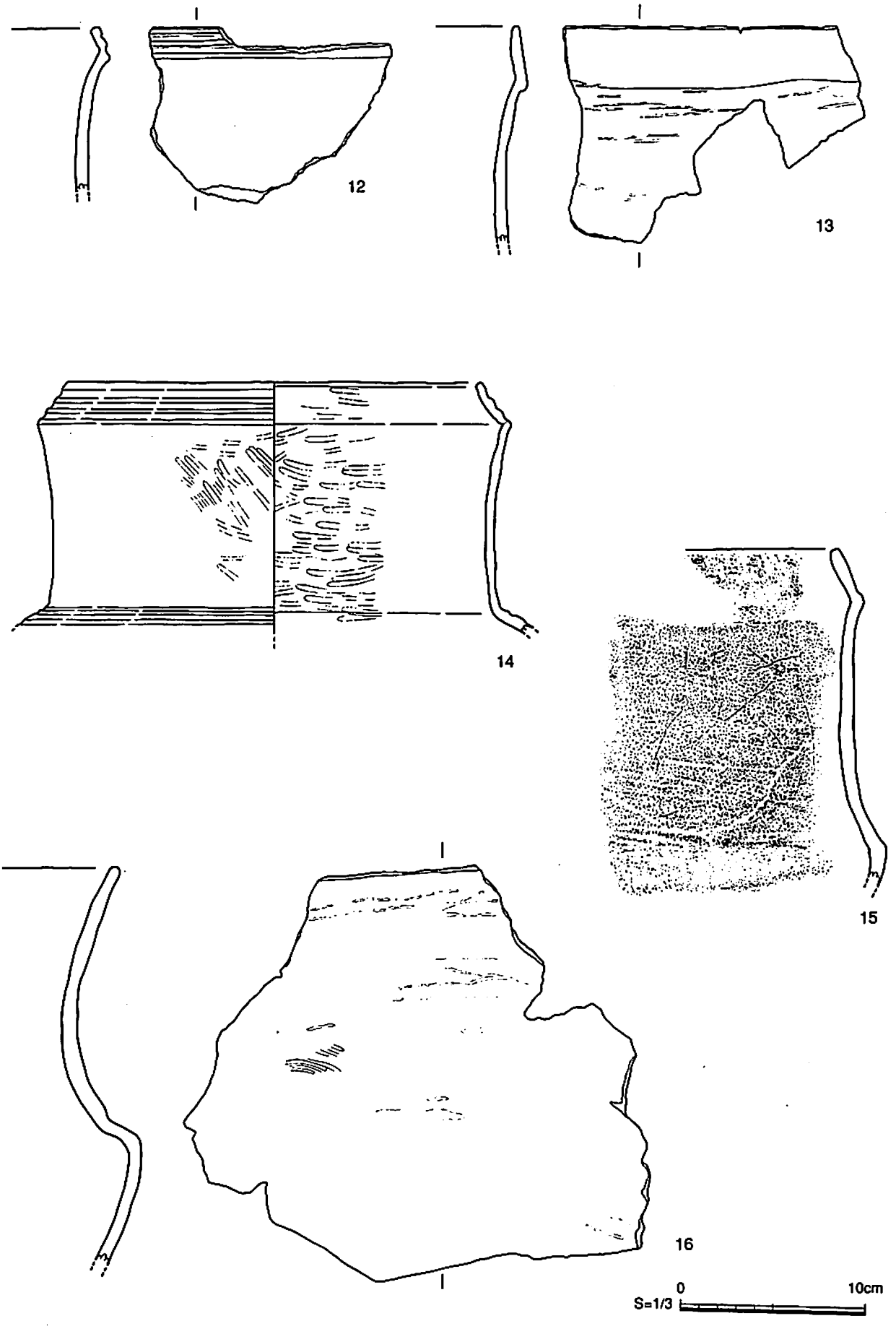
覆土は確認面から大きく21層に分けた。①層は黄褐色砂質土で弱い粘性があり、カーボンを含む。②層は黄褐色粘質土で①層より強い粘性がある。③層は灰黄褐色砂質土でしまりがない。④層は灰褐色砂質土で、②層よりしまりがない。弱い粘性がある。⑤層は灰黄褐色砂質土で②層に似ているが、しまりがある。⑥層は褐灰色砂質土でしまりがないが、酸化鉄を少量含む。⑦層は灰黄色砂質土で強い粘性があり、しまりがある。



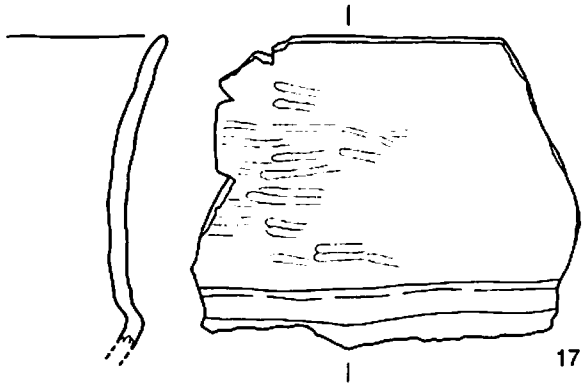
第75図　流路出土遺物実測図（1）

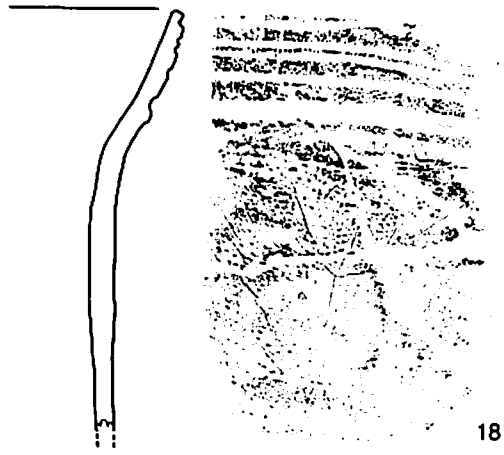


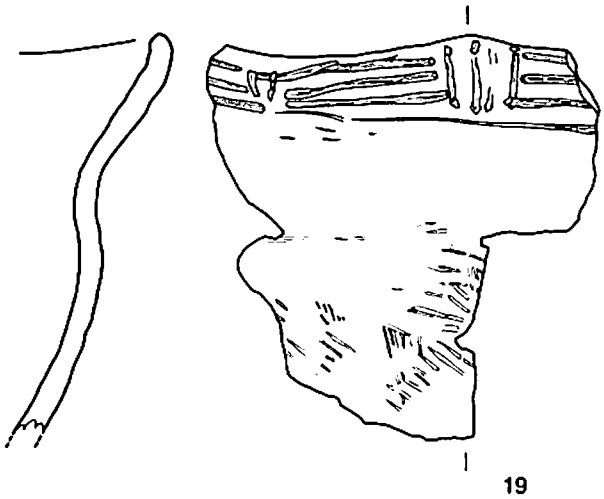
第76図　流路出土遺物実測図（2）

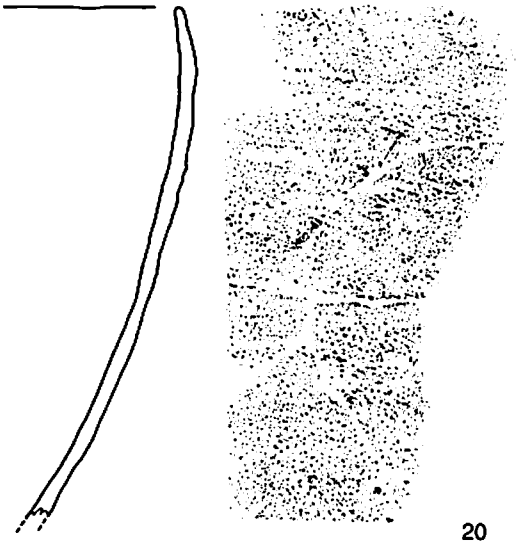


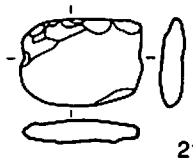
第77図　流路出土遺物実測図（3）

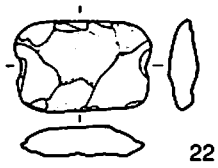

17


18

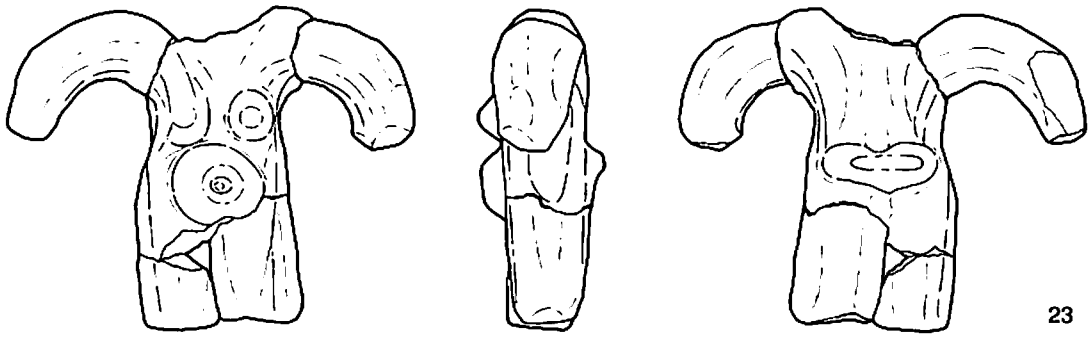

19


20


21

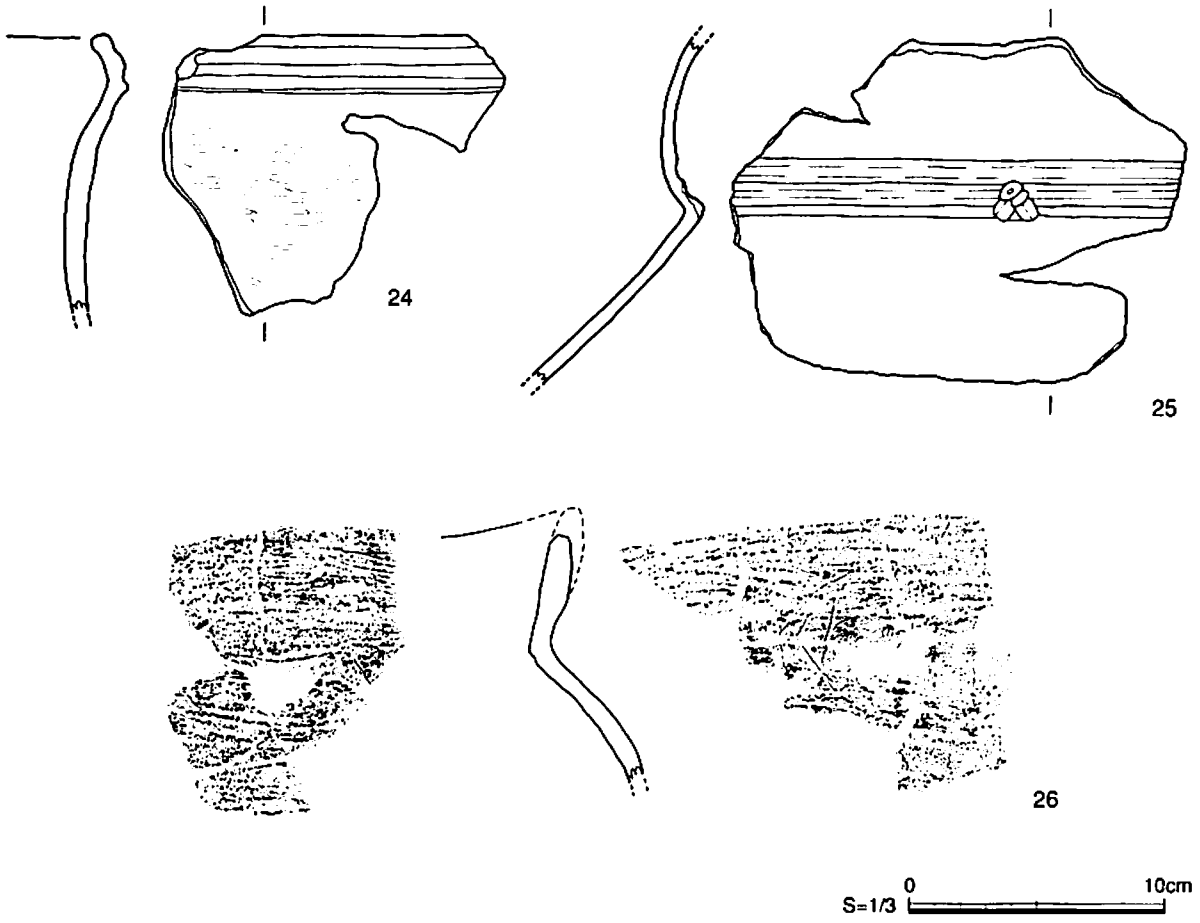

22

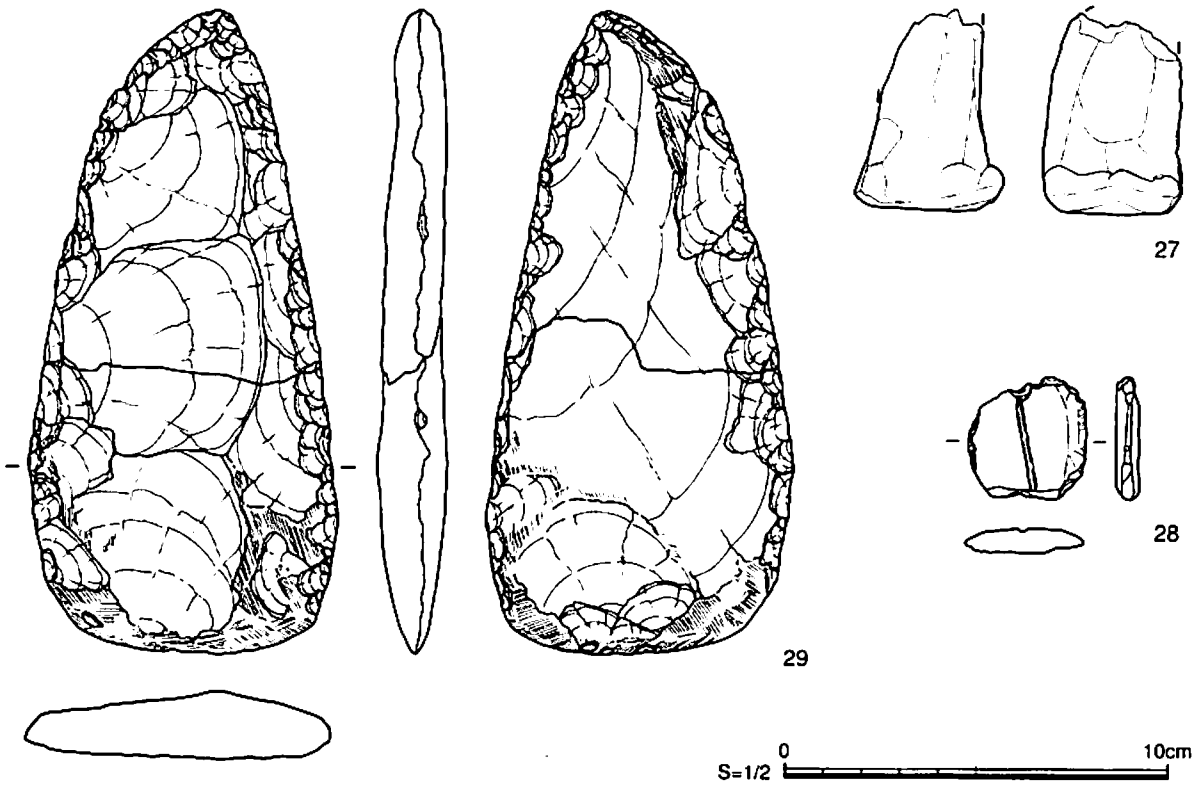
0　10cm
S=1/3


23

0　5cm
S=1/2

第78図　流路出土遺物実測図（4）





第79図　6区出土遺物実測図

⑧層は灰黄色粘質土で酸化鉄を含み、ブロック状に暗褐色土を含む。⑨層は灰黄色粘質土でブロック状に暗褐色土を微量に含む。⑩層は緑灰色粘質土で弱いしまりがある。⑪層は緑灰色粘質土と黒褐色粘質土が交互堆積を見せる。木片等の自然遺物を含む。⑫層は灰黄色砂質土でしまりがなく、粘性もない。マンガン、鉄分を多量に含む。⑬層は緑灰色粘質土で④層よりしまりがなく、粘性もない。上層に鉄分を微量に含む。⑭層は黄褐色砂質土で②層よりしまりがあり、弱い粘性がある。⑮層は緑灰色砂質土でしまりがなく、粘性もない。鉄分を多量に含む。⑯層は緑灰色砂質土でしまりがなく、粘性もない。⑰層は黒褐色砂質土でしまりがないが、弱い粘性がある。木片等の自然遺物を含む。⑱層は灰黄褐色砂質土で⑤層より強い粘性があり、しまりがある。⑲層は灰黄褐色砂質土で、⑥層より強い粘性があり、しまりがある。下層に鉄分を多量に含む。⑳層は緑灰褐色粘質土で⑲層より弱い粘性でしまりはない。下層に行く程砂量が増え、粘性がなくなる。㉑層は緑灰褐色土と黒褐色砂質土が交互堆積を見せる。木片等の自然遺物を含む。

第75図～78図はこの自然流路から出土した遺物である。ほとんどが縄文土器の鉢である。4は鉢で、頸部に相当する場所に穿孔がある。5～7・11・16・17は口縁帯がない深鉢である。口縁部から頸部は弓形に外湾、肩部はやや強く張り出し、胴部は直線的に底部へと繋がっている。界線はあるものとないものに分けられるが、口唇部は比較的きちんと仕上げられており、全体の形態からも古い様相を呈する土器である。8・9は深鉢である。10は浅鉢である。12～15・18は口縁帯がある深鉢である。12～15は口縁部がくの字に屈折し、強く張り出した胴部が特徴の土器である。文様帯は口縁部にあり、2～3条の平行回線文から無文が見られる。14には胴部文様が深鉢の界線に回線として見られる。18は口縁部がラッパ状に開き、頸部から胴部にかけて直線的になる。文様帯は口縁部にあり、粗雑化している。19は深鉢で、口縁部が波状である。文様帯は口縁部にあり、3～4条の回線文が見られる。胴部には貝殻状痕が残る。20は深鉢で、口縁部から胴部にかけての屈曲が見られない土器である。21・22は石錘である。扁平な河原石の両端を打ち欠いた打欠石錘と考えられる。23は土偶である。頭部は欠けているが、肩から足先までほぼ揃っていて、頭部より下部は全体像を推定できる。肩部より足先までの残存長8.4㎝、胴部の幅8.4㎝、胸部の厚さ2.8㎝、腹部の厚さ3.2㎝である。

(5) その他

ここでは2. 遺構・遺物で遺構と共に述べられなかった遺物を概観する。

上小田宮の前6区出土遺物(第79図)

出土地点、法量、調整、色調、胎土等の詳細については、観察表のとおりである。

24～26は縄文土器の深鉢である。26は波状口縁で、文様帯は口縁部にあり、貝殻条痕文である。27は土偶の足部である。28は剣形石製品で、扁平の滑石に擦切り痕が残る石材である。29は扁平打製石斧で、刃部に擦痕がある。

遺構番号	層位	特　徴
SE606	①層	暗褐色土。非常に湿った土で遺物を多量に含む。
	②層	暗褐色土に黄色土が混じる。①層に近いが、弱い粘性あり。非常に湿った土で遺物を多量に含む。
	③層	灰黒色土に黄色土が混じる。強い粘性あり。自然遺物を含む。
	④層	注記なし。
SD601 (A-A')	①層	暗赤灰色粘土質。弱いしまりあり、粘性あり(②層より弱い)。微量のマンガン、酸化鉄分と、多量の黄褐色砂質土、灰黄色砂質土を含む。
	②層	褐灰色粘質土。強いしまりあり、弱い粘性あり。マンガン、酸化鉄分を多量に含む。
	③層	暗青灰色粘質土。しまりなし、強い粘性あり。マンガン、酸化鉄分を極微量に含む。
	④層	灰白色砂質土、灰黄褐色と灰白質の砂質土が混じり合うマンガン、酸化鉄分を微量に含む。しまりなし、粘性なし。

表28　上小田宮の前6区検出遺構土層注記表（1）

遺構番号	層位	特　徴
SD601 (B-B')	①層	暗赤灰色粘土質。弱いしまりあり、粘性あり(②層より弱い)。少量のマンガン、酸化鉄分と、多量の黄褐色砂質土、灰黄色砂質土を含む。
	②層	黄褐色粘質土、灰黄色粘質土を少量含む。しまりあり、粘性あり。マンガン、酸化鉄分を多量に含む。
	③層	暗青灰色粘質土。黄褐色砂質土、黄灰色砂質土をやや含む。しまりなし、強い粘性あり。マンガン、酸化鉄分を極微量に含む。
	④層	灰白色砂質土、灰黄褐色と灰白質の砂質土が混じるマンガン、酸化鉄分を微量に含む。しまりなし、弱い粘性あり。
SD602	①層	灰褐色粘質土。弱い粘性あり。多量のマンガン、酸化鉄分と、1～2㎜のブロック状黄褐色粘質土を含む。
	②層	灰褐色粘質土。強い粘性あり。マンガン、酸化鉄分をほとんど含まず、2～3cmのブロック状黄褐色粘質土を含む。
SD603	①層	暗褐色粘質土と黄褐色粘質土。マンガン、酸化鉄分を少量含む。
SD604 (A-A')	①層	青灰色粘質土。弱い粘性あり。マンガン、酸化鉄分を少量含み、ブロック状黄褐色砂質土を含む。
	②層	青灰色粘質土。弱い粘性あり。マンガン、酸化鉄分を少量含み、ブロック状黄褐色砂質土を含む。
	③層	黄灰色粘質土。強い粘性あり。
SD604 (B-B')	①層	青灰色粘質土。粘性なし。マンガン、酸化鉄分は②層より少なく、ブロック状黄褐色砂質土を含む。
	②層	青灰色粘質土。弱い粘性あり。マンガン、酸化鉄分を少量含み、ブロック状黄褐色砂質土を含む。
	③層	青灰色粘質土。弱い粘性あり。マンガン、酸化鉄分を少量含み、ブロック状黄褐色砂質土を含む。
SK603	①層	黄灰色粘質土。弱い粘性あり。ブロック状黄褐色粘質土を含む。
SK607	①層	明黄褐色に暗褐色土、マンガンが混じる。弱い粘性があり、細砂の粒子を含む。
	②層	暗茶褐色土、マンガンが混じる。①層と同じだがカーボンを含む。
	③層	灰褐色土に暗茶褐色土が混じる。①・②層と同じだが、おそらく木炭の灰と、少量の焼土を含み、カーボンも含む。
流路	①層	黄褐色砂質土。弱いしまりあり、弱い粘性あり。マンガン、酸化鉄分、カーボン、2×2cm程のブロック状暗褐色粘質土を含む。
	②層	黄褐色粘質土。①層に非常によく似ているが、①層よりしまりが弱く、強い粘性があり、やや明るい黄褐色。
	③層	灰黄褐色砂質土。しまりなし、弱い粘性あり。マンガン、酸化鉄分を少量含む(②層より少ない)。2×2cm程の暗褐色粘質土をブロック状で含む(②層より少ない)。
	④層	灰黄褐色砂質土。③層よりしまりなし。弱い粘性あり。酸化鉄分を多量に含む。
	⑤層	灰黄褐色砂質土。③層に似ているが、③層よりしまりなし、粘性なし。
	⑥層	褐灰色砂質土。しまりなし、粘性なし。酸化鉄分を少量含む。
	⑦層	灰黄色粘質土。強いしまりあり、強い粘性あり。粘性は⑩層にいくに従って弱くなる。酸化鉄が多く、ブロック状暗褐色粘質土を含む。
	⑧層	灰黄色粘質土。⑦層と同様に強いしまりあり、粘性あり。酸化鉄が多く、ブロック状暗褐色粘質土を含む。
	⑨層	灰黄色粘質土。⑦・⑧層より弱いしまりあり、弱い粘性あり。ブロック状暗褐色粘質土を微量に含む。
	⑩層	緑灰色粘質土。⑦・⑧層より弱いしまりあり、弱い粘性あり。底の方に酸化鉄分が多く、暗褐色粘質土は含まない。
	⑪層	緑灰色粘質土(上部)、黒褐色粘質土(下部)。弱いしまりあり、下にいくほど粘性が強くなる。底部に灰色の砂が入る部分あり、下部の粘性の強い部分に細かい木片が入っている。
	⑫層	灰黄褐色砂質土。しまりなし、粘性なし。マンガン、酸化物を多量に含む。
	⑬層	緑灰色粘質土。⑫層よりもしまりなし、粘性なし。上部に微量に酸化鉄分を含む。
	⑭層	黄褐色砂質土。②層よりやや暗い色で、①層に近い。②層によく似ているが、よりしまりがあり、弱い粘性あり。
	⑮層	緑灰色砂質土。しまりなし、粘性なし。酸化鉄分を含む。
	⑯層	緑灰色砂質土。しまりなし、粘性なし。
	⑰層	黒褐色砂質土。しまりなし、弱い粘性あり。細かい木片を底部に含む。
	⑱層	灰黄褐色砂質土。⑭層より強いしまりあり、強い粘性あり。マンガン、酸化鉄分は⑭層よりも少ない。
	⑲層	灰黄褐色砂質土。⑱層より強いしまりあり、強い粘性あり。底部に酸化鉄分を多量に含む。
	⑳層	緑灰色粘質土。しまりなし。上部は⑲層より弱い粘性があるが、底部にいく程砂量が増え、粘性はなくなる。酸化鉄分を少量含む。
	㉑層	緑灰色粘質土、黒褐色粘質土、黒褐色砂質土、青灰色砂質土が何層も重なっている。全体的に掘りが浅もない。細かい木片、流木、カーボンを含み、一部の層には酸化鉄分も含む。

表29　上小田宮の前6区検出遺構土層注記表（2）

第9節　上小田宮の前7区の調査

1. 遺構分布(第80図)

上小田宮の前7区は、南北約22ｍ×東西約52ｍの調査区を設定した。広さは1,193㎡である。この調査区で検出した遺構は、掘立柱建物跡1棟、井戸跡1基、溝跡4条である。

遺構の分布を見ると、調査区の中央部で掘立柱建物跡(SB701)を1棟検出した。井戸跡は、調査区の東側から1基(SE701)検出できたが、これらの遺構の関連性については不明である。溝跡は、南側に2条(SD705・706)の東西に伸びるものと、北側にくの字を描くように伸びる3条(SD701・702・703)を検出した。

2. 遺構・遺物

各遺構・遺物の詳細は第81図～85図・表30～32のとおりである。以下は各遺構を概観する。

(1) 掘立柱建物跡

SB701(第81図)

SB701は調査区の中央部に位置する遺構である。桁行3.3ｍ(11.0尺)、梁行3.2ｍ(10.5尺)の2間×1間の側柱建物である。桁行方向がN86°Eとほぼ東西方向である。柱穴は確認面では直径16～24㎝、深さ44～62㎝を測り、下端のレベルは一定でないが、ほぼ一直線に並ぶ。

(2) 井戸跡

SE701(第82図・83図)

SE701は調査区の東側に位置する遺構である。平面形はほぼ円形で、確認面での径は長軸1.74m、短軸1.72m、深さ0.90mを測る。断面形態は上面から傾斜し、急激に落ち筒状を呈している。井戸としては素掘りのものと考えられる。

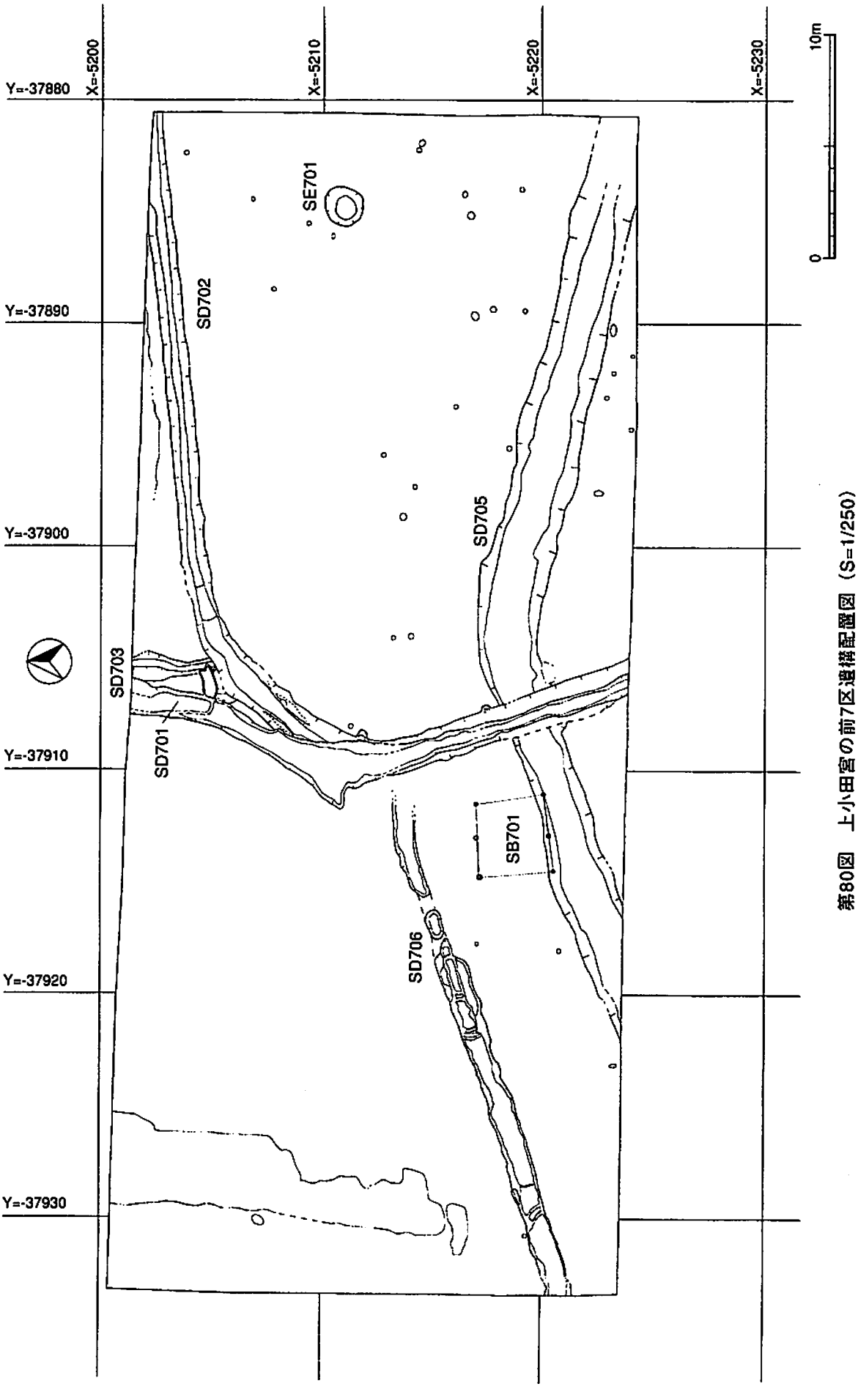
覆土は確認面から大きく4層に分けた。①層は黒褐色土にブロック状の明褐色土が混じる。遺物・カーボン等を含む。②層は暗灰色土でカーボンを含むが、遺物は含まない。③層は灰黄褐色土とオリーブ灰色土とオリーブ黒色土が交互堆積をする。遺物・カーボン等は含まないが、瓢箪を1点出土する。④層はオリーブ黒色土とオリーブ灰色土に分けられるが明確でない。土器・木器・骨角器・自然遺物等の遺物が多量に含まれる。

1～20はこの井戸跡から出土した遺物である。1は木器の木錘で、丸木材を用いている。柱状の丸材の両端に丸木面を残し、中央に向かって両方から円錐状に削り込んでいる。いわゆる「槌の子」である。2は木器の横櫛である。イスノキの板片の一側縁から細い歯を挽きだし、表面を平滑に研きあげている。3は土師器の手捏土器の杯形である。4・5は須恵器の蓋である。擬宝珠ツマミを持つ。6～10・13は須恵器の杯である。復元口径11.9㎝～12.4㎝、器高3.5㎝～3.9㎝を測る。口縁部がやや外反する。11は須恵器の高台付杯である。外器面に自然釉の付着が見られる。14は土師器の杯である。15～19は土師器の皿である。16・18には内外器面共に漆の付着が見られる。17は内外器面に赤色顔料の付着が見られるが、内器面に若干の漆が付着している。12は須恵器の長頸壺であるが、完形品でない。20は土師器の甕で、口縁部は肥厚させて急激に外反する。口縁端部はやや角張る。外器面は縦方向にハケ目、内器面は縦方向にヘラケズリが施されている。

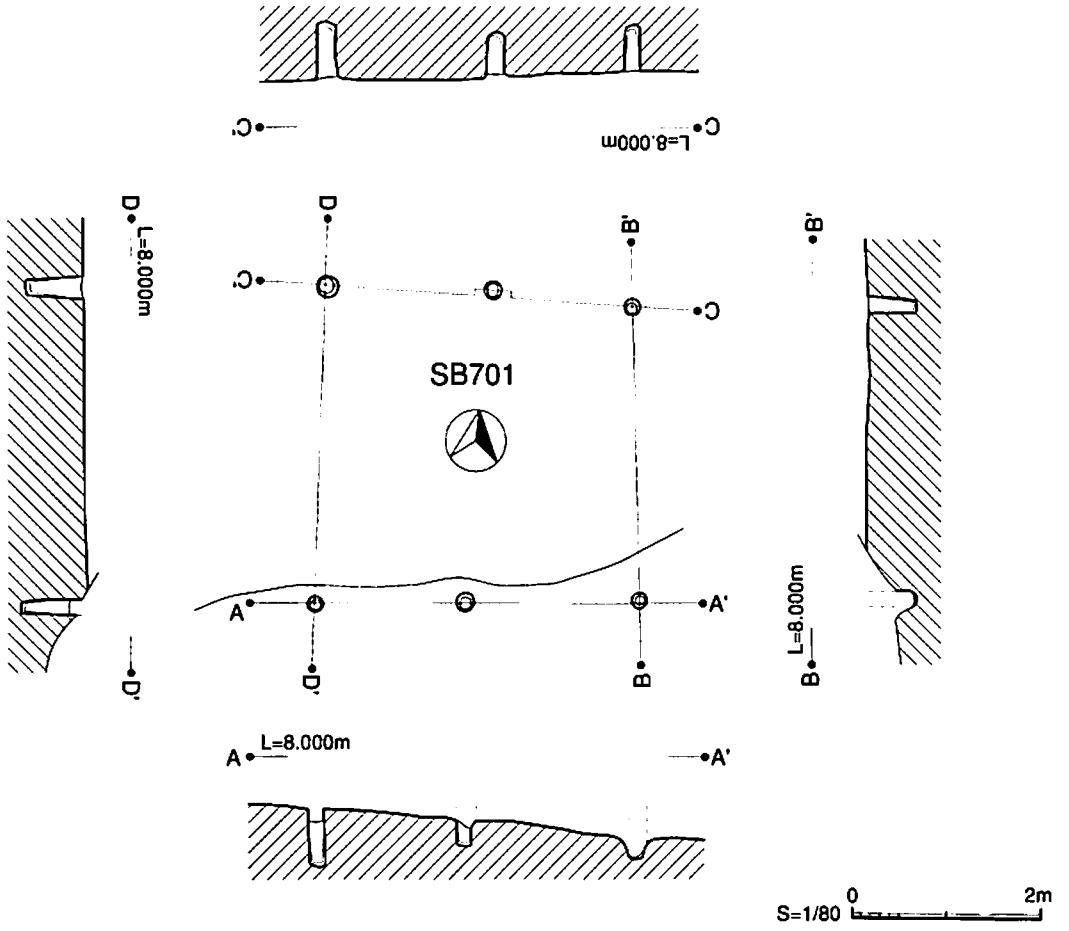
(3) 溝跡

SD701(第84図)

SD701は調査区の中央部に位置する遺構で、くの字の形でほぼ南北に伸びる溝跡である。SD702・703・705を切っている。両端は調査区外に存在するため確認できておらず、遺構の規模は不明であるが、検出範囲により長軸23.30m以上、短軸2.10m、深さ0.72mを測る。掘り方の形状は全体的に逆蒲鉾形を呈しているが、溝跡の下端は一定ではなく凸凹である。なお、溝の壁面を補強するための木杭列を確認することができた。



第80図　上小田宮の前7区遺構配置図（S=1/250）



第81図　掘立柱建物跡（SB 701）実測図

（寸法は検出面で計測したもの）

遺構番号	間数	桁長		梁長		建物の向き	型式	方位	桁行平均		梁行平均		柱穴直径	柱穴深さ
		m	尺	m	尺				m	尺	m	尺	cm	cm
SB701	2×1	3.3	11.0	3.2	10.5	東西	側柱	N 86° E	1.7	5.5	-	-	16～24	44～62

表30　上小田宮の前7区ＳＢ計測表

SD702(第84図)

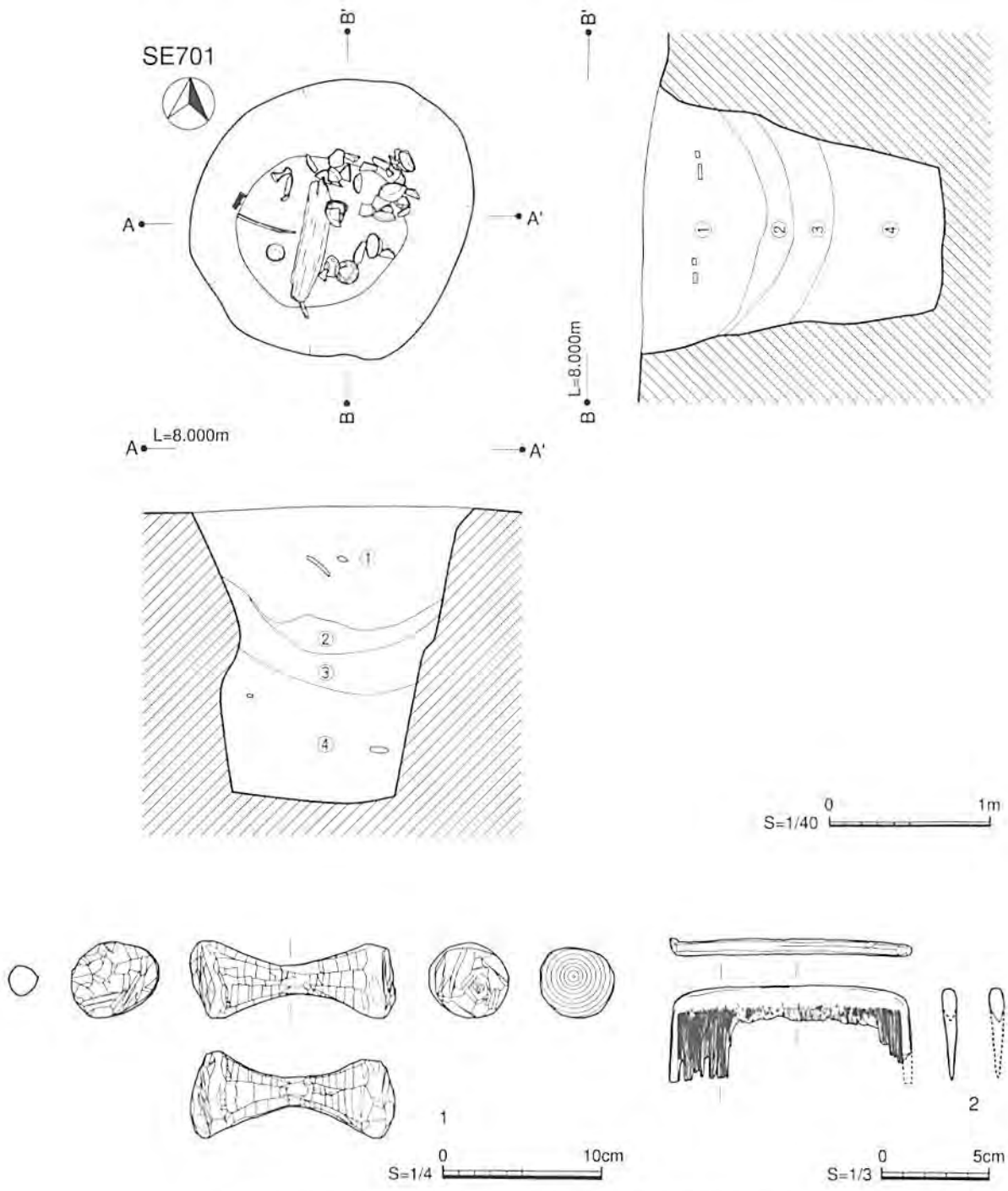
SD702は調査区の北東～中央部に伸びる遺構で、SD703・705を切り、SD701に切られている。両端は調査区外に存在するため確認できておらず、遺構の規模は不明であるが、検出範囲により長軸43.70m以上、短軸2.00m、深さ0.38mを測る。掘り方の形状は全体的に逆蒲鉾形を呈している。この溝跡からは、21の須恵器の高杯脚部と22の扁平打製石斧が出土している。

SD703(第84図)

SD703は調査区の中央部に位置する遺構で、ほぼ南北に伸びる溝跡である。SD701・702に切られている。北端は調査区外に存在するため確認できておらず、遺構の規模は不明であるが、検出範囲により長軸3.80m以上、短軸0.70m、深さ0.38mを測る。溝跡の切り合い関係は、SD703→SD702→SD701の順序で掘り直している。

SD705(第85図)

SD705は調査区の南側に位置する遺構で、への字の形でほぼ東西に伸びる溝跡である。SD701・702に切られている。両端は調査区外に存在するため確認できておらず、遺構の規模は不明であるが、検出範囲により長軸35.50m以上、短軸2.60m、深さ0.28mを測る。掘り方の形状は全体的に逆蒲鉾形を呈している。

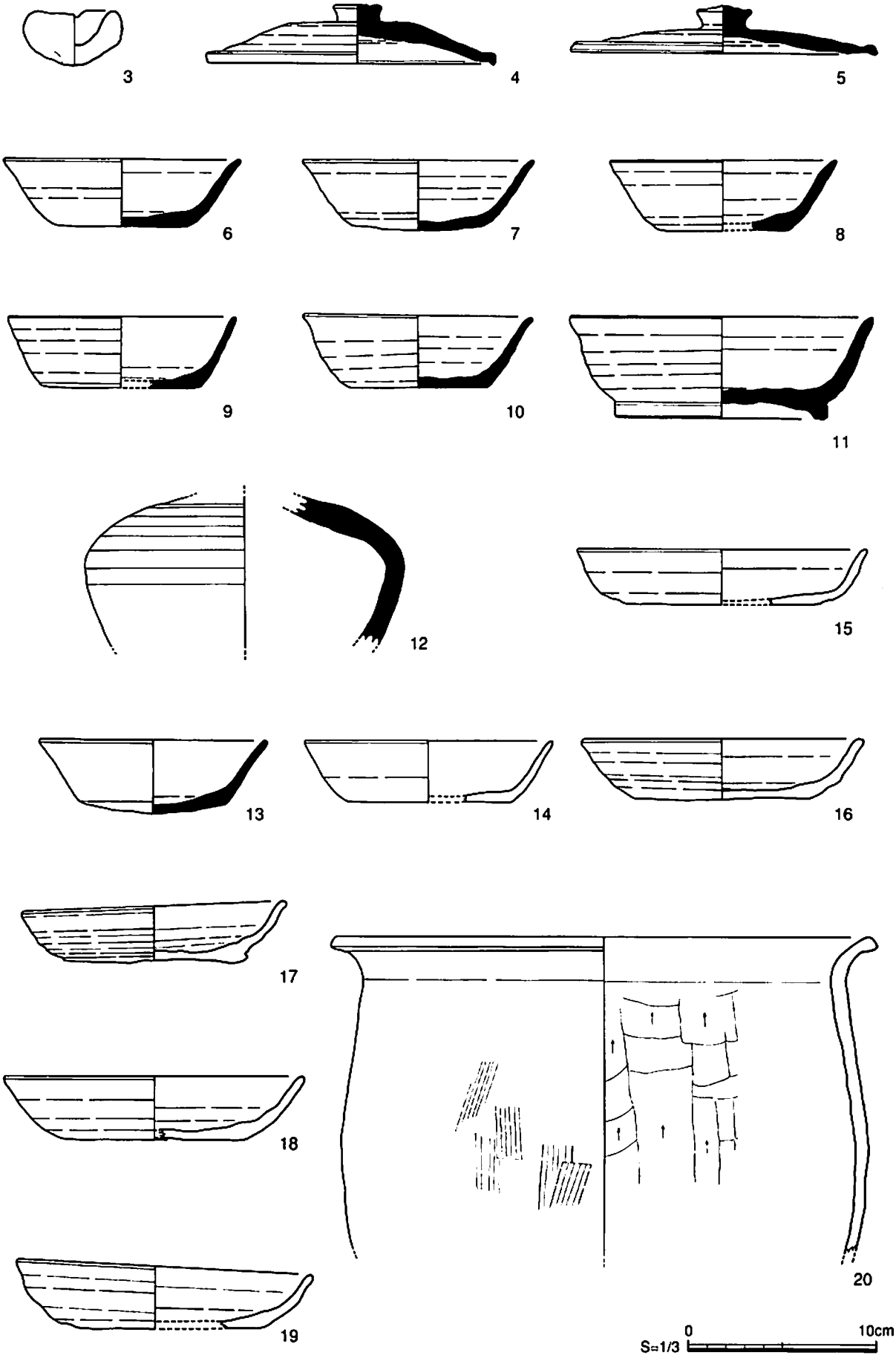


第82図　井戸跡（SE701）実測図及び出土遺物実測図（1）

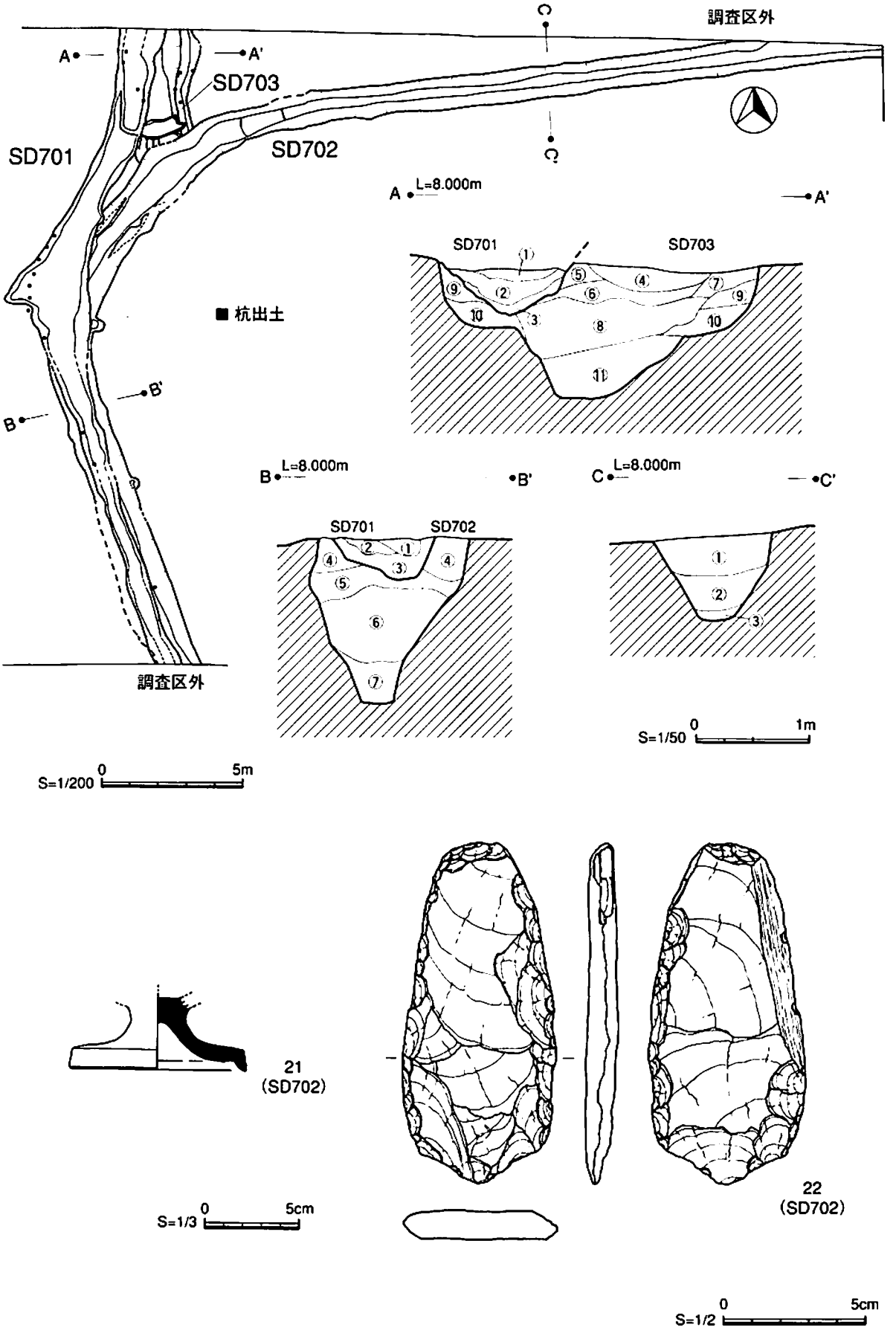
（寸法は検出面で計測したもの）　　（単位：m）

遺構名	遺構番号	長軸	短軸	深さ	備　考
井戸跡	SE701	1.74	1.72	0.90	遺物出土
溝跡	SD701	23.30～	2.10	0.72	SD702・SD703・SD705を切る、遺物出土
	SD702	43.70～	2.00	0.38	SD701に切られる、SD703・SD705を切る、遺物出土
	SD703	3.80～	0.70	0.38	SD701・SD702に切られる
	SD705	35.50～	2.60	0.28	SD701・SD702に切られる、遺物出土
	SD706	23.20～	1.20	0.10	

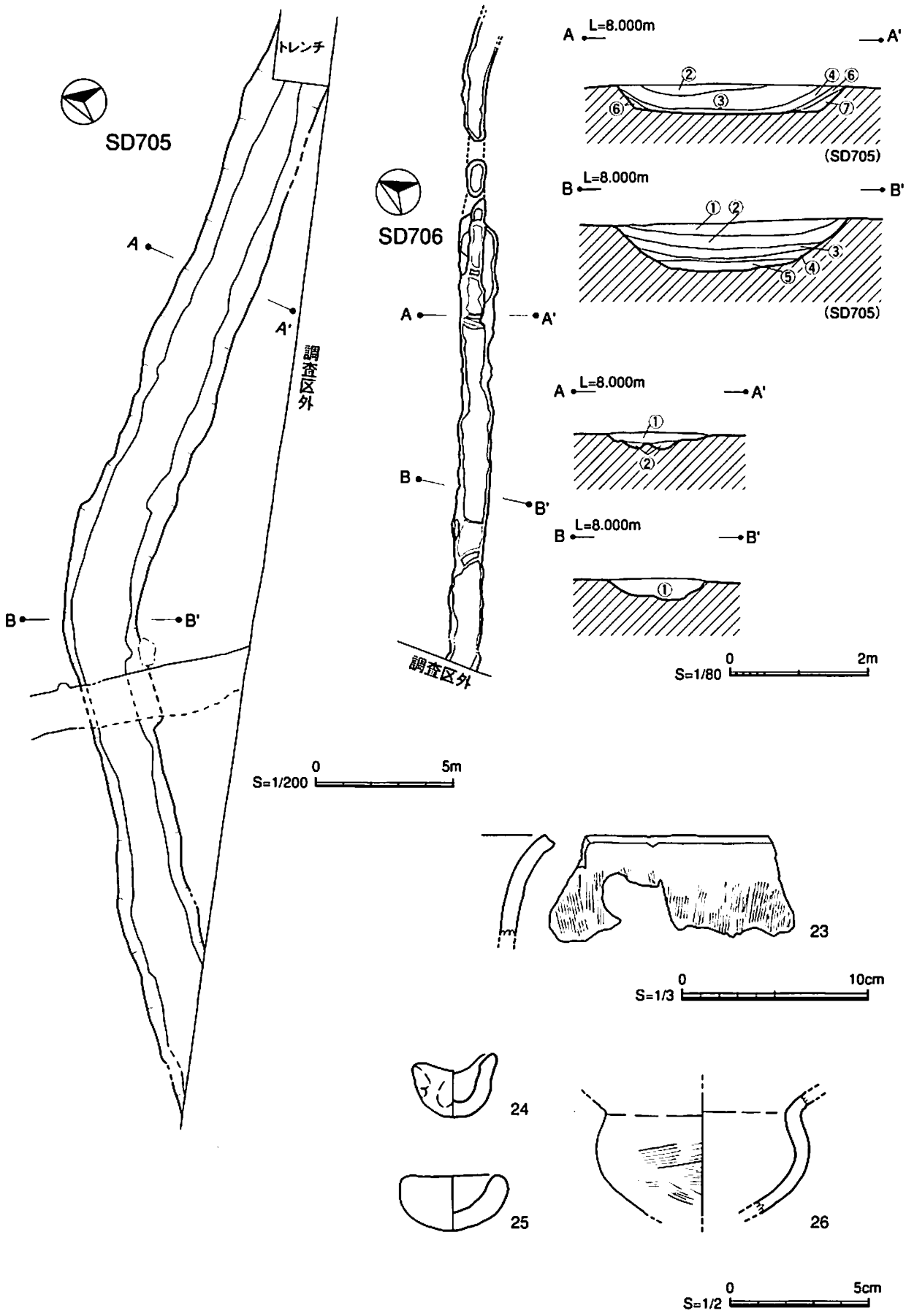
表31　上小田宮の前7区検出遺構一覧表



第83図　井戸跡（SE701）出土遺物実測図（2）



第84図　溝跡（SD701・702・703）実測図及び出土遺物実測図



第85図　溝跡（SD705・706）実測図及び出土遺物実測図

23～26はこの溝跡から出土した遺物である。23は土師器の甕の口縁部である。24・25は手捏土器の杯形である。丸底の底部及び口径は約3cm、器高約3cmのサイズで、概ね半球形を呈している。26は手捏土器の甕形である。球形胴であり、頸部から緩やかに屈曲する。内外器面は共にハケ目調整を施す。

SD706(第85図)

SD706は調査区の西側に位置する遺構で、ほぼ東西に伸びる溝跡である。西端は調査区外に存在するため確認できず、遺構の規模は不明であるが、検出範囲により長軸23.20m以上、短軸1.20m、深さ0.10mを測る。掘り方の形状は全体的に逆舗鉢形を呈しているが、溝跡の下端は一定ではなく凸凹である。

遺構番号	層位	特　徴
SE701	①層	黒褐色土にブロック状の明褐色土の塊を含む。遺物、カーボン等を含む。層位は細分できない為、一気に埋めたのか。
	②層	暗灰色土。カーボンを含むが、遺物はない。
	③層	灰黄褐色土とオリーブ灰色土とオリーブ黒色土に細分でき、水性堆積と考えられる。遺物、カーボン等を含まない。
	④層	オリーブ黒色土とオリーブ灰色土に分けられるが、明確ではない。遺物、木器、自然遺物、骨等を多量に含む。
SD701 (A-A')	①層	褐灰色砂質土。しまりなし、粘性なし。粗目の砂質土。
	②層	灰黄色砂質土。しまりなし、粘性なし。微量の酸化鉄分と、ブロック状青灰色粘質土黄褐色粘質土を含む。
	③層	褐灰色砂質土。しまりなし、粘性なし。暗褐色粘質土を微量に含む。
SD701 (B-B')	①層	暗青灰色砂質土。しまりなし、粘性なし。少量の淡黄色の砂と、微量のカーボンを含む。
	②層	暗灰黄色砂質土。しまりなし、粘性なし。淡黄色の砂を多量に含む。
	③層	青灰色砂質土。弱いしまりあり、粘性なし。暗青灰色粘質土、暗灰黄色砂質土が混在。鉄分を微量に含む。
SD702 (B-B')	④層	褐色砂質土。弱いしまりあり（③層より強い）、粘性なし。多量のマンガンと酸化鉄分、ブロック状の青灰色砂質土と淡黄色粘質土と灰黄褐色砂質土を含む。
	⑤層	黄褐色砂質土。弱いしまりあり、弱い粘性あり。多量の酸化鉄分と、帯状の青灰色砂質土、ブロック状の淡黄色粘質土を含む。
	⑥層	暗緑灰色粘質土。弱いしまりあり、強い粘性あり。少量の酸化鉄分と、ブロック状の緑灰色砂質土と黄灰色砂質土を含む。
	⑦層	暗青灰色土。しまりなし、粘質土と砂質土を交互に含む。
SD702 (C-C')	①層	黄褐色土に褐灰色土が混在。マンガンを含む。弱い粘性あり。
	②層	青灰色土。上層面に茶褐色土の堆積が見られるが地下水による変色か。粘質土。
	③層	暗青灰色土。砂質土。
SD703	④層	灰色砂。ブロック状茶褐色粘質土が混入。
	⑤層	灰色砂と灰色粘質土。部分的に赤褐色砂が混入。
	⑥層	赤褐色砂。ブロック状灰色粘質土が混入。
	⑦層	灰色砂と赤褐色砂。ブロック状の茶褐色砂質土と灰色粘質土が混入。
	⑧層	赤褐色砂と灰色粘質土。互層状に両層の砂が混入。
	⑨層	青灰色粘質土と灰色砂。部分的に赤褐色砂が混入。
	⑩層	明褐色砂質土。砂質が強く、ブロック状の暗灰色粘質土と灰色粘質土が混入。
	⑪層	青灰色砂と暗灰色粘質土。両方の土が互層状に入る。
SD705	①層	暗褐色土にマンガンの粒子を含む。弱い粘性あり。
	②層	茶褐色土にブロック状の明褐色土を多量に含む。細粒の砂を含みサクサクしている。
	③層	褐色土に2～3cmのブロック状明褐色土を含む。細粒の砂を含みサクサクしている。
	④層	灰色の砂に明褐色土を含む。砂質土。
	⑤層	灰色の粘質土。
	⑥層	明褐色土。細粒の砂で、地山の崩壊土か。
	⑦層	明褐色土に灰褐色土の粘質土を含む。基本的に砂質土。
SD706	①層	灰褐色粘質土。強い粘性あり、ブロック状黄褐色砂質土を含む。
	②層	灰白色粘質土。強い粘性あり、ブロック状の黄褐色砂質土と灰褐色粘質土を含む。

表32　上小田宮の前7区検出遺構土層注記表

第10節　上小田宮の前8区・9区の調査

1．遺構分布(第86図)

上小田宮の前8区は東西約60m×南北約20mの東西に長い調査区を設定した。広さは1,270㎡である。上小田宮の前9区は東西約50m×南北約20mの東西に長い調査区を設定した。広さは638㎡である。この調査区で検出した遺構は自然流路の1条のみである。

遺構の分布状況を見ると、調査区の大部分を自然流路が占めており、他の遺構を検出することはできなかった。遺物は縄文時代から中世にかけて出土しており、上小田宮の前1区・6区で検出した自然流路とは異なる状況を示している。

2．遺構・遺物

各遺構・遺物の詳細は第86図～119図・表33・34のとおりである。以下は各遺構を概観する。

(1) 自然流路(第86図・87図)

自然流路は調査区のほぼ中央に位置し、調査区の大部分を占める遺構である。自然流路北部・南部が調査区外に伸びるため、遺構全体の様相は不明である。検出範囲により長軸79.8m、短軸19.2m以上、深さおよそ1.5m以上を測るが、予想以上に地下から湧水したため本格的な調査を断念し、トレンチ調査に主体をおいて実施した。

部分的な調査にとどまったが、8区の南東側から南北に蛇行しながら9区の方向に向かって流れていたと想定できた。これに類する自然流路としては上小田宮の前1区・6区の流路がその例である。

遺物は自然流路の立ち上がりを中心に出土した。遺物は縄文時代から中世にかけて出土しているが、特に注目したいものとして古墳時代の祭祀に伴う遺物が挙げられる。玉名市教育委員会が実施した隣接地での確認調査でも古墳時代の祭祀に伴う遺物が出土しており、今後の調査の成果に期待する。

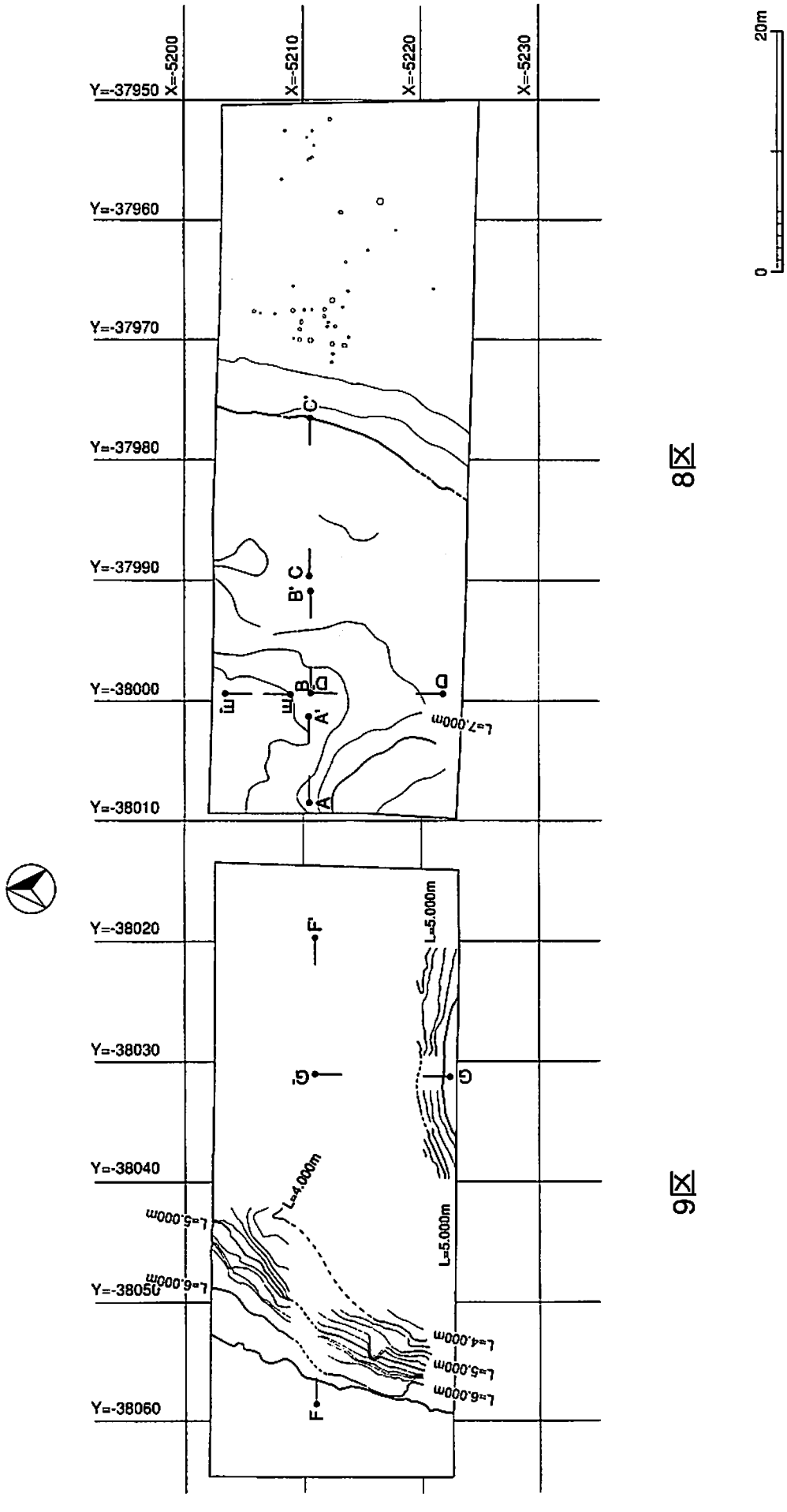
8区の覆土では確認面から大きく8層に分けた。詳細については、表33のとおりである。

第90図～119図はこの自然流路から出土した遺物である。第90図1～34は玉類である。1～3はガラス小玉である。長径3.0㎜・4.0㎜・8.5㎜のものが計3点出土している。色調は紺色・水色を呈し、全て8区①層からの出土である。3点とも平坦面が顕著で、丁寧なつくりのものである。4～6は管玉である。長さは7.0㎜のものが2点と22.0㎜のものが1点の計3点出土している。色調は深緑色・ベージュ色を呈し、全て8区①層から出土している。4・5は碧玉製で丁寧に研磨を施してあるが、6は滑石製で擦切り痕が残る。7～34は臼玉である。出土遺物のほとんどが8区①層に固まっている。直径4.5㎜～8.5㎜の範囲であるが、大部分は直径4.0㎜～5.0㎜の範囲に収まる。色調は灰色～黒色まで幅があるが、材質はほとんどが滑石製である。大部分の遺物には擦切り痕が残り、粗雑な仕上げである。

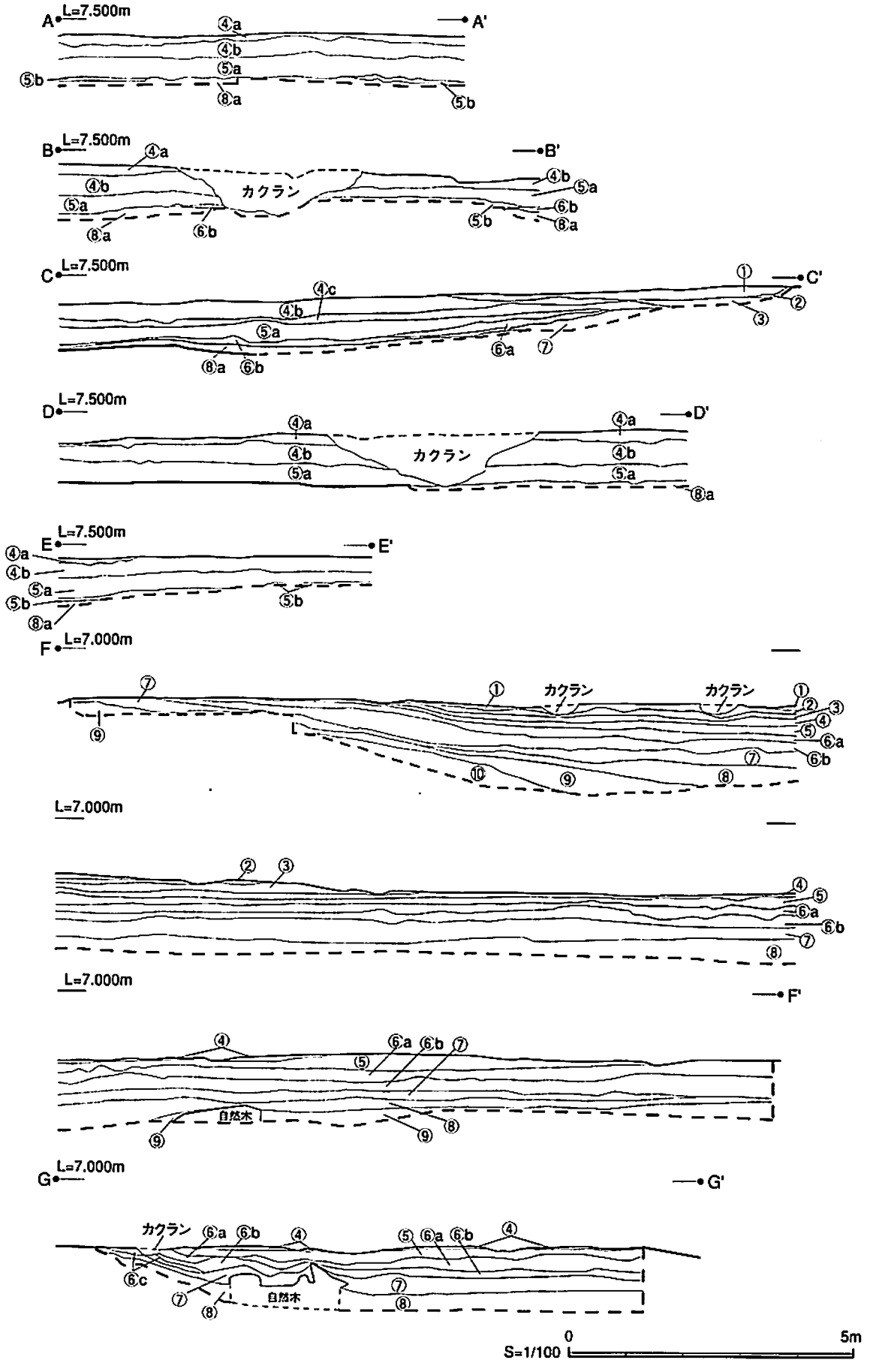
第91図35～85は土製丸玉である。35～41は8区①層から出土している。42～85は9区①～⑧層から出土しており、大部分は9区に固まって出土している。直径1.4㎝～2.6㎝の範囲に収まる。穿孔は焼成前に施されているが、穿孔後は仕上げの調整を施していない。

第92図86～102は土製勾玉である。86・87は8区①層から出土している。91～102は9区⑤・⑥層を中心に出土している。91～94は完形で、長さ3.8㎝～5.2㎝の範囲に収まる。形は尾部が長く半月形を呈し、粗雑な仕上げである。

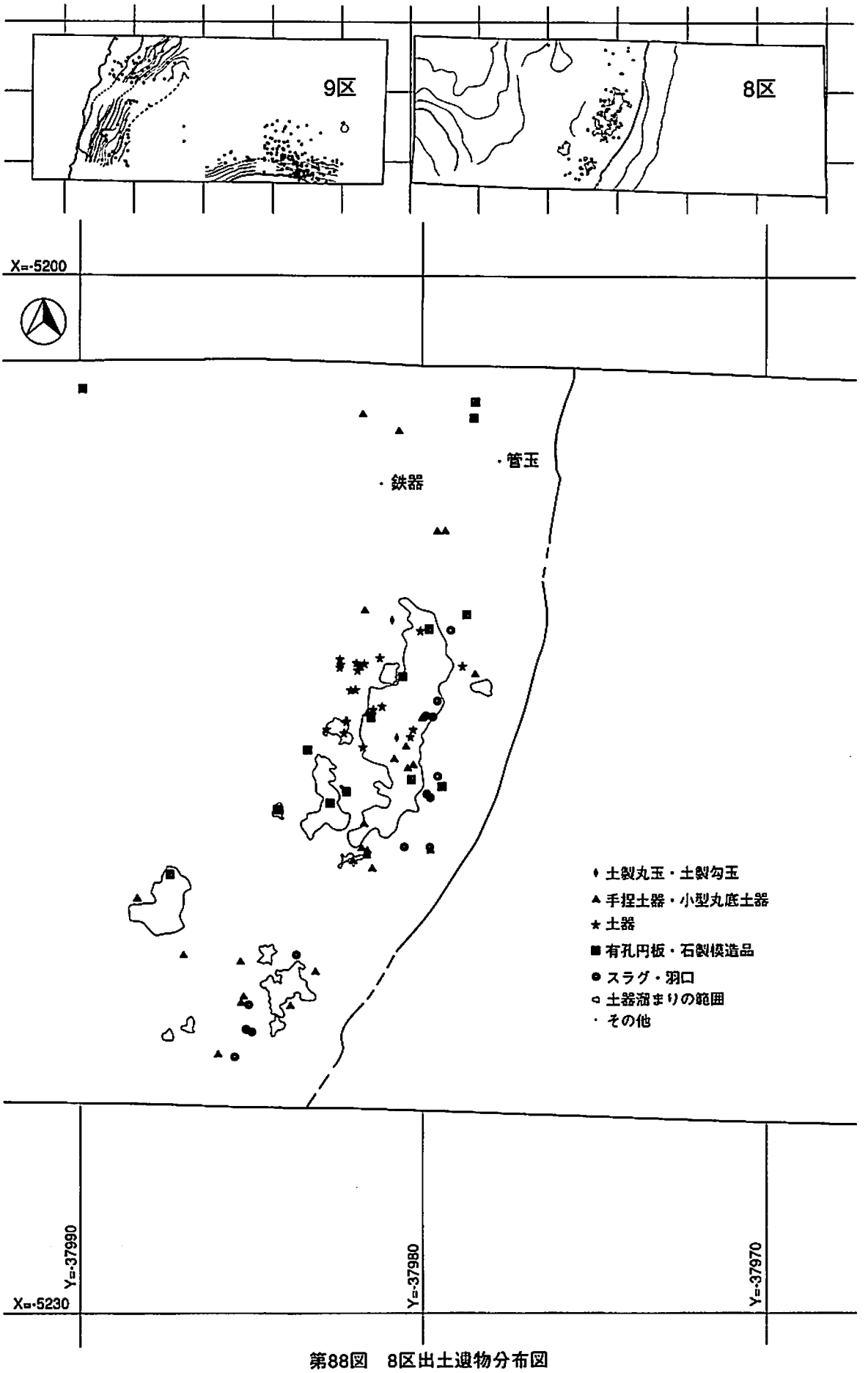
第93図103～116は土製模造鏡である。ほとんどの遺物は9区④～⑦層からの出土である。長さは3.7㎝～5.1㎝の規格で、鈕をつけ孔を貫通させている。鏡面には明確な反りを表現している。



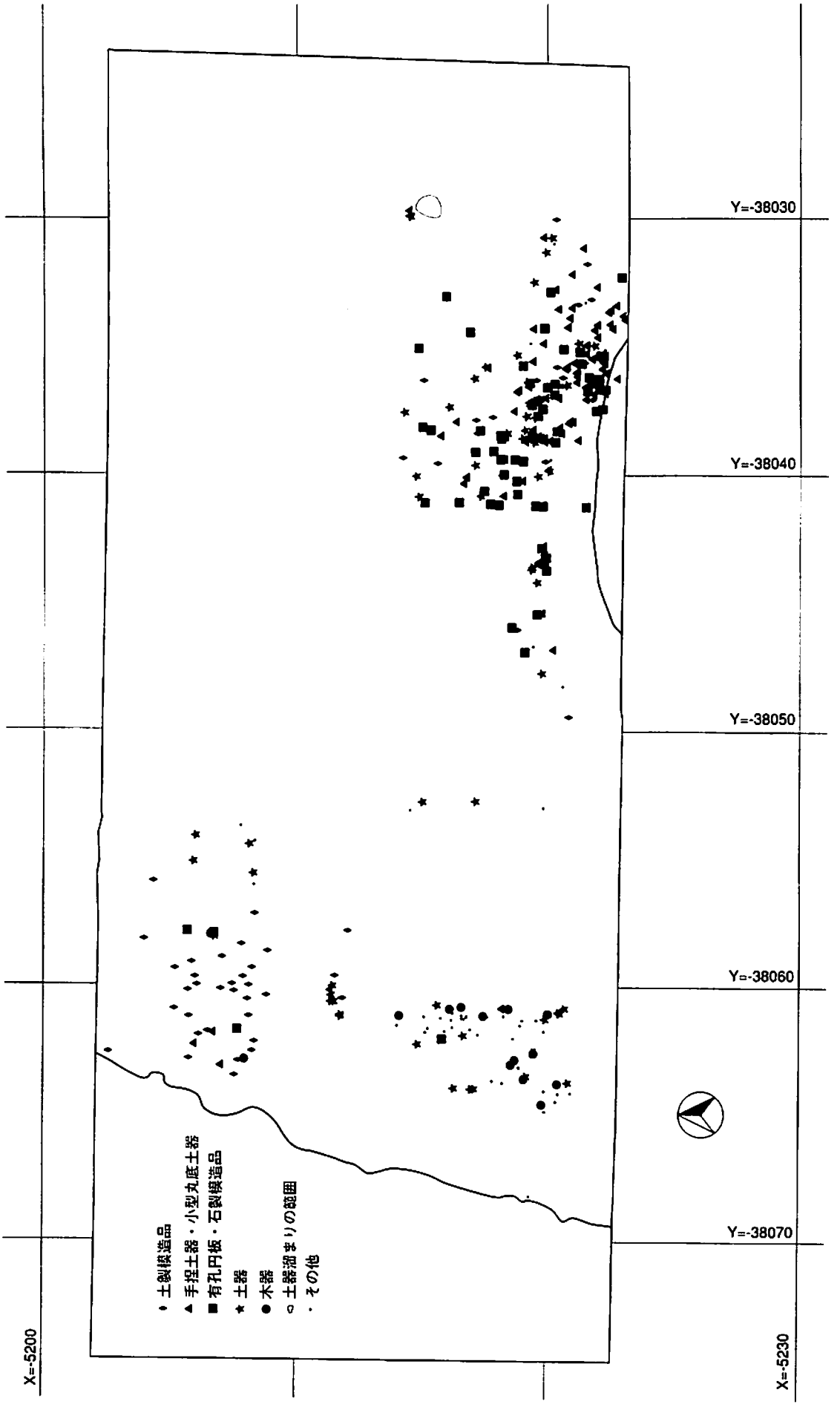
第86図　上小田宮の前8区・9区遺構配置図（S=1/500）



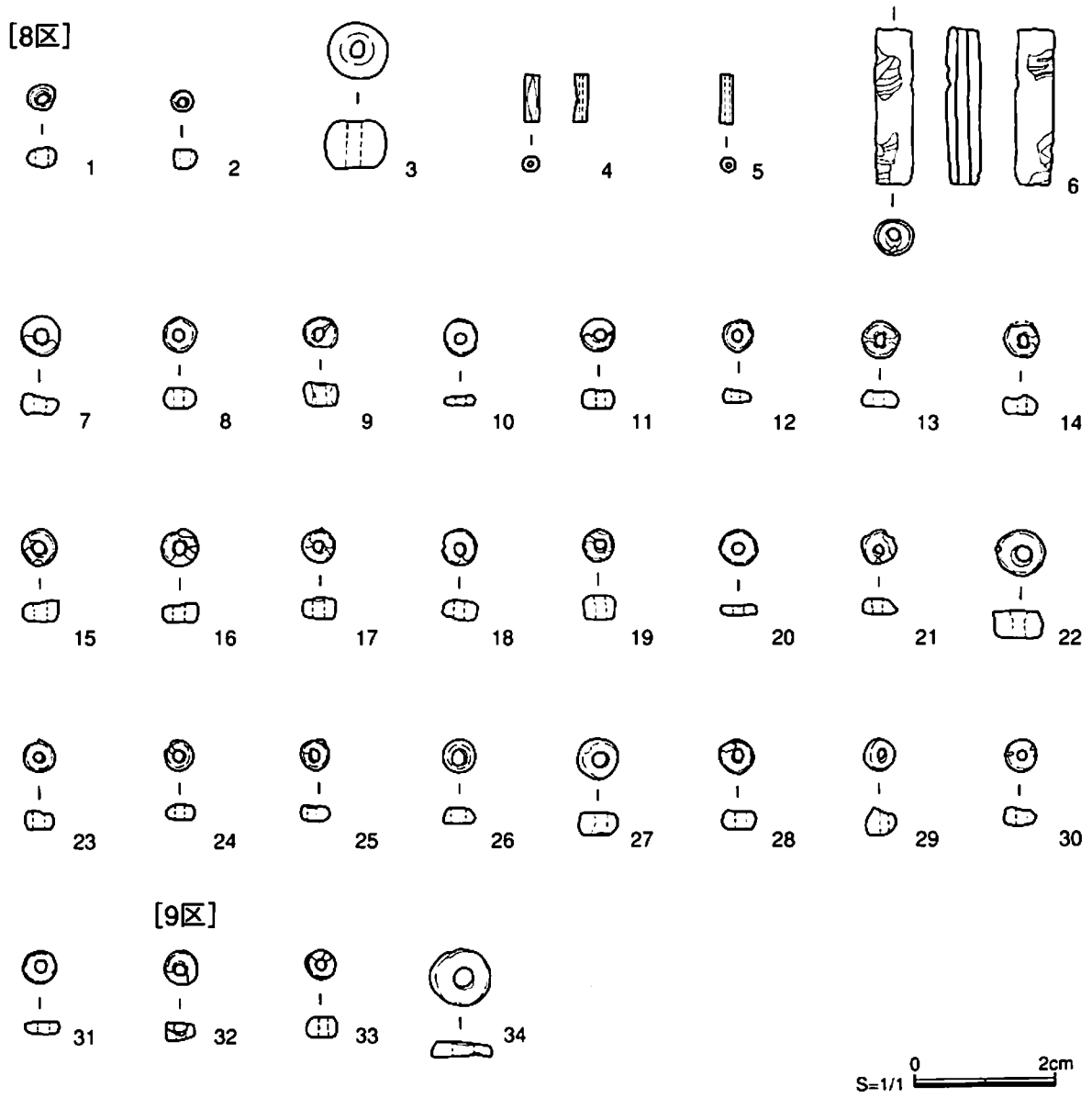
第87図　8・9区流路土層断面図



第88図　8区出土遺物分布図



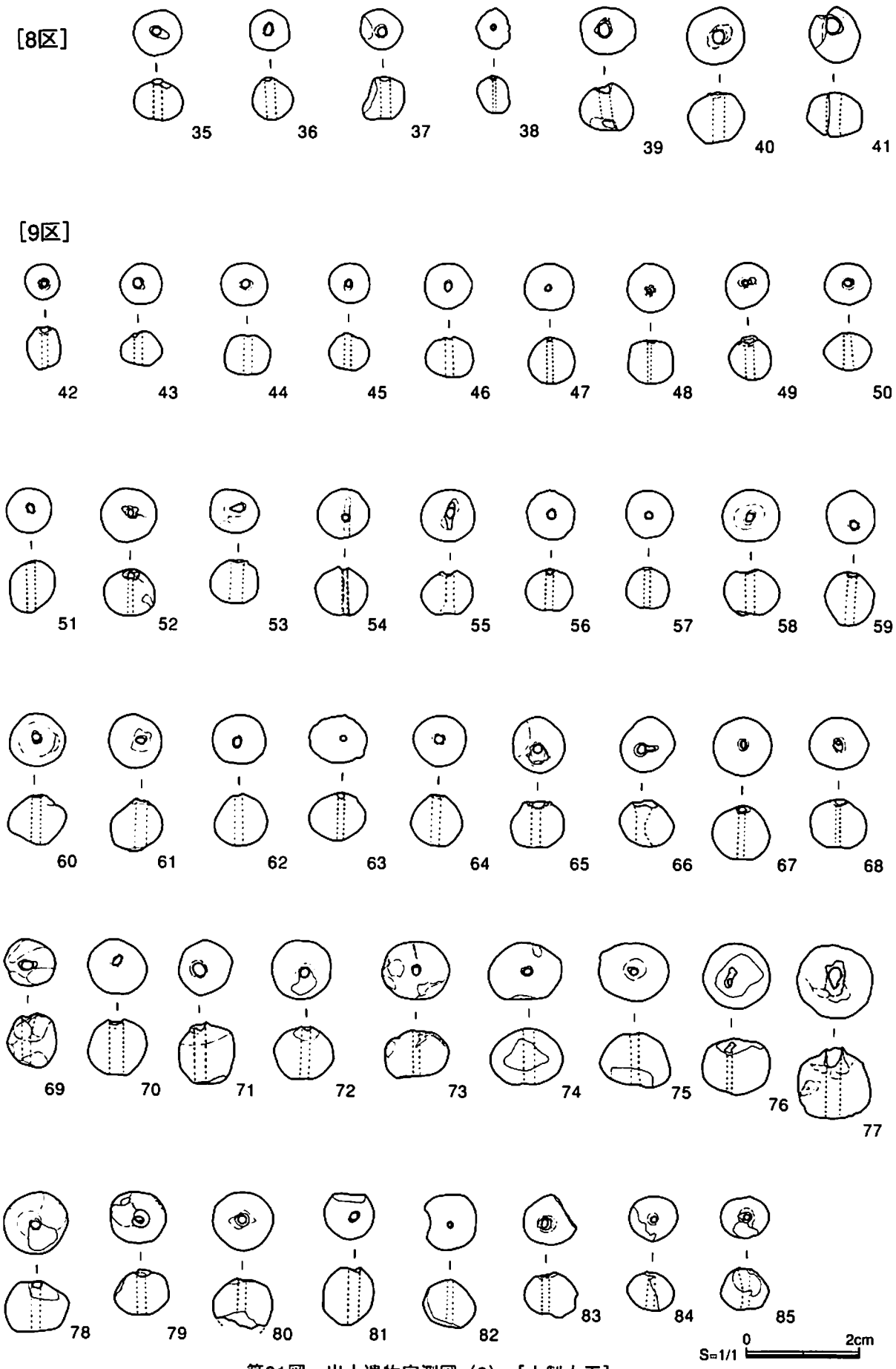
第89図　9区出土遺物分布図



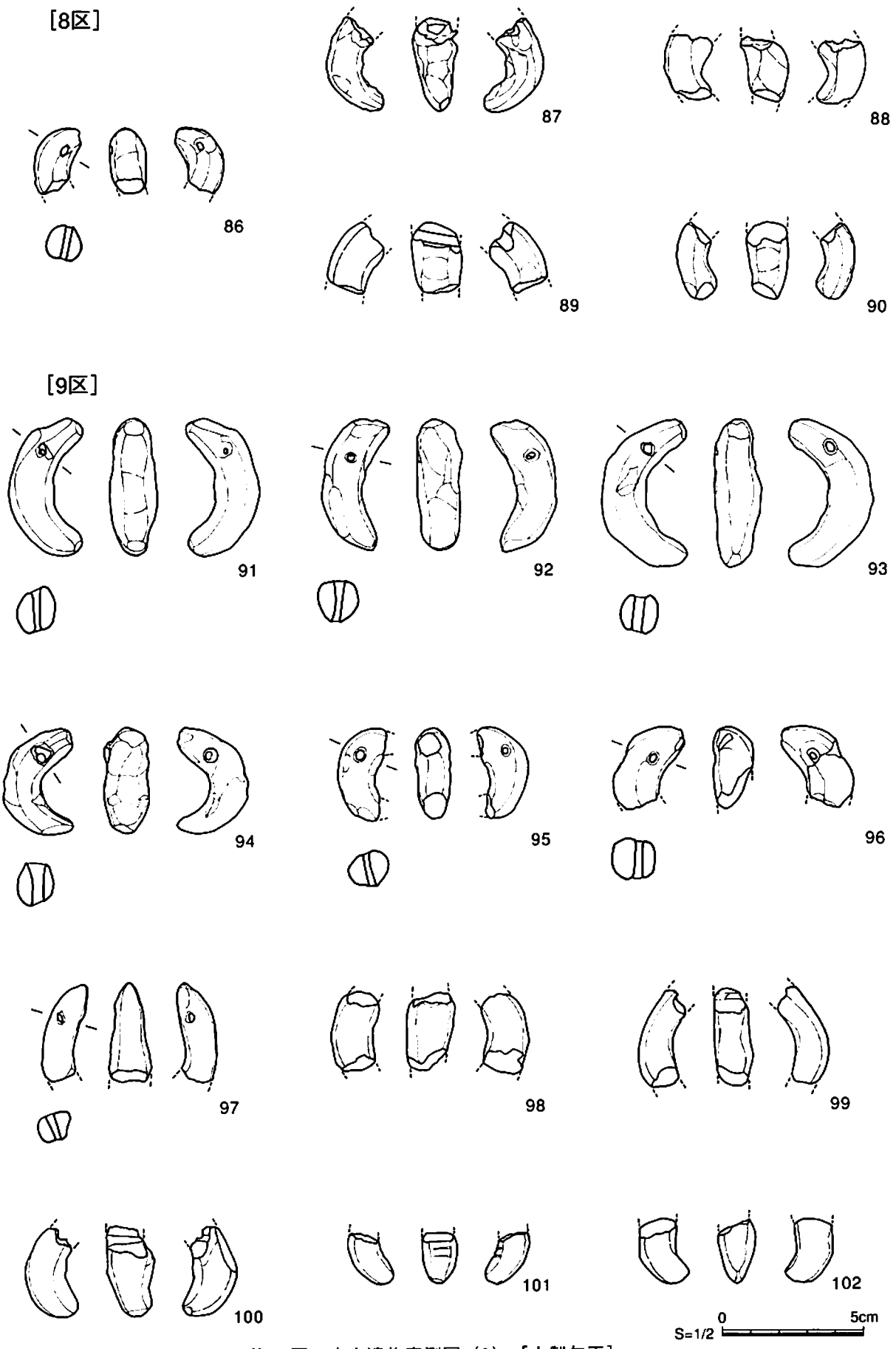
第90図　出土遺物実測図（1）［ガラス小玉・管玉・臼玉］

第94図117・118は土師器の小型丸底壺である。117はほぼ完形の壺で、口縁部はわずかに内湾し、体部は球形で肩部が張る器形である。内器面は丁寧なナデ調整、外器面は細かいハケ目調整後丁寧なナデ調整を施している。118は球形胴で、器壁は薄い。

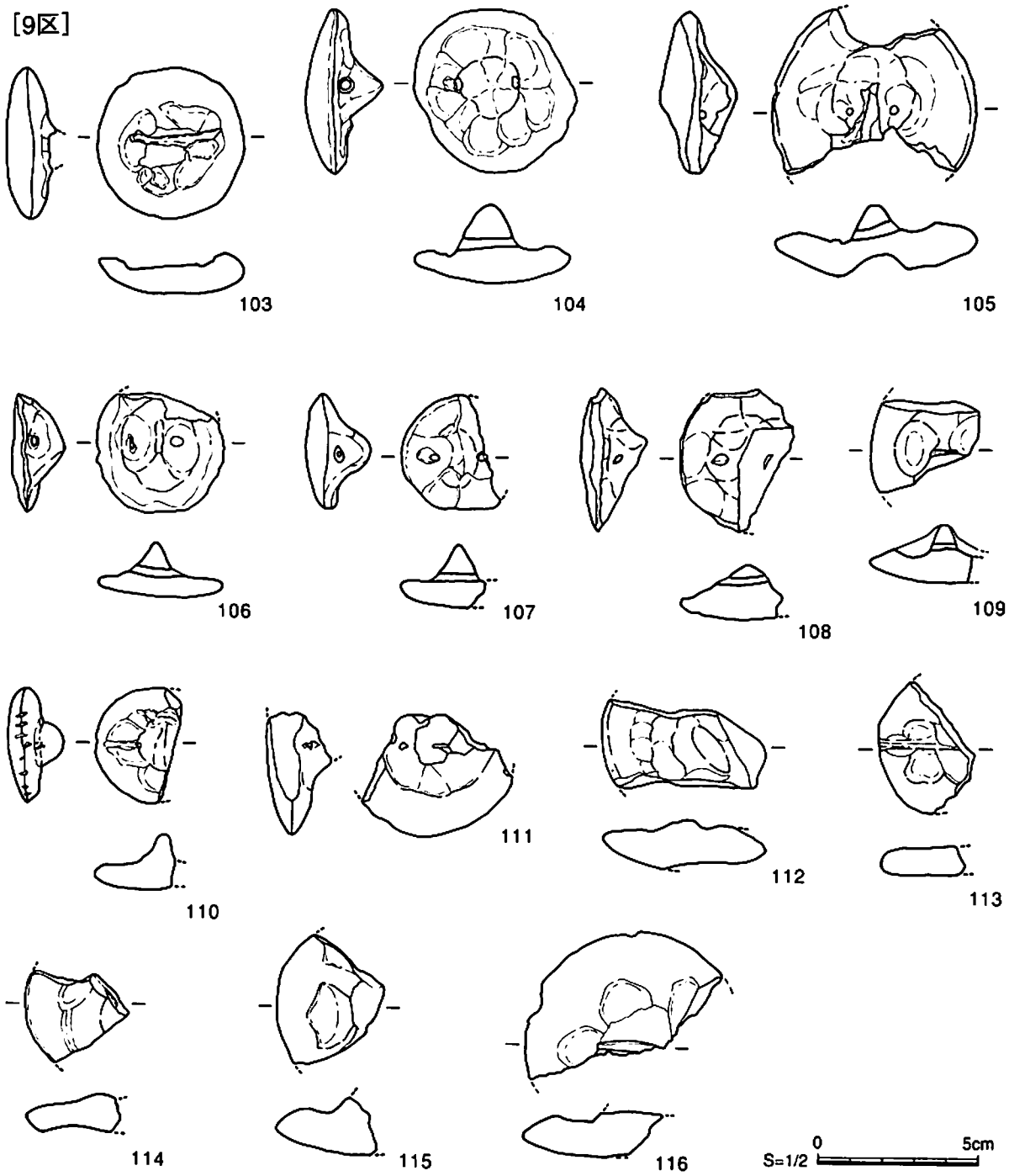
第95・96図は手捏土器である。120～139・142～156・158・160～170・177は杯形である。出土した手捏土器の中でも小さな部類の一群である。概ね丸底で、口径2.0cm～5.0cm、器高2.0cm～5.0cm前後のサイズで、半球形だが、器壁の厚さや体部形状にはバリエーションが認められる。120～125は最も小型の手捏土器に分類でき、口径は指一本しか入らないほどである。外器面はナデ調整を施してある。126は全体に器壁が厚い。128は底部に平坦面があるが、口縁部と水平になっていない。130・131・134・142～145は丸底で、内外器面とも丁寧なナデ調整を施している。146～148・150・152～156・158は平底で、口縁部が外反して開き気味である。153は胎土が黒色で、他の土器より黒い色調である。160～170は口縁部がわずかに内傾しており、外器面に細かいナデ調整を施してある。177は杯形の中で最も大型の手捏土器に分類できる。器形から鉢形とした方が良いかもしれない。



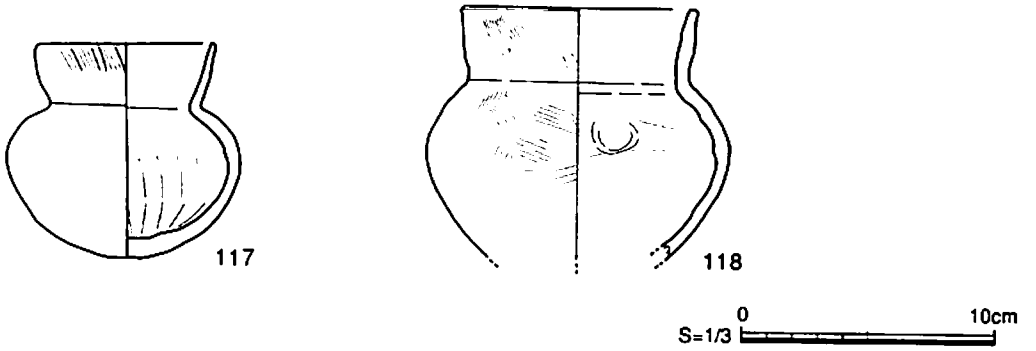
第91図　出土遺物実測図（2）［土製丸玉］



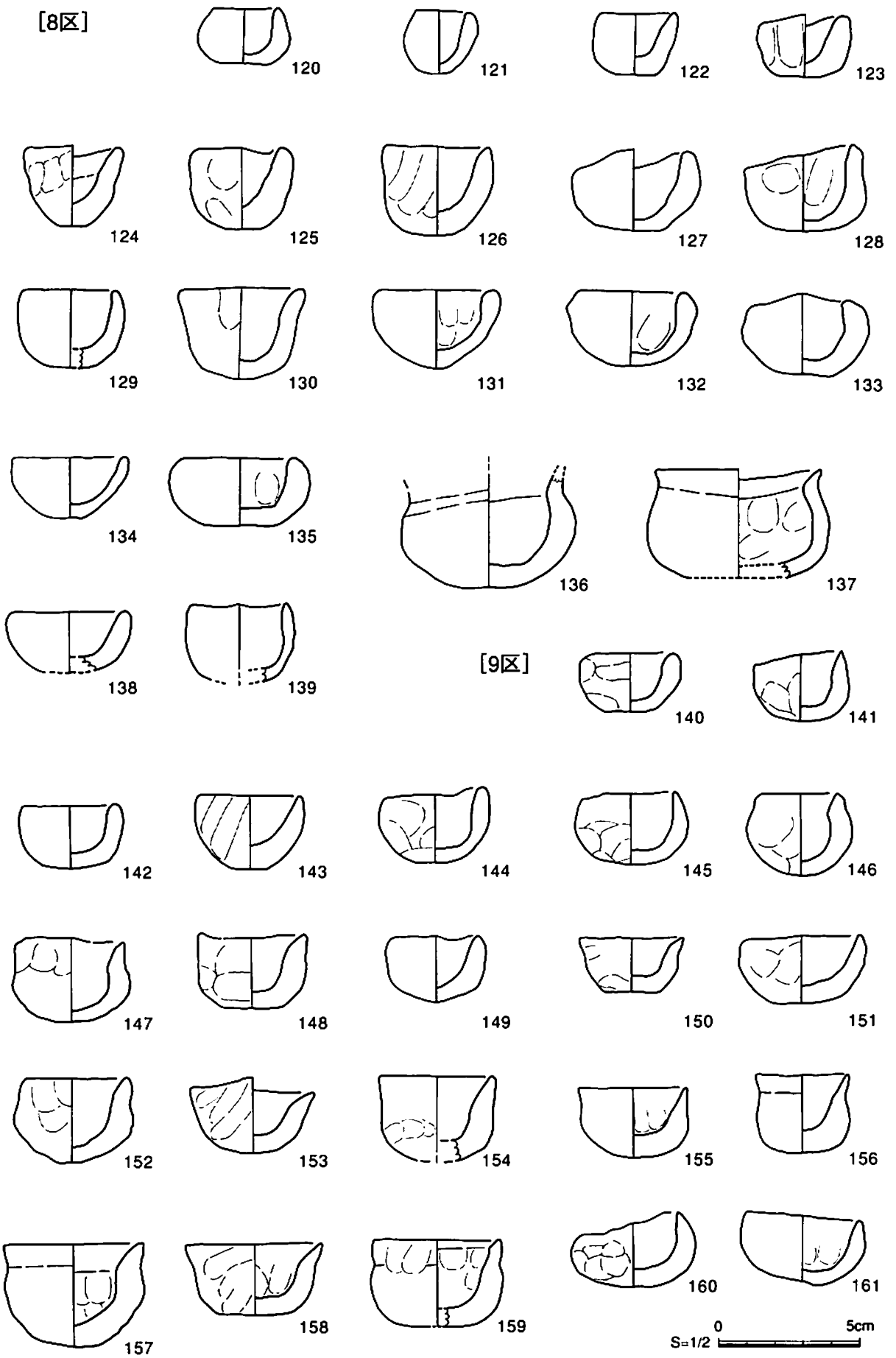
第92図　出土遺物実測図（3）［土製勾玉］



第93図　出土遺物実測図（4）［土製模造鏡］



第94図　出土遺物実測図（5）［小型壺］



第95図　出土遺物実測図（6）［手捏土器］

140・141・157・159・171～176・178～185は壺形である。140・141・157・159・171・180は頸部を意識的に作り出している。172は底部が平底である。器壁は非常に薄い作りで、ナデ調整を施している。173～175・178は胴部の器壁に厚みがあり、重心が低いため安定感がある。176・179は丸底で器壁に厚みがある。口縁部は欠損して不明であるが、頸部が強く締まる器形である。181は球形胴部を持ち、外器面は細かいハケ目後ナデ調整を行い、丁寧に仕上げている。口縁部が欠損して不明であるが、器形から小型丸底壺とした方が良いかもしれない。182は口頸部を尖らせ、さらに外反させることで、頸部を表現している。183は平底の深い器形で、頸部ではわずかにくびれを表現し、口縁部をつまみ出している。185は体部最大径より口径が大きく、甕形とした方がよいかもしれない。体部付近の器壁はやや厚く、口縁部は直線的に伸び開いている。内外器面とも丁寧なナデ調整を施している。

186～191は器台形としている。円筒の上下に杯を付けたような形で作られる。手捏土器の中でも特に丁寧に作られている。

第97図192は土師器の坩堝あるいは取瓶である。復元口径約5.5cmの小型の皿状を有している。欠損が激しく全体形状は不明であるが、土師器の内外部が激しく熱を受けている。

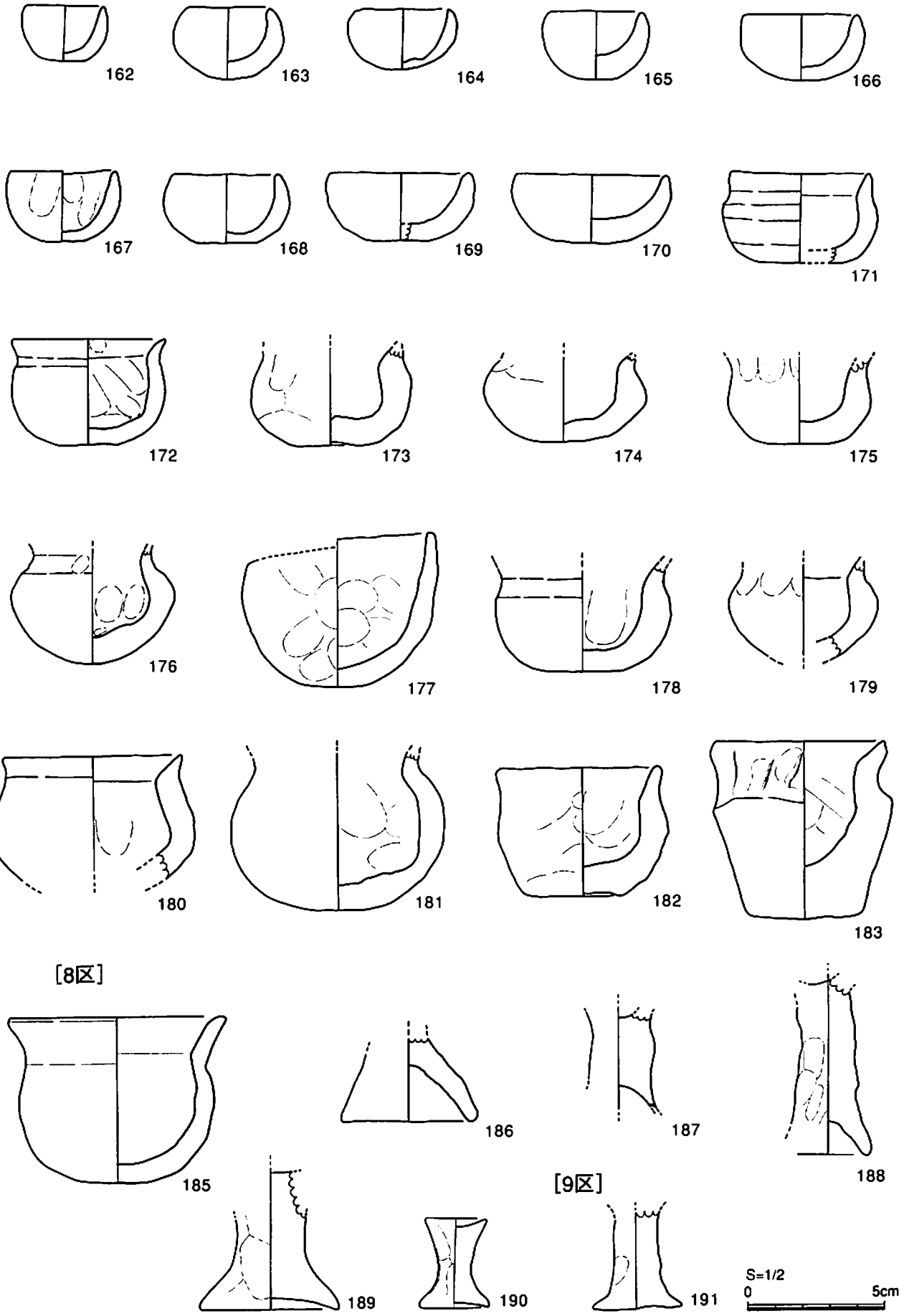
193・194はふいごの羽口である。193は長さ8.6cm以上、径5.5cm、孔径2.5cmを測る。表面には熱変による鉄分の付着が見られる。194は長さ7.2cm以上、径7.8cm、孔径3.0cmを測る。2点の羽口とも破損品で全体像は不明であるが、羽口と共にスラグ(9.8kg以上)・炉壁・坩堝(取瓶)が出土している。

195～197は土製の支脚である。8区の調査区で7脚ほど出土しているが、その中から3脚図化した。形状は台脚状を呈し、上端が片側に屈曲して突起状に外に突出している。いずれの支脚も突起のある側が火を受けて変色しており、突起部で煮炊き容器を支えたことがわかる。出土状況は3脚が1対で検出しており、最低でも3対以上あったものと想定できる。ただ、調査地は低湿地であり、住居地としては適していないことから、この支脚も祭祀関連の一つとして考えられる。

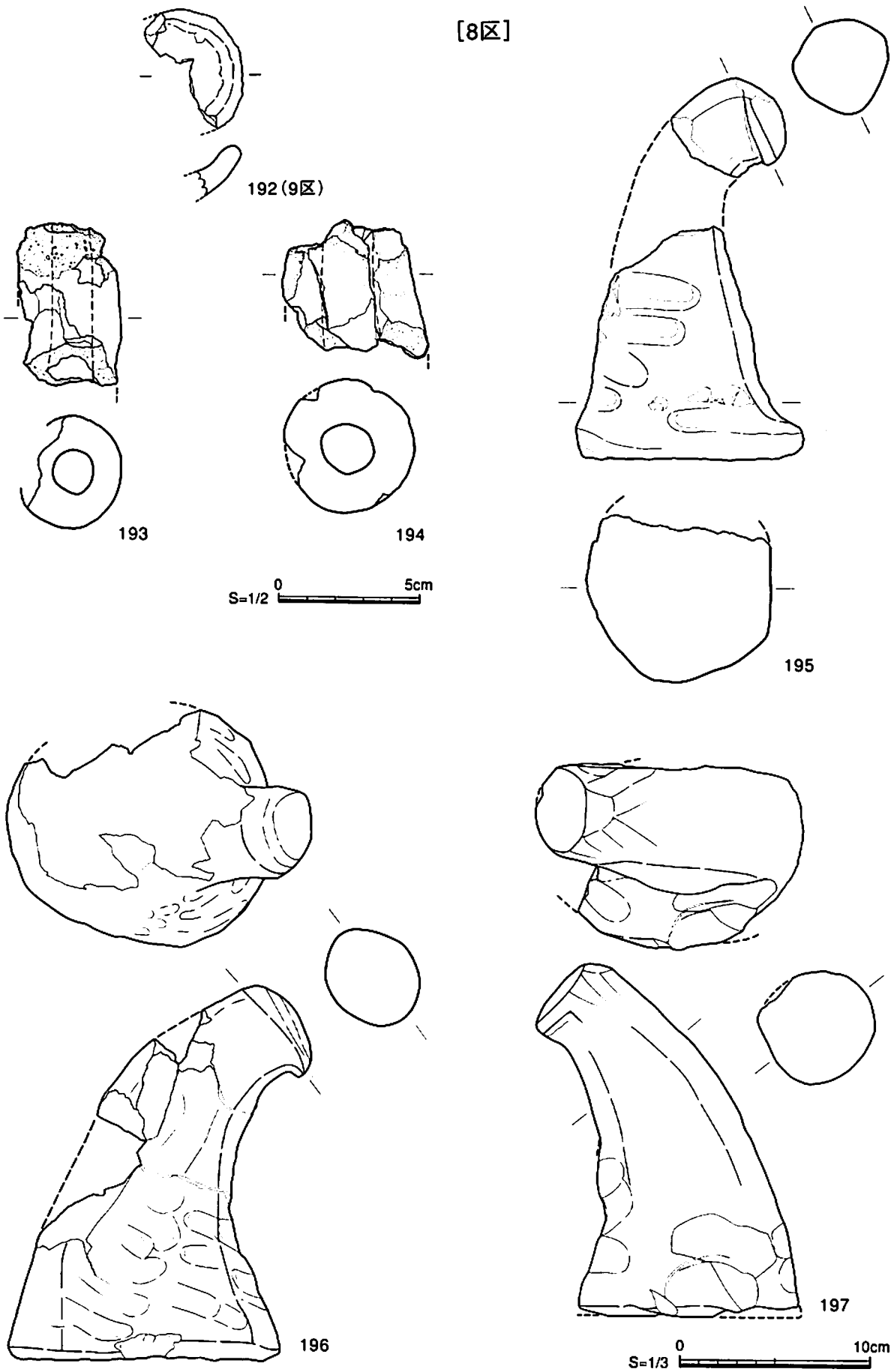
第98図～100図は石製の有孔円板である。有孔円板は薄く円形に形成した滑石に孔を穿ったものである。わずかに稜のある円形または楕円形を呈し、全面を細かく研磨している。いずれも広い表裏面の研磨の方向が一定していない。大きさを見ると、直径6.2cmから1.1cmで、6.0cm前後、4.0cm前後、2.0cm前後の3つに分けることができる。断面形状はほとんどが長方形の板状だが、楕円形になるものもある。孔は2個一対の双孔のものと1個の単孔のものに分けられる。双孔の間隔は1.7cm～0.2cmと若干の幅がある。穿孔は両面から行われるものと片方から行われるものに分けられる。孔の直径は0.4cm～0.1cmだが、わずかに中央部からずれるものもある。

個別に見てみると、198～205は8区出土の双孔の有孔円板である。198は欠損しているが、表裏とも研磨を施している。双孔の間隔が0.9cmと広がる。199はやや歪な円形を形成しており、若干側面の調整にむらがある。200は199とほぼ同径の有孔円板で、双孔の間隔も重さも同じである。201は欠損品だが、0.7cmの厚みをもつ。重さも13.6gと重く、完形であれば大型の有孔円板に含まれると考えられる。202は欠損しているが、形状がやや楕円形を呈している。穿孔は両面から行われている。203は欠損しているが、形状は円形を呈している。穿孔は両端から行われている。204は欠損しているが、203とほぼ同径の有孔円板で、双孔の間隔も同じである。205は欠損しているため全体の形状は不明だが、おそらくは双孔の有孔円板と考えられる。石材はオレンジがかった滑石製である。

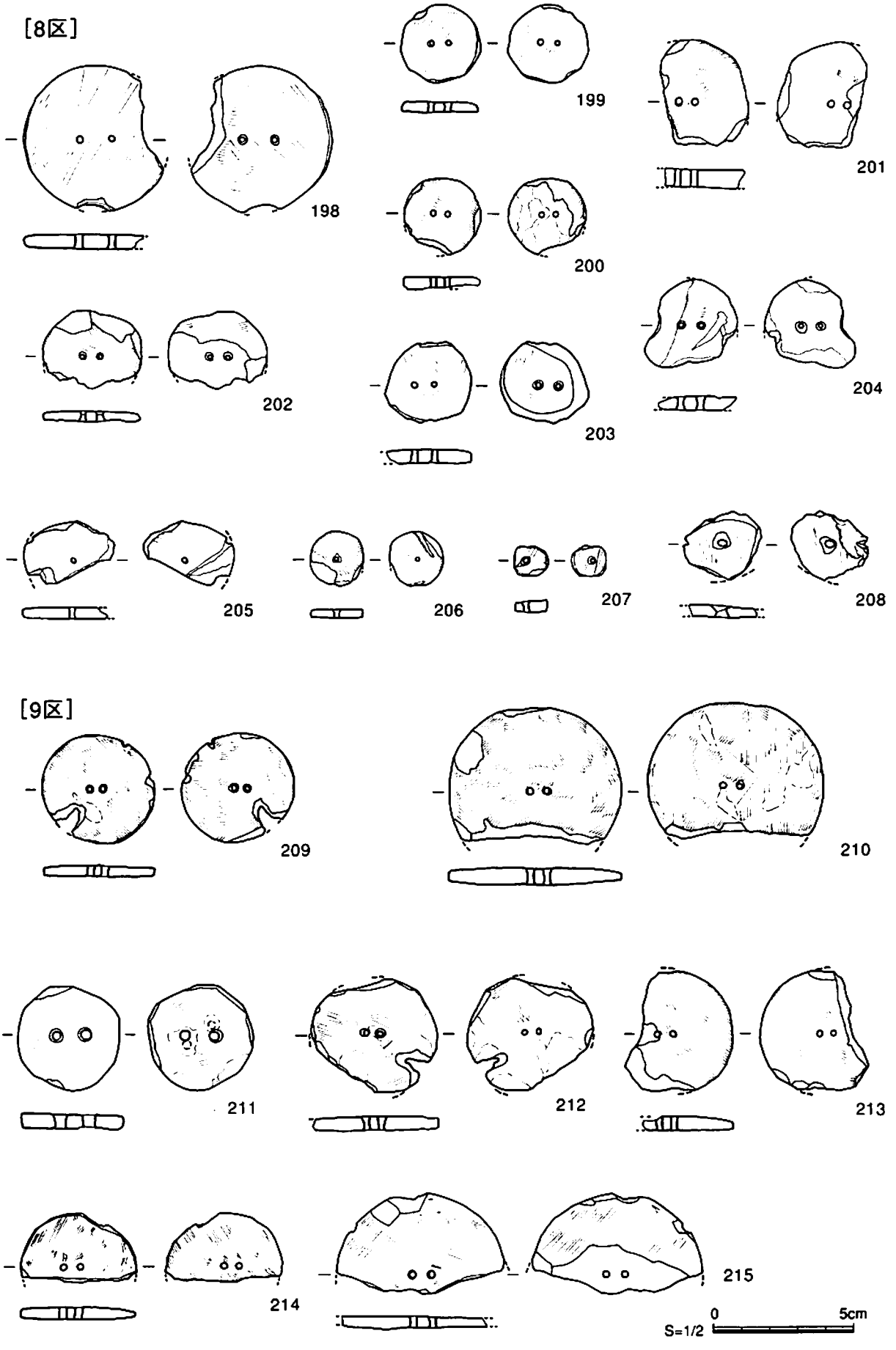
206～208は8区出土の単孔の有孔円板である。206は不整形であるが、円形の有孔円板である。石材は205と同じく滑石製である。穿孔は片面から行われており、表裏とも研磨を施してある。207は不整の楕円形である。最も小型の有孔円板である。208は欠損しているが、側面調整から単孔の有孔円板と考える。穿孔は両面から行われているが非常に粗く穿っている。



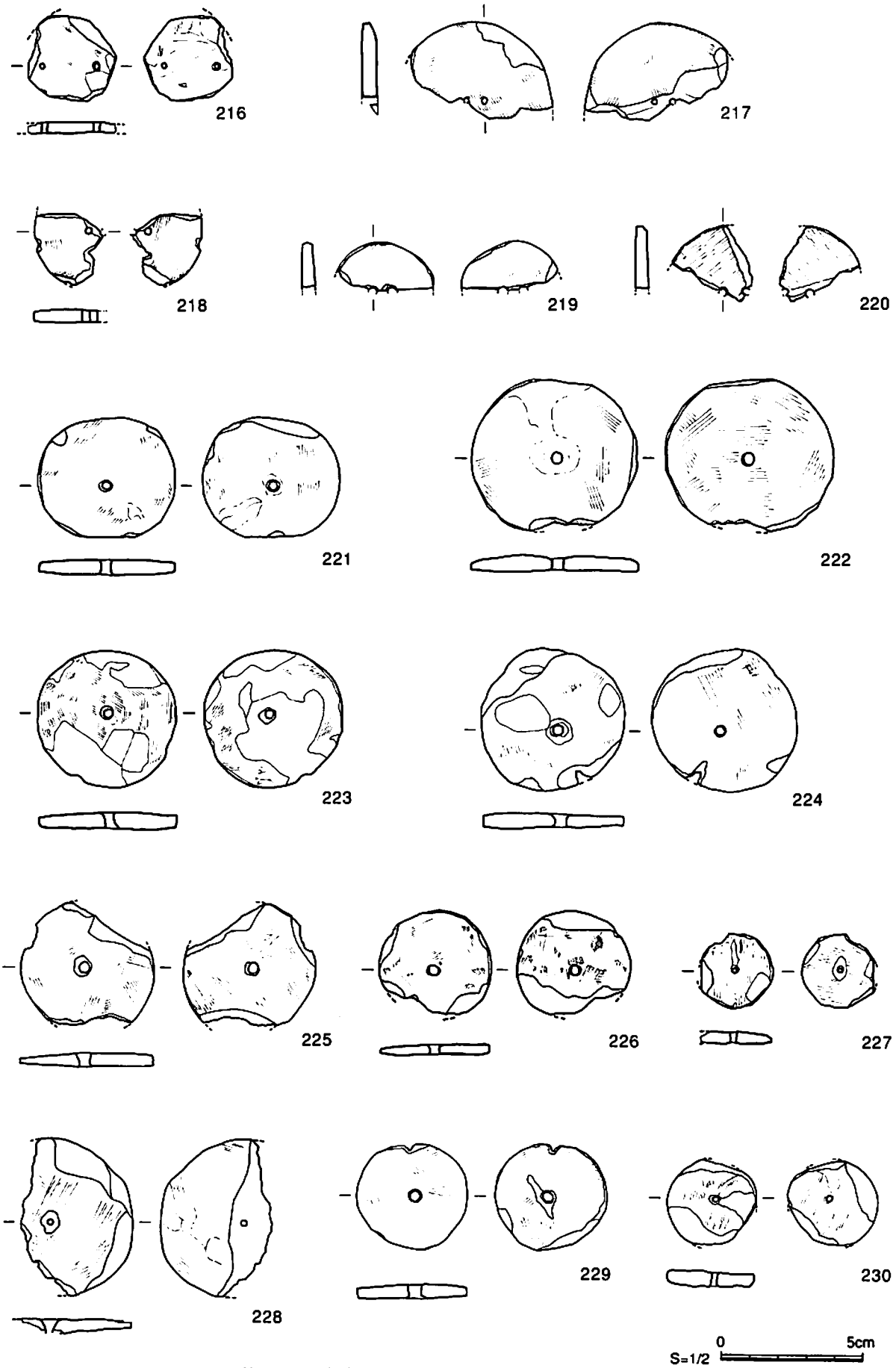
第96図　出土遺物実測図（7）［手捏土器］



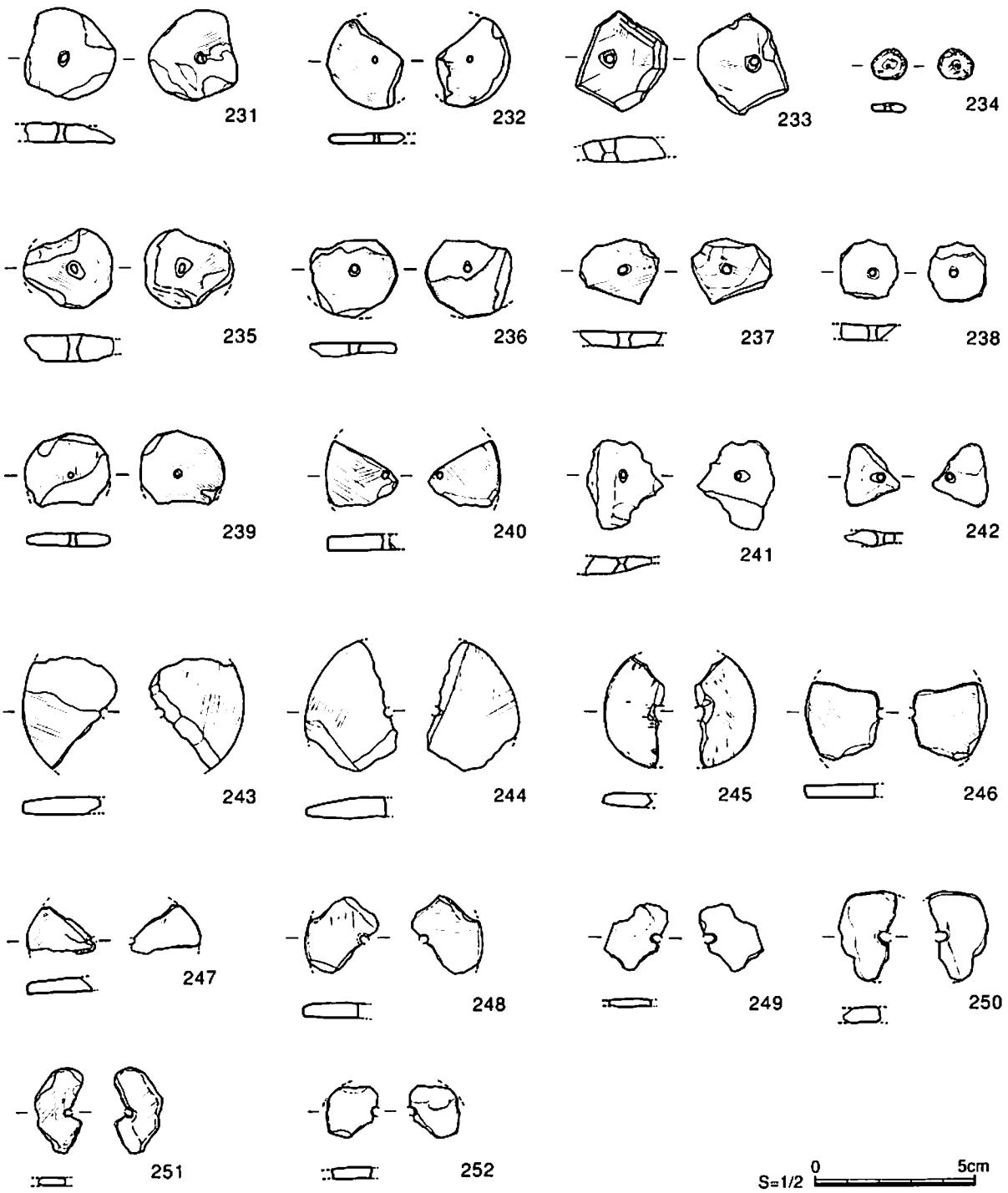
第97図　出土遺物実測図（8）［坩堝・羽口・支脚］



第98図　出土遺物実測図（9）［有孔円板］



第99図　出土遺物実測図（10）［有孔円板］



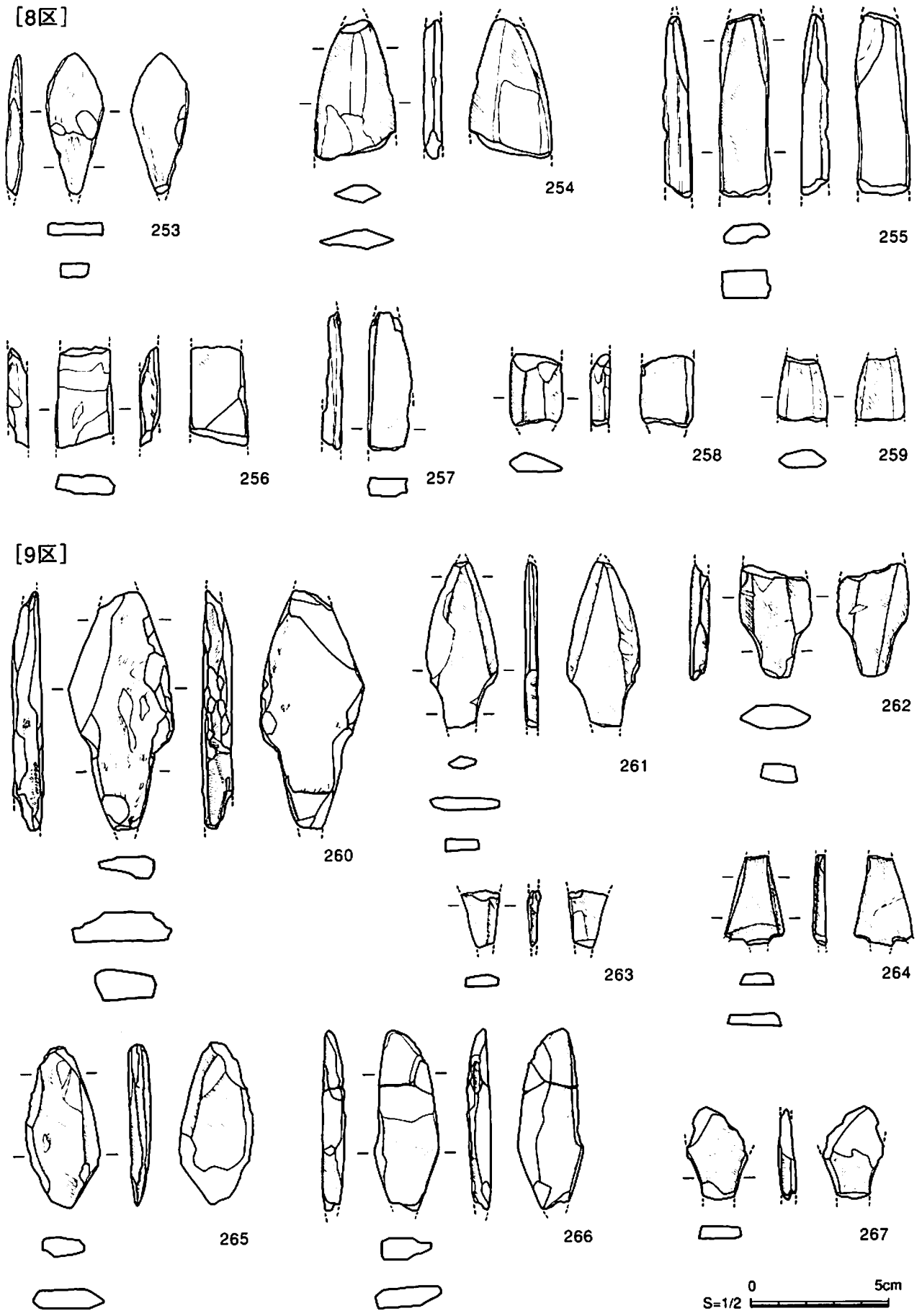
第100図　出土遺物実測図（11）［有孔円板］

209～220は9区出土の双孔の有孔円板である。209は側面の調整が粗く、滑らかさがない。210は直径が大きく、中央が膨らんだレンズ状を呈している。211は側面の調整が粗く、未製品と考えられる。穿孔も位置を変えて穿ち直している。212・213は特に規格性が高く、近似している。214は双孔の位置が中央からずれ、やや歪な形になっている。215は直径が大きく、中央が膨らんだレンズ状を呈している。216は側面に擦切り痕が残る未製品である。双孔の間隔は1.7cmと離れている。217は直径が大きく、中央が膨らんだレンズ状を呈している。218・220は欠損しているが、側面調整から双孔の有孔円板と考える。219はやや歪な楕円形を呈していると思われる。

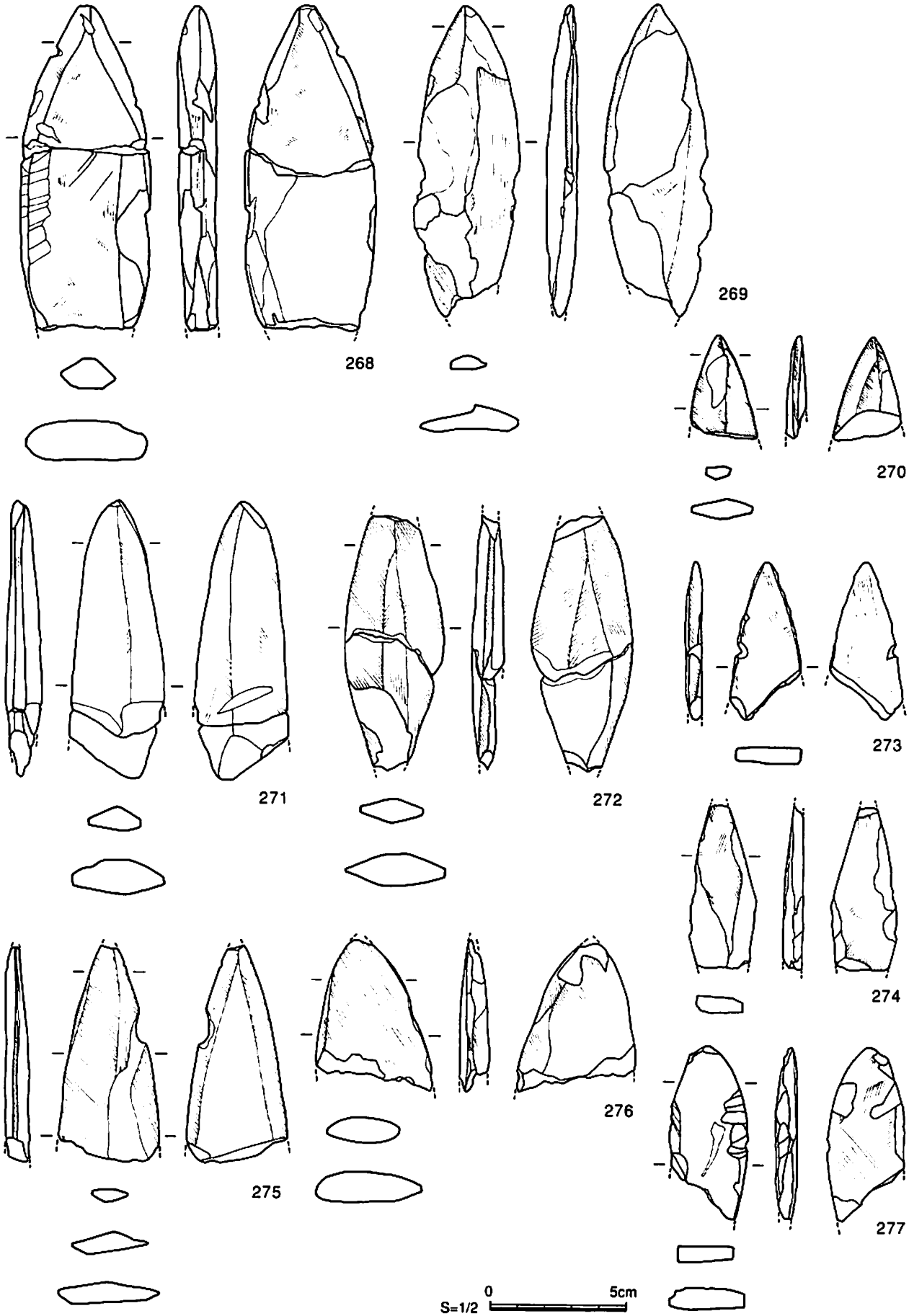
221～252は9区出土の単孔の有孔円板である。221は楕円形を呈している。孔の位置も若干中央からずれる。222・228は直径が大きく、中央が膨らんだレンズ状の断面形状を呈している。孔径も大きく0.4㎝前後である。223～225は孔が中央からずれて穿っている。223・225は片面から孔を穿ち直している。226・229は側面の調整が粗く、側面に滑らかさがない。227は孔が小さい。230は穿孔が両端から行われている。231は欠損が激しく形状は不明であるが、側面の一部に調整の痕が残り、欠損後作り直しを試みたと考えられる。232は表裏とも研磨を丁寧に施してある。石材はオレンジがかった滑石製である。233は側面に擦切り痕が残る未製品である。234は歪な楕円形を呈している。非常に小型で直径1.1cmしかないが、表裏とも研磨を施している。石材はオレンジがかった滑石製である。235は欠損が激しく形状は不明である。穿孔は両端から施しているがかなり粗い。236は側面の研磨の調整が粗く、未製品と考えられる。237・238・241・242・249～252は欠損が激しく、形状は不明である。穿孔は両端から施している。239は孔が小さい。240は欠損品であるが、表裏とも研磨を丁寧に施してある。石材はオレンジがかった滑石製である。243は欠損が激しく形状は不明である。もしかすると、双孔の有孔円板の可能性もある。244は欠損品であるが、残存部から中央が膨らんだレンズ状の断面形状を呈しているものと想定できる。245～248は欠損品であるが、表裏とも研磨を丁寧に施してあり、側面の研磨痕から有孔円板と考えられる。

第101図～103図は石製模造品の剣形である。253～259は8区出土である。253はほぼ完形の剣形で、茎を明確に造り出している。剣の先端部と両側縁部を斜めに削り出し刃部を表現しているが、鎬の造り出しは認められない。254・258・259は遺存状況が悪いが、両面の側縁を斜めに削り出し、鋭利な刃部を表現している。この加工が中心に及ばない場合は鎬が2本あるように見える。255・257は遺存状況が悪いが、先端部の両側縁に斜めに削り出しの痕跡が見受けられるので剣形としているが、側面に擦切り痕を残していることから、未製品とみられる。256は遺存状況が悪いが両側縁部の一部に斜めに削り出しの痕跡が見受けられるので剣形としているが、明瞭な刃の形成は見られないため、未製品とみられる。

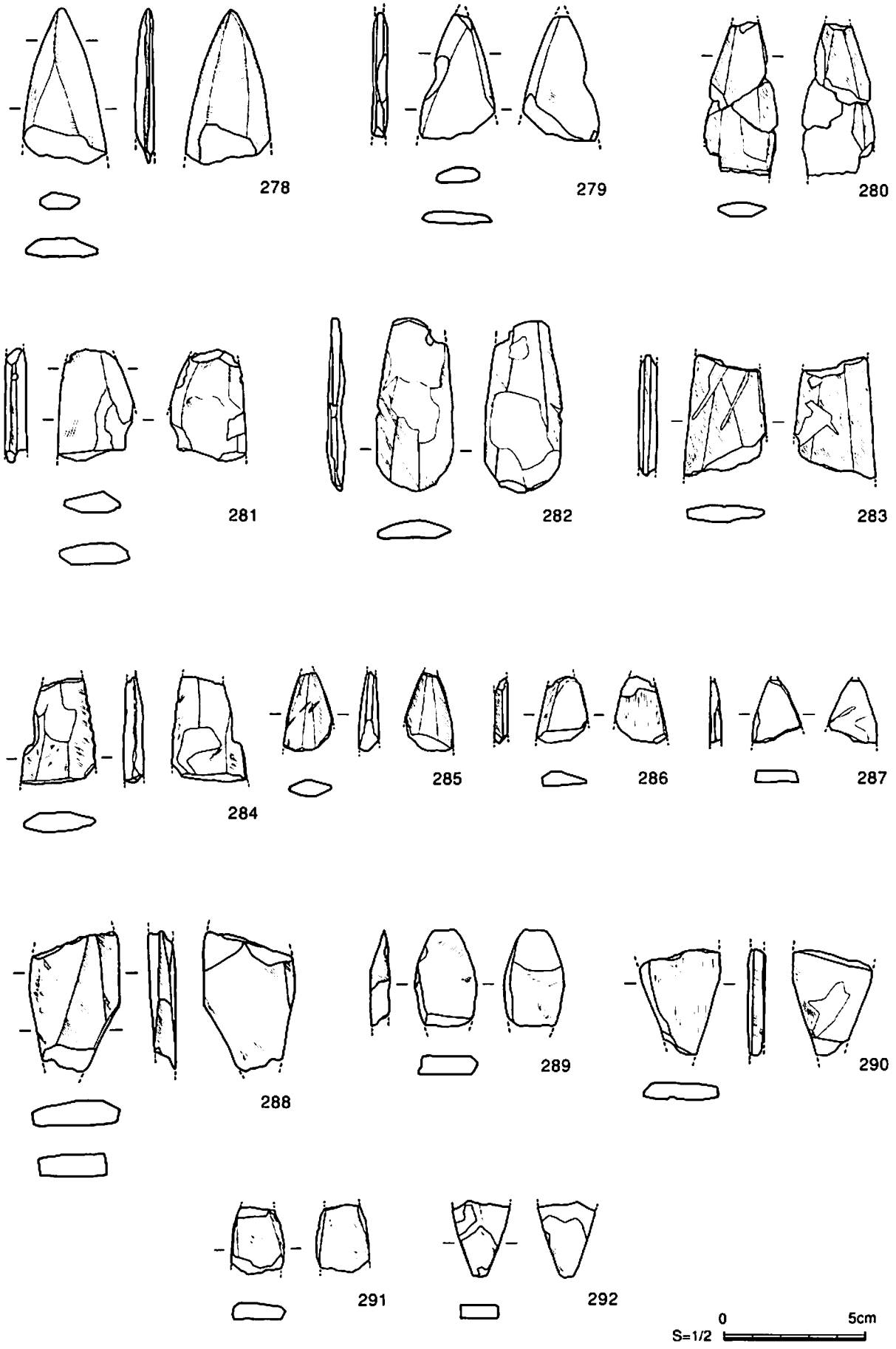
260～292は9区出土の石製模造品の剣形である。260はほぼ完形の大型の剣形で、茎を明確に造り出している。剣の先端部と両側縁部を斜めに削り出し刃部を表現しているが、鎬の造り出しは認められない。造りはかなり粗雑である。261・262は剣形で、茎を明確に造り出している。剣の先端部と両側縁部を斜めに削り出し刃部を表現しており、鎬の造り出しは両面に2本確認される。263・267は遺存状況が悪いため形状は不明であるが、剣形の茎と考える。264は先端部と茎部が欠損しているが、剣形と考える。片面の側縁を斜めに削り出し刃部を表現しているが、鋭利でなく角のある直線となっている。265・266は2点とも若干欠損しているが、茎を明確に作り出した剣形である。作りが非常に粗雑で、扁平粗製化した段階の石製模造品に類似した形状を示している。268・269・271・272は4点とも若干欠損しているが、大型の剣形である。残存度に違いがあるが両者とも明確な茎の作り出しがなく、鋒と見られる部分から刃部を粗く作出しようとした意図が感じられる。扁平粗製化した段階の石製模造品に類似した形状を示している。270・275・278・279は剣形の先端部である。残存度に違いがあるが両者ともほぼ同じ幅・厚みで、鋒と見られる部分から刃部を作出しようとした意図が感じられる。両側縁とも比較的鋭利に整形されている。2点とも全体に細かく研磨を施してあるが、全体の形状は不明である。276は大型の剣形の先端部である。273・274・277は茎部が欠損した剣形である。剣の先端部と両側面部を削り出し、刃部を表現している。鎬の造り出しは認められない。刃部は鋭利でなく、角のある直線または曲線となっている。280～284は先端部と茎部が欠損しているが剣形と考える。285～287は剣形の先端部である。288～292は剣形の茎部である。



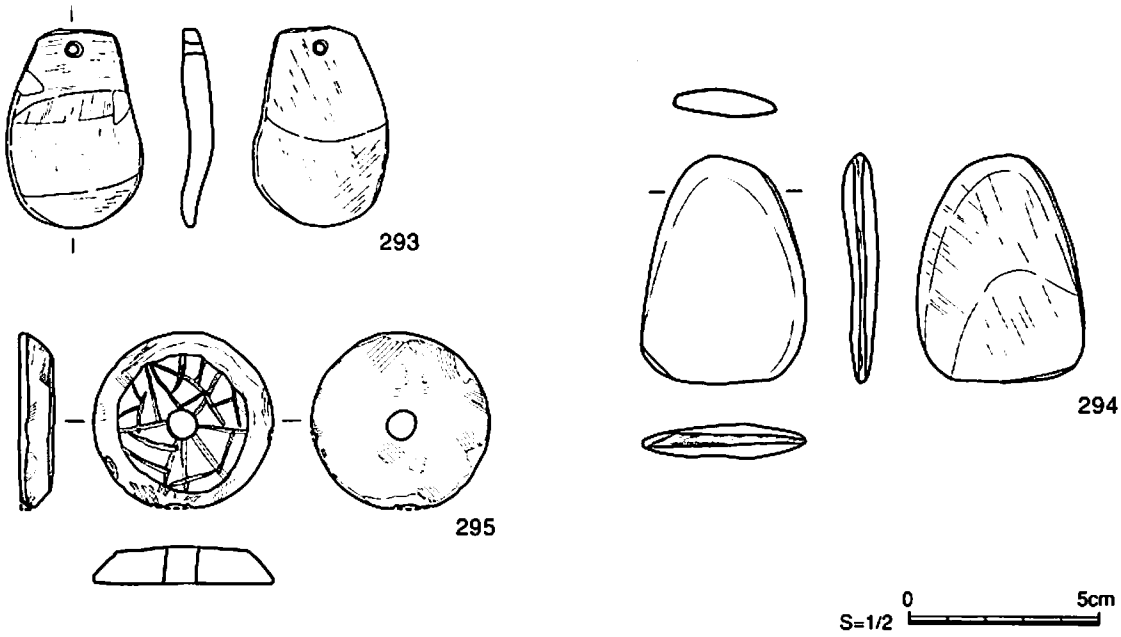
第101図　出土遺物実測図（12）［剣形石製品］



第102図　出土遺物実測図（13）［剣形石製品］



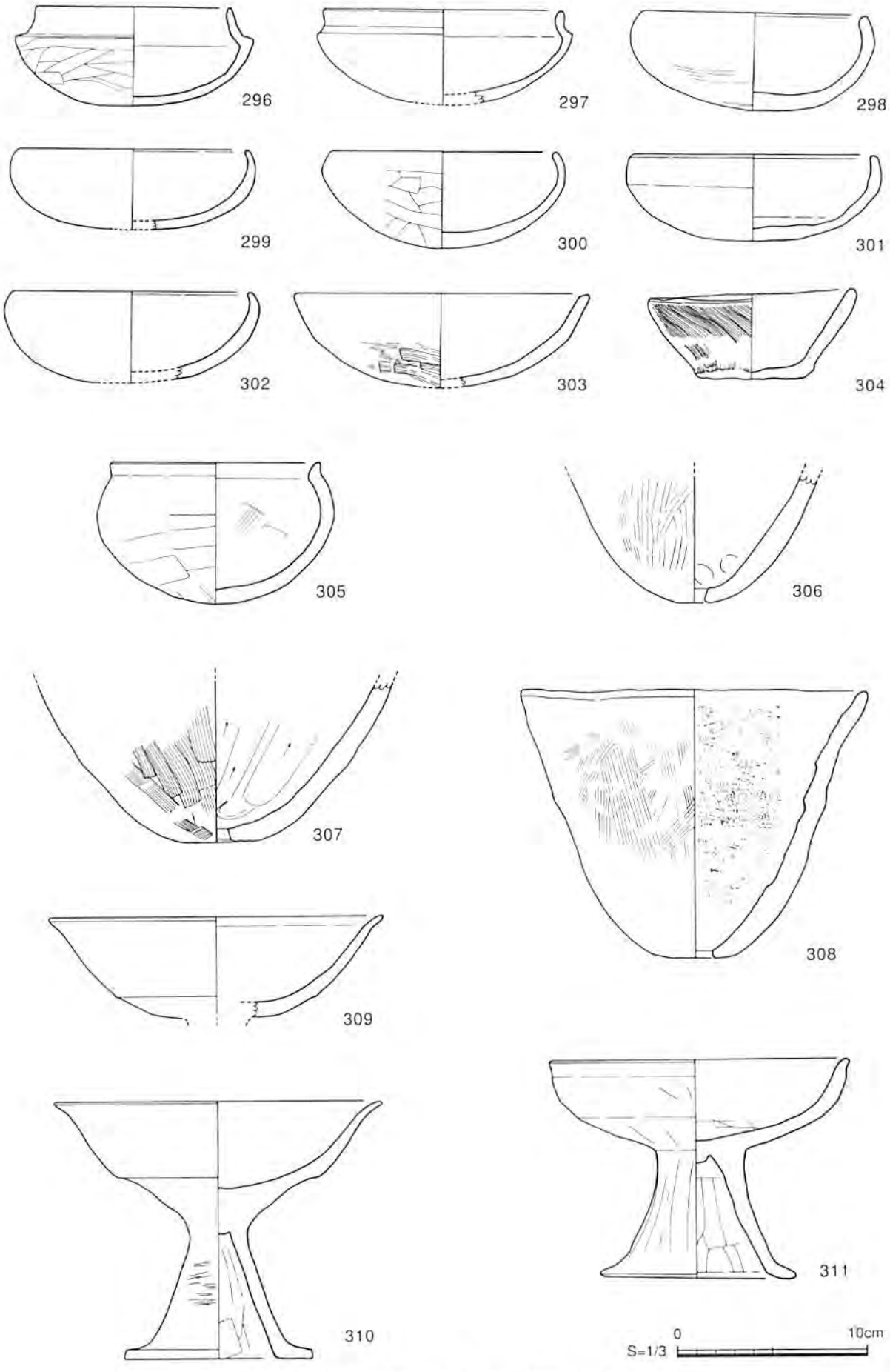
第103図　出土遺物実測図（14）［剣形石製品］



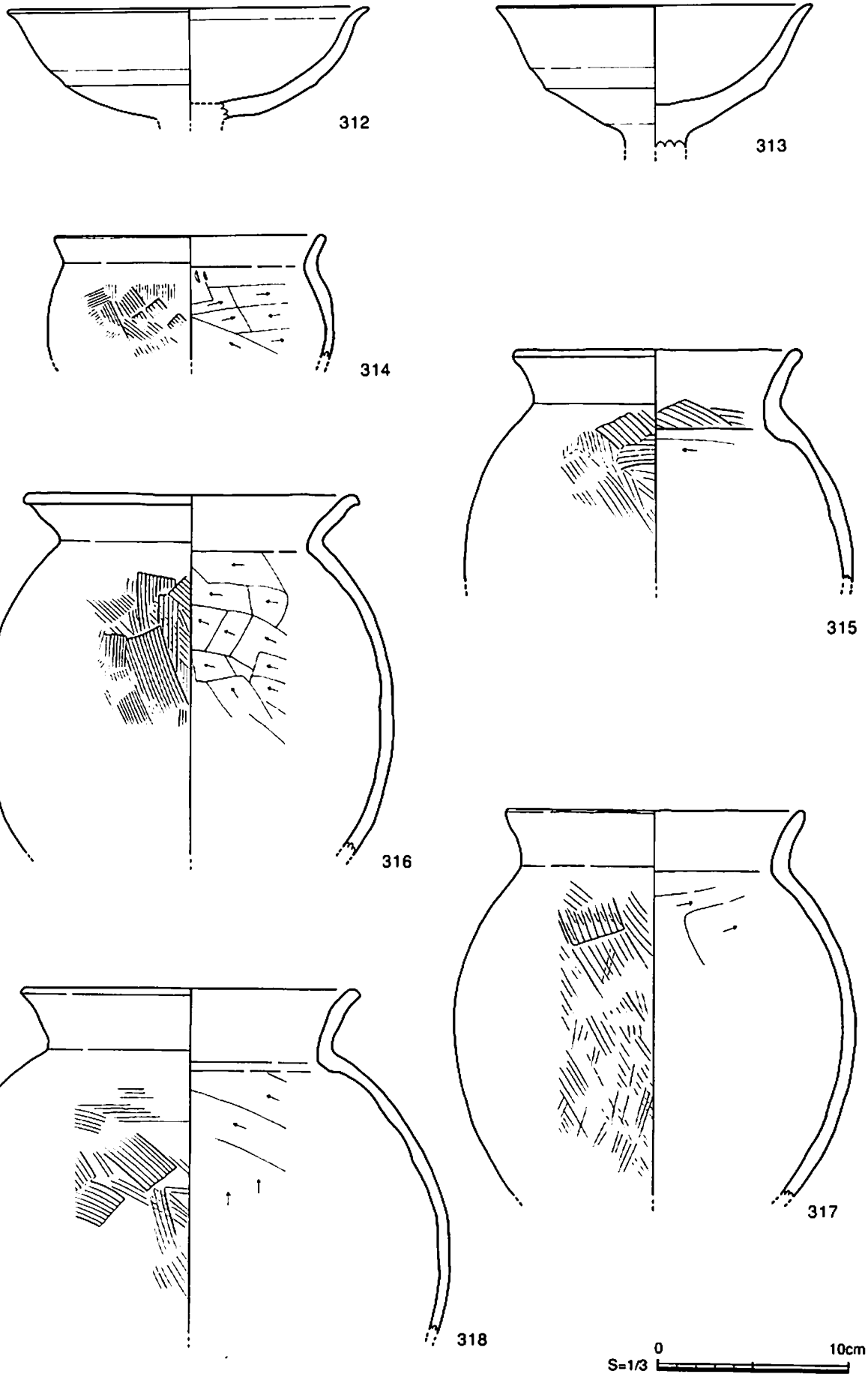
第104図　出土遺物実測図（15）［紡錘車・その他］

第104図は用途不明の遺物である。293は須恵器の土器片を篦状に削り出し、全面に丁寧な磨きを施してある。上部には孔が穿ってある。垂下するための紐を通すためであろうか。294は篦状の石器である。篦の先端のみを研磨しただけの石器である。295は滑石製の紡錘車で、表面に幾何学的な線刻がある。これらの線刻は金属器によるものと考えられ、鋭い。裏面は平坦で研磨を施している。

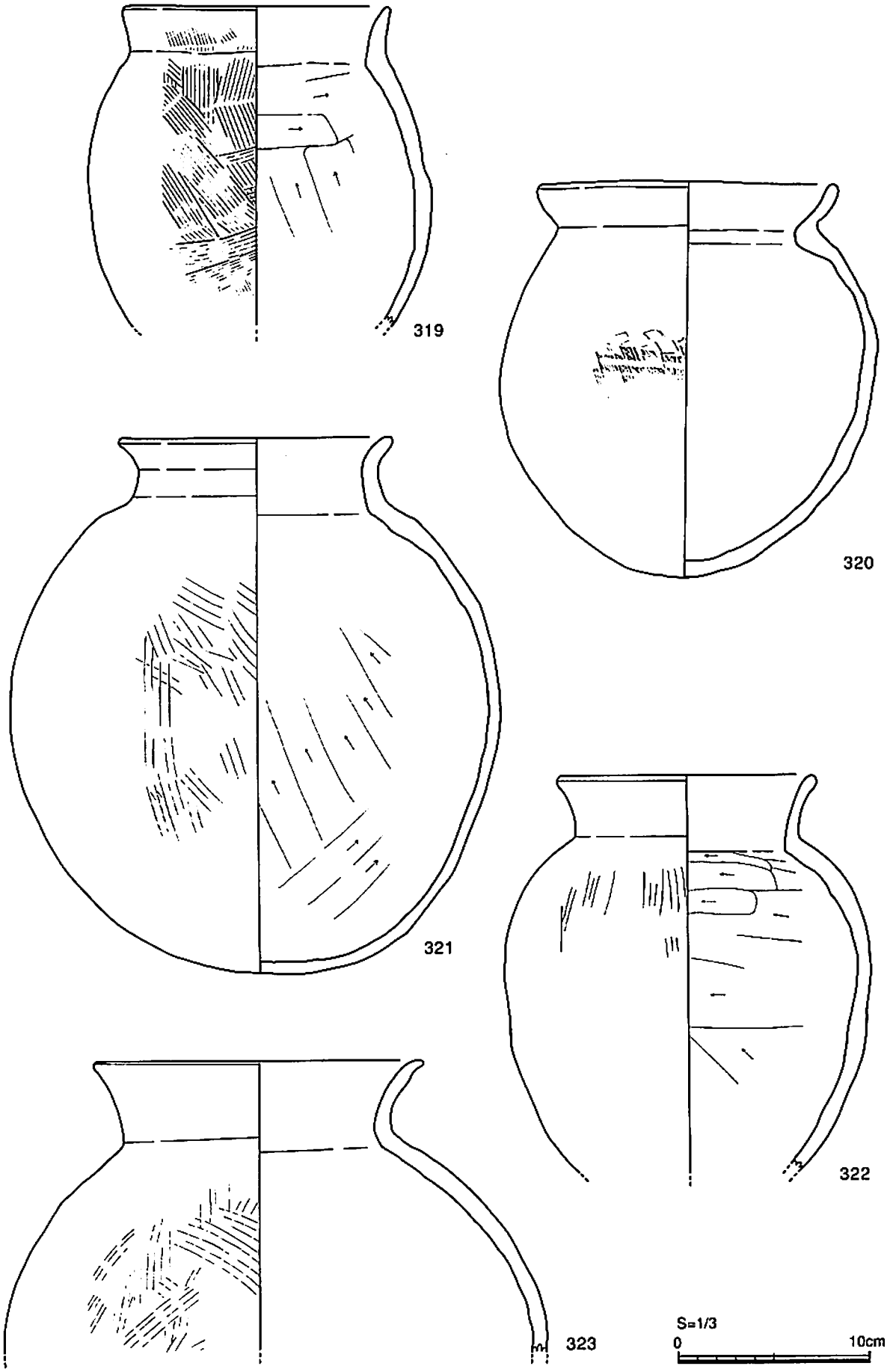
第105図～108図は8区出土の土器である。296・297は須恵器有蓋杯の形を模した、模倣杯と呼ばれる土師器の杯である。蓋に対する受部を持ち、内外器面に丁寧なナデ調整を施している。298～303は土師器の杯である。298～302は口縁部が内湾している。303は口縁部が外反する。304は土師器の鉢である。底部から直線的に広がり、口径10.6cmを測る。外器面胴部にハケ目調整を施している。305は土師器の鉢である。口唇部は短いながら、やや外反する。器壁はやや厚く、口径10.9cmを測る。306～308は土師器の甑で、底部に穿孔が認められる。形態は鉢形である。309～313は土師器の高杯である。309は杯部のみである。口縁部は外反しており、器面の一部に赤色顔料が残る。310は309と同様に杯部の口縁部は外反している。脚部はやや長めで開き気味である。脚部の内器面はヘラケズリによる調整を施されている。311は杯部に屈曲を持たず、丸底の杯のような形態をとる。復元口径は15.4cmを測る。脚部は低く内器面はヘラケズリにより調整を施される。312・313は杯部のみである。口縁部は外反している。313は杯部が深く、器高7.4cmを測る。314～325は土師器の甕である。314は小型の甕である。復元口径13.7cm、復元最大胴部径15.0cmを測り、胴部はやや球形に近い。胴部外器面にはハケ目が、内器面にはヘラケズリが施される。315～319は口径と比較して胴部最大径が大きい。頸部から口唇部までの高さはさほど高くなく、口唇部はやや厚く角張り気味で、しっかりした作りである。320はやや口縁部が内湾する。321・323はやや口縁部が外反する。胴部は丸形である。322・325は口縁部がやや外反し、口唇部は丸まっている。胴部径は口径よりやや大きめである。外器面は縦方向にハケ目が残り、内器面は横方向のヘラケズリが施されている。324は口縁部はほぼ直で、口唇部は丸まっている。外器面は縦方向にハケ目が残り、内器面は横方向のヘラケズリが施されている。



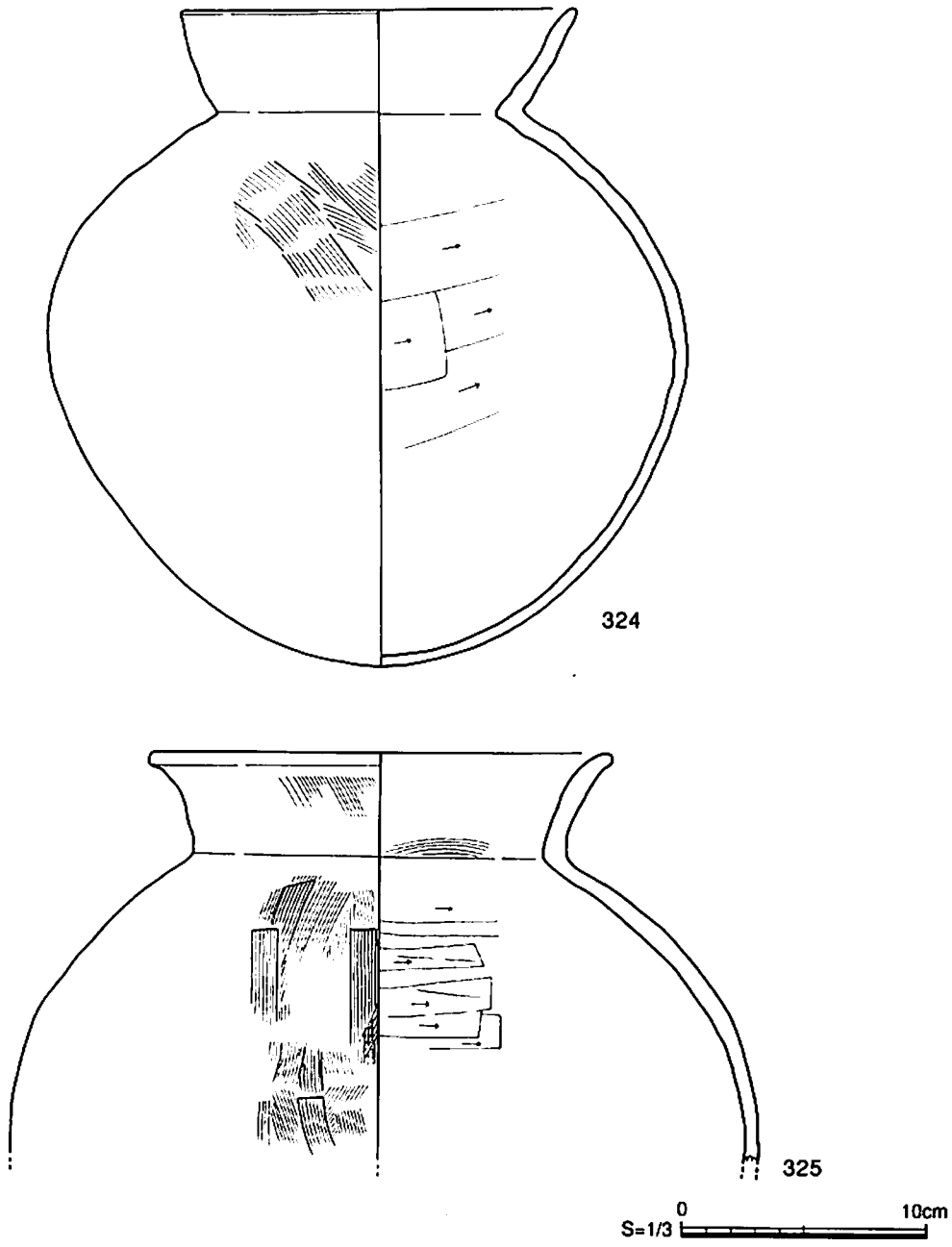
第105図　出土遺物実測図（16）［8区土器］



第106図　出土遺物実測図（17）［8区土器］

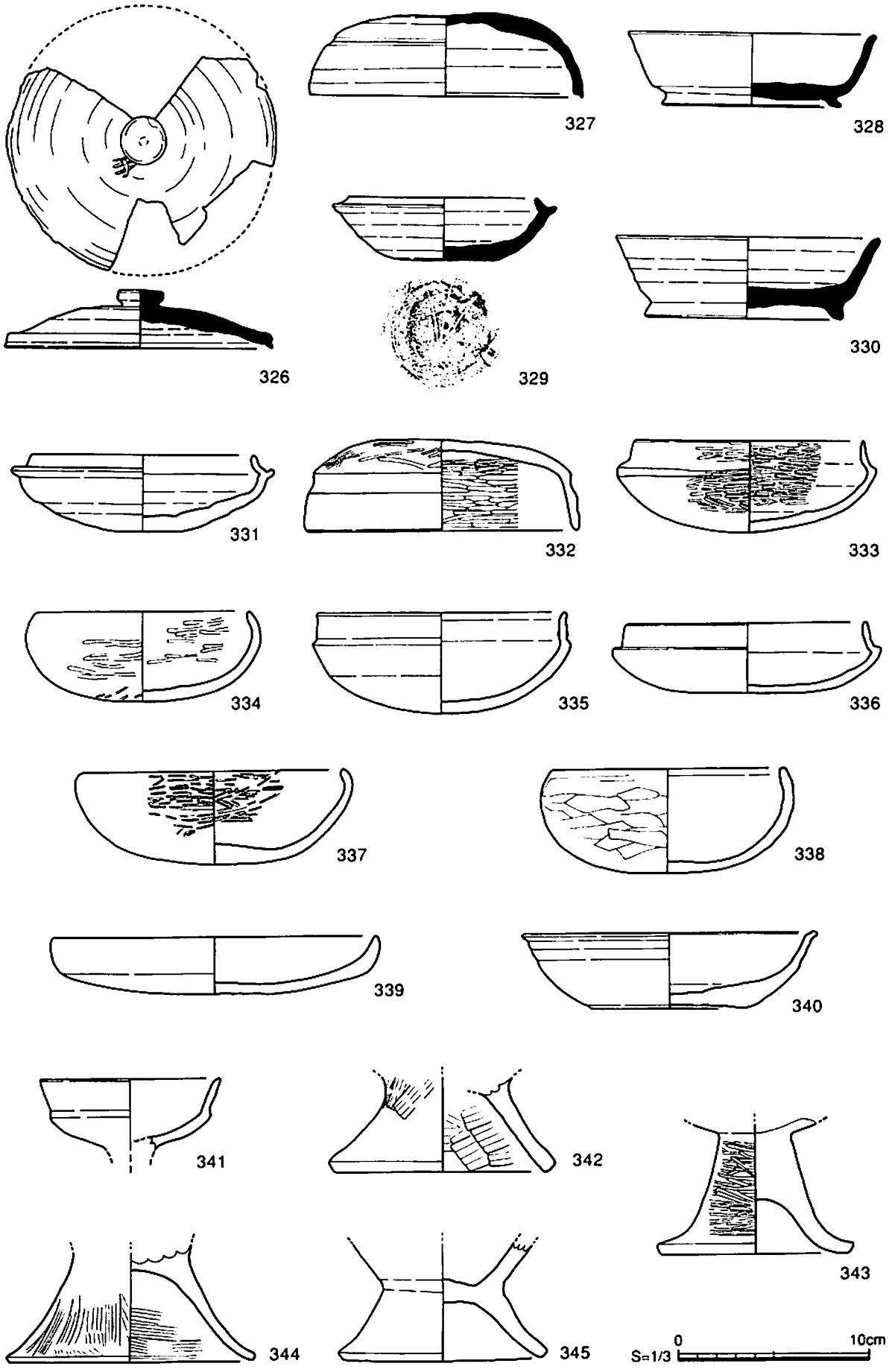


第107図　出土遺物実測図（18）［8区土器］

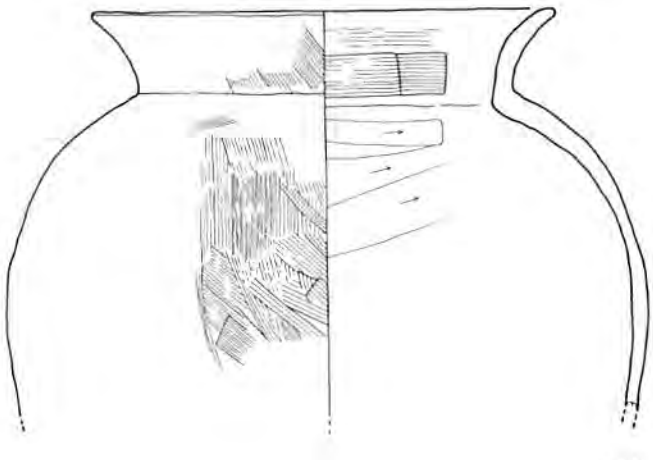


第108図　出土遺物実測図（19）［8区土器］

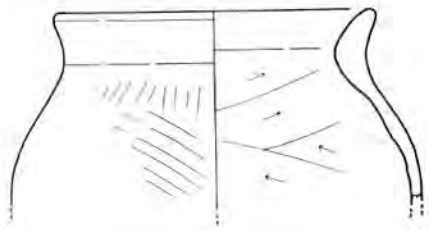
第109図～112図は9区出土の土器である。326は須恵器の蓋である。擬宝珠ツマミを持ち、返しがなく、口縁部が少し立つ。ツマミの近くに墨書がある。327は須恵器の蓋である。口径14.4㎝、器高4.4㎝を測る。受部を持つ身の蓋であろう。328・330は須恵器の高台付杯である。329は須恵器の受部を持つ杯である。蓋受けは長くほぼ直立し、底部にはヘラ記号がある。331・333・335・336は須恵器有蓋杯の形を模した、模倣杯である。蓋に対する受部を持ち、内外器面は丁寧なヘラミガキで調整を施されている。331には外器面の一部に赤色顔料の痕が残る。333には黒色顔料が塗布されている。332は土師器の蓋である。須恵器の蓋を形態的に模倣したものと考えられる。口唇部はやや外反し、天井部までの高さが4.8㎝と高く、口径14.2㎝を測る。内外器面ともヘラミガキが施され、黒色顔料が塗布されている。334・337は土師器の杯である。内外器面は横方向にヘラミガキが施されている。口縁部がやや内湾する。



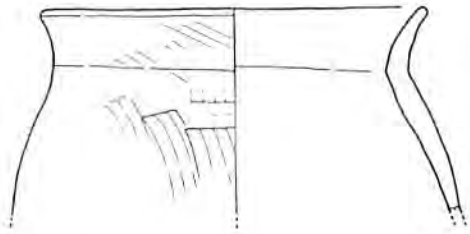
第109図　出土遺物実測図（20）［9区土器］



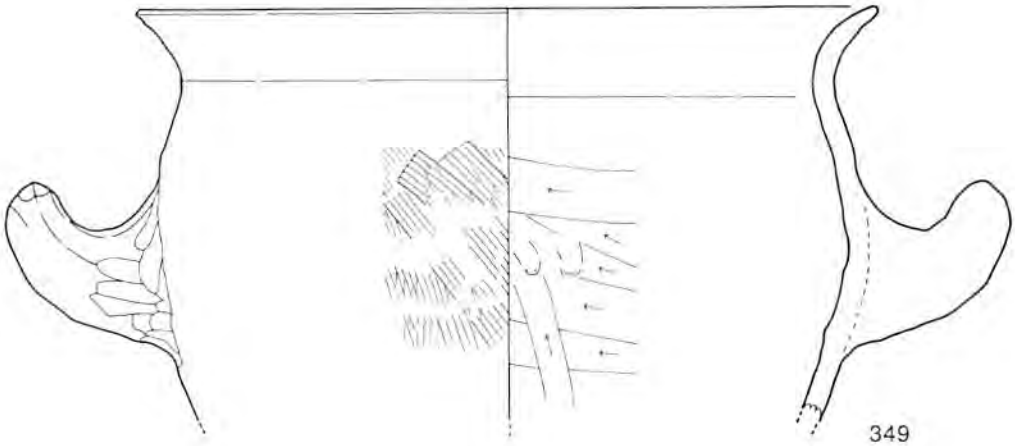
346



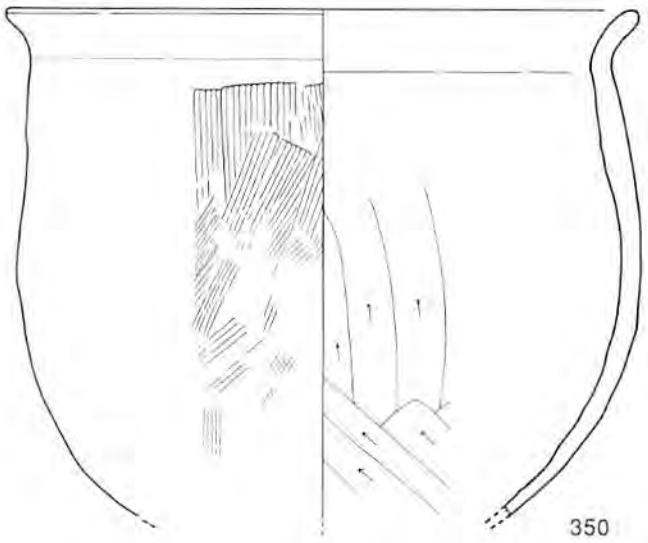
347



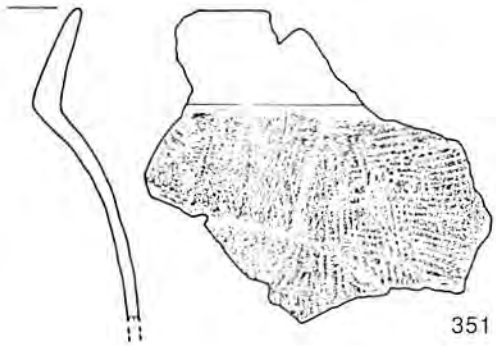
348



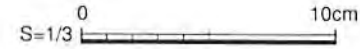
349



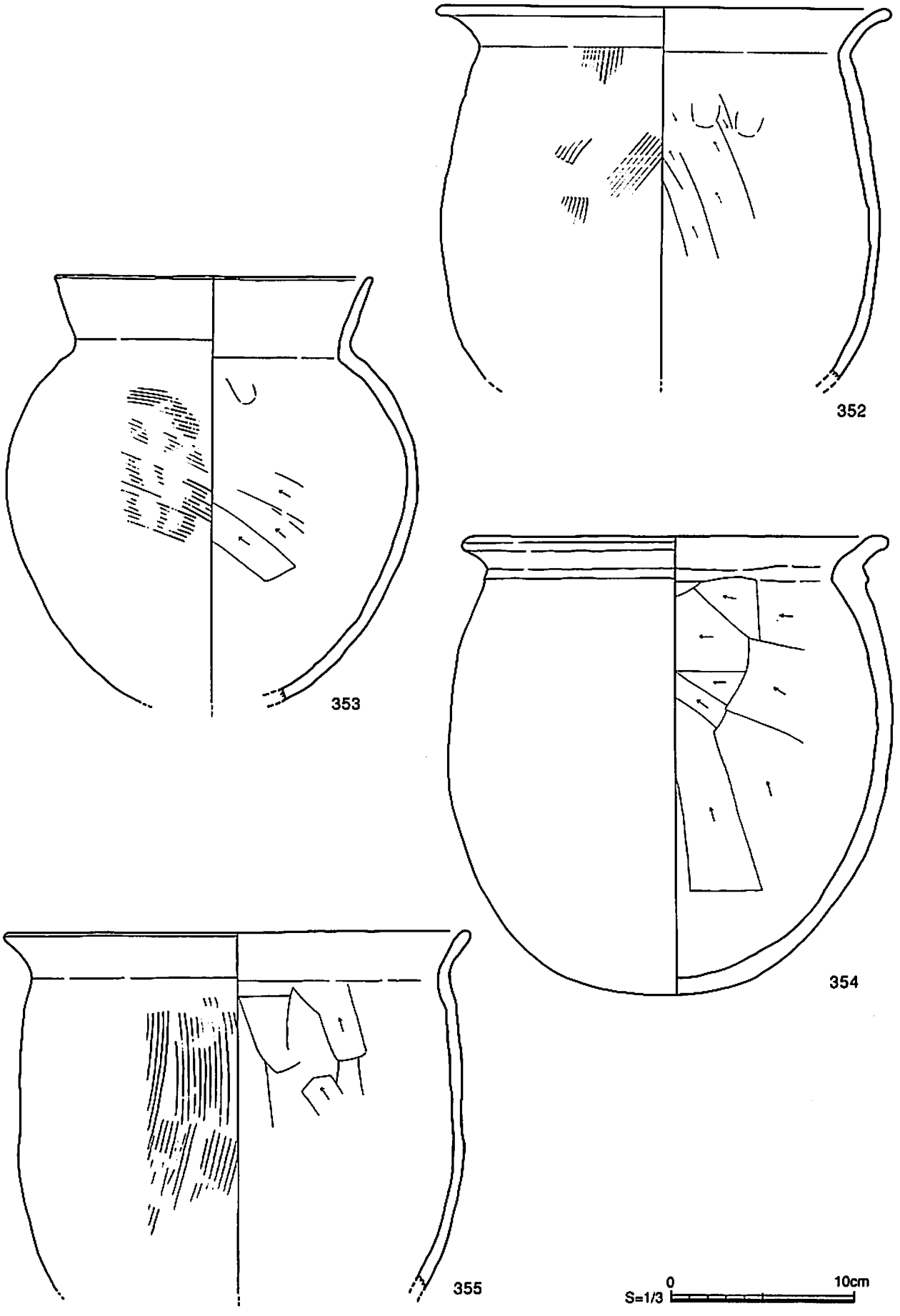
350



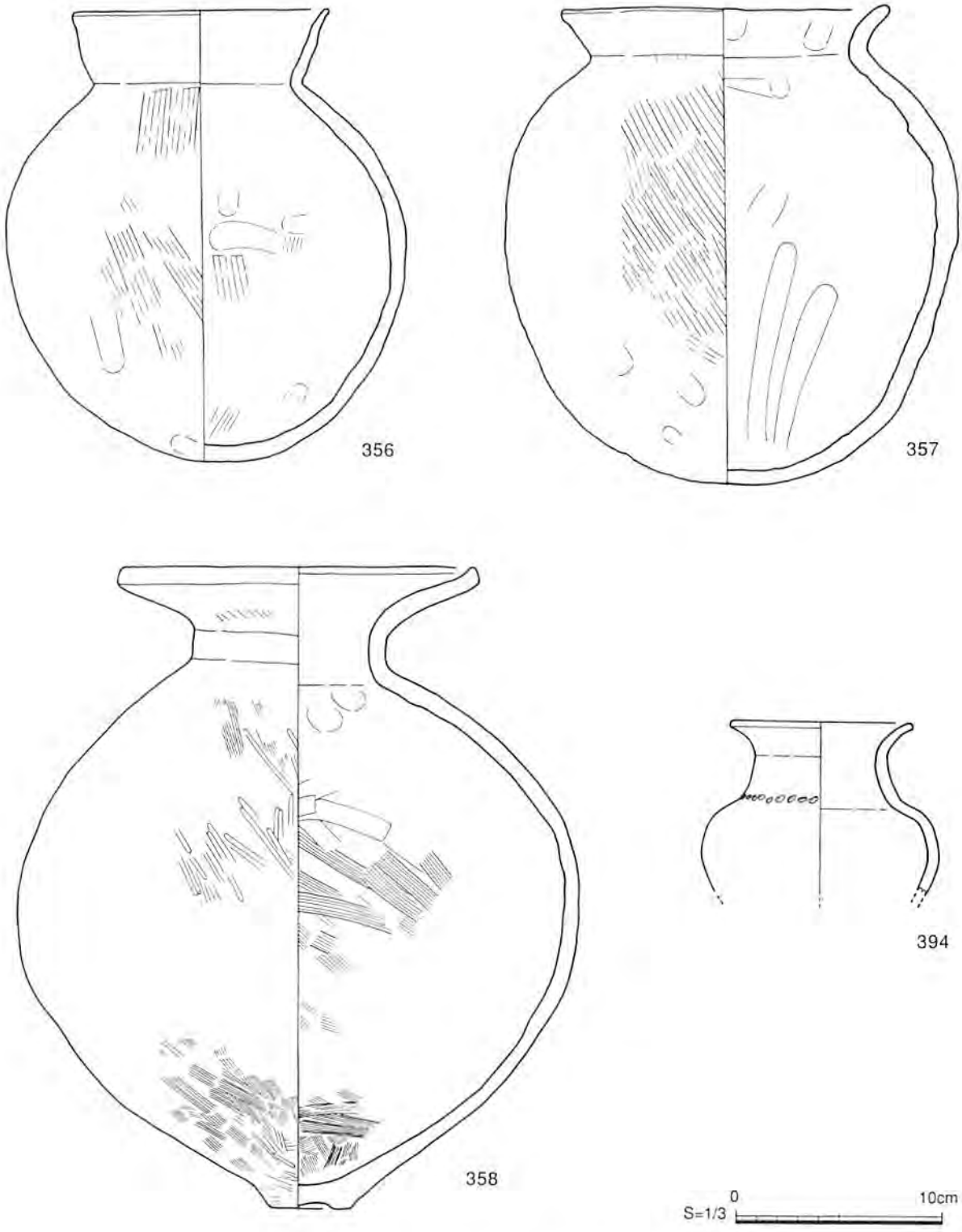
351



第110図　出土遺物実測図（21）［9区土器］

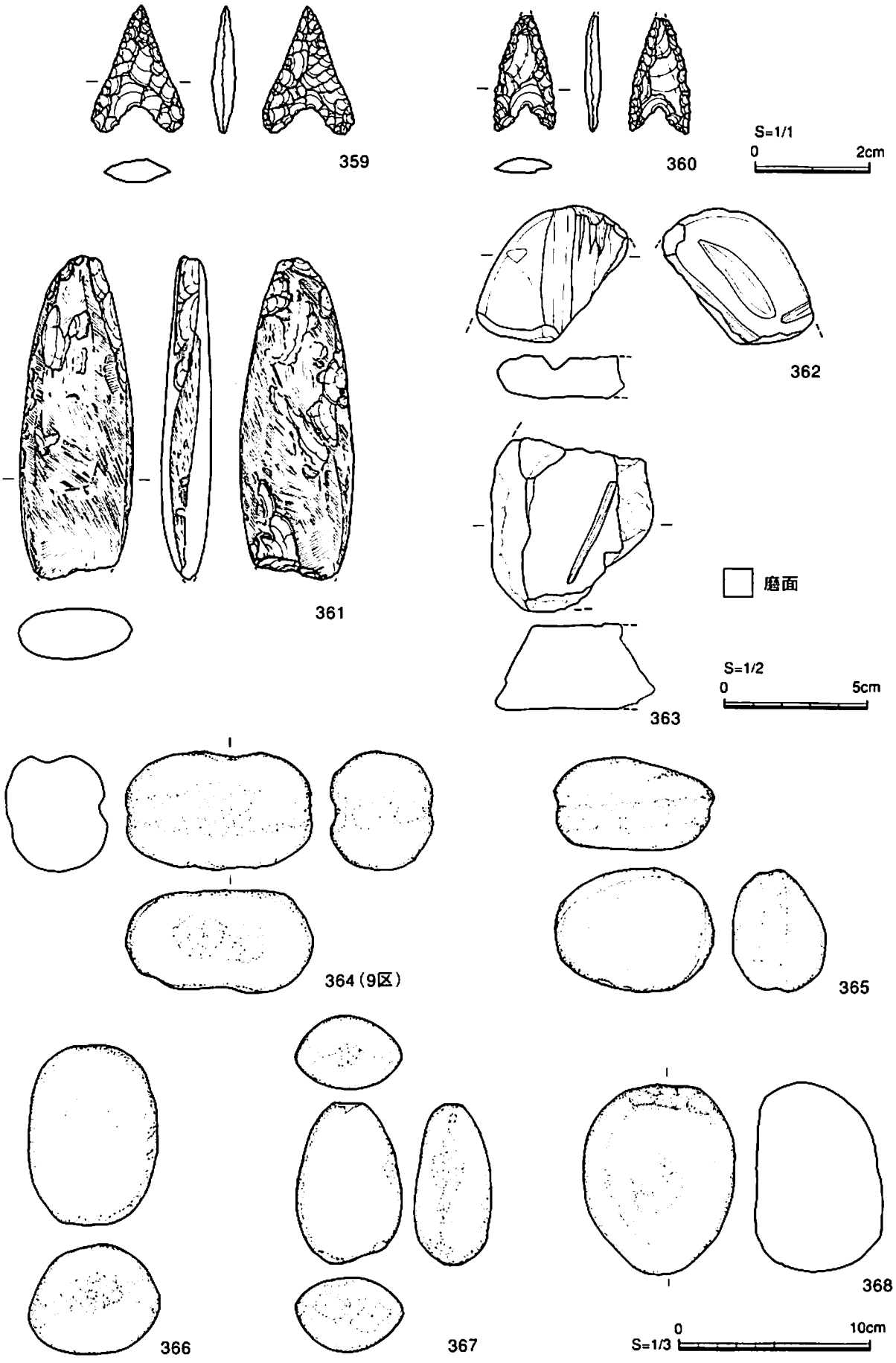


第111図　出土遺物実測図（22）［9区土器］

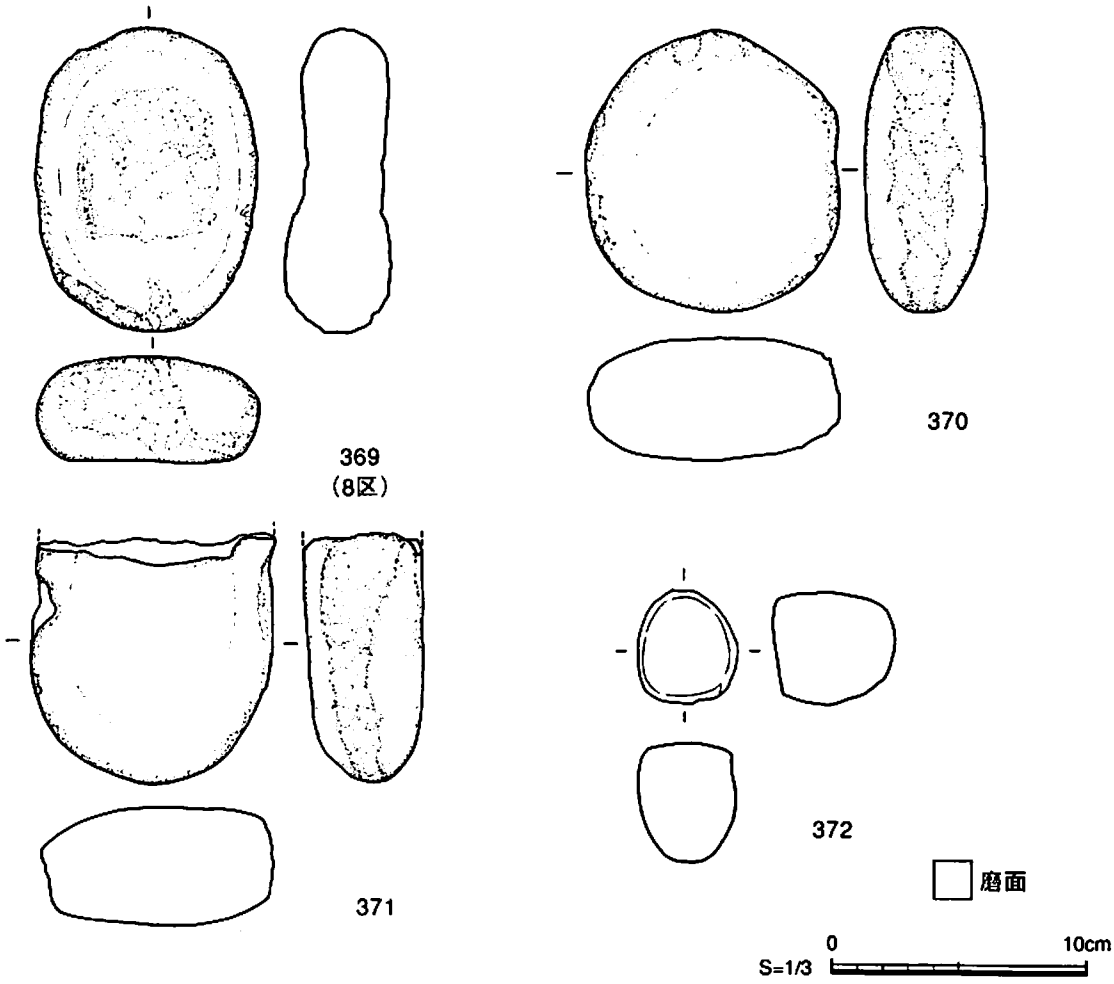


第112図　出土遺物実測図（23）［9区土器］

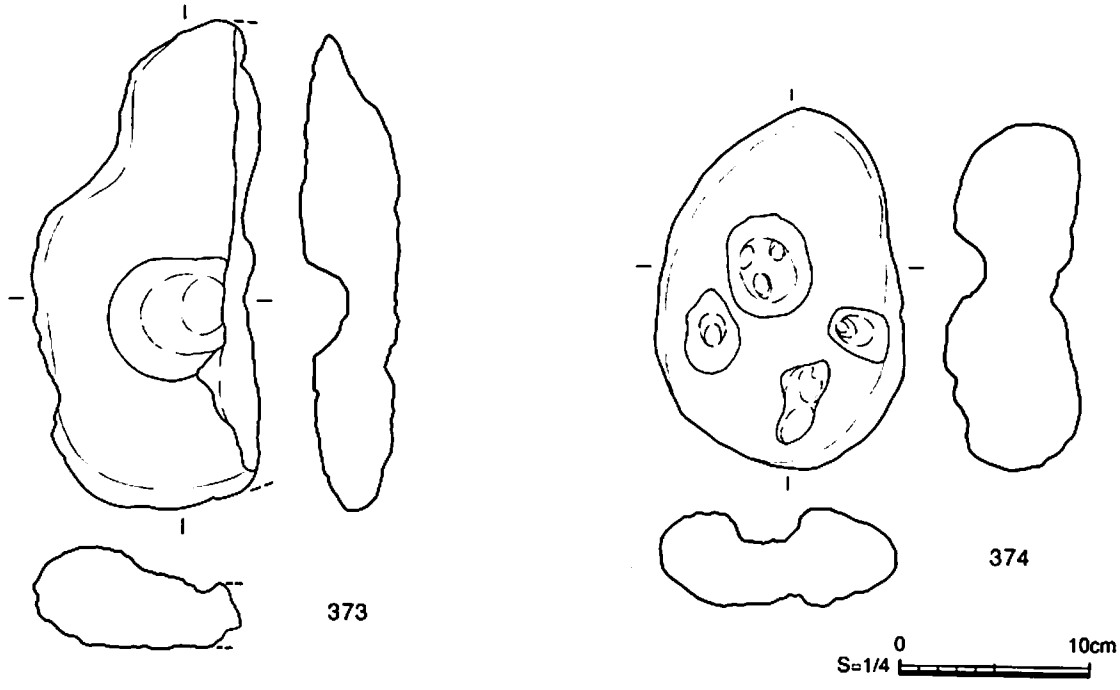
338は土師器の杯である。口縁がやや内傾するもので、口唇部は丸味を帯びており、口径12.1㎝を測る。内外器面にはヘラケズリが残る。339は土師器の皿である。全面に赤色顔料が塗布されている。340は土師器の杯である。口縁部が外反し、復元口径15.1㎝、器高4.0㎝、底径8.0㎝を測る。外底面にはヘラ切り離し痕が残る。全面に赤色顔料が塗布されている。341・343は土師器の高杯である。342・344・345は弥生土器の甕の脚部である。



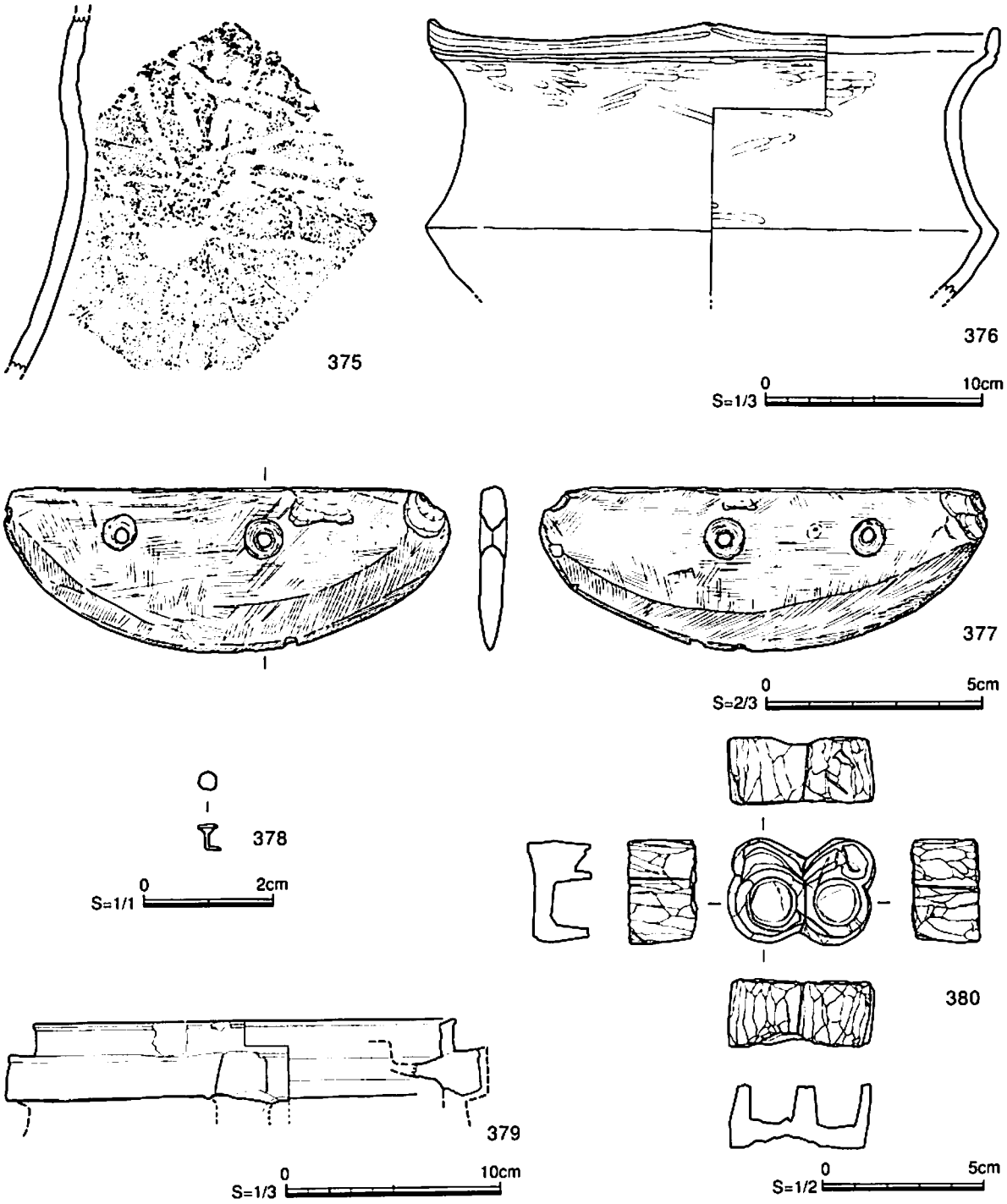
第113図　出土遺物実測図（24）［石器］



第114図　出土遺物実測図（25）［石器］



第115図　出土遺物実測図（26）［石器］



第116図　出土遺物実測図（27）［縄文土器・石包丁・その他］

346～348は土師器の甕である。口縁は頸部からやや外反気味に端部に至る。口唇部を平坦にする。胴部は卵型で、外器面はハケ目の後に多方向にナデ調整、内器面は斜め方向にヘラケズリを施している。349は土師器の甑である。体部に一対の把手をもち、上向きに付けられている。口縁は頸部から外反しながら立ち上がる。350・352・354・355は土師器の甕である。口径24.3cm～25.0cmを測る。口縁部は頸部から急激に外反し、胴部は頸部からほとんど膨らまず下位で小さくなる。内外器面ともハケ目が残る。351・353は土師器の甕である。口縁は頸部から直に伸び、口唇部は丸味を帯びる。胴部は卵形を呈し、外器面にハケ目を施す。356・357は土師器の壺である。口縁部は頸部から直に立ち上がりながら外反する。長さは短い。胴部外器面にハケ目、内器面にナデ調整を施している。

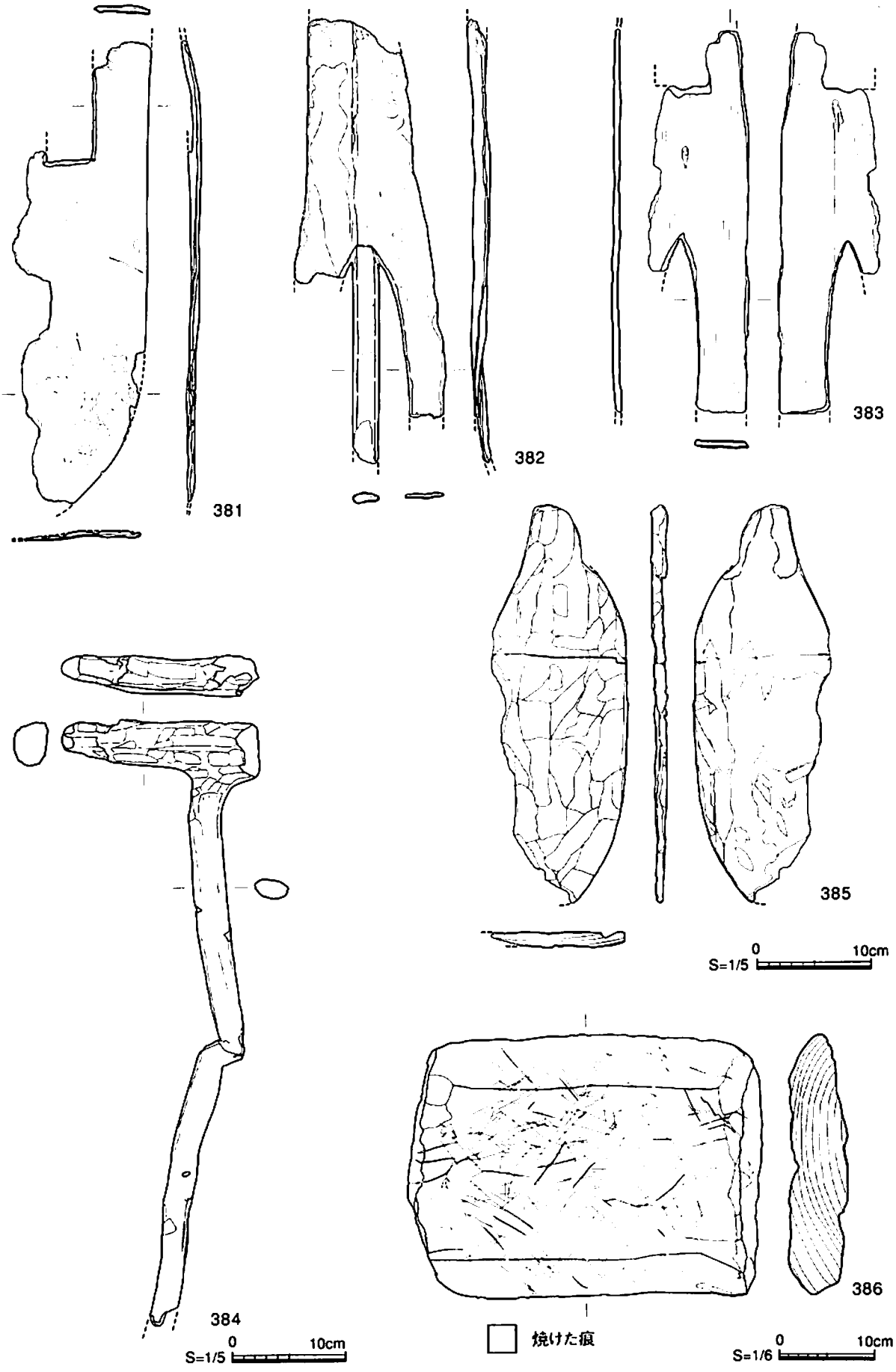
358は土師器の二重口縁の壺である。口縁部断面が角張るものである。胴部は球形で、最大胴部が中程にある。内外器面ともにハケ目調整が残る。底部はやや上げ底である。

第113図～115図は石器である。359・360は縄文時代の石鏃である。361は縄文時代の磨製石斧である。362・363は有溝砥石である。364・365は石錘である。円礫の側縁部に凹みを持つ。366～371は敲石若しくは磨石である。372は軽石製の磨石である。自然礫の一面方向のみに使用痕が残る。

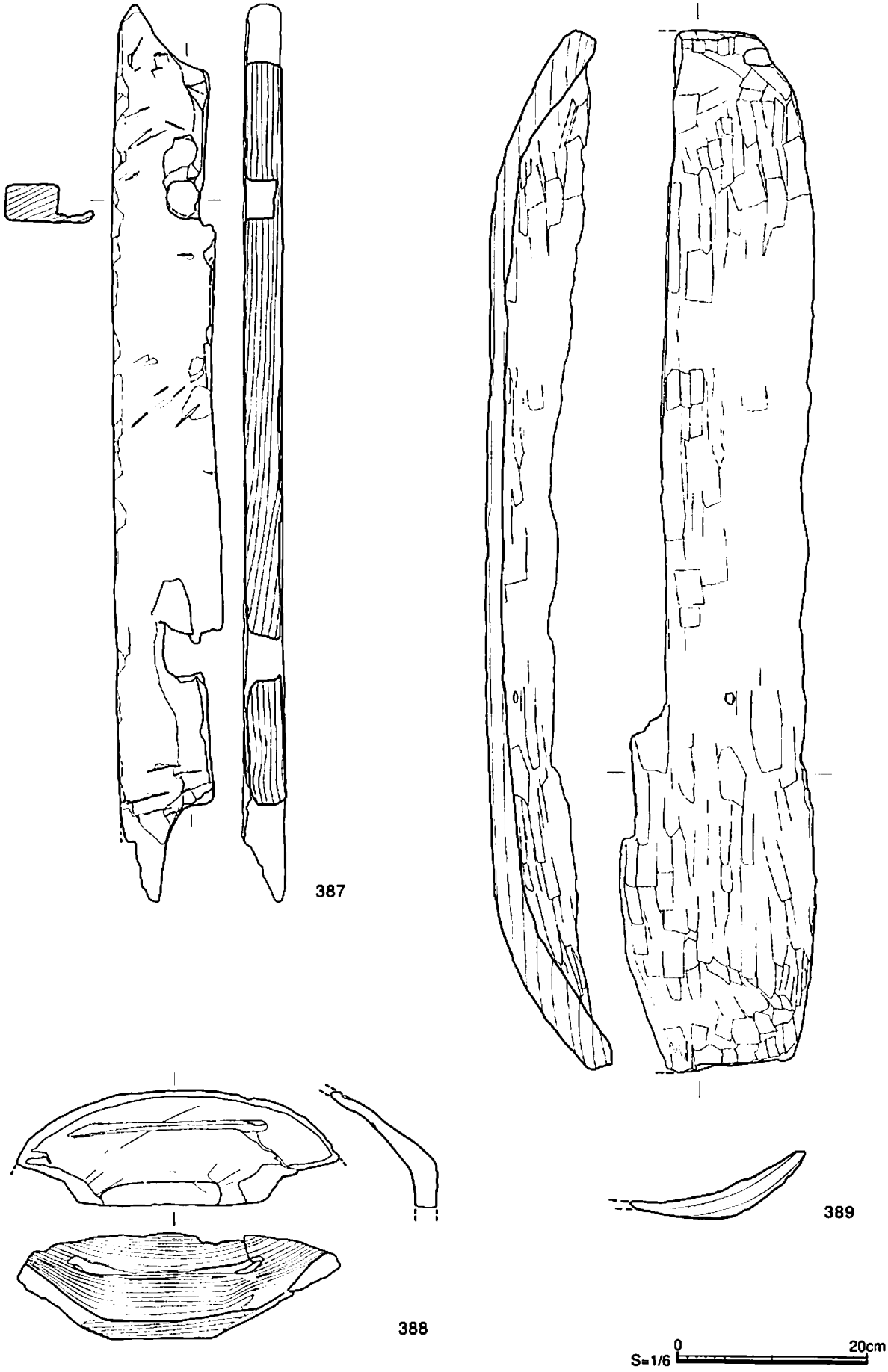
第115図は用途不明の石器である。373・374は軽石製で、中央部に凹みを持つ。

第116図はその他の遺物である。375は縄文時代の甕の破片である。376は縄文時代の深鉢である。377は弥生時代の石包丁である。378は青銅器で、用途は不明である。379は須恵器の円面硯の破片である。380は滑石製の連盃である。

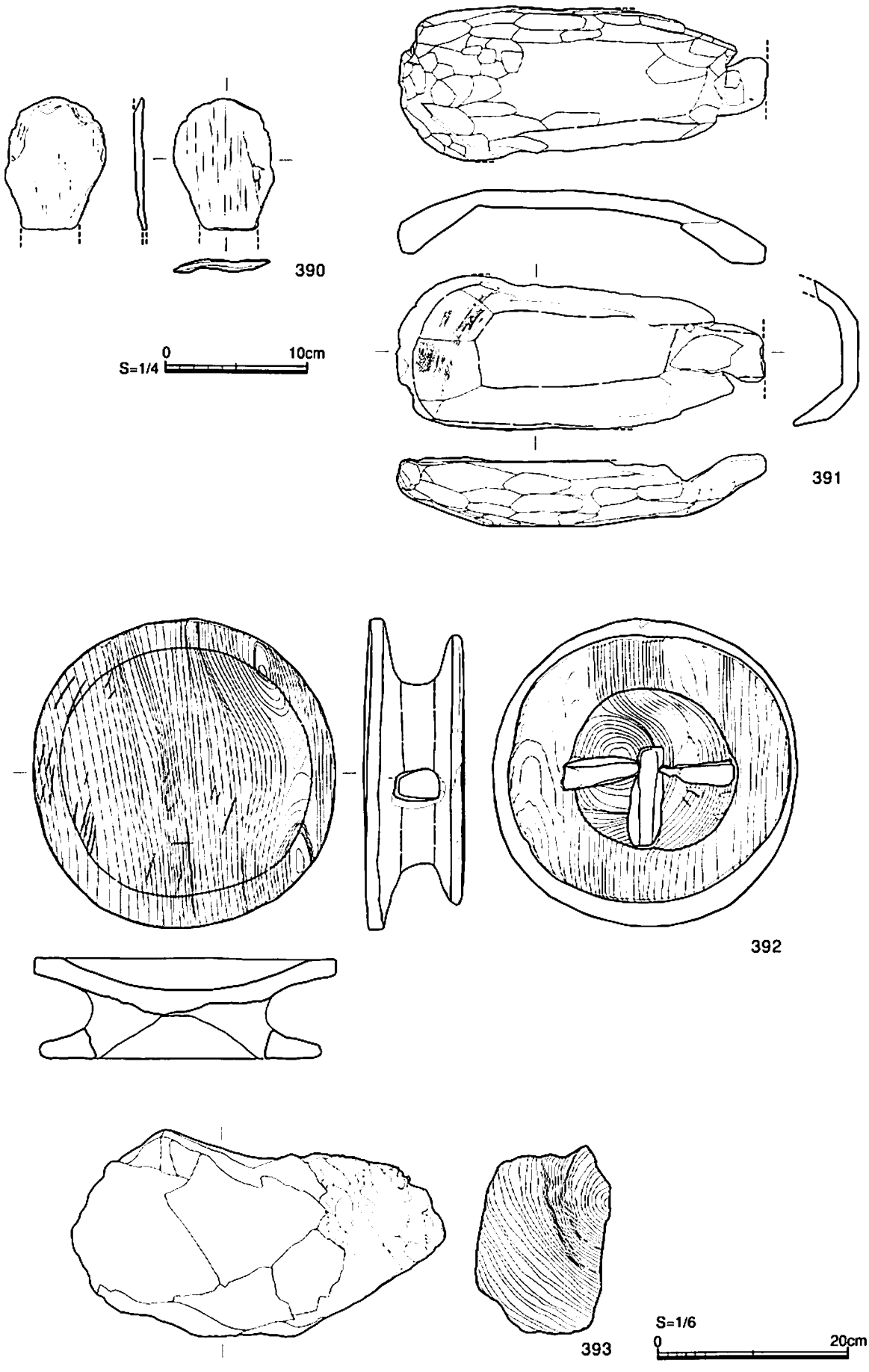
第117図～119図は木器である。381は平鍬の身の破片である。肩部と先の一部を欠く。身は薄く長い舌状にかたどり、縁を薄くし、中央に縦長の長方形の孔をあける。長方形孔は別木の柄を装着する柄孔と考えられる。現在長40.1cm・幅12.0cm・厚さ0.6cm、コナラ属である。382は三又鍬の身の破片である。肩部と先の一部を欠く。身は薄く長い舌状にかたどり、縁を薄くし、先端を三又に作り出している。現在長30.0cm・幅13.0cm・厚さ1.0cm、コナラ属である。383は二又鍬の身の破片である。肩部と先の一部を欠く。身は薄く長い舌状にかたどり、縁を薄くし、中央に縦長の長方形の孔をあける。長方形孔は別木の柄を装着する柄孔と考えられる。先端を二又に作り出している。現在長33.6cm・幅8.8cm・厚さ0.6cm、コナラ属である。384は斧柄である。着装部の形状から縦斧の袋状鉄斧をとりつけたと考えられる。斧柄の握りは表皮を除く程度の加工にとどまり、外反する。斧台は基端の木口をほぼ直線にたちおとし、着装部は基部よりも一段薄くして舌状に突出させる。現在長53.4cm・幅17.4cm・厚さ3.8cm、サカキ属である。385は平鍬の身の破片である。肩部と先の一部を欠く。身は中央を厚く縁を薄くする。386は作業台である。長辺35.0cm、短辺25.0cm、厚さ6cmのほぼ長方形の板材で、板の表面には無数の鉄器による傷が残る。387は建築部材の一部である。両端に半円形状の掘り込みを持ち、両端付根には凹字状の円形の掘り込みを持つ。388は盤である。形状はおそらく楕円形を呈しているものと考えられる。側面には把手を付けたと思われる2箇所の孔が空けられる。389は田舟である。1本の木をくりぬいた刳舟で、船首・船尾の区別は不明である。390は杓子形木器と考えられる。柄の部分は欠損しているが、わずかに残る柄と扁平で幅の広い身からなり、側面から見ると柄と身とは一直線をなす。391は片把手付き盤である。平面形は長方形を呈し、浅い容器である。器壁が厚く、削り痕跡を残す粗製品である。392は脚台付盤である。平面形は円形を呈し、中央部に浅い皿状の窪みをもつ容器である。脚部には3箇所の透かしが施してある。全体に丁寧な仕上げを施してあるが、脚部から体部にかけて一部炭化しており、製作途中で廃棄された可能性を示す。393は用途不明の未製品の木器である。平面形は不定の楕円形を呈している。柾目材を使用し、表皮側から斧や手斧等での加工痕を残すが、木器としての機能を満たしておらず、何らかの木器の未製品として考える。



第117図　出土遺物実測図（28）［木器］



第118図　出土遺物実測図（29）［木器］



第119図　出土遺物実測図（30）［木器］

遺構番号	層位	特　徴
流路	①　層	黒褐色粘質土。マンガン、酸化鉄分、微量の炭化物を含む。多量の土器を含む。
	②　層	灰褐色粘質土。多量の粗砂、マンガン、酸化鉄分を含む。
	③　層	褐灰色粘質土。マンガン、酸化鉄分、微量の焼土炭化物を含む。
	④a層	褐灰色砂質土。マンガン、酸化鉄分を多量に含む。
	④b層	褐灰色粘質土。しまりあり。細砂、多量のマンガンと酸化鉄分を含む。
	④c層	褐灰色粘質土。多量の細砂と、④b層より多量の鉄分を含む。
	⑤a層	褐灰色砂。しまりのある細砂だが堆積場所の水分量により、マンガン、酸化鉄分の具合や、粗砂と細砂の多少が異なる。
	⑤b層	暗褐色砂質土。赤褐色の鉄分を多量に含んだ粘質土をブロック状に含む。
	⑥a層	暗灰色砂質土。赤褐色の鉄分を多量に含む。
	⑥b層	暗灰色砂質土。⑧a層の直上にあり不純物がほとんどない細砂層。
	⑦　層	灰色粘質土。強いしまりあり。細砂、マンガン、酸化鉄分を含む。
	⑧a層	暗灰色粘土。炭化物及び灰色の粘土を筋状(薄い層状)に含む。これより下層粘土と細砂の層が交互に堆積し、植物遺存体を含む。
	⑧b層	暗灰色砂層。細砂。

表33　上小田宮の前8区検出遺構土層注記表

遺構番号	層位	特　徴
流路	①　層	暗灰色粘質土。しまりあり、粘性あり。まばらに少量の鉄分が混入、断面には部分的に残っている。
	②　層	黒褐色粘質土。強いしまりあり、弱い粘性あり。③層以降の下層に比べ色が濃い。粒子状のマンガンと鉄分が見られ、少量の砂が混入。
	③　層	黄灰色粘質土。強いしまりあり、粘性なし。②層との境に鉄分の帯がある。下部に鉄分はなく粒子状のマンガンが少量見られ、少量の砂が混入。
	④　層	褐灰色粘質土。しまりあり、粘性なし。マンガンを全体的に含むが、鉄分はあまり含まず、部分的に砂が多く混入するところがある。
	⑤　層	灰色粘質土。非常に強いしまりあり、粘性なし。全体にまばらにマンガン、鉄分が見られ、少量の砂が混入。西側はほぼ砂質土。
	⑥a層	明緑灰色粘質土。非常に強いしまりあり、粘性なし。マンガン粒は下部に、鉄分は全体に縦の帯状に見られる。東側は砂質土に少量の粘土が混じりしっかりと固まった様な状態。部分的に鉄分が強く黄色が強い。
	⑥b層	青灰色粘質土。強いしまりあり、粘性なし。下部に砂が多く混在し、東側はほぼ砂。ベルト中央部は粘性が強くなる。上部にマンガン、下部に鉄分が多く見られる。⑥a層に比べるとマンガンが多い。
	⑥c層	褐灰色砂質土。弱いしまりあり、粘性はなし。縦の帯状にマンガンが見られるが上部では薄くなる。
	⑦　層	暗青灰色砂質土。弱いしまりあり、粘性なし。少量の粘土が混入し、まばらに少量の鉄分も見られる。砂の粒子が大きい所ではしまりはなく、小さい所ではしまりがある。C-30南北ベルトではブロック状の白い砂が混入し、断面B-B'ベルトでは粘性が強く、上部は砂、下部は粘土になる。
	⑧　層	青黒色粘質土。強いしまりあり、粘性あり。上部に少量の砂が混入、黒褐色粘土と青灰色砂質土がラミネ状に堆積。部分的に砂質が強く、西側は砂がより多く混入。横帯状に黒褐色土が混入する部分もある。断面B-B'ベルト南側では白い砂、カーボン、粘土塊を多量に含む。多量の木片が混入。⑨層への漸次層。
	⑨　層	青黒色粘質土。しまりあり、粘性あり。黒褐色粘土と青灰色砂のラミネ状堆積。木片、木葉等、植物遺体を非常に多量に含むが、植物は箇所により多少の差がある。西側に多量の黒褐色の砂が混入。
	⑩　層	暗青灰色砂。しまりなし、粘性なし。鉄分がまばらに少量見られる粒子の細砂。部分的に青の強い所と灰色の強い所があり、白い粒子を含む。

表34　上小田宮の前9区検出遺構土層注記表

第11節　上小田宮の前10区の調査

1. 遺構分布(第120図)

上小田宮の前10区は、南北約20m×東西約65mの調査区を設定した。広さは1,297㎡である。調査区内で検出した遺構は、掘立柱建物6棟、井戸跡7基、溝跡13条、土坑10基である。

遺構の分布状況を見ると、調査区の中央部北側に掘立柱建物(SB1001・1002・1003・1004・1005・1006)の分布が見られる。建物群の向きはほぼ南北方向で集約できる。切り合いも最大3棟と多く、溝跡に囲まれた限られたスペースにあまり時期差がない間隔で建物を建て替えていったことが考えられる。井戸跡(SE1002・1003・1008・1011・1015・1020・1024)と溝跡(SD1001・1002・1003・1004・1006・1007・1008・1009・1010・1011・1012・1013・1015)の分布は重なる。切り合い関係からみて、溝跡より井戸跡が古く、井戸の廃棄後に溝が掘られたことが分かる。土坑(SK1004・1006・1009・1010・1012・1013・1014・1017・1022・1023)は、調査区内に散発的に広がりを見せるが、掘立柱建物群の広がりとは重なりをもたない。

2. 遺構・遺物

各遺構・遺物の詳細は第121図～136図・表35～38のとおりである。以下は各遺構を概観する。

(1) 掘立柱建物跡

SB1001(第121図)

SB1001は調査区の中央部北側に位置する遺構である。桁行方向がN56°Wでほぼ南北方向の側柱建物と思われる。検出範囲より桁行6.2m以上(約20.4尺以上)、梁行4.3m(約14.3尺)の3間×2間分を確認したが、建物北部の柱穴が調査区外に存在すると考えられるので建物全体の規模は不明である。柱間寸法は桁行の平均が約2.1m(約6.8尺)、梁行の平均が約2.2m(約7.2尺)である。柱穴は直径34～60㎝、深さは12～24㎝で、下端のレベルは一定ではないが、どの柱もほぼ一直線に並ぶ。柱痕跡は全ての柱穴から確認できた。

SB1002(第121図)

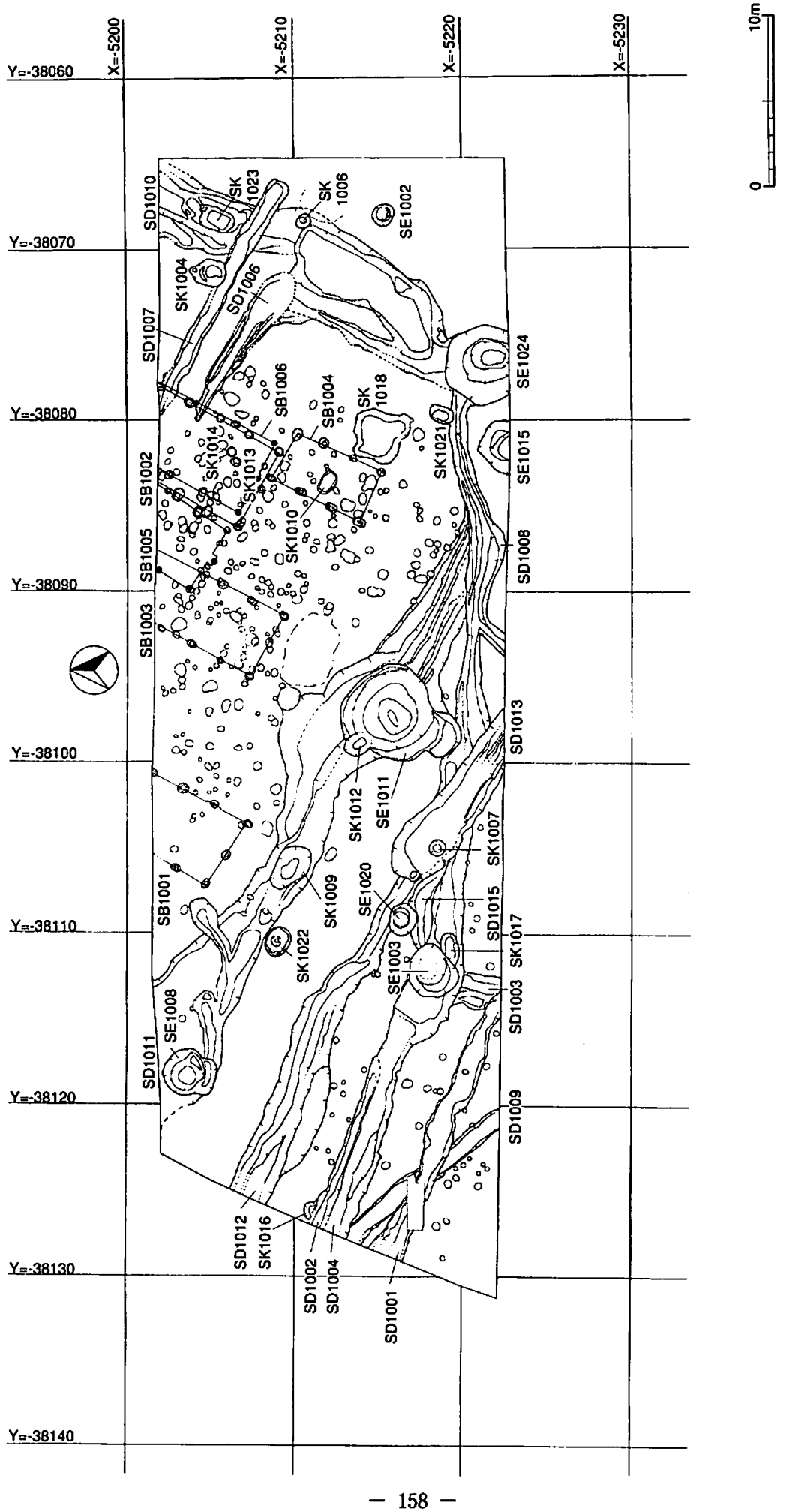
SB1002は調査区の北東側に位置する遺構で、SB1006と重複しているが、切り合い関係は不明である。桁行方向がN61°Wでほぼ南北方向の側柱建物と思われる。検出範囲より桁行8.0m以上(約26.3尺以上)、梁行5.2m(約17.0尺)の4間×2間分を確認したが、建物北部の柱穴が調査区外に存在すると考えられるので建物全体の規模は不明である。柱間寸法は桁行の平均が約2.0m(約6.7尺)、梁行の平均が約2.6m(約8.5尺)である。柱穴は直径36～60㎝、深さは20～60㎝で、下端のレベルは一定ではないが、どの柱もほぼ一直線に並ぶ。

SB1003(第122図)

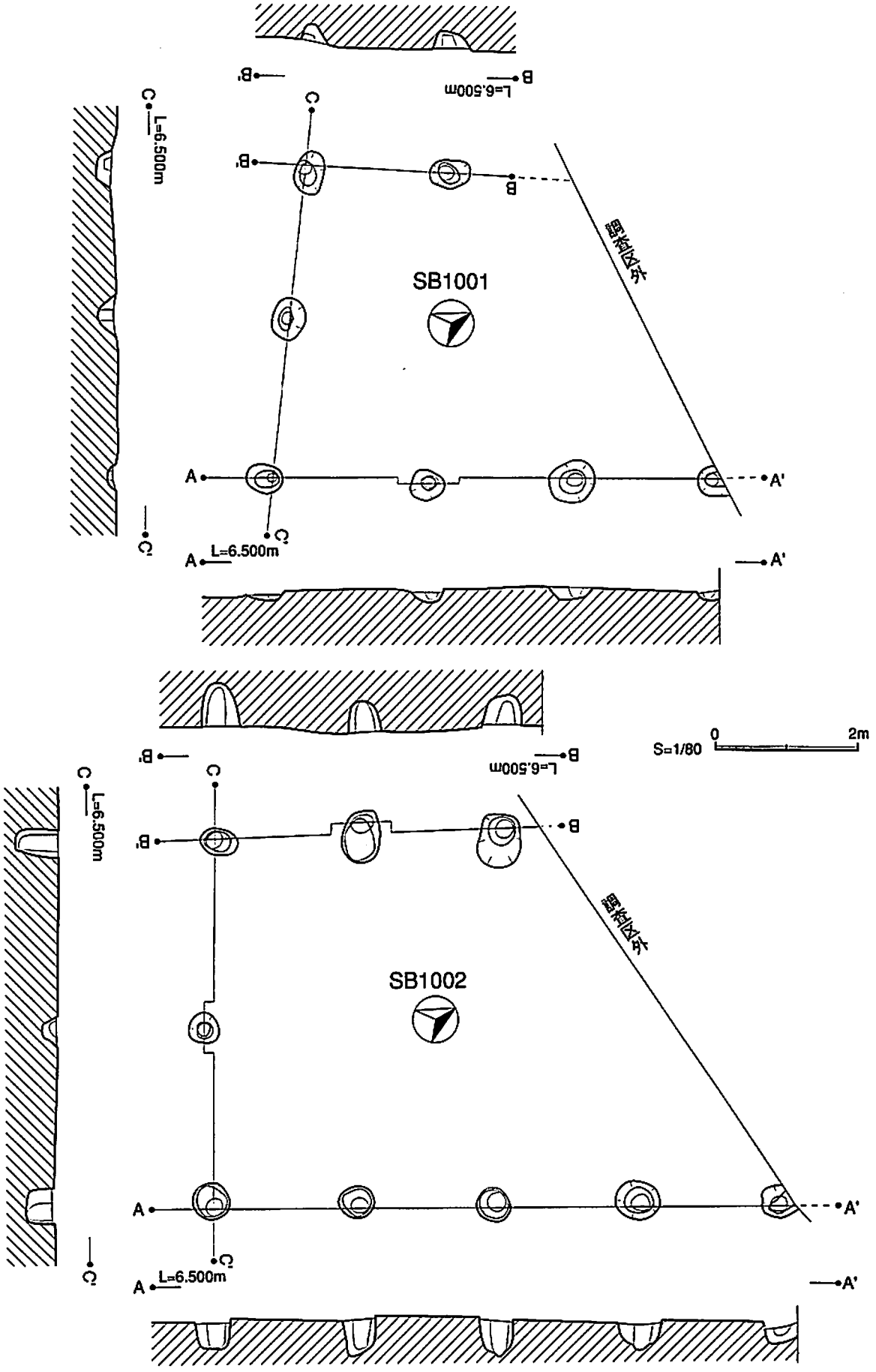
SB1003は調査区の中央部北側に位置する遺構で、SB1005と重複しているが、切り合い関係は不明である。桁行方向がN61°Wでほぼ南北方向の側柱建物と思われる。検出範囲より桁行6.0m以上(約19.8尺以上)、梁行4.0m(約13.3尺)の3間×2間分を確認したが、建物北部の柱穴が調査区外に存在すると考えられるので建物全体の規模は不明である。柱間寸法は桁行の平均が約2.0m(約6.6尺)、梁行の平均が約2.0m(約6.7尺)である。柱穴は直径40～60㎝、深さは12～30㎝で、下端のレベルは一定ではないが、どの柱もほぼ一直線に並ぶ。柱痕跡はほとんどの柱穴から検出できた。

SB1004(第123図)

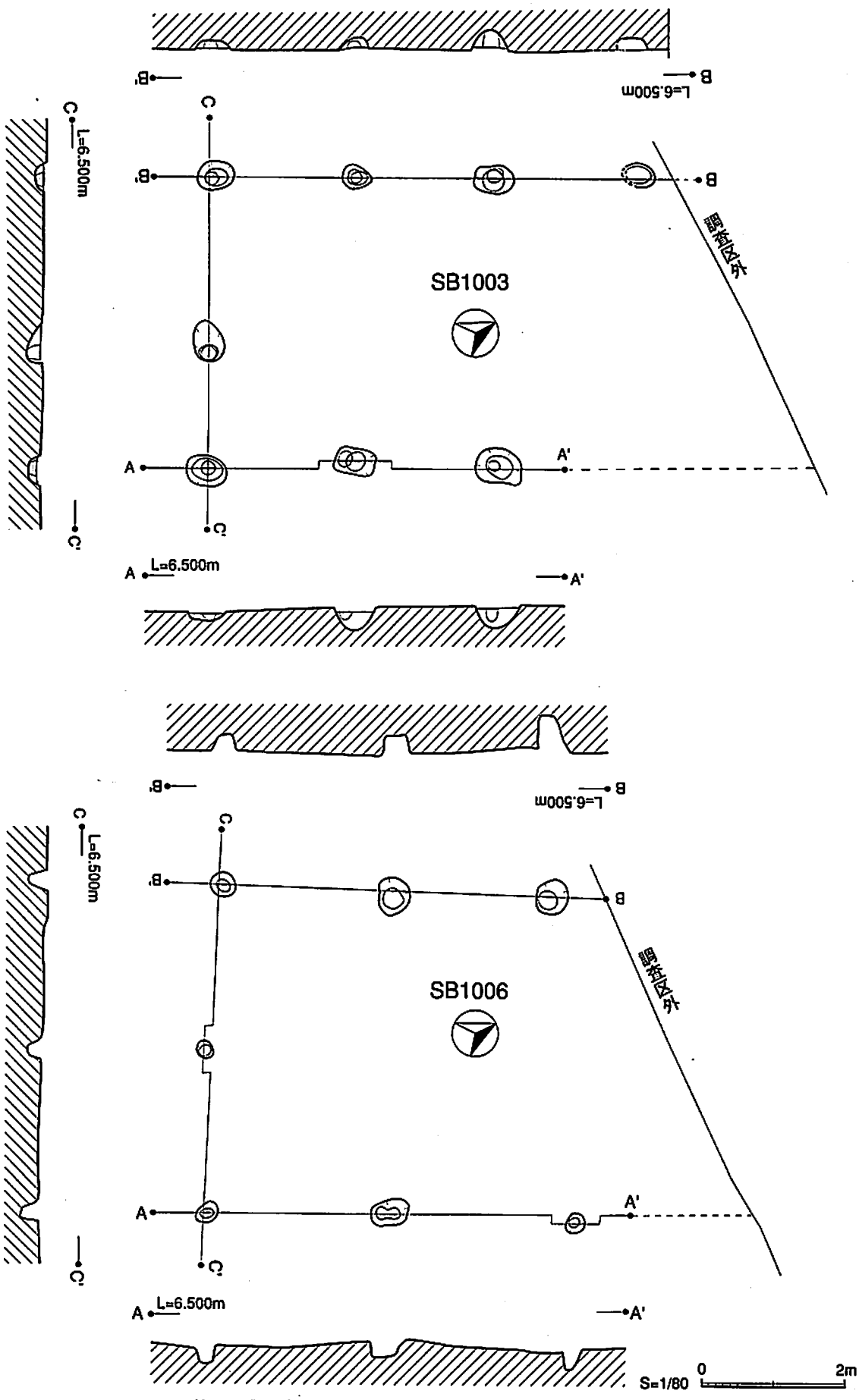
SB1004は調査区の東側に位置する遺構である。検出範囲より桁行5.6m(約18.4尺)、梁行3.1m(約10.2尺)の3間×1間の側柱建物である。桁行方向がN65°Wとほぼ南北方向である。柱間寸法は桁行の平均が約1.9m(約6.1尺)、梁行の平均が約3.1m(約10.2尺)である。柱穴は直径38～74㎝、深さは20～48㎝で、下端のレベルは一定ではないが、どの柱もほぼ一直線に並ぶ。柱痕跡は確認できなかった。



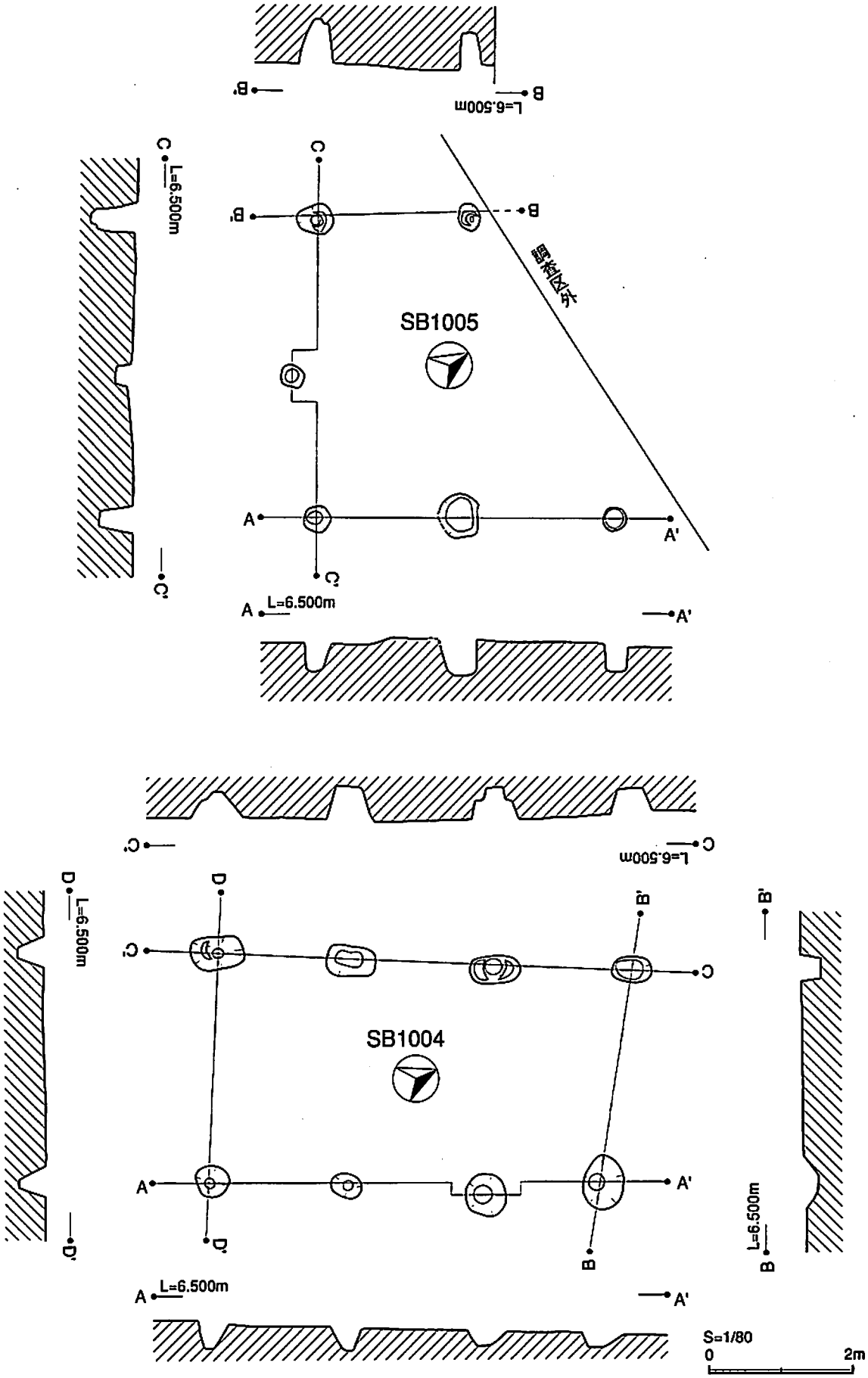
第120図　上小田宮の前10区遺構配置図（S=1/350）



第121図　掘立柱建物跡（SB1001・1002）実測図



第122図　掘立柱建物跡（SB1003・1006）実測図



第123図　掘立柱建物跡（SB1004・1005）実測図

（寸法は検出面で計測したもの）

遺構番号	間数	桁長		梁長		建物の向き	型式	方位	桁行平均		梁行平均		柱穴直径	柱穴深さ
		m	尺	m	尺				m	尺	m	尺	cm	cm
SB1001	(3)×2	(6.2)	(20.4)	4.3	14.3	南北	側柱	N 56°W	2.1	6.8	2.2	7.2	34～60	12～24
SB1002	(4)×2	(8.0)	(26.3)	5.2	17.0	南北	側柱	N 61°W	2.0	6.7	2.6	8.5	36～60	20～60
SB1003	(3)×2	(6.0)	(19.8)	4.0	13.3	南北	側柱	N 61°W	2.0	6.6	2.0	6.7	40～60	12～30
SB1004	3×1	5.6	18.4	3.1	10.2	南北	側柱	N 65°W	1.9	6.1	3.1	10.2	38～74	20～48
SB1005	(2)×2	(4.2)	(13.8)	4.2	13.7	南北	側柱	N 57°W	2.1	7.0	2.1	6.9	30～48	18～64
SB1006	(2)×2	(4.9)	(16.0)	4.5	15.0	南北	側柱	N 62°W	2.4	8.0	2.3	7.5	24～50	20～52

表35　上小田宮の前10区ＳＢ計測表

SB1005(第123図)

SB1005は調査区の東側に位置する遺構で、SB1003と重複し、SB1002に隣接している。桁行方向がN57°Wでほぼ南北方向の側柱建物と思われる。検出範囲より桁行4.2m以上(約13.8尺以上)、梁行4.2m(約13.7尺)の2間×2間分を確認したが、建物北部の柱穴が調査区外に存在すると考えられるので建物全体の規模は不明である。柱間寸法は桁行の平均が約2.1m(約7.0尺)、梁行の平均が約2.1m(約6.9尺)である。柱穴は直径30～48㎝、深さは18～64㎝で、下端のレベルは一定ではないが、どの柱もほぼ一直線に並ぶ。

SB1006(第122図)

SB1006は調査区の東側に位置する遺構で、SB1002と重複している。桁行方向がN62°Wでほぼ南北方向の側柱建物と思われる。検出範囲より桁行4.9m以上(約16.0尺以上)、梁行4.5m(約15.0尺)の2間×2間分を確認したが、建物北部の柱穴が調査区外に存在すると考えられるので建物全体の規模は不明である。柱間寸法は桁行の平均が約2.4m(約8.0尺)、梁行の平均が約2.3m(約7.5尺)である。柱穴は直径24～50㎝、深さは20～52㎝で、下端のレベルは一定ではないが、どの柱もほぼ一直線に並ぶ。

(2) 井戸跡

SE1002(第124図・125図)

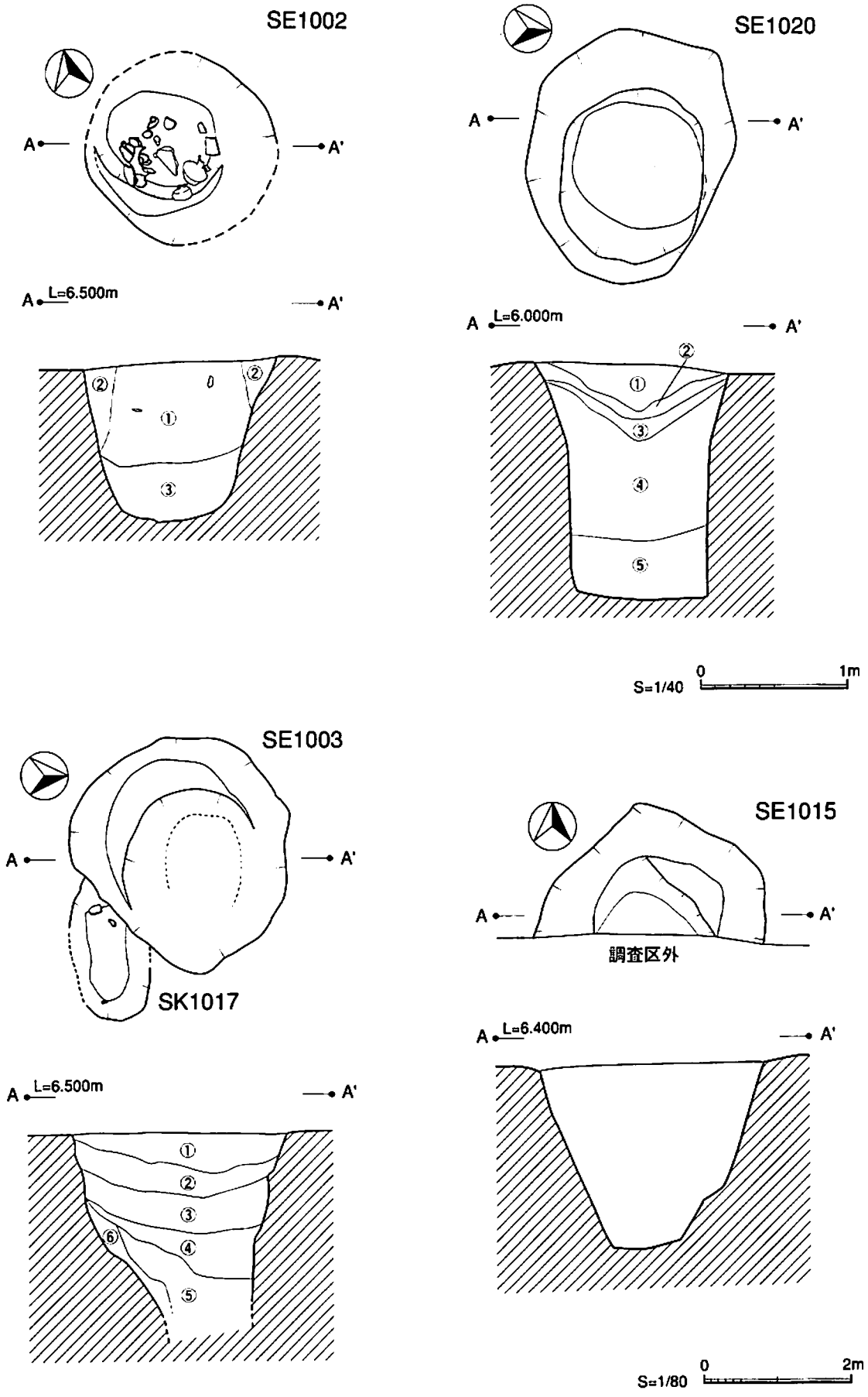
SE1002は調査区の東端に位置する遺構である。平面形はほぼ円形で、確認面では長軸・短軸1.30mを測る。掘り方は確認面からほぼ垂直に落ち、深さ1.08mを測る。この井戸跡の断面形状から素掘りの井戸跡と想定できる。

第125図2・3はこの井戸跡から出土した遺物である。2は須恵器の壺である。頸部が短く、口縁部が若干外反する。外器面には平行タタキが残り、その上を回転横ナデが施される。内器面下位には指頭圧痕が残り、中位以上には横ナデ調整を施す。3は須恵器の長頸壺である。内部は推定であるが、肩部から胴部にかけて鋭角にカーブをつける。底部には高台が付くと思われる。

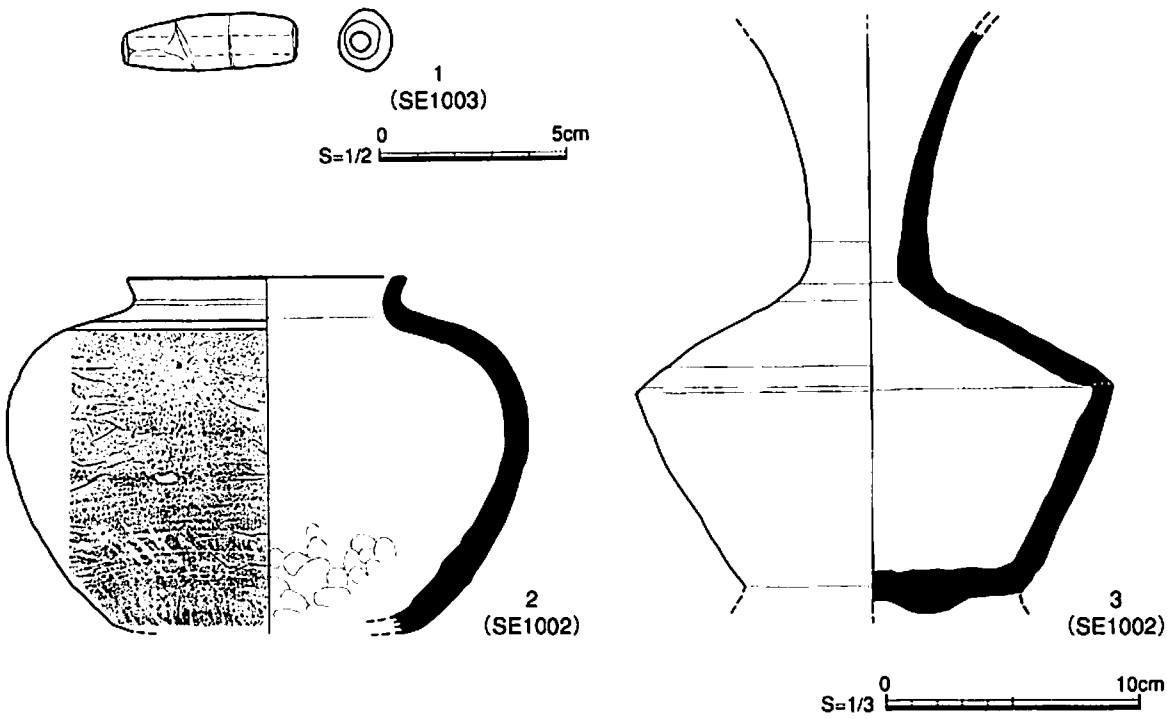
SE1003(第124図・125図)

SE1003は調査区の西側に位置する遺構である。平面形は不整な円形で、確認面では長軸3.20m、短軸2.92mを測る。掘り方は二段掘りである。確認面から0.56mほどの深さに段を形成しており、その北側に一回り小さな円形の掘り方を持つ。径は2.04mほどで、そのまま垂直に落ちるが、湧水のため深さ2.52mで掘削を止めた。

第125図1はこの井戸跡から出土した土錘である。



第124図　井戸跡（SE1002・1003・1015・1020）・土坑（SK1017）実測図



第125図　井戸跡（SE1002・1003）出土遺物実測図

SE1008(第127図)

SE1008は調査区の北西側に位置する遺構である。平面形は不整な楕円形で、確認面では長軸3.20m、短軸2.64mを測る。掘り方は二段掘りである。確認面から0.84mほどの深さに段を形成しており、その北側に一回り小さな円形の掘り方を持つ。径は1.64mほどで、そのまま垂直に落ち、深さ2.44mを測る。井戸枠として多数の木杭が使用される。

SE1011(第126図)

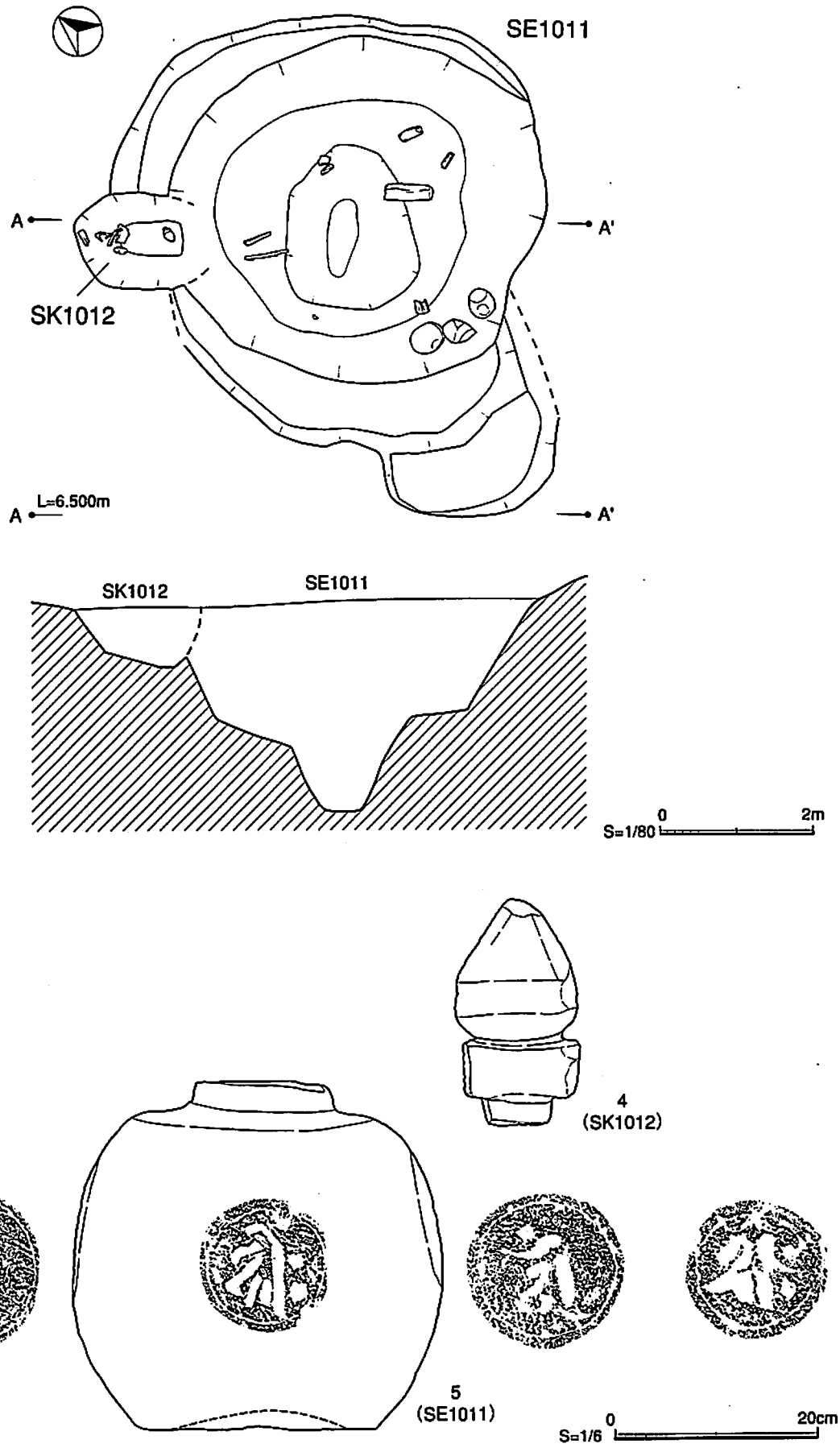
SE1011は調査区の中央部に位置する遺構で、SK1012に切られている。平面形は不整な楕円形で、確認面では長軸7.00m、短軸5.62mを測る。掘り方は二段掘りである。確認面から1.44mほどの深さに段を形成しており、その中心部に一回り小さな円形の掘り方を持つ。径は1.32mほどで、そのまま落ち、深さ2.76mを測る。大型でおそらくは井戸枠を設置したものと考えられるが、痕跡は確認できなかった。5はこの井戸跡から出土した遺物である。五輪塔の水輪で、四方向に梵字の掘り込みがあり、黒色顔料が残る。

SE1015(第124図)

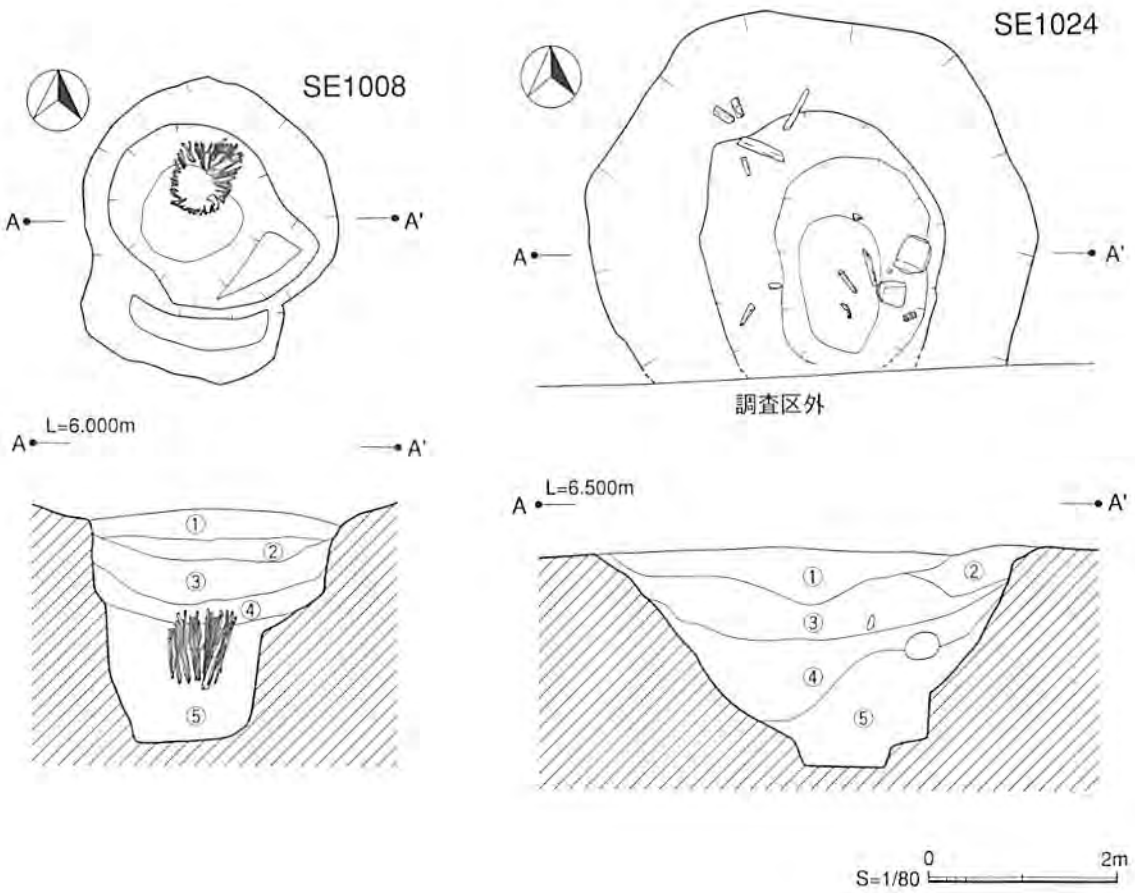
SE1015は調査区の南端部に位置する遺構である。確認面では長軸3.04m、短軸1.78m以上を測るが、井戸跡の南側は調査区外に広がり、その形状は不明である。掘り方は二段掘りである。確認面から1.72mほどの深さに段を形成しており、その北側に一回り小さな円形の掘り方を持つ。径は1.52mほどで、そのまま垂直に落ち、深さ2.52mを測る。

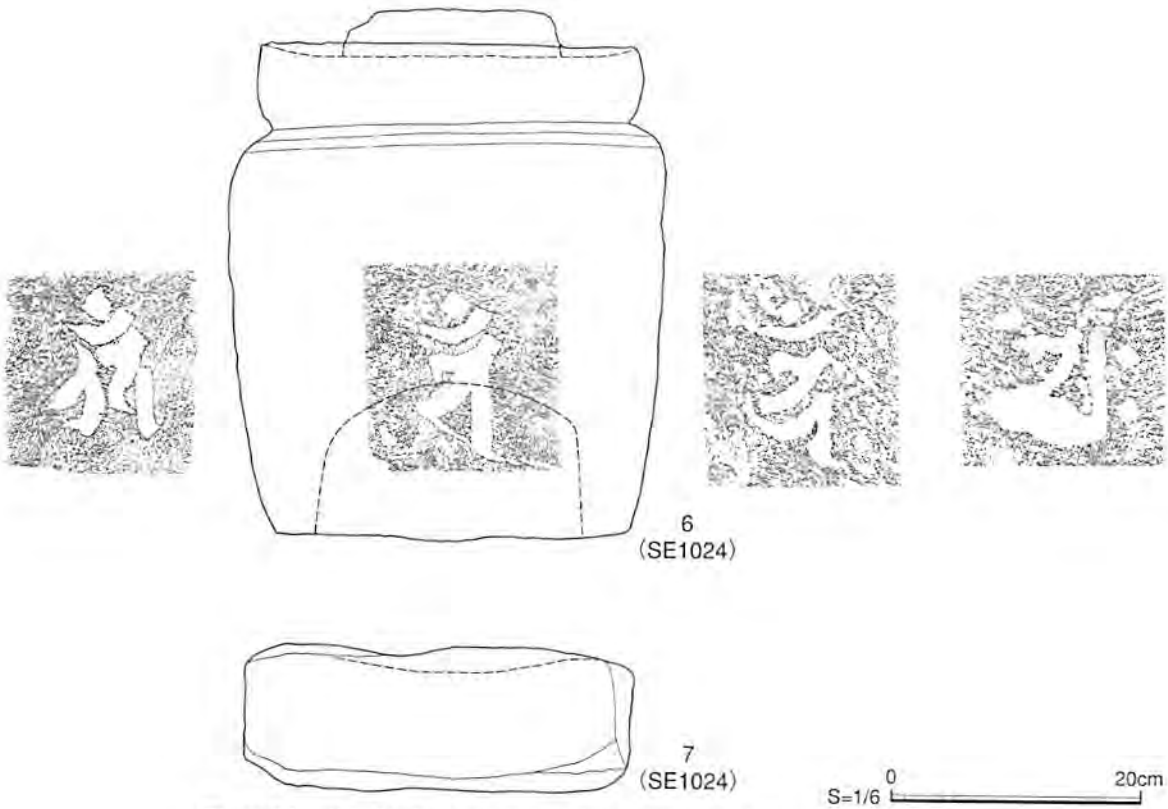
SE1020(第124図)

SE1020は調査区の西側に位置する遺構である。平面形は楕円形で、確認面では長軸1.71m、短軸1.34mを測る。掘り方は確認面からほぼ垂直に落ち、深さ1.54mを測る。この井戸跡の断面形状から素掘りの井戸跡と想定できる。



第126図　井戸跡（SE1011）・土坑（SK1012）実測図及び出土遺物実測図





第127図　井戸跡（SE1008・1024）実測図及び出土遺物実測図

SE1024(第127図)

SE1024は調査区の南側に位置する遺構である。確認面では長軸4.68m、短軸3.72m以上を測るが、井戸跡の南側は調査区外に広がり、その形状は不明である。掘り方は三段掘りである。確認面から1.4mほどの深さに2段目、更に確認面から1.92mほどの深さに3段目を形成している。そのほぼ中心部に一回り小さな楕円形の掘り方を持つ。径は長軸2.08m、短軸1.52mほどでそのまま下端まで落ち、深さ2.28mを測る。井戸跡からは宝塔や多量の木材が層をなして出土し、これまでの井戸の廃棄方法と異なる様相をみせる。

6はこの井戸跡出土の宝塔の輪部である。輪部には四方向に梵字の掘り込みがあり、赤色顔料が残る。

(3) 溝跡

SD1001・1002・1003・1004・1009・1011・1012・1013・1015(第128図・130図)

SD1001・1002・1004・1011・1012・1013・1015は全て北西側から南東側に伸びる溝跡で、全体の切り合い関係は不明だが、数度に渡って掘り直しを繰り返しながら使用していたことが想定できる。

SD1001は調査区の西側に位置する遺構である。北西～南東に伸びる溝で、SD1003・1009を切っている。両端は調査区外に存在するため確認できておらず、確認面での長軸15.50m以上、短軸1.75m、深さ0.15mを測る。

SD1002は調査区の西側に位置する遺構である。ほぼ北西～南東に伸びる溝で、SD1004を切っている。北端は調査区外に存在するため確認できておらず、確認面での長軸9.80m以上、短軸1.05m、深さ0.25mを測る。

SD1003は調査区の南側に位置する遺構である。ほぼ南北に伸びる溝で、SD1001・1004に切られている。南端は調査区外に存在するため確認できておらず、確認面での長軸3.00m以上、短軸2.00m、深さ0.30mを測る。

SD1004は調査区の西側に位置する遺構である。ほぼ西～南に伸びる溝で、SD1003・1015を切り、SD1013に切られている。北端は調査区外に存在するため確認できておらず、確認面での長軸23.00m以上、短軸3.10m、深さ0.45mを測る。

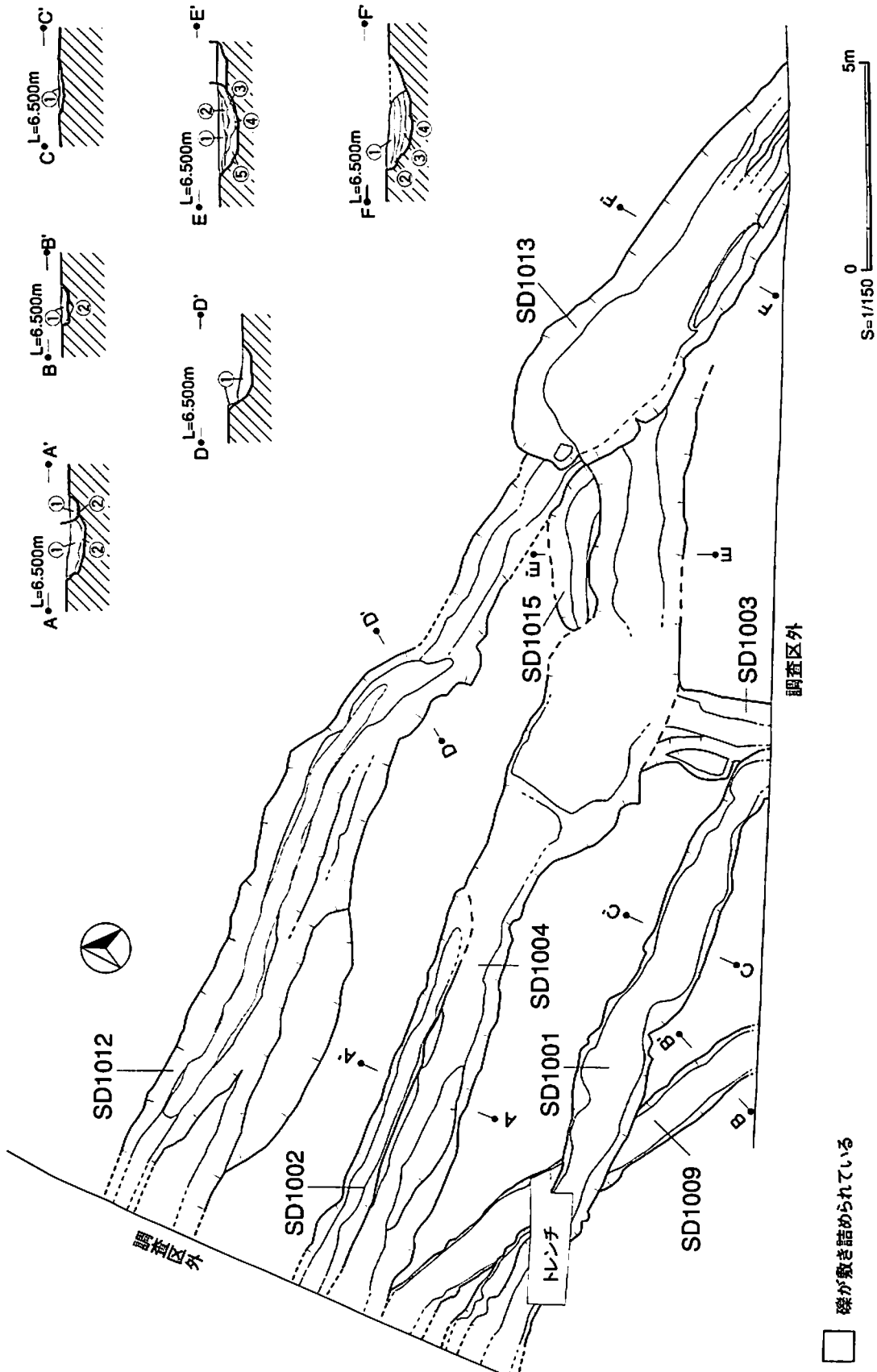
SD1009は調査区の南西側に位置する遺構である。ほぼ北西～南東に伸びる溝で、SD1001・1004に切られている。両端は調査区外に存在するため確認できておらず、確認面での長軸10.70m以上、短軸1.10m、深さ0.20mを測る。

SD1011は調査区の南西側に位置する遺構である。ほぼ北西～南東に伸びる溝で、SD1008に切られている。北端は調査区外に存在するため確認できておらず、長軸33.50m以上、短軸5.30m、深さ0.35mを測る。

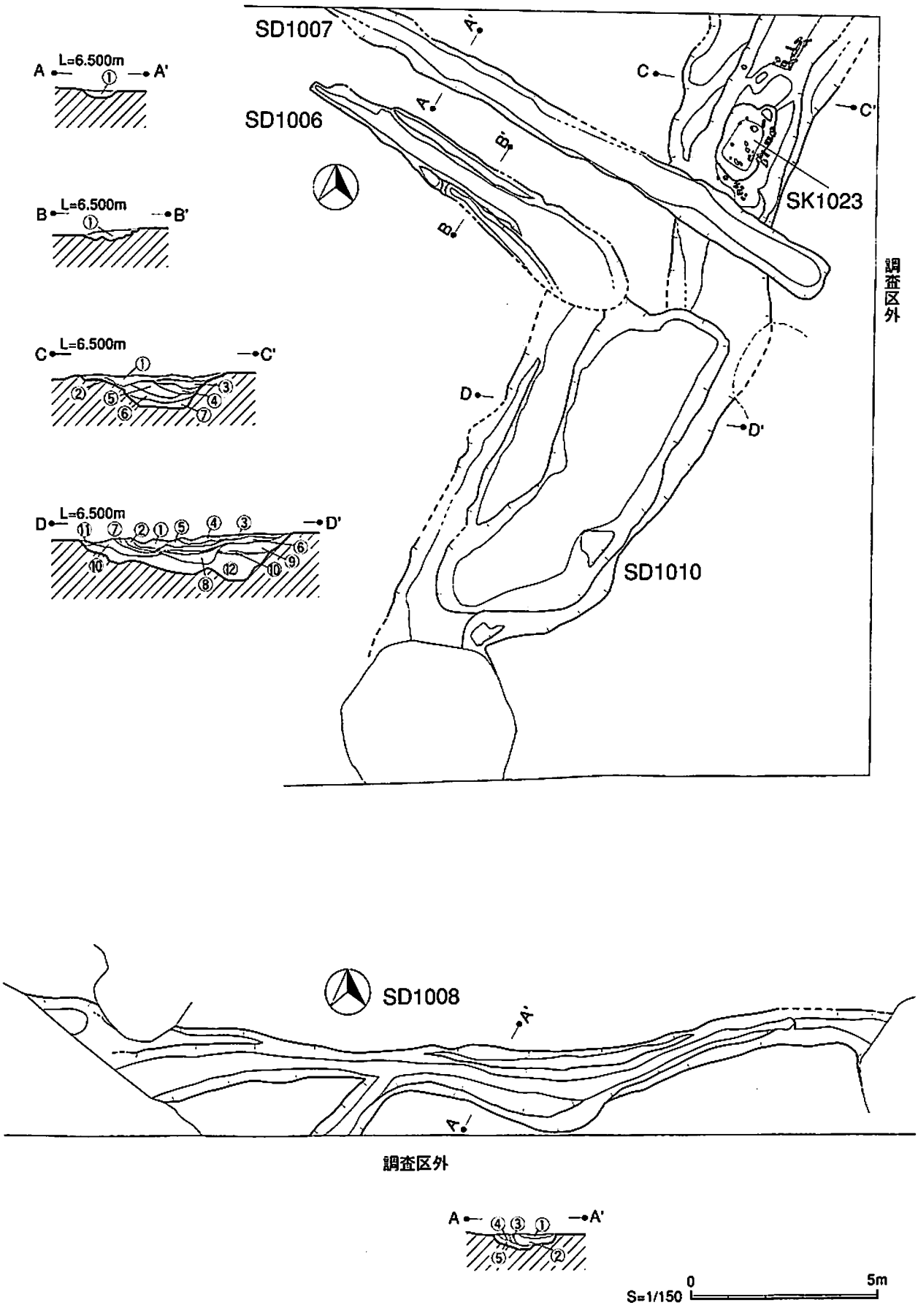
第132図22～26はこの溝跡から出土した遺物である。22は瓦質土器の盤である。23は土師器の杯である。24～26は軽石製の加工品であるが、その用途については不明である。24は方形に作り出し、何らかの容器の様相を示すものである。

SD1012は調査区の南西側に位置する遺構である。ほぼ北西～南東に伸びる溝で、SD1013・1015に切られ、北端は調査区外に存在するため確認できていない。長軸19.70m以上、短軸3.50m、深さ0.65mを測り、内部には礫が敷き詰められていた。

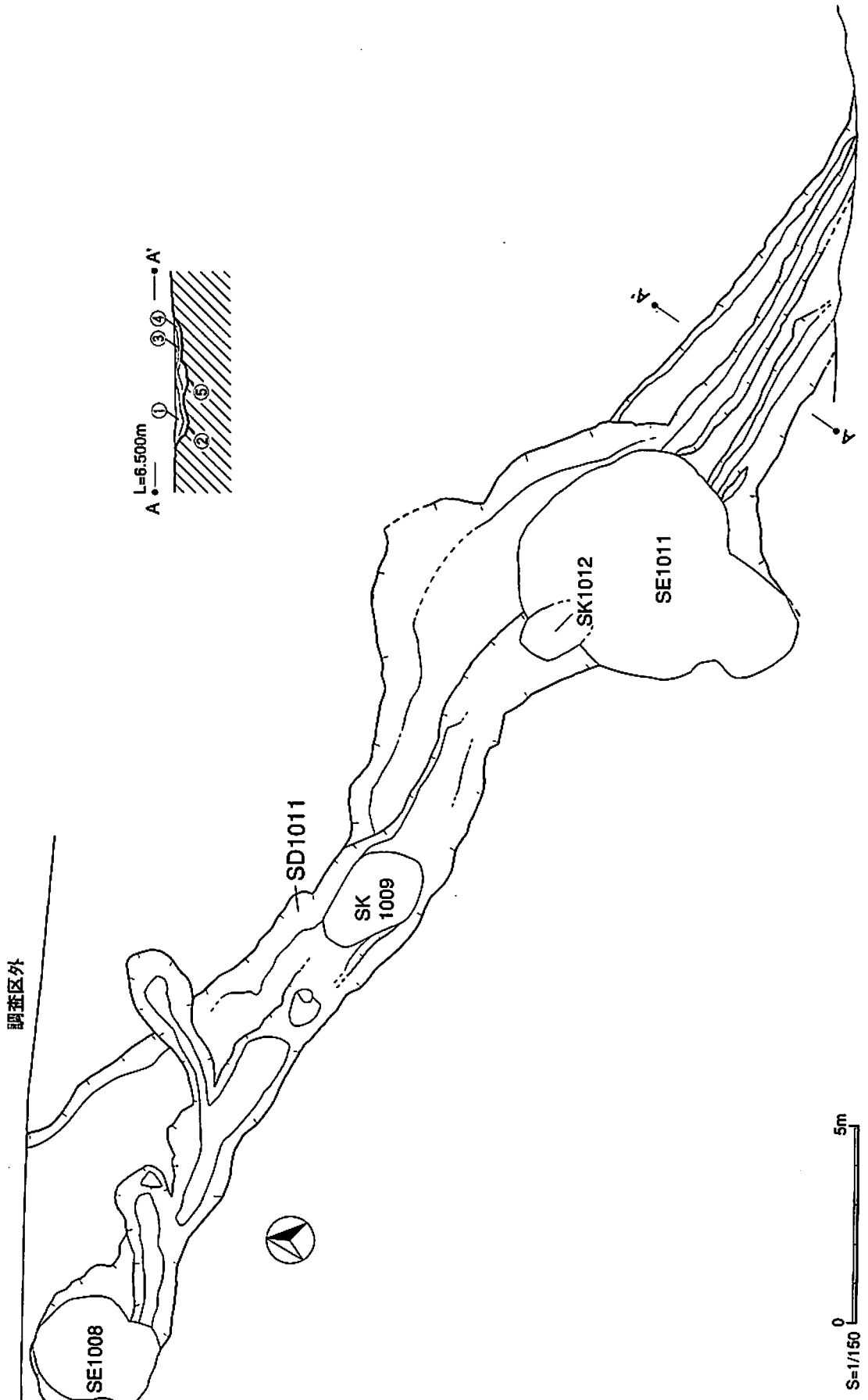
第131図14・15はこの溝跡から出土した遺物である。14は敲石若しくは磨石である。長方体の端部に打撃痕が残るが、側面の平坦部にはやや磨り痕が残る。15は石錘である。円礫の側面部分に溝状の凹みを刻み込む。平坦面には、やや磨り痕が残る。



第128図　溝跡（SD1001・1002・1003・1004・1009・1012・1013・1015）実測図



第129図　溝跡（SD1006・1007・1008・1010）・土坑（SK1023）実測図



第130図　溝跡（SD1011）実測図

SD1013は調査区の南側に位置する遺構である。ほぼ北西～南東に伸びる溝で、SD1004・1008・1012を切っている。南端は調査区外に存在するため確認できておらず、長軸10.0m以上、短軸3.0m、深さ0.60mを測る。第131図12はこの溝跡から出土した。軽石を方形に加工したもので、その用途については不明である。

SD1015は調査区の南側に位置し、SD1012を切り、SD1004に切られている。長軸4.0m以上、短軸1.1m以上、深さ0.60mを測る。

SD1006・1007(第129図)

SD1006は調査区の北東側に位置する遺構である。ほぼ北西～南東に伸びる溝である。SD1010を切っており、長軸10.20m、短軸1.35m、深さ0.15mを測る。

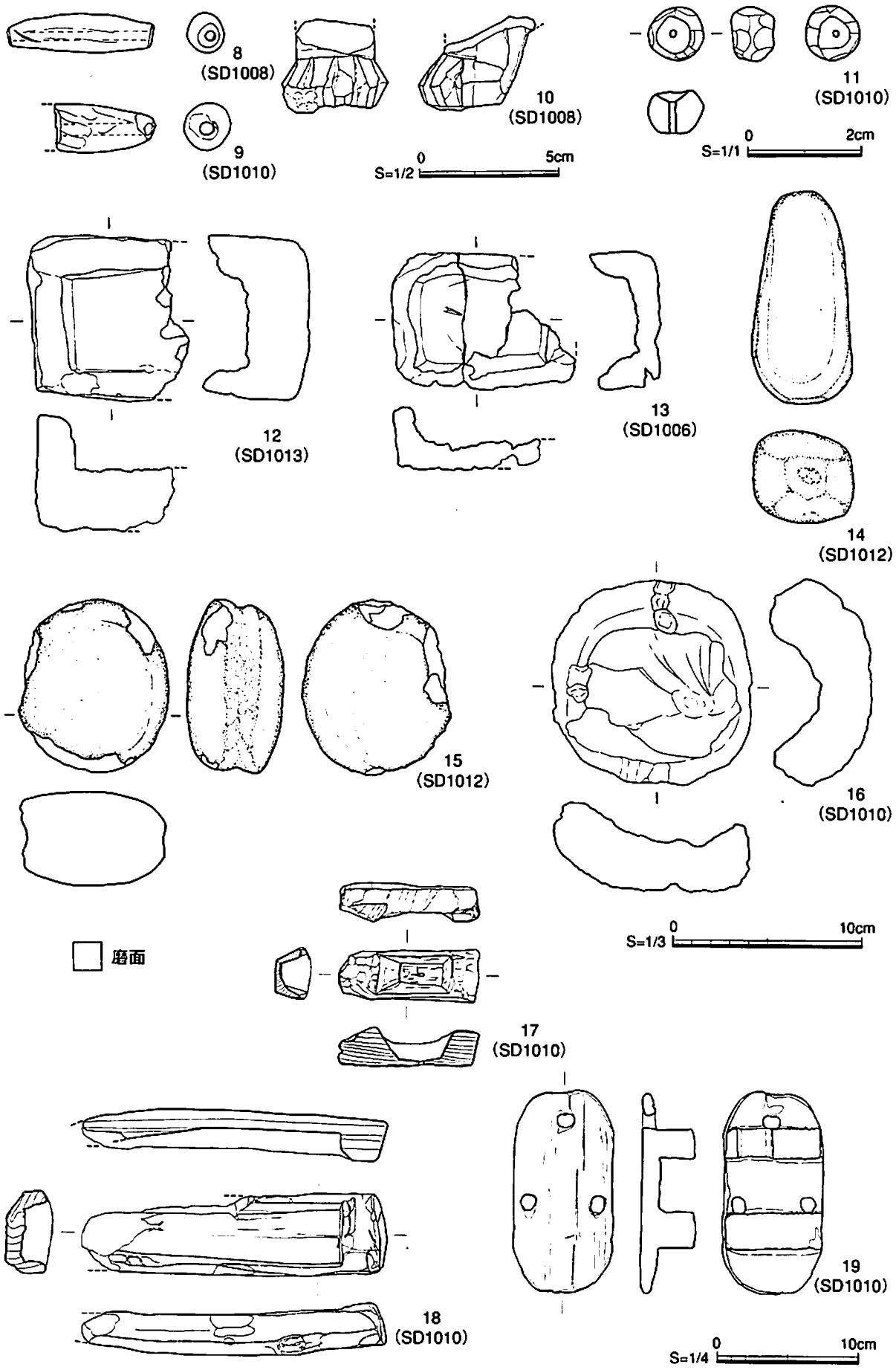
第131図13はこの溝跡から出土した軽石を方形に加工したもので、その用途については不明である。

SD1007は調査区の北東側に位置する遺構である。ほぼ北西～南東に伸びる溝で、SD1010を切り、SK1004に切られている。北端は調査区外に存在するため確認できておらず、長軸15.20m以上、短軸1.30m、深さ0.10mを測る。

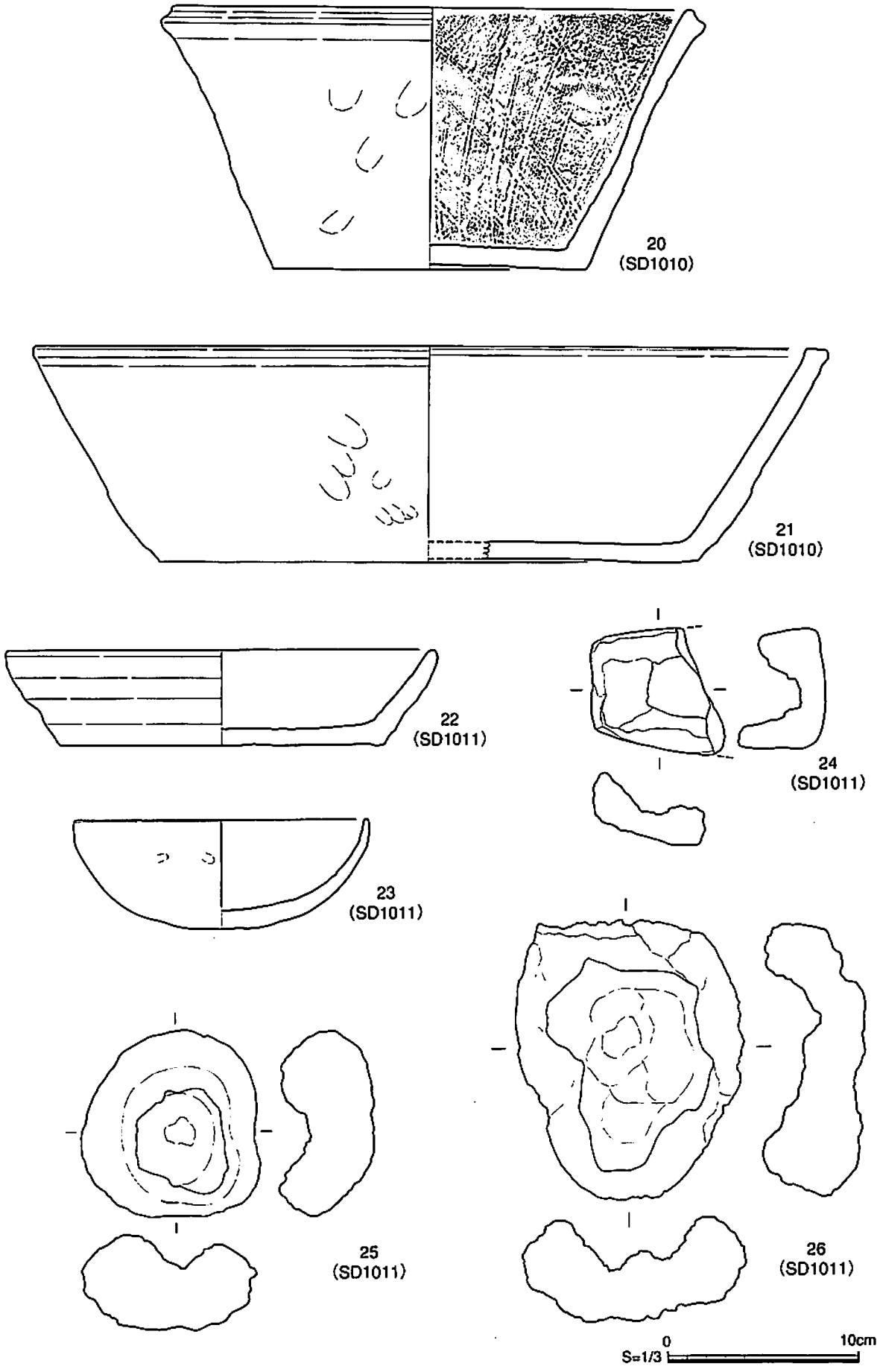
（寸法は検出面で計測したもの）　（単位：m）

遺構名	遺構番号	長軸	短軸	深さ	備　考
井戸跡	SE1002	1.30	1.30	1.08	遺物出土
	SE1003	3.20	2.92	2.52	SD1004・SK1017を切る、遺物出土
	SE1008	3.20	2.64	2.44	SD1011を切る、遺物出土
	SE1011	7.00	5.62	2.76	SD1008を切る、SK1012に切られる、遺物出土
	SE1015	3.04	1.78～	2.46	
	SE1020	1.71	1.34	1.54	SD1012を切る
	SE1024	4.68	3.72～	2.28	SD1008・SD1010を切る
溝跡	SD1001	15.50～	1.75	0.15	SD1003・SD1009を切る
	SD1002	9.80～	1.05	0.25	SK1016・SD1004を切る、遺物出土
	SD1003	3.00～	2.00	0.30	SD1001・SD1004に切られる
	SD1004	23.00～	3.10	0.45	SD1003・SD1015を切る、SD1013・SE1003に切られる、遺物出土
	SD1006	10.20～	1.35	0.15	SD1010を切る、遺物出土
	SD1007	15.20～	1.30	0.10	SD1010を切る、SK1004に切られる
	SD1008	20.20～	2.20	0.45	SD1010・SD1011を切る、SD1013・SE1011・SK1021・SE1024に切られる、遺物出土
	SD1009	10.70～	1.10	0.20	SD1001・SD1004に切られる
	SD1010	19.50～	5.50	0.13	SD1006・SD1007・SD1008・SK1006・SK1023・SE1024に切られる、遺物出土
	SD1011	33.50～	5.30	0.35	SD1008・SE1008・SK1009・SE1011・SK1012に切られる、遺物出土
	SD1012	19.70～	3.50	0.65	SD1013・SD1015・SE1020に切られる、遺物出土
	SD1013	10.00～	3.00	0.60	SD1004・SD1008・SD1012を切る、遺物出土
	SD1015	4.00～	1.10～	0.60	SD1012を切る、SD1004に切られる、遺物出土
土坑	SK1004	2.20	1.57	0.50	SD1007を切る
	SK1006	0.76	0.72	0.86	SD1010を切る
	SK1009	2.76	1.80	0.70	SD1011を切る、遺物出土
	SK1010	2.64	1.68	0.56	
	SK1012	1.48～	1.24	0.80	SE1011を切る、遺物出土
	SK1013	0.50	0.50	0.18	遺物出土
	SK1014	0.52	0.52	0.14	SD1007を切る、遺物出土
	SK1017	1.96～	1.04	0.35	SE1003に切られる
	SK1022	1.76	1.46	0.58	
	SK1023	2.00	1.22	0.50	SD1010を切る

表36　上小田宮の前10区検出遺構一覧表



第131図　溝跡（SD1006・1008・1010・1012・1013）出土遺物実測図



第132図　溝跡（SD1010・1011）出土遺物実測図

SD1008(第129図)

SD1008は調査区の南側に位置する遺構である。ほぼ東～西に伸びる溝である。SD1010・1011を切り、SD1013に切られており、長軸20.20m以上、短軸2.20m、深さ0.45mを測る。

第131図8・10はこの溝跡から出土した遺物である。8は土錘である。10は須恵器の硯の獣脚片である。

SD1010(第129図)

SD1010は調査区の東側に位置する遺構である。ほぼ北～南に伸びる溝で、SD1006～1008に切られている。北端は調査区外に存在するため確認できておらず、長軸19.50m以上、短軸5.50m、深さ0.13mを測る。

第131図9・11・16～19、第132図20・21はこの溝跡から出土した遺物である。9は土錘である。11は瑪瑙製の玉である。16は軽石製の皿である。17～19は木器である。17・18は舟形木器で、水の祭祀に関係するものと想定する。19は下駄である。20・21は瓦質土器である。20は摺鉢である。21は捏鉢である。

(4) 土坑

SK1004(第133図)

SK1004は調査区の東側に位置する遺構で、SD1007を切っている。長軸2.20m、短軸1.57m、深さ0.50mを測り、平面形は不整の楕円形、断面形は略台形を呈している。

SK1006(第133図)

SK1006は調査区の東側に位置する遺構で、SD1010を切っている。長軸0.76m、短軸0.72m、深さ0.86mを測り、平面形は方形、断面形は深い筒状を呈している。

SK1009(第134図)

SK1009は調査区の中央部西側に位置する遺構である。長軸2.76m、短軸1.80m、深さ0.70mを測り、平面形は不整の楕円形、断面形は皿状を呈している。

28～30はこの土坑から出土した遺物である。28は土師器の糸切り痕が残る杯である。29は軽石製の浮子である。30は瓦質土器の大型の甕である。

SK1010(第133図)

SK1010は調査区の東側に位置する遺構で、SB1004の内部に位置している。長軸2.64m、短軸1.68m、深さ0.56mを測り、平面形は楕円形、断面形は略台形を呈している。遺構内から多量の焼土が検出され、野鍛冶跡の可能性がある。

SK1012(第126図)

SK1012は調査区の中央部に位置する遺構で、SE1011を切っている。長軸1.48m以上、短軸1.24m、深さ0.80mを測り、平面形は楕円形、断面形は皿状を呈している。

4はこの土坑から出土した五輪塔の空風輪である。

SK1013・1014(第133図)

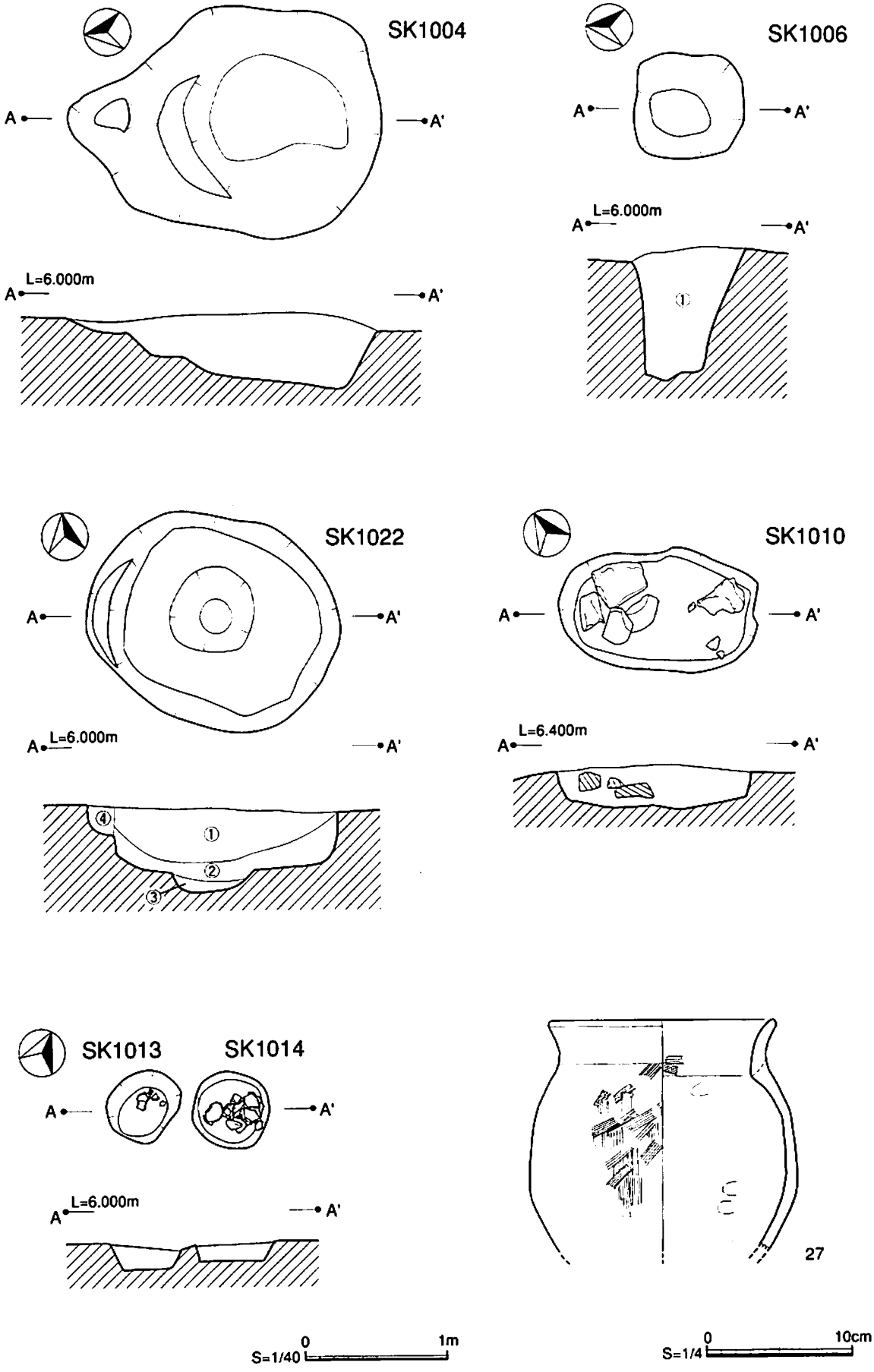
SK1013は調査区の東側に位置する遺構である。長軸・短軸0.50m、深さ0.18mを測り、平面形は円形、断面形は皿状を呈している。

27はこの土坑から出土した土師器の甕である。

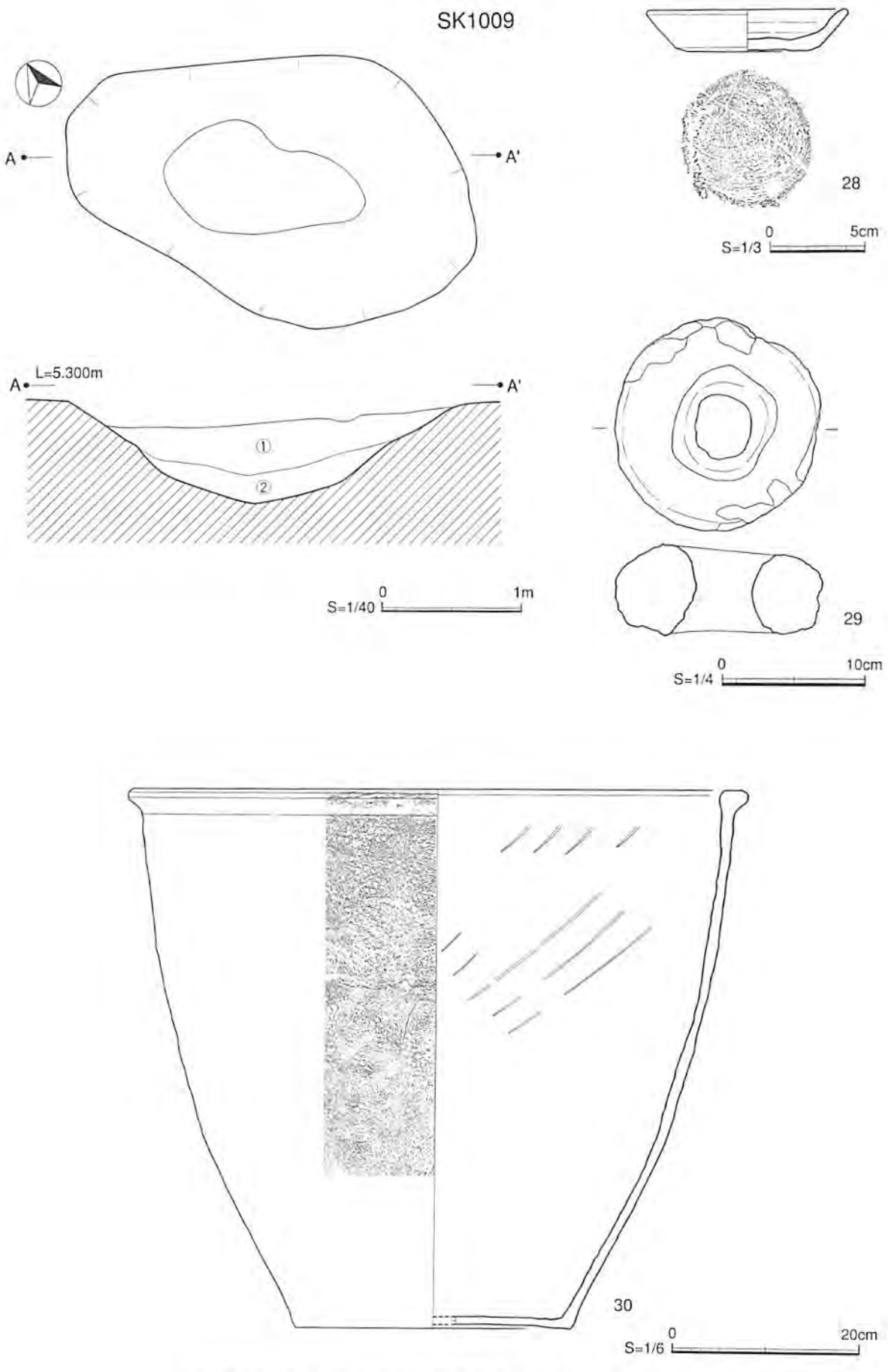
SK1014は調査区の東側に位置する遺構で、SK1013に隣接している。長軸・短軸0.52m、深さ0.14mを測り、平面形は円形、断面形は皿状を呈している。

SK1017(第124図)

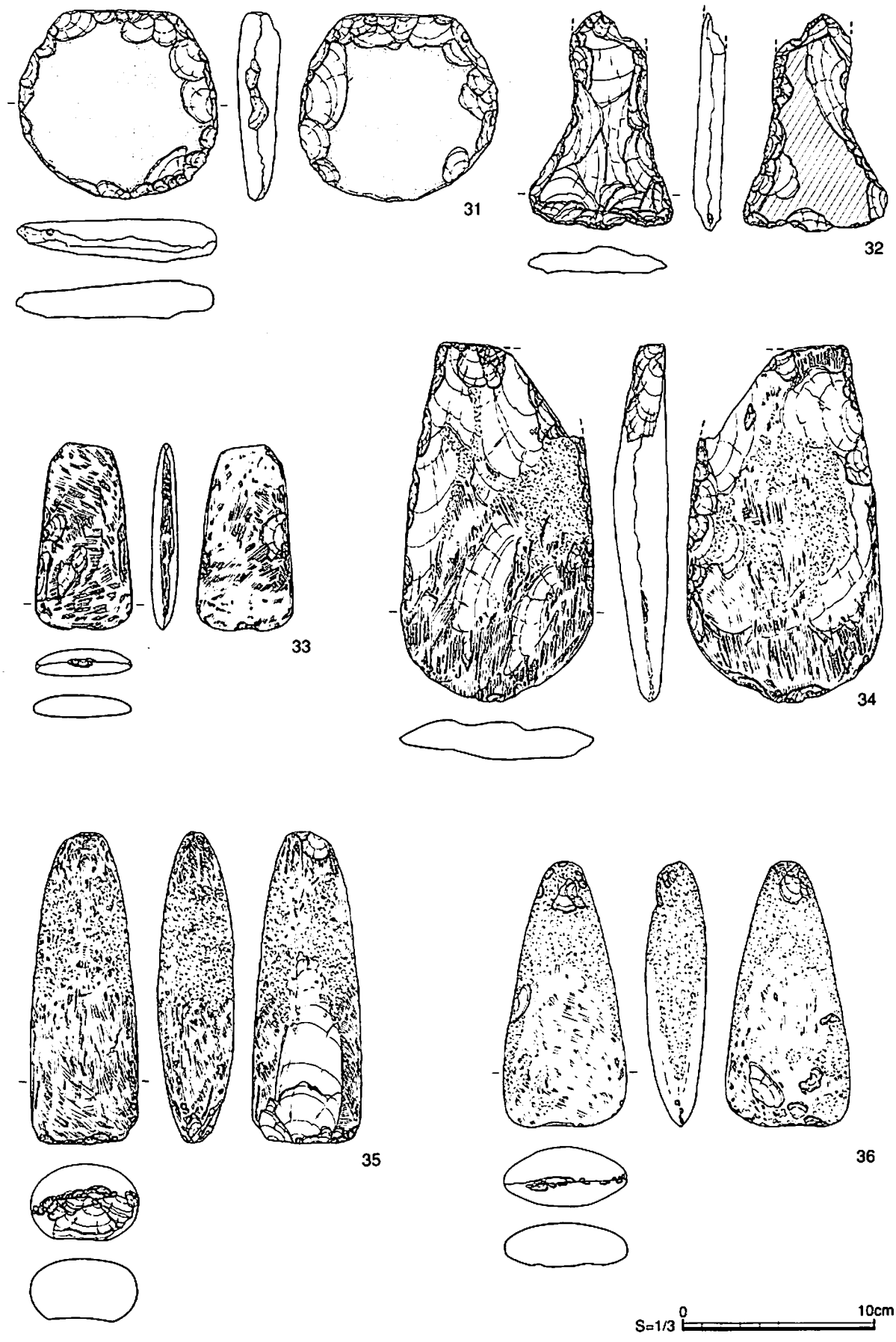
SK1017は調査区の西側に位置する遺構で、SE1003に切られている。長軸1.96m以上、短軸1.04m、深さ0.35mを測り、平面形は楕円形を呈している。



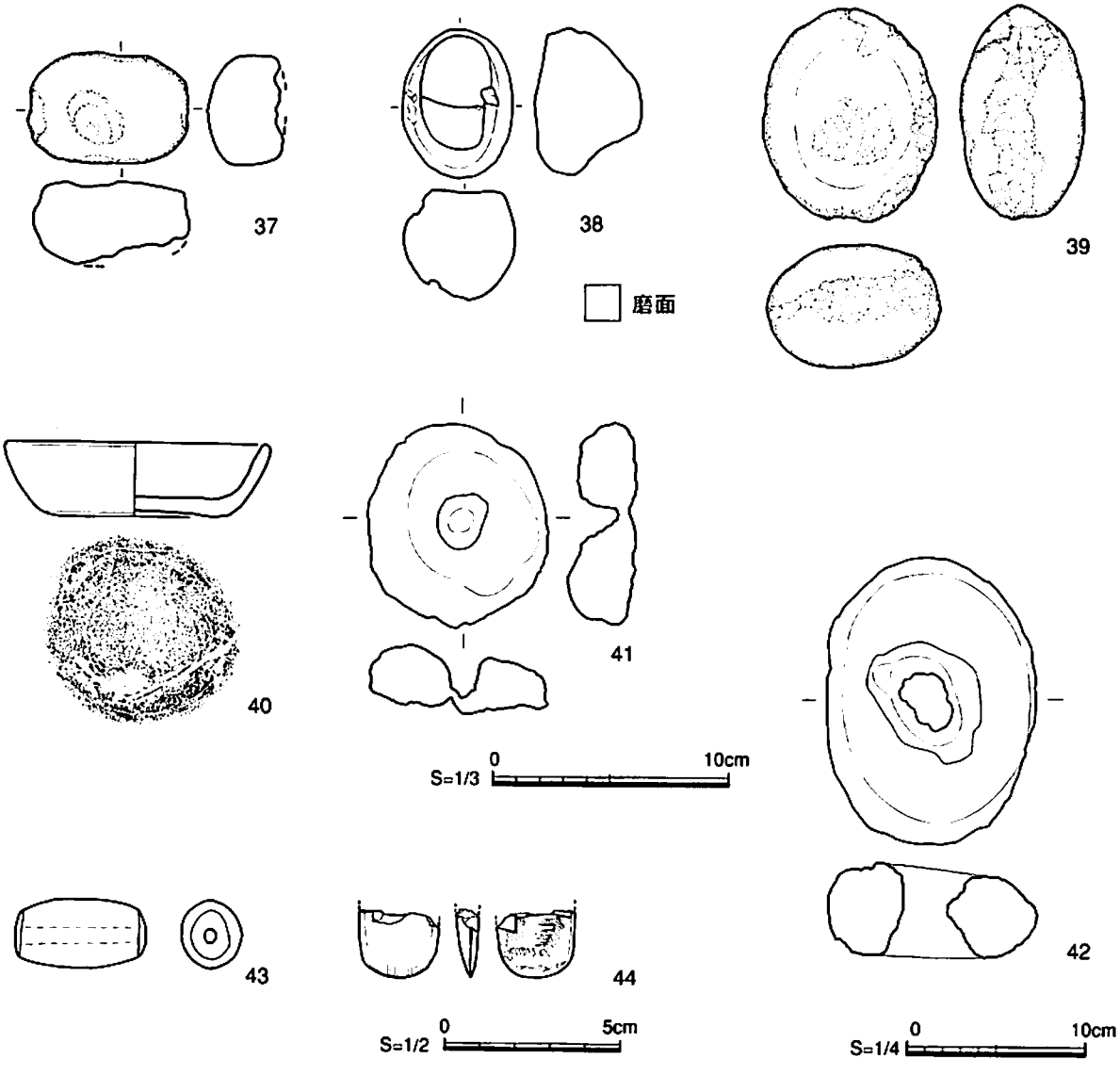
第133図　土坑（SK1004・1006・1010・1013・1014・1022）実測図及び出土遺物実測図



第134図　土坑（SK1009）実測図及び出土遺物実測図



第135図　10区出土遺物実測図（1）



第136図　10区出土遺物実測図（2）

SK1022(第133図)

SK1022は調査区の西側に位置する遺構で、SD1011に隣接している。長軸1.76m、短軸1.46m、深さ0.58mを測り、平面形は楕円形、断面形は略台形を呈している。

SK1023(第129図)

SK1023は調査区の北側に位置する遺構である。長軸2.00m、短軸1.22m、深さ0.50mを測る。平面形は方形を呈している。

(5) その他

ここでは、2. 遺構・遺物で遺構と共に述べられなかった遺物を概観する。

第135図・136図は、10区の遺構以外の所から出土した遺物で、出土地点、法量、調整、色調、胎土等の詳細については、表48、61、63のとおりである。

31～36・44は縄文時代の石斧である。31は円形型打製石斧である。32は短冊形打製石斧である。33～36は磨製石斧である。44は小型の磨製石斧である。37は石錘、38・39は敲石若しくは磨石である。40は土師器の糸切り痕が残る杯である。41は軽石製の浮子の未製品である。42は軽石製の浮子である。43は土錘である。

遺構番号	層位	特　徴
SE1002	①層	褐灰色土。砂層でマンガン、鉄分の付着が強い。こぶし大の石を多量に含む。
	②層	黄灰色土。砂層でマンガン、鉄分の付着が少量見られる。
	③層	黒褐色土。強い粘性あり、本来の井戸の埋土か。遺物を含む。
SE1003	①層	暗灰黄色シルト。20cm以下の赤褐色、明黄褐色粘土ブロックを多量に含む。下層ほど大きなブロックがみられ、礫、炭化物を微量に含む。鉄分の沈着が多い。しまりあり、粘性あり。
	②層	黄灰色粘質土と褐色粘質土が混在(5:5)。微量の明赤褐色粘土ブロックと炭化物を含み、鉄分の沈着が見られる。しまりあり、粘性あり。
	③層	黄灰色粘質土と褐色粘質土が混在。シルトの割合が多く、褐色砂を縦筋状に多量に含む。しまりあり、粘性あり。
	④層	オリーブ黒粘質土と黄褐色砂質土が混在。炭化物を少量含む。しまりあり、強い粘性あり。
	⑤層	④層と同じだが、黄褐色砂質土が緑色に変色、大部分がこの土である。
	⑥層	注記なし。
SE1008	①層	暗灰黄色土。弱い粘性あり。にぶい黄色の砂質土を層状に含む。
	②層	オリーブ黒粘土。少量の砂、植物遺体を含む。
	③層	オリーブ黒粘土。非常にきめ細かい粘土。
	④層	オリーブ黒粘土。砂を層状に含む。
	⑤層	灰。粘土と砂がサンドイッチ状に層を成す。
SE1020	①層	黒褐色粘質土。焼土を含み硬くしまるブロック状で、その隙間を黒褐色の粘土が埋める。
	②層	黒褐色粘土とにぶい黄褐色砂質土。それぞれがブロック状に入り、焼土を含む。
	③層	黒褐色粘土。5mm大の焼土塊を含む。
	④層	褐灰色粘土と褐灰色砂、赤褐色粘質土。マンガン、鉄分沈殿と思われるものが層を成して堆積し、焼土を含む。
	⑤層	粘土。赤褐色粘質土(マンガン、鉄分沈殿か)をブロック状に含む。
SE1024	①層	暗青灰色砂質土。しまりあり、粘性なし。砂に同色の粘土が少量混じる。全体的にマンガンを粒子状に含み、下部には鉄分が層を成す。
	②層	暗緑灰色砂質土。しまりあり、粘性なし。下部にいくにつれマンガンを多量に含む。粘土を少量含む。
	③層	緑黒色粘質土。下部に多量の植物を含み、石も多量に含んでいる。
	④層	青黒色粘土。木片が見られる。
	⑤層	注記なし。
SD1001	①層	青灰色粘質土。弱い粘性あり。黄褐色粘質土がブロック状に入る。
SD1002	①層	黄灰色砂。粒子が細かい。灰白色砂が帯状に入る。
	②層	暗灰色粘質土。弱い粘性あり。
SD1004	①層	暗褐色粘質土。全体的に多量の暗灰色粘質土を含み、焼土、炭化物も微量に含む。
	②層	暗褐色粘質土。マンガン、鉄分の沈殿物を含んだにぶい橙の粘質土をブロック状で多量に含む。
SD1006	①層	褐灰色砂質土。しまりあり、粘性なし。上部の方が強いしまりがある。マンガン粒子が全体的にみられるが、やや上部に多く、細粒の砂を含む。粒子状のカーボンがまばらにみられる。
SD1007	①層	褐灰色砂質土。しまりあり、粘性なし。下部の方が粘性がある。マンガン粒子を全体的に含む。
SD1008	①層	暗灰黄色粘土に白い粒を多量に含む砂が混在する層。ほぼ砂の層。しまりあり、弱い粘性あり。
	②層	暗灰黄色粘土に、砂を多量に含む層。ほとんどがシルトに近い。箇所により砂と粘土の多少はあるが層状に堆積しているのではなく、砂と粘土が混在している。層下部に10cm程度の石を比較的多量に含む。層全体に鉄分かマンガンの沈着がみられる。しまりあり、弱い粘性あり。
	③層	黄灰色、シルト層。他層と比べ、黒褐色と表現出来るほど、黒味が強い。しまりあり、粘性あり。
	④層	黄褐色、砂質土層。箇所によって堆積に厚薄があり、ベルト周辺は特に厚く堆積。しまりあり、弱い粘性あり。
	⑤層	黄灰色粘土層。1～3cm程度の石が混入。しまりあり、強い粘性あり。
SD1009	①層	暗灰黄色砂質土。2,3mm～1cm程度の炭が混入。稀に1～10cmの地山の黄褐色砂質土ブロックを含む。しまりあり、粘性あり。
	②層	暗灰黄色砂質土に1～5cmの地山の黄褐色砂質土ブロックを多く含む(大体5:5)。しまりあり、粘性あり。

表37　上小田宮の前10区検出遺構土層注記表 (1)

遺構番号	層位	特　徴
SD1010	①層	粘質土。暗赤褐色の鉄分の沈殿物を多量に含み、粗砂が層状に入る。強いしまりあり。
	②層	粘質土。暗赤褐色の鉄分の沈殿物を多量に含み、全体に細砂が層状で入る。
	③層	砂質土。暗赤褐色の鉄分の沈殿物を多量に含み、強いしまりあり。
	④層	粘質土。暗赤褐色の鉄分の沈殿物を多量に含み、細砂がブロック状で入る。炭化物も微量に入る。
	⑤層	粘質土浅黄橙から橙・赤褐へと鉄分の沈殿物によると思われる色の細砂と褐灰色の粘質土がブロック状に入る。しまりあり。
	⑥層	粘質土に多量の細砂と、多量の暗赤褐色の沈殿物が入る。
	⑦層	粘質土に多量の細砂と、多量の黄褐色の沈殿物を含む。
	⑧層	砂質土と粘土が層状に重なり、植物遺体と遺物石を多量に含む。
	⑨層	粘質土に粗砂を多量に含み、暗赤褐色の鉄分とみられる多量の沈殿物が入る。
	⑩層	⑨層に似ているが、沈殿物はわずかである。
	⑪層	粘質土。粗砂を多量に含み、強いしまりあり。
	⑫層	粘土。細砂が層状に入り、多量の植物遺体を含む。
SD1011	①層	褐灰色粘質土を含む。やわらかい。
	②層	褐灰色粘質で、ブロック状の褐色の砂質土と浅黄橙の粘土を含む。
	③層	褐灰色砂質土にマンガン、鉄分等が沈殿した層か。微量に焼土を含む。
	④層	褐灰色砂質土に褐色のブロック状砂質土を多量に含む。硬い。
	⑤層	褐灰色粘質土。多量に鉄分、マンガン等の沈殿物を含む。
SD1012	①層	黄灰色。粘土。ややしまりあり、強い粘性あり。0.5～1cmの小礫と約10cmの石を多く含む。石は流路に沿って底部に敷き詰められたように検出された。
SK1006	①層	褐灰色。粘質土と砂との水性堆積。
SK1009	①層	オリーブ黒粘土。細砂を層状に含む。
	②層	オリーブ黒粘土。細砂を多量に含む。
SK1010	①層	灰褐色砂質土。炭化物と1～3cm大の焼土塊を多く含み、褐色砂質土（地山）をブロック状に含む。
SK1022	①層	褐灰粘土。弱い粘性のあるにぶい黄褐色の土と混在。強いしまりあり。高師小僧を多数含む。
	②層	灰色粘土。マンガン、鉄分の沈着した砂を層を成さず含む。
	③層	黄灰。砂を多量に含む粘土。
	④層	灰黄褐色。弱い粘性のある土と強い粘性のある直径1cm程度の土が混在する。弱いしまりあり。

表38　上小田宮の前10区検出遺構土層注記表　(2)

第Ⅳ章　自然科学分析

上小田宮の前遺跡出土木製品の樹種調査結果

（株）吉田生物研究所

1．試　　料

試料は熊本県上小田宮の前遺跡から出土した工具1点、農具4点、武器1点、服飾具5点、籠編物1点、容器5点、祭祀具2点、部材2点、土木材1点、用途不明品10点の合計32点である。

2．観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3．結　　果

樹種同定結果（針葉樹5種、広葉樹15種）の表を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1）イチイ科カヤ属カヤ（*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.）［№21］

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。晩材部は狭く年輪界は比較的不明瞭である。軸方向柔細胞を欠く。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～4個ある。仮道管の壁には対になった螺旋肥厚が存在する。板目では放射組織はすべて単列であった。カヤは本州（中・南部）、四国、九州に分布する。

2）イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ（*Cephalotaxus harringtonia* K. Koch f. *drupacea* Kitamura）［№1,19］

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は漸進的で、晩材の幅は非常に狭く、年輪界がやや不明瞭で均質な材である。樹脂細胞はほぼ平等に散在し数も多い。柾目では放射組織の分野壁孔はトウヒ型で1分野に1～2個ある。仮道管内部には螺旋肥厚が見られる。短冊形をした樹脂細胞が早材部、晩材部の別なく軸方向に連続（ストランド）して存在する。板目では放射組織はほぼ単列であった。イヌガヤは本州（岩手以南）、四国、九州に分布する。

3）マツ科マツ属[二葉松類]（*Pinus* sp.）［№25,31］

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。大型の垂直樹脂道が細胞間隙としてみられる。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は窓型である。上下両端の放射仮道管内は内腔に向かって鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で1～15細胞高のものと、水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。マツ属[二葉松類]はクロマツ、アカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

4）ヒノキ科アスナロ属（*Thujopsis* sp.）［№27,30,32］

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2～4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ

（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

5）スギ科スギ属スギ(*Cryptomeria japonica* D.Don) [No.28]

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1～3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

6）ブナ科コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* sp.） [No.15,16,23]

放射孔材である。木口では年輪に関係なくまちまちな大きさの道管（～200 μm）が放射方向に配列する。軸方向柔細胞は接線方向に1～3細胞幅の独立帯状柔細胞をつくっている。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と多数の壁孔を有する。放射組織はおおむね平伏細胞からなり、時々上下縁辺に方形細胞が見られる。道管放射組織間壁孔は大型で柵状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と放射柔細胞の塊の間に道管以外の軸方向要素が挟まれている集合型と複合型の中間となる型の広放射組織が見られる。アカガシ亜属はイチイガシ、アカガシ、シラカシ等があり、本州（宮城、新潟以南）、四国、九州、琉球に分布する。

7）ブナ科クリ属クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.） [No.3,13]

環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大道管（～500 μm）が年輪にそって幅のかなり広い孔圏部を形成している。孔圏外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは2～3個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道（西南部）、本州、四国、九州に分布する。

8）ブナ科シイ属（*Castanopsis* sp.） [No.14]

環孔性放射孔材である。木口では孔圏部の道管（～300 μm）は単独でかつ大きいが接線方向には連続していない。孔圏外に移るにしたがって大きさを減じ、放射方向に火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型で柵状の壁孔がある。板目では多数の単列放射組織が見られる。シイ属にはツブラジイとスダジイがあるが、ツブラジイに見られる集合～複合放射組織の出現頻度が低い為区別は難しい。シイ属は本州（福島、佐渡以南）、四国、九州、琉球に分布する。

9）クワ科クワ属（*Morus* sp.） [No.10,17]

環孔材である。木口では大道管（～280 μm）が年輪界にそって1～5列並んで孔圏部を形成している。孔圏外では小道管が2～6個、斜線状ないし接線状、集合状に不規則に複合して散在している。柾目では道管は単穿孔と対列壁孔を有する。小道管には螺旋肥厚もある。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管内には充填物（チロース）が見られる。板目では放射組織は1～6細胞列、高さ～1.1mmからなる。単列放射組織はあまり見られない。クワ属はヤマグワ、ケグワ、マグワなどがあ

り、北海道、本州、四国、九州に分布する。

10）カツラ科カツラ属カツラ（*Cercidiphyllum japonica* Sieb. et Zucc.）［№32椀］

散孔材である。木口ではやや小さい薄壁で角張っている道管（～100 μm）がおおむね単独または2～3個不規則に接合して平等に分布する。道管の占有面積は大きい。放射柔組織は不顕著。柾目では道管は階段穿孔と側壁に階段壁孔を有する。放射組織は平伏、方形と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は対列状ないし階段状の壁孔がある。道管内腔には充填物（チロース）がある。板目では放射組織は方形ないし直立細胞からなる単列のものと、方形ないし直立細胞の単列部と平伏細胞の2列部からなるものがある。高さ～900 μmからなる。カツラは北海道、本州、四国、九州に分布する。

11）クスノキ科クスノキ属クスノキ（*Cinnamomum camphora* Presl）［№12,22,29］

散孔材である。木口では中庸の道管（～200 μm）が単独または2ないし数個が放射方向あるいは斜方向に連続して年輪内に平等に分布する。軸方向柔細胞は道管の周囲を厚く鞘状に取り囲んでおり、その中に一見小さな道管と見間違えるほどの油細胞（樟脳油貯蔵細胞）がある。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔はレンズ状の大型壁孔が階段状に並んでいる。板目では放射組織は1～3細胞列、高さ～800 μmからなる。放射組織の直立細胞や軸方向柔細胞が油細胞に変化したものが多く見られる。クスノキは本州(関東以西)、四国、九州に分布する。

12）クスノキ科クスノキ属ヤブニッケイ（*Cinnamomum japonicum* Sieb.）［№26］

散孔材である．木口では中庸の道管（～100 μm）が単独または2ないし数個が放射方向あるいは斜方向に連続して年輪内に平等に分布する。軸方向柔細胞は道管の周囲を厚く鞘状に囲んでいる。道管の壁がやや厚い。柾目では道管は単穿孔とまれに階段穿孔、側壁に交互壁孔とかすかな螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は円形、レンズ状、篩上の壁孔が並んでいる。板目では放射組織は1～3細胞列、高さ～750 μmからなる。放射組織の直立細胞や軸方向柔細胞が油細胞（樟脳油貯蔵細胞）となるがあまり顕著でない。ヤブニッケイは本州（宮城、富山以西南)、四国、九州、琉球に分布する。

13）マンサク科イスノキ属イスノキ（*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.）［№6］

散孔材である。木口ではやや小さい道管（～50 μm）がおおむね単独で、大きさ数とも年輪全体を通じて変化なく平等に分布する。軸方向柔細胞は黒く接線方向に並び、ほぼ一定の間隔で規則的に配列している。放射組織は1～2列のものが多数走っているのが見られる。柾目では道管は階段穿孔と内部に充填物（チロース）がある。軸方向には黒いすじの柔細胞ストランドが多数走っており、一部は提灯状の細胞になっている。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。板目では放射組織は1～2細胞列、高さ～1mmで多数分布している。イスノキは本州（関東以西)、四国、九州、琉球に分布する。

14）バラ科サクラ属（*Prunus* sp.）［№8,11］

散孔材である。木口ではやや小さい道管（～100 μm）がほぼ一定の大きさで、単独あるいは放射方向ないし斜方向に連なり分布している。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔及び螺旋肥厚を有する。道管内には着色物質が見られる。放射組織は同性ないし異性で中央部の平伏細胞と上下縁辺の方形細胞

からなる。板目では放射組織は1～4細胞列、高さ～1mmからなる。サクラ属はサクラ、ヤマナシなどがあり、本州、四国、九州、琉球に分布する。

15) センダン科センダン属センダン（*Melia azedarach* L. var. *subtripinnata* Miquel）[No.18]

環孔材である。木口ではきわめて大きい道管（～350 μ m）が幅の広い孔圏部を形成している。孔圏外小道管は多数が団塊状に複合して散在している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔及び螺旋肥厚を有する。道管内には充填物（チロース）が見られる。放射組織は直立と平伏細胞からなり異性である。板目では放射組織は1～6細胞列、高さ～400 μ mからなる。センダンは四国、九州に分布する。

16) ツバキ科ツバキ属（*Camellia* sp.）[No.2,4,5]

散孔材である。木口では極めて小さい道管（～40 μ m）が、単独ないし2～3個接合して均等に分布する。放射組織は1～3細胞列で黒い筋としてみられる。木繊維の壁はきわめて厚い。柾目では道管は階段穿孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔（とくに直立細胞）は大型のレンズ状の壁孔が階段状に並んでいる。放射柔細胞の直立細胞と軸方向柔細胞にはダルマ状にふくれているものがある。板目では放射組織は1～4細胞列、高さ～1mm以下からなり、平伏細胞の多列部の上下または間に直立細胞の単列部がくる構造をしている。木繊維の壁には有縁壁孔が一列に多数並んでいるのが全体で見られる。ツバキ属はツバキ、サザンカ、チャがあり、本州、四国、九州に分布する。

17) ツバキ科サカキ属サカキ(*Cleyera japonica* Thunb. pro parte emend. S. et Z.) [No.24]

散孔材である。木口では極めて小さい道管（～50 μ m）が単独ないし2～4個複合して平等に分布する。柾目では道管は階段穿孔と側壁に対列ないし階段壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏、方形、直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は対列状ないし階段状壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、高さ～1.5mmからなる。木繊維の壁には有縁壁孔が一列に多数並んでいるのが見られる。サカキは本州(茨城、石川以西南)、四国、九州に分布する。

18) ハイノキ科ハイノキ属（*Symplocos myrtavea* Sib. et Zucc.）[No.7]

散孔材である。木口ではきわめて小さい道管（～60 μ m）が平等に分布する。虫害によりできた傷害組織（ピスフレック）が見られる。柾目では、道管は階段穿孔と側壁に螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は対列状ないし階段状壁孔がある。板目では放射組織は1～2細胞列、高さ～600 μ mからなる。単列部と多列部との幅はほぼ同じですっきりとした形をしている。ハイノキ属はハイノキ、クロバイがあり、本州(千葉以西)、四国、九州、琉球に分布する。

19) ムラサキ科チシャノキ属（*Ehretia* sp.）[No.20]

環孔材である。木口ではやや大きい道管（～270 μ m）が数列で孔圏部を形成している。孔圏外は波状、集団状に複合して分布している。軸方向柔細胞は周囲状、接線状である。柾目では道管は単穿孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔は多数の小壁孔である。板目では放射組織は1～7細胞列、高さ～1mmからなる。チシャノキ属はチシャノキ、マルバチシャノキがあり、本州(千葉以西)、四国、九州に分布する。

20）マタタビ科マタタビ属（*Actinidia* sp.）［№9］

環孔材である。木口では道管（～250 μm）が殆ど単独で徐々に小さくなっているのが見られる。柾目では道管は単穿孔と側壁に階段及び対列壁孔を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔はふるい状となる。板目では放射組織は1～4細胞列、高さ～2mm以下である。マタタビ属はマタタビ、サルナシがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

島地 謙·伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）

島地 謙·伊東隆夫「図説木材組織」地球社（1982）

伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所（1999）

北村四郎·村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ·Ⅱ」保育社（1979）

深澤和三「樹体の解剖」海青社（1997）

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

◆使用顕微鏡◆

Nikon

MICROFLEX UFX-DX Type 115

熊本県上小田宮の前遺跡出土木製品同定表

試料№	登録番号	品名	樹種	図版№	報番
1	KOMⅠ-KW001	弓	イヌガヤ科 イヌガヤ属 イヌガヤ	32	19
2	KOMⅠ-KW002	不明	ツバキ科 ツバキ属		
3	KOMⅠ-KW003	不明(住居の柱)	ブナ科 クリ属 クリ		
4	KOMⅤ-KW015	杭	ツバキ科 ツバキ属		
5	KOMⅦ-KW038	木錘	ツバキ科 ツバキ属	82	1
6	KOMⅦ-KW048	櫛	マンサク科 イスノキ属 イスノキ	82	2
7	KOMⅤ-KW049	櫛	ハイノキ科 ハイノキ属	61	9
8	KOMⅤ-KW052	盤（把手付き）	バラ科 サクラ属	61	11
9	KOMⅡ-KW053	支脚	マタタビ科 マタタビ属		
10	KOMⅡ-KW054	あみかご	クワ科 クワ属		
11	KOMⅨ-KW055	田舟	バラ科 サクラ属	118	389
12	KOMⅨ-KW056	盤（片把手付き）	クスノキ科 クスノキ属 クスノキ	119	391
13	KOMⅨ-KW057	盤？	ブナ科 クリ属 クリ	118	388
14	KOMⅨ-KW058	盤？	ブナ科 シイ属		
15	KOMⅨ-KW059	鍬	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	117	385
16	KOMⅨ-KW068	鍬(その他3点)	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	117	381·382·383
17	KOMⅨ-KW069	不明	クワ科 クワ属	119	393
18	KOMⅨ-KW070	部材	センダン科 センダン属 センダン	118	387
19	KOMⅨ-KW072	農具？	イヌガヤ科 イヌガヤ属 イヌガヤ		
20	KOMⅨ-KW073	つき棒	ムラサキ科 チシャノキ属		
21	KOMⅨ-KW074	脚台付き盤	イチイ科 カヤ属 カヤ	119	392
22	KOMⅨ-KW075	作業台	クスノキ科 クスノキ属 クスノキ	117	386
23	KOMⅨ-KW101	不明（杓子）	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	119	390
24	KOMⅨ-KW110	斧（柄）	ツバキ科 サカキ属 サカキ	117	384
25	KOMⅩ-KW122	小型舟形	マツ科 マツ属〔二葉松類〕	131	17
26	KOMⅩ-KW137	舟形	クスノキ科 クスノキ属 ヤブニッケイ	131	18
27	KOMⅩ-KW138	下駄	ヒノキ科 アスナロ属		
28	KOMⅩ-KW139	下駄	スギ科 スギ属 スギ	131	19
29	KOMⅨ-KW143	くり物	クスノキ科 クスノキ属 クスノキ		
30	KOMⅨ-KW154	くり物(蓋)	ヒノキ科 アスナロ属		
31	KOMⅨ-KW157	下駄	マツ科 マツ属〔二葉松類〕		
32	KOMⅨ-KW174	漆器椀（その他1点） 〃　板	カツラ科 カツラ属 カツラ ヒノキ科 アスナロ属		

第V章　総　括

第1節　上小田宮の前・養寺遺跡における発掘調査成果

1．発掘調査の成果

県道瀬川玉東線緊急地方道路整備事業に伴う上小田宮の前・養寺遺跡における調査成果は、第Ⅲ章で示されたように多岐に渡る。当遺跡では縄文時代後期の生活の営みから現代に続く人々の活動の痕跡が確認され、平野部での土地利用法が各時代において変化していくさまが推測された。特に、河川段丘上で検出された古代の道路状遺構とそれに伴うと考えられる建物群、菊池川沿いで検出された自然流路から出土した古墳時代の石製模造品及び土製品等の祭祀遺物から、当時の場の利用法が明らかになったことは大きな成果といえよう。

ここでは、本調査の総括として各時代の様相について一定の見解を示し、調査者としての責任を果たしたい。

2．当遺跡の古地形

上小田宮の前・養寺遺跡の立地する玉名平野は、菊池川を中心に和仁、内田、江田、木葉、繁根木などの支流が流れ、平野の形成および諸地形に大きな役割を果たしている。現在では河川改修が進み、大規模な氾濫はなくなってきているものの、近年でも豪雨・台風などにより平野全体が冠水するなど大きな影響を受けることがある。圃場整備も進み、用水路が固定されているが、近世以前は水路や河川流路に幾度かの変化があったと考えられている。上小田宮の前・養寺遺跡の周辺にも、字名が水町と呼ばれる地域が存在し、確認調査でも河川氾濫に起因するとみられる砂層の堆積や低湿地の堆積土である黒色粘質土も確認されている。遺構の配置から、遺跡の東側の山際に微高地があり、生活域が集中し、西側には自然流路が流れ、低湿地を形成していたと考えられる。

3．当遺跡の時代考証

(1) 縄文時代

縄文時代の遺物は、上小田宮の前1区・6区・8区・9区の自然流路より縄文時代後期の北久根山式土器から晩期の古閑式土器が出土している。しかし、大半は晩期の天城式土器から古閑式土器の粗製土器である。特に1区・6区の流路から出土した土器は完形のものが多く含まれており、器面には炭化物の付着も見られる。

流路であることを考慮すれば、遺物は原位置を留めているとは考えにくいが、完形の土器が多く含まれていることや多くの土器面に炭化物の付着が見られることから、近くに当時の生活域があったことが推測できよう。また、土器が集中して出土した地点は調査区内の流路に限られており、縄文時代の古地形を復元するうえで重要である。

石器については、主に磨石・敲石などの調理具、打製石斧の土掘具、伐採具の磨製石斧等が土器と同様に流路を中心に出土し、当時の生活の一端を窺い知ることのできる遺物である。

(2) 弥生時代

弥生時代の遺物は量的に非常に少なく、遺構は上小田宮の前1区における土坑(SK108)のみである。出土遺物は、SK108から丹塗りの高杯形の杯部が隣接する流路からは甕形土器片が出土しており、いずれもローリングを受けてないことから、近くに集落があったことが考えられるが、詳細は不明である。

(3) 古墳時代

古墳時代の遺構は、山際に位置する小田2区・上小田宮の前1・3区で竪穴住居跡が11棟検出された。調査開始時には既に削平を受けていることを考慮すると、当時ある一定の期間内に少なくとも11棟以上の竪穴住居を建て、集落を形成していたことが想定される。また、集落から西側に位置する上小田宮の前8・9区の流路からは当時の祭祀遺物が検出された。東側丘陵部には徳丸古墳群の分布が見られるなど、興味深い事例も確認されている。これらを含め古墳時代のまとめを行いたい。

今回の調査では、11棟の竪穴住居跡が比較的に集中した状態で検出された。玉名平野東側で広がりが確認されたのは当遺跡のみであり、玉名平野における当該時期の集落の動向を考える上で重要なことと言える。現時点では周辺に同時期の集落は確認されておらず、菊池川の対岸にある柳町遺跡が同時期の集落として挙げられる。

住居跡は後世の削平によってかなり保存状態が悪く、確認面から床面までの深さが3～10cm程度で、そこから得られる情報は非常に制限される。つまり、遺構内から時期比定ができる遺物が出土していないため、年代がはっきりしないということである。ただ、住居跡の周辺から出土した土器を敢えて当てはめるなら、断片的な資料しかないため確実性に欠けるものの、古墳時代前期から中期に比定することができる。また、地形的に見ると、本集落の東北にある「かむろ山」の裾野に集落は位置する。周辺の調査区から当該時期の遺構・遺物は検出されていない。このような状況のなかで集落は調査区の東側にある丘陵に向かって広がる可能性がある。

上小田宮の前8・9区で検出された流路からは、古墳時代の祭祀用の遺物が検出された。祭祀遺物は流路の岸部に想定できる3箇所から重なり合った状態で出土した。出土地点が流路であることを配慮すれば、原位置を留めているとは考えにくいが、出土遺物の構成をみることによって古墳時代の祭祀の様相を想定できる。

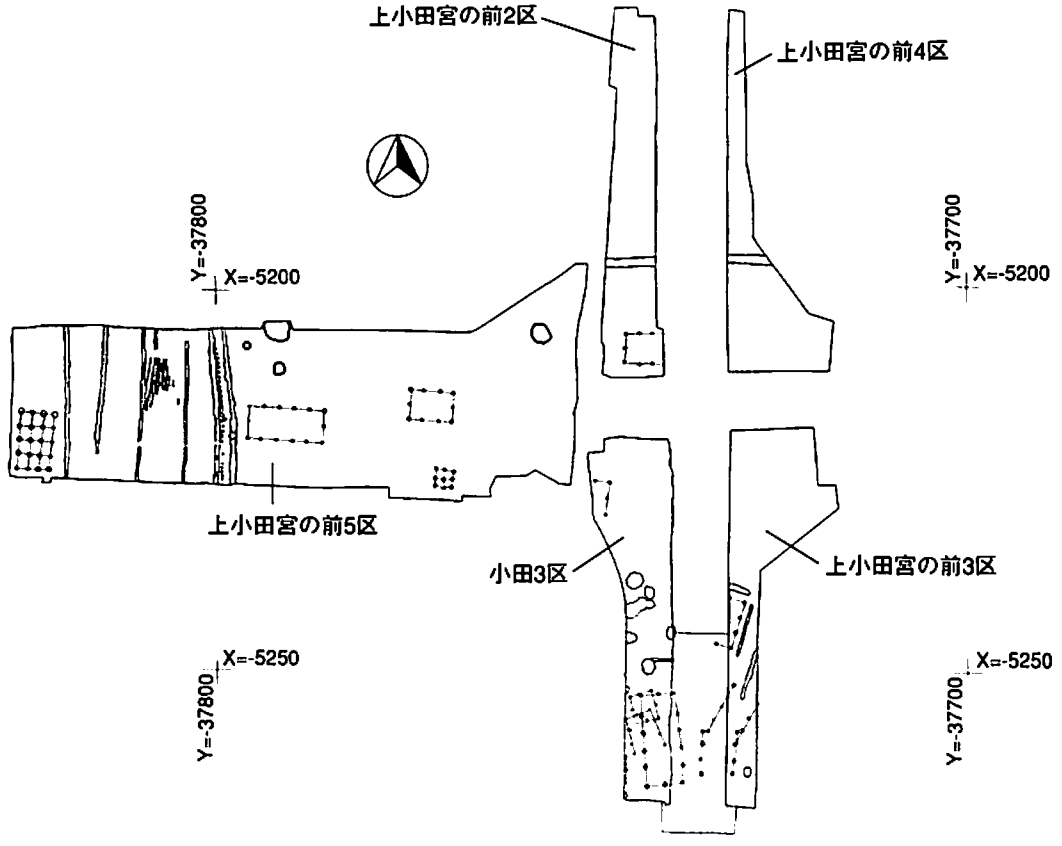
祭祀遺物の構成は、下記の祭祀遺物構成表からなる。土器類は土師器の甕・杯・高杯・小型丸底壺がある。手捏土器は杯・壺・高杯がある。遺物の器高は5cm未満のものが主であるが、7～8cmほどのやや大型のものもある。土製品は土製丸玉・土製勾玉・土製模造鏡・土製支脚がある。土製品は全て粗製品で、磨きの仕上げ工程は見受けられない。石製模造品は滑石製の有孔円板・剣形・臼玉・管玉がある。有孔円板は、双孔と単孔に分類できる。玉類はガラス小玉がある。その他は羽口・坩堝・スラグ・紡錘車がある。特にスラグは、つつじヶ丘横穴群の出土事例からみて、祭祀遺物の一つとして考えられる。

石製模造品の九州での出土量は本州に比べて極端に少なく、出土古墳・遺跡の9割が筑後川以北の福岡県・大分県に集中する。その内容も玉類がほとんどで、それに少量の有孔円板が伴うことが一般的であるという。熊本県下でも有孔円板については玉名市柳町遺跡、植木町石川遺跡、菊池市平町遺跡などの集落遺跡などからの出土が知られているが、剣形については当遺跡の対岸にあたる菊池川右岸の玉名市両迫間日渡遺跡出土例のみである。九州全体でも沖ノ島をはじめとして20遺跡ほどである。

当遺跡では有孔円板・剣形で明らかに未製品とみられるものがあるが、製作過程において生じる剥片類は認められなかった。両迫間日渡遺跡でも未製品とみられる剣形が存在しており、両遺跡の石製模造品は石材が共通していることから、今後製作跡が発見される可能性も十分にあろう。

土師器	手捏土器	土製品	石製模造品	玉類	その他
甕・杯・高杯・小型丸底壺	杯・壺・高杯	土製丸玉・土製勾玉・土製模造鏡・土製支脚	有孔円板・剣形・臼玉・管玉	ガラス小玉	羽口・坩堝・スラグ紡錘車

当遺跡祭祀遺物構成表



第137図　小田3区・上小田宮の前2～5区の時代考証について

(4) 古代

古代の遺物は土師器・須恵器・木器等が多量に出土した。特にその中心となるのが、7世紀後半から9世紀代のものである。器種としては椀・杯・高杯・甕・壺・甑など多岐に渡って出土しているが、特に漆や赤色顔料を施した高杯や杯の出土は祭祀遺物の可能性を示すものと考えられる。

遺構は、小田3区・上小田宮の前2～5区を中心に掘立柱建物跡・柵列跡・井戸跡・溝跡・道路状遺構・土坑などを検出した。遺構の切り合い関係、出土遺物の状況からみて2時期の遺構に分けられるのではないかと考えられる。

7世紀後半から8世紀代の遺構としては道路状遺構が挙げられる。道路状遺構は幅5.5mで両端に側溝を持ち、路面には轍が残り、当時の人々の生活の営みが垣間見える。道路状遺構は北から南に向かって伸びているが、当遺跡の北側には「延喜式」にみられる肥後国内の官道の駅家として「江田駅」の推定地が存在することから考えれば、そこから分岐し延びてきた道と想定できる。なお、当遺跡の南西方向には柳町遺跡や玉名郡家がある。

道路状遺構を挟んで東側には東西方向の側柱建物が3棟、南北方向の側柱建物が2棟、コの字形を描くように配置されている。また、2間×2間の総柱建物(SB503)が検出されたが用途については不明である。道路状遺構を挟んで西側には南北方向の4間×3間の総柱建物(SB504)を検出し、これを倉庫と考える。また、検出された建物群には建て替えた痕跡がなく、短期間の使用の後、廃棄されたことが想像できる。

同年代の井戸跡2基(SE506・517)は南北に並んだ状態で検出されたが、それぞれの井戸跡の廃棄方法は全く違った様相を示す。SE506では第Ⅲ章で述べたとおり、井戸の廃棄時の祭りに使ったと思われる遺物が多量に出土しているのに対して、SE517は土師器の土器片が数点出土したのみである。この違いが何らかの意味が持つのか今後の課題である。

溝跡(SD201・401)は、ほぼ東西方向に向かって伸びており、溝跡より北側には古代の遺構は確認することができなかった。このことから溝跡(SD201・401)は古代の区画を示すものと考える。

これらの遺構の配置状況をみると、集落とは異なり官衙的な建物配置の様相を表しているが、遺跡の一部分の調査にすぎず、全体像を捉えるところまで至っていない。

9世紀代の遺構としては、掘立柱建物跡(SB301)・井戸跡(SE515・516)のみの検出に止まり、7世紀後半から8世紀代にかけての建物配置の様相とかなり異なったものとなり、閑散となった。

(5) 中世

中世の遺物は、養寺遺跡・上小田宮の前10区から14世紀～16世紀に及ぶ各時期の中国製青磁・白磁、摺鉢、火鉢等が出土したが、その数は少なく、また状態も悪いため、図示し得たものはわずかである。

遺構は、養寺遺跡で掘立柱建物跡・柵列跡・土坑を検出した。多くの建物が東西方向の側柱建物で、建て替えを繰り返していたことが想像できるが、出土遺物が少なく時期を特定するまでには至らなかった。隣接地に「屋敷」、「養寺」等の字名が残り、屋敷跡や寺院等があった可能性が高い。

上小田宮の前10区は、菊池川沿いに位置し、当初から川に何らかの関係がある遺構が検出できる想定の上で調査を進めた結果、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、土坑を検出した。建物群はほぼ南北方向の側柱建物で建て替えを繰り返していた。井戸跡も7基と多く、かなり規模が大きな集落であることが想像できる。隣接地に「古屋敷」等の字名が残り、屋敷跡の一角の可能性がある。

4. おわりに

本書では、県道瀬川玉東線緊急地方道路整備事業に伴う上小田宮の前・養寺遺跡の調査成果について報告した。今回の調査では、3年5ヶ月におよぶ長期の調査期間で、玉名平野における先史時代の様相を明らかにする様々な成果があった。縄文時代後期以降、現代に至るまで連綿と人々の生活が営まれていたことが判明したことは大きな意義がある。現在の菊池川下流域に広がる平野の大部分は、近世以降の干拓や河川改修により耕作地として利用が可能となった部分である。中世以前に広く水田として利用可能だった場所は当遺跡が立地する菊池川左岸の梅林・小田牟田であり、それらの平野部には「玉名平野条里跡」をはじめ、多くの遺跡が存在する。近年、玉名平野において発掘調査が行われたいずれの調査でも注目すべき発見が相次いでいる。玉名平野では国道・県道の整備が進み、新幹線の駅舎も建設され、県北の拠点として今後の開発が加速的に進んでいくものと推測できる。

本書の成果が今後の調査の礎の一端にでもなれば幸いと思います。

引用・参考文献

1. 熊本県教育委員会　1979　『生産遺跡基本調査報告書Ⅰ』熊本県文化財調査報告第38集
2. 奈良国立文化財研究所　1985　「木器集成図録　近畿古代編」奈良国立文化財研究所史料第27冊
3. 奈良国立文化財研究所　1993　「木器集成図録　近畿原始編」奈良国立文化財研究所史料第36冊
4. 東日本埋蔵文化財研究会　1993　「古墳時代の祭祀　第Ⅲ分冊・西日本編・」第2回東日本埋蔵文化財研究会
5. 熊本県教育委員会　1999　『石の本遺跡群Ⅰ』熊本県文化財調査報告第177集
6. 熊本県教育委員会　2000　「祇園遺跡」熊本県文化財調査報告第188集
7. 熊本県教育委員会　2001　『柳町遺跡Ⅰ　第1分冊本文編』熊本県文化財調査報告第200集
8. 熊本県教育委員会　2004　『柳町遺跡Ⅱ』熊本県文化財調査報告第218集
9. 熊本県教育委員会　2006　「大江遺跡群Ⅱ」熊本県文化財調査報告第231集
10. 玉名市教育委員会　2009　「両迫間日渡遺跡」玉名市文化財調査報告第19集
11. 玉名市史編集委員会　1987　「高瀬湊関係歴史調査報告書（一）」玉名市歴史資料集成第一集
12. 玉名市史編集委員会　1988　「高瀬湊関係歴史調査報告書（二）」玉名市歴史資料集成第三集
13. 玉名市史編集委員会　1988　「高瀬湊関係歴史調査報告書（三）」玉名市歴史資料集成第五集
14. 玉名市史編集委員会　1992　「玉名市史　資料編1　絵図・地図」玉名市
15. 玉名市史編集委員会　1994　『玉名郡衙』玉名市歴史資料集成第12集
16. 新熊本市史編纂委員会　1996　「新熊本市史　資料編　第1巻　考古資料」
17. 熊本県教育委員会　1994　『ワクド石遺跡」熊本県文化財調査報告第144集
18. 熊本県教育委員会　1996　「陣山遺跡」熊本県文化財調査報告第155集
19. 日本中世土器研究会　1994　「中近世土器の基礎研究X」「熊本県における中世前期の土師器について」
20. 熊本県教育委員会　2001　「灰塚遺跡(Ⅱ)」熊本県文化財調査報告第197集
21. 熊本県教育委員会　2004　「東鶴遺跡」熊本県文化財調査報告第222集

法量（ ）は復元値

図版No.	個番	器種	出土地点					法量(cm)			色調		調整		胎土	焼成	残存部位	備考
			地区	グリッド	遺構	層位	取り上げ	口径	底径	器高	(内面)	(外面)	(内面)	(外面)				
29	1	鉢 (弥生土器)	1区		SK108	上層	No.13	(14.0)	—	7.7～	橙 5YR 6/8	橙 5YR 6/6	ハケ目、指頭圧痕、ハケ後丁寧なナデ	横ナデ、多方向のハケ目	石英・角閃石・長石	良好	口縁部～底部	
29	2	高杯 (弥生土器)	1区		SK108	上層	No.5,11,12,14,15	25.0	—	8.8～	暗赤褐 2.5YR 3/6	暗赤褐 2.5YR 3/6	ハケ目	横ナデ	石英・角閃石・長石・黒褐色粒	良	杯部	摩滅、全体に丹塗り
30	5	鉢 (縄文土器)	1区			10層		—	—	8.4～	褐灰 10YR 5/1	灰黄褐 10YR 6/2	横ナデ、斜め方向のミガキ	ナデ、貝殻条痕	角閃石・長石・石英・砂粒	良好	口縁部	波状口縁　全体に黒変
30	6	深鉢 (縄文土器)	1区		流路	包9層		—	—	7.9～	褐灰 10YR 6/1	灰黄褐 10YR 6/2	横ナデ、斜め方向のミガキ	斜め方向のケズリ	角閃石・石英・長石・輝石	良	口縁部	工具は不明、内面は摩滅
30	7	浅鉢 (縄文土器)	1区		流路	9f層		—	—	3.9～	灰黄褐 10YR 4/2 黒 10YR 2/1	灰黄褐 10YR 4/2 黒 10YR 2/1	横ナデ、斜め方向のミガキ	横方向のミガキ、沈線、縦・横方向のミガキ	角閃石・金雲母・石英	良	口縁部～胴部	
30	8	深鉢 (縄文土器)	1区		流路	包9e層		—	—	7.0～	にぶい黄橙 10YR 7/2 灰黄褐 10YR 5/2	灰白 10YR 8/2 灰黄褐 10YR 5/2	横ナデ、斜め方向のミガキ	横・斜め・縦方向のミガキ、沈線	金雲母・黒色粒・角閃石・乳白色粒	良	口縁部	
30	9	深鉢 (縄文土器)	1区				P6	—	—	7.1～	褐灰 10YR 4/1	灰黄褐 10YR 5/2	横ナデ、斜め方向のミガキ	横ナデ、斜め方面のミガキ	石英・金雲母・長石・黒色粒	良	口縁部	波状口縁
31	13	深鉢 (縄文土器)	1区		流路	包9層 9層	P18	(21.0)	—	14.1～	灰褐 7.5YR 5/2	灰黄褐 10YR 5/2	横ナデ、斜め方向のミガキ	横方向のミガキ、沈線、多方向へのミガキ	角閃石・石英・長石	良	口縁部～胴部	内面にヘラ状工具痕
31	14	深鉢 (縄文土器)	1区		流路		P6,19	(31.2)	—	15.4～	黒褐 2.5YR 3/2	にぶい褐 7.5YR 5/3	横ナデ、横ナデ後工具による横方向のミガキ	横ナデ、横方向の沈線	石英・角閃石・金雲母	良好	口縁部～胴部	スス付着
31	15	深鉢 (縄文土器)	1区		流路		P17,18,19	(39.1)	—	29.0～	にぶい黄橙 10YR 6/4	にぶい黄橙 10YR 6/4	横ナデ、斜め方向のミガキ	多方向への条痕	石英・長石・角閃石・金雲母	良	口縁部～胴部	スス付着、内面に炭化物付着
32	16	深鉢 (縄文土器)	1区	グリッド		7層		—	—	9.9～	橙 5YR 6/7	にぶい褐 7.5YR 5/3	横方向のナデ、条痕後横方向のナデ	沈線文、横方向のナデ、縦・斜め方向のミガキ	石英・角閃石・金雲母・黒色粒・赤褐色粒	良	口縁部	波状口縁
32	17	深鉢 (縄文土器)	1区		流路		No.19 P8	—	10.2	5.4～	にぶい黄橙 10YR 6/4	にぶい橙 7.5YR 6/4	横ナデ、斜め方向のミガキ	ナデ	石英・長石・角閃石・金雲母・赤褐色粒	良	底部	スス付着、内面に炭化物付着
32	20	壺 (弥生土器)	1区	グリッド		7層① 8層		(2.9)	—	47.3～	にぶい黄 2.5YR 6/4	にぶい橙 7.5YR 6/4	多方向のハケ目後ナデ	ナデ、斜め方向のハケ目後ナデ	石英・角閃石・輝石・長石・金雲母・赤褐色粒	良好	口縁部～胴部	摩滅、1/2以上欠損
34	27	浅鉢 (縄文土器)	1区				一括	—	—	4.0～	にぶい黄 2.5YR 6/3	にぶい黄褐 10YR 6/4	横ナデ、斜め方向のミガキ	縦・横方向のミガキ、凹線	乳白色粒・角閃石	良	口縁部～胴部	磨研
34	28	深鉢 (縄文土器)	1区				P6	—	—	—	灰褐 7.5YR 5/2	灰褐 7.5YR 5/2	横ナデ、斜め方向のミガキ	ミガキ、沈線	角閃石・石英・長石	良	口縁部	波状口縁、内面黒変？外面スス付着
40	1	杯 (土師器)	小田3区		SI01	1層		(13.6)	9.7	3.1	にぶい橙 7.5YR 7/3	明褐灰 7.5YR 7/2	回転ナデ	回転ナデ、糸切り？	輝石・長石・角閃石・赤褐色粒	良好	口縁部～底部	赤色顔料
40	2	鉢 (土師器)	小田3区		SI01		No.181～183	(12.0)	4.1	6.1	にぶい黄橙 10YR 6/3	褐灰 10YR 6/1	ナデ、指頭圧痕	粗いナデ、指頭圧痕	石英・長石・角閃石・赤褐色粒	良好	口縁部～底部	
40	3	鉢 (土師器)	小田3区		SI01		No.191	(12.8)	—	5.9	橙 7.5YR 6/6	にぶい橙 7.5YR 6/4	横ナデ、指頭圧痕	ナデ	石英・輝石・角閃石・金雲母・長石	良好	口縁部～底部	外面上位に黒変
40	4	小型丸底壺 (土師器)	小田3区		SI01	1層 ベルト	No.2	(12.6)	—	8.6	にぶい橙 5YR 7/3	にぶい橙 5YR 7/3	ナデ、指頭圧痕	横ナデ	石英・長石・角閃石・赤褐色粒	やや良好	口縁部～底部	外底部の一部に黒変
40	5	鉢 (土師器)	小田3区		SI01		No.67	(13.9)	3.2	8.3	にぶい橙 7.5YR 6/4	にぶい橙 7.5YR 6/4	横ナデ、ミガキ後横ナデ、ナデ	横ナデ、ミガキ後横ナデ、ナデ	輝石・長石・角閃石・雲母・石英・赤褐色粒	良好	口縁部～底部	
40	6	鉢 (土師器)	小田3区		SI01	2層	No.38	(25.2)	—	17.8	橙 7.5YR 6/6	橙 5YR 6/6	ハケ目後ナデ、指頭圧痕	多方向のハケ目後ナデ	輝石・石英・金雲母・長石・角閃石・砂粒	良好	口縁部～底部	外面に黒変

表39　土器観察表（1）

法量（ ）は復元値

図版No.	報番	器種	出土地点					法量(cm)			色調		調整		胎土	焼成	残存部位	備考
			地区	グリッド	遺構	層位	取り上げ	口径	底径	器高	(内面)	(外面)	(内面)	(外面)				
41	7	高杯（土師器）	小田3区		SI01	4層	No.140,143,150,190	(18.3)	(12.1)	12.3	にぶい黄橙 10YR 6/3	橙 2.5YR 6/8	摩滅	摩滅	長石・角閃石・石英・赤褐色粒・輝石	良好	口縁部～底部	残存脚部に3つの穿孔
41	8	壺（土師器）	小田3区		SI01	1層	No.49,68,120,161,171	(11.2)	—	18.3	灰白 10YR 8/2	灰白 10YR 7/1	横ナデ、ナデ、底部手による圧痕?	横ナデ、ハケ目	輝石・長石・角閃石・雲母・赤褐色粒	良好	口縁部～底部	最大胴径15.8cm
41	9	甕（土師器）	小田3区		SI01	1層、ベルト	No.29,70,81,90,100,108	(14.4)	—	11.2～	浅黄橙 10YR 8/3	浅黄橙 10YR 8/3	横ナデ、指頭圧痕、ヘラケズリ、ナデ	横ナデ、ハケ目	長石・輝石・雲母・赤褐色粒	良好	口縁部～胴部	
41	10	甕（土師器）	小田3区		SI01		No.45,83,84,86,100,172	14.6	—	9.5～	浅黄橙 10YR 8/3	浅黄橙 10YR 8/3	横ナデ、斜め方向のナデ	横ナデ、ナデ、横方向のハケ目、斜め方向のハケ目	長石・輝石・石英・金雲母・赤褐色粒	良好	口縁部～胴部	口縁部と体部に一部スス?
41	11	甕（土師器）	小田3区		SI01	1層、ベルト	No.96, 100, 113,162	(17.4)	—	17.0～	にぶい橙 7.5YR 7/3	にぶい橙 7.5YR 7/3	横ナデ、ヘラケズリ	横ナデ、ハケ目	長石・輝石・赤褐色粒	良好	口縁部～胴部	
42	12	杯蓋（須恵器）	小田3区		SI02		No.38	14.45	—	4.3	灰 N6/	灰 N6/	ナデ、横ナデ	横ナデ	長石・輝石	良好	完形	
42	13	杯蓋（須恵器）	小田3区		SI02		No.138	15.6	—	3.5～	青灰 5PB6/1	青灰 5PB6/1	ナデ、横ナデ	ヘラケズリ、横ナデ	長石・輝石	良好	ほぼ完形	つまみ部欠損、歪みが激しい
42	14	杯（土師器）	小田3区		SI02		No.27, 79, 103, 129	17.1	14.8	3.3	にぶい黄橙 10YR 7/2	にぶい黄橙 10YR 7/2	横ナデ、ナデ	横ナデ、ナデ	長石・輝石・角閃石・赤褐色粒	良好	口縁部～底部	
42	15	小型甕（土師器）	小田3区		SI02		No.182	10.3	—	11.6	橙 5YR 6/6	橙 5YR 6/6	横ナデ、ケズリ、指頭圧痕	横ナデ、ハケ目後横ナデ	石英・長石・赤褐色粒・砂粒	やや良好	口縁部～底部	外面部分的に黒変、最大胴径12.2cm
46	16	杯（土師器）	小田3区		SE01	2層	No.31	13.2	8.2	3.4	にぶい橙 5YR 6/4	にぶい橙 5YR 6/4	横ナデ	横ナデ、ナデ	赤褐色粒・角閃石	良好	口縁部～底部	内外面の一部に赤色顔料が見られる
46	17	高杯（土師器）	小田3区		SE01		No.41	(15.4)	—	8.7～	橙 5YR 7/6	橙 5YR 7/6	回転ナデ、縦方向ナデ、横方向ヘラケズリ後ナデ	回転ナデ、回転ヘラケズリ、縦方向ハケ目後横ナデ	石英・黒色粒・黒褐色粒	良好	口縁部～脚部	杯部1/4残存、外面に ヘラ記号
46	18	杯蓋（須恵器）	小田3区		SE12			14.5	—	3.65	褐灰 10YR 6/	褐灰 10YR 5/	ナデ、横ナデ	横ナデ	長石・輝石	良好	完形	外面にまだらの白い釉?
46	19	杯蓋（須恵器）	小田3区		SE01		No.81	16.9	—	3.1	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1 オリーブ灰 5GY 6/1	回転ナデ後ハケ	回転ヘラケズリ後釉	石英・輝石・砂粒	不良	完形	口縁端部内面に胎土目痕
46	20	椀（須恵器）	小田3区		SE01		No.99	(15.4)	9.2	5.6	灰黄褐 10YR 6/2	にぶい褐 7.5YR 6/3	回転ナデ、多方向のナデ、指頭圧痕	回転ナデ、ヘラケズリ、ヘラ切り	石英・黒色粒・砂粒	良好	口縁部～底部	
46	21	椀（須恵器）	小田3区		SE01		No.64	(17.1)	11.4	6.0	灰褐 7.5YR 6/2	橙 5YR 7/6	回転ナデ、回転ナデ後不定方向のナデ	縦方向のミガキ後ナデ、ヘラ切り	石英・黒色粒・砂粒	良好	口縁部～底部	
46	22	高杯（須恵器）	小田3区		SE01		No.63	—	9.6	6.6～	灰白 N 7/	灰白 N 7/	横ナデ、回転ナデ後工具によるヘラケズリ	回転ヘラケズリ、横ナデ、横方向のハケ目後ナデ	石英・黒褐色粒・輝石	良好	杯部～脚部	杯部1/2欠損
46	23	杯（須恵器）	小田3区		SE01	1,2層	一括	(12.65)	7.1	4.3	灰 N6/	灰白 7.5YR 7/1	横ナデ	横ナデ、ヘラケズリ	長石・輝石・雲母	良好	口縁部～底部	歪みあり
46	24	椀（須恵器）	小田3区		SE01		No.6	13.4	8.5	3.65	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナデ	回転ナデ、ヘラケズリ後指ナデ	石英・黒褐色粒・金雲母・砂粒	良好	口縁部～底部	
47	25	鉢（須恵器）	小田3区		SE01		No.46	(35.6)	—	16.3～	灰白 2.5Y 7/1	灰 10Y6/1	横ナデ、同心円文タタキ	横ナデ、格子目文タタキ後横ナデ	長石・輝石・赤褐色粒	良	口縁部～胴部	片口部分指頭圧痕
49	26	杯（土師器）	小田3区		SK03		No.38, 39	13.7	9.3	2.95	にぶい橙 7.5YR 6/4	にぶい橙 7.5YR 6/4	回転ナデ	回転ナデ、ヘラケズリ後ナデ	角閃石・石英・長石・赤褐色粒	良好	口縁部～底部	

表40　土器観察表（2）

法量（ ）は復元値

図版No	組番	器種	出土地点					法量(cm)			色調		調整		胎土	焼成	残存部位	備考
			地区	グリッド	遺構	層位	取り上げ	口径	底径	器高	(内面)	(外面)	(内面)	(外面)				
49	27	椀（須恵器）	小田3区		SE01 SK03		No.83, 84	13.8	8.7	4.7	淡黄 2.5YR 8/3	にぶい橙 7.5YR 7/3 明褐灰 7.5YR 7/1	回転ナデ	ヘラ切り、回転ナデ	角閃石・黒色粒・砂粒	良好	口縁部～底部	内面に赤色顔料痕、外面に黒変
49	28	高杯（須恵器）	小田3区		SK05		No.1,2,3	15.2	9.8	8.55	灰白 N8/	灰白 N7/	横ナデ、ナデ	横ナデ	白色粒・輝石	良好	口縁部～脚部	内底部に火ぶくれ？
50	29	甕（土師器）	小田3区		SK07		No.8,9, 10,11, 12,13	(18.0)	6.0	20.2	橙 5YR 7/6	橙 5YR 7/6	横ナデ、ケズリ後ナデ、ナデ、ヘラケズリ	横ナデ、多方向のハケ目	長石・角閃石・石英・赤褐色粒	良好	口縁部～底部	最大胴径20.0cm
50	30	高杯（須恵器）	小田3区	グリッド			No.1	13.5	—	6.5～	灰白 2.5Y 7/	灰白 N 7/	横ナデ、ナデ	横ナデ	長石・輝石・雲母	良好	口縁部～脚上部	
50	31	高杯（須恵器）	小田3区	グリッド			No.3	15.5	10.3	8.1	灰白 N7/	灰 N6/	横ナデ、ナデ	横ナデ	長石・輝石	良好	ほぼ完形	歪みあり
51	32	甕（土師器）	3区		SI301		P7,19, 20, 22,24,29, 31,32,35, 39,40,43	13.8	—	14.0～	にぶい橙 7.5YR 7/4	にぶい橙 7.5YR 7/4	横ナデ、ナデ	横ナデ、ハケ目後多方向のナデ、多方向のナデ	石英・角閃石・長石・赤褐色粒	良	口縁部～底部	最大胴径14.6cm
55	33	甕（土師器）	3区		SK306	上層		(14.2)	—	22.0	灰黄 2.5Y 7/2	灰白 2.5Y 7/1	横ナデ、ハケ目後ナデ、指頭圧痕	横ナデ、縦・斜め方向のハケ目後ナデ	石英・角閃石・長石・金雲母・赤褐色粒・黒褐色粒	良好	口縁部～底部	胴部外面一部黒変、最大胴径18.4cm
60	1	杯蓋（須恵器）	5区		SE506	埋土		(13.0)	—	3.45	灰 N6/	灰 N5/	回転ナデ	回転ナデ、回転ヘラケズリ後ナデ、ナデ	石英・長石・黒褐色粒	良好	完形	全体的に歪む
60	2	杯（土師器）	5区		SE506	8層	No.16	11.9	7.5	4.4	黄灰 2.5Y 5/1	暗黄灰 2.5Y 5/2	回転ナデ、回転ナデ後多方向のハケ目	回転ヘラケズリ後横ナデ、ナデ	輝石・石・砂粒	良好	口縁部～底部	
60	3	高台付杯（須恵器）	5区		SE506	3層	No.1	13.05	6.2	4.9	暗灰黄 2.5Y 5/2 灰白 2.5Y 8/2	褐灰 10YR 4/1	横ナデ	横ナデ、ヘラケズリ後横ナデ、ナデ	長石・石英	良好	ほぼ完形	高台径（6.7cm）、胴部約3/4欠損、自然釉
60	4	鉢（土師器）	5区		SE506	7層	No.7	13.6	10.5	6.4	橙 2.5YR 6/6	橙 2.5YR 6/6 にぶい橙 10YR 7/2	横ナデ	横ナデ、ナデ	輝石・長石・角閃石・赤褐色粒	良	ほぼ完形	内面は全体に、外面は体部の一部に赤色顔料
60	5	甕（土師器）	5区		SE506	8層	No.22	—	7.7	5.1～	黒褐 10YR 3/1	にぶい黄褐 10YR 5/4	ケズリ	縦方向のナデ、ナデ	石英・長石・赤褐色粒	良	底部～胴部	胴部かなり摩滅、スス付着
60	6	高杯（土師器）	5区		SE506	7,8層	No.19	16.5	9.2	8.65	浅黄橙 10YR 8/3	浅黄橙 10YR 8/3	横ナデ	横ナデ、ヘラケズリ、ナデ	長石・角閃石・雲母・石英・輝石	良	口縁部～底部	一部にスス付着か？全面に赤色顔料
61	7	甕（土師器）	5区		SE506	8層	No.21	—	8.8	11.7～	黒褐 7.5YR 3/2	明褐 7.5YR 5/6	粗いケズリ後ナデ、指頭圧痕	摩滅	石英・長石・金雲母・赤褐色粒	不良	胴部～底部	最大胴径14.5cm
61	8	甕（土師器）	5区		SE506, pit3	7層 埋土	No.6, 12	—	13.0	9.7～	灰褐 7.5YR 4/2	にぶい褐 7.5YR 6/3	相方向のケズリ、ケズリ	タタキ後ナデ	石英・長石・赤褐色粒・砂粒	良	底部～胴部	外面胴部は摩滅
61	10	杯（土師器）	5区		SE506	8層	No.20	—	—	1.3～	黒 2.5Y 2/1	黒 N 2/	多方向のナデ	ケズリ後ナデ	赤褐色粒・長石	良好	底部	全体に漆が施される
63	13	高台付椀（土師器）	5区		SE515	7層	P7	14.2	7.75	6.9	にぶい橙 10YR 7/3	にぶい黄橙 10YR 6/3	横ナデ、ナデ	横ナデ、ナデ、ヘラ切り後横ナデ	長石・赤褐色粒	良好	完形	高台径7.6cm、ほぼ全面に赤色顔料塗布
63	14	高台付椀（土師器）	5区		SE515	2層	P6	15.2	8.9	6.70	赤褐 2.5YR 4/6	明赤褐 2.5YR 5/6	横ナデ、ナデ	横ナデ、ナデ、高台貼り付け	石英・雲母・長石・角閃石・赤褐色粒	良	完形	高台径9.1cm、全面に赤色顔料塗布

表41　土器観察表（3）

法量（ ）は復元値

図版No.	組番	器種	出土地点					法量(cm)			色調		調整		胎土	焼成	残存部位	備考
			地区	グリッド	遺構	層位	取り上げ	口径	底径	器高	(内面)	(外面)	(内面)	(外面)				
63	15	杯 (土師器)	5区		SE516	4層	P1	11.4	7.5	1.90	にぶい橙 7.5YR7/4 灰白 7.5YR 8/2	浅黄橙 7.5YR 8/3	横ナデ、ナデ	横ナデ、ヘラ切り	石英・金雲母・長石・角閃石・赤褐色粒	良	ほぼ完形	
67	16	小型丸底壺 (土師器)	5区		SD516	1層		8.4	—	5.8～	にぶい橙 7.5YR 7/4	にぶい橙 7.5YR 7/4	横ナデ、横方向のケズリ	横ナデ、ナデ	石英・金雲母・長石・角閃石・赤褐色粒	良	口縁部～胴部	最大胴径8.7cm
67	17	甕 (土師器)	5区		SD516		No.11	(16.2)	—	9.8～	にぶい黄橙 10YR 7/2	にぶい黄橙 10YR 7/4	横方向のハケ目後ナデ、斜め方向のハケ目後ケズリ	横ナデ、横・斜め方向のハケ目後ナデ	石英・長石・金雲母・角閃石・赤褐色粒	良	口縁部～胴部	
68	19	蓋 (須恵器)	5区		SK512		P1	14.1	—	4.45	灰 5Y 6/1	灰 5Y 5/1	ナデ	ナデ、ヘラケズリ	長石・石英	良好	完形	つまみ部貼り付け、かなり歪む
68	20	高台付杯 (須恵器)	5区		SK521			(14.9)	(14.5)	6.3	灰 10Y 5/1	灰 10Y 5/1	回転ナデ	回転ナデ、ヘラ切り、ナデ	石英・輝石	良好	口縁部～底部	
68	21	短頸壺 (須恵器)	5区		SK521			(13.2)	—	10.6～	灰白 5Y 7/1	灰 5Y 6/1	回転横ナデ、タタキ後ナデ	タタキ後横ナデ	石英・輝石・赤褐色粒	良好	口縁部～胴部	
69	27	深鉢 (縄文土器)	5区		SD510		No.2,4,5	(30.0)	—	18.2～	にぶい黄橙 10YR 7/2	にぶい赤褐 5YR 5/3	横ナデ、斜め方向のミガキ	ナデ、刻み目	石英・長石・黒色粒・金雲母・赤褐色粒	良	口縁部～胴部	北久根山式、内面は摩滅
69	28	長頸壺 (須恵器)	5区					9.8	—	10.4～	灰 10Y 5/1	灰 10Y 5/1	横ナデ、ハケ目	横ナデ、絞り目	石英・角閃石・赤褐色粒	良	口縁部～頸部	
73	2	深鉢 (縄文土器)	6区		SK603		No.6～8, 11～14, 16,21	—	—	12.2～	にぶい赤褐 5YR 5/4	にぶい赤褐 5YR 5/4	横ナデ、斜め方向のミガキ	ナデ、ヘラ描き・刺突文様	石英・長石・金雲母・角閃石・赤褐色粒	良	頸部～胴部	ヘラ描き・刺突文様
73	3	深鉢 (縄文土器)	6区		SK603		No.32, 35,38	—	10.3	14.35～	橙 5YR 6/6	橙 5YR 6/6	横ナデ、斜め方向のミガキ	磨り消し縄文	石英・角閃石・金雲母・赤褐色粒	良	胴部～底部	全体に黒変、摩滅、最大胴径35.0cm
75	4	鉢 (縄文土器)	6区		流路			(18.8)	—	11.8	黄灰 2.5Y 4/1	黄灰 2.5Y 4/1	横ナデ、斜め方向のミガキ	ミガキ？	石英・角閃石・金雲母	良好	口縁部～底部	内外面とも摩滅、穿孔
75	5	深鉢 (縄文土器)	6区		流路			25.8	5.0	27.8	にぶい橙 7.5YR 6/4	にぶい褐 7.5YR 5/4	横ナデ、丁寧なナデ、強い横ナデ	横ナデ、貝殻による凹線、丁寧な横ナデ、条痕後ナデ	石英・角閃石・金雲母・赤褐色粒	良	ほぼ完形	一部黒変、最大胴径26.0cm
75	6	深鉢 (縄文土器)	6区	B-10	流路			(19.4)	6.3	20.5	灰褐 7.5YR 5/2	にぶい褐 7.5YR 5/3	ナデ、条痕後ナデ、強いナデ	条痕後ナデ、凹線、横ナデ、ナデ	石英・角閃石・金雲母・赤褐色粒・黒色粒・長石	良	口縁部～底部	外面に黒変、かなり歪む、最大胴径22.4cm
75	7	深鉢 (縄文土器)	6区	B-9 B-10	流路	2層		23.9	7.0	28.0	灰黄褐 10YR 4/2	黒褐 10YR3/1	横ナデ、ナデ、横・斜め方向の貝殻条痕？	横ナデ、ナデ後横方向のミガキ	石英・角閃石・金雲母・赤褐色粒	良好	口縁部～底部	摩滅
76	8	深鉢 (縄文土器)	6区		流路	上層		—	—	15.7～	灰黄 2.5Y 6/2	にぶい黄橙 10YR 6/4	横ナデ、斜め方向のミガキ	横・斜め方向のミガキ	石英・金雲母・赤褐色粒	良好	胴部	
76	9	深鉢 (縄文土器)	6区		流路			—	(5.0)	13.9～	にぶい褐 7.5YR 6/3	橙 5YR 6/6	横ナデ、斜め方向のミガキ	ナデ	角閃石・石英・金雲母・赤褐色粒	良好	口縁部～胴部	
76	10	浅鉢 (縄文土器)	6区	C-9	流路			(30.2)	—	11.0～	褐灰 10YR 4/1	橙 5YR 6/6	ナデ	横方向のミガキ	金雲母・角閃石	良好	口縁部～胴部	口縁部内面に粘土積み上げ痕
76	11	深鉢 (縄文土器)	6区		流路			(29.6)	—	33.1～	にぶい黄 2.5Y 6/3	にぶい黄 2.5Y 6/3	横ナデ、斜め方向のミガキ	ナデ、斜め方向・横方向のミガキ	角閃石・石英・赤褐色粒	良好	口縁部～胴部	外面は摩滅
77	12	深鉢 (縄文土器)	6区		流路	2層	No.37	—	—	9.6～	灰黄褐 10YR 5/2	灰黄褐 10YR 5/2	横ナデ、斜め方向のミガキ	ナデ	角閃石・石英・金雲母	良好	口縁部～胴部	
77	13	深鉢 (縄文土器)	6区		流路			—	—	11.8～	にぶい黄橙 10YR 7/2	にぶい黄橙 10YR 7/3	横ナデ、斜め方向のミガキ	ミガキ、工具痕	金雲母・石英・赤褐色粒	良好	口縁部～胴部	黒色磨研土器

表42　土器観察表（4）

法量（ ）は復元値

図版No.	報番	器種	出土地点					法量(cm)			色調		調整		胎土	焼成	残存部位	備考
			地区	グリッド	遺構	層位	取り上げ	口径	底径	器高	(内面)	(外面)	(内面)	(外面)				
77	14	深鉢（縄文土器）	6区		流路	上層		(22.2)	−	13.6〜	褐灰 10YR 7/4	にぶい黄橙 10YR 5/1	横ナデ、斜め方向のミガキ	横ナデ、凹線、横・斜め方向のミガキ	石英・金雲母・角閃石・赤褐色粒	良好	口縁部	
77	15	深鉢（縄文土器）	6区	B-10	流路			−	−	18.3〜	にぶい黄橙 10YR 7/4	にぶい黄橙 10YR 7/4	横ナデ、斜め方向のミガキ	ナデ	石英・長石・赤褐色粒・角閃石・金雲母	良	口縁部〜胴部	一部条痕が残る
77	16	深鉢（縄文土器）	6区		流路			−	−	21.8〜	にぶい黄橙 10YR 7/3	灰黄褐 10YR 5/2	横ナデ、斜め方向のミガキ	条痕後ナデ、ミガキ	砂粒・長石・石英・角閃石・金雲母・赤褐色粒	良	口縁部〜胴部	胴部径41.6cm、摩滅
78	17	深鉢（縄文土器）	6区	C-11	流路		P9, P19	−	−	12.1〜	明赤褐 5YR 5/6 灰褐 5YR 4/2	明赤褐 5YR 5/6 灰褐 5YR 4/2	横ナデ、斜め方向のミガキ	ヘラ描き文様、ナデ、多方向の条痕後ナデ	金雲母・角閃石・石英・長石・鉄石	良好	口縁部〜胴部	
78	18	深鉢（縄文土器）	6区		流路			−	−	16.2〜	褐灰 7.5YR 5/1	褐灰 7.5YR 5/1	横ナデ、斜め方向のミガキ	横ナデ、沈線、条痕後横ナデ	石英・長石・角閃石・金雲母・赤褐色粒	良	口縁部〜胴部	
78	19	深鉢（縄文土器）	6区		流路			−	−	15.5〜	にぶい橙 7.5YR 6/3	にぶい褐 7.5YR 5/4	横ナデ、斜め方向のミガキ	ナデ、横・斜め方向の条痕	石英・長石・角閃石・金雲母・赤褐色粒	良	口縁部〜胴部	
78	20	深鉢（縄文土器）	6区		流路			−	−	19.8〜	灰褐 7.5YR 5/2	にぶい褐 7.5YR 5/4	横ナデ、斜め方向のミガキ	横方向のミガキ、ミガキ	角閃石・石英・金雲母・赤褐色粒	良	口縁部〜胴部	
79	24	深鉢（縄文土器）	6区	B-10				−	−	10.9〜	灰黄褐 10YR 6/2 褐灰 10YR 6/1	灰褐 7.5YR 4/2	横ナデ、斜め方向のミガキ	横ナデ、ナデ、粗いミガキ	金雲母・石英・長石・角閃石・黒色粒・赤褐色粒	良好	口縁部〜胴部	口縁に二条沈線
79	25	深鉢（縄文土器）	6区	C-10				−	−	14.8〜	灰黄褐 10YR 6/6	橙 7.5R 6/6	横ナデ、斜め方向のミガキ	横ナデ、外面に凹線、ヘラケズリ	角閃石・石英・長石	良好	胴部	棒状工具を使った刺突文様
79	26	深鉢（縄文土器）	6区			表土		−	−	9.7〜	にぶい橙 7.5YR 6/4	灰褐 7.5YR 6/2	横ナデ、斜め方向のミガキ	横方向の条痕	石英・長石・金雲母・角閃石・赤褐色粒	良	口縁部〜胴部	波状口縁
83	3	鉢（手捏）	7区		SE701			2.6	−	1.95	にぶい橙 7.5YR6/4	橙 5YR6/6	ナデ、指頭圧痕	ナデ、指頭圧痕	石英・長石・角閃石・雲母	良	ほぼ完形	口縁の一部欠損
83	4	蓋（須恵器）	7区		SE701	4層	No21	(15.1)	−	3.1	橙 5YR 7/6 褐灰 5YR 6/1	橙 5YR 7/6 褐灰 5YR 6/1	横ナデ	横ナデ、ヘラケズリ、ナデ	石英・長石・褐色粒・黒色粒・赤褐色粒	良	口縁部〜つまみ部	つまみ部貼り付け
83	5	蓋（須恵器）	7区		SE701			(15.8)	−	2.5	灰 N 5/	灰 N 5/	ナデ	ナデ、ヘラケズリ	石英・長石	良好	口縁部〜天井部	つまみ部貼り付け
83	6	杯（須恵器）	7区		SE701			(12.4)	(7.0)	3.55	灰 N 6/	灰 N 6/	ナデ	ナデ、ヘラケズリ	石英・長石	良好	口縁部〜底部	
83	7	杯（須恵器）	7区		SE701	1層		(12.2)	7.0	3.70	灰 N 5/	灰 N 5/	ナデ	ナデ、ヘラケズリ、ヘラ切り	石英・灰色粒	良好	口縁部〜底部	
83	8	杯（須恵器）	7区		SE701	1層		(11.9)	(6.8)	3.7	灰白 N 7/	灰白 N 7/	横ナデ、ナデ	横ナデ、ナデ	長石・石英・雲母・黒色粒	良	口縁部〜底部	
83	9	杯（須恵器）	7区		SE701	1層		(11.9)	(8.4)	3.8	黄灰 2.5Y 6/1	黄灰 2.5Y 6/1	横ナデ	横ナデ、ケズリ、ナデ	角閃石・長石・石英・雲母	良	口縁部〜底部	
83	10	杯（須恵器）	7区		SE701	1層		12.0	7.4	3.9	灰 N 6/	灰 N 6/	ナデ	ナデ、ヘラ切り	石英・長石	良好	完形	
83	11	高台付杯（須恵器）	7区		SE701	4層	No18	15.9	10.9	5.4	灰褐 5YR 4/2	灰褐 5YR 4/2 黒褐 5YR 2/1	横ナデ	横ナデ、高台貼り付け後横ナデ、ナデ	石英	良	口縁部〜底部	高台径11.2cm、胴部から高台に自然釉（灰オリーブ 7.5Y 5/3）

表43　土器観察表（5）

法量（ ）は復元値

図版No.	報番	器種	出土地点					法量(cm)			色調		調整		胎土	焼成	残存部位	備考
			地区	グリッド	遺構	層位	取り上げ	口径	底径	器高	(内面)	(外面)	(内面)	(外面)				
83	12	長頸壺（須恵器）	7区		SE701	1層	No2	−	−	7.8〜	浅黄橙 7.5YR 8/6 灰褐 7.5YR 5/2	にぶい赤褐 5YR 5/4	横ナデ	ケズリ、横ナデ	長石・石英・角閃石	良	胴部	
83	13	杯（須恵器）	7区		SE701	1層		(11.8)	(7.8)	3.9	灰 7.5Y 6/1	灰 7.5Y 6/1	ナデ	ナデ、ヘラ切り	石英・長石・褐色粒・暗灰色粒	良好	口縁部〜底部	
83	14	杯（土師器）	7区		SE701			(13.2)	(8.8)	3.2	にぶい橙 7.5YR 6/4	にぶい橙 7.5YR 6/4	ナデ	ナデ	石英・褐色粒	良好	口縁部〜底部	
83	15	皿（土師器）	7区		SE701	4層	No2,7	(15.2)	(10.3)	2.9	橙 5YR 6/6	橙 5YR 6/6	ナデ	ナデ、ヘラ切り	石英・角閃石・褐色粒	良好	口縁部〜底部	器面は摩滅、全面に赤色顔料塗布
83	16	皿（土師器）	7区		SE701	4層	No2, 23	14.6	9.2	3.2	明赤褐 5YR 5/6 黒褐 5YR 3/1	にぶい褐 7.5YR 5/3 黒 7.5YR 7/1	横ナデ	横ナデ、ヘラ切り	長石・石英・角閃石・赤褐色粒	良好	完形	外面に漆が付着、内面にも残る
83	17	皿（土師器）	7区		SE701	4層	No40	13.7	9.5	3.2	明赤褐 2.5YR 5/8	明赤褐 2.5YR 5/8 にぶい黄橙 10YR6/3	横ナデ	横ナデ、ヘラ切り	石英・長石・雲母	良	完形	赤色顔料塗布、内面に漆付着
83	18	皿（土師器）	7区		SE701	4層	No18	(15.7)	(9.8)	3.4	にぶい黄橙 10YR 7/2 黒 10YR 7/1	にぶい黄橙 10YR7/2 黒 10YR 7/1	横ナデ	横ナデ、ヘラ切り	長石・石英・雲母・角閃石	良好	口縁部〜底部	外面に漆が付着、内面にも一部残る
83	19	皿（土師器）	7区		SE701	1層		(15.4)	(9.6)	3.7	橙 5YR 6/6	橙 5YR 6/6	横ナデ	横ナデ、ヘラ切り	石英・長石・雲母・黒色粒	良	口縁部〜底部	
83	20	甕（土師器）	7区		SE701	1,2層		(28.3)	(27.8)	16.8〜	褐灰 10YR 6/1	にぶい黄橙 10YR 7/3	横ナデ、縦方向のケズリ	横ナデ、縦方向のハケ後ナデ	石英・雲母・金雲母・長石・黒色粒・赤褐色粒	良好	口縁部〜胴部	胴部外面一部スス付着
84	21	高杯（須恵器）	7区		SD702			−	(9.2)	3.9〜	灰 10Y 5/1	灰 10Y 5/1	ナデ	ナデ	長石	良好	脚部	
85	23	甕（土師器）	7区		SD705	1層		−	−	5.4〜	にぶい赤褐 5YR 5/4	にぶい赤褐 5YR 5/4	横方向のハケ目	ナデ、斜め方向のハケ目	金雲母・石英・角閃石・褐色粒	良好	口縁部	
85	24	鉢（手捏）	7区		SD705	1層		2.0	−	2.3	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	ナデ、指頭圧痕	ナデ、指頭圧痕	長石・角閃石・雲母・石英・赤色粒・黒色粒	良	口縁部〜底部	波状口縁か?
85	25	鉢（手捏）	7区		SD705	1層		3.2	−	1.4	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	ナデ	ナデ	長石・石英・角閃石・赤色粒	良好	口縁部〜底部	
85	26	小型丸底壺（土師器）	7区		SD705	1層		−	−	4.5〜	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	ナデ、横・斜め方向のハケ目	ナデ、横・斜め方向のハケ目	長石・雲母・角閃石・赤色粒	良好	胴部	内面は摩滅
94	117	小型丸底壺（土師器）	8区	C-25	流路	3層		7.0	−	8.4	にぶい橙 7.5YR 6/4	にぶい橙 7.5YR 6/4	丁寧な横ナデ、縦方向の指ナデ	縦方向のハケ目後丁寧な横ナデ、横ナデ、多方向のハケ目後ナデ	長石・細粒・雲母	良	ほぼ完形	内面の約1/2と、口縁部内面の1/4に黒変あり、最大胴径9.1cm
94	118	小型丸底壺（土師器）	8区	C-24	流路	1層		(8.9)	−	7.4〜	にぶい橙 7.5YR 6/4	にぶい橙 7.5YR 6/4	横ナデ、ナデ、指頭圧痕	横ナデ、多方向のハケ目後ナデ	石英・角閃石・長石・赤褐色粒・金雲母	良好	口縁部〜胴部	
105	296	杯身（土師器）	8区	C-25	流路	1層	土器9	10.4	−	5.2	にぶい橙 7.5YR 7/4	にぶい橙 7.5YR 6/4	横ナデ、ナデ	横ナデ、ヘラケズリ後ナデ	雲母・角閃石・赤色酸化粒・白色砂粒・石英	良	ほぼ完形	最大胴径12.8cm
105	297	杯（土師器）	8区	C-25	流路	1層	10	12.6	−	4.9〜	赤橙 10R 6/8	赤橙 10R 6/8	横ナデ、ナデ	横ナデ、ケズリ	石英・角閃石・長石・赤褐色粒・黒色粒	良好	口縁部〜底部	胴部外面摩滅

表44　土器観察表（6）

法量（ ）は復元値

図版No.	報番	器種	出土地点					法量(cm)			色調		調整		胎土	焼成	残存部位	備考
			地区	グリッド	遺構	層位	取り上げ	口径	底径	器高	(内面)	(外面)	(内面)	(外面)				
105	298	杯（土師器）	8区	C-25		1層	④	11.6	—	5.15	明赤褐 2.5YR 5/6	明赤褐 2.5YR 5/6	ナデ	ナデ、ハケ目後ナデ	石英・角閃石	良好	口縁部～底部	
105	299	杯（土師器）	8区	C-25	流路	1層	④	(11.9)	—	4.2～	明赤褐 2.5YR 5/8	明赤褐 2.5YR 5/8	ナデ	ケズリ後ナデ	石英・長石・赤褐色粒・黒色粒	良好	口縁部～底部	摩滅
105	300	杯（土師器）	8区	C-25	流路	1層	支1 土器2	11.9	—	5.1	にぶい橙 5YR 6/4	にぶい橙 5YR 6/4	横ナデ、ナデ	ケズリ後ナデ	長石・石英・角閃石	良好	口縁部～底部	
105	301	杯（土師器）	8区	C-25			支1	6.45	—	4.6	にぶい橙 7.5YR 7/4	にぶい橙 7.5YR 7/4	横ナデ、ナデ	横ナデ、ナデ	赤褐色粒・輝石	良	口縁部～底部	
105	302	杯（土師器）	8区	C-24	流路	1層		12.6	—	4.7～	橙 5YR 6/6 赤褐 2.5YR 4/6	にぶい橙 7.5YR 7/4 明赤褐 2.5YR 5/8	横ナデ、ナデ	ケズリ後ナデ	石英・長石・金雲母・黒色粒	良好	口縁部～底部	全面に赤色顔料痕
105	303	杯（土師器）	8区		流路 南トレ	1層		(15.4)	—	4.9～	にぶい橙 7.5YR 6/4	にぶい橙 7.5YR 6/4	横ナデ、ナデ	横ナデ、横・斜め方向のケズリ、ハケ目	石英・角閃石・金雲母・褐色粒	良好	口縁部～底部	
105	304	椀（土師器）	8区	C-26	流路	8層	椀1	10.6	6.4	4.8	にぶい黄橙 10YR 6/3	にぶい黄橙 10YR 6/3	横ナデ、ナデ	斜め・縦方向のハケ目	石英・長石・角閃石	良好		
105	305	鉢（土師器）	8区	C-25 D-25	流路	3層		10.9	—	7.45	にぶい橙 5YR 5/6	にぶい橙 5YR 5/6	横ナデ、ハケ目後ナデ	横ナデ、横・斜め方向のケズリ	石英・角閃石・金雲母・褐色粒・黒色粒	良好	口縁部～底部	
105	306	甕（土師器）	8区	B-24	流路	3層		—	—	6.7～	灰黄褐 10YR 4/2	にぶい橙 7.5YR 6/4	ナデ、指頭圧痕	縦・斜め方向のハケ目	石英・金雲母・長石・角閃石	良好	胴部～底部	底部穿孔、胴部外面摩滅
105	307	甕（土師器）	8区	C-25	流路	1層		—	(4.0)	8.3～	橙 5YR 6/6 灰褐 7.5YR 5/2	橙 5YR 6/6	ケズリ後ナデ、指頭圧痕	ハケ後ナデ	石英・金雲母・長石・赤褐色粒・黒色粒	良好	胴部～底部	
105	308	甕（土師器）	8区	C-25	流路	1層	⑨	18.0	—	14.2	橙 7.5YR 6/6	橙 7.5YR 6/6	ナデ、横・斜め方向のハケ目	ナデ、斜め方向のハケ目	石英・金雲母・長石・角閃石	良好	口縁部～底部	底部穿孔、胴部外面摩滅
105	309	高杯（土師器）	8区	C-25	流路	1層	⑪	17.4	—	5.3～	浅黄橙 7.5YR 8/4	橙 5YR 7/6	ナデ	ナデ	石英・褐色粒	良好	杯部	器面一部に顔料痕
105	310	高杯（土師器）	8区	C-25 D-25	流路	1層	⑪	(17.2)	(9.8)	13.7	にぶい橙 7.5YR 7/4	橙 7.5YR 7/6	ナデ、横方向のミガキ？	ナデ、絞り目、ケズリ	石英・金雲母・長石・角閃石・褐色粒	良好	口縁部～底部	
105	311	高杯（土師器）	8区	C-24	流路	1層		(15.4)	(9.8)	11.7	橙 7.5YR 6/6	橙 7.5YR 6/6	横ナデ、ナデ、横方向のケズリ	横ナデ、横方向のケズリ、縦方向のケズリ後ナデ	石英・雲母・長石・赤褐色粒・黒色粒	良好	口縁部～底部	杯部内外面に工具痕
106	312	高杯（土師器）	8区	C-25	流路	1層 表土	⑪	18.6	—	5.8～	明赤褐 5YR 5/6 にぶい橙 7.5YR 5/6	明赤褐 5YR 5/6	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	石英・角閃石・褐色粒	良好	杯部	器面部分的に赤色顔料痕
106	313	高杯（土師器）	8区	C-25	流路	表土	11	(16.2)	—	7.4～	橙 5YR 6/6	浅黄橙 7.5YR 8/4	ハケ目後丁寧なナデ	ハケ目後丁寧なナデ	石英・金雲母・褐色粒	良好	杯部	
106	314	甕（土師器）	8区	D-25	流路	1,3層		(13.7)	—	7.4～	にぶい橙 7.5YR 7/4	にぶい橙 7.5YR 7/4	横ナデ、ケズリ	横ナデ、多方向のハケ目	石英・長石・赤褐色粒・黒色粒	良好	口縁部～胴部	口縁部内面に工具痕
106	315	甕（土師器）	8区	D-25	流路	1層	⑥	14.6	—	12.0～	にぶい橙 7.5YR 6/4	にぶい橙 7.5YR 6/4	横ナデ、ハケ目、ケズリ後ナデ	横ナデ、斜め・横方向のハケ目	長石・角閃石・石英・赤褐色粒	良好	口縁部～胴部	
106	316	甕（土師器）	8区	C-25	流路	1層	①	(16.7)	—	18.7～	にぶい橙 7.5YR 6/4	にぶい橙 7.5YR 6/4	横ナデ、ケズリ	横ナデ、ハケ目	石英・長石・角閃石・赤褐色粒	良好	口縁部～胴部	口縁部外面・胴部外面にスス付着
106	317	甕（土師器）	8区	D-25	流路	1層	⑥	(15.4)	—	20.0～	にぶい橙 7.5YR 6/4	にぶい橙 7.5YR 6/4	横ナデ、斜め方向のハケ目	横ナデ、斜め方向のハケ目	石英・金雲母・角閃石・褐色粒	良好	口縁部～胴部	

表45　土器観察表（7）

法量（ ）は復元値

図版No.	登録番号	器種	出土地点					法量(cm)			色調		調整		胎土	焼成	残存部位	備考
			地区	グリッド	遺構	層位	取り上げ	口径	底径	器高	(内面)	(外面)	(内面)	(外面)				
106	318	甕（土師器）	8区	D-25	流路	1層	⑥	(16.5)	－	18.0～	にぶい橙 5YR 6/4	にぶい橙 5YR 6/4	横ナデ、ケズリ後ナデ	横ナデ、多方向のハケ目後ナデ	石英・角閃石・金雲母・長石・赤褐色粒・黒色粒	良好	口縁部～胴部	胴部外面に黒斑
107	319	壺（土師器）	8区	C-25	流路	1層	④	13.9	－	16.7～	にぶい橙 2.5YR 6/4	橙 2.5YR 6/6	横方向のハケ目後ナデ、多方向の粗いハケ目後ナデ	多方向の粗いハケ目後ナデ	石英・角閃石・長石・金雲母・黒褐色粒・砂粒	やや良好	口縁部～胴部	部分的に黒変、内面口縁部にスス、外面は摩滅し一部に赤色顔料痕
107	320	丸底壺（土師器）	8区	D-25	流路	1層		15.2	－	20.7	にぶい橙 7.5YR 6/4 橙 5YR 6/6	にぶい橙 7.5YR 6/4 橙 5YR 6/6	横ナデ、縦・横方向のハケ目後ナデ、ナデ	横ナデ、ナデ	石英・長石・角閃石・金雲母	良好	口縁部～底部	体部外面の一部スス付着、最大胴径19.5cm
107	321	壺（土師器）	8区	C-25	流路		⑨	14.0	－	27.85	にぶい橙 7.5YR	にぶい橙 7.5YR	ナデ、斜め方向のケズリ	ナデ、縦・斜め方向のハケ目	石英・角閃石・金雲母・褐色粒	良好	口縁部～底部	最大胴径27.8cm
107	322	壺（土師器）	8区	C-25	流路	1層	⑩	(13.0)	－	20.7～	褐灰 5YR 4/1	にぶい橙 5YR 6/4	横ナデ、横・斜め方向のケズリ	横ナデ、ハケ目後ナデ	石英・角閃石・金雲母・褐色粒	良好	口縁部～胴部	
107	323	壺（土師器）	8区	D-25 D-35?	流路	3層、1層		17.0	－	15.3～	橙 2.5YR 6/6 にぶい橙 7.5YR 7/4	橙 2.5YR 6/6 にぶい橙 7.5YR 7/4	横ナデ、ナデ、ケズリ後ナデ	横ナデ、ハケ目後ナデ	褐色粒・長石・角閃石・金雲母	良好	口縁部～胴部	
108	324	壺（土師器）	8区	C-24	流路	1,2,3層	③,⑧	16.0	－	26.55	にぶい橙 7.5YR 6/4	にぶい橙 7.5YR 6/4	横ナデ、斜め方向のケズリ	横ナデ、ハケ目後ナデ	石英・角閃石・金雲母・褐色粒	良好	口縁部～底部	最大胴径26.1cm
108	325	壺（土師器）	8区	C-24	流路	1層ベルト		18.4	－	16.5～	にぶい黄橙 10YR 6/3	にぶい黄橙 10YR 6/3	ハケ目後横ナデ、右方向のケズリ後横ナデ	ハケ目後横ナデ、ハケ目	石英・長石・角閃石・赤褐色粒	良好	口縁部～胴部	
109	326	甕（須恵器）	9区	C-31 北東		4,8層		14.0	－	3.0	にぶい黄橙 10YR 7/3 浅黄橙 7.5YR 8/4	にぶい黄橙 10YR 7/3	横ナデ	横ナデ、ヘラケズリ	角閃石・石英	良好	口縁部～つまみ部	天井部外面に墨書有り
109	327	甕（須恵器）	9区	D-30	流路	6層		14.4	－	4.4	灰 N 6/	灰 N 5/ 灰 N 6/	横ナデ、ナデ	横ナデ、ケズリ、ナデ	白色粒・黒色粒	良	口縁部～天井部	
109	328	杯（須恵器）	9区		流路	8層	No290	12.7	9.2	3.9	褐灰 10YR 5/1 明赤褐 2.5YR 3/2	褐灰 10YR 5/1 橙 7.5YR 7/6	横ナデ、ナデ	横ナデ、ナデ、ヘラケズリ	石英・長石・黒色粒・赤褐色粒・乳白色粒	良	完形	貼り付け高台、高台径9.3cm、外面焼きムラ、漆?を入れて使用?
109	329	杯（須恵器）	9区		流路	6層	No48	10.0	5.6	3.45	灰 5Y 6/1	灰 5Y 6/1	ナデ	ナデ、ヘラ切り	石英・長石	良好	口縁部～底部	底部にヘラ記号
109	330	杯（須恵器）	9区	C-31		4層		13.6	9.8	4.25	にぶい橙 5YR 6/4	にぶい橙 5YR 6/3	回転ナデ	回転ナデ、ヘラ起こし	白色石・角閃石	良好		貼り付け高台
109	331	杯身（土師器）	9区		流路	7層	No330	11.5	4.0	4.0	浅黄橙 7.5YR 8/4	明赤褐 5YR 5/8 浅黄橙 7.5YR 8/4	横ナデ	横ナデ、ヘラケズリ	石英・長石・金雲母・角閃石・黒色粒・赤褐色粒	良	口縁部～底部	胴部外面の一部に赤色顔料痕
109	332	蓋（土師器）	9区	C-32	南北ベルト	9層		14.2	－	4.8	にぶい褐 7.5YR 5/4 黒褐 10YR 3/2	にぶい黄褐 10YR 5/4 黒褐 10YR 3/2	横ナデ後ミガキ、ナデ後ミガキ	横ナデ後ミガキ、凹線、ケズリ後ミガキ	石英・雲母・角閃石・黒色粒	良好	ほぼ完形	全体にススをつけた後ミガキ、使用して黒くなる、漆?
109	333	杯（土師器）	9区	C-32	流路	9層		11.9	－	4.9	黒 10Y 2/1	黒 10Y 2/1	横・斜め方向のミガキ	横・斜め方向のミガキ	石英	良好	口縁部～底部	黒色土器
109	334	杯（土師器）	9区		流路	7層	No27	(11.2)	－	4.7	褐灰 10YR 4/1	褐灰 10YR 4/1	横・斜め方向のミガキ	横・斜め方向のミガキ	石英・褐色粒	良好	口縁部～底部	

表46　土器観察表（8）

法量（ ）は復元値

図版No.	報番	器種	出土地点					法量(cm)			色調		調整		胎土	焼成	残存部位	備考
			地区	グリッド	遺構	層位	取り上げ	口径	底径	器高	(内面)	(外面)	(内面)	(外面)				
109	335	杯身（土師器）	9区	C-32	流路	8.9層		13.0	−	5.3	にぶい橙 2.5YR 6/4	にぶい橙 2.5YR 6/4	ナデ	ナデ、ヘラケズリ後ナデ	石英	良好	口縁部〜底部	
109	336	杯身（土師器）	9区		流路	7,8層	No. 3, 31	12.5	5.3	3.8	にぶい黄橙 10YR 7/3	にぶい黄橙 10YR 7/3	横ナデ、ナデ	横ナデ、ケズリ、ナデ	雲母・角閃石・赤褐色粒	良	口縁部〜底部	底部〜胴部外面にかけて黒変
109	337	杯（土師器）	9区		流路東西トレ	8層	No. 25,26	13.6	−	4.9	黒 10Y 2/1	黒 10Y 2/1	横・斜め方向のミガキ	横・斜め方向のミガキ	石英	良好	口縁部〜底部	
109	338	杯（土師器）	9区	C-32	流路西ベルト	9層		12.1	−	5.6	橙 5YR 6/6	橙 5YR 6/6	ナデ、ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	石英・長石・角閃石・赤褐色粒	良好	完形	底部は丸底
109	339	皿（土師器）	9区		流路東西トレ	下層		(16.9)	(16.0)	3.0	赤褐 5YR 4/8	明赤褐 5YR 5/8	横ナデ、ナデ、ミガキ	摩滅	石英・長石・金雲母・角閃石	良	口縁部〜底部	全体に赤色顔料塗布
109	340	杯（土師器）	9区	B-32 C-32	流路東トレ	5層		(15.1)	8.0	4.0	にぶい黄橙 10YR 7/3	にぶい黄橙 10YR 7/3	横ナデ、ナデ	横ナデ、ヘラ切り	石英・長石・角閃石	良	口縁部〜底部	
109	341	高杯（土師器）	9区	C-32	流路	6,7層		(9.4)	−	3.8〜	にぶい黄橙 10YR 7/4	にぶい黄橙 10YR 7/4	ナデ	ナデ	石英・褐色粒	良好	杯部	
109	342	壺（弥生土器）	9区	D-30	流路	8層		−	(11.2)	5.0〜	にぶい橙 7.5YR 6/4	にぶい橙 7.5YR 6/4	横・斜め方向のハケ目	縦・斜め方向のハケ目、横ナデ	石英・長石・金雲母・褐色粒	良好	脚部	外面は一部を除き摩滅
109	343	高杯（土師器）	9区	C-32	流路			−	9.8	6.8〜	にぶい黄 2.5Y 6/3	にぶい黄 2.5Y 6/3	横ナデ	横・斜め方向のミガキ、横ナデ	石英・絹雲母・金雲母・褐色粒	良好	脚部	脚部内面に工具痕
109	344	壺（弥生土器）	9区	D-31	流路	8層		−	12.8	6.3〜	にぶい橙 7.5YR 6/4	にぶい橙 7.5YR 6/4	ナデ、横方向のハケ目	縦・斜め方向のハケ目、横ナデ	石英・長石・角閃石・雲母	良好	脚部	内外面の一部スス付着
109	345	壺（弥生土器）	9区	C-31		6a層		−	10.5	6.3〜	浅黄橙 7.5YR 8/4	橙 7.5YR 7/6 浅黄橙 7.5YR 8/6	ナデ	ナデ	石英・角閃石・金雲母・長石・赤褐色粒・黒色粒	良好	脚部	内面スス付着、摩滅
110	346	壺（土師器）	9区		流路トレンチ			(17.9)	−	15.7〜	にぶい褐 7.5YR 5/4	にぶい褐 7.5YR 5/4	横方向のハケ目後ナデ、指ナデ、斜め方向のケズリ	斜め方向のハケ目後ナデ、多方向のハケ	角閃石・黒褐色粒・長石・赤褐色粒・砂粒	良好	口縁部〜胴部	胴部外面に煤付着、外面部分的に黒変
110	347	壺（土師器）	9区		流路	8層	No. 21,22	(12.1)	−	7.7〜	灰褐 7.5YR 5/2	灰褐 7.5YR 5/2	横ナデ、ケズリ	縦及び斜め方向のハケ後ナデ	長石・角閃石・石英・雲母・赤褐色粒	良	口縁部〜胴部	胴部内面スス付着
110	348	壺（土師器）	9区	D-30		6層		14.7	−	8.0〜	にぶい褐 7.5YR 6/3	にぶい橙 7.5YR 6/4	横ナデ、ケズリ後のナデ	ハケ後横ナデ、ハケ	角閃石・長石・石英	良	口縁部〜胴部	
110	349	鉢（土師器）	9区		流路	9層	No.199	(28.8)	−	16.1〜	にぶい橙 10YR 6/3	にぶい橙 7.5YR 7/3	横ナデ、指頭圧痕、ケズリ	横ナデ、ハケ目、ナデ、把手部分ケズリ・ナデ	長石・雲母・石英・赤褐色粒	良	口縁部〜胴部	
110	350	壺（土師器）	9区			7層	No.43	24.6	−	20.0〜	にぶい黄橙 10YR 6/3	にぶい黄橙 10YR 6/3	ナデ、縦・斜め方向のケズリ	ナデ、縦・斜め方向のハケ目	石英・角閃石・金雲母・褐色粒	良好	口縁部〜胴部	最大胴径24.5cm
110	351	壺（土師器）	9区		流路	7層	No.154	−	−	12.3〜	にぶい黄橙 10YR 7/4	にぶい黄橙 10YR 7/4	横方向の調整、斜め方向のケズリ	多方向のハケ目	石英・角閃石・長石・褐色粒・黒色粒	良	口縁部〜胴部	口縁部内面は摩滅
111	352	壺（土師器）	9区	C-31	流路	7層、南北トレ、ベルト		24.3	−	20.7〜	明褐灰 7.5YR 7/2	にぶい橙 2.5YR 6/4	横ナデ、指頭圧痕、ヘラケズリ	横ナデ、多方向のハケ目後ナデ	石英・長石・金雲母・赤褐色粒・黒褐色粒	良好	口縁部〜胴部	外面全体に黒変、胴部に赤色顔料か?
111	353	壺（土師器）	9区	B-31	流路	6b,6層		(17.2)	−	23.1〜	にぶい橙 10YR 7/3	橙 7.5YR 7/6	横ナデ、指頭圧痕、ケズリ後ナデ、ナデ	横ナデ、ハケ目、ナデ	角石・長石・角閃石・石英	良	口縁部〜胴部	外面一部に黒変
111	354	壺（土師器）	9区			8層	No.45	20.0	−	25.1	にぶい褐 7.5YR 6/3	暗赤褐 5YR 3/6 にぶい橙 7.5YR 6/4	横ナデ、ケズリ後横ナデ、ケズリ	横ナデ、ナデ	石英・長石・金雲母・赤褐色粒・黒色粒	良好	口縁部〜底部	スス付着、外面一部赤色顔料付着、最大胴径24.1cm

表47　土器観察表（9）

法量（ ）は復元値

図版No.	報番	器種	出土地点					法量(cm)			色調		調整		胎土	焼成	残存部位	備考
			地区	グリッド	遺構	層位	取り上げ	口径	底径	器高	(内面)	(外面)	(内面)	(外面)				
111	355	甕 (土師器)	9区	北東・南北	流路	2,7,8層		25.0	—	19.6～	にぶい橙 7.5YR 7/4	にぶい橙 7.5YR 7/4	横ナデ、ケズリ後ナデ	横ナデ、縦・斜め方向のハケ目	石英・角閃石・長石・金雲母・赤褐色粒	良好	口縁部～胴部	
112	356	壺 (土師器)	9区			6層	No.52	12.2	—	21.8	褐 7.5YR4/6	にぶい褐 7.5YR 5/4	横ナデ、ハケ目後ナデ	横ナデ、ハケ目後ナデか?	石英・角閃石・長石・赤褐色粒・砂粒	やや良好	口縁部～底部	外面は摩滅、外面に黒変・一部スス付着、最大胴径19.4cm
112	357	壺 (土師器)	9区		流路	6層	No.54	15.6	—	22.8	にぶい黄橙 10YR 7/4 にぶい橙 5YR 6/3	橙 5YR 6/4 褐灰 5YR 4/1	横ナデ、指頭圧痕、縦・横方向に粗いナデ	横ナデ、多方向のハケ目後ナデ	石英・角閃石・長石・金雲母・赤褐色粒・砂粒・石	やや良好	ほぼ完形	外面が摩滅し、全面に黒変、外面一部にスス付着、最大胴径20.4cm
112	358	壺 (土師器)	9区		流路	8層	No.343	—	3.3	31.0	にぶい橙 7.5YR 6/4	にぶい橙 7.5YR 6/4	指押さえ、ケズリ、ナデ後ハケ目	ハケ目、ナデ	石英・角閃石・長石・雲母	良好	口縁部～底部	摩滅・剥離有り、外面に黒変、最大胴径27.2cm
112	394	壺形土器 (弥生土器)	9区	C-32	流路	5,6,7層		(8.6)	—	8.4～	灰白 2.5Y 8/2	灰白 2.5Y 8/2	摩滅	摩滅	石英・褐色粒	良好	口縁部～胴部	摩滅
116	375	鉢 (縄文土器)	8区		カクラン			—	—	16.5～	にぶい黄褐 10YR 4/3	褐 7.5YR 4/3	ナデ	凹線文	角閃石・輝石・長石・赤褐色粒	良	胴部	阿高式土器
116	376	深鉢 (土師器)	8区	B-21 C-25	流路	5層		(26.4)	—	12.7～	にぶい黄橙 10YR 6/4	にぶい黄橙 10YR 6/4	横ナデ、斜め方向のミガキ	横方向のミガキ、沈線、多方向のミガキ	角閃石・石英・長石・黒色粒	良	口縁部～胴部	内面にヘラ状工具による段差
125	2	壺 (須恵器)	10区		SE 1002	床面	No.8	(10.7)	—	14.0～	灰 5Y 5/1	灰オリーブ 5Y 6/2	横ナデ、指頭圧痕	回転ヘラケズリ後ナデ、タタキ	石英・輝石・長石・褐色粒・黒色粒	良好	口縁部～胴部	外面全体に黒変
125	3	長頸壺 (土師器)	10区		SE 1002		No.4	—	11.0	22.4～	褐灰 10YR 6/1	褐灰 10YR 6/1	回転ナデ、ヘラケズリ後ナデ、同心円状の当て具痕	回転ナデ、ヘラケズリ後ナデ	石英・角閃石・赤褐色粒・黒色粒・砂粒	やや良好	頸部～底部	頸部から底部にかけて火ぶくれ、最大胴径18.9cm
132	20	擂鉢 (瓦質土器)	10区		SD 1010	上層 1,4層 南壁	No.14	(27.2)	(16.7)	13.8	灰 N 4/1	灰 N 4/1	すり目、ナデ	指頭圧痕、多方向のナデ、ナデ	石英・長石・金雲母・赤褐色粒	良好	口縁部～底部	櫛状工具による6本単位のすり目
132	21	捏鉢 (土師質土器)	10区		SD 1010	北側 下層		41.8	28.4	11.25	黒 N 2/	黒 N 2/	横方向のハケ後ナデ、ハケ後ナデ	縦方向のハケ後ナデ、指頭圧痕、ハケ後ナデ	石英・長石・雲母・赤褐粒	良好	口縁部～底部	
132	22	盤 (瓦質土器)	10区		SD 1011	上層		22.6	17.7	5.0	黄灰 2.5YR4/1	黄灰 2.5YR 5/1	多方向のナデ、ヘラミガキ後ナデ	横ナデ、ナデ	角閃石・長石・赤褐色粒	良好	口縁部～底部	
132	23	杯 (土師器)	10区		SD 1011			(15.4)	—	5.7	橙 5YR 6/6	橙 5YR 6/6	横ナデ、指頭圧痕	横ナデ、ケズリ後丁寧なナデ	赤褐色粒・黒色粒・長石	良好	口縁部～底部	
133	27	鉢 (土師器)	10区		SK1013, SK1014		No.1	15.2	—	16.0～	にぶい橙 7.5YR 6/4	にぶい赤褐 5YR 5/4	ケズリ後ナデ?、指頭圧痕	横ナデ、多方向のタタキ	石英・角閃石・長石・金雲母・黒色粒	良	口縁部～胴部	外面胴部に黒変
134	28	杯 (土師器)	10区		SK 1009			(10.2)	7.3	3.2	にぶい橙 7.5YR 7/4	にぶい橙 7.5YR 7/4	回転ナデ	回転ナデ、糸切り	石英・長石・金雲母・赤褐色粒・黒色粒	良好	口縁部～底部	
134	30	鉢 (瓦質土器)	10区		SK1009, SD1011 カクラン, 表土	上, 中, 下層		(64.0)	(29.0)	56.6	灰黄 2.5Y 6/2	にぶい橙 7.5YR 6 灰白 2.5Y 7/1	横ナデ、ケズリ後多方向のナデ	横ナデ、タタキ後多方向のナデ、ナデ	角閃石・輝石・長石・赤褐色粒	良好	口縁部～底部	
136	40	杯 (土師器)	10区		表土			(10.9)	7.9	3.2	橙 2.5YR 6/8 灰黄 2.5Y 6/2	橙 2.5YR 6/8	横ナデ	ナデ、糸切り	石英・長石・金雲母	良好	口縁部～底部	

表48　土器観察表（10）

〔玉類〕

法量（ ）は残存値

図版No.	報番	器種	石材	出土地点					色調（日本色研事業）	法量(mm)				残存度	備考
				地区	グリッド	遺構	層位	取り上げ		径	厚さ	孔径	重さ(g)		
69	22	ガラス小玉	ガラス	5区		カクラン			ﾀｰｺｲｽﾞﾌﾞﾙｰ 5B 5.5/8.5	4.0	3.0	2.0	0.05	完形	気泡
90	1	ガラス小玉	ガラス	8区	C-25	流路	1層		ｻｯｸｽﾌﾞﾙｰ 5B 5.5/5.0	4.0	2.8弱	2.0	0.02	完形	
90	2	ガラス小玉	ガラス	8区	D-25	流路	1層		ｺﾊﾞﾙﾄﾌﾞﾙｰ 3PB 3.5/10.0	3.0	2.5	2.0	0.03	完形	
90	3	ガラス小玉	ガラス	8区		流路	上面		紺青色 6PB 2.5/9.5	8.5	7.0	2.0	0.7	完形	
90	4	管玉	碧玉	8区	B-24	流路	1層		ﾈﾄﾙｸﾞﾘｰﾝ 3G 3.0/4.5	(長さ) 7.0	2.0	1.0	0.03	完形	ひし形状の削り
90	5	管玉	碧玉	8区	D-25	流路	1層		ｽﾚｰﾄｸﾞﾘｰﾝ 3G 4.0/2.0	(長さ) 7.0	2.0	1.0	0.03	完形	
90	6	管玉	滑石	8区				管玉1	ﾍﾞｰｼﾞｭ 8YR 7.5/2.0	(長さ) 22.0	5.0	2.5,2.0	0.9	ほぼ完形	擦切痕
90	7	臼玉	滑石	8区	B-24	流路	1層		ろくしょう 3G 5.0/5.0	5.5	2.8	2.0	0.1	ほぼ完形	上下割れ、擦切痕
90	8	臼玉	滑石	8区	B-24	流路	1層		ｵｲｽﾀｰ 5Y 7.5/1.0	4.5	2.9	1.8	0.08	完形	擦切痕
90	9	臼玉	滑石	8区	B-24	流路	1層		ｵｲｽﾀｰ 5Y 7.5/1.0	5.0	3.0	1.9	0.1	完形	上下と側面に欠け、擦切痕
90	10	臼玉	滑石	8区		流路			ｴｸﾘｭ 8YR 7.5/1.0	4.5	1.5	2.0	0.03	完形	擦切痕
90	11	臼玉	滑石	8区	B-24	流路	1層		ｴｸﾘｭ 8YR 7.5/1.0	5.0	2.5	1.5	0.04	ほぼ完形	割れ、擦切痕
90	12	臼玉	滑石	8区	B-24	流路	1層		ｴｸﾘｭ 8YR 7.5/1.0	4.0	1.5	1.5	0.01	ほぼ完形	擦切痕
90	13	臼玉	滑石	8区	B-24	流路	1層		ｴｸﾘｭ 8YR 7.5/1.0	5.0	2.1	1.5	0.06	完形	擦切痕、下面は丸み
90	14	臼玉	滑石	8区	B-24	流路	1層		ｴｸﾘｭ 8YR 7.5/1.0	5.0	2.5	1.0	0.05	4/5	擦切痕
90	15	臼玉	滑石	8区	D-25	流路	1層		ｽﾚｰﾄｸﾞﾘｰﾝ 3G 4.0/2.0	5.0	3.0	2.0	0.07	完形	擦切痕
90	16	臼玉	滑石	8区	B-25	流路	1層		ｵｲｽﾀｰ 5Y 7.5/1.0	5.0	3.0	1.5	0.07	ほぼ完形?	割れ、擦切痕
90	17	臼玉	滑石	8区	B-24	流路	1層		ｴｸﾘｭ 8YR 7.5/1.0	4.5	3.0	1.9	0.07	ほぼ完形	側面に石付着、下方は平ら、擦切痕
90	18	臼玉	滑石	8区	B-24	流路	1層		ｴｸﾘｭ 8YR 7.5/1.1	5.0	3.0	1.2	0.05	ほぼ完形	擦切痕
90	19	臼玉	滑石	8区	B-24	流路			ｴｸﾘｭ 8YR 7.5/1.0	4.5	3.0	2.0弱	0.08	ほぼ完形	擦切痕
90	20	臼玉	滑石	8区		流路	1層		ｴｸﾘｭ 8YR 7.5/1.0	5.0	1.7	1.5	0.02	完形	
90	21	臼玉	滑石	8区	B-25	流路	1層		ｴｸﾘｭ 8YR 7.5/1.0	(4.5)	(2.0)	1.5	0.05	1/3	擦切痕
90	22	臼玉	滑石	8区	C-25	流路	1層		ｴｸﾘｭ 8YR 7.5/1.0	7.0	4.0	3.0	0.23	完形	側面に石付着、穿孔は両面方向
90	23	臼玉	滑石	8区	B-25	流路	1層		ｵｲｽﾀｰ 5Y 7.5/1.0	4.0	(2.5)	2.0弱	0.04	完形	擦切痕
90	24	臼玉	滑石	8区	B-24	流路			ｴｸﾘｭ 8YR 7.5/1.0	(4.0)	2.0	1.5強	0.06	完形	擦切痕
90	25	臼玉	滑石	8区	B-24	流路			ｴｸﾘｭ 8YR 7.5/1.0	4.0	2.8弱	1.5弱	0.03	完形	擦切痕
90	26	臼玉	チャート	8区	C-25		1層		茜色 N 1.5	4.5	2.0	2.5	0.01	完形	擦切痕
90	27	臼玉	滑石	8区	B-24	流路	1層		利休ねずみ 3G 5.0/1.0	5.5	3.0	2.0強	0.1	完形	
90	28	臼玉	滑石	8区	B-24	流路	1層		ｱｲﾋﾞｲｸﾞﾚｲ 3G 3.0/0.5	4.5	2.5	2.0	0.07	完形	
90	29	臼玉	滑石	8区	B-24	流路	1層		ｱｲﾋﾞｲｸﾞﾚｲ 3G 3.0/0.5	4.3	3.8	1.0	0.07	ほぼ完形	擦切った際に割れ
90	30	臼玉	滑石	8区	B-24	流路	1層		ｴｸﾘｭ 8YR 7.5/1.0	4.0強	2.5	1.5	0.03	完形	擦切痕
90	31	臼玉	滑石	8区	B-24	流路	1層		ﾍﾞｰｼﾞｭ 8YR 7.5/2.0	4.5	1.5	1.5強	0.01	完形	
90	32	臼玉	滑石	9区	北西	流路	2,3層		ｵｲｽﾀｰ 5Y 7.5/1.0	4.5	2.5	2.0	0.02	ほぼ完形	上下割れ、擦切痕
90	33	臼玉	滑石	9区		流路	5層	No.132	ｴｸﾘｭ 8YR 7.5/1.0	4.0	2.5	1.5	0.03	完形	擦切痕、割れ
90	34	臼玉	変ハンレイ岩	9区	D-29	流路			ｽﾚｰﾄｸﾞﾘｰﾝ 3G 4.0/2.0	8.5	0.2	0.3	0.14	完形	擦切痕か?
131	11	玉	瑪瑙	10区		SD1010			柿色 10R 5.0/11.5	10.0	7.5	5.0	1.03	ほぼ完形	

表49 祭祀遺物観察表（1）

〔土製品〕

図版No.	報番	器種	出土地点					法量(cm・g)						色調	胎土	焼成	備考
			地区	グリッド	遺構	層位	取り上げ	長さ	幅	厚さ	孔径	紐幅	重さ				
91	35	土製丸玉	8区	C-25	流路	1層	土玉1	1.5	1.7	1.45	0.3	−	3.3	にぶい褐 7.5YR 5/4	石英・長石・金雲母・角閃石	良好	
91	36	土製丸玉	8区	C-25	流路	1層		1.4	1.5	1.4	0.25～0.4	−	2.6	明赤褐 5YR 5/6	石英・長石	良好	
91	37	土製丸玉	8区	B-24	流路	1層		1.4	1.4～	1.55	0.3	−	2.8	橙 5YR 6/8	石英・長石	良好	左上半部欠損
91	38	土製丸玉	8区	C-25	流路	1層		1.4	1.2	1.3	0.1	−	1.6	明赤褐 5YR 5/6	石英・白色粒	良好	いびつで安定が悪い
91	39	土製丸玉	8区	C-25	流路	1層	土玉2	1.7	2.0	1.8	0.4	−	4.2	にぶい赤褐 5YR 4/4	石英・長石	良好	底部に圧痕
91	40	土製丸玉	8区			表土		2.0	2.0	1.8	0.4～0.5	−	6.2	明褐 5YR 5/6	長石・石英・角閃石	良好	孔の一部を欠損
91	41	土製丸玉	8区					2.0	1.9	1.5～	0.5	−	4.0	橙 5YR 6/8	石英・長石・角閃石	良	下部欠損
91	42	土製丸玉	9区		流路	6層	No.82	1.25	1.2	1.5	0.2	−	2.1	褐 7.5YR 4/4	石英・金雲母	良好	スス付着?
91	43	土製丸玉	9区		流路	5層	No.298	1.4	1.5	1.4	0.3	−	2.3	にぶい褐 7.5YR 5/4 褐灰 7.5YR 4/2	石英・長石・角閃石	良好	丁寧なナデ
91	44	土製丸玉	9区		流路	6層	No.83	1.5	1.7	1.4	0.3	−	3.6	褐灰 10YR 5/1	石英・長石	良好	穿孔は下方からの一方
91	45	土製丸玉	9区		流路	6a層	No.234	1.4	1.5	1.4	0.25	−	2.6	にぶい橙 7.5YR 6/4	石英・長石・角閃石	良好	穿孔は下方からの一方
91	46	土製丸玉	9区		流路	5層	No.323	1.6	1.7	1.4	0.3	−	3.8	橙 7.5YR 6/6	石英・長石・角閃石・雲母	良好	
91	47	土製丸玉	9区		流路		No.2	1.6	1.75	1.6	0.2	−	4.8	浅黄 2.5Y 7/4	白色粒・金雲母他	良好	
91	48	土製丸玉	9区		流路	東西トレンチ	一括	1.7	1.6	1.5	0.1	−	3.9	にぶい褐 7.5YR 5/3	石英・長石・金雲母	良好	一部欠損、炭化物付着?
91	49	土製丸玉	9区		流路		No.4	1.5	1.5	1.55	0.3	−	3.2	にぶい黄橙 10YR 6/3	角閃石・石英・長石	良好	
91	50	土製丸玉	9区	D-29	流路	5層		1.45	1.7	1.3	0.3	−	3.3	明赤褐 5YR 5/8	石英・長石・角閃石	良好	
91	51	土製丸玉	9区		流路		No.13	1.55	1.55	1.8	0.2～0.35	−	4.3	明赤褐 2.5YR 5/8	石英・長石・角閃石・雲母	良好	
91	52	土製丸玉	9区		流路		No.3	1.9	1.95	1.6	0.2	−	5.9	にぶい橙 7.5YR 6/4 橙 5YR 6/6	石英・角閃石・輝石	良好	
91	53	土製丸玉	9区		流路		No.12	1.5	1.75	1.5	0.3～0.45	−	3.6	赤黒 2.5YR 1.7/1 明赤褐 5YR 5/8	石英・長石・角閃石	良好	
91	54	土製丸玉	9区		流路		No.9	1.7	1.9	1.7	0.2	−	4.9	橙 5YR 7/6	石英・長石・金雲母	良好	薄い黒変が1/2
91	55	土製丸玉	9区		流路	6層	No.164	1.8	1.9	1.6	0.4～0.3	−	4.6	にぶい黄橙 7.5YR 7/4	白色粒・石英・雲母・角閃石	良好	
91	56	土製丸玉	9区	北西	流路	1層		1.75	1.7	1.5	0.3	−	4.1	にぶい黄褐 10YR 4/3	石英・長石・雲母・角閃石	良好	
91	57	土製丸玉	9区	北西	流路	1層		1.7	1.6	1.5	0.2	−	3.8	にぶい黄 2.5Y 6/3	長石・石英・輝石	良好	
91	58	土製丸玉	9区			4層	No.47	1.8	2.0	1.6	0.3	−	5.9	にぶい黄橙 10YR 7/2	角閃石・長石	良好	孔の周りを一部欠損
91	59	土製丸玉	9区		流路	8層	No.38	1.85	1.75	1.9	0.25～0.3	−	5.4	にぶい橙 7.5YR 6/4	石英・長石	良好	一部にスス付着
91	60	土製丸玉	9区		流路		No.11	1.9	2.0	1.75	0.3～0.4	−	5.8	明褐 2.5YR 5/8	石英・長石・角閃石	良好	
91	61	土製丸玉	9区		流路	5層	No.133	1.9	1.9	1.9	0.2～0.3	−	5.7	にぶい橙 7.5YR 7/4	角閃石・石英	良好	穿孔は下方からの一方
91	62	土製丸玉	9区		流路	5層	No.95	1.8	1.9	1.8	0.25～0.3	−	5.9	にぶい黄褐 10YR 5/3	長石・石英・角閃石・金雲母	良好	穿孔は下方からの一方
91	63	土製丸玉	9区		流路		No.6	1.75	2.05	1.7	0.2	−	5.0	にぶい赤褐 5YR 4/3	石英・角閃石・長石・輝石・褐色粒	良	
91	64	土製丸玉	9区			5層	No.49	1.8	1.85	1.8	0.3～0.35	−	5.2	橙 5YR 6/6	石英・長石・角閃石	良好	炭化物付着?
91	65	土製丸玉	9区		流路	5層	No.59	2.0	1.9	1.6	0.3	−	5.4	にぶい橙 7.5YR 6/4	石英・金雲母・長石	良好	

表50　祭祀遺物観察表（2）

〔土製品〕

図版No.	報番	器種	出土地点					法量(cm・g)						色調	胎土	焼成	備考
			地区	グリッド	遺構	層位	取り上げ	長さ	幅	厚さ	孔径	紐幅	重さ				
91	66	土製丸玉	9区		流路	6a層	No.418	1.9	1.9	1.9	0.3	−	4.9	にぶい橙 7.5YR 6/4	長石細粒・雲母・角閃石・石英	良好	2度穿孔を行う
91	67	土製丸玉	9区		流路		No.5	2.1	2.05	1.9	0.2	−	7.2	にぶい赤褐 5YR 4/3	石英・長石・輝石	良	
91	68	土製丸玉	9区	北西		ｶｸﾗﾝ	一括	1.8	2.1	1.7	0.2	−	5.5	にぶい褐 7.5YR 5/4	石英・金雲母・角閃石	良好	
91	69	土製丸玉	9区		流路	5層	No.328	1.6	1.8	1.9	0.3	−	4.9	明褐 7.5YR 5/6	石英・長石・雲母・褐色粒	良好	指頭圧痕が残る
91	70	土製丸玉	9区		流路		No.14	1.9	2.05	1.9	0.2～0.35	−	6.4	橙 5YR 6/8	石英・長石・角閃石	良好	
91	71	土製丸玉	9区		流路		No.10	1.95	1.95	2.15	0.4	−	8.2	橙 5YR 6/8	石英・長石・輝石	良好	
91	72	土製丸玉	9区		流路	5層	No.56	2.1	2.1	1.8	0.3	−	7.3	にぶい橙 7.5YR 6/4	石英・長石・角閃石・褐色粒	良好	孔の一部を欠損、一部黒変
91	73	土製丸玉	9区		流路	7層	No.153	2.1	2.4	1.7	0.2～0.3	−	8.2	にぶい黄橙 10YR 7/3	長石・石英・輝石・雲母	良好	穿孔は下方からの一方
91	74	土製丸玉	9区		流路	5層	No.134	2.0	2.6	2.0	0.25～0.35	−	10.2	明赤褐 5YR 5/6	石英・角閃石・長石・金雲母	良好	穿孔は下方からの一方
91	75	土製丸玉	9区		流路	5層	No.140	2.1	2.5	1.9～	0.25	−	7.6	にぶい橙 7.5YR 7/3	長石・石英・角閃石	良好	穿孔は下方からの一方
91	76	土製丸玉	9区		流路	5層	No.58	2.3	2.4	2.0	0.2	−	9.4	にぶい赤褐 5YR 5/4	石英・長石・角閃石	良好	孔の一部欠損、炭化物、スス付着?
91	77	土製丸玉	9区	北西		1層		2.6	2.7	2.5	0.4～0.7	−	13.1	にぶい褐 7.5YR 5/4	長石・褐色粒・角閃石・雲母	良好	表面全体が粗い
91	78	土製丸玉	9区		流路	6層	No.57	2.2	2.25	1.8	0.3～0.35	−	8.5	明赤褐 5YR 5/6	石英・金雲母・角閃石	良好	孔の一部欠損、炭化物付着?
91	79	土製丸玉	9区		流路		No.1	1.85	1.95	1.7	0.3	−	5.1	にぶい黄橙 10YR 7/3	石英・輝石・褐色粒	良	一部欠損
91	80	土製丸玉	9区		流路	5層	No.139	2.1	2.2	1.8～	0.3	−	7.1	にぶい橙 7.5YR 6/4	石英・長石・輝石	良好	表面に一部、鉄分が付着
91	81	土製丸玉	9区		流路		No.8	1.7～	1.8	2.0	0.4	−	6.1	橙 5YR 6/6	石英・長石	良好	体部の一部欠損、黒変
91	82	土製丸玉	9区		流路		No.126	2.0	1.9	1.7	0.15	−	5.7	にぶい褐 7.5YR 5/3 橙 5YR 6/6	長石・角閃石	良好	穿孔は下方からの一方
91	83	土製丸玉	9区	B-31	流路	6層		1.75	1.9～	1.6～	0.2～0.3	−	4.0	橙 7.5YR 6/6	石英・金雲母・角閃石	良好	約1/4程度欠損
91	84	土製丸玉	9区		流路	5層	No.125	1.6	1.7	1.5	0.2	−	3.1	にぶい赤褐 5YR 4/3	石英・角閃石	良好	一部欠損、黒変
91	85	土製丸玉	9区		流路	5層	No.135	1.5	1.7	1.5	0.2～0.25	−	3.2	にぶい橙 7.5YR 7/4	石英・長石・褐色粒・角閃石	良好	
92	86	土製勾玉	8区		流路	1層		2.3～	1.7～	1.3	0.2～0.3	−	4.4	にぶい赤褐 5YR 5/4	石英・長石・角閃石・雲母	良好	下部約1/3と上部先端欠損
92	87	土製勾玉	8区	B-25	流路	1層		3.3～	2.1～	1.6～	−	−	6.7	にぶい橙 7.5YR 7/4	雲母・白石粒	良好	頭部のみ欠損
92	88	土製勾玉	8区	C-25				2.3～	1.7～	1.7～	−	−	5.2	にぶい橙 7.5YR 6/4	長石・石英・雲母	良好	上下先端欠損
92	89	土製勾玉	8区			表土		2.5～	2.1～	1.8～	−	−	6.8	橙 5YR 6/6	石英・長石・角閃石・雲母	良好	上下先端欠損
92	90	土製勾玉	8区			表土		2.7～	1.4～	1.5～	−	−	4.8	橙 5YR 6/6	石英・長石・角閃石・雲母	良好	上部約1/3欠損、穿孔部なし
92	91	土製勾玉	9区		流路	5層	No.129	4.8	2.6	1.7	0.1～0.3	−	15.4	明褐 7.5YR 5/6	長石・石英・雲母	良好	
92	92	土製勾玉	9区		流路	5層	No.128	4.7	2.4	1.6	0.2	−	13.2	橙 7.5YR 6/6	角閃石	良好	穿孔は上方からの一方
92	93	土製勾玉	9区			6a層	No.411	5.2	3.0	1.6	0.35	−	16.3	明褐 7.5YR 5/6	石英・長石・角閃石・雲母	良好	
92	94	土製勾玉	9区		流路	6b層	No.361	3.8	2.5	1.7	0.35	−	11.0	にぶい褐 7.5YR 5/4	石英	良好	穿孔は下方からの一方
92	95	土製勾玉	9区	東西	流路	ﾄﾚﾝﾁ	一括	3.2～	1.8～	1.3	0.25～0.45	−	6.2	明赤褐 5YR 5/6	角閃石・雲母・長石・石英	良好	上下先端欠損
92	96	土製勾玉	9区		流路	5層	No.147	2.9～	2.6～	1.4～	0.2～0.3	−	6.9	橙 7.5YR 6/6	石英・長石	良好	穿孔は上方からの一方

表51　祭祀遺物観察表（3）

〔土製品〕

図版No.	報番	器種	出土地点					法量(cm・g)						色調	胎土	焼成	備考
			地区	グリッド	遺構	層位	取り上げ	長さ	幅	厚さ	孔径	紐幅	重さ				
92	97	土製勾玉	9区		流路	6層	No89	2.5～	1.4～	1.5～	0.2～0.3	－	5.6	にぶい橙 7.5YR 6/4	石英・長石・雲母・褐色粒	良好	下部約1/4欠損
92	98	土製勾玉	9区		流路		No417	2.8～	1.7～	1.7～	0.3～	－	7.2	にぶい橙 7.5YR 6/4	石英・長石	良好	上下欠損
92	99	土製勾玉	9区		流路	6層	No90	3.4～	1.7～	1.4～	0.2?	－	5.8	橙 7.5YR 6/6	石英・長石・角閃石・雲母	良好	上下先端欠損
92	100	土製勾玉	9区	B-31	流路	6層	一括	3.2～	1.9～	1.7～	0.3?	－	7.6	にぶい褐 7.5YR 5/4	雲母・黒曜石片・石英・長石	良好	穿孔より上部欠損
92	101	土製勾玉	9区	C-29		6b層		1.8～	1.7～	1.3～	－	－	3.1	にぶい黄橙 10YR 6/4	石英・長石	良好	二条の刻み?詳細不明
92	102	土製勾玉	9区	北東	流路	2層		2.3～	1.8～	1.3～	－	－	4.4	明褐 7.5YR 5/6	石英・長石・雲母・角閃石	良好	上半分を欠損
93	103	土製模造鏡	9区		流路		No51	4.8	4.6	1.55～	－	－	27.0	にぶい橙 5YR 6/4	石英・金雲母	良好	鈕部欠損、孔を穿った痕跡
93	104	土製模造鏡	9区		流路	6a層	No333	5.1	5.15	2.4	0.3	2.0	28.1	明赤褐 5YR 5/6	石英・金雲母・角閃石	良好	ほぼ完形
93	105	土製模造鏡	9区	B-31	流路	6層		5.1～	6.3	2.4～	0.2～0.25	1.6	40.9	にぶい褐 7.5YR 5/4	石英・白色石・角閃石	良好	約1/3欠損
93	106	土製模造鏡	9区		流路	5層	No336	3.7～	4.0	1.75	0.2～0.35	1.7	13.0	にぶい黄橙 10YR 6/3	石英・白色石・角閃石	良好	縁辺の一部を欠損
93	107	土製模造鏡	9区		流路	6層	No91	3.55	3.15～	2.0	0.1	－	11.3	橙 7.5YR 6/6	石英・金雲母	良好	約1/3欠損
93	108	土製模造鏡	9区		流路	7層	No235	4.45～	3.55～	2.1	0.3～0.6	1.9～	15.7	にぶい赤褐 2.5YR 5/4	石英・白色石・角閃石	良好	約1/3欠損、鏡面部の一部に黒変
93	109	土製模造鏡	9区	北西	流路	4層	一括	2.8～	3.4～	1.8～	0.2～	0.8～	10.3	にぶい褐 7.5YR 5/4	石英・長石・雲母・角閃石	良好	
93	110	土製模造鏡	9区	C-30		6a層		3.6	2.7～	1.7	－	1.4	9.7	明赤褐 7.5YR 5/6	石英・金雲母・角閃石・黒曜石	良好	約1/2欠損
93	111	土製模造鏡	9区		流路		No20	3.8～	4.7～	2.0	0.1	－	20.9	にぶい黄橙 10YR 6/3	石英・金雲母・角閃石	良好	約2/3欠損、一部黒変
93	112	土製模造鏡	9区	B-31	流路	5層	一括	2.7～	5.1～	1.5～	－	－	17.2	にぶい橙 7.5YR 6/4 にぶい黄橙 10YR 7/4	長石細粒・雲母・赤色酸化粒	良好	孔は残存しない
93	113	土製模造鏡	9区	B-31	流路	6層		4.1～	3.0～	0.9～	－	－	9.7	にぶい黄橙 10YR 6/4	角閃石・石英・赤色酸化粒・長石	良好	満らしいものあり
93	114	土製模造鏡	9区	B-31	流路	6層		2.85～	3.2～	1.2～	－	－	7.3	にぶい赤褐 5YR 5/4 橙 5YR 6/6	角閃石・石英・赤色酸化粒・長石	良好	本体の大部分を欠損し、1/6程残存
93	115	土製模造鏡	9区	東西		トレンチ		4.0～	3.3～	1.8～	－	－	16.5	にぶい黄褐 10YR 5/4	石英・金雲母・黒曜石	良好	4/5程度欠損
93	116	土製模造鏡	9区	C-32	流路	8層		4.6～	6.1～	1.45～	－	－	31.2	にぶい赤褐 7.5YR 5/3	石英・金雲母・角閃石・赤色酸化粒	良好	約2/3欠損、鈕欠損
104	293	土製模造品	8区	C-27	流路	5層		5.2	3.6	0.8	－	－	－	灰 5Y 6/1 灰 N 6/0	長石・輝石	良好	須恵器の杯を再加工?

表52　祭祀遺物観察表（4）

〔手捏土器〕

法量（ ）は復元値

図版No	組番	器種	出土地点					法量(cm)				色調		胎土	焼成	調整	残存率	備考
			地区	グリッド	遺構	層位	取り上げ	口径	底径	高さ	最大胴径	(内面)	(外面)					
95	120	杯(手捏)	8区	C-25	流路	3層	手捏24	2.3	1.7	2.0	3.3	にぶい橙 7.5YR 6/4	橙 7.5YR 6/6	雲母・長石・石英	良	ナデ	完形	全体に楕円形
95	121	杯(手捏)	8区			表土	一括	1.9	—	1.3	—	橙 5YR 6/6	橙 5YR 6/6	長石・角閃石・雲母	良	ナデ	ほぼ完形	
95	122	杯(手捏)	8区	C-25	流路	1層	手捏13	—	1.3	2.2	—	にぶい黄褐 10YR 5/3	にぶい黄橙 10YR 6/4	雲母・角閃石	良	ナデ	ほぼ完形	口縁部欠損
95	123	杯(手捏)	8区		流路	上層	一括	3.1	2.3	2.3	3.3	にぶい橙 7.5YR 6/4	橙 7.5YR 6/6	長石	良	ナデ、面取り?、粗いヘラ成形の後ナデ?	完形	
95	124	杯(手捏)	8区	B-24	流路		手捏12	(3.4)	1.1	2.8	—	明褐 7.5YR 5/6	にぶい橙 7.5YR 6/4	長石・石英・雲母・角閃石・輝石	良好	ナデ	約1/3	
95	125	杯(手捏)	8区				手捏2	(3.0)	1.3	2.8	—	橙 7.5YR 6/6	橙 7.5YR 6/6	雲母・長石	良	指頭圧痕、ナデ	約3/4	口縁上部を欠損、底部は平底に近い
95	126	杯(手捏)	8区	C-25	流路	1層	手捏22	3.7	—	3.2	4.0	明褐 7.5YR 5/6	橙 7.5YR 6/6	長石・雲母・石英・角閃石	良	ナデ、指頭圧痕	ほぼ完形	外底部の一部欠損
95	127	杯(手捏)	8区	C-25	流路	1層	手捏4	3.8	2.3	2.9	4.60	にぶい褐 7.5YR 6/3	にぶい橙 7.5YR 6/4	長石・石英・雲母・角閃石	良	指ナデ	ほぼ完形	口縁歪む
95	128	杯(手捏)	8区	C-25	流路	1層	手捏23	3.9	—	3.1	—	橙 5YR 6/6	橙 5YR 6/6	長石・石英・雲母・角閃石・赤色酸化粒	良	ナデ、指頭圧痕	ほぼ完形	口縁が傾く
95	129	杯(手捏)	8区	C-25	流路	1層	手捏5	(3.2)	(2.2)	2.7	(3.8)	橙 7.5YR 6/6	橙 7.5YR 6/6	長石・石英・雲母・角閃石	良好	ナデ	約1/2	
95	130	杯(手捏)	8区	B-24・25	流路	1層	一括	(3.0)	—	3.9	(3.8)	橙 5YR 6/6	橙 5YR 6/6	石英・長石・雲母・赤色酸化粒・角閃石	良好	ナデ	約1/2	
95	131	杯(手捏)	8区	B-25	流路	1層	手捏9	4.2	—	2.7	4.5	にぶい褐 7.5YR 5/3	にぶい褐 7.5YR 5/4	長石・石英・雲母	良	指頭圧痕、ナデ	ほぼ完形	口縁部と胴部の一部を欠損
95	132	杯(手捏)	8区	C-25	流路			(3.8)	—	2.6	(4.6)	明赤褐 5YR 5/8	にぶい橙 5YR 6/4 橙 5YR 6/6	長石・石英・雲母・輝石	良	ヘラ成形、ナデ、指頭圧痕	約2/3	
95	133	杯(手捏)	8区	B-25	流路	1層	手捏25	3.4	—	2.9	4.0	にぶい褐 7.5YR 5/3	にぶい褐 7.5YR 5/4	長石・石英・雲母	良	ナデ	完形	口縁がやや波打つ
95	134	杯(手捏)	8区	B-25	流路	1層	手捏10	4.0	—	2.2	—	明赤褐 2.5YR 5/6	にぶい赤褐 5YR 4/4	長石・石英・雲母・角閃石	良好	ナデ	ほぼ完形	口縁部の一部を欠損
95	135	杯(手捏)	8区			表土		(4.0)	(2.6)	2.4	(5.0)	橙 2.5YR 6/8	橙 5YR 6/8	長石・石英・角閃石	良好	ナデ、指頭圧痕	約3/4	内底部変色
95	136	杯(手捏)	8区				一括	(5.8)	2.6	4.0～	6.3	橙 5YR 6/4	橙 5YR 6/8	長石・雲母・石英・角閃石	良好	ナデ、横ナデ	ほぼ完形	口縁端部欠損
95	137	杯(手捏)	8区			表土		—	(3.4)	2.8～	(6.4)	明赤褐 5YR 4/6	明赤褐 5YR 4/6	石英・長石・雲母・角閃石・褐色粒	良	ナデ、指頭圧痕	約1/3	底部欠損、外面下位に黒変
95	138	杯(手捏)	8区	SE			一括	(4.0)	—	2.1～	(4.4)	橙 7.5YR 6/6	にぶい橙 7.5YR 6/4	石英・長石・雲母	良好	ナデ	約1/4	底部欠損、外面下位に黒変
95	139	杯(手捏)	8区	C-25			一括	(3.4)	—	2.7～	(3.8)	橙 5YR 6/6	橙 5YR 6/6	長石・雲母	良好	ナデ	約1/3	底部欠損
95	140	壺(手捏)	9区		流路	5層	№106	2.7	1.4	2.1	3.6	橙 5YR 6/4	橙 5YR 6/4	石英・角閃石・金雲母	良好	ナデ、指頭圧痕	完形	鉄分付着?
95	141	壺(手捏)	9区		流路		№250	3.0	—	2.5	3.4	にぶい橙 5YR 7/4	にぶい橙 5YR 7/4	石英・赤色酸化粒	良好	ナデ、指頭圧痕	完形	口縁が傾く
95	142	杯(手捏)	9区		流路	5層	№119	(3.4)	2.4	2.2	(3.7)	橙 5YR 7/6	橙 5YR 6/8	石英・長石・角閃石	良好	ナデ	約1/2	
95	143	杯(手捏)	9区	B-31		6層		(3.4)	(1.3)	2.6	(3.8)	にぶい橙 7.5YR 6/4	にぶい橙 7.5YR 6/4	石英・長石・雲母・角閃石	良好	ナデ	約1/2弱	
95	144	杯(手捏)	9区			6a層	№405	3.4	—	2.7	4.0	橙 2.5YR 6/6	橙 5YR 6/6	石英・長石・角閃石	良好	ナデ、指頭圧痕	ほぼ完形	スス(炭化物?)付着
95	145	杯(手捏)	9区		流路	7層	№243	3.2	—	2.6	4.0	にぶい橙 5YR 6/4	にぶい橙 5YR 6/4	石英・金雲母	良好	ナデ、指頭圧痕	ほぼ完形	底部外面に黒変、口縁の一部欠損
95	146	杯(手捏)	9区		流路	6a層	№359	(2.7)	—	2.9	3.7	橙 5YR 6/6	橙 5YR 6/6	石英・角閃石・金雲母	良好	ナデ、指頭圧痕	ほぼ完形	口縁部のほとんどを欠損

表53　祭祀遺物観察表（5）

〔手捏土器〕

法量（ ）は復元値

図版No	報番	器種	出土地点					法量(cm)				色調		胎土	焼成	調整	残存率	備考
			地区	グリッド	遺構	層位	取り上げ	口径	底径	高さ	最大胴径	(内面)	(外面)					
95	147	杯(手捏)	9区		流路	5層	No.326	3.8	—	3.0	4.2	明赤褐 5YR 5/6	明赤褐 5YR 5/6	石英・角閃石	良好	ナデ、指頭圧痕	ほぼ完形	口縁の一部欠損
95	148	杯(手捏)	9区	C-30		6b層		3.7	(2.0)	2.7	3.9	橙 5YR 6/6	橙 5YR 6/6	石英・金雲母・角閃石	良好	ナデ、指頭圧痕	ほぼ完形	鉄分?付着
95	149	杯(手捏)	9区			6c層	No.253	(3.0)	—	2.3	(3.6)	橙 5YR 6/6	橙 5YR 6/6	長石細粒・雲母・角閃石	良好	ナデ	約1/3	
95	150	杯(手捏)	9区	D-29	流路	6b層	一括	(3.6)	(2.0)	1.9	—	にぶい橙 7.5YR 6/4	橙 7.5YR 6/6	長石細粒・雲母・角閃石	良好	ナデ	約1/3	
95	151	杯(手捏)	9区	B-31		6層		3.9	—	2.4	4.5	にぶい橙 7.5YR 6/6	にぶい橙 7.5YR 6/6	石英・角閃石	良好	ナデ、指頭圧痕	約4/5	鉄分?付着
95	152	杯(手捏)	9区		流路	6a層	No.334	(3.6)	—	3.0	4.3	にぶい橙 5YR 6/4	にぶい橙 5YR 6/4	石英・黒曜石・金雲母	良好	ナデ、指頭圧痕	約3/4	
95	153	杯(手捏)	9区		流路	8層	No.331	4.4	—	2.7	—	黒 N 2/	黒 N 2/	長石細粒・雲母・角閃石	良好	ナデ	ほぼ完形	
95	154	杯(手捏)	9区		流路	7層	No.238	(4.0)	—	3.0～	—	にぶい橙 10YR 6/4	にぶい橙 10YR 6/4	石英・長石・雲母・角閃石・褐色粒	良好	ナデ、指頭圧痕	約1/3	
95	155	杯(手捏)	9区		流路	b層	No.272	2.0	—	3.0	—	暗灰黄 2.5Y 5/2 黒 2.5Y 2/1	暗灰黄 2.5Y 5/2 黒 2.5Y 2/1	長石・石英・角閃石・雲母	良	上方向のナデ、指頭圧痕	完形	
95	156	杯(手捏)	9区	北西	流路	2層	一括	(3.2)	(2.7)	2.8	3.3	にぶい橙 7.5YR 6/4	にぶい橙 7.5YR 6/4	雲母・長石細粒	良好	ナデ	約1/2	
95	157	壺(手捏)	9区		流路	7層、8層	No.292、294	(5.0)	—	3.7	(5.0)	灰 5Y 4/1 黒 5Y 2/1	灰黄 2.5YR 5/2 黒 10Y 2/1	長石・石英・雲母・角閃石	良好	指ナデ、指頭圧痕	約4/5	外面調整が粗い
95	158	杯(手捏)	9区	C-29	流路	6a層	一括	(4.3)	(2.6)	2.5	—	橙 7.5YR 6/6	橙 7.5YR 7/6	石英・長石細粒・角閃石・雲母・赤色酸化粒	良好	ナデ、指頭圧痕	約1/3	
95	159	壺(手捏)	9区		流路トレンチ		一括	(4.5)	(2.4)	3.1	(4.8)	にぶい黄褐 10YR 5/3	灰黄褐 10YR 6/2	石英・長石・雲母・角閃石	良好	ナデ、指頭圧痕	約1/2	口縁部外面黒変
95	160	杯(手捏)	9区		流路	7層	No.28	3.4	—	2.7	4.4	にぶい橙 7.5YR 6/4	にぶい橙 7.5YR 6/4	石英・金雲母・赤色酸化粒	良好	ナデ、指頭圧痕	ほぼ完形	口縁一部欠損、指頭圧痕著しい
95	161	杯(手捏)	9区		流路		No.260	4.1	—	3.6	—	明赤褐 5YR 5/6	明赤褐 5YR 5/6	長石・石英・角閃石・雲母	良	横方向のナデ、指頭圧痕	約4/5	成形は全体に粗い
96	162	杯(手捏)	9区	D-29			一括	(2.8)	(1.6)	2.0	(3.2)	にぶい黄褐 10YR 5/4	褐灰 10YR 4/1	長石・角閃石・雲母	良好	ナデ	約1/4	
96	163	杯(手捏)	9区			8層	No.231	3.0	—	2.6	4.0	にぶい黄褐 10YR 5/3	にぶい黄橙 10YR 6/3	石英・長石・雲母・角閃石	良好	ナデ	約1/2	
96	164	杯(手捏)	9区		流路	7層	No.237	3.4	—	2.2	4.0	にぶい赤褐 5YR 5/4	にぶい赤褐 5YR 5/4	石英・金雲母	良好	ナデ、指頭圧痕	完形	
96	165	杯(手捏)	9区	B-31	流路	6層	一括	(3.3)	—	2.5	(3.4)	橙 7.5YR 6/6	明褐 7.5YR 5/6	石英・長石・角閃石	良好	ナデ	約4/5	口縁部大部分欠損
96	166	杯(手捏)	9区		流路		No.266	4.2	—	2.4	4.5	橙 5YR 6/6	橙 5YR 6/6	石英・長石・雲母・角閃石	良好	丁寧なナデ	約1/2	
96	167	杯(手捏)	9区		流路		No.265	(3.9)	(1.8)	2.6	(4.2)	橙 5YR 6/6	にぶい褐 7.5YR 5/4	石英・長石・雲母	良好	ナデ、指頭圧痕	約1/4	外面一部黒変
96	168	杯(手捏)	9区			6層	No.80	(3.8)	(2.2)	2.5	(4.6)	橙 5YR 6/6	橙 5YR 6/6	石英・長石・雲母・角閃石・褐色粒	良好	ナデ	約1/3	
96	169	杯(手捏)	9区	B-31		6層	一括	(5.0)	(2.2)	2.5	(5.4)	橙 7.5YR 6/6	明褐 7.5YR 5/6	石英・長石・雲母・角閃石	良好	ナデ	約1/4	外底部付近に黒変
96	170	杯(手捏)	9区	D-29	流路	6層	一括	(4.4)	—	2.5	(5.8)	にぶい褐 7.5YR 5/4	にぶい褐 7.5YR 5/4	長石細粒・雲母・角閃石	良好	ナデ	約1/4	
96	171	壺(手捏)	9区	B-32	流路	5層	一括	(5.0)	(3.0)	3.3	(5.6)	にぶい橙 7.5YR 6/4	橙 7.5YR 6/6	石英・長石・角閃石・雲母・赤色酸化粒	良好	ナデ	約1/2	

表54　祭祀遺物観察表（6）

〔手捏土器〕

法量（ ）は復元値

図版No.	報番	器種	出土地点					法量(cm)				色調		胎土	焼成	調整	残存率	備考
			地区	グリッド	遺構	層位	取り上げ	口径	底径	高さ	最大胴径	(内面)	(外面)					
96	172	壺(手捏)	9区				一括	(5.6)	(2.0)	3.8	−	灰黄 2.5YR 7/2	灰黄 2.5YR 7/2	長石・角閃石・赤褐色粒	良好	斜め・横方向のナデ、ヘラ成形後ナデ	約1/2	
96	173	壺(手捏)	9区		流路	6a層	№354	−	2.2	3.6～	5.9	橙 5YR 6/6	橙 5YR 6/6	石英・角閃石・金雲母・赤色酸化粒	良好	ナデ、指頭圧痕	約3/4	口縁と胴部の一部欠損、工具痕
96	174	壺(手捏)	9区		流路	6a層	№423	−	−	3.2～	5.9	にぶい橙 5YR 6/4	にぶい橙 5YR 6/4	石英・金雲母・黒曜石	良好	ナデ、指頭圧痕	約3/4	口縁と胴部の一部欠損、器面の磨滅が著しい
96	175	壺(手捏)	9区	C-30		6a層	一括	−	(2.1)	3.2～	(6.2)	橙 5YR 6/6	橙 5YR 6/6	石英・長石細粒・角閃石・雲母・赤色酸化粒	良好	ナデ、指頭圧痕	約1/3	
96	176	壺(手捏)	9区		流路		№276	−	−	4.1～	(6.0)	にぶい橙 5YR 4/6	橙 5YR 6/6	石英・長石細粒・角閃石・雲母・赤色酸化粒	良好	丁寧なナデ、指頭圧痕	約1/2	
96	177	鉢(手捏)	9区	東西トレンチ	流路	下層		−	−	5.6～	−	にぶい橙 7.5YR 6/4	にぶい橙 7.5YR 6/4	石英・角閃石・長石・金雲母	良好	指ナデ、指頭圧痕	約3/4	口縁部～底部
96	178	杯(手捏)	9区			6a層	№419	−	(2.8)	3.8～	(6.4)	橙 7.5YR 6/6	にぶい橙 7.5YR 6/4	石英・長石細粒・角閃石・雲母・赤色酸化粒	良好	ナデ、横ナデ、指頭圧痕	約1/3	
96	179	杯(手捏)	9区		流路	6a層	№227	−	−	3.5～	(5.4)	にぶい橙 5YR 6/4	橙 5YR 6/6	石英・長石・雲母・角閃石・褐色粒	良好	ナデ	約1/3	
96	180	杯(手捏)	9区	D-29	流路	5層	№316 一括	(6.6)	−	4.5～	(7.4)	にぶい橙 7.5YR 6/4	橙 7.5YR 6/6	石英・長石細粒・角閃石・雲母・赤色酸化粒	良好	ナデ、指頭圧痕	約1/4	
96	181	杯(手捏)	9区			5層	№94	−	−	5.7～	7.8	にぶい橙 7.5YR 6/4	にぶい橙 7.5YR 6/4	石英・黒曜石・角閃石・金雲母	良好	ハケ後ナデ?、ナデ、指頭圧痕、底部外面にハケ目	約4/5	口縁の大部分と胴部の一部を欠損
96	182	杯(手捏)	9区			表土		(5.7)	3.2	4.7	6.2	橙 5YR 6/6	橙 5YR 6/6	石英・角閃石・金雲母	良好	ナデ、指頭圧痕	約4/5	口縁の大部分欠損
96	183	杯(手捏)	9区		流路	9層	№168	(6.1)	4.1	6.5	6.5	灰黄褐 10YR 5/2	灰黄褐 10YR 5/2	石英・黒曜石・金雲母	良好	ナデ、指頭圧痕、工具痕	約4/5	口縁と胴部の一部欠損
96	185	杯(手捏)	8区	D-25	流路	1層	手捏18～21	(7.7)	−	6.1	(7.0)	にぶい黄橙 10YR 6/3	にぶい橙 5YR 6/4	石英・角閃石・長石・金雲母	良好	横ナデ、ナデ	約3/4	口縁部～底部
96	186	器台(手捏)	8区	C-25	流路	1層	手捏3	−	4.9	3.0～	−	橙 5YR 6/6	橙 5YR 6/6	長石・石英・角閃石・雲母	良	ナデ、粗いナデ	−	外面の1/2磨滅
96	187	器台(手捏)	8区	D-25		1層		−	−	3.6～	−	橙 7.5YR 6/6 にぶい橙 7.5YR 6/4	橙 7.5YR 6/6 にぶい橙 7.5YR 6/4	雲母・白色細粒	良好	ナデ	−	一部に黒変
96	188	器台(手捏)	8区	C-25	流路	1層	手捏8	−	−	6.2～	−	灰白 5YR 8/1 橙 5YR 7/6	灰白 5YR 8/1 橙 5YR 7/6	長石・赤褐色粒・雲母	良	指押さえ、ナデ	−	
96	189	器台(手捏)	8区			表土		(5.1)	−	3.4～	−	明赤褐 5YR 5/8	明赤褐 5YR 5/8	石英・角閃石・黒曜石	良好		−	
96	190	器台(手捏)	8区				手捏1	(2.4)	(2.6)	3.3	−	橙 5YR 6/6	橙 5YR 6/6	石英・角閃石・金雲母	良好		−	
96	191	器台(手捏)	9区		流路	5層	№136	−	(3.3)	3.6～	−	黒褐 2.5YR 3/1	黒褐 2.5YR 3/1	長石・石英・金雲母	良	指頭圧痕、ナデ	−	

表55　祭祀遺物観察表（7）

〔有孔円板〕

法量（ ）は残存値

図版No.	報番	器種		石材	出土地点					法量(cm)						備考
					地区	グリッド	遺構	層位	取り上げ	長さ	幅	厚さ	孔径	孔間距離	重さ(g)	
98	198	有孔円板	双孔	滑石	8区	B-25	流路		No.9	5.25	(4.9)	0.5	0.2～0.25	0.9	22.2	側面に調整痕が残るがほぼ未製品
98	199	有孔円板	双孔	滑石	8区	C-25	流路	1層	No.6	2.8	2.85	0.4	0.15～0.2	0.35	4.5	側面の調整が未完の状態で出土
98	200	有孔円板	双孔	滑石	8区		表土			(2.7)	2.8	0.4	0.2	0.3	4.5	表には細かな調整痕、裏は不明、未製品
98	201	有孔円板	双孔	滑石	8区		表土			(3.8)	(3.2)	0.7	0.2	0.4	13.6	
98	202	有孔円板	双孔	滑石	8区		流路	3層		(2.7)	3.5	0.5	0.1～0.15	0.35	6.2	楕円形に成形、調整が荒く未製品か
98	203	有孔円板	双孔	滑石	8区	B-25	流路			(2.9)	(3.15)	0.5	0.2	0.5	6.6	全体に欠損
98	204	有孔円板	双孔	滑石	8区		表土			(3.2)	(3.3)	0.5	0.17	0.45	7.1	残存率が低く不明
98	205	有孔円板	双孔?	滑石	8区	B-24	流路	上層		(2.5)	(3.2)	0.4	0.2	1.4	4.6	残存率が低く、外形ラインは無し
98	206	有孔円板	単孔	滑石	8区			3層		2.0	1.9	0.3	0.15	－	2.2	
98	207	有孔円板	単孔	滑石	8区		表土		一括	(1.1)	1.25	0.4	0.15	－	0.8	四角形に近い、調整が荒く未製品
98	208	有孔円板	単孔?	滑石	8区	B-24		1層	No.7	(2.9)	(2.7)	0.45	0.2～0.4	－	4.3	2つの孔を穿っていたか?
98	209	有孔円板	双孔	滑石	9区		流路	6a層	No.341	3.8	4.0	0.4	0.2	0.2	10.8	
98	210	有孔円板	双孔	滑石	9区		流路	6層	No.85	(4.9)	6.2	0.6	0.2	0.3	32.6	
98	211	有孔円板	双孔	滑石	9区		流路	6a層	No.337	3.7	3.7	0.7	0.4	0.7	14.1	完形、裏面の穿孔の失敗が2ヶ所
98	212	有孔円板	双孔	滑石	9区		流路	6a層	No.346	(4.0)	4.6	0.5	0.15～0.2	0.35	14.0	約2/3残存
98	213	有孔円板	双孔	滑石	9区			表土		(4.3)	(3.8)	0.5	0.2	0.35	13.0	
98	214	有孔円板	双孔	滑石	9区		流路	5層	No.163	(2.5)	4.2	0.45	0.2	0.2	8.6	
98	215	有孔円板	双孔	滑石					一括	(3.6)	6.1	0.5	0.2	0.4	17.5	
99	216	有孔円板	双孔	滑石	9区			8層	No.50	3.0	(3.1)	0.4	0.2	0.17	6.0	
99	217	有孔円板	双孔	滑石	9区		流路	7層	No.236	(3.3)	(5.2)	0.55	0.15	0.4	13.4	約1/2残存
99	218	有孔円板	双孔	滑石	9区		流路	6a層	No.410	(2.4)	(2.6)	0.5	0.2	0.25	4.3	約1/4残存
99	219	有孔円板	双孔	滑石	9区		流路	6b層	No.228	(1.7)	(3.4)	0.45	－	0.4	4.3	約1/2残存
99	220	有孔円板	双孔	滑石	9区		流路トレンチ			(2.7)	(2.8)	0.5	－	0.5	4.0	
99	221	有孔円板	単孔	滑石	9区		流路	6a層	No.232	4.2	4.8	0.5	0.3	－	20.7	
99	222	有孔円板	単孔	滑石	9区		流路	5層	No.84	(5.3)	5.9	0.5	0.4	－	33.6	
99	223	有孔円板	単孔	滑石	9区		流路	7層	No.285	4.9	4.8	0.6	0.25	－	23.8	
99	224	有孔円板	単孔	滑石	9区			6a層	No.342	(5.0)	5.1	0.55	0.3	－	21.1	
99	225	有孔円板	単孔	滑石	9区		流路	6a層	No.231	(4.25)	4.7	0.5	0.35	－	15.3	
99	226	有孔円板	単孔	滑石	9区			6a層	No.422	(3.7)	4.0	0.4	0.35	－	11.2	完成形
99	227	有孔円板	単孔	滑石	9区			6a層	No.415	2.6	(2.5)	0.4	0.2	－	3.9	表面に鋭利な刃み?傷か
99	228	有孔円板	単孔	滑石	9区		流路		No.240	(5.6)	(3.9)	0.5	0.2	－	17.8	
99	229	有孔円板	単孔	滑石	9区		流路			3.7	3.95	0.5	0.4	－	11.3	
99	230	有孔円板	単孔	滑石	9区			6c層	No.249	3.0	3.2	0.6	0.2	－	7.2	

表56　祭祀遺物観察表（8）

〔有孔円板〕

法量（ ）は残存値

図版No	報番	器種		石材	出土地点					法量(cm)						備考
					地区	グリッド	遺構	層位	取り上げ	長さ	幅	厚さ	孔径	孔間距離	重さ(g)	
100	231	有孔円板	単孔	滑石	9区				No229	(2.9)	(2.8)	0.6	0.15	−	6.3	輪郭のほとんど欠損
100	232	有孔円板	単孔	滑石	9区		流路		No18	(2.8)	(2.4)	0.3	0.1	−	3.0	
100	233	有孔円板	単孔	滑石	9区		流路	5層	No226	(3.2)	(2.8)	0.8	0.25	−	9.0	
100	234	有孔円板?	単孔	滑石	9区	B-31				0.9	1.1	0.3	0.15	−	0.4	再加工か?
100	235	有孔円板	単孔	滑石	9区			5層	No111	2.45	2.8	0.8	0.2~0.35	−	7.2	転用?残存率が低く不明
100	236	有孔円板	単孔	滑石	9区		流路	6層	No165	(2.4)	(2.7)	0.45	0.25	−	4.0	未製品か
100	237	有孔円板	単孔	滑石	9区		流路	6b層	No230	(2.1)	(3.0)	0.5	0.3	−	3.0	
100	238	有孔円板	単孔	滑石	9区	D-29		6層		(1.85)	(1.8)	(0.5)	0.25	−	2.5	側面に調整痕、未製品
100	239	有孔円板	単孔	滑石	9区					(2.3)	2.6	0.4	0.15	−	3.6	未製品
100	240	有孔円板	単孔	滑石	9区	C-32	流路	8層		(2.1)	(2.25)	(0.5)	0.2	−	3.0	側面の調整痕から未製品?
100	241	有孔円板	単孔	滑石	9区		流路	6a層	No356	(2.8)	(2.4)	(0.6)	0.2	−	4.1	
100	242	有孔円板	単孔	滑石	9区	C-30		6a層		(2.0)	(1.8)	(0.5)	0.15~0.2	−	1.6	
100	243	有孔円板	単孔?	滑石	9区		流路		No241	(3.5)	(2.9)	(0.55)	-	−	5.9	残存率は低いが丁寧な調整
100	244	有孔円板	単孔	滑石	9区		流路	6c層	No245	(3.8)	(2.9)	(0.8)	-	−	9.5	
100	245	有孔円板	単孔	滑石	9区					(2.9)	(1.9)	0.45	-	−	4.3	穿孔は両側より
100	246	有孔円板	単孔	滑石	9区	C-29				(2.5)	(2.3)	0.45	-	−	4.5	磨いて成形した痕跡
100	247	有孔円板	単孔	滑石	9区	C-29	流路	6a層		(1.5)	(2.1)	(0.4)	-	−	1.7	転用?残存率が低い
100	248	有孔円板	単孔?	滑石	9区		流路トレンチ			(1.9)	(2.5)	0.5	-	−	3.3	転用?残存率が低い
100	249	有孔円板	単孔	滑石	9区			6a層	No351	(2.1)	(1.6)	(0.3)	-	−	1.1	
100	250	有孔円板	単孔?	滑石	9区	C-30		6a層		(2.8)	(1.85)	(0.5)	-	−	2.6	転用?残存率が低い
100	251	有孔円板	単孔	滑石	9区	D-29				(2.7)	(1.5)	0.3	0.2	−	1.4	
100	252	有孔円板	単孔?	滑石	9区					(1.7)	(1.6)	0.4		−	1.1	転用?残存率が低い

表57　祭祀遺物観察表（9）

〔石製模造品〕

法量（ ）は残存値

図版No.	報番	器種	石材	出土地点					法量(cm)				残存部位	備考
				地区	グリッド	遺構	層位	取り上げ	長さ	幅	厚さ	重さ(g)		
79	28	石製模造品（剣形）	滑石	6区			表土	一括	3.2	3.1	0.60	9.0		未製品、擦切痕あり
101	253	石製模造品（剣形）	滑石	8区	B-24	流路	1層		(5.1)	2.1	0.6	6.9	ほぼ完形	
101	254	石製模造品（剣形）	滑石	8区	B-24	流路			(5.1)	(3.0)	0.7	13.2	先端～刃部	
101	255	石製模造品（剣形）	滑石	8区	C-25	流路	3層	一括	(6.6)	(1.9)	1.0	19.7	先端～刃部	鋸ひき様の切断面（擦切痕）両側面あり
101	256	石製模造品（剣形）	滑石	8区	B-24,25	流路	1層	一括	(3.6)	(2.1)	0.7	8.6	刃部	残存状態が悪い
101	257	石製模造品（剣形）	滑石	8区	B-24	流路		石10	(5.0)	(1.6)	0.7	7.4	先端～刃部	裏面は殆どが剥離
101	258	石製模造品（剣形）	滑石	8区			表土	一括	(2.6)	(1.9)	0.75	5.3	刃部	
101	259	石製模造品（剣形）	滑石	8区			表土		(2.4)	1.8	0.65	3.8	刃部	
101	260	石製模造品（剣形）	滑石	9区		流路	6b層	No357	(8.6)	3.8	1.1	45.3	ほぼ完形	先端のみ欠損
101	261	石製模造品（剣形）	滑石	9区				一括	(6.0)	(2.7)	0.5	12.3	ほぼ完形	先端、基部末端のみ欠損
101	262	石製模造品（剣形）	滑石	9区			6a層	No421	(4.2)	(2.65)	0.6,0.85	11.0	刃部～基部	
101	263	石製模造品（剣形）	滑石	9区	D-30				(2.1)	(1.5)	(0.5)	1.6	基部	基部付根の傾斜角度が左右で異なる
101	264	石製模造品（剣形）	滑石	9区			6a層	No407	(3.3)	(2.2)	0.5	4.5	先端～刃部	
101	265	石製模造品（剣形）	滑石	9区		流路	6層	No86	(5.9)	(2.7)	0.8	17.2	刃部	右側面の舌部分は、入りが浅い
101	266	石製模造品（剣形）	滑石	9区	D-29	流路	5層		(6.6)	2.4	(0.9)	16.2	先端～刃部	左右の側面の角度が違う、三点接合
101	267	石製模造品（剣形）	滑石	9区		流路		No16	(3.4)	(2.2)	(0.6)	5.0	基部	側面上方に微細な刻み
102	268	石製模造品（剣形）	滑石	9区		流路トレンチ	5層	No312	(11.8)	4.8	1.4	112.4	ほぼ完形	
102	269	石製模造品（剣形）	滑石	9区			6a層	No352	(11.4)	(3.9)	(1.1)	50.0	ほぼ完形	柳葉形
102	270	石製模造品（剣形）	滑石	9区		流路		No315	(3.8)	(2.5)	(0.7)	6.6	先端～刃部	
102	271	石製模造品（剣形）	滑石	9区		流路	5層	No75	(10.1)	(3.5)	(1.3)	46.0	先端～刃部	二点接合
102	272	石製模造品（剣形）	滑石	9区			8層	No360	(9.3)	(3.7)	(1.2)	43.7	刃部	二点接合
102	273	石製模造品（剣形）	滑石	9区	C-29	流路	4層		(5.7)	(2.6)	0.6	10.7	先端～刃部	
102	274	石製模造品（剣形）	滑石	9区	C-29		6a層	一括	(5.9)	(2.4)	(0.7)	11.6	刃部	
102	275	石製模造品（剣形）	滑石	9区		流路	6b層	No355	(7.9)	(3.7)	(0.9)	24.3	先端～刃部	
102	276	石製模造品（剣形）	滑石	9区			表土		(5.5)	(4.3)	1.1	31.5	先端部	
102	277	石製模造品（剣形）	滑石	9区			6a層	No416	(6.45)	2.85	0.8	20.2	先端～刃部	
103	278	石製模造品（剣形）	滑石	9区		流路	6c層	No258	(5.4)	(3.0)	(0.7)	13.2	先端～刃部	
103	279	石製模造品（剣形）	滑石	9区			6a層	No413	(4.4)	(2.7)	0.5	6.6	先端～刃部	
103	280	石製模造品（剣形）	滑石	9区		流路	5層	No94	(5.4)	2.5	0.5	10.5	刃部	三点接合
103	281	石製模造品（剣形）	滑石	9区		流路	8層	No332	(3.95)	(2.8)	(0.8)	11.1	先端部	
103	282	石製模造品（剣形）	滑石	9区		流路	6層	No112	(6.1)	2.75	0.7	15.3	刃部	
103	283	石製模造品（剣形）	滑石	9区			6a層	No409	(4.3)	2.9	0.6	11.2	刃部	
103	284	石製模造品（剣形）	滑石	9区		流路	5層	No296	(3.7)	2.7	0.7	9.1	刃部	
103	285	石製模造品（剣形）	滑石	9区		流路	6層	No103	(2.8)	1.7	0.7	3.6	先端部	
103	286	石製模造品（剣形）	滑石	9区		流路	5層	No297	(2.35)	1.85	0.5	2.6	先端部	

表58　祭祀遺物観察表（10）

〔石製模造品〕

法量（ ）は残存値

図版No.	報番	器種	石材	出土地点					法量(cm)				残存部位	備考
				地区	グリッド	遺構	層位	取り上げ	長さ	幅	厚さ	重さ(g)		
103	287	石製模造品（剣形）	滑石	9区	D-29	流路	6b層		(2.2)	1.7	4.0	2.0	刃部	擦痕あり
103	288	石製模造品（剣形）	滑石	9区	C-30		5層		(4.9)	3.2	0.95	20.5	刃部～基部	
103	289	石製模造品（剣形）	滑石	9区		流路		No347	(3.4)	1.15	0.7	7.6	先端部	
103	290	石製模造品（剣形）	滑石	9区		流路	5層	No92	(3.7)	2.8	0.6	8.7	先端部	
103	291	石製模造品（剣形）	滑石	9区	D-29		6b層		(2.4)	1.9	0.6	4.1	刃部	
103	292	石製模造品（剣形）	滑石	9区				No117	(2.7)	2.05	0.5	3.6	先端部	
104	295	紡錘車	滑石	8区	B-26		2層		(4.6)	4.8	1.0	32.5	完形	孔径0.8cmの孔あり

表59　祭祀遺物観察表（11）

〔その他〕

法量（ ）は残存値

図版No.	報番	器種	出土地点					法量(cm)			色調	胎土	焼成	残存部位	備考
			地区	グリッド	遺構	層位	取り上げ	長さ	幅	厚さ					
97	192	甑・取瓶	9区	北東	流路	2,3層		—	—	1.7～	灰赤　2.5YR 5/2 黄灰　2.5Y 4/1	石英・長石・雲母	良	口縁部～体部	特に口縁部は焼け跡が著しい
97	193	羽口	8区	C-24				(8.6)	(5.5)	厚さ(5.9)		石英・長石・金雲母・赤褐色粒			
97	194	羽口	8区	C-25?				(7.2)	(7.8)	厚さ(7.0)		石英・長石・金雲母			
97	195	支脚	8区	C-25	流路	1層	土10, 支3,7	—	—	12.1～	橙　5YR 6/6	輝石・石英・長石・赤褐色粒	良	頭部・ 胴部～底部	
97	196	支脚	8区	C-25	流路	1層	支2	—	16.0	19.75	明赤褐　5YR 5/6	輝石・長石・角閃石・雲母・ 赤褐色粒	良	ほぼ完形	下部にかなり強い指頭圧痕
97	197	支脚	8区	C-25	流路	1層	支1	—	(13.0)	18.5	橙　5YR 6/6	石英・長石・角閃石・輝石・雲母	良好	頭部～底部	
116	379	釘　（青銅製）	8区	B-25	流路	1層		(0.4)	0.3	（重さ）0.1g					飾り金具をつける道具

表60　祭祀遺物観察表（12）

法量（ ）は残存値

図版No.	報番	器種	出土地点					法量(cm)			色調	胎土	焼成	残存部位	備考
			地区	グリッド	遺構	層位	取り上げ	長さ	最大胴径	最大穿孔径					
30	12	土偶	1区					(4.7)	2.9	2.3	黒　N 2/	石英・長石・角閃石・雲母	良	腕?	全体を研磨し、おそらく赤色顔料塗布?
62	12	土錘	5区		SE517	上層		4.6	1.2	0.5	にぶい黄褐 10YR 6/3	角閃石・輝石・石英・長石・ 雲母・赤褐色粒	良	完形	刺網系
69	23	土錘	5区					5.7	2.4	1.0	にぶい橙 7.5YR 7/4	角閃石・輝石・長石・雲母・ 赤褐色粒	良	ほぼ完形	刺網系
78	23	土偶	6区		流路	上層		(8.4)	胴部幅4.0	胸部2.8 腹部3.2	褐灰　10YR 4/1	石英・長石・角閃石	良		頭部欠損
79	27	土偶	6区			表土		4.0	3.4	5.2～	にぶい黄　2.5Y 6/3	石英・長石・金雲母	良	足	土偶の右足?内側は摩滅
125	1	土錘	10区		SE1003	埋1層, ﾍﾞﾙﾄ		5.6	1.6	0.5	赤褐　10R 5/4	輝石・雲母	良	完形	刺網系、胴部に細い紐のような痕
131	8	土錘	10区		SD1008		一括	5.2	1.4	0.4	明赤褐　5YR 5/6	角閃石・輝石・石英・赤褐色粒	良	完形	刺網系
131	9	土錘	10区		SD1010	北側	一括	3.5～	(1.7)	0.5	橙　2.5YR 6/6	角閃石・輝石・長石	良	約2/3	刺網系?
136	43	土錘	10区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ		下層		3.6	1.9	0.5	橙　5YR 6/6	輝石・長石・赤褐色粒	良	完形	刺網系

表61　土製品観察表

法量（ ）は残存値

図版No.	報番	器種	石材	出土地点					法量(cm)				備考
				地区	グリッド	遺構	層位	取り上げ	長さ	幅	厚さ	重さ(g)	
26	1	扁平打製石斧	流紋岩	小田2区	西			一括	12.4	7.0	2.4	228.0	刃部を局部的に磨く
26	2	紡錘車	凝灰岩	小田2区			表土	一括	(4.5)	4.7	1.3	21.3	
30	3	石鏃	頁岩	1区		流路	9層	一括	2.0	2.3	0.6	1.9	細かな加工なし
30	4	打製石斧	結晶片岩	1区		流路		S1	8.0	5.8	1.6	87.3	左側面から刃部に剥離あり
30	10	砥石（有溝）	砂岩	1区		流路			10.2	6.9	4.2	397.4	表面のみ有溝、溝の中央部から割れる
30	11	砥石	砂岩	1区		流路			13.6	6.2	2.4	313.8	
33	21	石鏃	黒曜石	1区	グリッド		9層	一括	4.0	1.9	0.6	2.7	基部加工が側縁、側面加工なし
33	22	扁平打製石斧	結晶片岩	1区	グリッド	包含層	5～7層		9.6	5.0	1.1	76.4	摩滅
33	23	敲石	砂岩	1区				一括	9.1	8.9	2.5	280.2	
33	24	砥石（有溝）	砂岩	1区	グリッド			一括	19.1	12.6	10.8	2400.0	幅溝あり
33	25	石皿	輝石安山岩	1区				一括	(23.0)	(13.1)	5.1	2422.3	
33	26	打製石斧	結晶片岩	1区	グリッド			一括	3.6	9.5	1.0	48.4	
67	18	磨製石鏃	結晶片岩	5区		SD516	中層		3.9	1.6	0.2	2.3	全面を丁寧に磨く
69	24	扁平打製石斧	結晶片岩	5区		包含層	1～3層	一括	11.9	6.1	1.0	78.7	裏面に刃部形成の擦痕あり
69	25	扁平打製石斧	結晶片岩	5区	グリッド			一括	13.3	6.9	1.0	122.1	側面に丁寧な加工、刃部一部に擦痕
69	26	扁平打製石斧	結晶片岩	5区	グリッド			一括	9.3	4.8	1.3	72.9	刃部、側面ともに丁寧な剥離
72	1	石皿	輝石安山岩	6区		SD601	1層	No1	(16.2)	(12.1)	4.2	987.2	すり痕
78	21	石錘	変ハンレイ岩	6区		流路	2層	No4	4.8	3.4	0.9	22.8	打欠石錘
78	22	石錘	花崗岩	6区		流路			5.3	3.7	1.2	31.3	打欠石錘
79	29	扁平打製石斧	安山岩	6区	B-9 ,10			一括	16.9	8.1	1.9	276.0	刃部の擦痕あり
84	22	扁平打製石斧	結晶片岩	7区		SD702			12.1	5.5	1.2	100.3	右側の加工多い
104	294	石製模造品	砂岩	8区		流路	3層		6.0	4.4	0.9	29.9	河原石を利用?
113	359	石鏃	流紋岩	8区		流路 北側トレンチ	中層		2.3	1.6	0.4	0.8	全面に丁寧な剥離
113	360	石鏃	安山岩	8区	C-24	流路	1層		(2.1)	1.1	0.3	0.5	正面、基部に丁寧な加工
113	361	磨製石斧	蛇紋岩	8区	C-23			一括	(11.3)	4.0	1.8	107.8	全面を丁寧に磨く
113	362	砥石（有溝）	砂岩	8区		カクラン	南下層		(4.8)	(5.6)	1.5	38.4	表裏溝あり
113	363	砥石（有溝）	砂岩	8区	C-25	流路 土器溜まり10	1層		(6.2)	(5.7)	3.0	139.4	表面のみ有溝
113	364	石錘	輝石安山岩	9区	C-32	流路	5層		9.8	6.3	5.4	461.1	4面にくぼみあり、溝あり
113	365	石錘	輝石安山岩	8区	C-25	流路 土器溜まり10	1層		8.3	6.6	4.8	315.8	磨石の転用品
113	366	敲石	輝石安山岩	8区		流路		一括	9.5	6.8	5.9	476.5	
113	367	敲石	輝石安山岩	8区		流路 南側トレンチ	1層		8.6	5.6	4.0	258.4	
113	368	磨石	輝石安山岩	8区	C-25	流路	3層	一括	10.1	7.9	6.7	781.7	

表62　石器観察表（1）

図版No.	報番	器種	石材	出土地点					法量(cm)				備考
				地区	グリッド	遺構	層位	取り上げ	長さ	幅	厚さ	重さ(g)	法量( )は残存値
114	369	敲石	輝石安山岩	8区	B-24	流路		一括	12.0	8.7	4.1	633.5	
114	370	磨石	安山岩	9区	D-29	流路	6層		11.0	10.0	4.7	789.4	敲石としても使用
114	371	磨石	変ハンレイ岩	9区		流路	9層	№222	9.8	9.75	4.6	724.3	敲石としても使用
114	372	磨石	岩滓(スコリア)	9区	北東	流路	2,3層		4.3	3.8	4.7	54.6	
115	373	軽石二次加工品	軽石	9区			6層	№46	26.65	(12.1)	(5.3)	704.4	
115	374	軽石二次加工品	軽石	9区			8層	№42	18.8	13.1	7.1	441.4	
116	377	石包丁	頁岩	8区		表土		一括	3.8	10.4	0.6	34.5	表裏面の擦痕が顕著
131	12	軽石二次加工品	軽石	10区		SD1013	上層	一括	13.7	(13.4)	6.1	142.1	祭祀用?
131	13	軽石二次加工品	軽石	10区		SD1006		一括	(9.8)	(7.2)	(3.7)	43.7	祭祀用の舟
131	14	敲石	輝石安山岩	10区		SD1012	床面	一括	11.0	5.3	4.8	398.1	
131	15	石錘	輝石安山岩	10区		SD1012		№51	9.2	(7.9)	5.0	545.7	磨石の転用品、すり痕あり
131	16	軽石二次加工品	軽石	10区		SD1010	北側上層	一括	10.7	10.6	5.3	151.5	くぼみの部分に削り痕あり
132	24	軽石二次加工品	軽石	10区		SD1011			(6.8)	(6.9)	4.7	37.2	祭祀用
132	25	軽石二次加工品	軽石	10区		SD1010			9.8	9.4	5.0	108.4	
132	26	軽石二次加工品	軽石	10区		SD1010		一括	14.75	11.95	5.4	329.5	
134	29	軽石二次加工品	軽石	10区		SK1009	1層	一括	14.6	14.5	(6.2)	336.2	祭祀用?
135	31	打製石斧(円盤形)	安山岩	10区	グリッド		上層		9.8	10.6	2.3	295.0	刃部は摩滅
135	32	扁平打製石斧(分銅型)	結晶片岩	10区	グリッド		上層		11.5	7.6	1.6	131.8	裏面中央に摂理あり
135	33	磨製石斧	結晶片岩	10区	グリッド				9.6	5.1	1.4	1116.4	全面を丁寧に磨く、側面に局部的な剥離
135	34	磨製石斧	泥質片岩	10区	グリッド				18.8	10.4	2.9	686.0	表右側と裏中央に敲打痕あり
135	35	磨製石斧	頁岩	10区	グリッド		下層		16.3	5.7	5.1	560.0	全体を丁寧に磨き敲打
135	36	磨製石斧	頁岩	10区	グリッド		上層	一括	14.0	6.6	3.2	368.0	刃部に剥離
136	37	石錘	輝石安山岩	10区				一括	7.7	4.5	3.4	121.1	裏面は割れる、3面にくぼみあり
136	38	磨石	軽石	10区	グリッド			一括	6.2	4.7	4.5	29.8	
136	39	敲石	輝石安山岩	10区		ベルト			8.7	7.25	5.1	337.8	
136	41	軽石二次加工品	軽石	10区				一括	8.45	8.6	3.0	44.7	表にくぼみ、裏に穿孔あり
136	42	軽石二次加工品	軽石	10区		カクラン	下層		15.8	11.8	5.2	324.4	祭祀用
136	44	石斧(刃部)	蛇紋岩	10区	グリッド				(1.85)	2.2	(0.65)	3.0	

表63　石器観察表（2）

法量（ ）は残存値

図版No.	報番	器種	出土地点 地区	グリッド	遺構	層位	取り上げ	法量(cm) 長さ	幅	厚さ(高さ)	樹種	備考
32	19	丸木弓	1区		流路		木−44	(45.7)	1.9	1.9	イヌガヤ科イヌガヤ属 イヌガヤ	
61	9	横櫛	5区		SE506	8層	木−20	9.5	3.0	1.3	ハイノキ科ハイノキ属	
61	11	盤（把手付き）	5区		SE506	7層	木−9	40.0	30.0	8.0	バラ科サクラ属	
82	1	木鍾（槌の子）	7区		SE701	4層	No.16	12.7	4.8	5.4	ツバキ科ツバキ属	
82	2	横櫛	7区		SE701	4層	No.31	12.0	4.0	0.5	マンサク科イスノキ属 イスノキ	
117	381	平鍬	9区		流路	9層	No.197	40.1	12.0	0.3	ブナ科コナラ属 アカガシ亜属	
117	382	三又鍬	9区		流路	9層	No.197	30.0	13.0	1.0	ブナ科コナラ属 アカガシ亜属	
117	383	二又鍬	9区		流路	9層	No.197	33.6	8.8	0.6	ブナ科コナラ属 アカガシ亜属	
117	384	斧柄	9区		流路	9層	No.208	53.4	17.4	3.8	ツバキ科サカキ属 サカキ	
117	385	平鍬	9区	C-32		9層	一括	(34.8)	12.0	1.4	ブナ科コナラ属 アカガシ亜属	片側面の端部2/3は欠損
117	386	作業台	9区		流路	9層	No.166	35.0	25.0	6.0	クスノキ科クスノキ属 クスノキ	
118	387	建築部材（楯）	9区		流路	9層	No.72	98.0	12.0	4.0	センダン科センダン属 センダン	
118	388	盤	9区		流路	9層	No.198	(34.4)	11.5	11.5	ブナ科クリ属 クリ	二ヶ所の穿孔
118	389	田舟	9区		流路		No.88	109.2	20.4	13.7	バラ科サクラ属	
119	390	不明（杓子）	9区		流路	9層	No.194	10.0	7.0	0.8	ブナ科コナラ属 アカガシ亜属	
119	391	盤（片把手付き）	9区		流路	8層	No.174	39.4	(16.6)	7.9	クスノキ科クスノキ属 クスノキ	
119	392	盤	9区		流路	8層	No.36	33.0	33.0	9.5	イチイ科カヤ属 カヤ	脚台が付く
119	393	不明	9区		流路	9層	No.64	38.0	15.0	16.0	クワ科クワ属	盤の未製品?
131	17	小型舟形	10区		SD1010	6層	北壁一括	10.0	3.5	2.5	マツ科マツ属（二葉松類）	形代?
131	18	舟形	10区		SD1010	南壁	No.4	22.0	6.0	3.0	クスノキ科クスノキ属 ヤブニッケイ	形代?
131	19	下駄	10区		SD1010	南壁	No.10	14.5	7.5	3.5	スギ科スギ属 スギ	

表64　木器観察表

図版No.	報番	器種	出土地点 地区	グリッド	遺構	層位	取り上げ	法量(cm) 高さ	上端径	最大径	下端径	備考
126	4	五輪塔（空風輪）	10区		SK1012	下層	No.16	22.5〜	−	12.0	10.0	凹高1.5cm、（風部）最大径11.6cm
126	5	五輪塔（水輪）	10区		SE1010	南壁	No.7	42.5	30.0	35.2	28.5	黒色顔料、四面梵字あり
127	6	宝塔（輪部）	10区		SE1024		No.8	35.0	20.1	36.8	23.3	赤色顔料、四面梵字あり
127	7	五輪塔（地輪?）	10区		SE1024	南側	一括	11.7	（縦）31.6	（横）31.4	−	

表65　五輪塔等観察表

法量（ ）は残存値

図版No.	報番	器種	出土地点 地区	グリッド	遺構	層位	法量(cm) 長さ	幅	高さ(厚さ)	色調	焼成	胎土	備考
32	18	破鏡（内行花文鏡）	1区		流路	包含層、7層	3.0	4.7	0.5				紐座1.3cm、紐0.2cm、割れ面は尖頂部を除いて研磨
116	379	円面硯（須恵器）	8区	D-25	流路	1層	(19.6)	−	3.6〜	灰　N 5/	良好	長石・砂粒	硯部一部
116	380	蓮盃	9区	南西	流路	1層	3.3	4.5	2.1				石材は滑石、紅入れ?
124	10	円面硯（須恵器）	10区		SD1008		−	4.3	3.3〜	灰　N 6/	良	輝石・長石・赤褐色粒	獣脚部、粘土付着

表66　その他遺物観察表

写　真　図　版

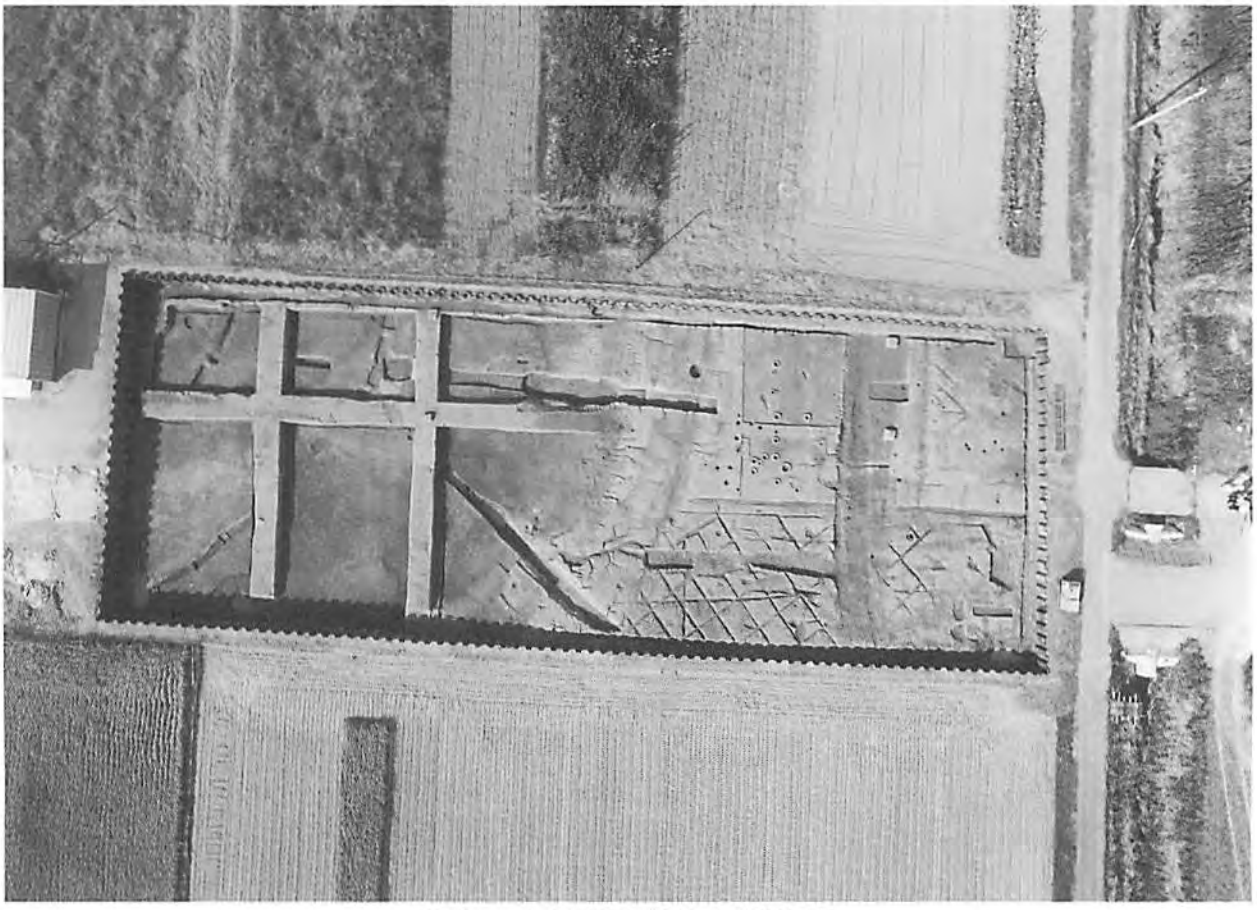
図版1　養寺遺跡 航空写真

図版2　小田2区 航空写真

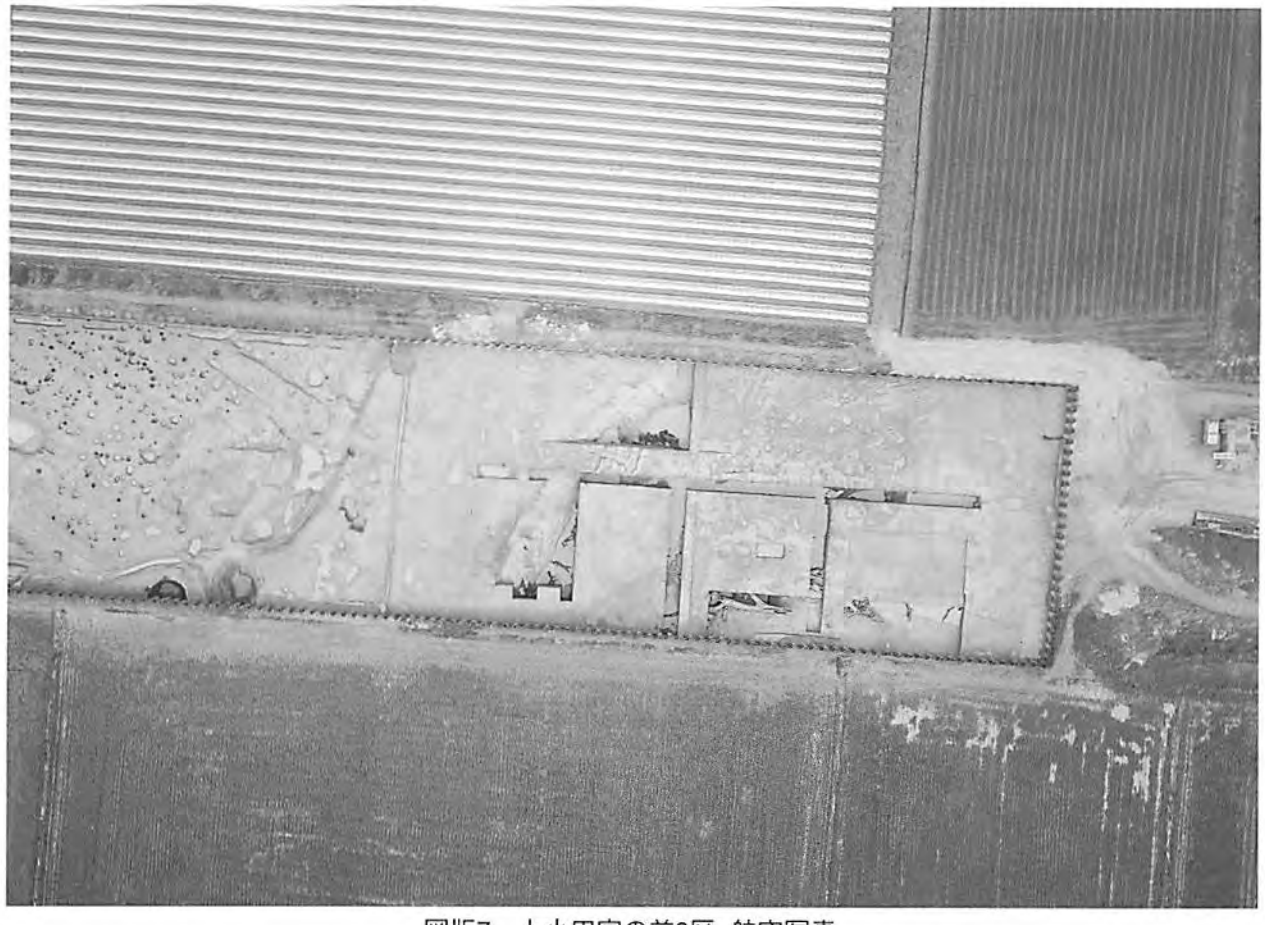
図版3　上小田宮の前 5・6区 航空写真

図版4　上小田宮の前5区（SF501） 航空写真

図版5　上小田宮の前7区 航空写真



図版6　上小田宮の前8区 航空写真



図版7　上小田宮の前9区 航空写真

図版8　上小田宮の前10区 航空写真

図版9　養寺遺跡全景

図版10　SB01 完掘状況（北から）

図版11　SB02 完掘状況（東から）

図版12　SB03 完掘状況（北から）

図版13　SB04 完掘状況（北から）

図版14　SB05・06 完掘状況（北から）

図版15　SB07 完掘状況（東から）

図版16　SB08 完掘状況（東から）

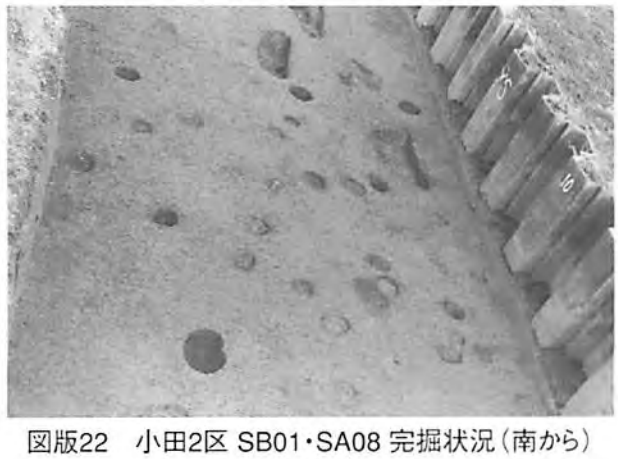
図版17　SB10 完掘状況（東から）

図版18　SB13 完掘状況（北から）

図版19　SB14 完掘状況（北から）

図版20　SB15 完掘状況（北から）

図版21　SK01・02・03 完掘状況（西から）



図版22　小田2区 SB01・SA08 完掘状況（南から）

図版23　SB02・04 完掘状況（南から）

図版24　SB23・24・SA11 完掘状況（南から）

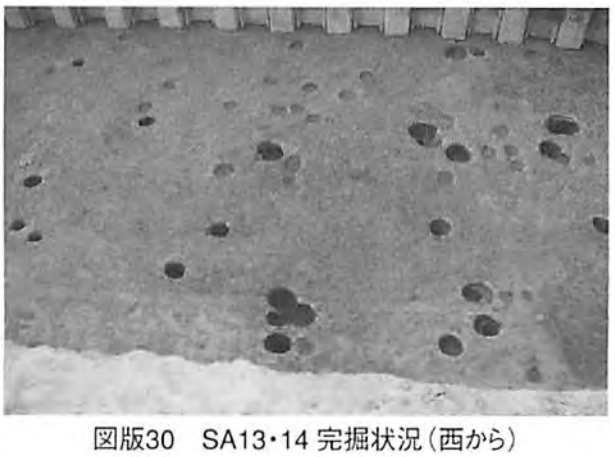
図版25　SB25 完掘状況（北東から）

図版26　SB26・27 完掘状況（南から）

図版27　SI01 完掘状況（南から）

図版28　SI06 完掘状況（南から）

図版29　SI09・10 完掘状況（南から）



図版30　SA13・14 完掘状況（西から）

図版31　SA03・05 完掘状況（南から）

図版32　小田3区 SI10 完掘状況（南から）

図版33　SI02 完掘状況（東から）

図版34　SB02 完掘状況（西から）

図版35　SB03 完掘状況（北から）

図版36　SA01 完掘状況（西から）

図版37　SE01 完掘状況（東から）

図版38　SE12 完掘状況（西から）

図版39　SK03 完掘状況（南東から）

図版40　上小田宮の前1区 SI101 完掘状況（北から）

図版41　SI102 完掘状況（南から）

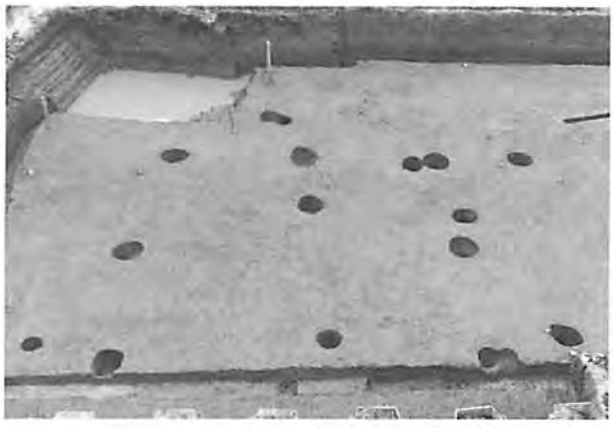
図版42　SK101・102・103 完掘状況（東から）

図版43　SK105 完掘状況（北から）

図版44　SK108 完掘状況（西から）

図版45　1区 完掘状況（南から）

図版46　上小田宮の前2区 全景



図版47　SB201 完掘状況（東から）

図版48　SD201 完掘状況（西から）

図版49　SX201 完掘状況（南東から）

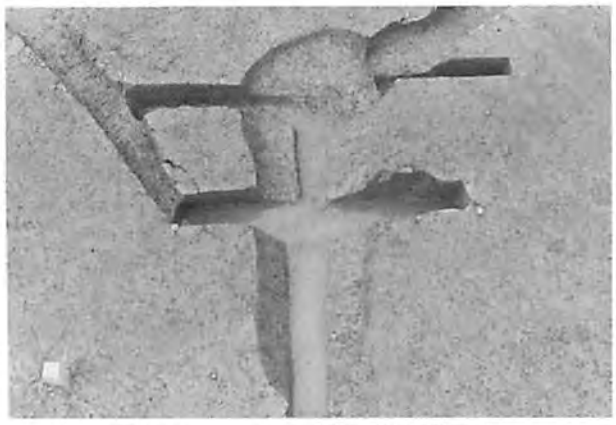
図版50　SX202 完掘状況（北から）

図版51　上小田宮の前3区 SI301 完掘状況（東から）

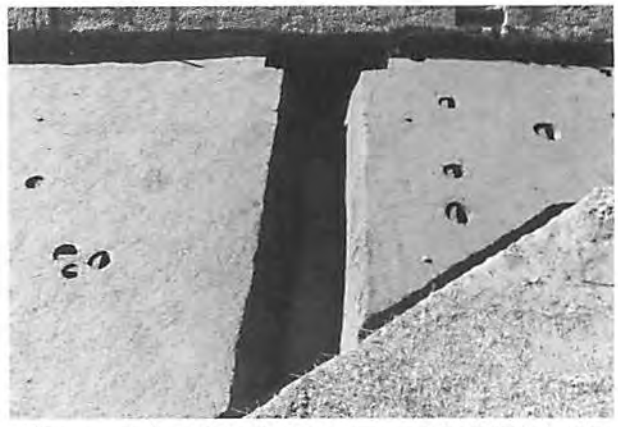
図版52　SB301・SD304・305 完掘状況（南から）

図版53　SD306 完掘状況（東から）

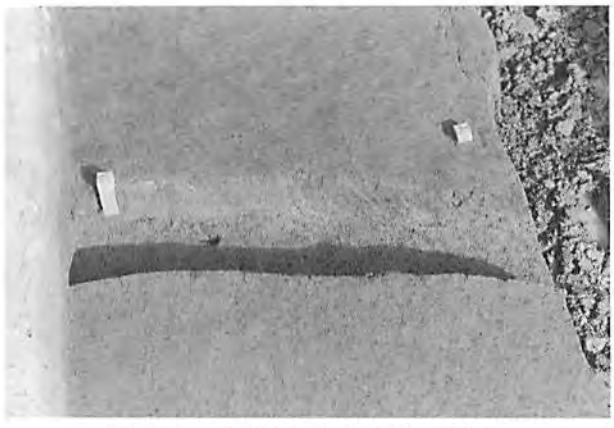
図版54　SK305 完掘状況（北から）



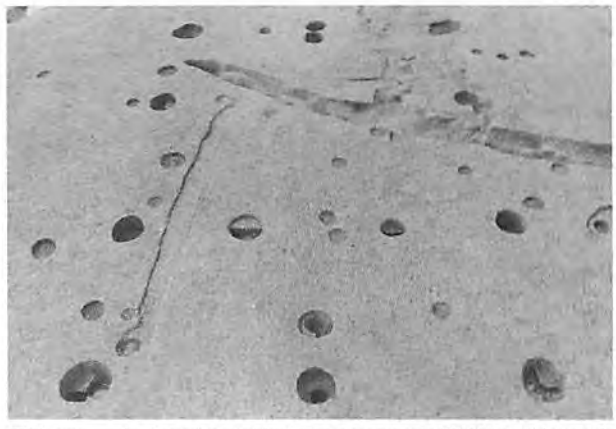
図版55　SK306 完掘状況（東から）



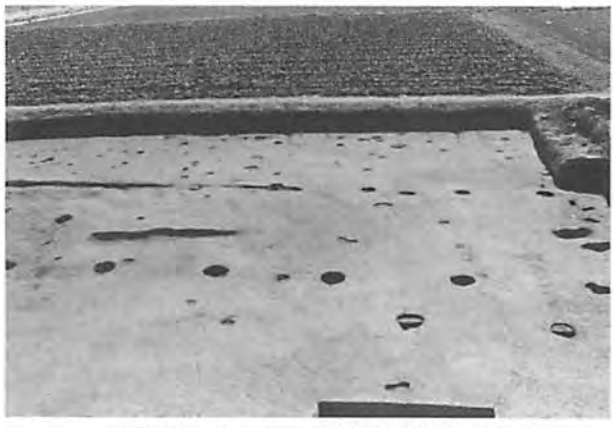
図版56　上小田宮の前4区 SD401 完掘状況（東から）



図版57　SD402 完掘状況（南から）



図版58　上小田宮の前5区 SB501 完掘状況（東から）



図版59　SB502 完掘状況（北から）

図版60　SB504 完掘状況（東から）

図版61　SE506 遺物出土状況（北西から）

図版62　SE515 完掘状況（東から）

図版63　SE517 完掘状況（東から）

図版64　SD510 完掘状況（南から）

図版65　SD511 完掘状況（北から）

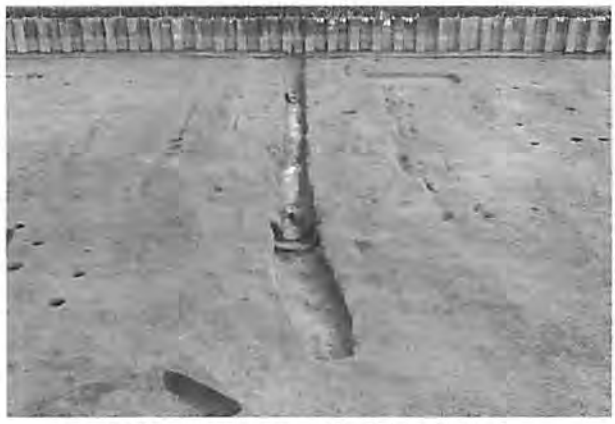
図版66　SD512・513・517・SF501 完掘状況（北から）

図版67　SD514 完掘状況（北から）

図版68　SD515・516 完掘状況（北から）

図版69　SK521 遺物出土状況（東から）

図版70　上小田宮の前6区 SE606 完掘状況（南西から）



図版71　SD601 完掘状況（北から）

図版72　SD602 完掘状況（西から）

図版73　SD603 完掘状況（南から）

図版74　SK603 遺物出土状況（南東から）

図版75　SK607 遺物出土状況（南西から）

図版76　SK607 完掘状況（北東から）

図版77　6区流路遺物出土状況（北西から）

図版78　6区流路検出状況（北西から）

図版79　上小田宮の前7区 SB701 検出状況（南から）

図版80　SE701 遺物出土状況（南西から）

図版81　SE701 完掘状況（北東から）

図版82　SD701 完掘状況（北東から）

図版83　SD702 完掘状況（北西から）

図版84　SD703 完掘状況（西から）

図版85　SD705 完掘状況（北西から）

図版86　SD706 完掘状況（南西から）

図版87　上小田宮の前8区流路検出状況（南から）

図版88　8区土器溜まり③（北から）

図版89　8区羽口（東から）

図版90　8区土製丸玉（東から）

図版91　8区支脚（北から）

図版92　8区土器溜まり⑤（西から）

図版93　8区土器溜まり⑥（西から）

図版94　8区土器溜まり⑦（西から）

図版95　上小田宮の前9区5・6層遺物出土状況

図版96　9区7層遺物出土状況（西から）

図版97　9区8層遺物出土状況（西から）

図版98　9区8層遺物出土状況（北から）

図版99　9区8層遺物出土状況（東から）

図版100　9区9層木製品出土状況

図版101　9区遺物出土状況（東から）

図版102　上小田宮の前10区 SB1001検出状況（北から）

図版103　SB1002 検出状況（北から）

図版104　SB1003 検出状況（北から）

図版105　SE1008 遺物出土状況（南から）

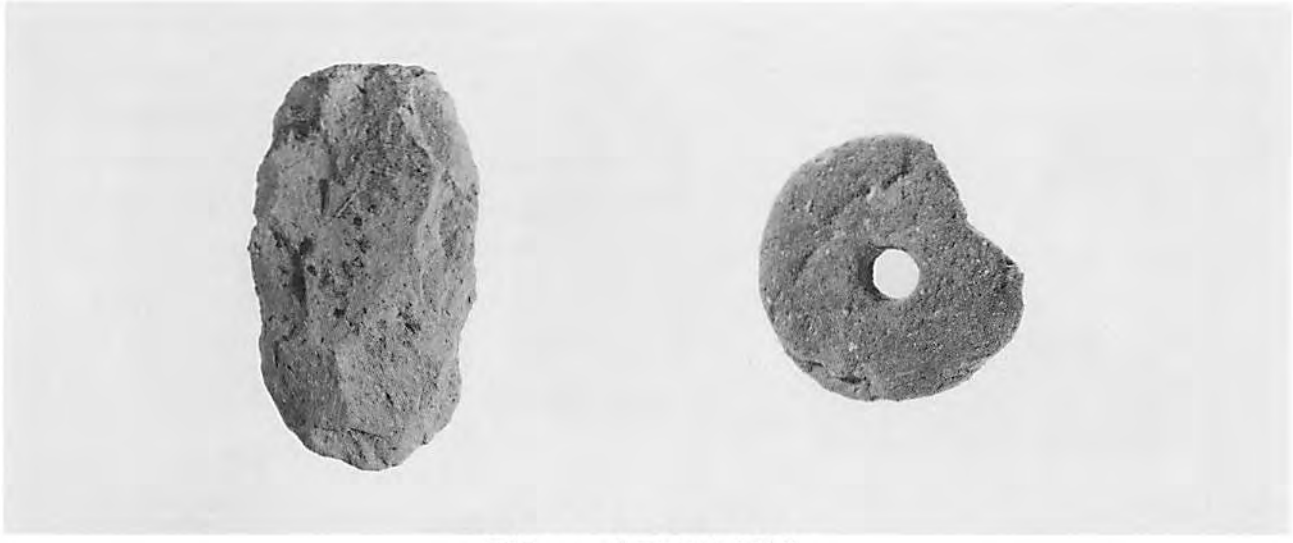
図版106　SD1010 上層遺物出土状況（西から）

図版107　SD1011 上層遺物出土状況（東から）

図版108　SD1013 上層遺物出土状況（東から）

図版109　SK1012 遺物出土状況（南から）

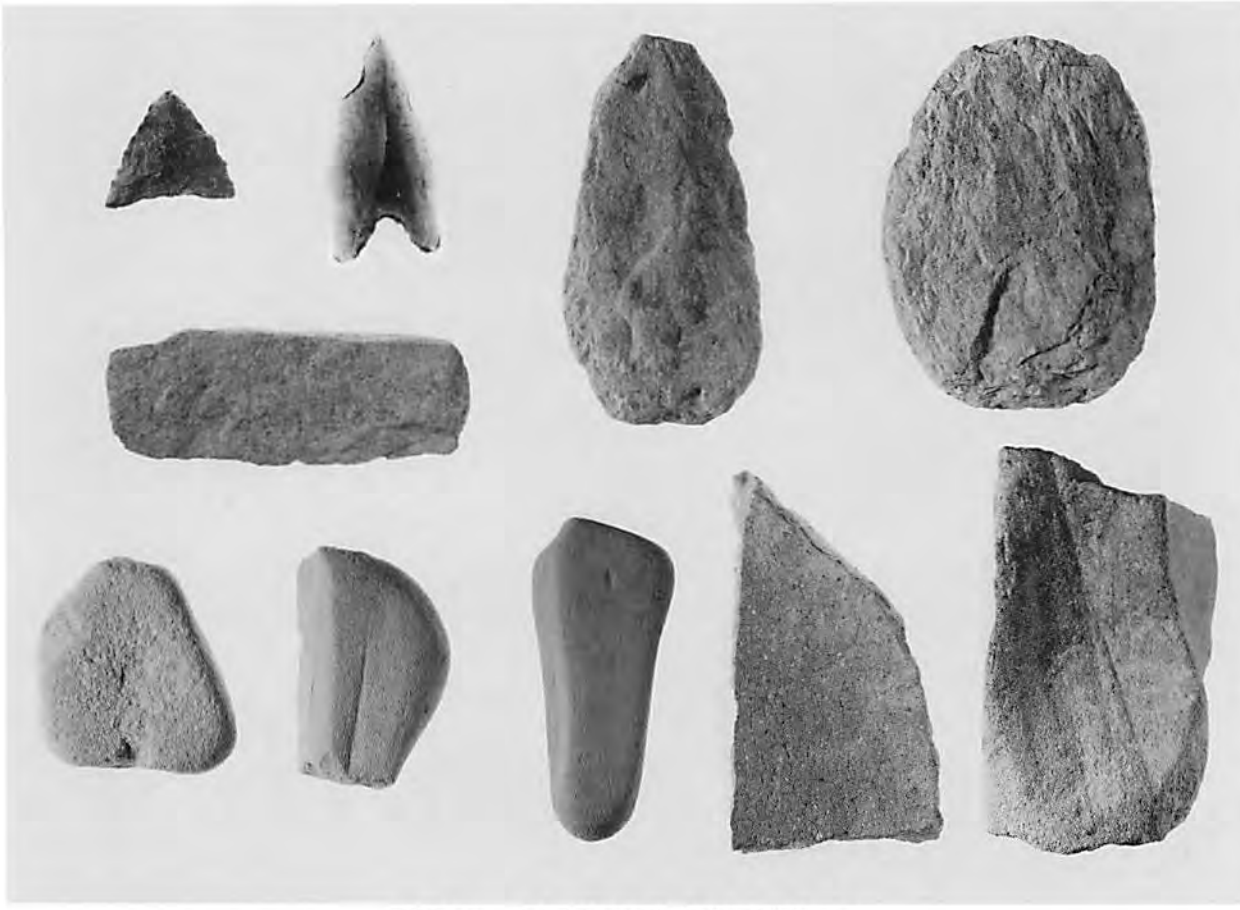
図版110　SK1014 遺物出土状況（南から）



図版111　小田2区出土遺物

図版112　小田3区（SI01・02）出土遺物

図版113　小田3区（SE01・12・SK03・07）出土遺物



図版114　上小田宮の前1区出土遺物（1）

図版115　1区出土遺物（2）

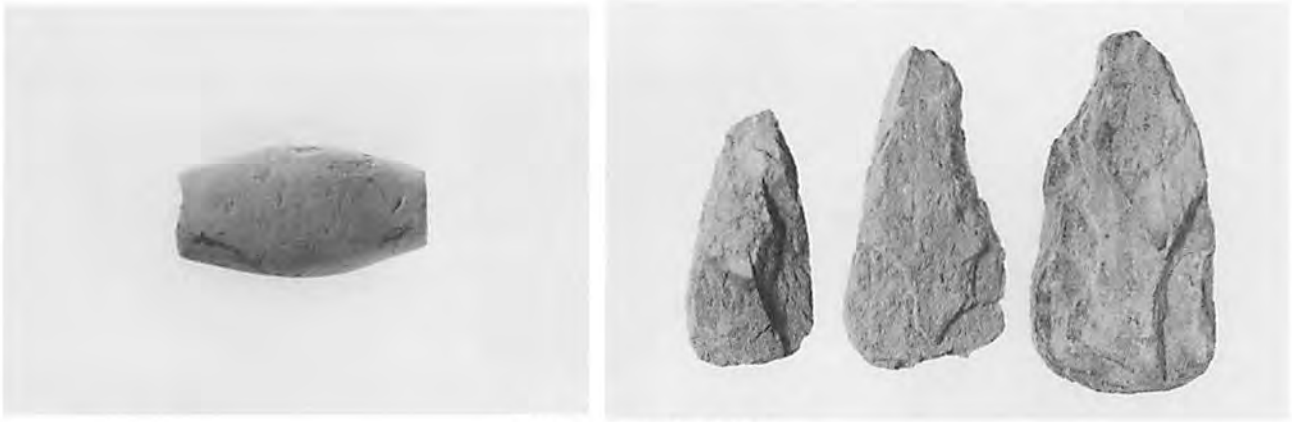
図版116　1区出土遺物（3）

図版117　3区出土遺物

図版118　5区（SE506）出土遺物

図版119　5区（SE515・516・517・SK512・521）出土遺物

図版120　5区（SD510・512）出土遺物



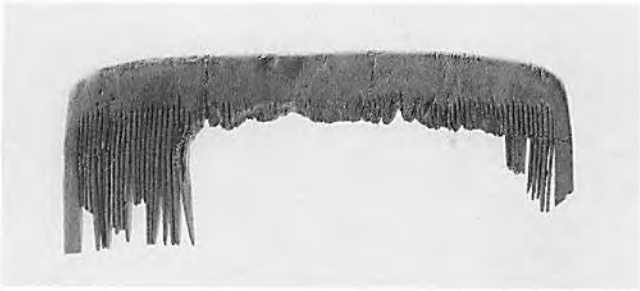
図版121　5区出土遺物

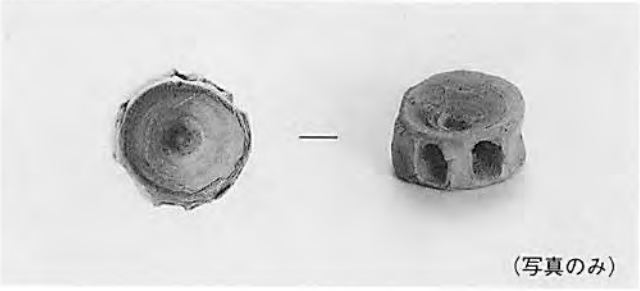
図版122　6区（SD601・SK603）出土遺物

図版123　6区流路出土遺物（1）

図版124　6区流路出土遺物（2）

図版125　6区流路出土遺物（3）

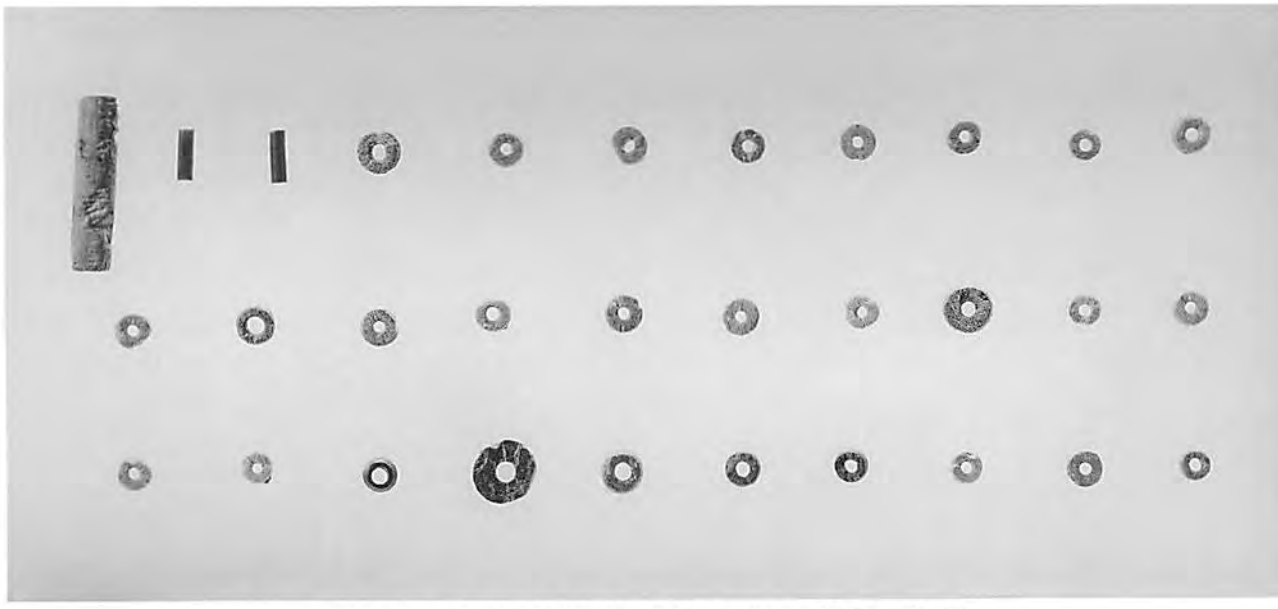




（写真のみ）

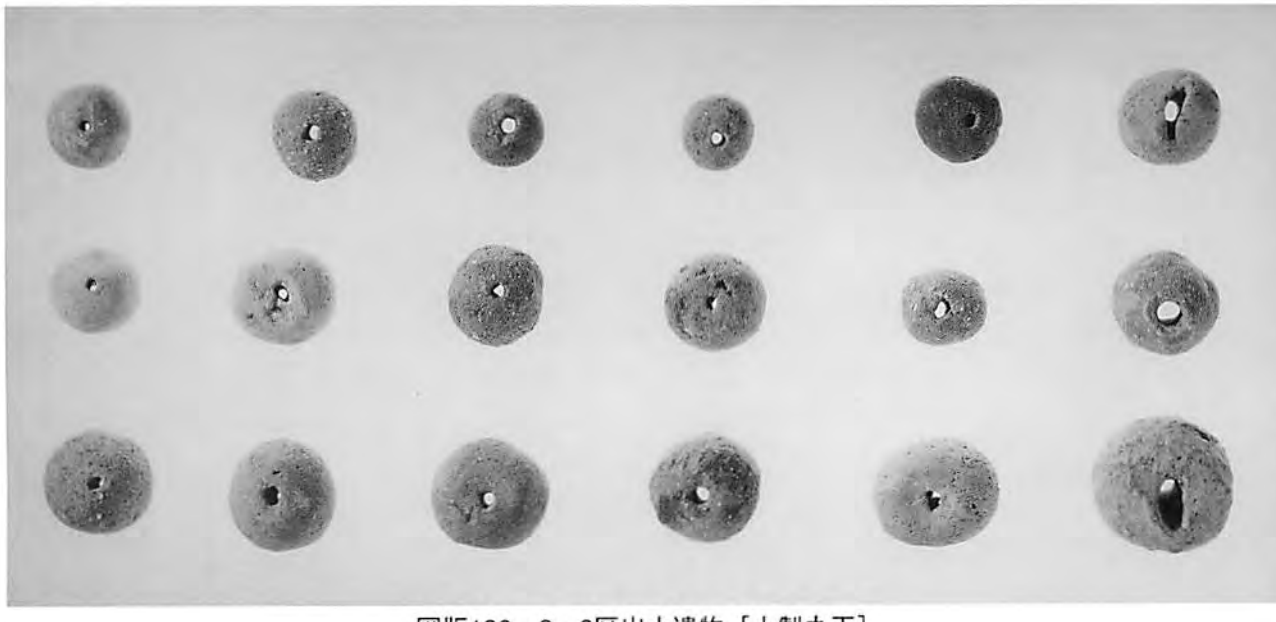
図版126　7区（SE701）出土遺物

図版127　7区（SD702・705）出土遺物



図版128　8・9区出土遺物［ガラス小玉・管玉・臼玉］

図版129　8・9区出土遺物［土製勾玉］

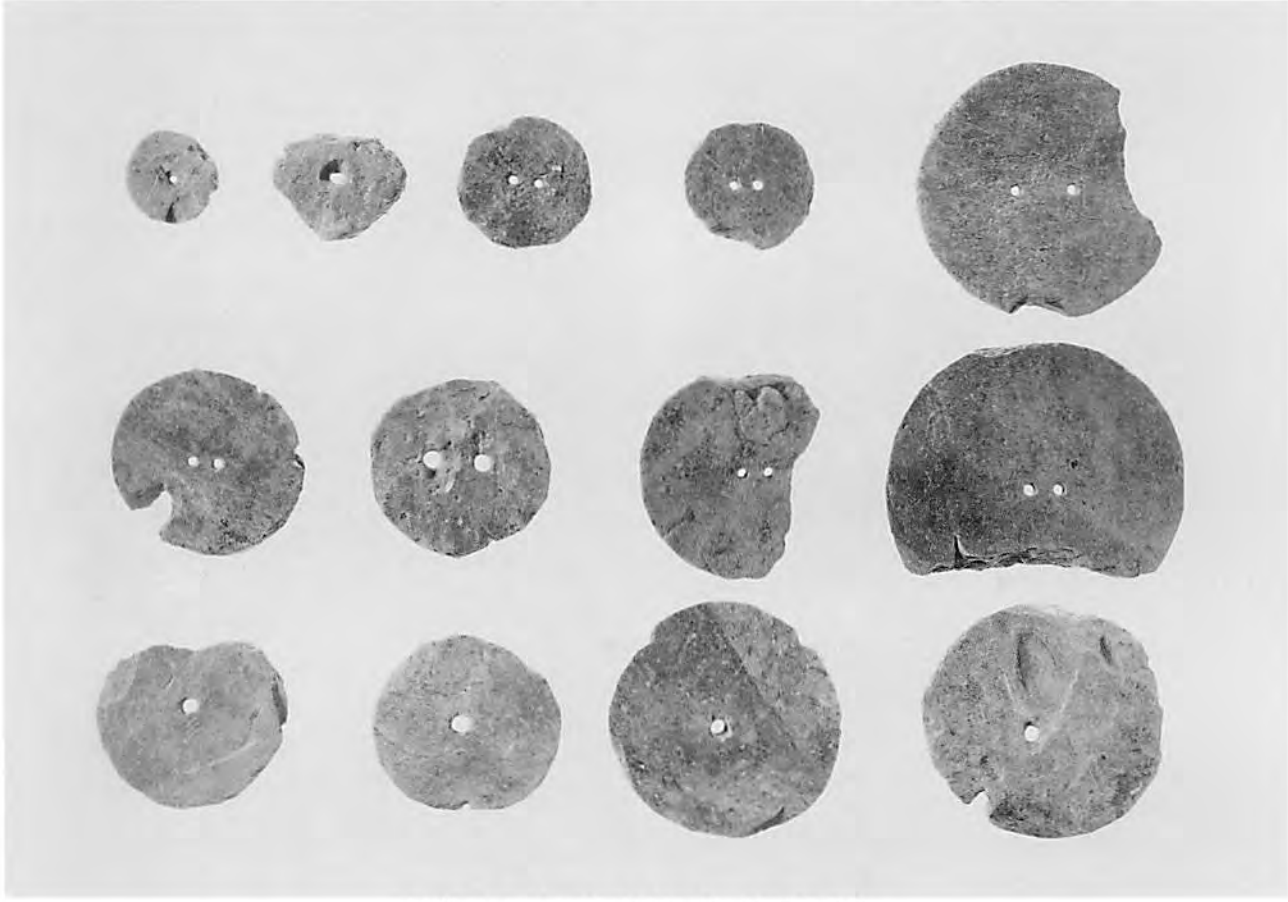


図版130　8・9区出土遺物［土製丸玉］

図版131　9区出土遺物［土製模造鏡］

図版132　8・9区出土遺物［手捏土器］

図版133　8・9区出土遺物［支脚・羽口・坩堝・スラグ］



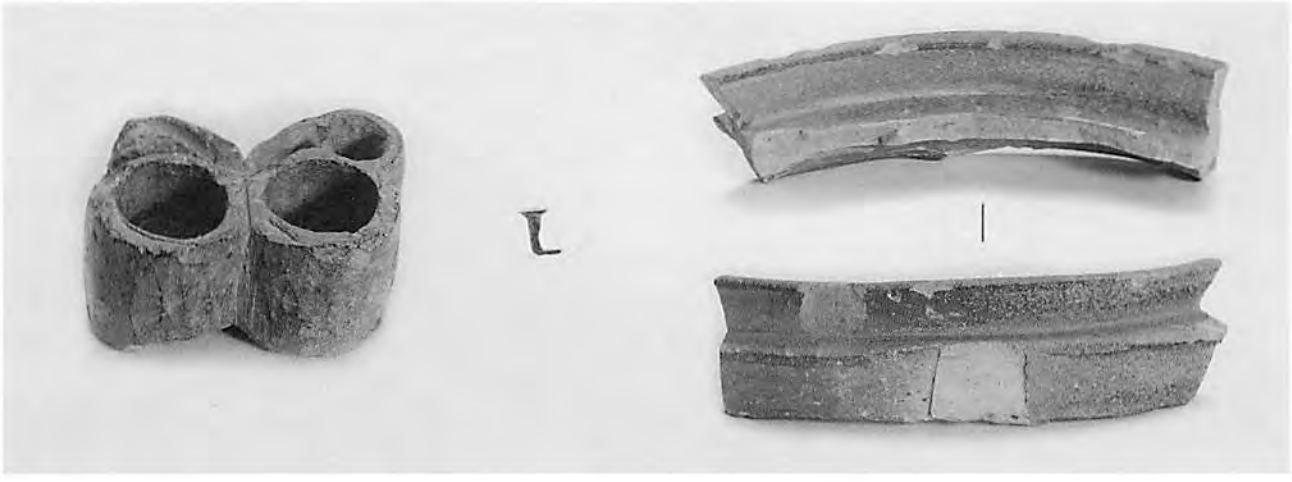
図版134　8・9区出土遺物［有孔円板］

図版135　8・9区出土遺物［剣形石製品］

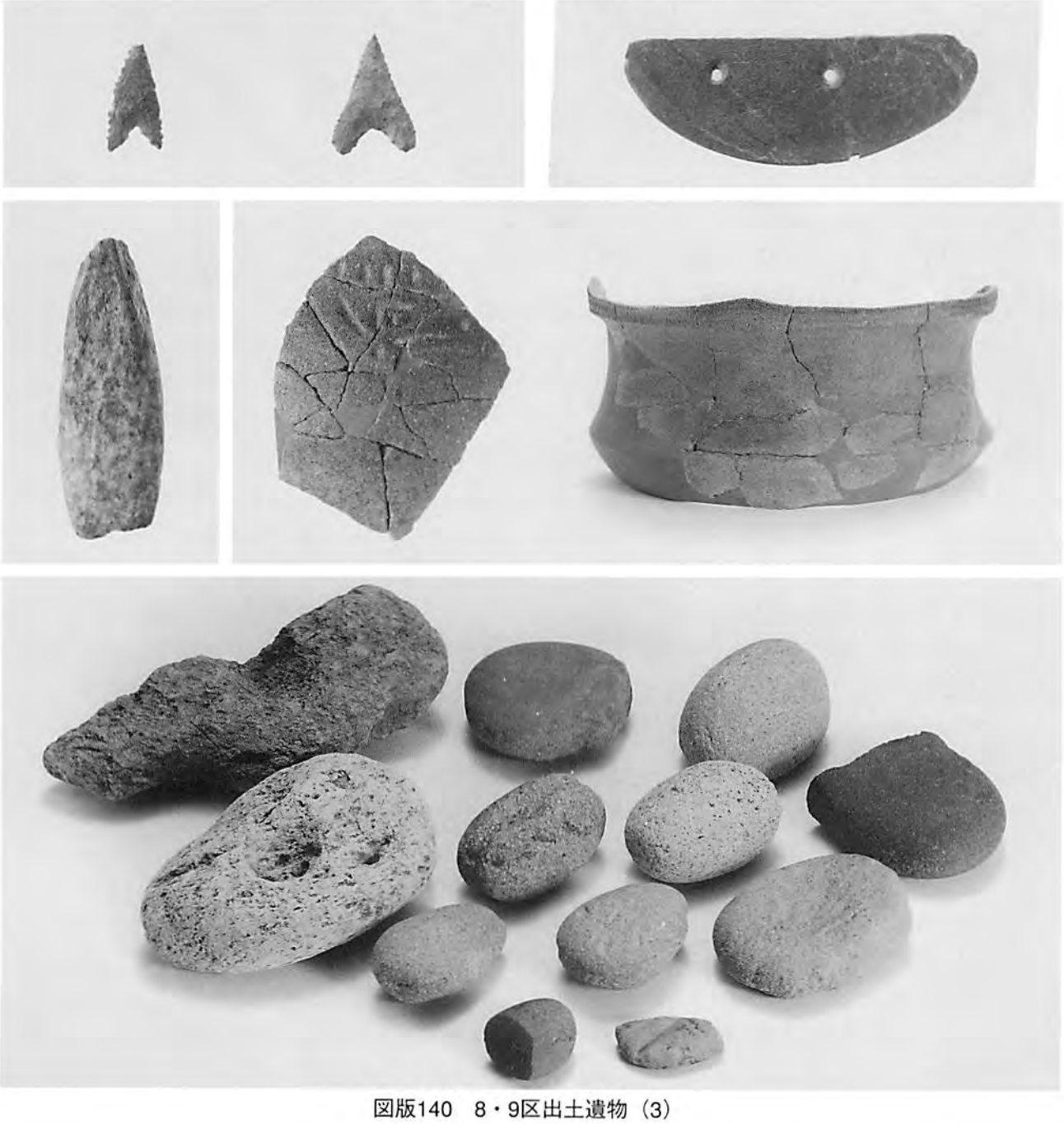
図版136　8区出土遺物（1）

図版137　8区出土遺物（2）

図版138　9区出土遺物（1）



図版139　9区出土遺物（2）



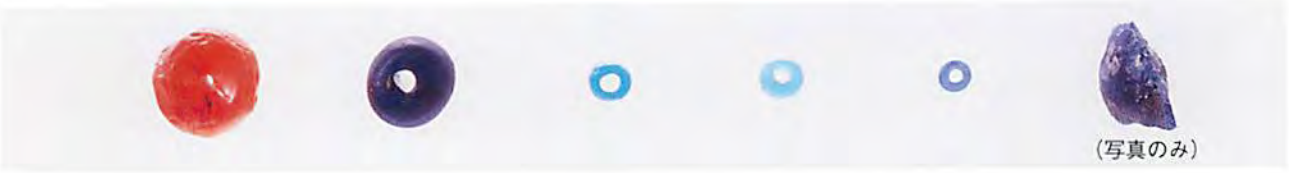
図版140　8・9区出土遺物（3）

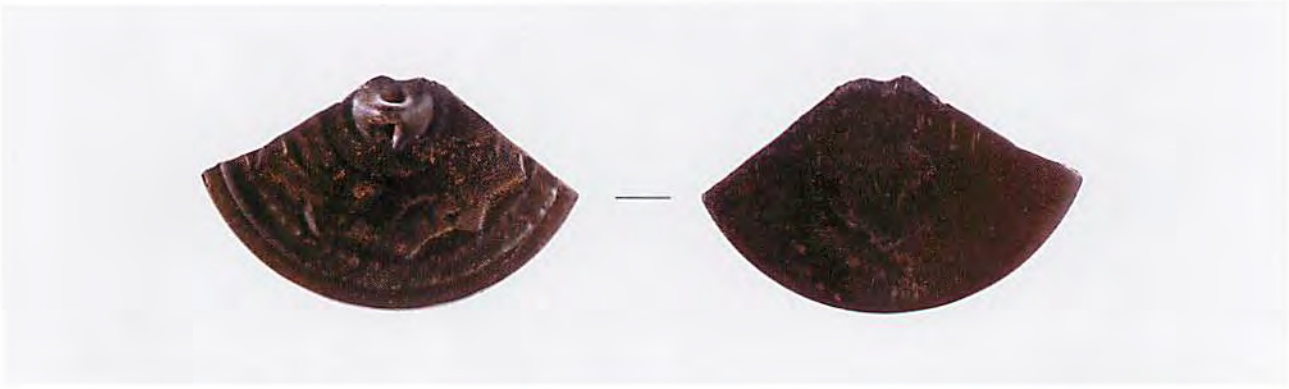
図版141　9区出土遺物（4）

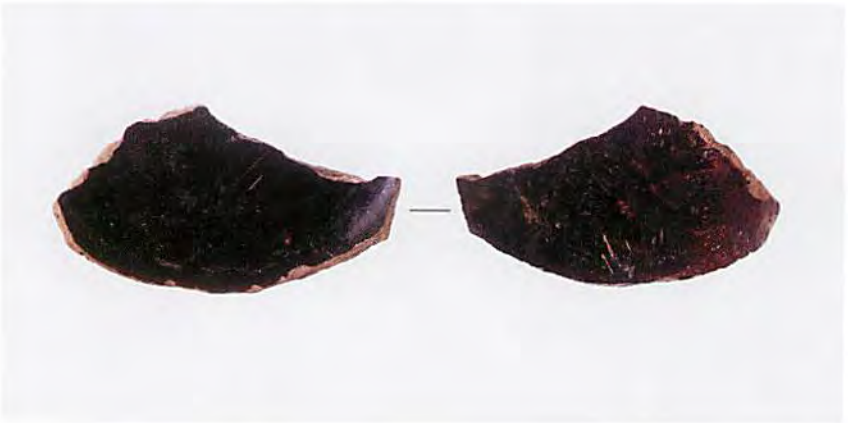
図版142　10区出土遺物（1）

図版143　10区出土遺物（2）

図版144　8・9区出土祭祀遺物







図版145　上小田宮の前遺跡出土遺物

あ と が き

上小田宮の前・養寺遺跡の発掘調査は、県道瀬川玉東線緊急地方道路整備のために、平成12年度から15年度の限られた時間のなかで行われました。その調査では、縄文時代から近世の時代の生活のあとが確認され、多くの遺物が出土しました。そして、平成16年度に整理を開始し、平成20年度には資料室の移転などを経て、やっと、ここに上小田宮の前・養寺遺跡の報告書が完成しました。

報告書にとりまとめることができたのは、暑い時も寒い時も発掘作業をしていただいた現場作業員の皆様及び㈱九州文化財研究所の方々、整理作業に携わって下さった多くの皆様の努力の賜物です。そして、ひとえに暖かく見守って下さった地域の方々、調査から報告書作成までご指導いただいた全ての皆様に感謝をして、結びの言葉とします。本当にありがとうございました。

発掘作業に携わった方々

青木　立子	青山　玲子	麻生　昭子	麻生　　昇	飯塚　早子	石元寿美子
今村東亜子	尾浦　公治	大久保哲哉	大森ツヤ子	岡田道子	鹿子木イクヨ
川上　安恵	川本美江子	北口　誠一	北口　道子	城戸　良子	境　エミ子
堺　　大輔	坂本　　司	志水ルリ子	高村　星子	高本美恵子	竹川ヤス子
田添　幸子	田添　　進	徳永　幸代	徳永　良弘	内藤なおみ	中島ひろみ
中村　陽子	仲山サチ子	仲山　哲子	仲山　信子	仲山　幸恵	西川スミ子
西川ミツ子	西川美代子	畠田アヤ子	早川佐和子	林　　弘子	春野　　栄
前田つや子	眞村　俊昭	三次佳代子	雪野弘行	渡辺恵美子	

（敬称略・五十音順）

整理作業に携わった方々

青山　玲子	荒牧　陽子	井島　秀子	上田まゆみ	上野　栄子	内田　孝子
小山　正子	金子美代子	川井田久子	興梠富貴子	貞苅美津子	佐藤　淳子
篠崎チカ子	瀬口　絹代	谷川亜紀子	冨田　知子	中島ひろみ	浪床せい子
平川恵里子	平川　早苗	府内　博子	松本　直枝	松本　裕子	宮崎　典子
吉武知佐子					

（敬称略・五十音順）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	かみおだみやのまえ・ようじいせき
書　　名	上小田宮の前・甕寺遺跡
副 書 名	県道瀬川玉東線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財調査
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第255集
編 集 者	廣田静学
編集機関	熊本県教育委員会
所 在 地	〒862−8609　熊本市水前寺6丁目18番1号
発行年月日	2010年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
かみおだみやのまえいせき 上小田宮の前遺跡	くまもとけんたまなしかみおだ 熊本県玉名市上小田	43206	050	32度57分20秒	130度35分30秒	2000.12.26 ～ 2001.03.29 2001.07.05 ～ 2004.03.24	9,494㎡	道路整備事業
ようじいせき 甕寺遺跡	くまもとけんたまなししもおだ 熊本県玉名市下小田	43206	392	32度57分01秒	130度35分38秒	2000.11.20 ～ 2001.03.07	528㎡	道路整備事業

所収遺跡名	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上小田宮の前遺跡	縄　文	自然流路	縄文土器　石器　木器　土偶	
	弥　生	竪穴住居跡 溝跡	弥生土器　磨製石鏃 破鏡　石包丁	
	古　墳	自然流路 竪穴住居跡 土坑	土製模造品　手捏土器 石製模造品	
	古　代	掘立柱建物跡 井戸跡 溝跡 土坑	土師器　須恵器　木器	
	中世～近世	掘立柱建物跡 溝跡 井戸跡	瓦質土器　五輪塔	
甕寺遺跡	中　世	掘立柱建物跡 柵列跡 土坑		

熊本県文化財調査報告　第255集

上小田宮の前・養寺遺跡

県道瀬川玉東線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

発行年月日　平成22年3月31日

編集・発行　熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市水前寺6丁目18番1号

印　刷　株式会社 大和印刷所
〒861-8031　熊本市戸島町920-11
TEL.096-380-0303

21 教委 教文
② 0 1 0

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 255 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：上小田宮の前遺跡 養寺遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話： 096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/